

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（156）

南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（IV）

な き の ほ ら
鳴野原遺跡 A 地点
(南九州市川辺町)

2011年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

この報告書は、南薩縦貫道（川辺道路）の建設に伴って、平成18年度・同20年度の二年間で実施した南九州市川辺町に所在する鳴野原遺跡A地点の発掘調査の記録です。

本遺跡では、縄文時代や古墳時代の遺構、遺物が発見されました。なかでも、縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑などの様々な遺構が数多く発見されたことは、本遺跡で多様な生活が営まれていたことを物語っています。また、出土した大量の遺物が示す環状分布は、南九州の縄文時代後期では数少ない例であり、先に述べた遺構の状況とともに、当該期における薩摩半島南部の様相を解明する糸口を与えてくれました。さらに、古墳時代では、住居跡からガラス製の小玉が出土するなどの成果が上がりました。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財保護の普及・啓発の一助となれば幸いです。

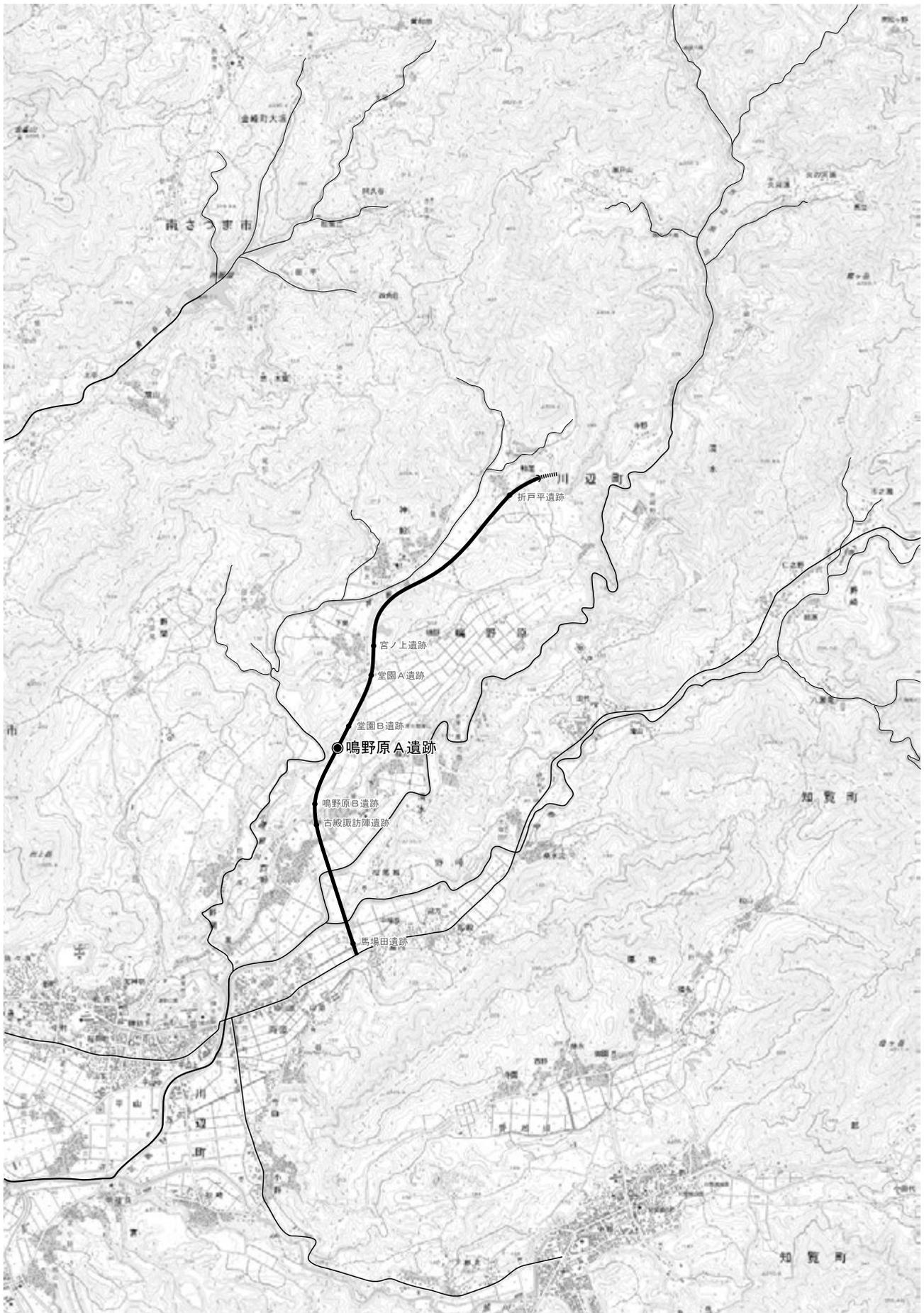
最後に、調査に当たりご協力いただいた県土木部道路建設課、南九州市（旧川辺町）教育委員会、関係機関及び発掘調査に従事されました地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

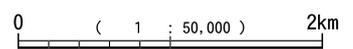
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 山 下 吉 美

報 告 書 抄 録

ふりがな	なきのはらいせきえいちてん							
書名	鳴野原遺跡A地点							
副書名	南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	156							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	IV							
編集者名	横手浩二郎, 富田逸郎, 中村耕治							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2011年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
なきのはらいせきえいちてん 鳴野原遺跡A 地点	かごしまけんみなみ 鹿児島県南 きゅうしゅうししかわなべ 九州市川辺 ちょうこうどん 町 神殿	46223	27-124	31° 24' 38"	130° 24' 51"	2006.12.6 ~ 2007.3.20 2008.8.4 ~ 2009.1.28	7,600	南薩縦貫道 (川辺道路)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鳴野原遺跡A 地点		縄文時代早期	集石	前平式土器・燃糸文土器・平椀式土器・石鏃・磨石・剥片				
		縄文時代後期	竪穴住居跡・土坑 集石・柱穴	凹線文系土器・指宿式土器・市来式土器・無文土器・石鏃・磨製石斧・磨石・敲石・削器・石匙・石皿				
		弥生時代後期～ 古墳時代初頭	竪穴住居跡	中津野式土器・成川式土器				
遺跡の概要	<p>縄文時代後期前半の竪穴住居跡・土坑・集石や多数のピットが検出されたことから、本遺跡が、当時多様な生活の場として使われていたことが考えられる。特に、竪穴住居跡と遺物は環状の出土状況を示しており、当時の空間認識や遺物廃棄の方法等の解明に資する。</p> <p>また、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡が発見されたことから、当該期の集落が、谷を隔てる堂園遺跡B地点から本遺跡まで広がっていたことが考えられる。</p>							



鳴野原遺跡の位置図



例 言

- 1 本書は、南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う鳴野原遺跡A地点の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は、鹿児島県南九州市川辺町神殿に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成18年12月6日から平成19年3月20日と、平成20年8月4日から平成21年1月28日に実施した。整理作業は平成21、22年度に実施し、平成22年度に刊行した。
- 5 遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、鹿児島県土木部道路建設課が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、調査担当者が行った。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て横手浩二郎、中村耕治が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て横手浩二郎、中村耕治が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て横手浩二郎、富田逸郎、中村耕治が行った。
- 12 遺物の写真撮影は、辻明哲、横手浩二郎が行った。
- 13 本書の執筆・編集は、横手浩二郎、富田逸郎が担当した。
- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物注記の略号は「ナキA」である。

目次

巻頭カラー		1 縄文時代の調査……………	15
序文		(1) 縄文時代早期……………	15
報告書抄録		ア 遺構……………	15
例言		イ 遺物……………	20
目次		(2) 縄文時代前期……………	27
		(3) 縄文時代後期……………	30
		ア 遺構……………	30
		イ 遺物……………	80
第1章 発掘調査の経過 ……………	1	2 弥生時代、古墳時代の調査……………	196
第1節 調査にいたるまでの経緯……………	1	(1) 遺構……………	196
第2節 事前調査……………	1	(2) 遺物……………	213
1 分布調査……………	1	3 古代から中世以降の調査……………	216
2 確認調査……………	1	(1) 遺構……………	216
第3節 本調査……………	2	(2) 遺物……………	216
第4節 整理・報告書作成作業……………	5	4 出土遺物観察表	
第2章 遺跡の位置と環境 ……………	6	(1) 土器……………	220
第1節 地理的環境……………	6	(2) 石器……………	228
第2節 歴史的環境……………	6	第4章 総括 ……………	232
第3章 調査の方法と成果 ……………	10	第1節 縄文時代後期の遺構について	
第1節 発掘調査の方法……………	10	……………	232
1 発掘調査の方法……………	10	第2節 縄文時代後期の土器について	
2 遺構の認定と検出方法……………	10	……………	234
3 整理作業の方法……………	10	第3節 縄文時代後期の石器について	
4 出土遺物の分類……………	11	……………	235
第2節 遺跡の層序……………	11	写真図版……………	237
第3節 調査の成果……………	15		

(奥付)

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図……………	8	第63～65図	縄文時代後期堀立柱建物跡実測図……	69～70
第2図	確認トレンチ配置図……………	10	第66～68図	縄文時代後期土坑C実測図……………	71～72
第3図	グリッド配置図……………	11	第69～72図	縄文時代後期集石実測図……………	73・74
第4～6図	土層図……………	12～14	第73～75図	縄文時代後期土器集中か所出土状況図	75～77
第7図	縄文時代早期遺構位置図……………	15	第76, 77図	縄文時代後期土器分布図……………	78～79
第8～11図	縄文時代早期遺構実測図……………	16～19	第78～156図	縄文時代後期土器……………	81～165
第12～14図	縄文時代早期土器……………	21～23	第157, 158図	縄文時代後期の石器分布図……………	166・167
第15, 16図	縄文時代早期石器……………	25・26	第159～184図	縄文時代後期の石器……………	169～195
第17図	縄文時代前期土器……………	28	第185図	弥生・古墳時代竪穴住居跡位置図	…………… 196
第18図	縄文時代早期・前期遺物分布図	…………… 29	第186～200図	竪穴住居跡実測図……………	197～211
第19図	縄文時代後期竪穴住居跡位置図……………	30	第201図	出土遺物分布図土器集中か所出土状況図…	212
第20～39図	縄文時代後期竪穴住居跡遺物実測図…	31～47	第202, 203図	弥生・古墳時代出土実測図	…………… 214・215
第40図	縄文時代後期土坑A位置図……………	47	第204図	土師器……………	216
第41～48図	縄文時代後期土坑A実測図……………	48～54	第205図	溝状遺構位置図……………	216
第49図	縄文時代後期土坑B位置図……………	55	第206図	溝状遺構実測図……………	217
第50～60図	縄文時代後期土坑B実測図……………	55～65	第207, 208図	ピット群……………	218・219
第61, 62図	縄文時代後期土坑B出土遺物……………	67・68			

表目次

第1表	周辺遺跡地名表……………	9	第3表	出土石器観察表……………	230～231
第2表	出土土器観察表……………	218～219			

図版目次

図版1～3	縄文時代竪穴住居跡……………	237～239	図版15～19	縄文時代後期遺構出土土器……………	251～255
図版4	縄文時代後期土坑A……………	240	図版20	縄文時代後期遺構出土石器……………	256
図版5～7	縄文時代後期土坑B……………	241～243	図版21～38	縄文時代後期土器……………	257～274
図版8	縄文時代後期土坑B・集石	…………… 244	図版39～45	縄文時代後期の石器……………	275～281
図版9・10	縄文時代後期土坑C……………	245・246	図版46	弥生時代以降の遺物……………	282
図版11・12	縄文時代竪穴住居跡……………	247・248	図版47	弥生・古墳時代遺構出土土器	…………… 283
図版13	縄文時代早期・前期土器	…………… 249	図版48	弥生・古墳時代土器	…………… 284
図版14	縄文時代早期石器……………	250			

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用をはかるため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、県土木部道路建設課（県加世田土木事務所：現、県南薩地域振興局建設部）は、主要地方道鹿児島川辺線地域高規格道路南薩縦貫道（川辺道路）整備事業のうち南九州市川辺町内において計画した事業の実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、県教育庁文化財課（以下県文化財課）に照会した。

第2節 事前調査

（1）分布調査

当該事業の予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地である鳴野原遺跡及び宮ノ上遺跡の所在が知られていたが、先の照会を受け、県文化財課は、平成13年度に埋蔵文化財分布調査を実施した。

その結果、新たに山神迫遺跡、折戸平遺跡、堂園遺跡、古殿諏訪陣跡、馬場田遺跡の5遺跡の存在が判明し、予定地内にはあわせて7遺跡が存在することが判明した。

（2）確認調査

1 調査概要

分布調査の結果を受けて、県道路建設課、県文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、県立埋蔵文化財センター）の三者は、これらの遺跡の取扱いについて協議を行い、予定地内の遺跡の範囲と性格を把握するために確認調査を実施することとした。

確認調査は、県立埋蔵文化財センターが担当し、平成16年2月3日から26日まで実施した。

なお、所在が判明した7遺跡のうち、馬場田遺跡については、町道拡幅予定地であることから川辺町教育委員会（当時）と別途協議が行われ、町教委が確認調査等を担当することとなった。

2 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所）
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査企画	所長 木原 俊孝
	次長兼総務課長 尾崎 進
	調査課長 新東 晃一
	調査課長補佐 立神 次郎
	主任文化財主事兼第一調査係長
	池畑 耕一
調査担当	主任文化財主事 中村 耕治
	文化財主事 元田 順子

調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	岩戸 孝夫
	”	”	吉岡 康弘
	”	”	石原田高広
事務担当	”	総務係長	平野 浩二
	”	主事	福山恵一郎

3 調査経過

その結果、鳴野原遺跡で8か所、堂園遺跡で14か所、古殿諏訪陣跡で1か所、宮ノ上遺跡で4か所のトレンチから遺構や遺物が確認され、4遺跡をあわせて26,500㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。特に、鳴野原遺跡と堂園遺跡では、包蔵地内において2か所が事業対象区となったため、それぞれにA、Bの地点名を付記することとした。山神迫遺跡と折戸平遺跡については、予定地内に遺跡が存在しないことが判明した。

そこで、県道路建設課、県文化財課、県立埋蔵文化財センターは再度協議し、4遺跡とも事業対象区域内における現地保存や設計変更が不可能であることから、記録保存を目的として、県立埋蔵文化財センターが本調査を実施することになった。

第3節 本調査

(1) 調査概要

今回報告する鳴野原遺跡A地点の本調査は、7,600㎡を対象として、平成18年度と平成20年度の2回に分けて実施した。平成18年度は、3,770㎡を対象に平成18年12月6日から平成19年3月20日まで（実働62日間）、平成20年度は、3,830㎡を対象に平成20年8月4日から平成21年1月28日（実働103日）まで実施した。

なお、本調査の実施にあたっては、調査期間の短縮と事業のより円滑な実施を図るために、県立埋蔵文化財センターの指揮・監督のもと、発掘調査事業を民間業者に委託して実施した。委託契約にあたっては、年度ごとに県立埋蔵文化財センターと県加世田土木事務所（出先機関再編により平成20年度は県南薩地域振興局建設部）が覚書を交わしたうえで県加世田土木事務所（県南薩地域振興局建設部）が事務を行った。

(2) 調査体制

ア 平成18年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所）
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 上今 常雄 (平成18年7月31日まで)
	” 所 長 宮原 景信 (平成18年8月1日から)
調査企画	” 次長兼総務課長 有川 昭人
	” 次 長 新東 晃一

調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査第一課長	池畑 耕一
	”	主任文化財主事兼調査第一課	
調査担当	”	第一調査係長	長野 眞一
	”	文化財主事	八木澤一郎
事務担当	”	”	久保田昭二
	”	総務係長	寄井田正秀
調査指導	徳島文理大学	主査	蒲池 俊一
	鹿児島大学法文学部	教授	石野 博信
		助教	本田 道輝

イ 平成20年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（南薩地域振興局建設部）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原 景信
調査企画	”	次長兼総務課長	平山 章
	”	次長	池畑 耕一
	”	主任文化財主事兼調査第一課	
		第一調査係長	長野 眞一
調査担当	”	文化財主事	吉井秀一郎
	”	”	井口 俊二
事務担当	”	総務係長	紙屋 伸一
	”	主査	五百路 真
調査指導	鹿児島大学法文学部	准教授	本田 道輝

(3) 調査経過（日誌抄より）

ア 平成18年度

12月6日(水)～15日(金)	環境整備
	Ⅱ層調査（掘り下げ，遺物取り上げ等）
12月18日(月)～1月12日(金)	Ⅱ層調査（掘り下げ，遺物取り上げ等）
	Ⅲa層上面地形測量
1月15日(月)～19日(金)	Ⅱ層調査（掘り下げ，遺物取り上げ等）
	土坑・土器集中範囲・土層断面実測等
	Ⅲa層上面地形測量，Ⅲc層重機により除去
1月22日(月)～26日(金)	Ⅱ層遺物取り上げ，竪穴遺構・土坑実測等
2月1日(木)～16日(金)	竪穴遺構・土坑・ピット実測等
2月19日(月)～23日(金)	空中写真撮影，竪穴遺構・土坑・ピット・溝状遺構実測等
2月26日(月)～3月2日(金)	竪穴遺構・土坑・ピット・溝状遺構実測等
3月5日(月)～9日(金)	Ⅳ，Ⅴ層調査（掘り下げ，遺物取り上げ等）

3月5日(月)～9日(金)	竪穴遺構・土坑・ピット・溝状遺構実測等
3月12日(月)～20日(火)	IV, V層調査(掘り下げ, 遺物取り上げ等) 土坑・ピット・集石実測等 現場撤収, 平成18年度調査終了
イ 平成20年度	
8月4日(月)～8日(金)	環境整備, 表土はぎ
8月11日(月)～28日(木)	表土はぎ, II層調査(遺構検出, 遺物取り上げ)
9月1日(月)～12日(金)	II, III層調査(遺構検出, 遺物取り上げ) 土層断面・竪穴遺構・土坑実測, 地形測量
9月16日(火)～19日(金)	II, III層調査(遺構検出, 遺物取り上げ) 竪穴遺構埋土掘り下げ, 実測
9月22日(月)～26日(金)	II層調査(遺構検出, 遺物取り上げ) 竪穴遺構No.4～7検出状況撮影, 埋土掘り下げ
10月1日(水)～10日(金)	II層調査(遺構検出, 遺物取り上げ) 竪穴遺構・土坑写真撮影, 集石, 溝状遺構実測等
10月14日(火)～17日(金)	II層調査(遺構検出, 遺物取り上げ) 竪穴遺構・土坑実測等 南九州市立勝目小学校現場見学
10月20日(月)～24日(金)	II層調査(遺構検出, 遺物取り上げ) 竪穴遺構・土坑・集石実測等 下層確認トレンチ調査
10月27日(月)～11月7日(金)	III層調査(遺構検出) 竪穴遺構実測, 遺物取り上げ等, 土層断面実測 下層確認トレンチ調査
11月10日(月)～12月5日(金)	竪穴遺構実測・遺物取り上げ等 集石・土坑・ピット実測等 下層確認トレンチ調査, 現場空中写真撮影
12月8日(月)～1月23日(金)	IV, V層調査(遺物取り上げ等) II～III層竪穴遺構・土坑・集石実測等
1月26日(月)～28日(水)	土坑, 土層断面実測等 現場撤収, 調査終了

第4節 整理・報告書作成作業

(1) 作成概要

鳴野原遺跡A地点の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は、平成18年度・同20年度の発掘調査中に遺物の水洗、注記作業について実施した。その他の整理作業・報告書作成作業については、発掘調査終了後、平成21年度から平成22年度にかけて、県立埋蔵文化財センターで実施した。

(2) 作成体制

ア 平成21年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（南薩地域振興局建設部）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
整理統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 山下 吉美
整理企画	”	次長兼総務課長	齋藤 守重
	”	次	長 青崎 和憲
	”	調査第一課長	中村 耕治
	”	主任文化財主事兼調査第一課	
		第一調査係長	井ノ上秀文
整理担当	”	調査第一課長	中村 耕治
	”	文化財主事	横手浩二郎
事務担当	”	主 査	高崎 智博

イ 平成22年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（南薩地域振興局建設部）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 山下 吉美
作成企画	”	次長兼総務課長	田中 明成
	”	次	長 中村 耕治
	”	調査第一課長	長野 眞一
	”	主任文化財主事兼調査第一課	
		第一調査係長	富田 逸郎
作成担当	”	主任文化財主事兼調査第一課	
	”	第一調査係長	富田 逸郎
	”	文化財主事	横手浩二郎
事務担当	”	総務係長	大園 祥子

(3) 作成経過（日誌抄より）

ア 平成21年度

4月～7月	土器分類・接合
8月～11月	土器分類・接合・実測・拓本・トレース
12月～平成22年3月	土器実測・拓本・トレース，石器分類・実測，遺構整理・トレース

イ 平成22年度

4月～10月	土器実測・拓本・トレース，石器実測・トレース，遺構整理・トレース，遺物・遺構図等レイアウト，現場写真選別
11月～12月	土器・石器レイアウト，遺物写真撮影

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳴野原遺跡A地点は、鹿児島県南九州市川辺町神殿に所在する。

遺跡の所在する川辺町は、南九州市の北部に位置し、薩摩半島のほぼ中央部にあたり、西は南さつま市、枕崎市、東は鹿児島市と接している。また、町内を鹿児島市と枕崎市を結ぶ国道225号が通り、主要地方道が知覧町や南さつま市加世田などへ通じているなど、薩摩半島南部における交通の要衝ともなっている町である。

川辺地方の地形の特徴としては、北側、東側、南側の三方を400～500m級の山々に囲まれる盆地状の地形を呈し、東側にある南北に連なる山並みから西側へ緩やかに傾斜しながら吹上浜へと続く地形をなしている。また、南薩地方の代表的な一級河川である万之瀬川は、川辺町北部で清水川、野崎川と合流し、さらに神殿川、小野川（麓川）、高田川（永里川）などをあわせてこの盆地の中央部を西流し、田代で山地の間隙を縫って南さつま市加世田へ流れ、万世で吹上砂丘を貫いて東シナ海へと流れている。

また地質的には、薩摩半島全域の基盤をなす四万十層群（白亜紀層、この周辺では「川辺層群」といわれる）が広く発達している地域で、砂岩や頁岩、砂岩・頁岩互層などを主とし一部に礫岩や蛇紋岩を含む地層が観察される。なお、隣接する南さつま市笠沙町から南九州市知覧町、穎娃町、また指宿市にかけては、「川辺層群」の上位に「南薩層群」といわれる新第三紀中新世後期に属する地層が発達し、石英安山岩や輝石安山岩、また凝灰岩、凝灰岩質シルト岩、泥岩などの水成堆積層が広くみられる。また、角閃石安山岩溶岩が点的に分布しており、川辺町小野では安山岩の崖中から角閃石の結晶が発見されている。

ちなみに、この「南薩層群」の上部には、容阿多火砕流が起源の容結凝灰岩による層が堆積しており、そこに刻まれたのが県指定文化財の「清水磨崖仏」である。AT火山灰やアカホヤ火山灰層は、この容結凝灰岩の上に堆積している。

遺跡が所在する鳴野原台地は、万之瀬川と神殿川に挟まれた、幅500～600m、長さ3.5kmほどの北東から南西方向に細長い、いわゆるシラス台地で、標高は140mから110mと南西にむけて緩やかに下降している。鳴野原遺跡は、この台地の南西部一帯に広く形成されている。

なお、小谷を隔てて北に堂園遺跡が、さらにその北側の台地上の丘陵西端部に宮ノ上遺跡が所在する。

第2節 歴史的環境

南九州市川辺町には、今のところ146か所の埋蔵文化財包蔵地が所在している。特に最近10年間の間に実施された、鳴野原遺跡A地点の調査の契機となった南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う発掘調査、中小河川改修事業に伴う万之瀬川沿いの発掘調査等によって、旧石器時代から中近世にいたるまで各時代の遺構・遺物の発見が続き、この地域での様相が明らかになりつつある。

旧石器時代では、先述した宮ノ上遺跡で、付近で産出される頁岩製ナイフ形石器の製作跡が発見

され注目されている。同時期の遺跡としては、他に津フジ遺跡、背野平遺跡、上桑持野遺跡、萩久保遺跡などがあり、特に背野平遺跡ではA T直後の礫群が7基発見されている。後続する細石器文化期の遺跡も宮ノ上遺跡、背野平遺跡、上桑持野遺跡で発見されている。

縄文時代では、遺跡数も増え、台地上ばかりでなく万之瀬川沿いの自然堤防上など低地部でも発見されている。

草創期では、鷹爪野遺跡で舟形配石炉や隆帯文土器などが発見されている。

早期では、先の鷹爪野遺跡で、前平式土器期の竪穴住居跡が8軒、多くの磨製石鏃を伴って発見されているほか、永田西遺跡、小崎遺跡、またナイフ形石器が出土した宮ノ上遺跡、背野平遺跡、萩久保遺跡などで早期の遺構や遺物が発見されている。特に小崎遺跡では、押型文土器に伴い貝殻や獣骨が発見されており、注目される。

前期から中期にかけては、最近10年間の間に、中小河川改修事業に伴う万之瀬川沿いの発掘調査が相次ぎ、南田代遺跡や古市遺跡など、曾畑式土器や深浦式土器等の時期を中心とした遺構、遺物が大量に発見され、本県における当該期の低地部遺跡の様相を知る端緒として注目される。

後期では、古くから知られる田中掘遺跡がある。鹿児島大学による小規模な学術調査であるが、指宿式土器や市来式土器等が多数発見されているとともに、貯蔵穴と考えられる土坑も発見されている。また、答石遺跡では、御領式土器も発見されている。

弥生時代から古墳時代にかけては、万之瀬川、神殿川流域の低地部や台地上に遺跡が分布する傾向が伺える。

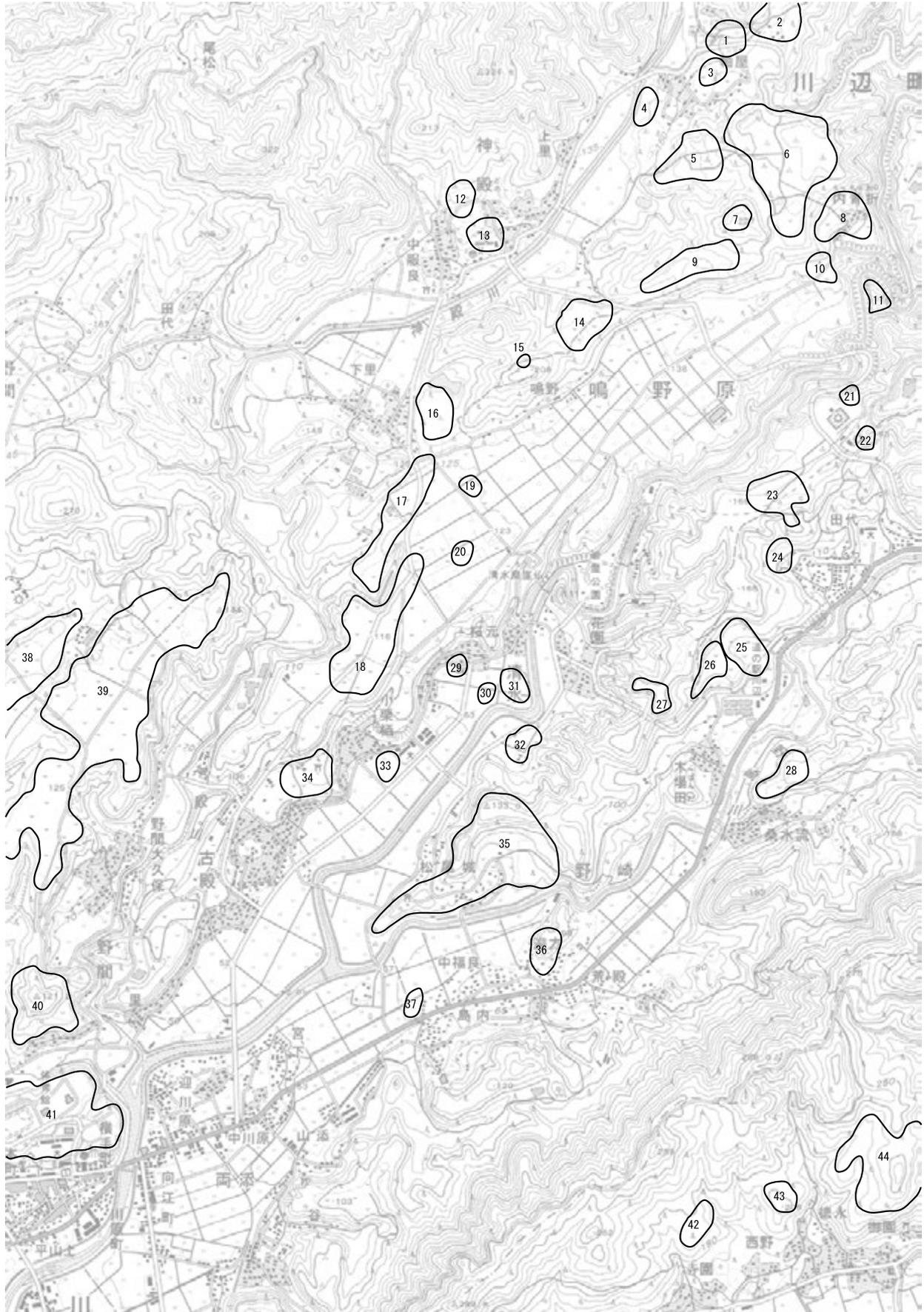
弥生時代前期では、堂山遺跡、古市遺跡で、竪穴住居跡が発見されている。中期では、寺山遺跡で本県としては規模の大きいV字溝をはじめ、北部九州系の土器等が発見され、部分的な調査ながら環濠集落の存在が想定されている。

弥生時代後期から古墳時代前半期にかけては、近年の南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う堂園A遺跡、堂園B遺跡の発掘調査により、集落（堂園B遺跡）や墓制（堂園A遺跡）の様相について、その一端が発見されている。特に、堂園B遺跡では、鍛冶工房の可能性が考えられる竪穴住居跡も発見されており、注目される。

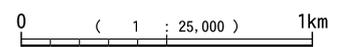
古代から中世、近世にかけては、まず、平安中期に編纂された「和名類聚抄」に薩摩国十三郡の一つ「河辺郡」として登場する。その後も、鎌倉時代から室町時代にかけて、河辺氏、島津氏、千竈氏等の所領としてしばしば文献に登場している。

遺跡としては、南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴い調査された馬場田遺跡で、箱堀状の溝や掘立柱建物跡とともに13世紀～14世紀後半にかけての貿易陶磁器や国内産陶器などが発見されている他、中世初頭に川辺一帯を支配下においていた河邊氏の築城と言われている平山城の麓の一画にあたる川辺郷地頭仮屋跡が調査され、中世から近世にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡などの遺構と、土師器、青磁・白磁、肥前系陶磁器類などの遺物がまとまって出土している。この他にも、川辺町一帯には、中世以降の城館跡や寺院などが多く所在している。

平成19年12月、川辺町は、市町村合併により隣接する知覧町、穎娃町とともに南九州市となった。



第1図 周辺の遺跡分布図



第1表 周辺の遺跡地名表

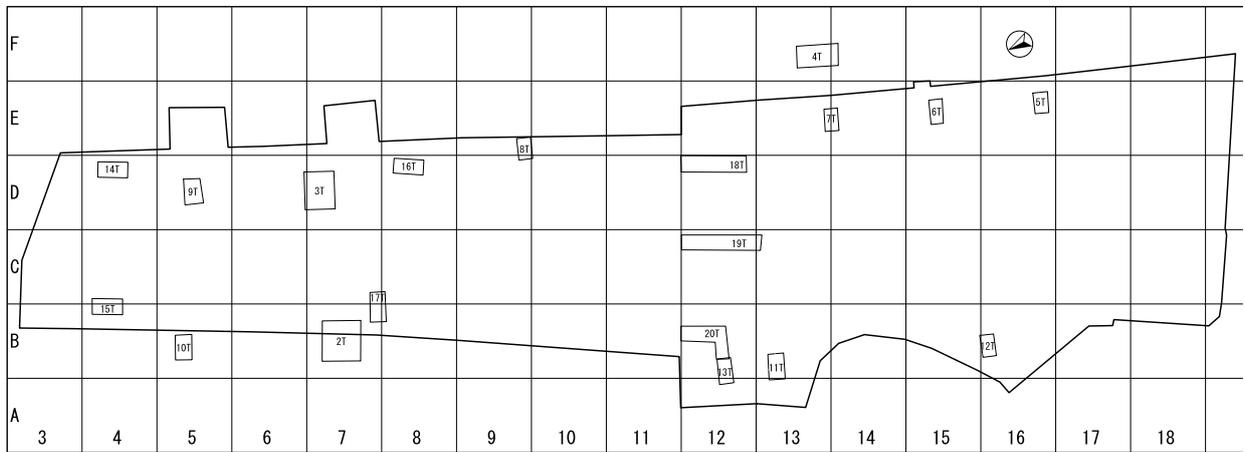
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	平野上	川辺町神殿平野上	台地	古墳	成川式	
2	山神下	川辺町神殿山神下	台地	古墳	成川式	
3	山神迫	川辺町神殿山神迫	台地	古墳	成川式	
4	上五反田	川辺町神殿上五反田	台地	古墳	成川式	
5	折戸平	川辺町神殿折戸平	台地	縄文	縄文土器	
6	高船	川辺町神殿高船	台地	弥生	弥生土器片散布	旧名「上ノ段中須」 「地ノ目」を併合
7	高船山頂	川辺町神殿高船	山頂緩斜面	縄文（早）	集石・前平式	
8	内青折	川辺町清水内青折	台地	古墳	成川式	
9	萩久保	川辺町神殿萩久保	台地	旧石器・縄文（早）	ナイフ形石器・吉田式・ 前平式・石坂式	
10	中之平	川辺町清水中之平	台地	古墳	成川式	
11	内青折城跡	川辺町清水池ノ谷	台地	平安～中世		
12	上ノ原	川辺町神殿上ノ原	台地	古墳	成川式	
13	神殿小上	川辺町神殿小学校上	扇状地	古墳	成川式	
14	法師原	川辺町神殿法師原	台地	縄文・弥生	弥生土器	
15	大蔵	川辺町神殿大蔵	山麓	縄文	土器片散布	消失
16	宮ノ上	川辺町神殿宮ノ上	丘陵	旧石器・縄文（早・後）	ナイフ形石器・細石刃 核・前平式・指宿式	
17	堂園	川辺町神殿	台地	縄文（中・後・晩）・弥 生（中・後）・古墳・古代・ 中世	集石・集落跡・土坑墓・ 道跡・深浦式・指宿式・ 黒川式・山ノ口式・黒髪 式・松木蘭式・中津野式・ 土師器・鉄鏃	本報告書 埋七報 108
18	鳴野原	川辺町神殿鳴野原	台地	縄文（早）	石坂式・塞ノ神式・石鏃・ 磨製石斧・磨石・砥石	埋七報 47
19	中須	川辺町神殿中須	台地	古墳	成川式	
20	横堀	川辺町神殿横堀	台地	古墳	成川式	
21	馬渡	川辺町清水馬渡	台地	縄文	土器片散布	平成12年 確認調査 遺跡なし
22	黒葛木ヶ迫	川辺町清水黒葛木ヶ迫	台地	弥生	土器片散布	
23	尾立	川辺町清水尾立	台地	弥生	弥生土器片散布	
24	田代	川辺町田代小学校上	山麓緩斜面	縄文（早）	前平式	
25	仮集	川辺町清水仮集	山麓傾斜面	縄文・古墳・古代	縄文土器・成川式・ 須恵器	
26	東ヶ迫	川辺町清水東ヶ迫	台地	縄文・古墳		
27	木場田	川辺町清水木場田	台地	縄文		
28	東俵作野	川辺町野崎東俵作野	丘陵	縄文（早）	押型文	
29	雲朝寺跡	川辺町清水桜元	低地			
30	桜馬場	川辺町清水桜馬場	低地	古墳～中世（鎌倉）	成川式・青磁・白磁	
31	川辺氏居館跡	川辺町清水小栗栖	低地	中世		
32	宝光寺跡	川辺町清水宇都	山麓緩斜面	中世（鎌倉）～近世	礎石一部残存	（町）昭和33.6.6
33	北中横	川辺町清水旧北中横	低地	平安～中世（鎌倉）	土師器・青磁・白磁	
34	古殿諏訪陣跡	川辺町古殿内陣	台地	古墳・古代・中世	成川式・土師器・須恵器・ 青磁・白磁・染付	埋七報 108
35	松尾城跡	川辺町野崎松尾城	丘陵	中世（鎌倉）	空堀・曲輪	
36	野崎陣跡	川辺町野崎陣平	台地	中世		
37	馬場田	川辺町両添	台地	中世		
38	大田尾	川辺町清水大田尾	台地	縄文（後）	市来式	
39	草葉	川辺町野間草葉ほか	台地	縄文～古墳		
40	野間陣之尾城跡	川辺町野間陣之尾	台地	中世		
41	平山城跡	川辺町平山天神	河岸段丘	中世・近世	青磁・染付	町埋文報 1
42	厚地城跡	知覧町厚地堀之内	山麓緩斜面	中世	空堀	
43	野石城跡	知覧町厚地野石	山麓緩斜面	中世？	字名	
44	山石城跡	知覧町厚地宮谷山	山頂緩斜面	古代？		

第3章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

平成15年度に鳴野原遺跡で実施した確認調査では、工事予定地内の11か所に確認トレンチを設定し、のべ90㎡について調査した結果、14,000㎡の範囲において縄文時代早期及び後期の遺物包含層、縄文時代早期の集石が存在することを確認した。また、これらの遺構と遺物が確認された地域が、字大堀と字陣の2地域に区分されるため、それぞれA地点、B地点とすることとした。(確認トレンチは、A地点に3か所、B地点に8か所設置) 調査対象面積は、A地点が7,600㎡、B地点が6,400㎡であった。(第2図)



第2図 確認トレンチ配置図

この報告で取り扱うA地点は、まず、平成18年度に3,770㎡について本調査を実施し、次いで平成20年度に残りの3,830㎡について本調査を実施した。

本調査にあたっては、平成18年度に、公共座標点 (X : -175070.000, Y : -55320.000) を基準 (J/K-0/1区) として、地理学系グリッドを270°右回りに回転させて、1辺10mの正方形区画を設定した。平成20年度は、この区画を延長して設定した。

2 遺構の認定と検出方法

調査は、まず、重機を用いて表土を除去したのち、II層以下を人力により掘り下げた。その後、土の色調や硬度、遺物の出土状況の変化等を参考に遺構検出作業を行い、検出した遺構については、埋土の除去、遺物取り上げ、写真撮影、図化作業を実施した。遺構に伴わない包含層中の遺物は、出土区と包含層を記録した後、トータルステーションを用いて1点ずつ番号を付して取り上げた。

また、IV層以下の調査については、下層確認トレンチを適宜設定して、遺構・遺物の出土状況を把握し必要に応じてトレンチの面積を拡張しながら実施した。

3 整理作業の方法

整理作業は、平成21年度から平成22年度にかけて、県立埋蔵文化財センターで実施した。出

土遺物の水洗，注記は本調査中に終了していたため，遺構実測図等の図面類，座標データや写真等の記録類の確認と整理，遺物の分類と実測する遺物の抽出から作業を開始し，続いて抽出した遺物の実測等図化作業と観察所見の記入，遺構実測図の浄書等を行った。また，平行して，調査の経過や遺跡の周辺環境等の文章化，遺構写真等の抽出を行った。遺物写真については，各作業の最終段階に入ったところで，写場担当職員に作業を依頼したほか，編集担当者も撮影を行った。

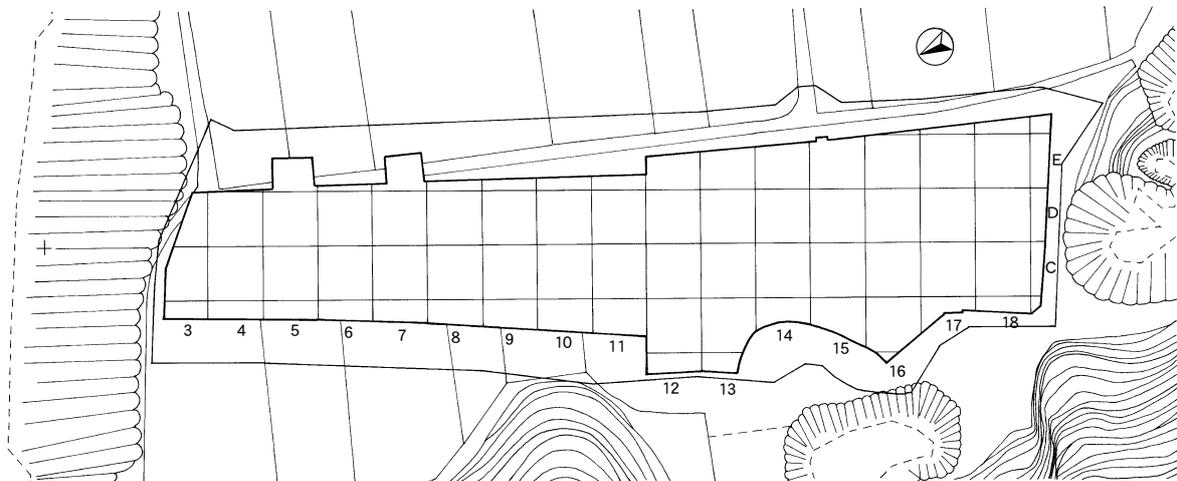
4 出土遺物の分類

出土遺物の分類は，まず，出土層位により分類したのち，土器は，型式学的手法により，器形や文様の相違で分類した。石器は，土器と同様に形態の相違で分類した後，剥片については使用痕の有無の観察等を行った。

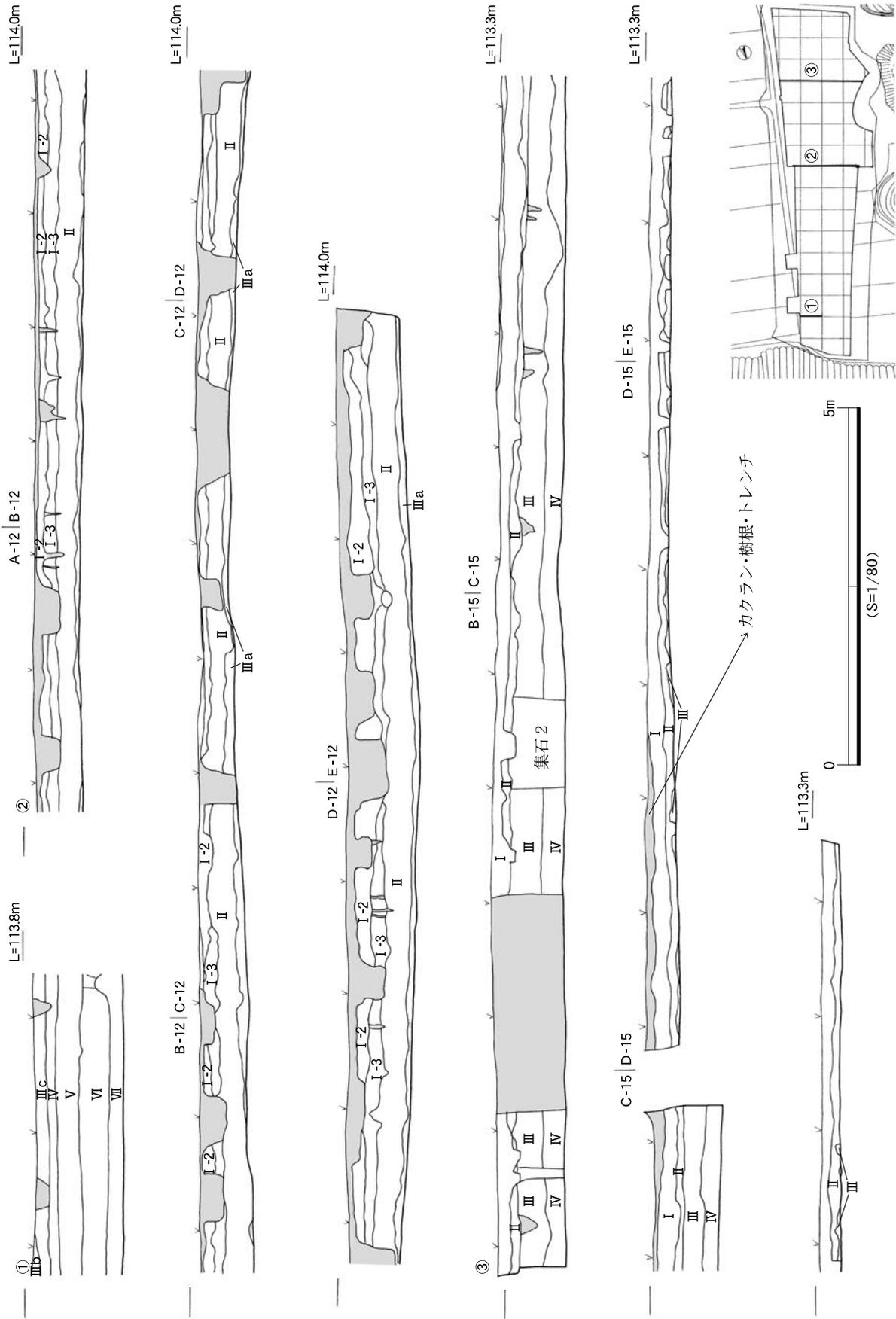
第2節 遺跡の層序

鳴野原遺跡A地点の基本層序は，以下の柱状図のようにおおむね安定した堆積状況を示しており，南薩地方各地の調査結果で明らかになっている層序とほぼ同様の状況である。火山灰層の堆積状況も，平野部よりは良好な状況といえる。(第4～6図)

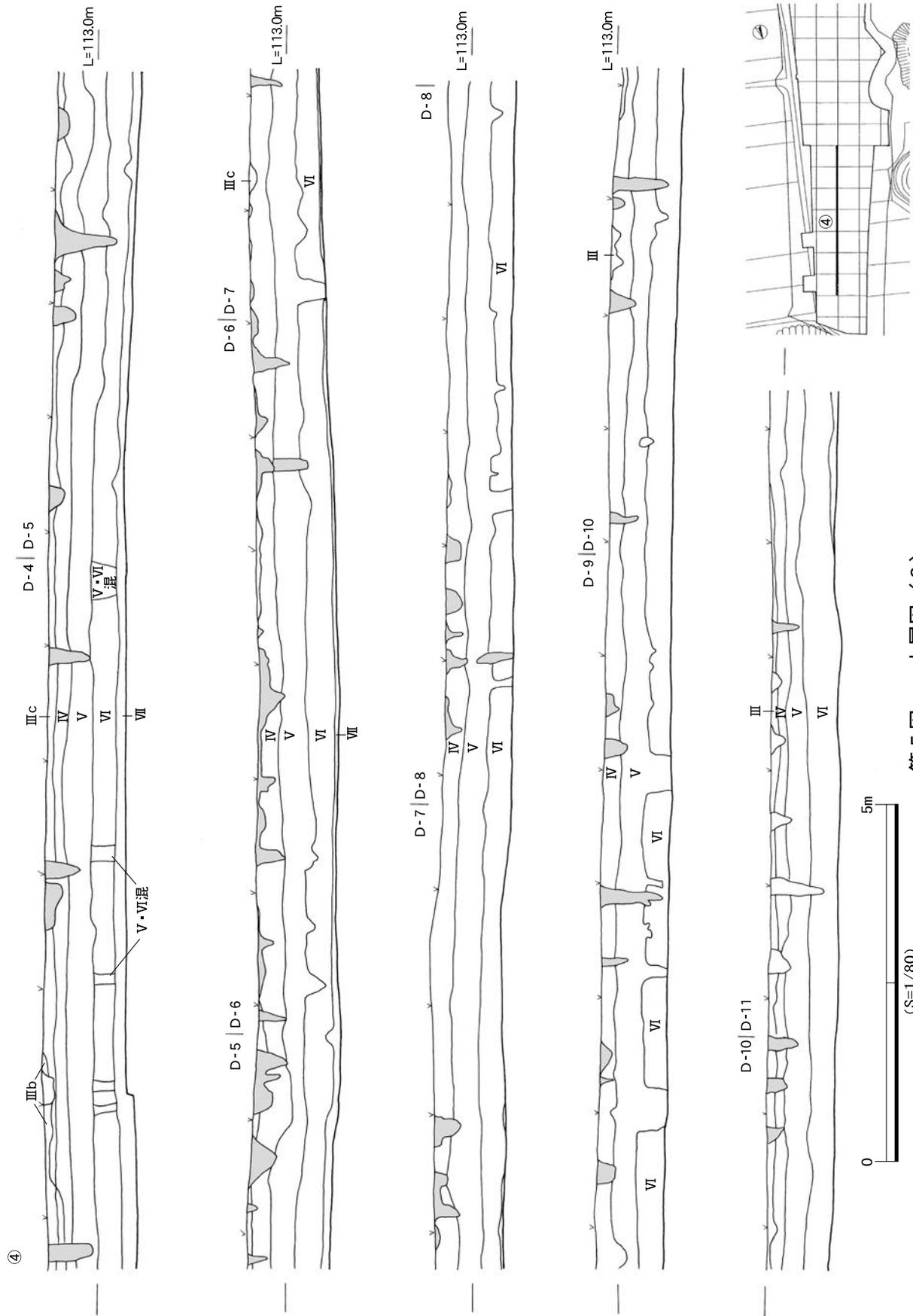
I層 (灰黒色土)	表土 (耕作土)
II a層 (黒茶褐色土)	古代～中世の包含層
II b層 (茶褐色土)	通称「灰コラ」を含む。弥生～古墳時代の包含層。本層上面で 竪穴住居跡を発見した。
II c層 (黒褐色土)	通称「灰コラ」を含む。縄文時代後期の包含層
II d層 (黒褐色土)	パミスを含む。縄文時代後期の包含層
III a層 (黄茶褐色土)	通称「アカホヤ火山灰」の腐植土層で，III a，III b層は縄文時 代後期の包含層
III b層 (黄茶褐色土)	
III c層 (黄茶褐色土)	軽石層
IV層 (暗褐色土)	縄文時代早期の包含層
V層 (黒褐色硬質土)	パミス含む。縄文時代早期の包含層
VI層 (黄褐色火山灰)	層の下部は軽石層。通称「薩摩火山灰」無遺物層
VII層 (暗赤褐色土)	無遺物層
VIII層 (暗茶褐色粘質土)	無遺物層
IX層 (砂質土)	無遺物層
X層 (砂礫混火山灰土)	A T火山灰層



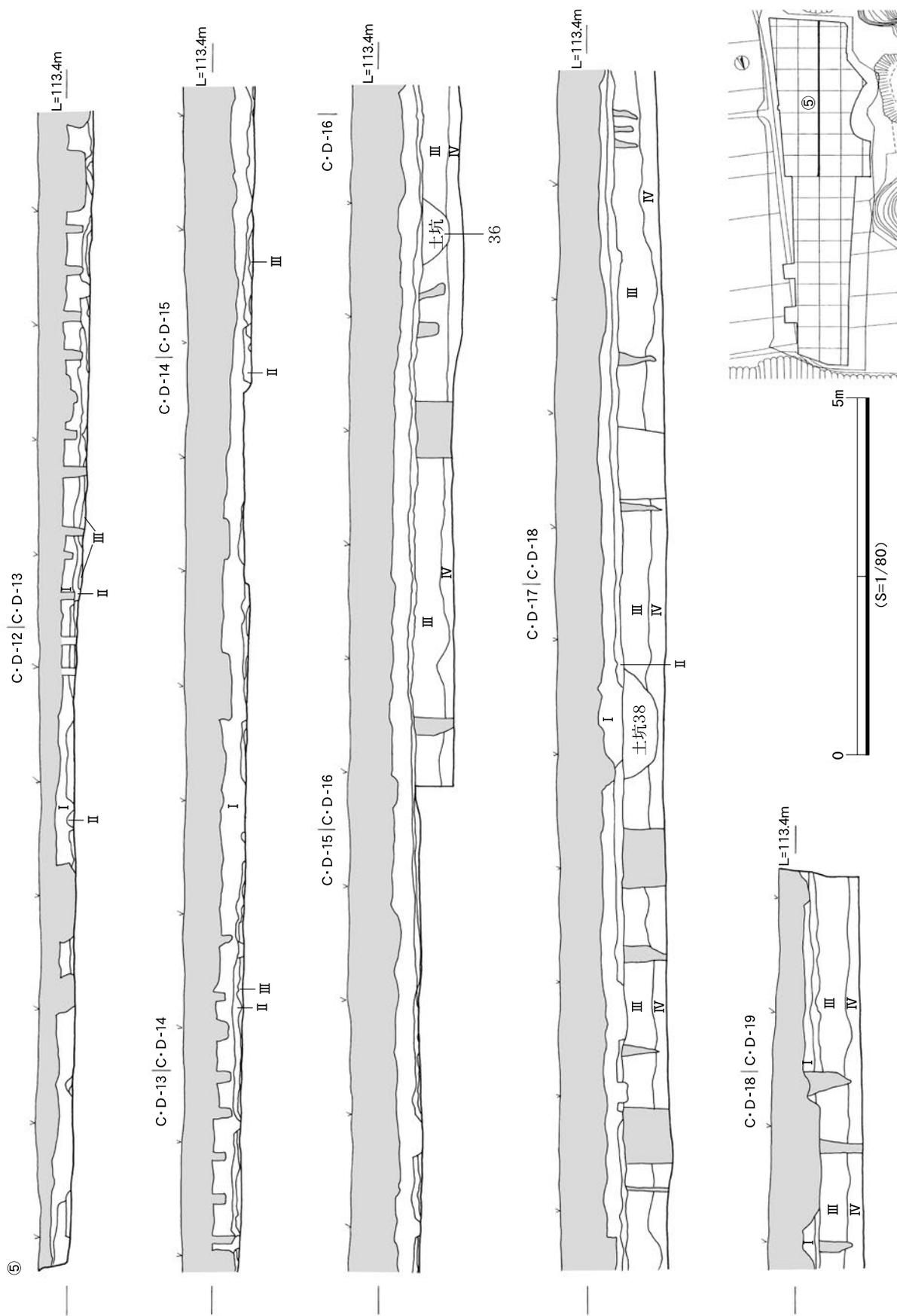
第3図 グリッド配置図



第4図 土層図 (1)



第5図 土層図 (2)



第6図 土層図 (3)

第3節 調査の成果

発掘調査の結果、遺構については、古墳時代に属すると思われる竪穴住居跡が6軒、縄文時代後期前半に属すると思われる竪穴住居跡5軒、土坑55基（うち土器等遺物との関連性が高いと想定されたもの17基）、掘立柱建物跡の可能性が想定される柱穴群が1か所、集石3基、土器集中部分7か所、溝状遺構3条のほか、ピットが多数発見された。また、縄文時代早期に属すると思われる集石10基、土坑1基が発見された。

遺物については、中津野式土器、成川式土器、指宿式土器、南福寺式土器、凹線文系の土器群、磨消縄文土器、前平式土器などの土器と石鏃、磨製石斧、磨・敲石、石皿、スクレイパーなどが出土した。この他、ガラス小玉が、古墳時代のものと思われる住居跡の埋土中から出土している。

以上、鳴野原遺跡A地点のうち、今回の開発に伴う調査範囲において遺構・遺物がもっとも多く発見された時期は、縄文時代後期前半であった。

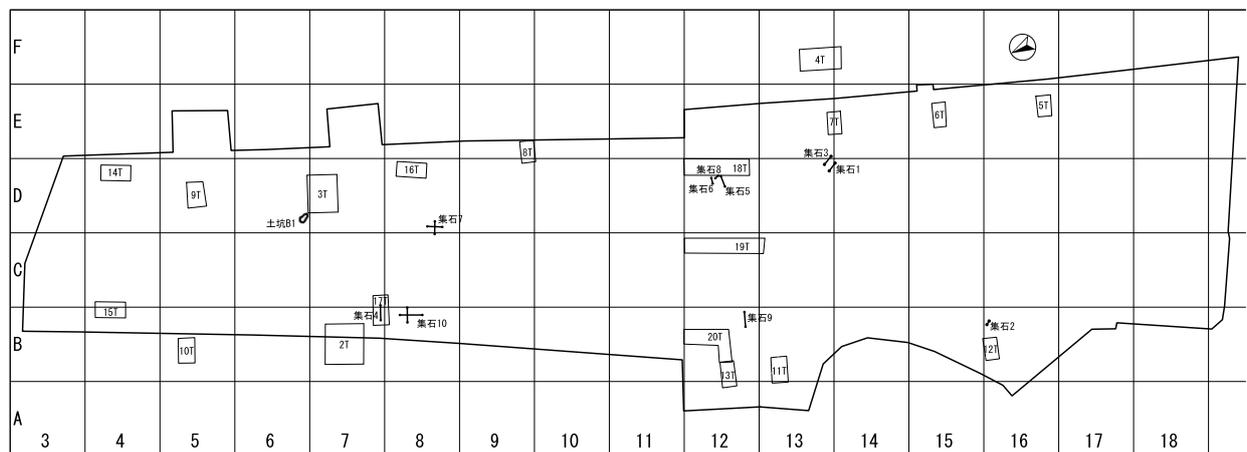
1 縄文時代の調査（第7～184図）

縄文時代早期、前期、中期～後期及び晩期にかけての遺構・遺物が発見されている。なかでも、中期～後期の遺構・遺物は種類・数ともに最も多く発見されている。本節では、発見された遺構と遺物について、時代毎に説明する。

(1) 縄文時代早期（第7～16図）

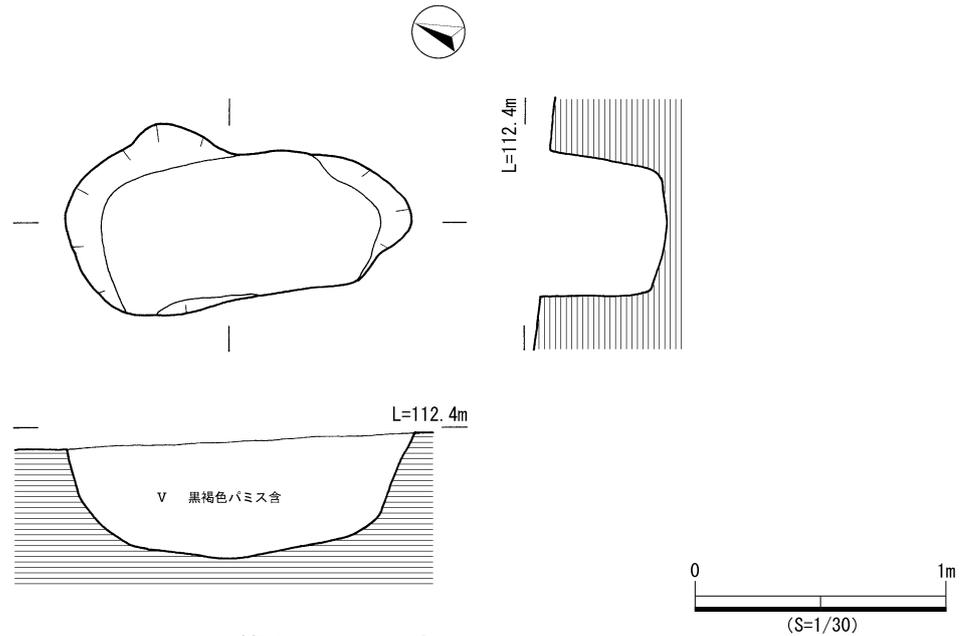
ア 遺構（第7～11図）

縄文時代早期の包含層からは、土坑1基、集石10基が発見されている。集石は、調査区全体から発見されているが、調査区縁辺部からは発見されなかった。



第7図 縄文時代早期遺構位置図

土坑は、D-6区から1基発見された。やや不正な楕円形の平面プランである。縦・横断面にもさしたる特徴はみられず、底面にも造作の痕跡は残っていない。VII層まで掘り込まれていること、埋土がV層であることから、集石よりも若干古い時期に構築された可能性もあるが、遺物の供伴がないため確証に欠ける。



第8図 土坑

集石は、遺存状況から、掘り込みをもつものが1基、掘り込みは持たないものの比較的多くまとまるものが2基、散在するものが4基、ごく少数の礫がまとまるものが3基という具合に分類できる。

集石1は、IV層上面で発見された。遺物が出土していないため明確な時期比定は難しいが、層位から、早期の遺構と判断した。砂岩と凝灰岩を中心に構成されており、赤化したものも散見される。

集石2も、IV層上面で発見された。まとまりのない集石である。

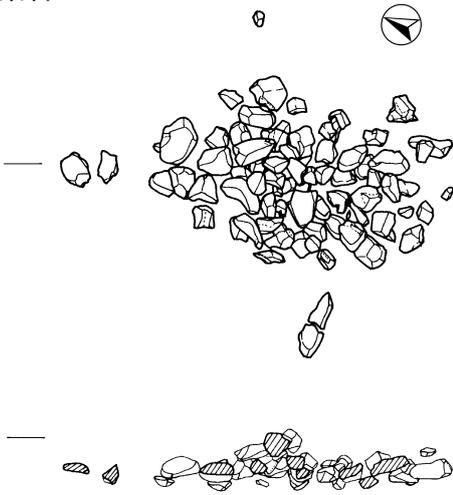
集石3は、集石1と隣接して出土しているが、礫のまとまり具合から、それぞれ別個の遺構と判断した。砂岩を中心に構成されており、赤化したものも多く観察される。なお、構成礫の状況から、掘り込みがあった可能性も考えられる。

集石6は、V層で発見された。わずか4点の角礫がまとまっている集石で、掘り込みはなく、赤化も不明である。早期に時期比定されている集石のなかで、唯一土器の胴部片1点を伴っている。土器は、円筒状で変化の少ない器壁や、貝殻刺突を連続して施し鋸歯状文を施文しているなどの特徴から、下剥峯式土器と考えられる。

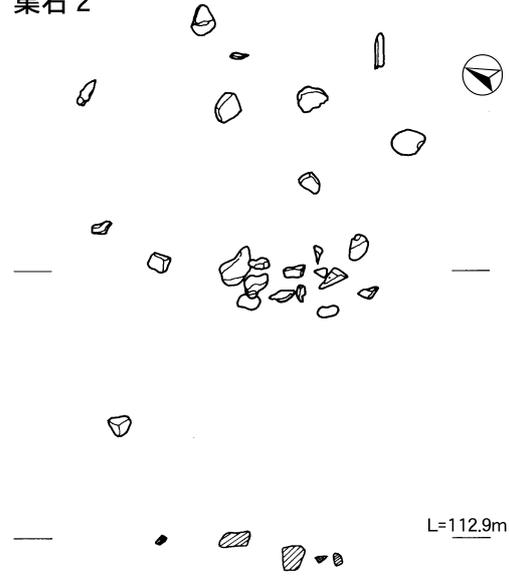
集石7は、IV層で発見された。V層まで達する掘り込みをもつが、礫は充填しきっておらず、掘り込みの中～上位に偏在している。ほとんどの礫は赤化している。なお、集石右下の礫がない部分が黒く硬化していたとの調査担当者によるメモが残っている。

集石10は、IV層で発見された。構成礫が散在しているものに分類したが、そのなかでは礫数も多く、まとまっている方ともいえる。角礫や板状礫など複数種の礫で構成されており、それらが雑把に円形に残っているとみえなくもない。

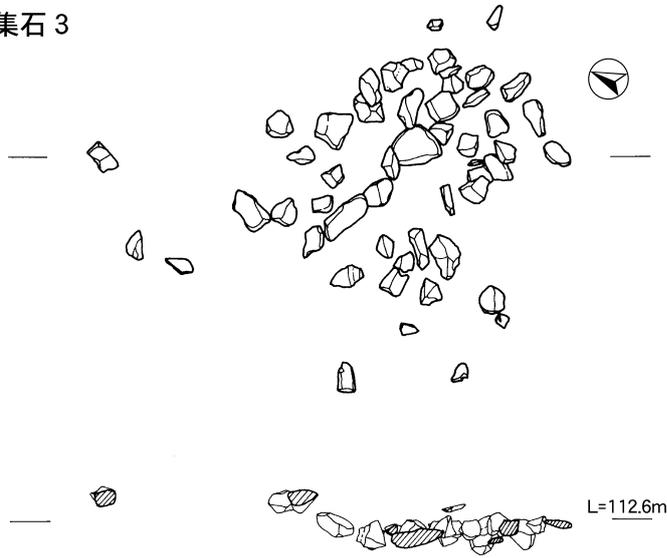
集石 1



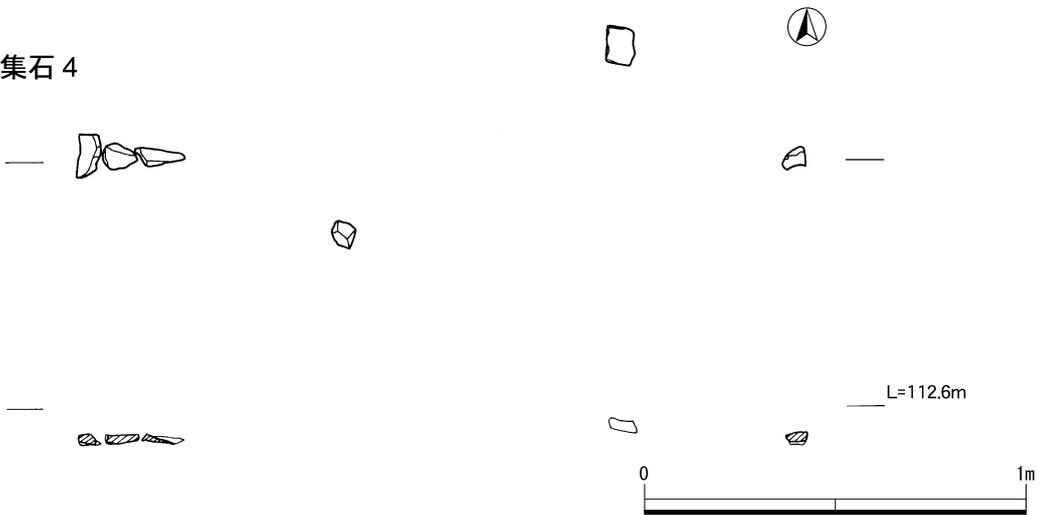
集石 2



集石 3

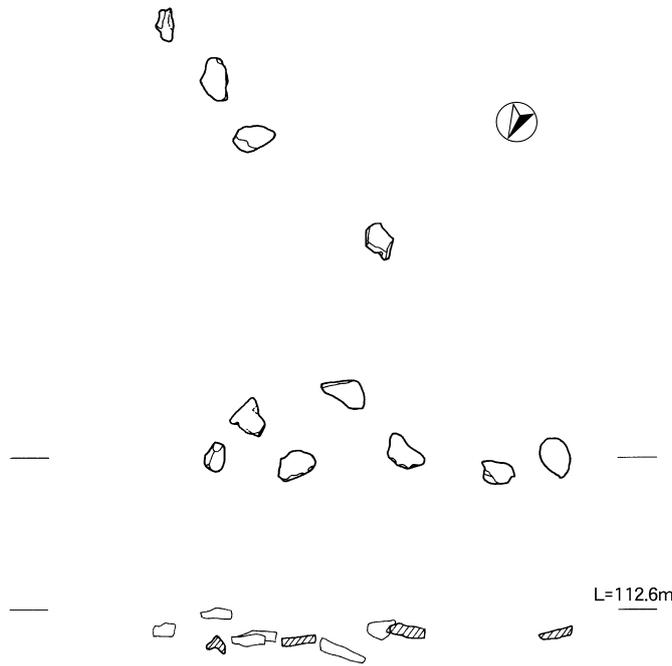


集石 4

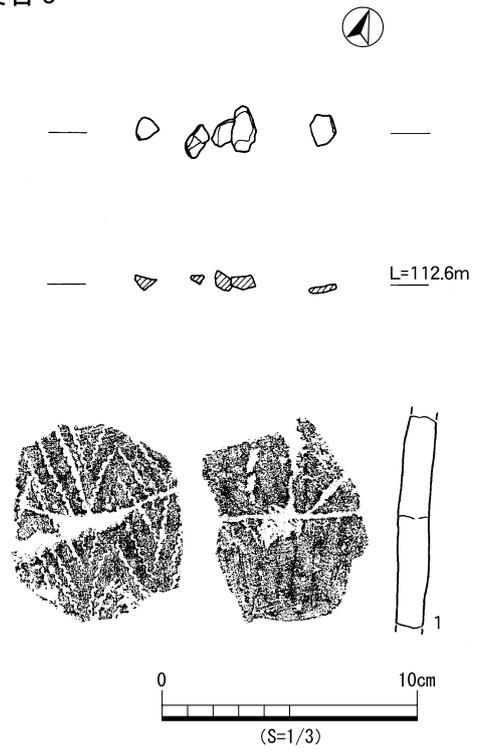


第 9 図 集石 (1)

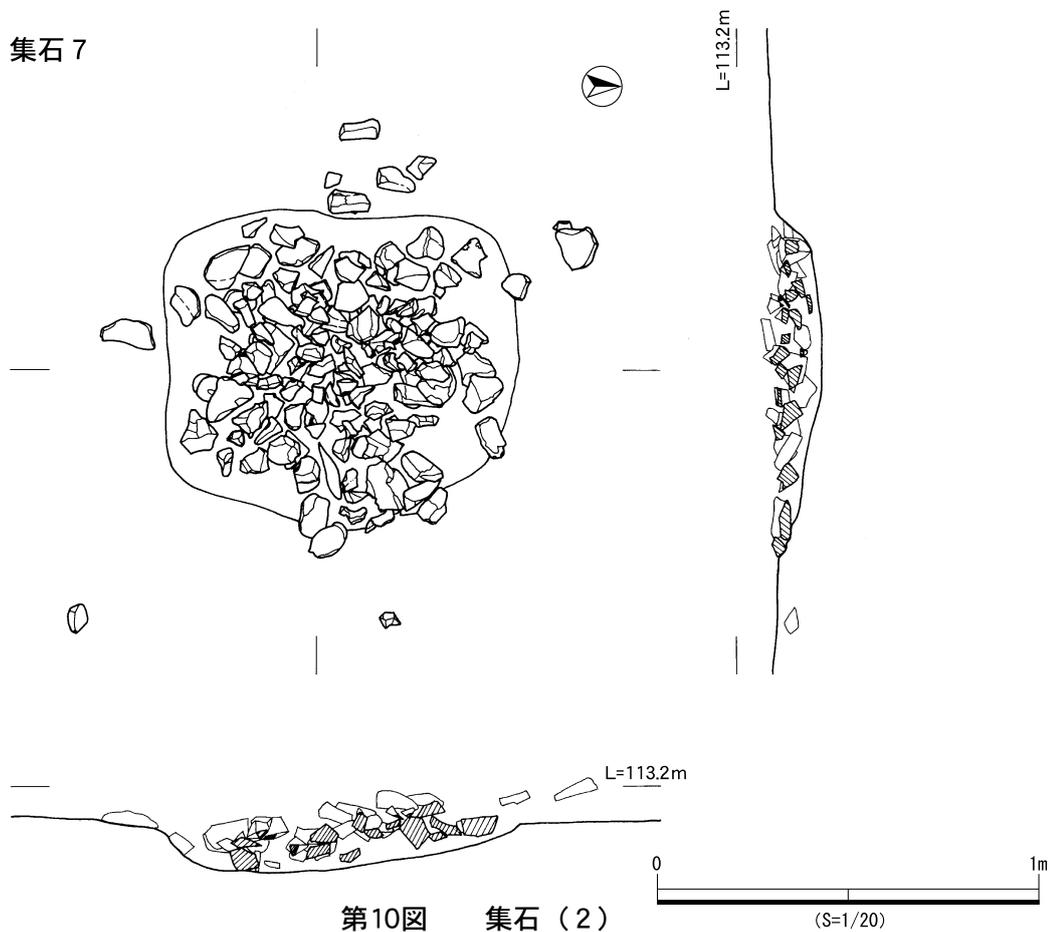
集石 5



集石 6



集石 7



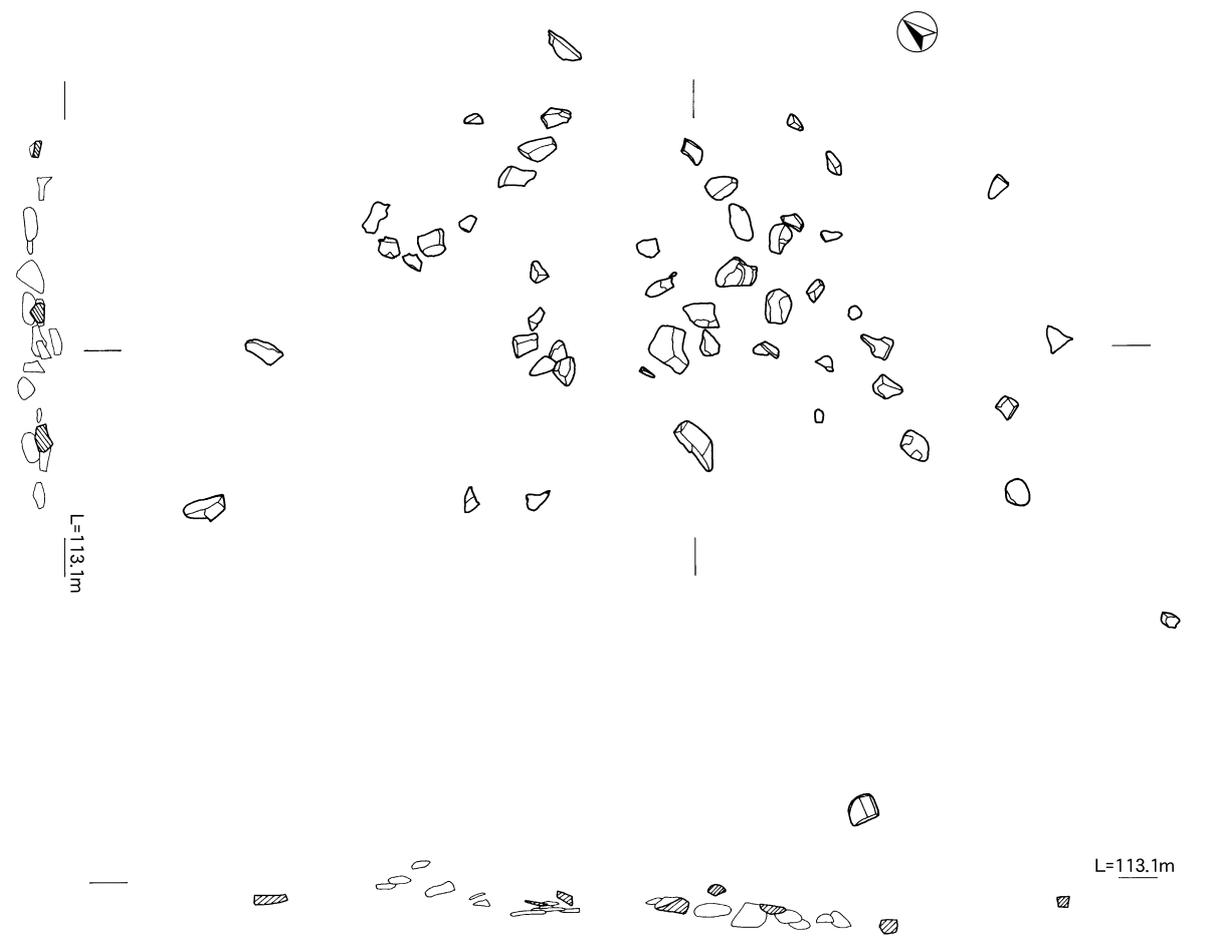
第10図 集石 (2)

集石 8

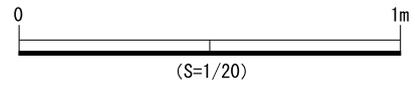
集石 9



集石 10



第11図 集石 (3)



イ 遺物（第12～16図）

縄文時代早期の包含層からは、A～D-12～14区にかけて、前半の貝殻文系土器群の範疇に含まれると考えられる資料を中心に、少量の遺物が出土した。

石器については、打製、磨製の石鏃等の利器、大形の楔形石器等の加工具が発見されている。以下、土器から説明する。

2～29（第12図）は、円筒形土器の範疇に含まれる資料と考えられる。2と3が口縁部資料である他はすべて胴部資料であり、底部資料は発見されていない。2の口縁部外面には、横位の貝殻刺突文が4条施文され、その下位に、貝殻刺突文が1～3条のまとまりで縦位に施文される。口唇部にはごく浅く粗い連続刻目をかろうじて観察できる。小片のため限界があるが、胴部には、一般的に観察される斜位の貝殻条痕文がなく、丁寧なナデ調整が施されているだけである。3は、口縁部外面に横位の押引文を施文し、その下位に横位の貝殻刺突文を1条施文している。胴部には、斜位の貝殻条痕文のうえに、3条単位の貝殻刺突文を縦位に施文している。菱形の文様モチーフを描いていると考えられる。

胴部資料では、いずれも斜位の貝殻条痕文のうえに縦位の貝殻刺突文で菱形の文様モチーフが描かれる。そのうち、5は、比較的条痕文の幅が狭く密に施されていて、さらに、条痕文が浅い。12は条痕文がやや粗く、14は、条痕文の角度が比較的的水平に近い。13は、条痕文、刺突文ともに比較的深い。

2～29の内面は、いずれもケズリ調整が施されているが、5は、とりわけ丁寧なケズリ調整が施されている。

30～38（第13図）は、断面形状や器壁の相対的な薄さから、角筒土器の範疇に含まれると判断した。30は、やや内傾する口縁部資料で、口縁部には横位の貝殻刺突文を3条施文し、胴部には斜位の貝殻条痕文のうえに縦位の貝殻刺突文を施文している。小片のため確証はないが、貝殻刺突文については、口縁部と胴部で工具を換えている可能性がある。

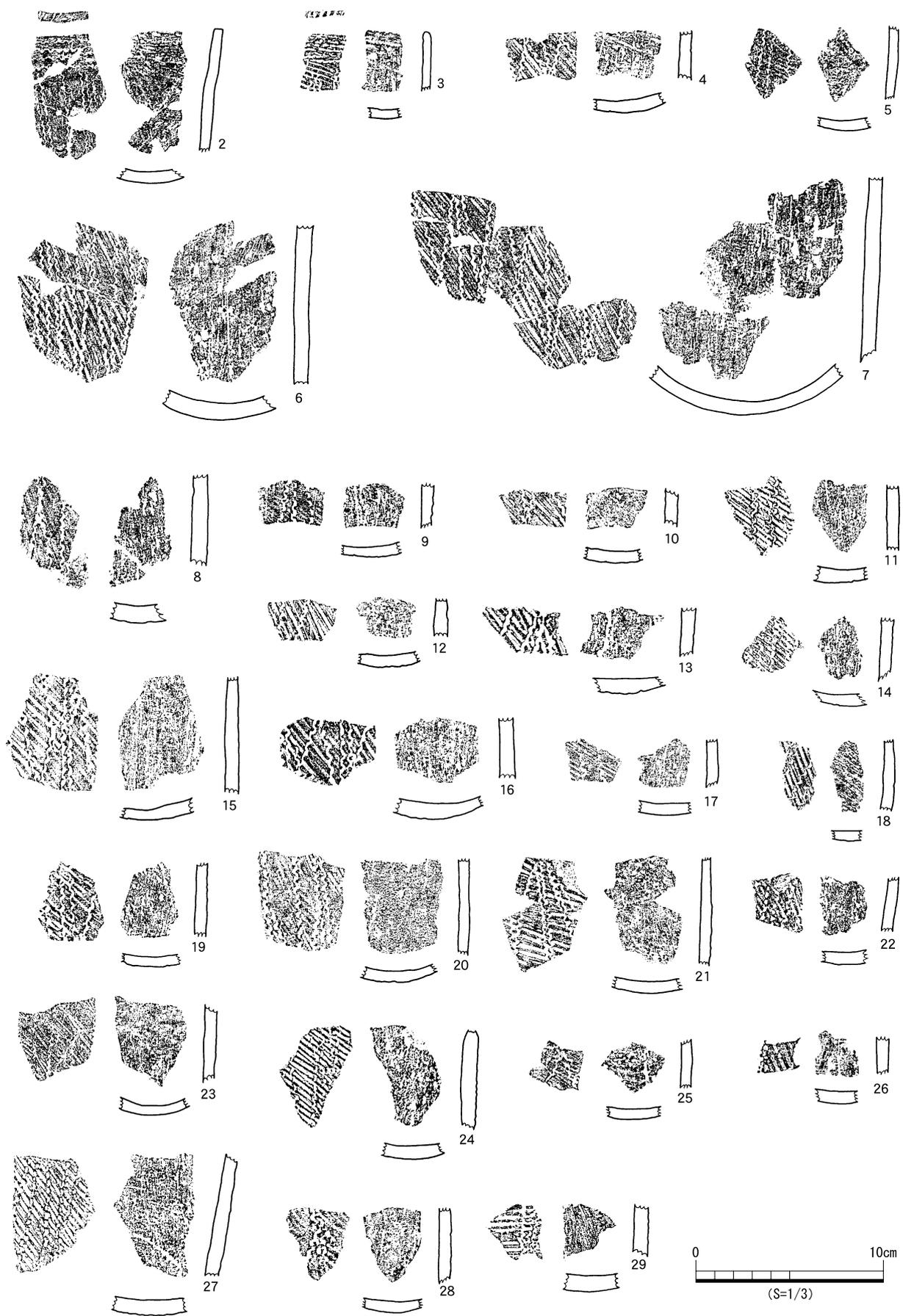
31～38は、胴部資料である。文様の特徴は、円筒土器とおおむね同様であるが、36の条痕文は、比較的浅い。

30～38は、内面がケズリ調整で、円筒土器よりもやや丁寧な仕上げにみえる。

38は、貝殻文系土器様式の範疇に含めたが、異なる型式の資料である可能性もある。外面には、斜位の条痕がやや粗く施された上に、断面角形の工具を用いた縦位連点文により菱形のような文様モチーフを描いている。内面はケズリ調整である。

42は、円筒形土器様式の範疇に含まれると考えられる資料である。口縁部は断面が丸みを帯びた略方形で、縦位の貝殻刺突文を密に施文している。内面は丁寧なナデ調整が施されており、混和材には小礫や石英粒が少ない。

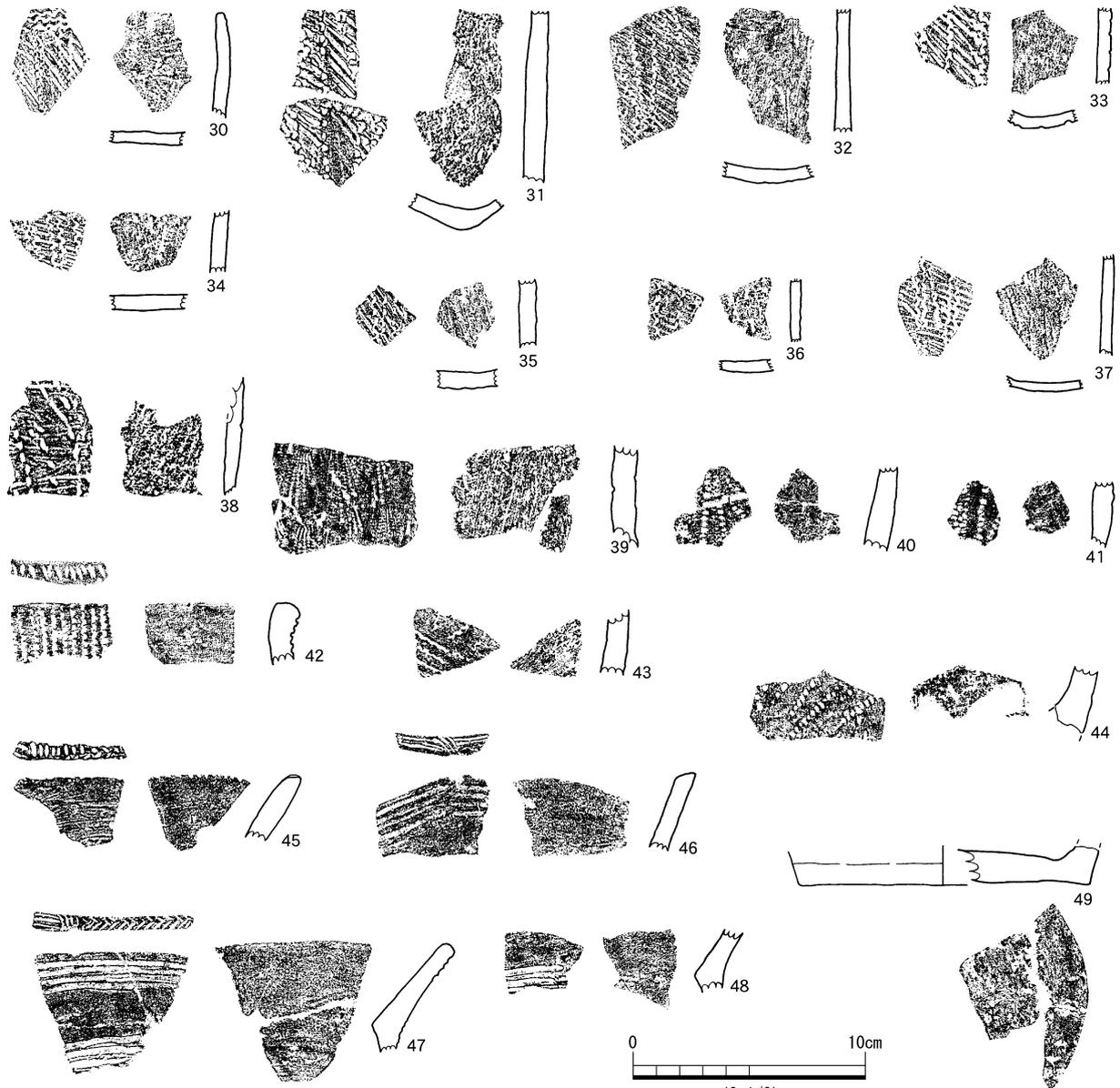
39～44は、検討の余地を残すものの、早期中葉に位置づけられる土器群と判断した。39は胴部片で、二枚貝の肋頂部を利用して、連続した小さな放射状文様を施文している。外面は、丁寧なナデ調整が施されている。41～44は、色調や胎土、文様の特徴から同一個体の可能性も考えられる。器面はナデで仕上げられており、文様は、貝殻刺突文により放射状のモチーフを施文している。



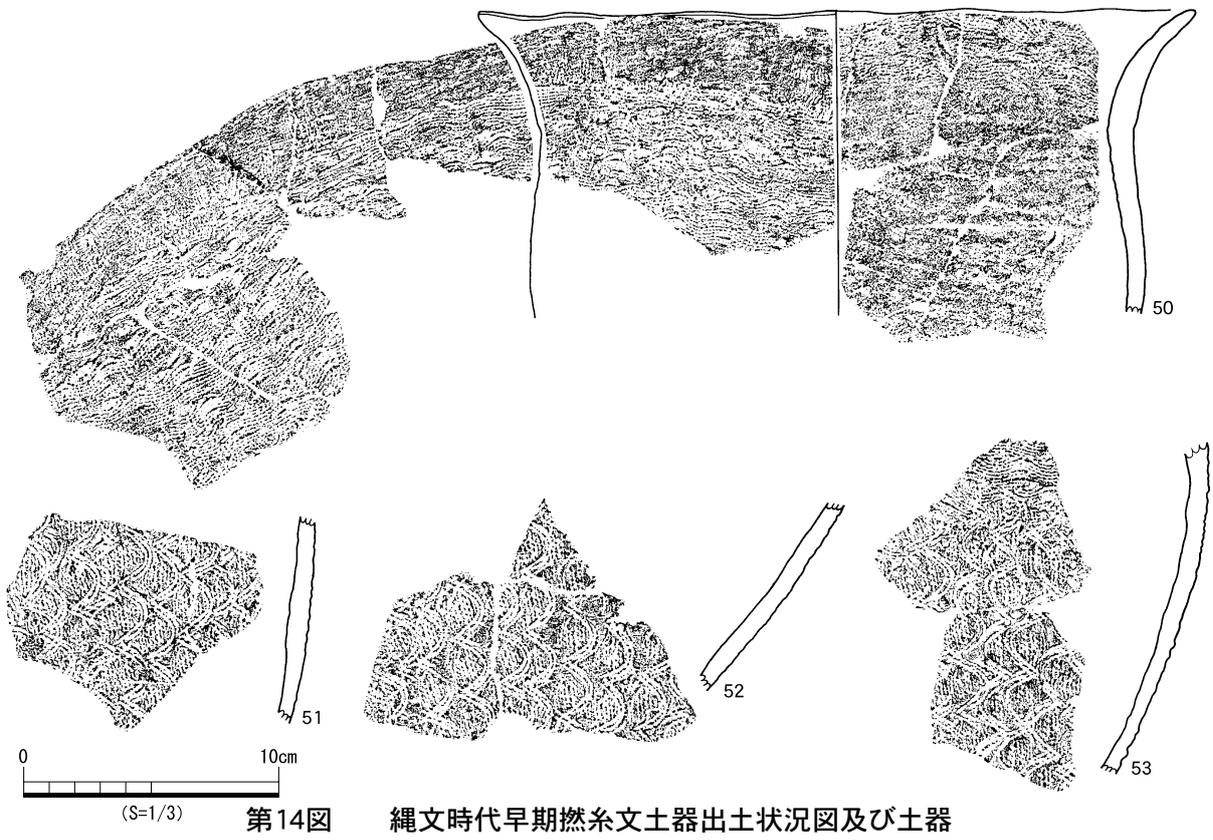
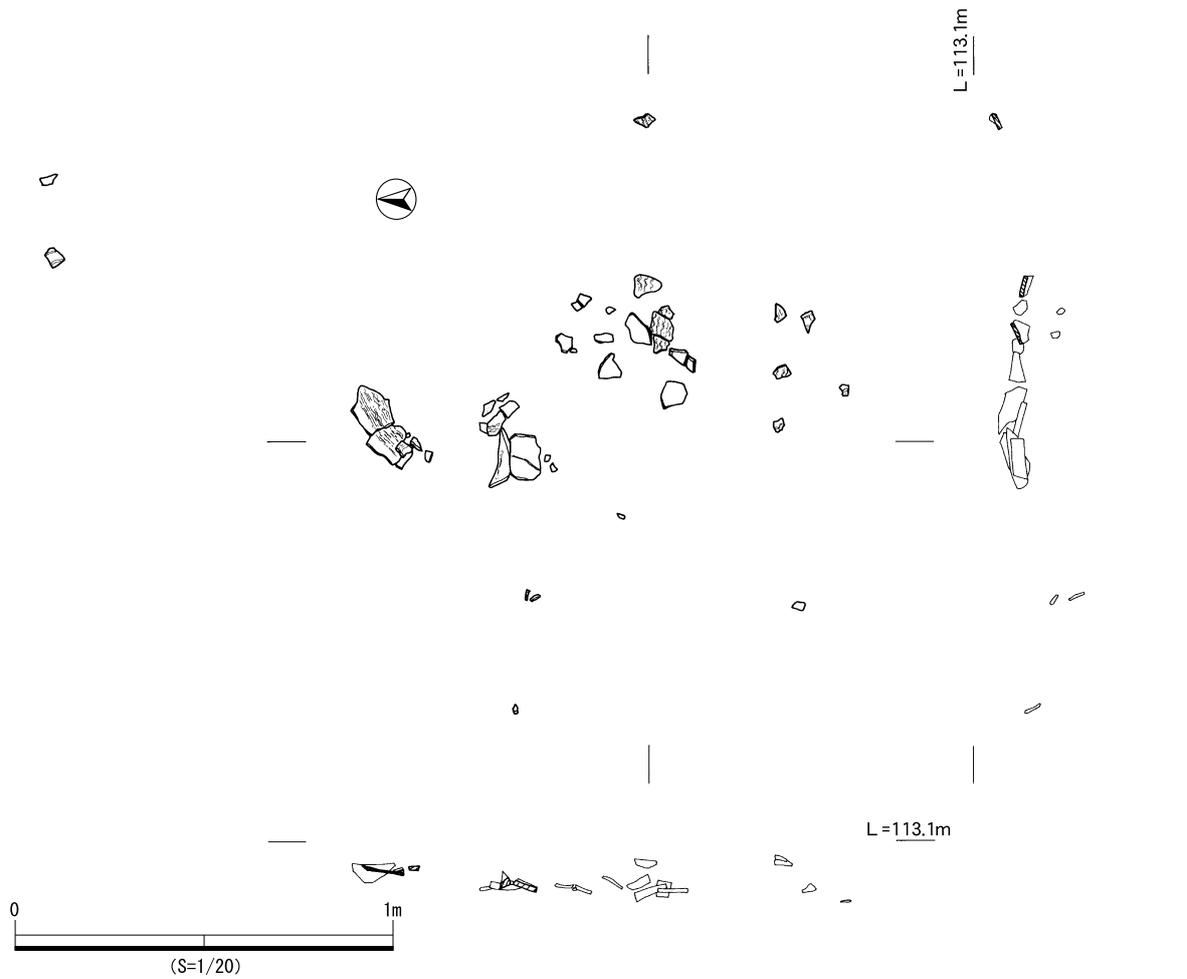
第12図 縄文時代早期 土器 (1)

45～49は、早期後葉に位置づけられる土器群と判断した。いずれも、内外面ともに丁寧なナデ調整で仕上げられており、器壁も比較的薄い。胎土には角閃石が目立ち、小礫などの混和材はみられない。文様は、横位のごく浅い沈線文が口縁部や頸部に施文されるほか、45～47のように、口唇部上面にも細かな沈線文や刻目文が施されている。特に、展開を変化させている点が注目される。

50～53（第14図）は、C-8区のIV層からまとめて出土した資料である。器形や文様の特徴から、早期中葉に位置づけられると考えられ、接合しなかったものの、同一個体と考えられる。文様は、変形撚糸文であるが、口縁部外端は無文とし、頸部から胴部最大径までは横位に施文し、胴部下半は縦位に施文しており、部位によって変化を持たせている。また、胴部屈曲部の上位と下位で、使用する施文原体を変えているのも特徴である。口縁部内面には、胴部上半に使われる施文原体を横位に使用している。



第13図 縄文時代早期 土器（2）



第14図 縄文時代早期撚糸文土器出土状況図及び土器

石器（第15・16図 54～69）

54は細石刃であるが、旧石器はこの一点だけであり、縄文時代早期のこの項で扱う。

黒曜石の細石刃核から剥離されたもので、背面には3条の先行する細石刃剥離を認めるが、頭部と尾部を欠くため、どのような細石刃核から剥離されたものかわからない。

55～59は打製石鏃である。

55は硬質頁岩の横長剥片を用いており、素材が薄く作られているからか、周縁と基部の加工のみで形成されている。左脚が方形であるのは、この部分のみが特に薄くなっているからで調整剥離が入ると脚の長さがより短くなるから、この段階で加工をとどめているものであろう。56は良質のチャートの剥片を素材とするもので、器面調整剥離が全面に及んでいるため、素材剥片の形状は不明であるが、大きさの割には厚めだったためか、背面のふくらみが強い。57はタンパク石の縦長剥片を用いた剥片鏃である。右側縁と基部のみの加工であるが、両側縁と器体にねじれは見られないことから、未製品ではなく剥片鏃としての完成品であろう。58、59は石鏃の欠損品であるが、58は強い鋸歯縁を持っていたことが窺える。59は56と同様の形態の石鏃であろう。

60は石匙のつまみ部分である。黒色安山岩の剥片を用いたものであるが、つまみの形状からはおそらく横型のものであろうと思われる。整形剥離はわりとていねいであるが、断面形は太くなっており、やや大きな石匙であったかもしれない。

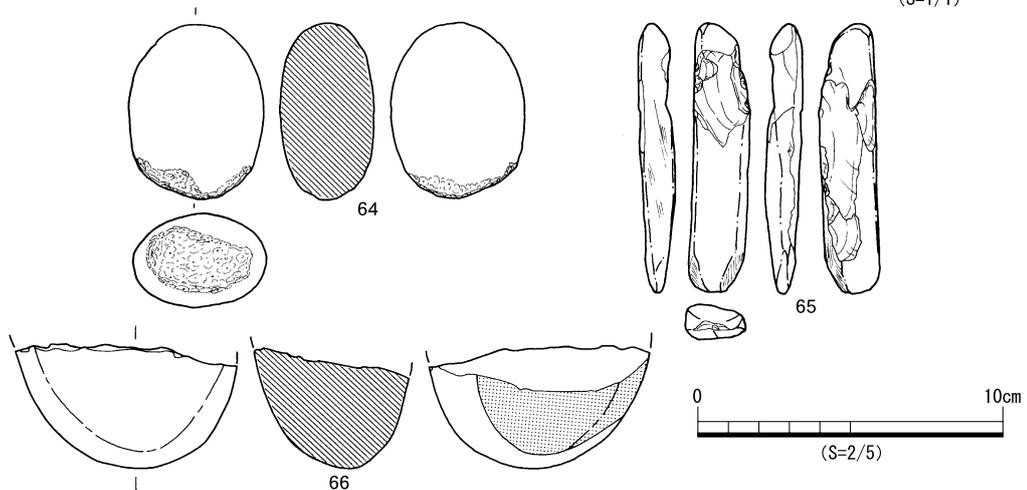
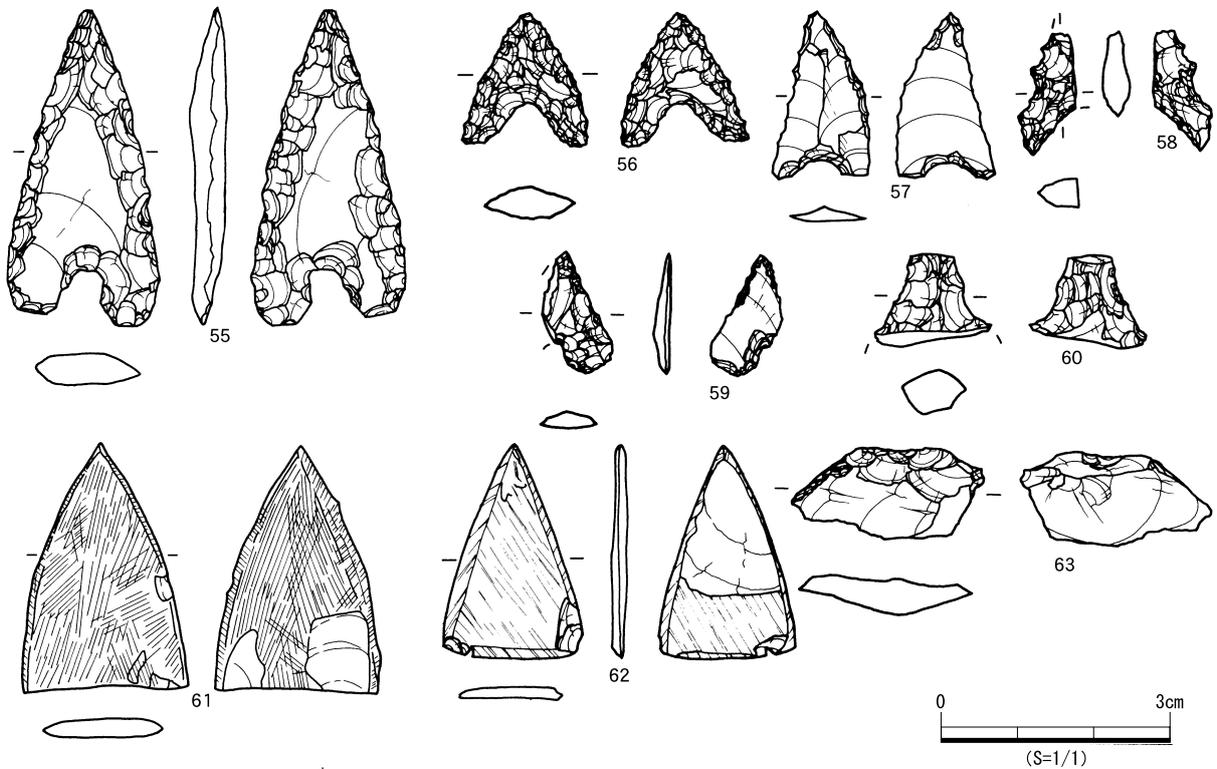
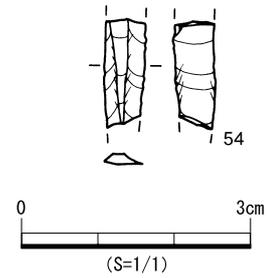
61・62は磨製石鏃である。どちらも粘板岩を用いており、きわめて薄い作りである。61は側縁がやや外湾し、基部は浅く内湾する。それに対して、62は側縁、基部ともに直線的であり、対照的である。2点ともにIV・V層出土であり、層位の点から縄文時代早期のものであることに疑いはないが、今までに南九州で発見された縄文早期のそれとは若干異なる点が見受けられる。それは、素材と大きさである。今までの出土例では、黒曜石や鉄石英など打製石鏃と同様の石材が用いられている例が多かったが、この2点は弥生時代以降の磨製石鏃と同じように粘板岩が用いられている。また、大きさも今までの例では、打製石鏃とほぼ同じ大きさであるものが多かったが、この2点はやや大型の部類に属するであろう。特に、61は側縁が外湾し、基部が内湾するという平面形状の特徴が弥生時代以降の磨製石鏃に似ている。ただし、側縁の刃部形成の稜の幅が狭いことと身の中央の溝が作られていないことが弥生時代以降のそれと形態的に大きく違うところである。しかしながら、弥生時代以降の遺構埋土に入っていたのではないかと、一抹の不安がぬぐいきれない。62は素材と大きさで今までの縄文早期例と違うものの、側縁や基部が直線的であるなど、形態的には弥生時代以降のそれと大きく異なり、その点では縄文時代早期の資料として妥当であろうと思われる。

63は黒曜石の横長剥片であるが、背面右側縁の連続する微細剥離の存在を考えると、この部分を加工する何らかのツールの器面調整剥離の剥片であろうと思われる。

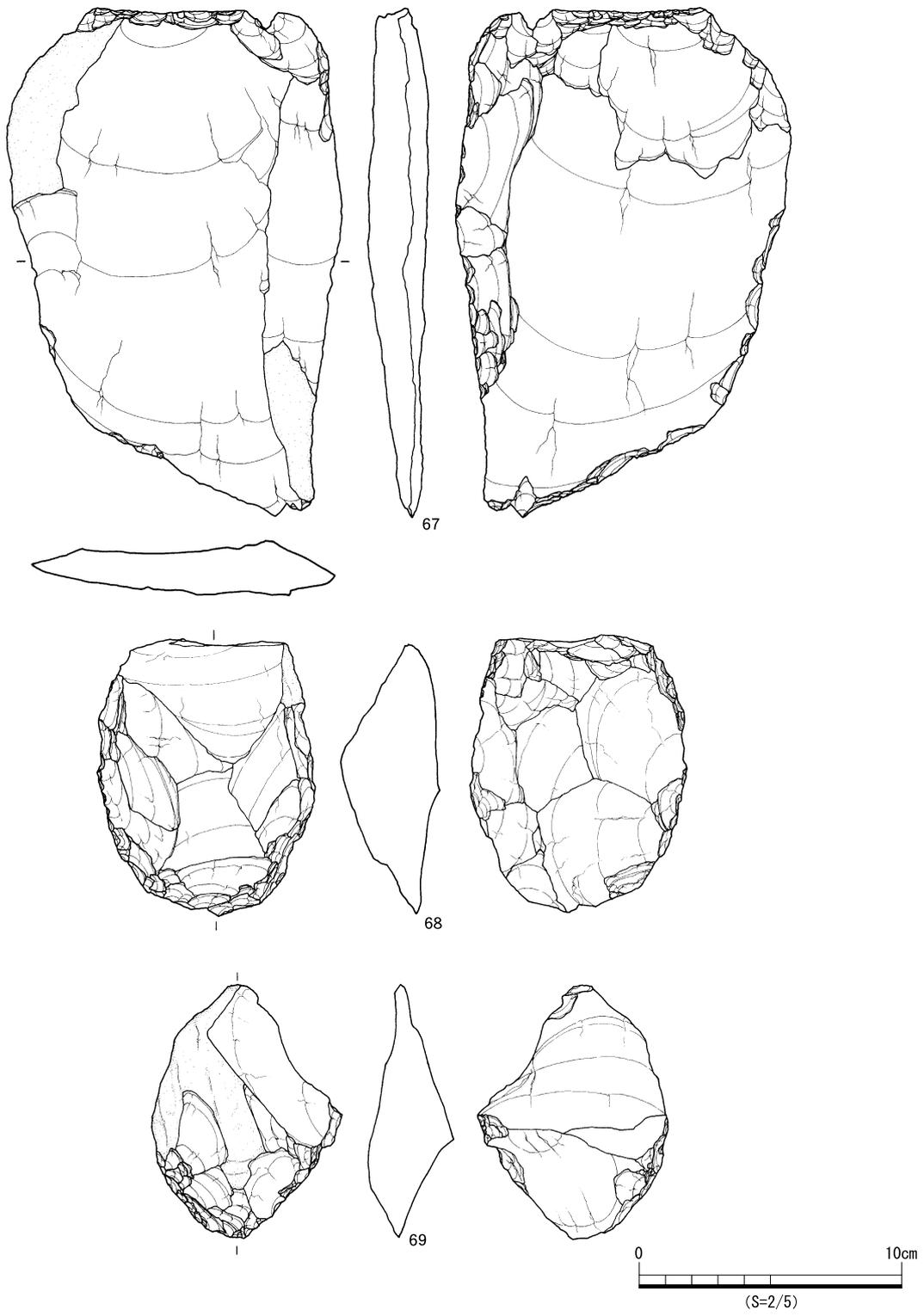
64・65は敲石であり、64は球形に近い円礫の一端に敲打痕が残る。65は頁岩の棒状の礫を用いた間接打撃の際のパンチストーンであり、上下両端に敲打痕が残る。66は磨石の破片である。

67は、硬質頁岩の大型の縦長剥片を用いた大型削器である。左側縁下部が大きく刃こぼれしているがほぼ完形を保っている。この石器の特徴はまずその大きさであろう。長さ19cm、幅13cm、厚さ2.5cmは、一般的な削器の大きさとかなりかけ離れたものである。しかしながら、その刃

部加工はフェザーエंडの縁辺に両面調整を施して両刃に作り、なおかつ、基部も、素材剥片の打面をつぶすとともに、素材剥片のバルブを取り除く様な調整剥離を加え、薄く作っている。このような加工は削器そのものであり、ほかの器種名で分類することはできないであろう。この基部形状は着柄のためかと思われるが、両側縁のほぼ中央のエッジは、他の箇所と比べてやや鈍磨しており、使用による鈍磨か着柄のために鈍磨したものか判断が付かない。主たる使用部位は斜めになって刃こぼれが見られる左側縁下半であろう。弧を描く形状は刃物特有の形状であり、その重量と相まって相当の切れ味を有していたのではないかと、想像され



第15図 旧石器時代及び縄文時代早期 石器 (1)



第16図 縄文時代早期 石器 (2)

る。その切削の対象物として、茅などの草本類のものを想定したいが、コーングロスは観察できず、その対象が何であったかは推定する根拠がない。この石器の最後に、素材について若干述べておきたい。この石器の素材となった剥片を剥離した石核は遺跡内には残されていない。また、この石器のような大型剥片も出土しておらず、これと同じ石材の剥片石器は55の石鏃だけであり、この石材利用はこの2点に限られており、遺跡外との強い結びつきが想定できる。

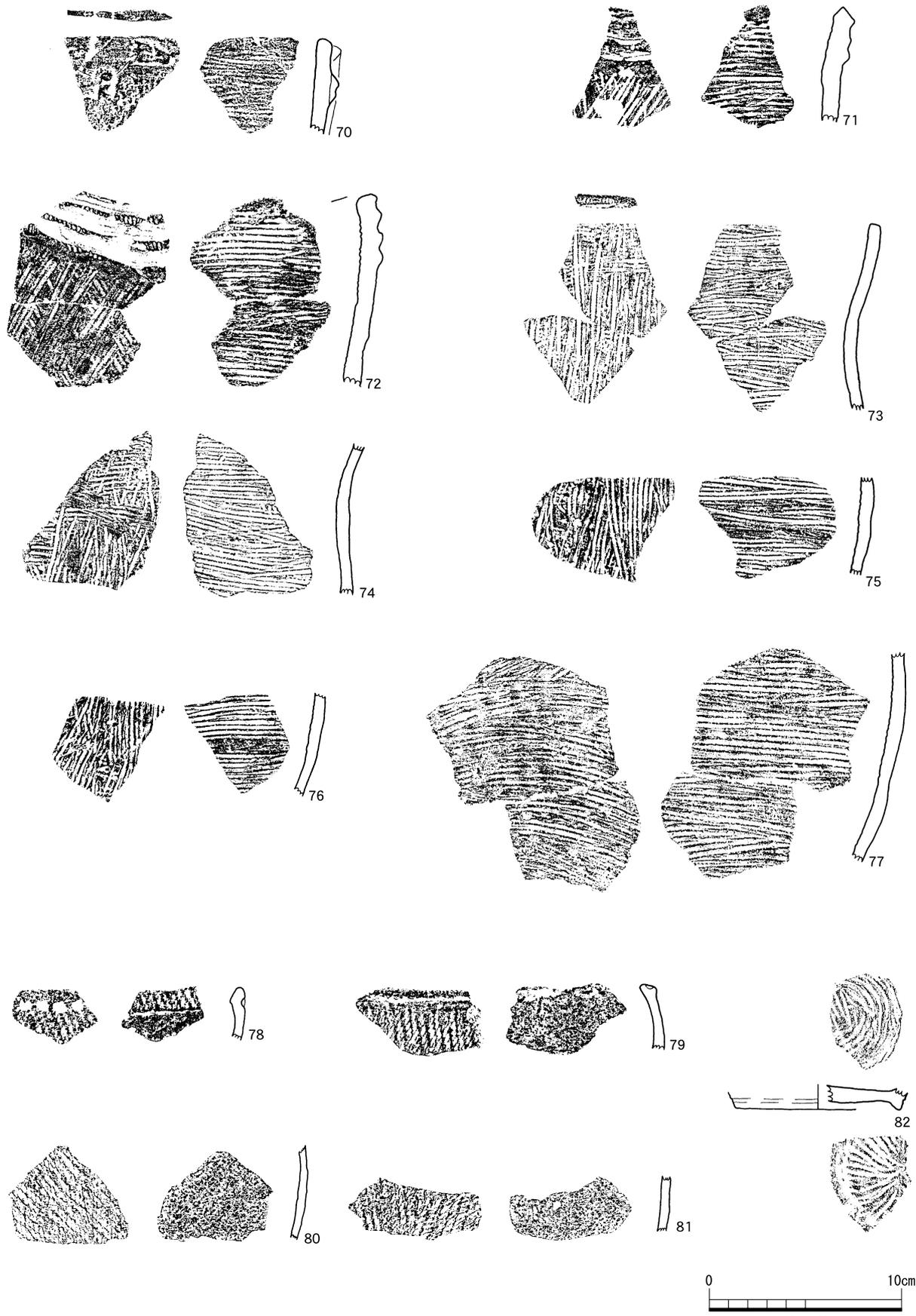
68は、頁岩の礫皮面の残る厚手の剥片を用いた両面石器である。基部は背面への剥離で薄くなったところを切断している。右側縁には刃潰しのような加工があり、左側縁と下縁には削器様の細かな両刃加工が見られる。器面調整はラフな剥離で行われており、その点では円盤状石核からの器種転換の結果とも見受けられる。この遺跡の縄文時代後に大型楔形石器が見られるが対向する階段状剥離がないことから大型楔形石器ではない。69も68と同様の石器であるが、折損しており、その後、右側縁下半に搔器のような片刃の刃部がつけられている。

(2) 縄文時代前期 (第17図)

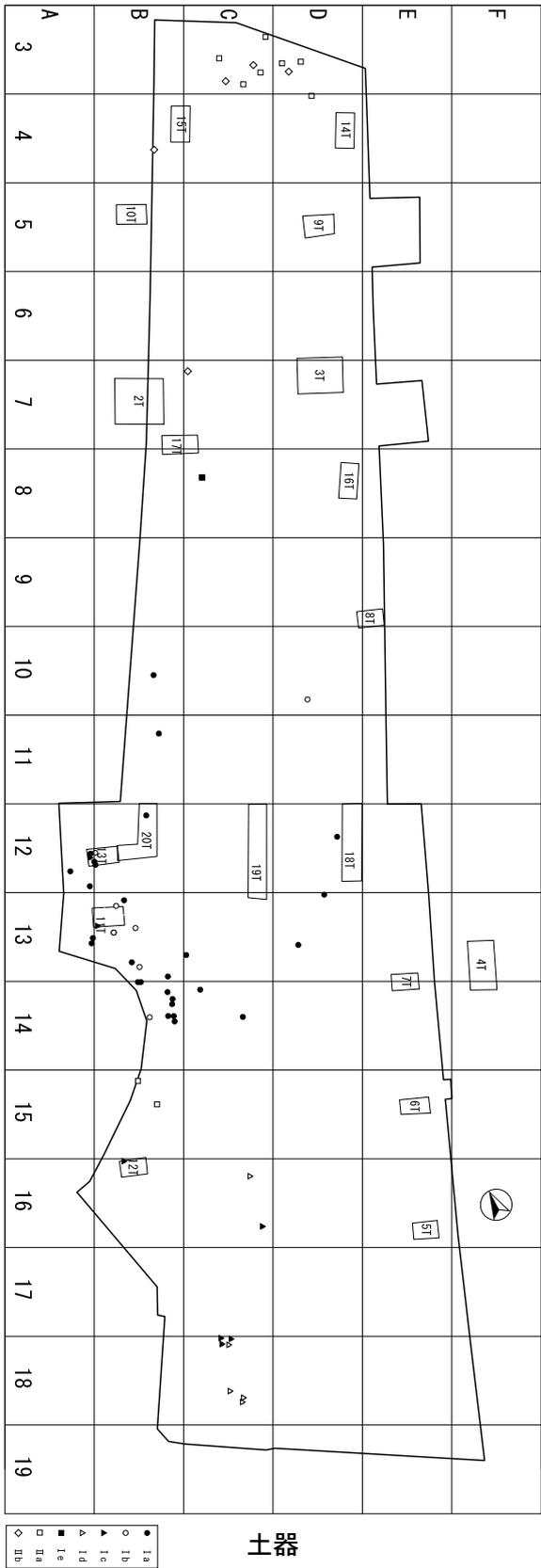
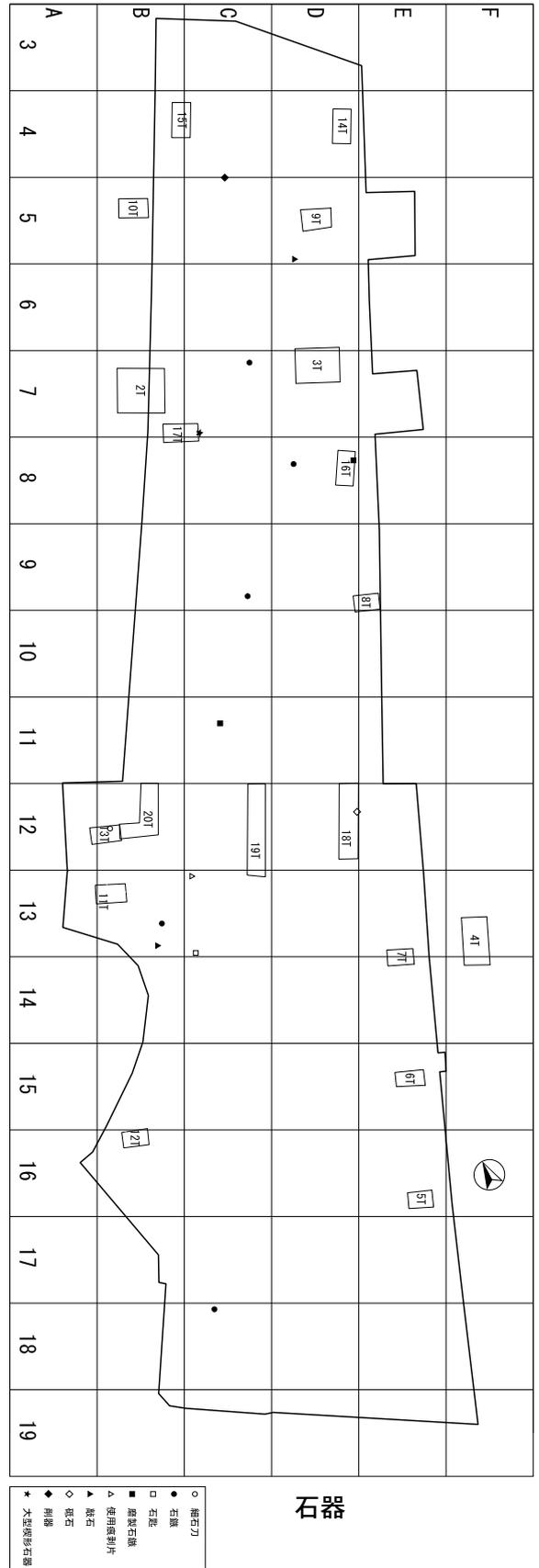
縄文時代前期の包含層からは、C・D-3区にかけて、後半に位置づけられている深浦式土器の範疇に含まれると考えられる資料を中心に、土器片が少数出土した。

70は、検討の余地を残すものの、前期の轟式土器の範疇に含まれる資料と判断した。内外面は、横位の貝殻条痕で調整されている。文様は、口縁部外端に刻目突帯を1条巡らせ、それに接して、垂下する刻目突帯を1条施文している。外面には、貝殻刺突文も施文しているようだが、詳細を観察できない。

71～77は、深浦式土器の範疇に含まれると考えられる資料である。72は口縁部で、かすかに丸みを帯びて外に開きつつ、端部でわずかに内湾する器形である。内外面とも貝殻で器面を調整しており、特に外面の調整は、格子状に条痕を残すことで文様効果を持たせることも意識しているようである。文様は、口縁部に沿って巡らせた3条の突帯文である。断面三角形に仕上げた後、頂部に器面調整に用いた工具と同じと思われる工具で刻目様の施文を不規則に施している。そのため、本来鋭角に仕上がっている突帯の頂部は、その部分のみ潰れている。71は、72と胎土や色調、施文の特徴が類似するため、同一個体の可能性がある。73～76は胎土等の特徴が類似することから、同一個体の可能性が考えられる資料である。器壁は比較的薄く作られ、わずかに張る胴部から、頸部でややすぼまり、再び丸みを帯びつつ外へ開く口縁部にいたる器形を有する。器面は、外面が縦基調でやや不規則に、内面が横位に貝殻で調整されている。口唇部の連続刻目を除き、明確な文様はみられない。77は、73～76と同内容の型式に属すると思われるが、内外面とも横位の器面調整がなされていることから、別の資料と判断した。やや厚みがあるのは、個体の大小によるものと想像される。78～84は、外面に施されている縄文から船元式土器の範疇に含まれると考えられる資料である。78以外が、胎土等の特徴が類似するため同一個体の可能性がある。薄い器壁と、大きく湾曲した形状が、器形の特徴である。内面は、いずれも丁寧なナデ調整が施されている。施されている縄文の撚りは、LRである。78の口縁部外端、79の口唇部には、原体端部と思われる工具による連点文が施文される。また、79には、口縁部外端に、ごく細い刻目突帯が1条巡る。82は、これらの型式に属すると考えられる底部資料である。高台状の成形が特徴的である。



第17図 縄文時代前期 土器



第18図 縄文時代早期・前期遺物分布図

(3) 縄文時代後期 (第19～184図)

ア 遺構 (第19～68図)

縄文時代後期の包含層からは、竪穴住居跡5軒、土坑55基（うち土坑と遺物の関連性が高いと想定された土坑は17基）、掘立柱建物跡の可能性が想定される柱穴群が1か所、集石3基のほか、膨大な数のピットが発見された。

しかし、耕作等の影響により、特に竪穴住居跡の残存度合いは悪く、床面付近のみを検出できた例がほとんどであった。ところが、埋土中の遺物については、ほぼすべてが床面直上もしくはその付近の資料のみに限定できることとなり、住居跡の時期比定が比較的容易であるという、やや皮肉な効果をもたらした。住居跡の平面プランについては、後期の典型ともいえる円形プランを持つものが4軒あるが、1軒だけ方形プランを持つ住居跡が発見されている。さらに、各住居跡の間隔は不規則であるものの、全体として調査区北西側の南北約80m、東西約20mの範囲に、西側に開く弧状に展開しているという状況を見てとれる。

土坑群については、調査区の全面から発見されているが、平成18年度調査区側では比較的大型の土坑が間隔をおいて散在しているのに対し、平成20年度調査区側では比較的小型の土坑が偏在するという、異なった分布状況を呈している。また、竪穴住居跡との切り合い関係はみられない。

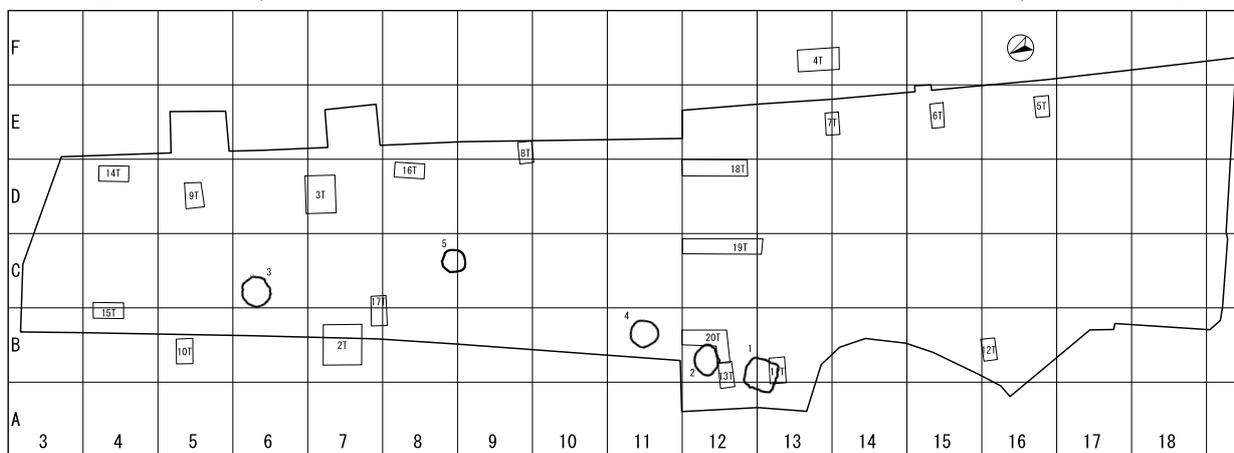
集石は、調査区の中央から北側にかけてまとまりを持たずに発見されている。

ピット群は、調査区の全面に、顕著な特徴を持たずに発見された。そのうち、遺物を伴い比較的大型の柱穴について図示しているほか、掘立柱建物跡の可能性が想定される場所が1か所ある。

以下、順に説明していきたい。

竪穴住居跡 (第19～39図)

竪穴住居跡1は、A・B-12・13区のⅢa層上面で発見された。周辺での遺物の出土状況（垂直分布の粗密）から、本来の構築面は、調査時の検出面より50cmほど高かった可能性がある。平面プランは、1辺約4mの方形で、北東の壁面には、幅は狭いもののほぼ壁面全体に段がひとつ形成されている。床面には深さ20cm強の小ピットが、概ね北西側と南東側の壁面に平行に、やや偏りをみせて検出されている。これら床面のピットは、いずれも埋土が



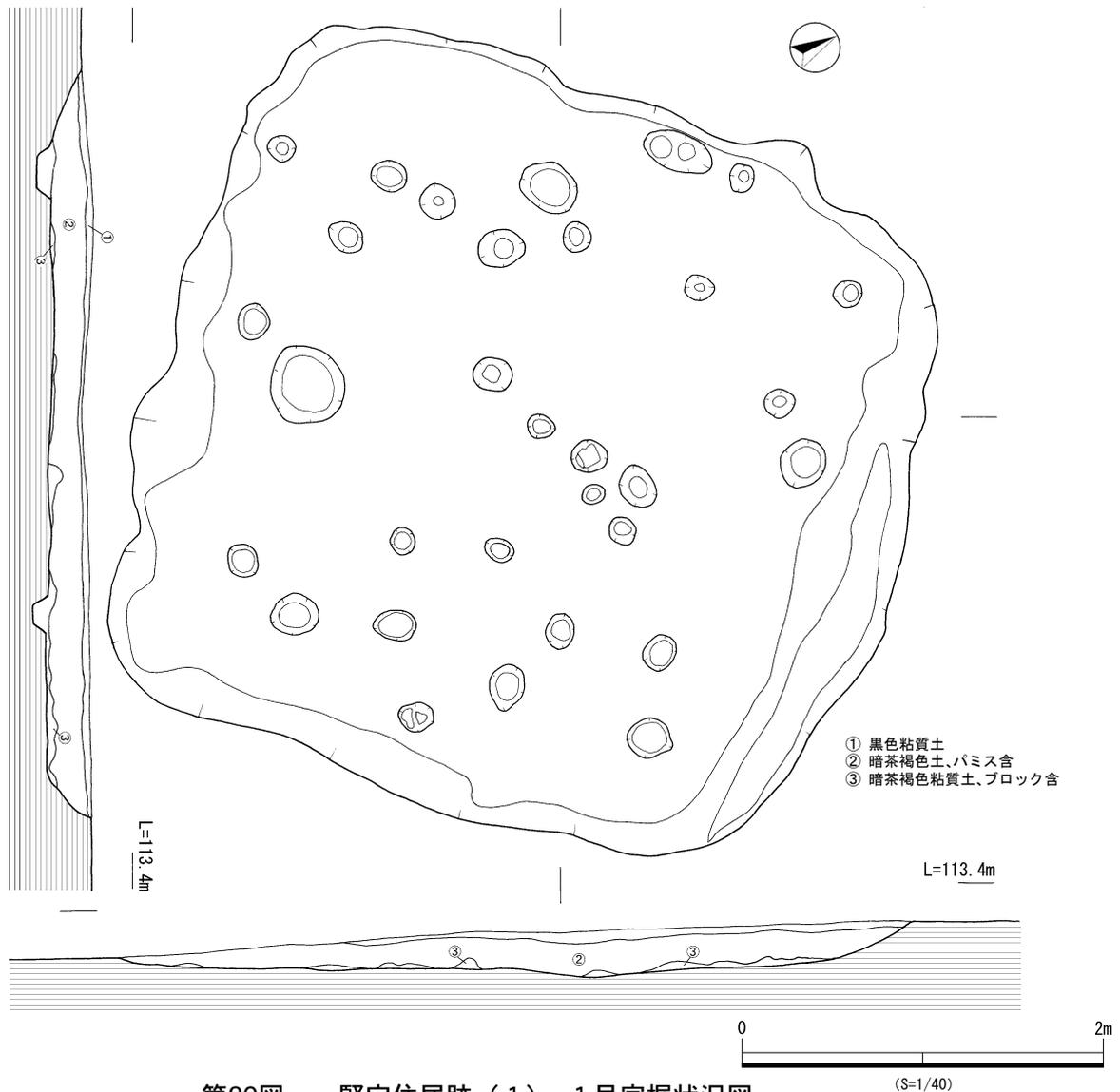
第19図 縄文時代後期竪穴住居跡位置図

パミスを含む褐色粘質土で、床面まで検出した段階で発見されていることから、住居に伴うものと判断している。柱については、4本柱、もしくは南西-北東の2本柱の支柱と、棟にわたされる支柱などといったプランが想定される。

埋土は、上面のほとんどが削平されているため詳細は不明だが、床面直上には暗茶褐色粘質土がブロック状に部分的に堆積した上にパミスを含む暗茶褐色土が堆積し、さらに黒色粘質土が堆積している状況である。限定的であるが、これらの堆積状況からは、本住居跡はおおむね自然堆積で埋没していったことが想定される。

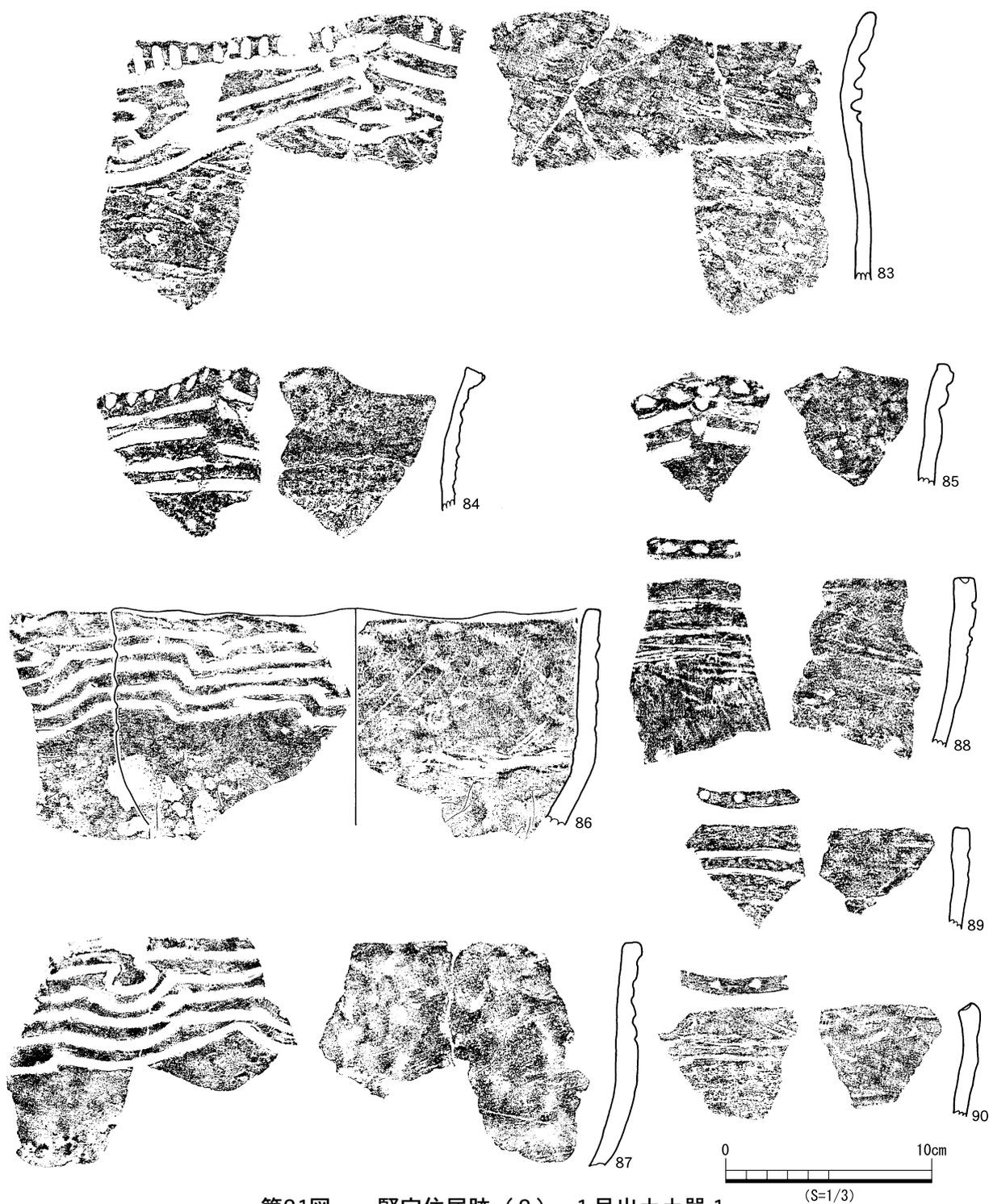
出土遺物は、土器や石器、土製品などであり、埋土の残存度合いがよくないにもかかわらず、数が多い。

土器は、凹線文土器の範疇に含まれる資料が多く出土しているほか、M字状の粘土紐を口縁部に貼り付けた無文土器の完形復元品も出土している。83は、整形がやや粗い資料である。口縁部内面には稜が形成されるが、これは、口縁部に緩やかな外反をもたせるための整形の結果の可能性もある。84は、波頂部の資料である。器壁が薄手で、成形・整形ともに丁寧に



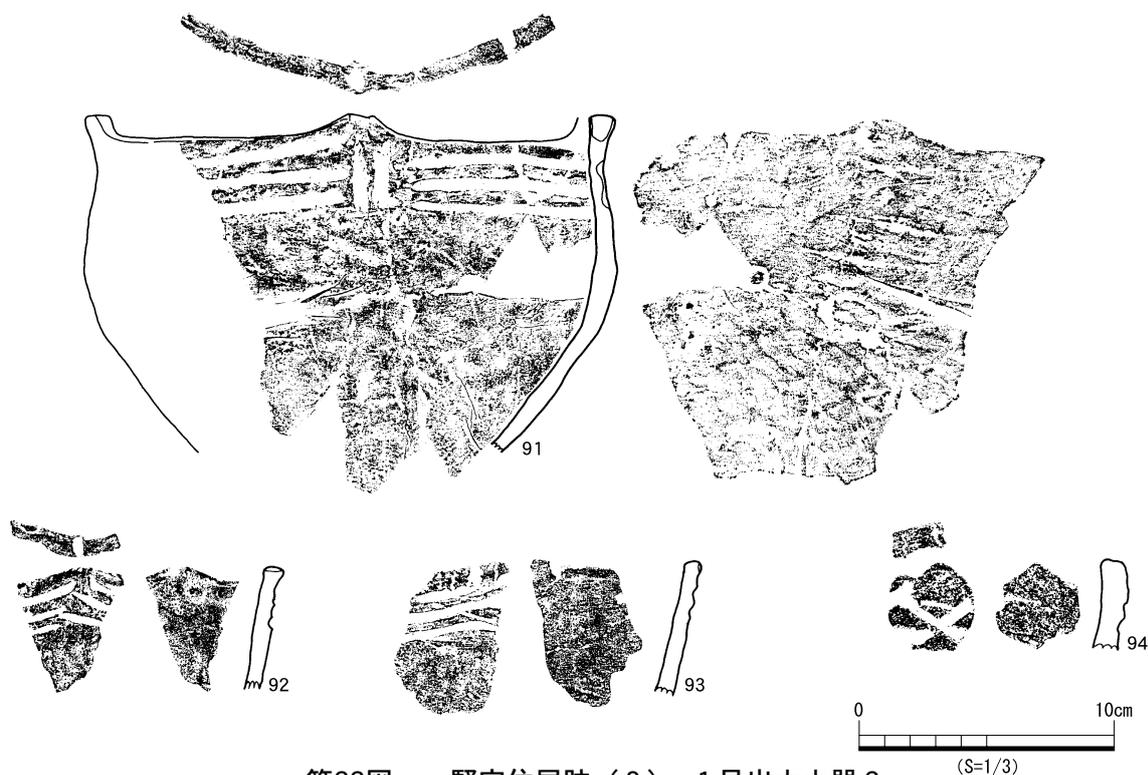
第20図 竪穴住居跡（1） 1号完掘状況図

作られている。文様を描く凹線は、断面U字だが、浅くやや不明瞭である。86は、復元口径約23.8cmの深鉢である。口縁部は、小波状を呈しているが、成形時の凹凸をそのまま利用したものと考えられる。平行沈線文を描く沈線は、断面U字で明瞭に施されているが、つながりがやや粗い。87は、86と同一個体の可能性が考えられる資料であるが、口唇部は平坦に仕上げていることを意識しているように見える。89は、口唇部断面が明確な稜のある角形に仕上げら



第21図 竪穴住居跡（2） 1号出土土器 1

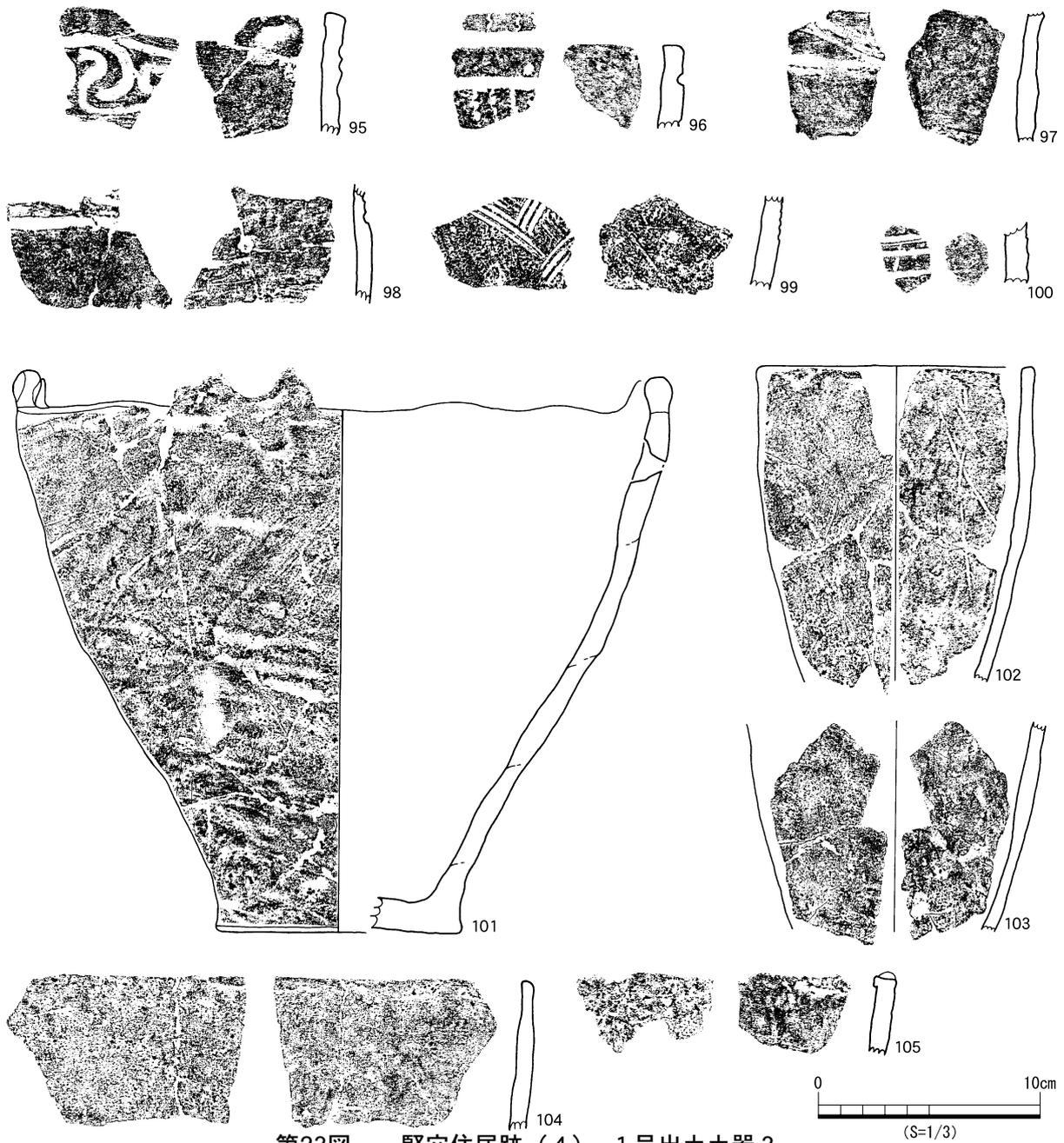
れているのが特徴的である。93は、波頂部付近の資料である。平板な破片であり、口径が大きい資料だとすれば、かなり薄手の深鉢となる。外面に比して内面の調整が丁寧である。90も、89と同様、口唇部形状に特徴のある資料である。また、外面の調整が、施文された部分がナデであるのに対し無文部分が粗いナデとなっている。調整の違いによって文様帯を強調させているのかも知れない。94は、山形の突起と格子目文が特徴的な資料であるが、残存部を利用した土器片加工品とも考えられる。91は、復元口径約20.8cmの深鉢である。整形や施文はやや粗い仕上げであるが、口縁部の突起を基点として口縁部に平行に展開する文様は、規則的である。96は、混和材の多さが目立つ資料である。沈線で区画帯を設け、そこに縦位の貝殻刺突文を規則的に施す。口唇部上面にも、同じ施文具で規則的に刺突文を施している。99は胴部片で、外面に観察される条痕は、早期の桑ノ丸式土器の鋸歯文のようにもみえるが異なる。101は、冒頭でも述べた完形復元品である。復元器高約25.3cm、復元口径は約29.7cm、復元底径は約11.0cmを測る。全体がいびつである。M字状の粘土紐は、3か所に貼り付けられていた可能性もある。口唇部は、内面側に稜を形成する一方で、外面側は丸く仕上げる断面形状をしているのが特徴的である。補修孔と思われる孔が内面側から開けられているが、確証はない。孔の周辺のみ劣化が進行している。102・103・104は、無文土器である。胎土や調整等の特徴から、同一個体であったと考えられる。大きさの割に薄手のつくりで、口唇部形状は略方形に仕上げることを意識しているようである。外面よりも内面の方が、丁寧な器面調整を施されている。この住居跡からは、組織痕をもつ底部破片も多く出土している。多くは底部外面をわずかに張り出させ、胴部は直線的に立ち上がる資料が多いが、110は、



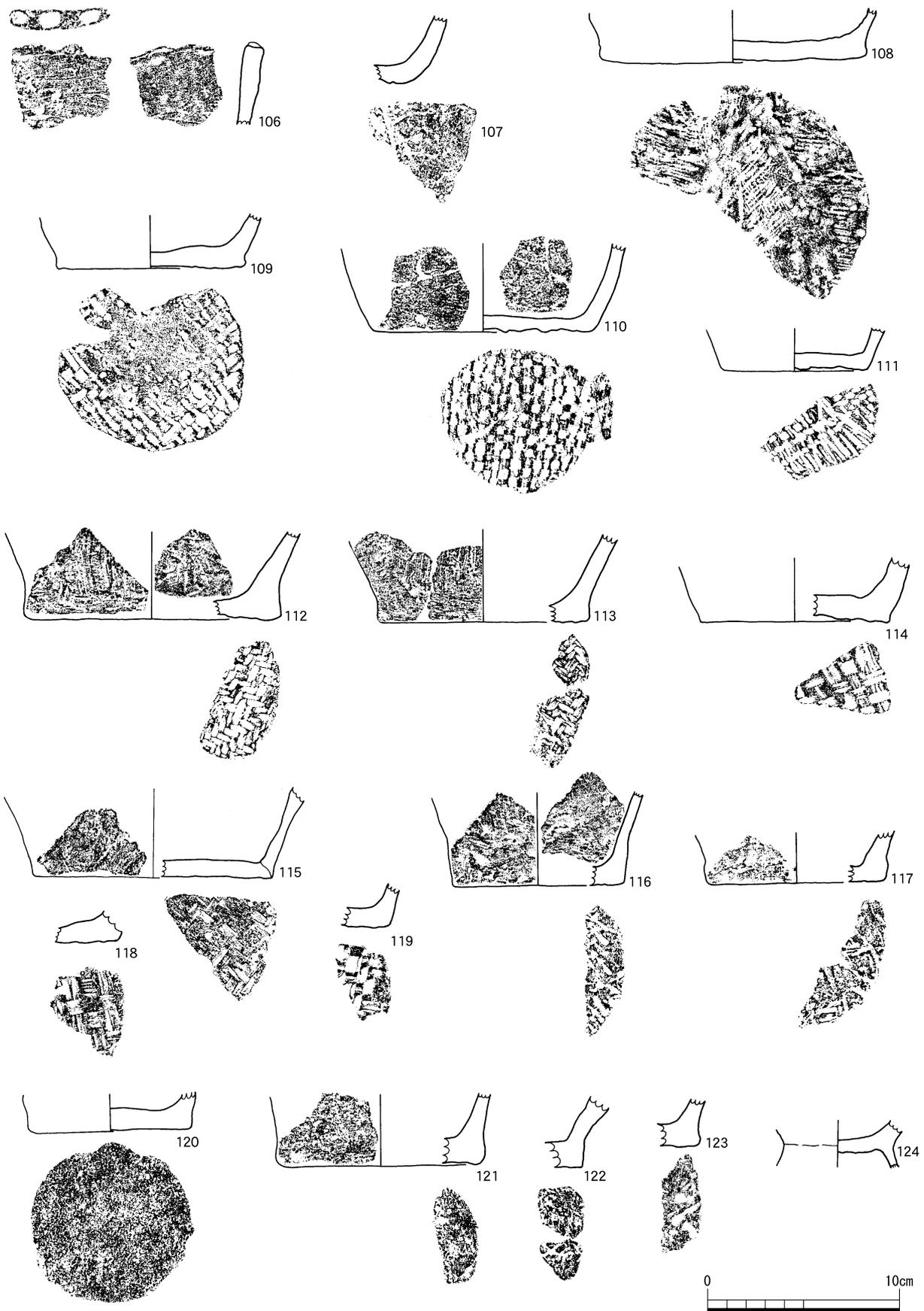
第22図 竪穴住居跡（3） 1号出土土器 2

底部円盤、胴部ともに器厚が薄い資料である。色調は内外面とも明淡褐色で、混和材の多さも目立つ。器形も、底部外端の張り出しがなく、胴部は緩やかに膨らみながら立ち上がるというもので、後期土器としては類例の少ない資料といえるのではないか。115は、全体的にやや薄手の資料である。接地面の組織痕は摩耗したように観察できる。組織痕については、108の接地面に型取られた組織痕が、他の資料と異なっている。この底部片は、底部円盤と胴部の器厚が著しく違っているのも特徴といえる。107は、土師器のような形状をしているが、胎土や焼成等の特徴から、縄文後期の土器と判断される資料である。

土製品では、土器片加工品が発見されている。素材となっている土器片は胴部や底部など様々で規則性はない。



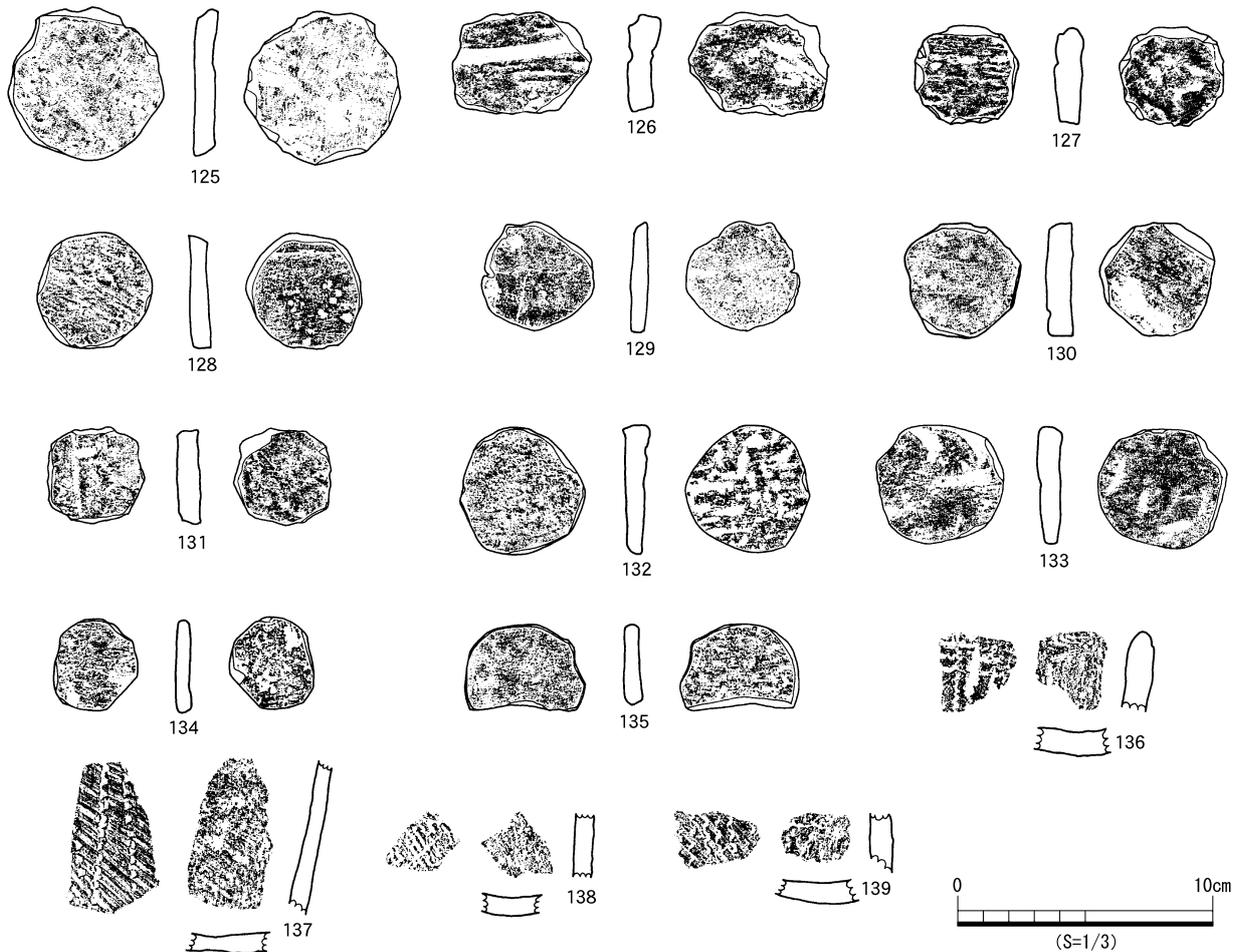
第23図 竪穴住居跡(4) 1号出土土器3



第24图 竖穴住居迹 (5) 1号出土土器 4

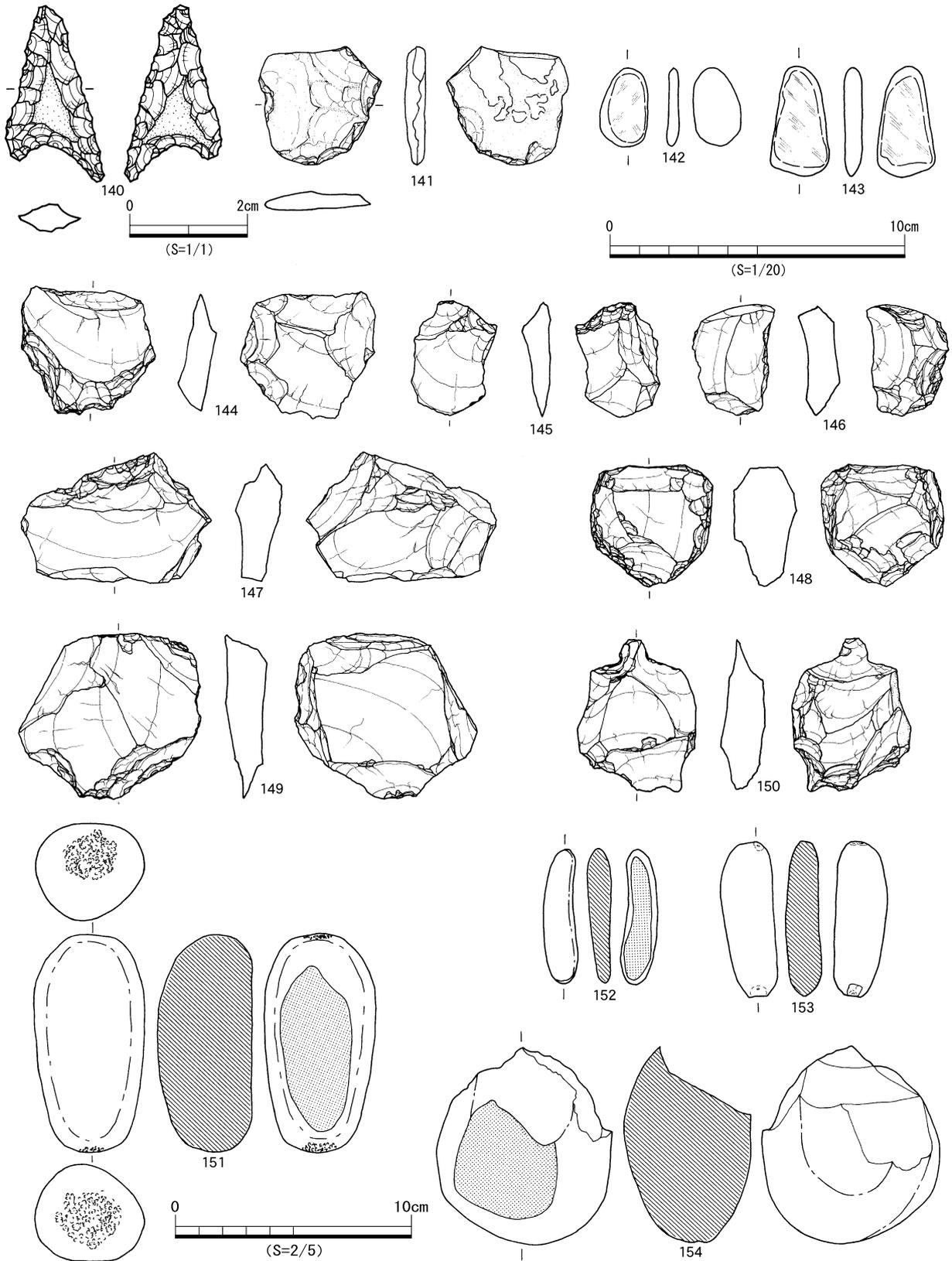
また、128や133のように周縁を丁寧に磨っている資料もあれば、129のように凸部のみに磨り加工が認められるものや、126のように整形痕は認められるものの、磨り加工をほとんど施していない資料もある。その中で、135は、半円形であるが弦の部分にも磨り加工が観察されることから、欠損品ではないと考えられる。136～139は、埋土中に混在して発見された早期の資料である。

140は、シルト岩の礫皮面を持つ鱗状剥片を用いた石鏃である。先端部を欠いているが、左脚は短く作っており、左右の釣り合いがとれてない。142・143・152は、偏平な小円礫に砥石様の平滑面を持つ石器である。同じような石器は包含層からも10点近く出土しており、その平滑面の特徴から砥石として分類した。142は、シルト岩であり、裏面は特によく擦れている。143は砂岩であり、表裏両面が擦れているほか、左端部も直線状になるまで擦れている。この三面ともに線状痕が残る。151は、安山岩の棒状礫を用いた敲石であり、上下両端が叩打によって潰れている。また、背面は平滑面となっており、磨石としても機能したようである。152は硬質砂岩であり、表裏両面が擦れている。この砥石については総括の章で考察したい。153は、砂岩の偏平な円礫を用いた石器製作用の敲石であり、上下両端には間接打撃のパンチとして用いられた際にはじけた小剥離と敲打痕が見られ、偏平な面にはチッピングの際の鼠歯状痕が多数残る。154は、砂岩の垂角礫を用いた磨石である。各平坦



第25図 竪穴住居跡（6） 1号出土石器5

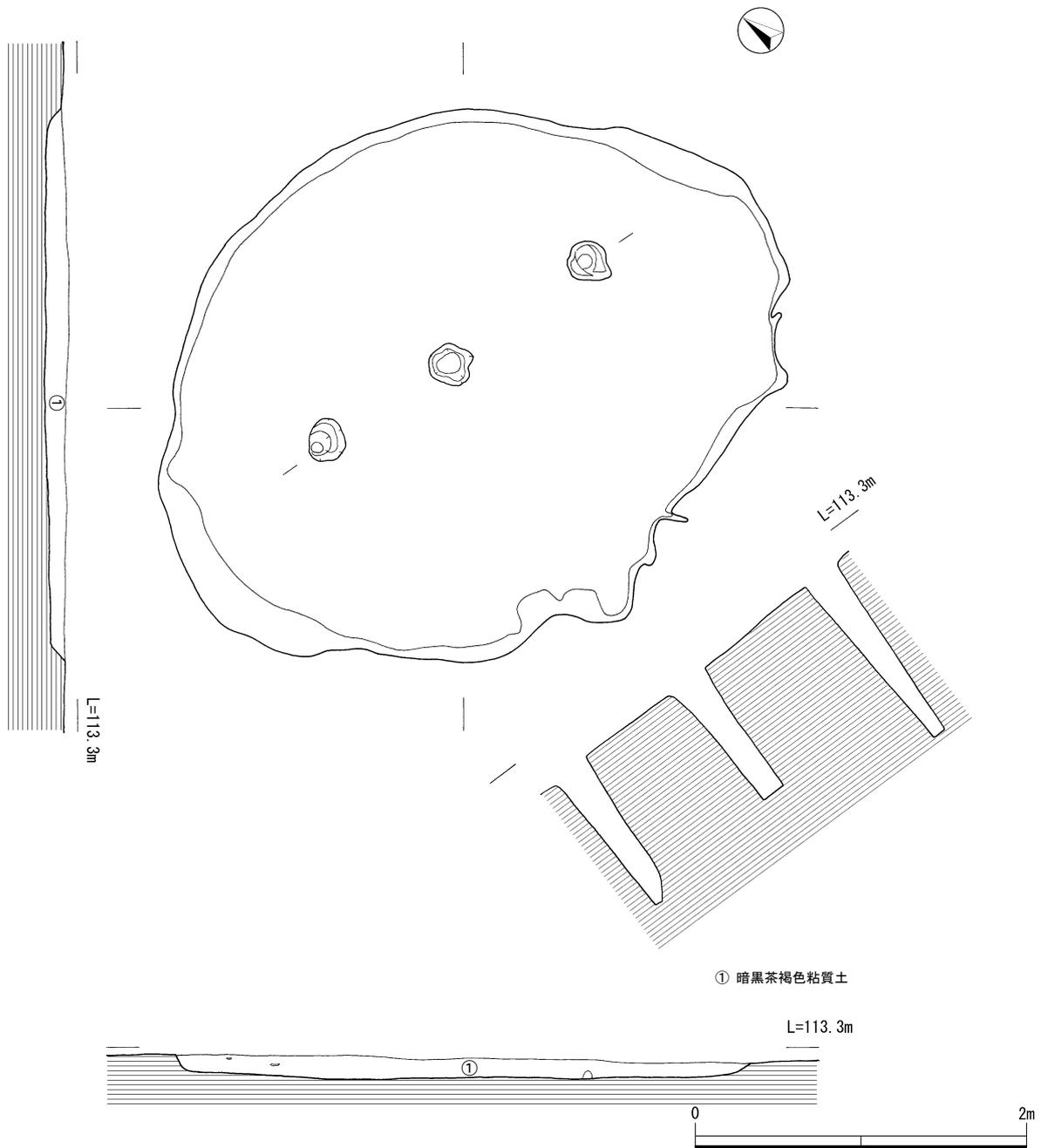
面はなめらかに擦れている。また、被熱の痕跡も顕著であり、全体に赤化しているほか、割れ面も熱破碎によるものである。



第26図 竪穴住居跡（7） 1号出土石器6

竪穴住居跡 2号は、B-12区のⅢa層上面で発見された。竪穴住居跡 1号と同じく、周囲の遺物出土状況から、本来の構築面は調査時の検出面より50cmほど高かった可能性がある。平面プランは長径約4.2mの楕円形で、南側の壁面がやや不安定である。床面には、平均して深さ約1mにも達する柱穴が3基、長軸方向に沿って残っているが、他にはピット等は確認されていない。柱穴の埋土は、竪穴住居跡 1号と同じくパミスを含む褐色粘質土である。埋土は、暗黒茶褐色粘質土層 1枚しか残存しておらず詳細は不明である。

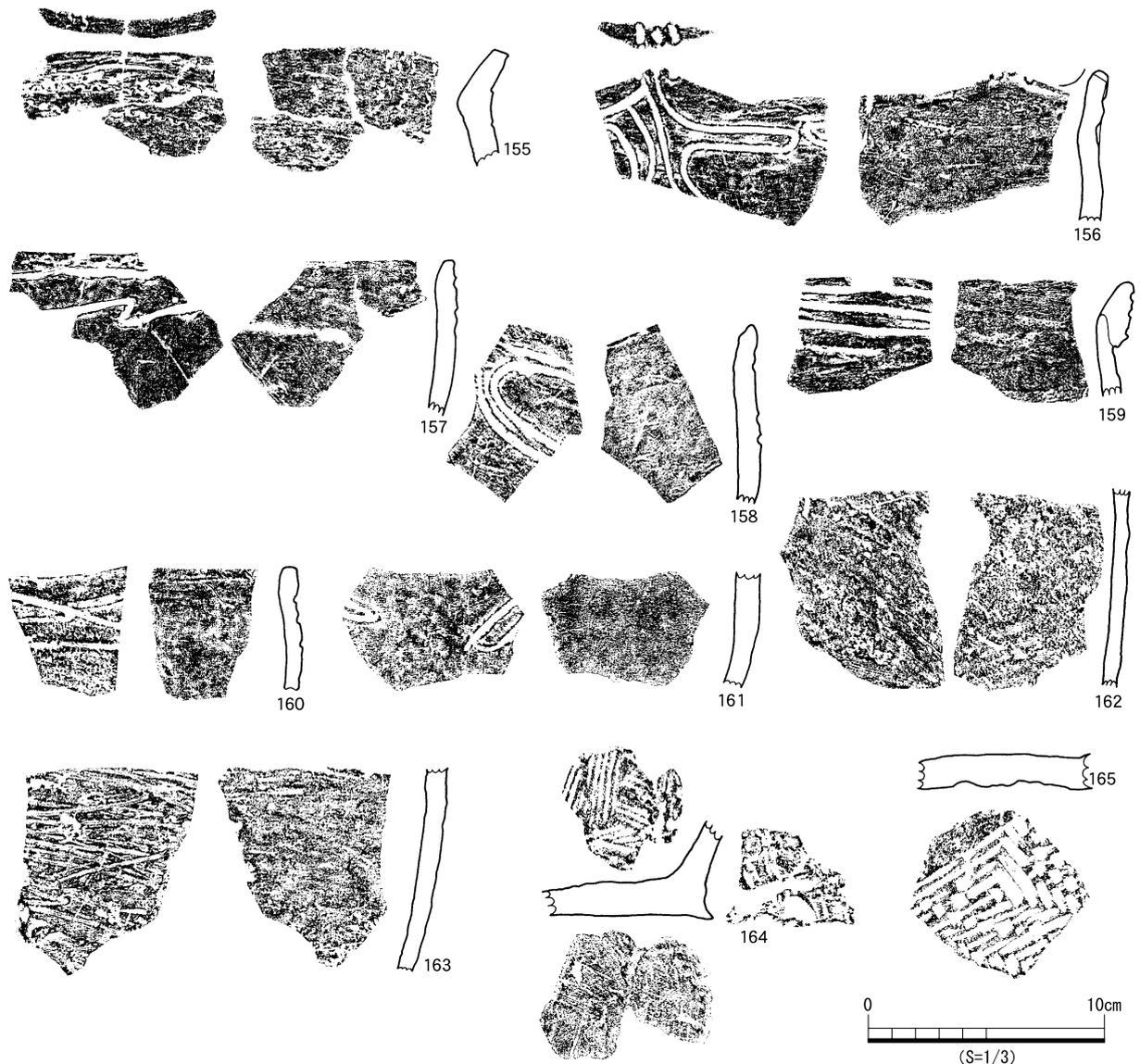
出土遺物は土器と土製品である。土器は、指宿式土器の範疇に含まれると思われる資料がほとんどである。155は、口縁部が、く字状に屈曲する資料で、屈曲部周辺に横位の貝殻刺突文が、また口縁部内面の屈曲部より上位に、縦位の貝殻刺突文が施文される。口縁部内面



第27図 竪穴住居跡 (8) 2号完堀状況図

(S=1/40)

の施文に対応するような口縁部形状の変化は認められない。156は、肥厚はしないものの、口縁部内面に稜を形成し直線的に外反する口縁部資料である。文様は、左右非対称で曲線的モチーフの幾何学文を施文している。沈線は、細いが断面U字状で明瞭である。157は、平口縁部分と思われる。口縁内面に稜を形成するが、外反は口縁端部でわずかにみられるだけであり、肥厚もしていない。文様は、雷文的なモチーフを簡素に施文している。159は、口縁部外面を肥厚させ、その部分に平行沈線文を施文している。混和材の多さが目立つ資料である。165は、底部円盤資料である。組織痕があるが、上げ底状の器形である。接地面には、白色土も不規則に付着している。166は、壺形土器の胴部と考えられる資料である。文様等がないため詳細は不明だが、内外面とも丁寧なナデ調整が施されており、肩部と破片下端の割れ面には、煤が付着している。167は、周縁の凸部のみが軽く磨られている。168は、周縁全体に軽い磨りが観察される。169は、混在して発見された早期の資料である。

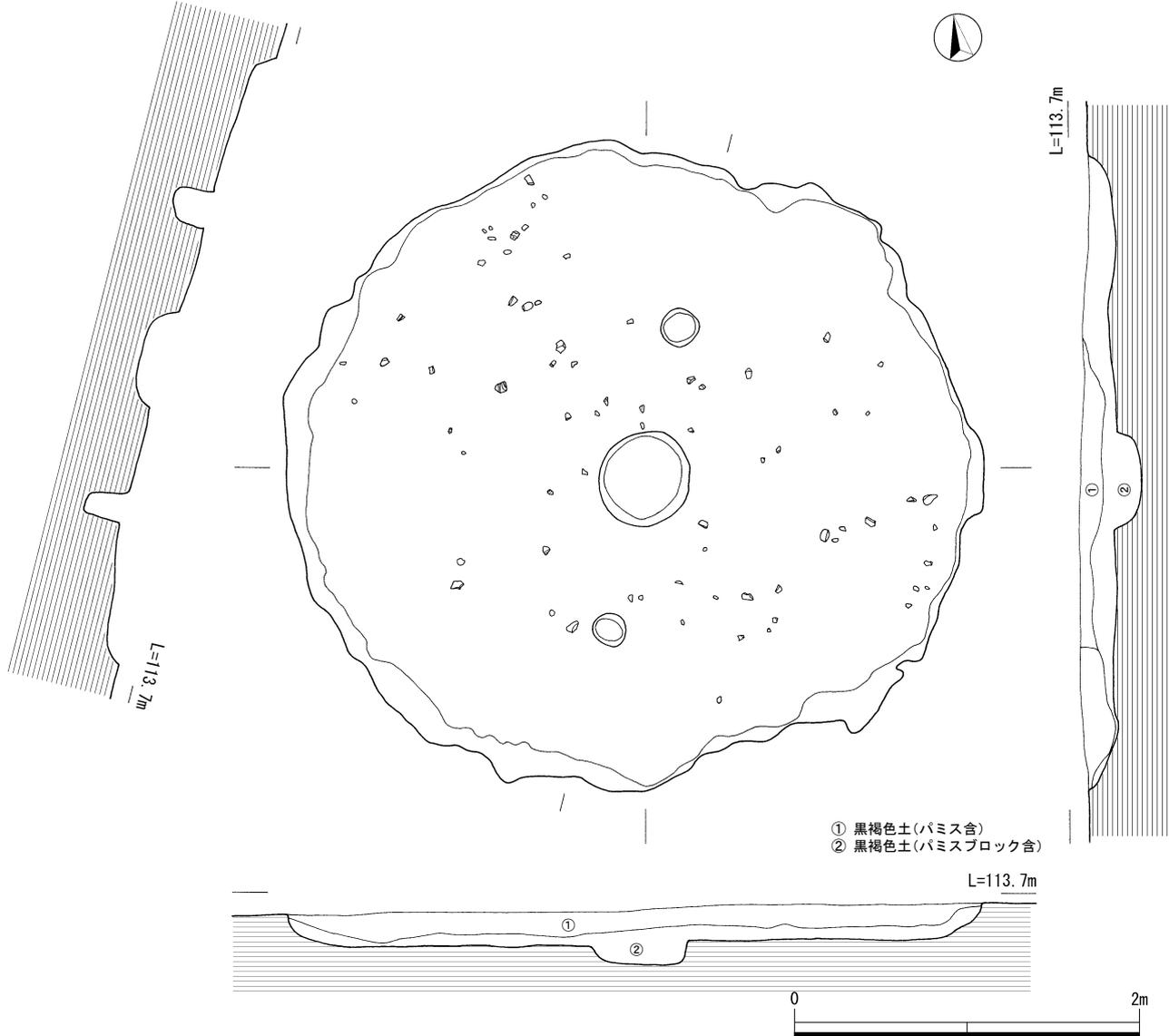


第28図 竪穴住居跡（9） 2号出土土器 1



第29図 竪穴住居跡（10） 2号出土遺物2

竪穴住居跡3号は、C-6区のⅢa層上面で発見された。他の住居跡と同じく、周囲の遺物出土状況から、本来の構築面は調査時の検出面より50cmほど高かった可能性がある。平面プランは、直径約4.0mの略円形であるが、壁面は全体的にやや不安定である。床面には、中央にフライパン状の浅い土坑があり、その南北両脇に、ほぼ同じ深さのピットが1基ずつ

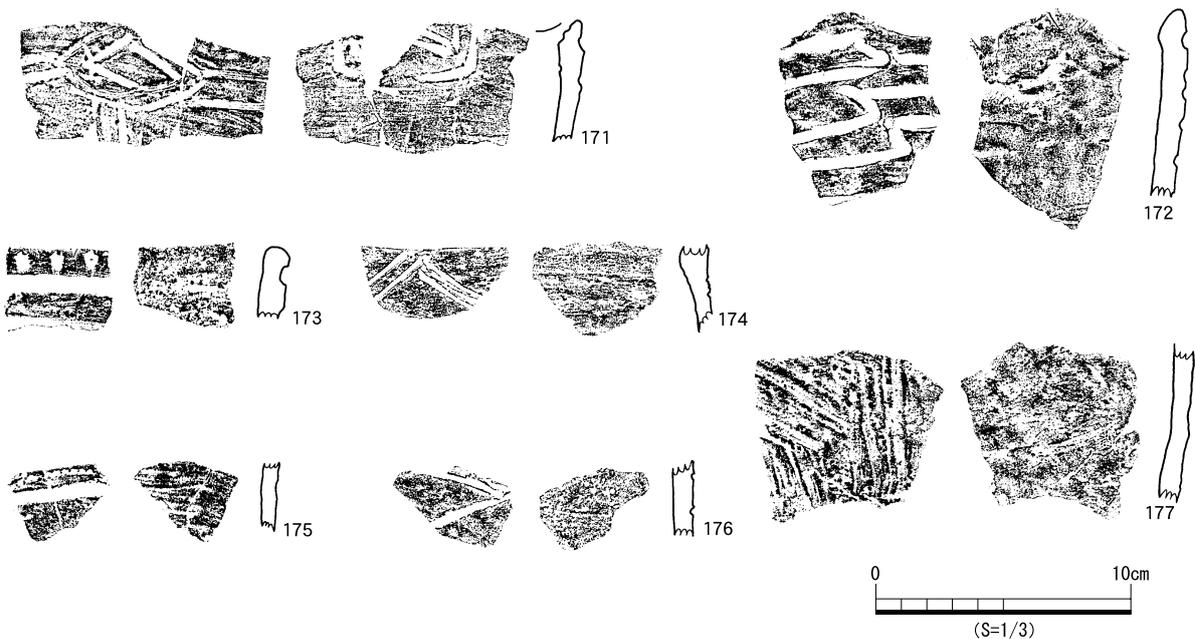


第30図 竪穴住居跡（11） 3号出土状況図

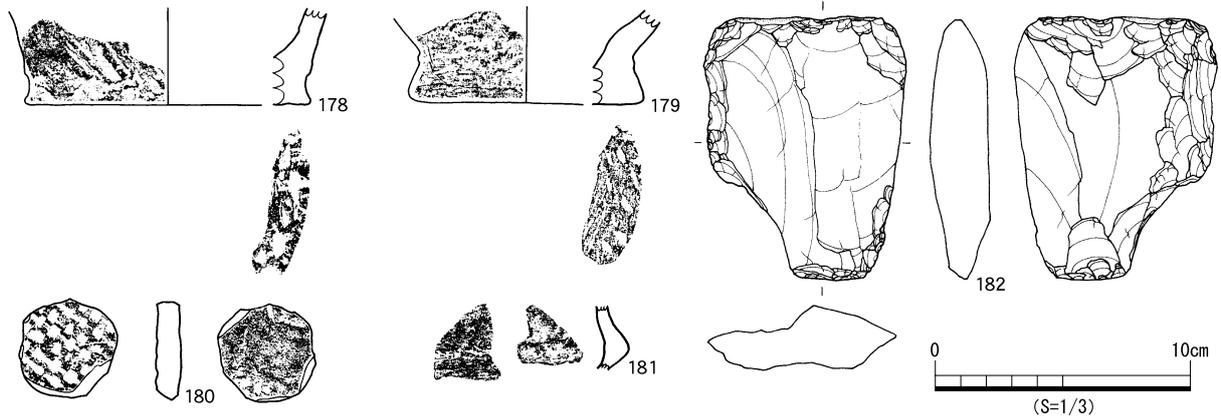
掘られている。他にはピット等は確認されていない。

埋土は、2枚が確認されている。床面直上には、パミスのブロックを含む黒褐色土層が堆積し、その上により細かいパミスを含みやや暗い黒褐色土層がほぼ安定して堆積している状況であるが、南隅部には、やや暗い黒褐色土層でなくパミスを含まない黒色土が堆積している部分があることから、埋没過程の復元には注意を要する。

出土遺物は、判別の難しい小片が多く凶化できたものは第31・32図にある程度で、前述の2軒の住居跡とは状況がやや異なる。土器は、わずかに観察される文様などの特徴から、指宿式土器の範疇に含まれる資料が目立つ。171は、波頂部の資料である。口縁部内面に明瞭な稜が形成されるが、それに伴う肥厚や屈曲はみられない。残存部に限るが、文様は線対称的に展開するモチーフの幾何学文を施文している。外面には煤が付着している。172も、波頂部の資料であるが、連続した2つの隆起部でひとつの波頂部を形成している可能性がある。口縁部はわずかに肥厚するが、内面の稜は形成されていないようで、断面図にあるのは波頂部の成形時にはみだしたと考えられる胎土の盛り上がりである。178は、粗い整形の底部資料で、外面の一部と底部外面はケズリ調整が施されている。底部接地面には組織痕のような凹点が観察されるが、ケズリ調整で仕上げられているため、詳細は不明である。180の土器片加工品は、周縁の上下端1/3程度ずつが磨られている。181は、算盤玉状に張る胴部片と想定しているが、ごく小片のため詳細は不明である。182は、粘板岩の節理面を残す剥片を素材とする大型楔形石器である。上端は平坦な礫皮面を残し、そこに加えられた加撃によって表裏両面に剥離が残り、下端は対象物からの反力によってつぶれと小剥離が見られる。この石器は、包含層からも多数検出しており、この遺跡の石器群の特徴となっている。この石器についても、総括の章で考察したい。

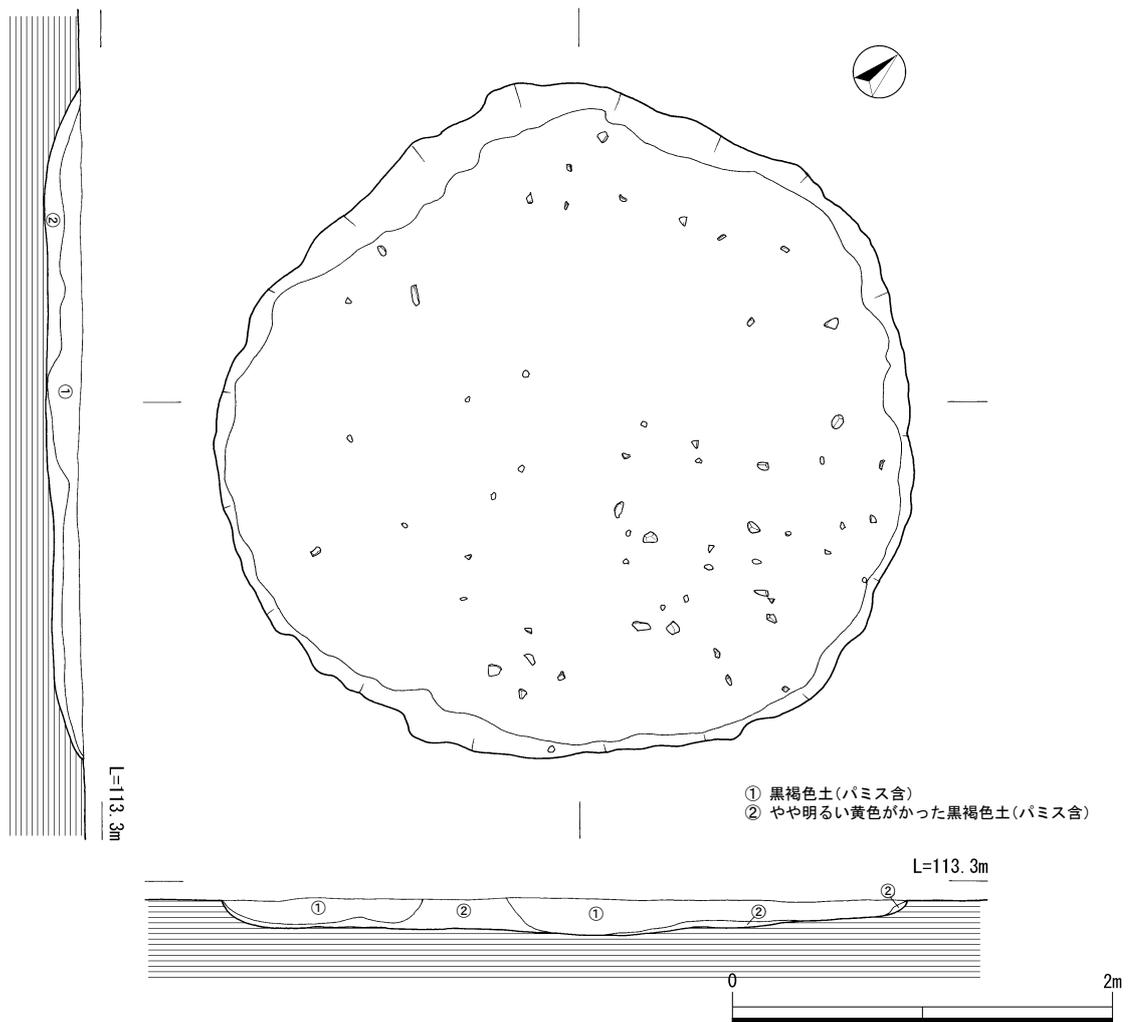


第31図 竪穴住居跡(12) 3号出土土器 1



第32図 竪穴住居跡（13） 3号出土遺物2

竪穴住居跡4号は、B-11区のⅢa層で発見された。他の住居跡と同じく残存状況はよくない。平面プランは、長径約3.6mの略円形で、壁面はやや不安定である。床面には、中央に平面形が略長方形で断面形がろうと状の小土坑があり、その南北両脇に、ほぼ同じ深さのやや細めのピットが1基ずつ掘られている。他にはピット等は確認されていない。

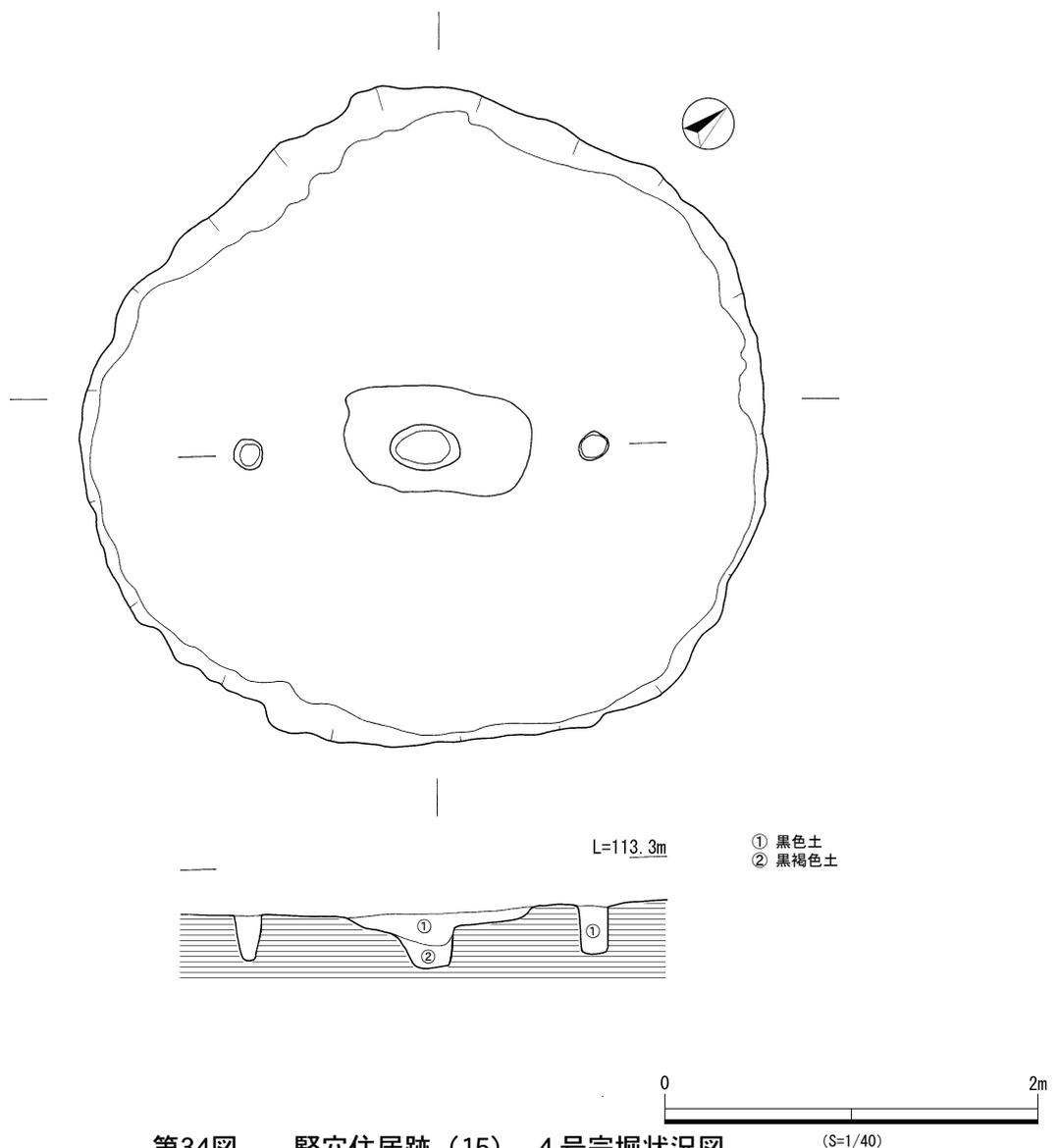


第33図 竪穴住居跡（14） 4号出土状況図

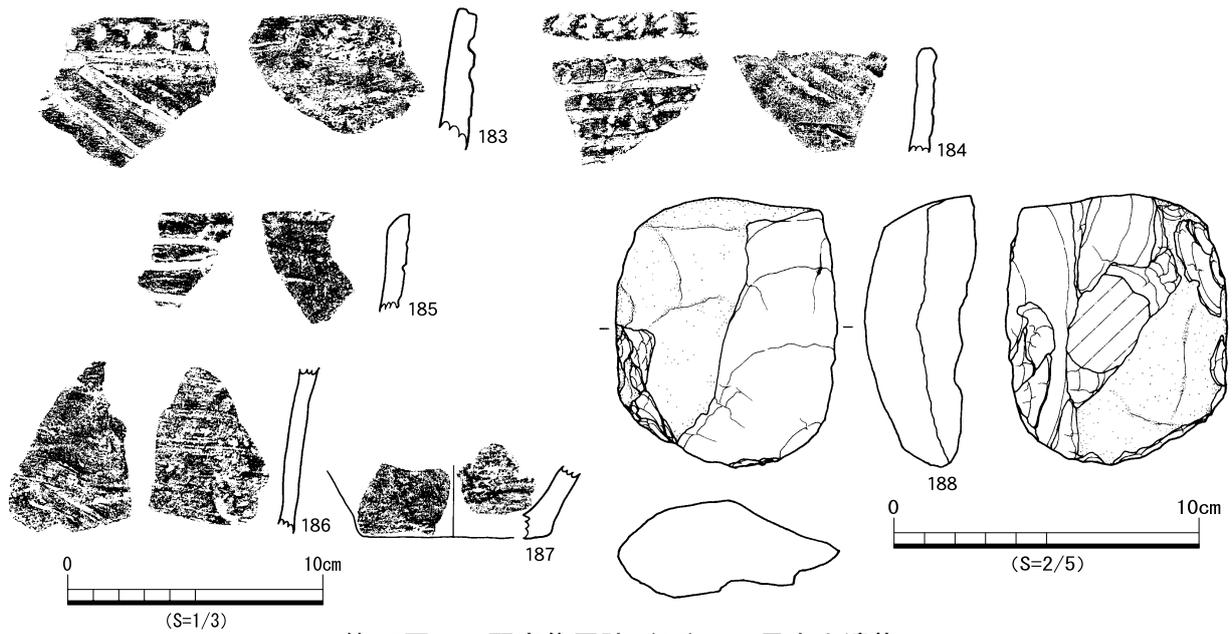
埋土は、2枚が確認されている。床面直上にはパミスを含むやや明るい黄色がかった黒褐色土層が薄く堆積し、その上にパミスを含む黒褐色土層が堆積するが、どちらの埋土もやや不安定な堆積状況を示していることから、埋没過程の復元には注意を要する。

出土遺物は、竪穴住居跡3号と同様小片が多く、図化できるものは第35図にある程度で、指宿式土器の範疇に含まれると考えられる資料を確認できた。183は、混和材に小礫が目立つ。断面方形の浅い沈線で幾何学文を施文しているが、丁寧な仕上げである。184は、並行沈線文の上から縦位の貝殻刺突文を無造作に重ねる、特徴的な文様を施文している。口唇部上端の連続刻目は、二枚貝の肋を利用している。なお、この住居跡からは、土器片加工品が発見されなかった。

石器も種類は少なかったが、削器と、使用痕のある剥片が2点発見されている。削器は、石材がホルンフェルスで、自然面が残る剥片の縁辺部を刃部として使用している。

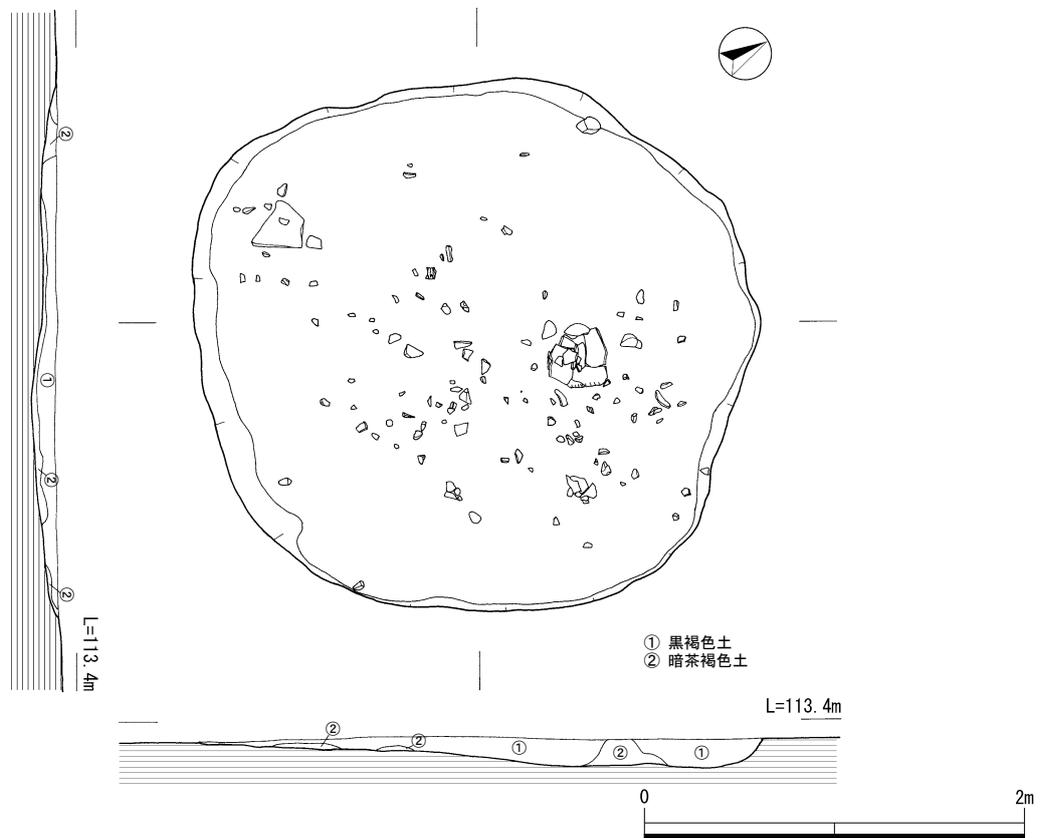


第34図 竪穴住居跡(15) 4号完掘状況図



第35図 竪穴住居跡（16） 4号出土遺物

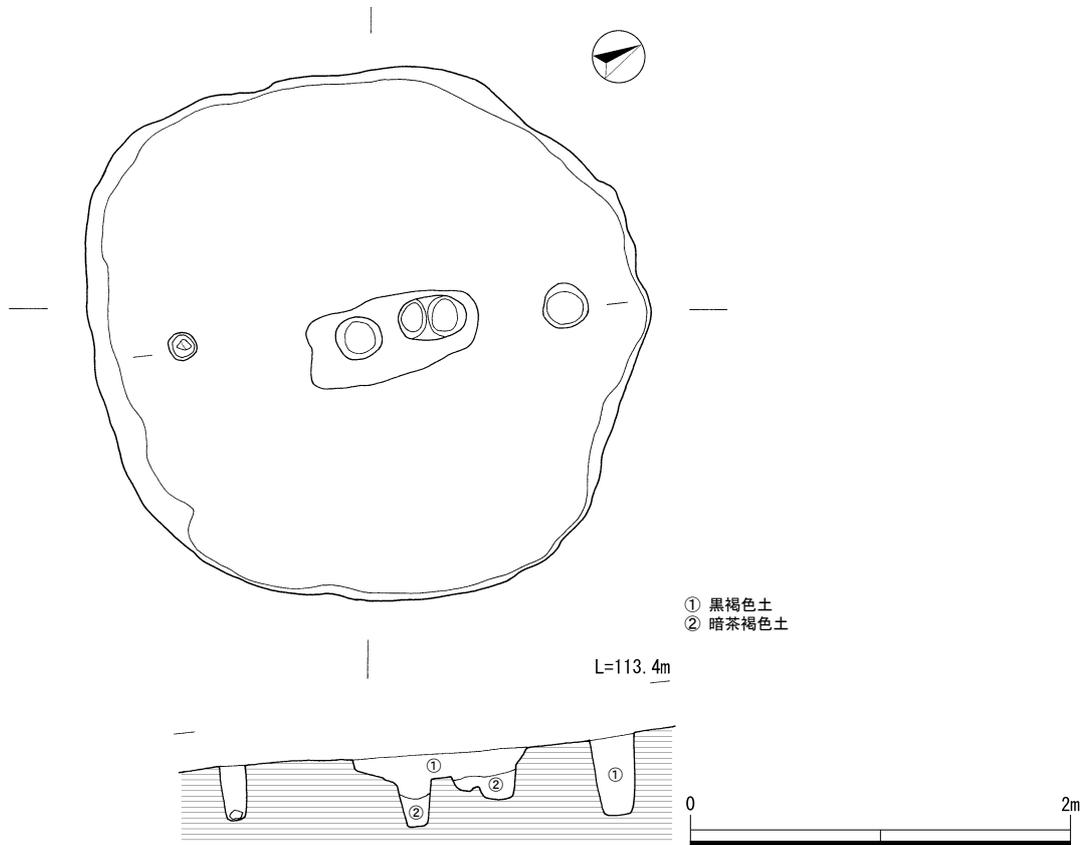
竪穴住居跡5号は、C-8・9区のⅢa層から発見された。他の住居跡と比べても、残存状況はよくない。平面プランは、直径約3.0mの略円形で、壁面は比較的安定している。床面には中央に平面形が略長方形で内部底面に長軸方向に3基の小ピットが附属する小土坑があり、その南北両脇にほぼ同じ深さのピットが1基ずつ掘られている。他にはピット等は確認されていない。



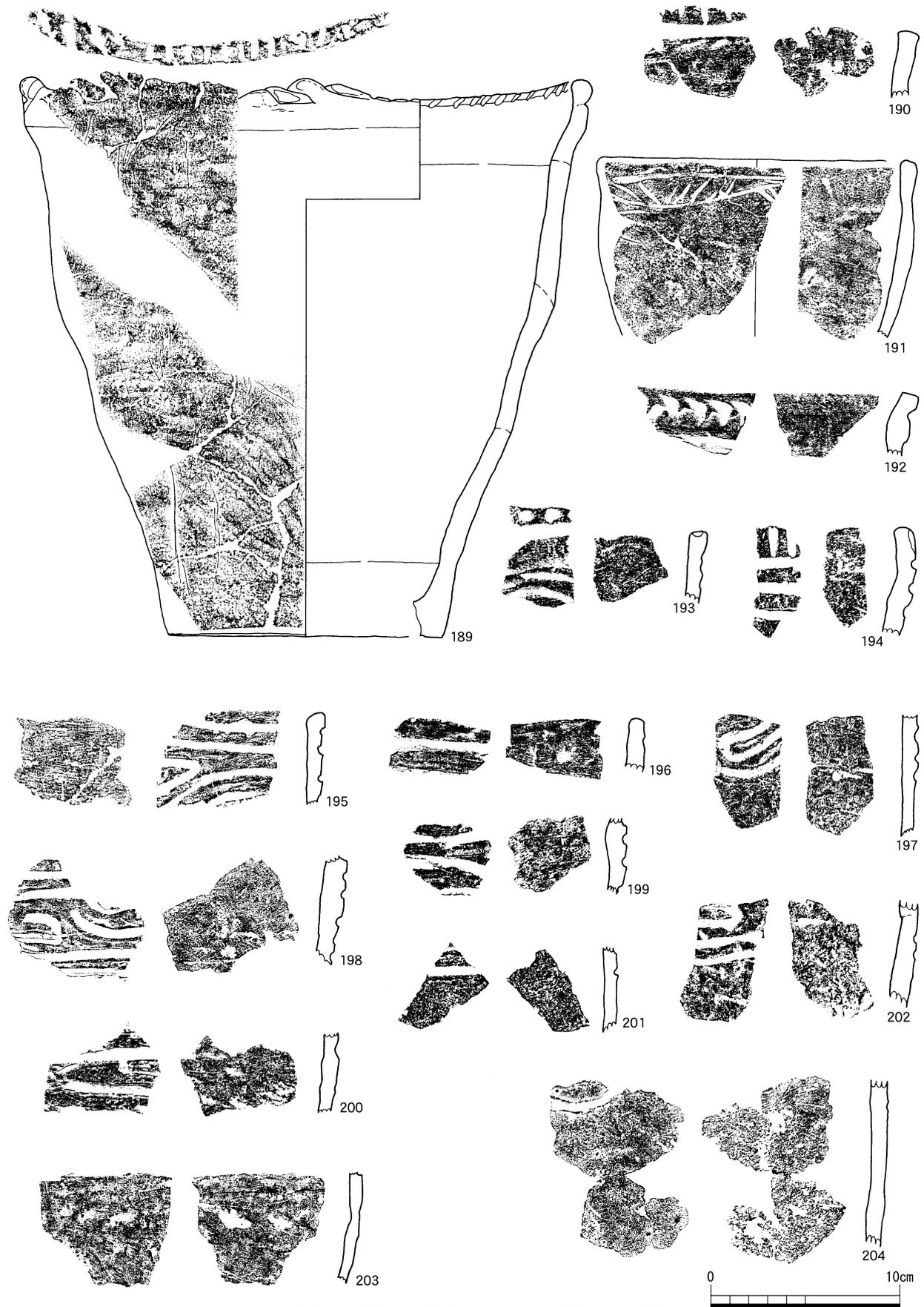
第36図 竪穴住居跡（17） 5号出土状況図

埋土は、2枚が確認されている。床面直上には黒褐色土層が堆積し、その上に黒色土層が堆積するが、どちらも不安定な堆積状況を呈しており、他の2軒の円形プランの住居跡と同様の堆積状況である。

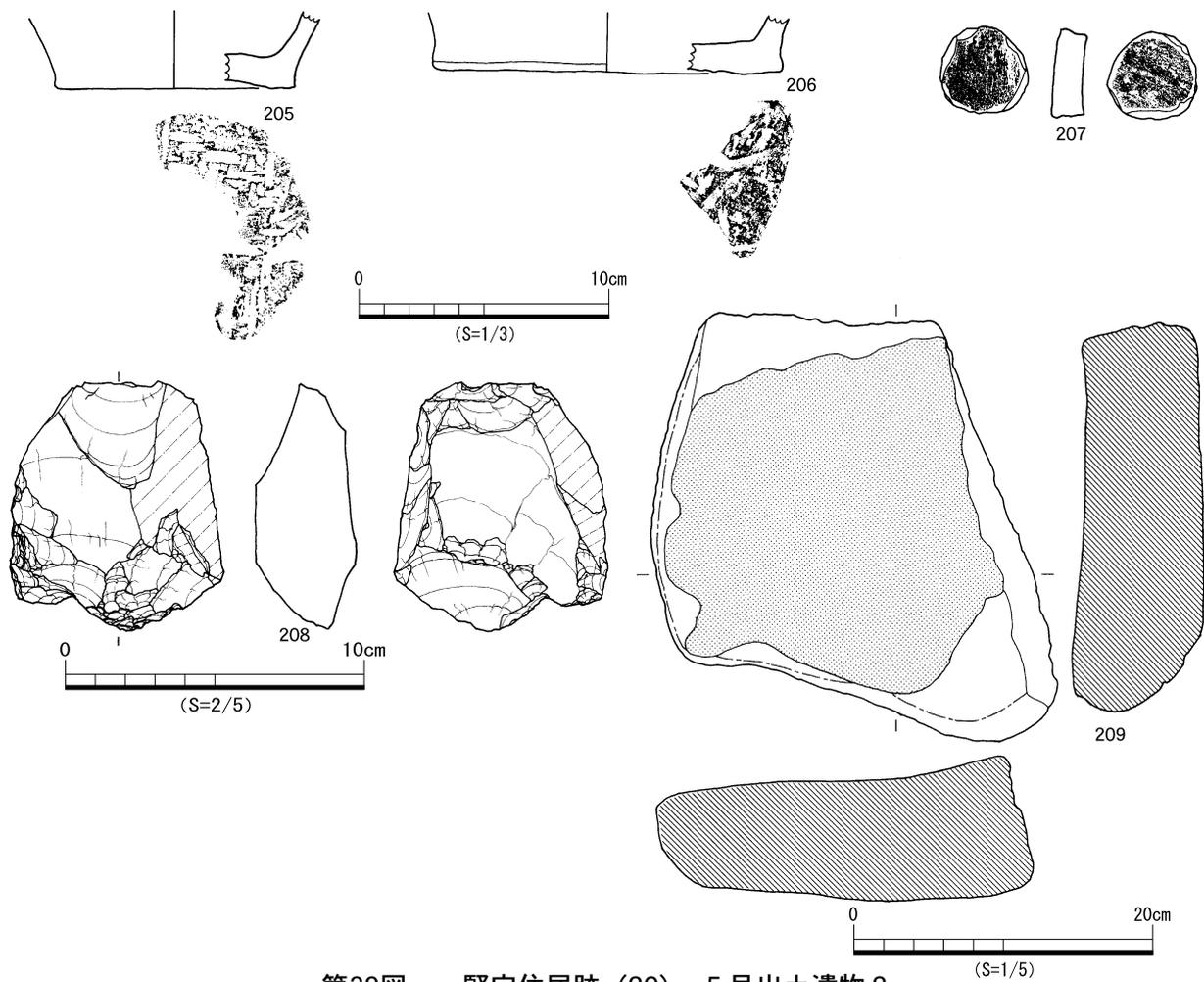
出土遺物は、完形復元できた土器や石皿などが発見され、他の円形プランの住居跡とは異なる状況であった。189は、成形はやや雑なつくりの土器であるが、口唇部にM字状の粘土紐貼付文をもち、口縁部をやや外側に張り出させて文様帯のような部分を作り出している。器面は、外面よりも内面が丁寧に調整されていて、工具が異なる可能性もある。混和材の多さが目立つ。住居内の中央やや北側、小土坑とピットの間で発見された。191は、波頂部がない資料と考えられる。鋸歯文を想定したかのような簡素な文様が、口縁部に施文されている。口縁部には、肥厚や外反等の造作は確認されない。その他の土器片は、観察される文様などから凹線文土器の範疇に含まれると考えられる。いずれも安定した断面U字状の凹線で幾何学的な文様モチーフを施文している。器面調整もおおむね丁寧に施されているが、202は内面調整がやや粗い。197・201は、胎土内の混和材の多さが目立つ。203は、内面がややミガキ状を呈する調整で仕上げられている。195・204～206は、それぞれ口縁部、胴部及び底部であり、胎土の雰囲気や色調が類似するものの接合しなかったため、個別に掲載している。同一個体の可能性も考えられる。205・206の底部は、胎土等が類似する一方で組織痕と断面形状に若干の違いが認められる。その他、あまり磨られていないものの円盤形土製品も発見されている。石器は、整形された大形の石皿の欠損品が、住居内の南西隅から発見されている。砂岩製で、使用面は、あまり窪まずにほぼ平坦な状態の面が1面ある。



第37図 竪穴住居跡（18） 5号完掘状況図



第38图 竖穴住居跡 (19) 5号出土土器 1

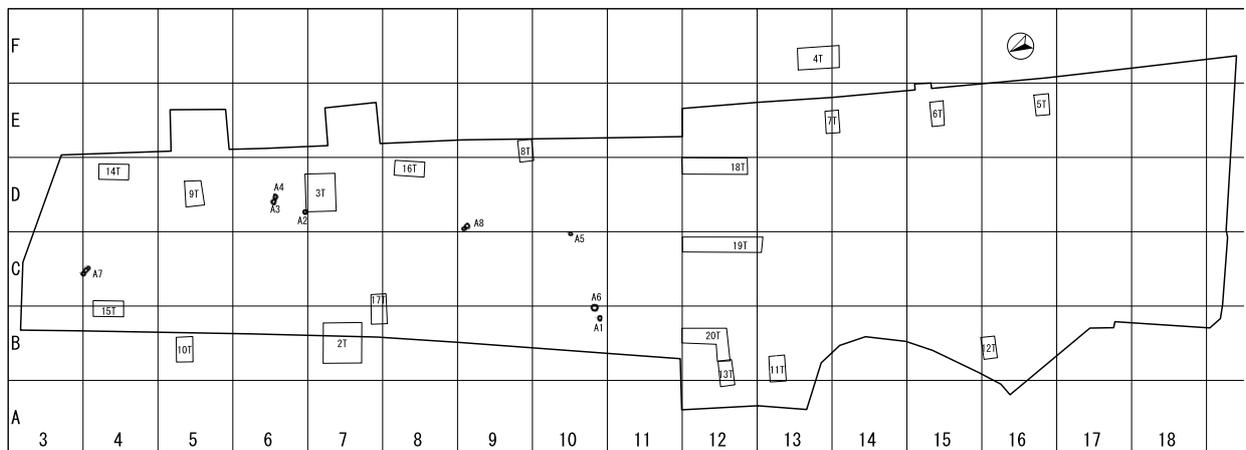


第39図 竪穴住居跡 (20) 5号出土遺物 2

土坑A (第40～48図)

調査区のほぼ全域にわたって発見されている。竪穴住居跡と同様に上部の削平が著しいため一見浅い土坑が多いが、中には、深い土坑も存在する。

まず、遺物との関連性が高いと想定された土坑から説明したい。

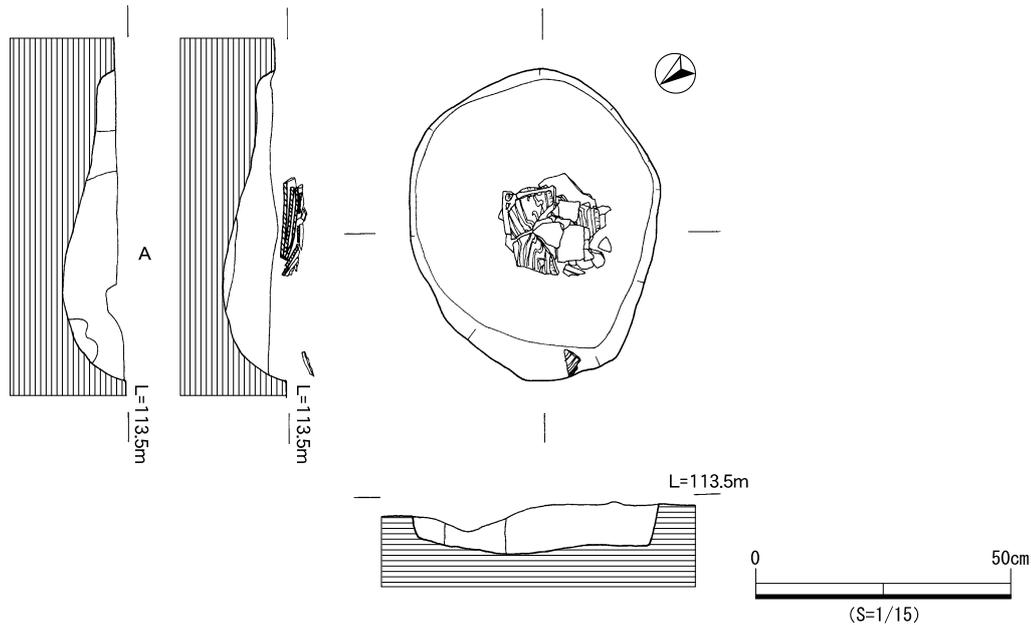


第40図 土坑A位置図

土坑A 1号は、B-10区で発見された。平面プランは、長径0.6m、短径0.5mの楕円形で、北西側がやや深くなっている。埋土は、Ⅱ層土とⅢa層土が混在して堆積している。それぞれがブロック状にまとまっていてよく混ざり合っていないことから、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は、ある程度復元できた土器(210)が1点、床面から若干浮いた深さで口縁部を南側に向けた横倒しの状態で発見された。潰れた状態で、底部等の破片もなく完形品ではないことから、埋設されたものではないと考えられる。

A 1号

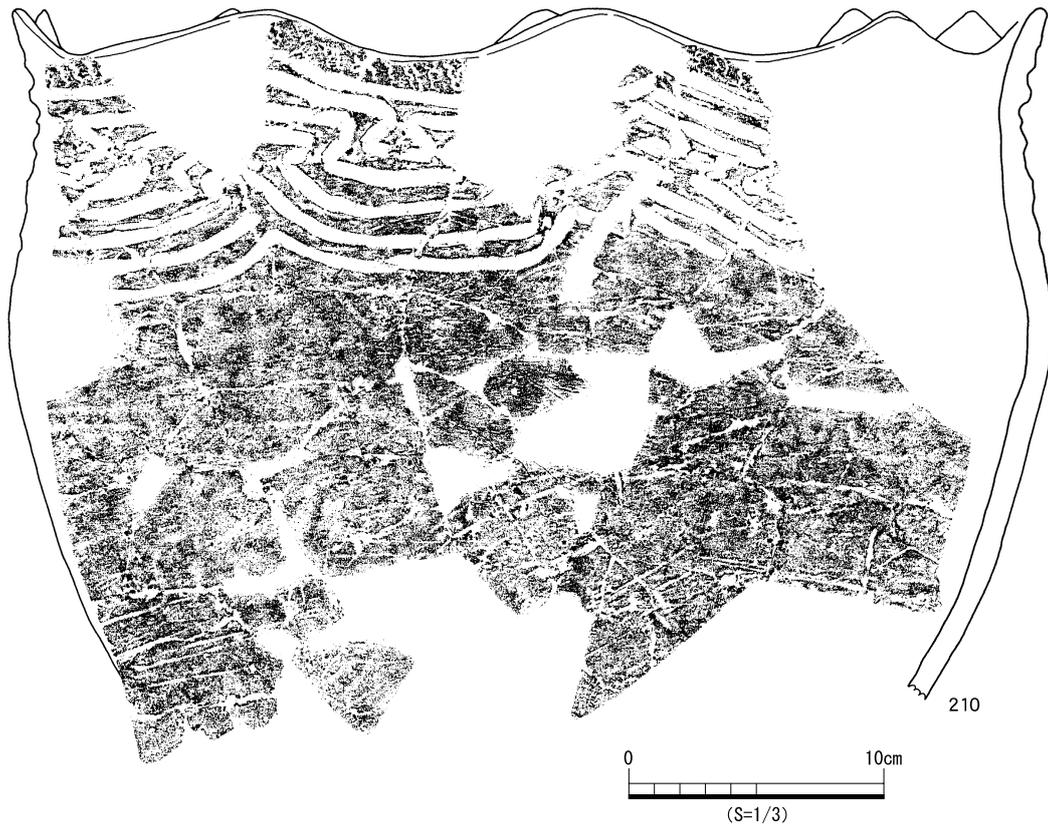


第41図 土坑A(1) 1号出土状況図

210は、復元胴部径が約44.6cmの凹線文系土器の深鉢である。わずかに膨らむ胴部から一端緩くすぼまり、隆起部分が複数作出された外反する口縁部にいたる器形となっている。器壁の厚みはほぼ均一で変化はない。器面調整は、粗いナデで、横方向を基調とするがやや不規則である。口縁部の隆起部分の形状については、波状を想定しているが、破片が揃っていないため台形状である可能性もある。凹線文については、凹線を引く動きはやや雑で不安定だが、ほぼ一定の間隔で施文し左右対称を基本に文様展開しているなど、本遺跡出土の土器のなかでは丁寧な施文がなされている。

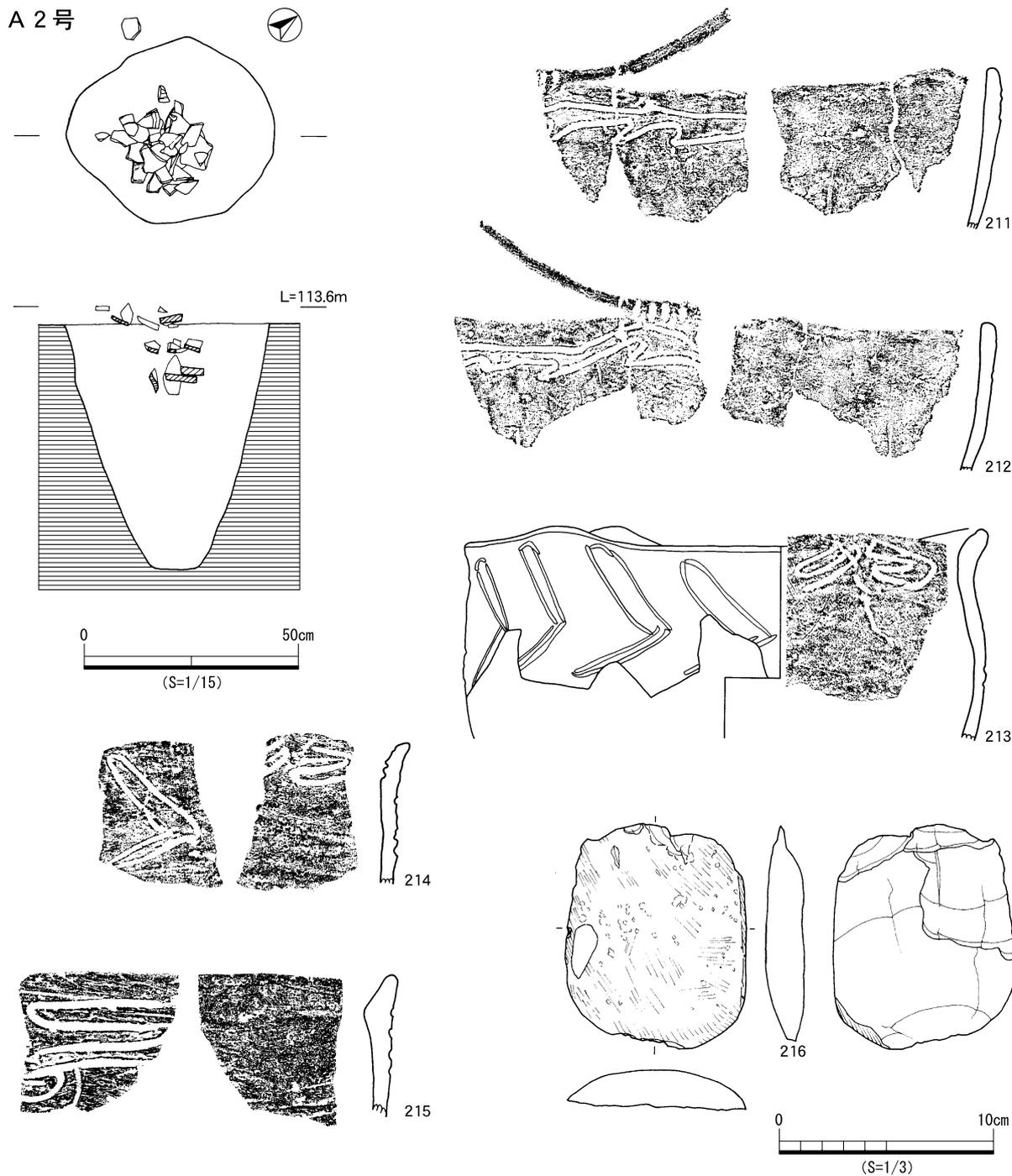
土坑A 2号は、D-6区で発見された。平面プランがほぼ円形で、断面が円錐形を呈し、深さは検出面から約60cmある、本遺跡の土坑のなかでは深い土坑である。埋土はやや硬質の黒色土1枚である。

遺物は、破片ばかりが、埋土の上位で土坑の中心部から上下にやや分散して発見されている。ほとんど接合できなかったが、特徴のわかる資料を6点図化した。土器片は、いずれも指宿式土器の範疇に含まれると考えられる。211は、口縁部に舌状の小波頂部が作出された



第42図 土坑A（2） 1号出土土器

資料である。本遺跡出土の縄文後期土器のなかでは器壁がやや薄手で、成形・整形とも丁寧である。文様は、2条の沈線でシンプルな波状文を描くが、工具を器面に軽く押し当てて施文しているようで、丁寧とは言い難い施文である。波頂部内面には、凹点が施されている可能性がある。212は、接合できなかったが、器面や文様等の特徴が211と類似しており、同一個体の可能性がある。213も、小波頂部が作出された資料である。波頂部は3か所と想定している。口径約24.2cmで、緩やかに張る胴部からわずかにすぼまりながら端部のみ外反する口縁部にいたる器形となっている。口縁部内面は、わずかに肥厚し稜を形成する。文様は、2条の沈線で「く」字状の文様を描き、それを口縁部に並行に連続させるという、単純ではあるが規則的な文様を施文している。また、小波頂部の裏側にも、「く」字状の文様をアレンジしたような幾何学文を施す。この裏側の文様については、残存部の観察から、波頂部ごとに変化させている可能性がある。214は、小波頂部の資料で、器壁は薄いほうであるが、混和材の多さが目立つ。口縁部内面がわずかに肥厚するが、波頂部であるためか、稜は形成されない。213と類似した文様を施文している。215は、ほぼ直行する口縁部ながら内面が肥厚し、明確な稜が形成されている資料である。文様は断面略方形の沈線で幾何学文を施すようだが、展開の詳細は不明である。216は、磨製石斧の刃部破片と考えられる。砂岩製で、残存部を観察する限り、刃部にいたるまで全面よく研磨されている。破損後の再利用の痕跡は確認されない。



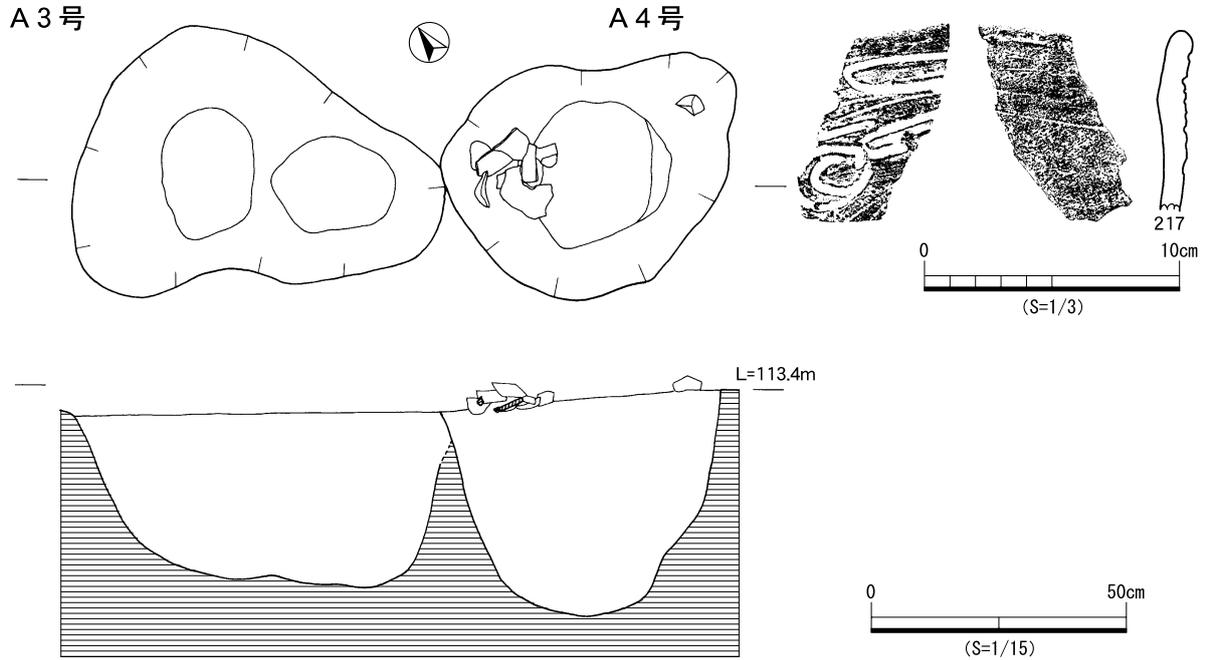
第43図 土坑A（3） 2号出土状況図及び出土遺物

土坑A 3号は、D-6区で発見された。平面プランが不整形で、断面略逆台形を呈し、深さは約35cmである。埋土はやや硬質の黒色土1枚で、遺物の出土はない。隣接する土坑A 4号との関係が不明であるため、遺物の出土はないがここに掲載した。

土坑A 4号は、土坑A 3号と同様な形状を呈する土坑である。D-6区で発見された。

遺物は、埋土上位で土坑の端部付近からややまとまって発見された。上下方向への分散はみられない。胴部片や礫がほとんどで、特徴を説明できる資料は1点のみである。217は、

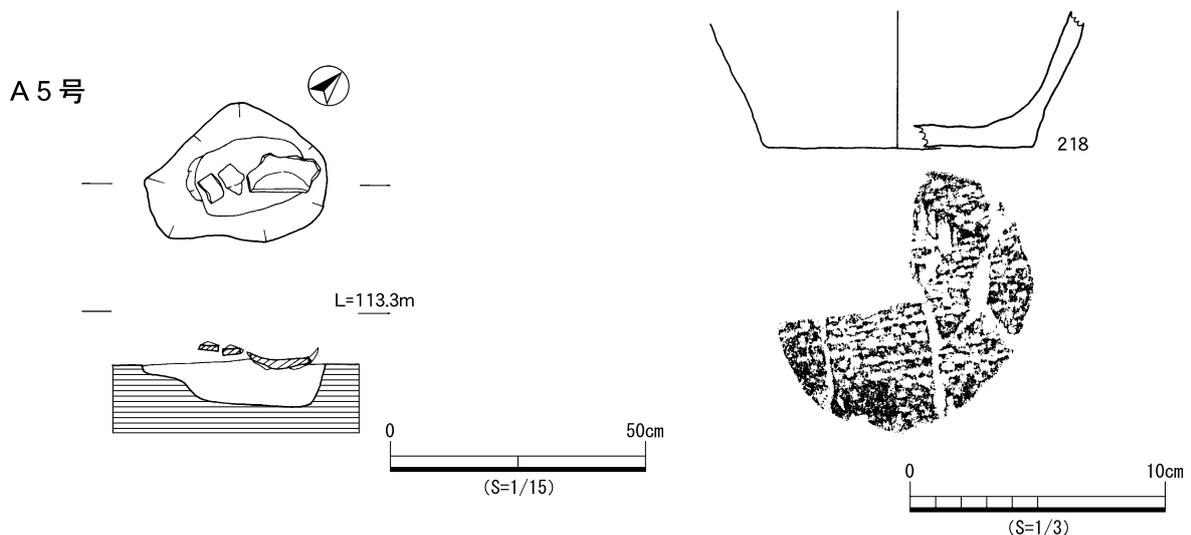
波頂部付近と考えられる資料で、大きさの割にやや持ち重りのする資料である。口縁部は、端部でわずかに外反しており、肥厚はしていないが内面に稜が形成される。文様は、明瞭ながらも浅い沈線で幾何学文を施すが、丁寧な施文とはいえない。



第44図 土坑A（4） 3・4号出土状況図及び出土土器

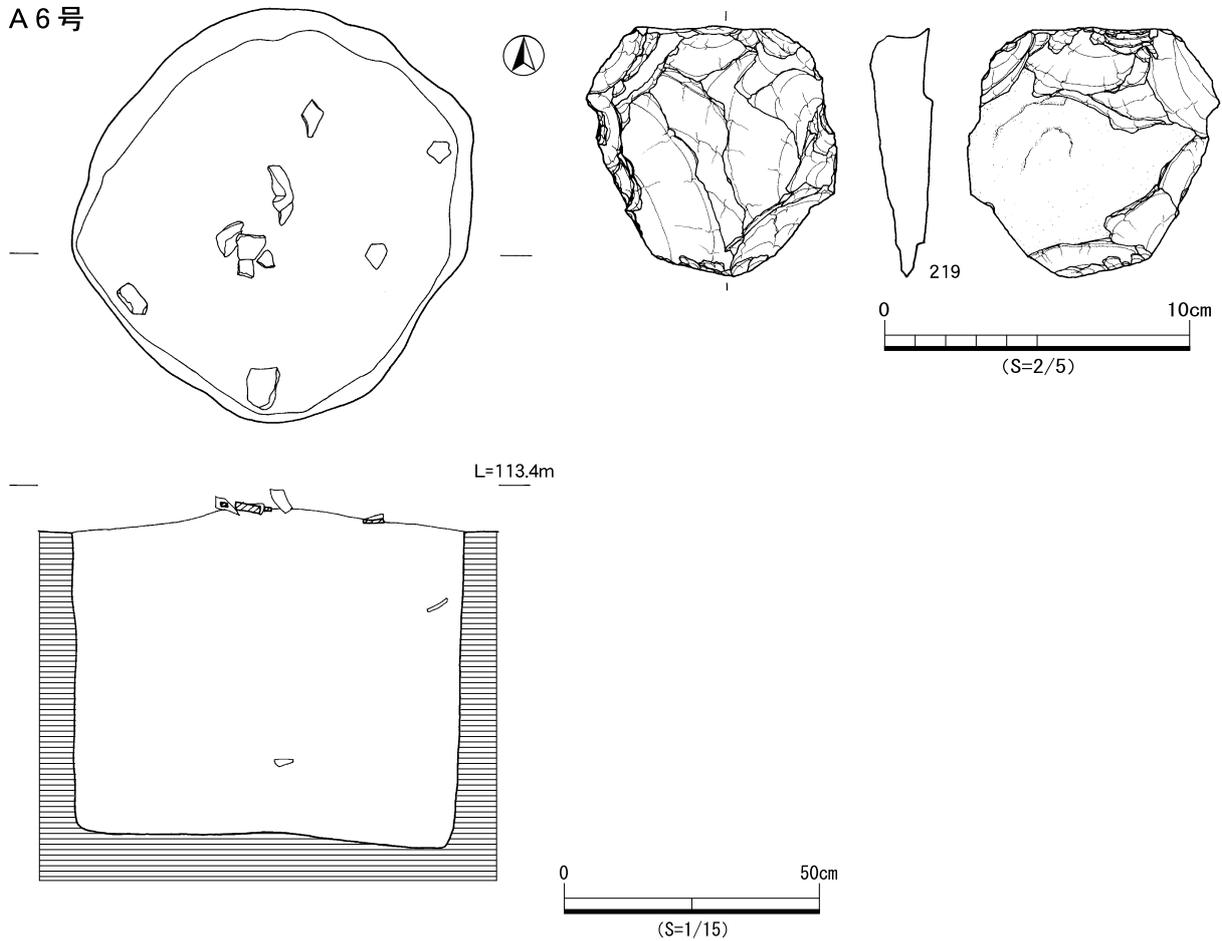
土坑A 5号は、C-10区で発見された。平面プランが不整形で、断面略逆台形を呈する。この類に分類した土坑ではもっとも小さい。埋土はやや硬質の黒褐色土1枚である。

図化できた遺物は218で、深鉢の底部と考えられる。直径は約10.6cmで、外面下端部の整形は丁寧に仕上げられており、高台状の張り出しや指頭押圧などはない。



第45図 土坑A（5） 5号出土状況図及び出土土器

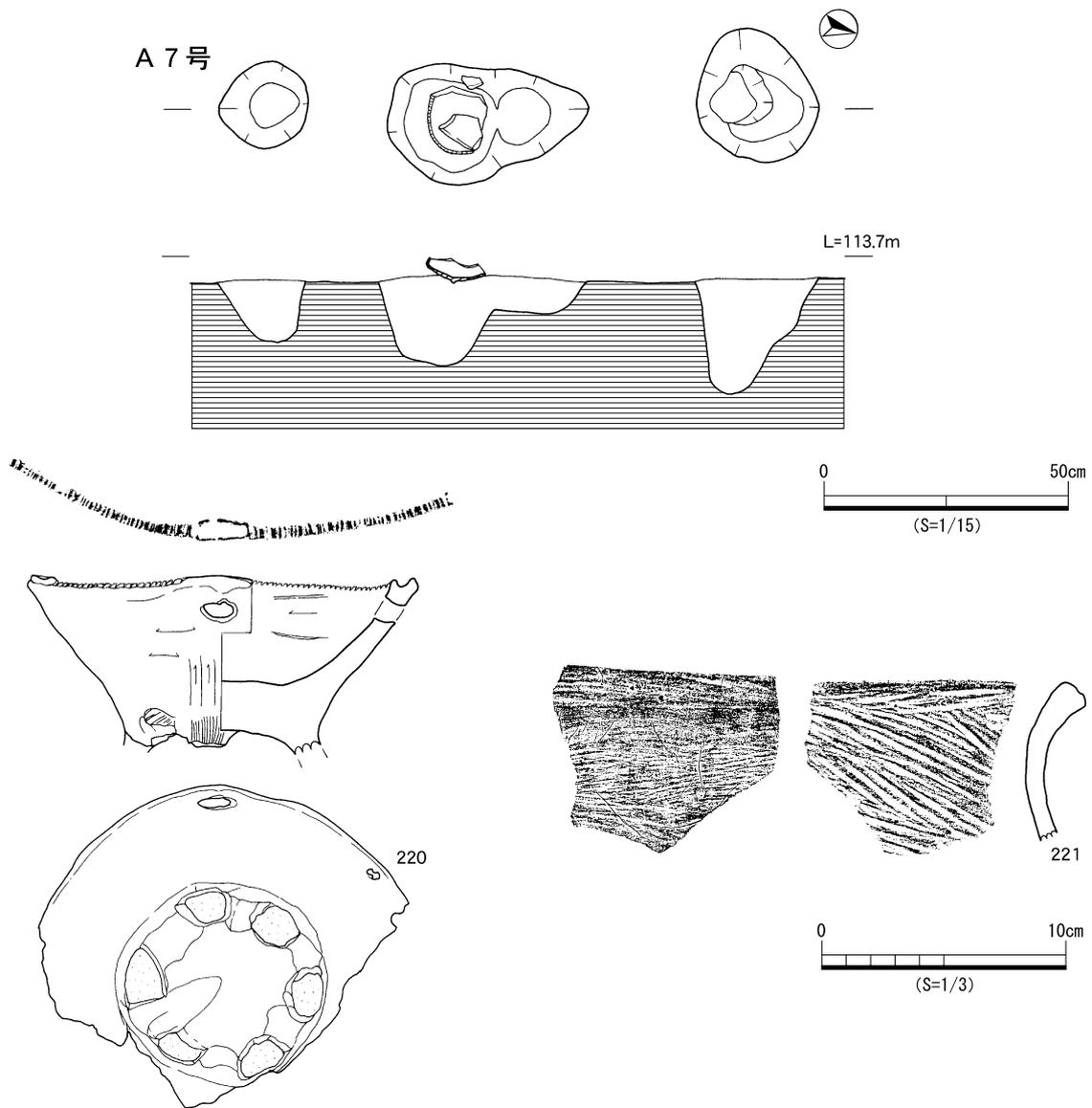
土坑A 6号は、B-10区で発見された。平面プランが略方形で断面形状は円筒形を呈する、深さ約60cmの土坑である。埋土は軟質の黒色土が1枚である。遺物は埋土の上位を中心に分散して発見されたが、礫や胴部片ばかりで図化できるようなものはなかった。



第46図 土坑A（6） 6号出土状況図及び出土土器

土坑A 7号は、C-4区のIV層上面で発見された。中央の楕円形の小土坑の南北に、ほぼ等間隔で平面プラン不整形の小土坑がある。周辺にはピット等他の遺構がみられなかったことから、関連がある可能性を想定して、とりあえず一連の遺構として扱っている。埋土はそれぞれ1枚で、中央の土坑はII層土が、両脇の小土坑はII層土とIII層土が混在して堆積している。遺物は、中央の土坑の埋土上位から220と221の2点の土器片が重なった状態で発見された。220は、台付皿形土器と考えられるが、皿部は一般的なものよりも小振りである。高台部は、残存状況から6か所の透しが入っていたと考えられるが、残存部の成形がやや雑であること、また、皿部が小振りであることなどから、それぞれ独立した脚がついていた可能性も想定される。口縁端部の円孔文は、内面から加工されており、4か所に施されたと考えられる。口唇部の連続刻目文は、細い工具を用いて、不揃いな間隔ではあるものの密に施されている。221は、無文土器で、内外面とも貝殻を用いた器面調整が施されている。口縁

部断面が「く」字状に整形されているなどの特徴から、松山式土器の範疇に含まれると考えられる。



第47図 土坑A（7） 7号出土状況図及び出土土器

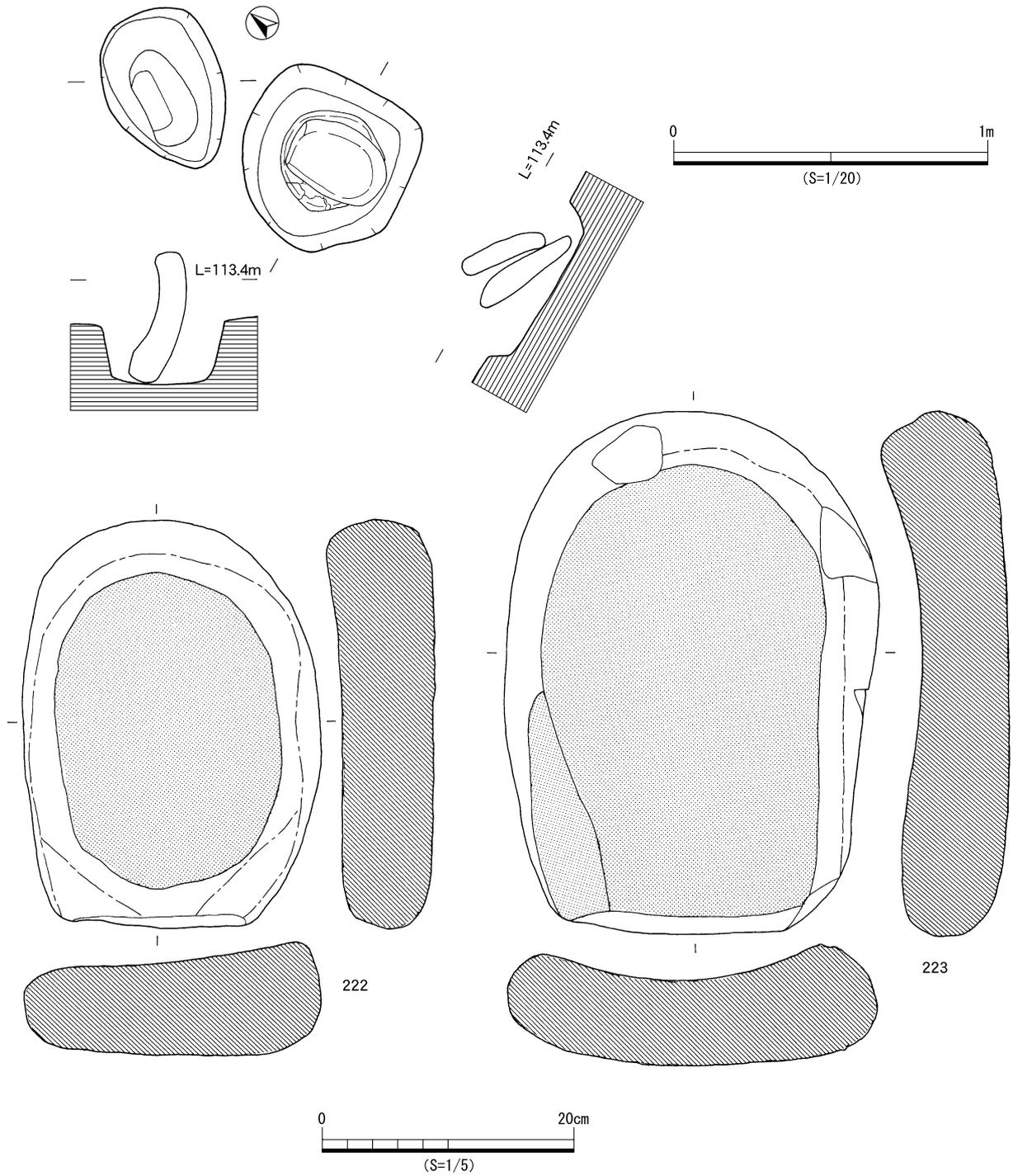
土坑A 8号は、石皿を伴う小土坑2基である。ごく近接しており、どちらも石皿を伴っていることから、とりあえず一体のものとして扱うこととした。平面プランは、伴う石皿の形状にあわせたかのような不整形で、検出面からの深さは浅い。

発見された石皿のうち、222は、花崗岩製で長軸 33.0cm、短軸 23.6cm、重さ 6.7Kg、平面形が馬蹄形を呈する石皿である。全面が丁寧に整形されており、わずかに凹んだ使用面は、平滑でやや光沢を帯びる。また、使用面がある面には、使用面の角度とは角度を変えて平坦に整形された部分が2か所、側縁部が直線的に仕上げられている側に観察される。周辺部と

同様の仕上げであることから、このような形態を念頭に製作していたことが想像される。

なお、石皿のうち、222の下位から発見された石皿は、発見当時から劣化が著しく進んでおり、現場での実測作業中に崩壊してしまったため取り上げることができず、詳細な観察はできなかった。

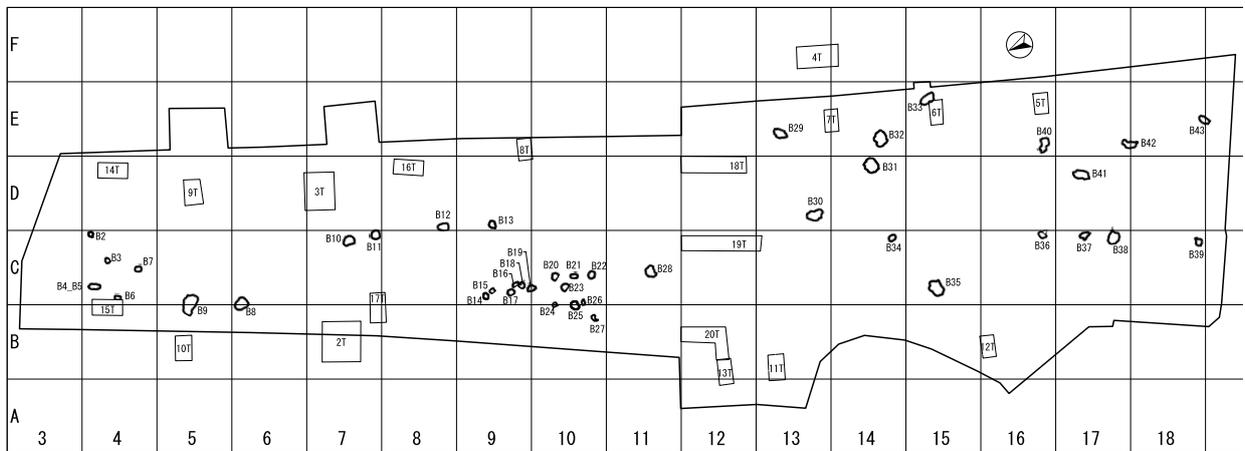
A 8 号



第48図 土坑A（8）8号出土状況図及び出土土器図

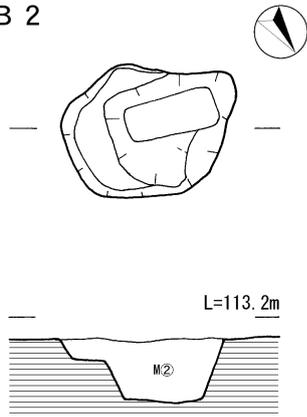
土坑B（第49～62図）

先述したように、鳴野原遺跡A地点では、土坑は42基発見されている。平面形状、深さなど様々であり、規格性を見出すことは難しい。おおむね、平面形状が略円形を呈するものと、完全に不整形を呈するものがあり、後者の方が比較的面積が大きい傾向があるようである。断面形状については、途中で段があり、床面はほぼ平坦で立ち上がりが直線的な形状もあれば、略ろうと状に一か所が深くなり徐々に広がるというような形状を呈するものもある。住居跡と同じように、ごく浅い断面のみの土坑もある。あえて分類を試みるなら、平面形状が不整形のものに、断面形状が略ろうと状のものが組み合わさり、平面形状が略円形で小形のものに、途中で段がある形状のものが組み合わさるようだ。遺物の出土状況と土坑の形態との相関についても、残念ながら解明できなかった。

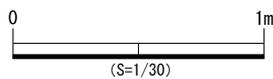


第49図 土坑B位置図

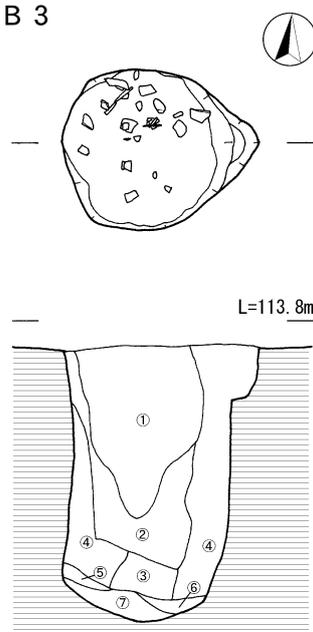
B 2



M② II層土にIII層(アカホヤ)パミス混



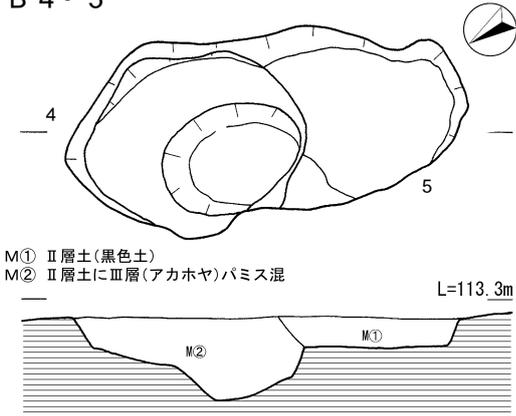
B 3



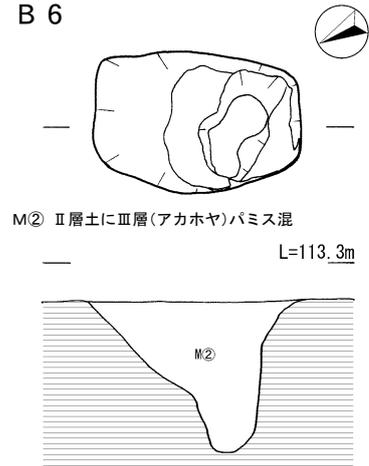
- ① 黒色粘質土
- ② 黒褐色土(パミス含)
- ③ 黒褐色粘質土(パミス含)
- ④ 茶褐色軟質土
- ⑤ 黒褐色土
- ⑥ 黒色硬質土
- ⑦ 黄褐色茶褐色混粘質土

第50図 土坑B（1）

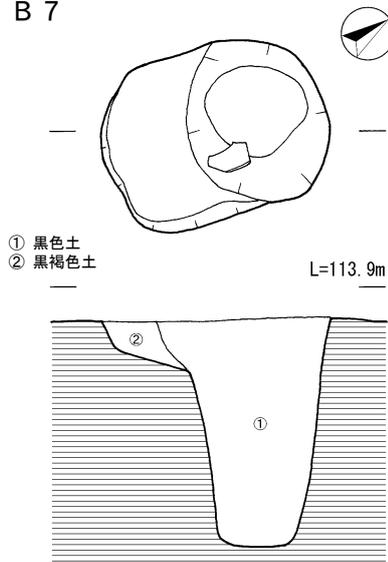
B 4・5



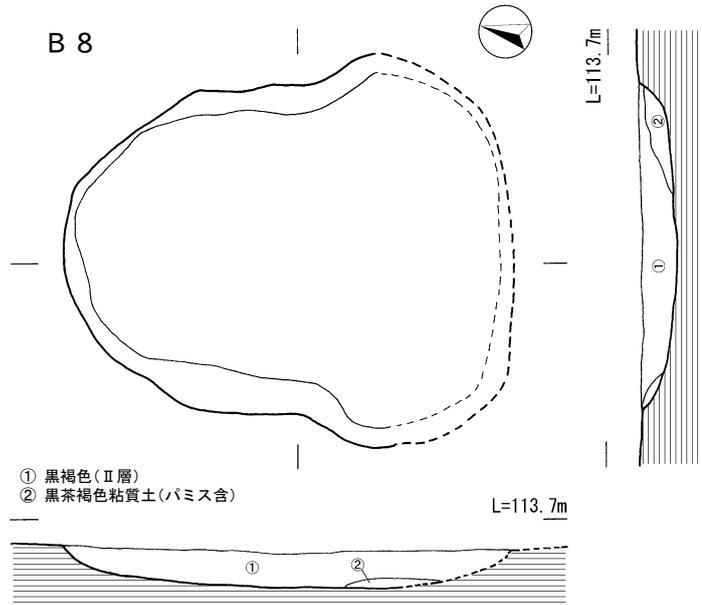
B 6



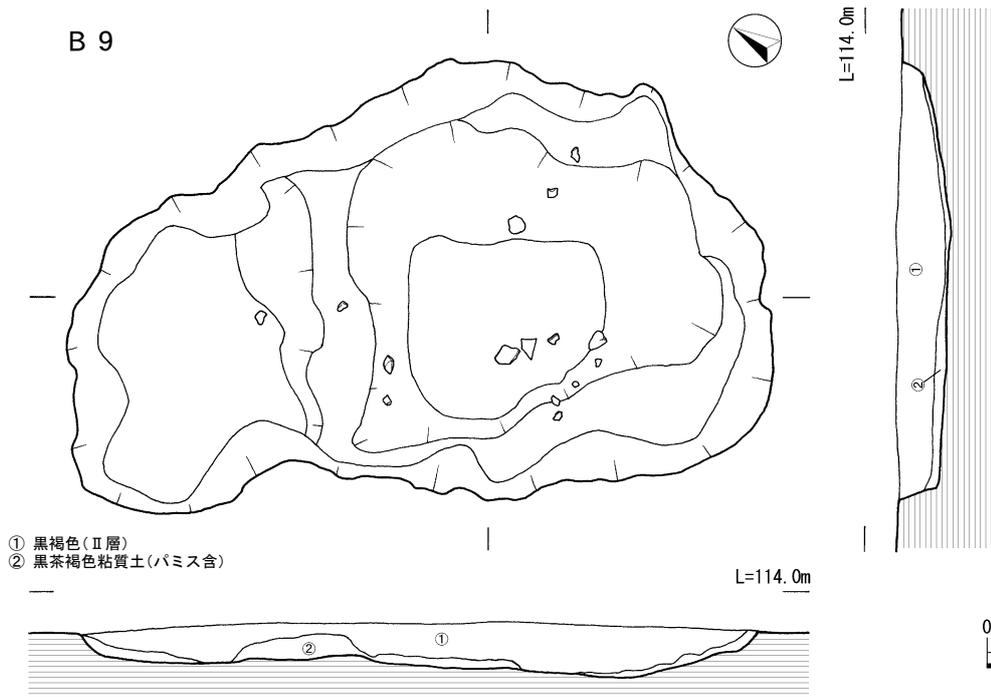
B 7



B 8

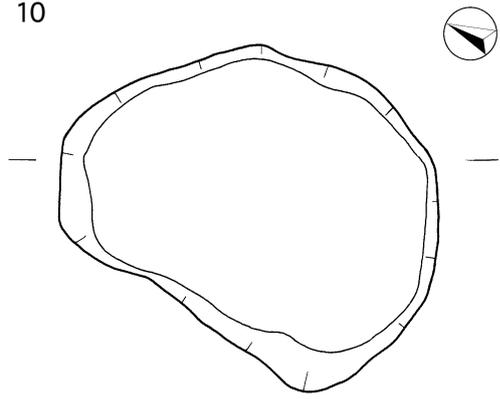


B 9

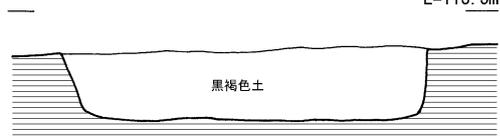


第51図 土坑B(2)

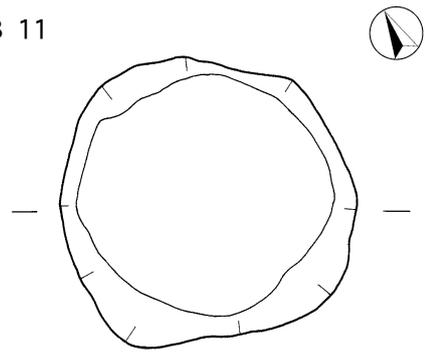
B 10



L=113.5m



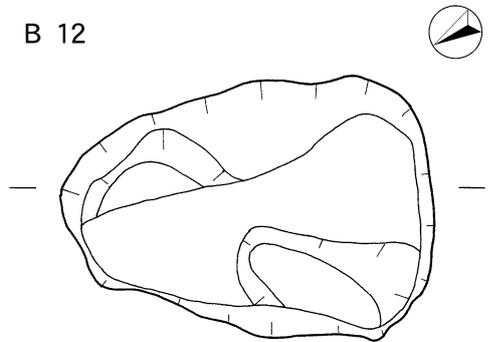
B 11



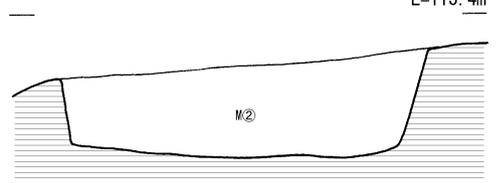
L=113.5m



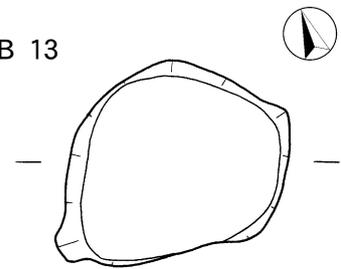
B 12



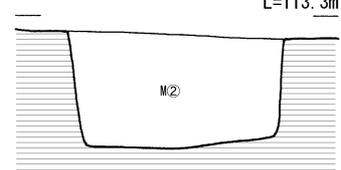
L=113.4m



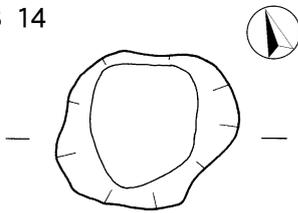
B 13



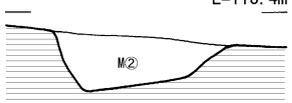
L=113.3m



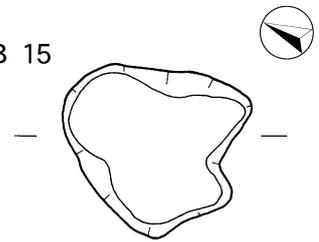
B 14



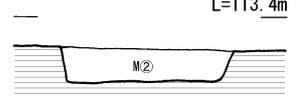
L=113.4m



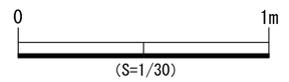
B 15



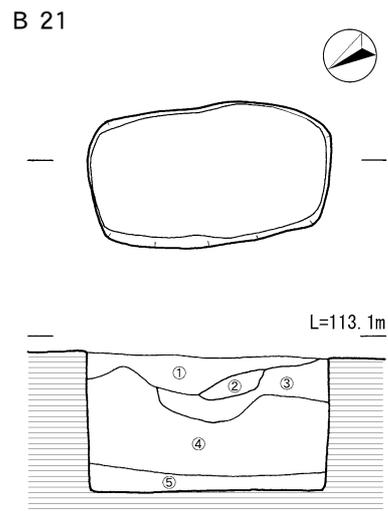
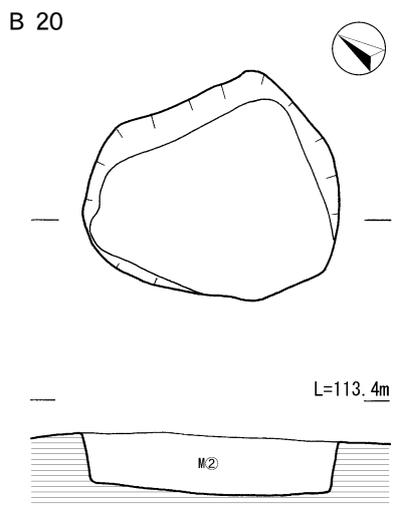
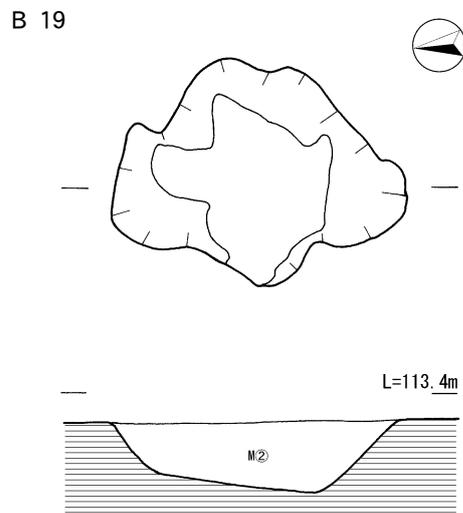
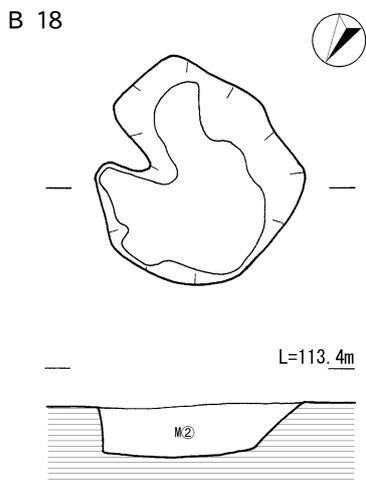
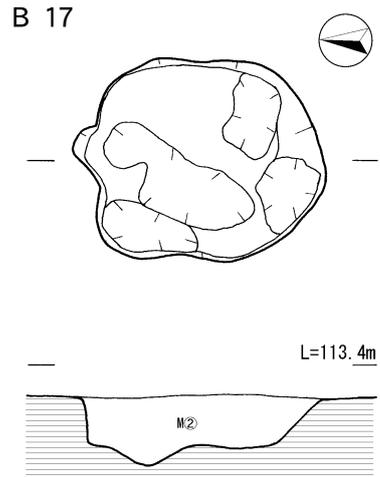
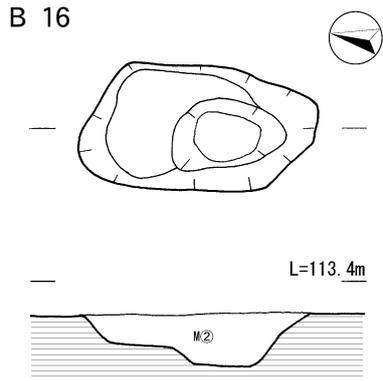
L=113.4m



M2 Ⅱ層土にⅢ層(アカホヤ)バミス混

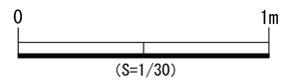


第52図 土坑B (3)



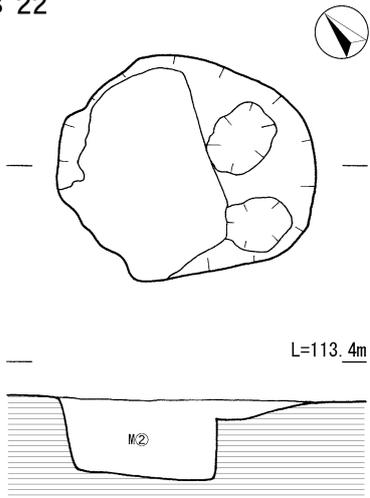
M② II層土にIII層(アカホヤ)パミス混

- ① II・IV層土混
- ② II・IV層土混(ブロック状)
- ③ 黒褐色土
- ④ III層にIV・IV層混
- ⑤ 黒色土

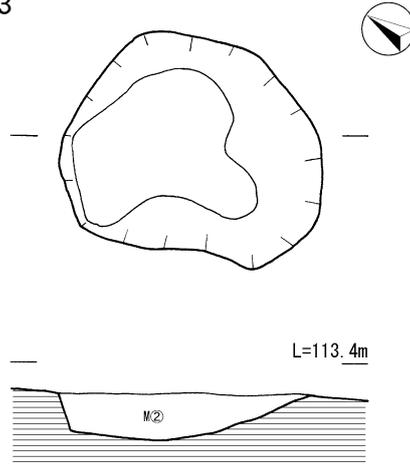


第53図 土坑B(4)

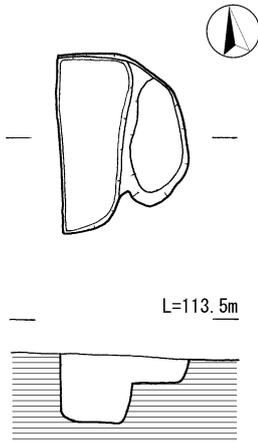
B 22



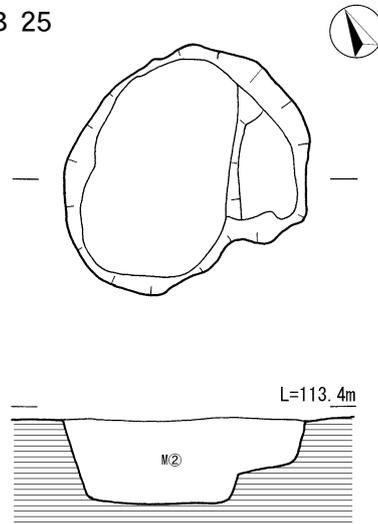
B 23



B 24

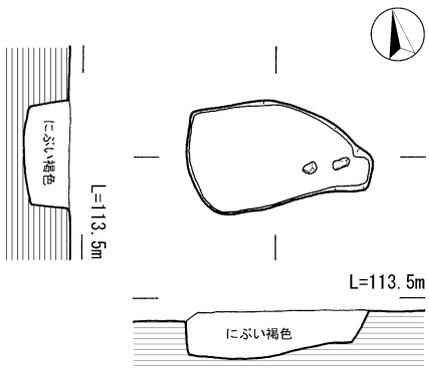


B 25

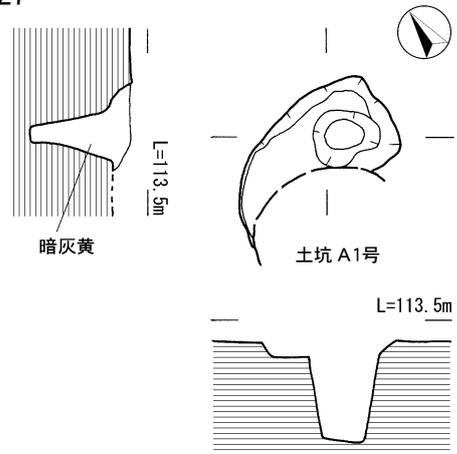


M② II層土にIII層(アカホヤ)パミス混

B 26

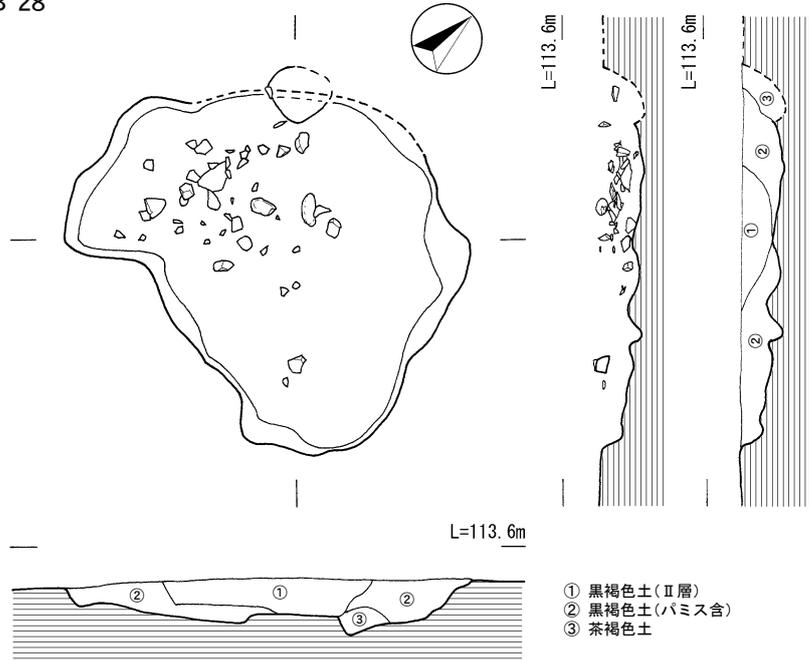


B 27

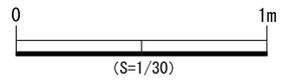
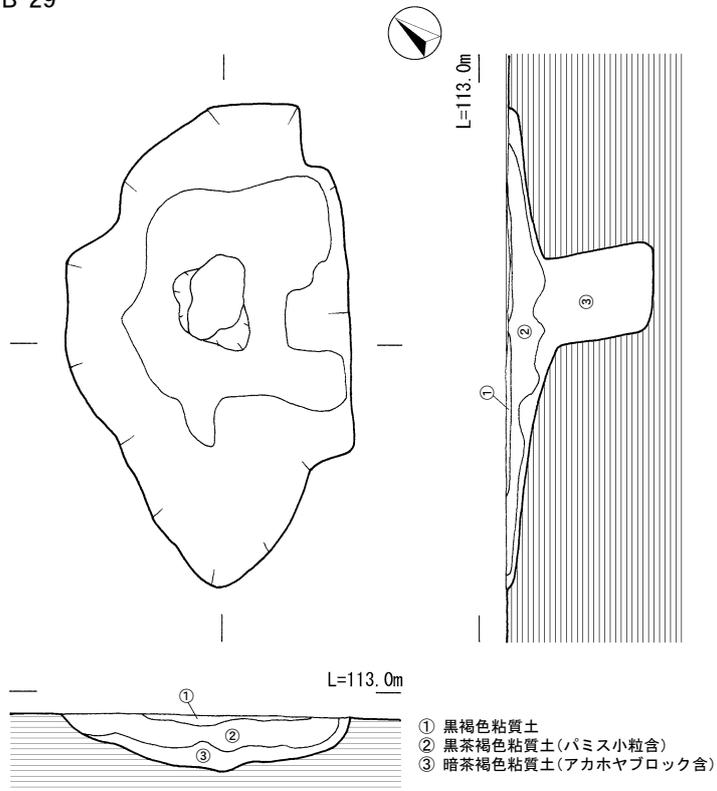


第54図 土坑B (5)

B 28

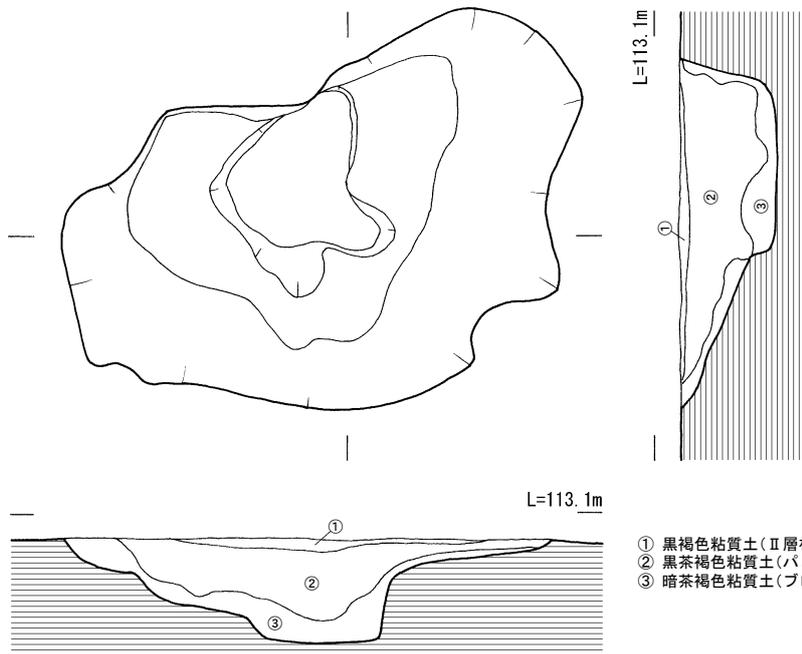


B 29



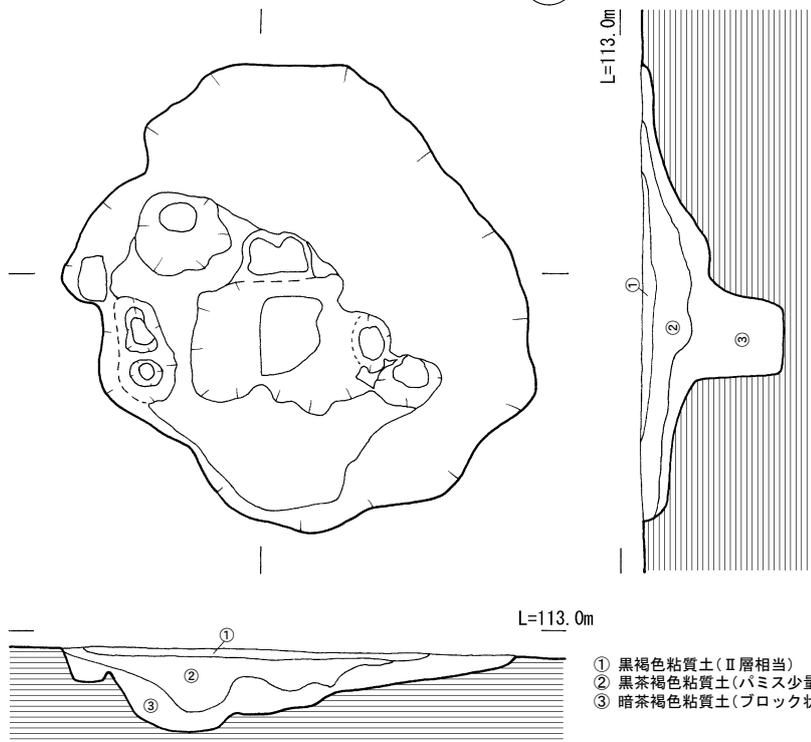
第55図 土坑B(6)

B 30

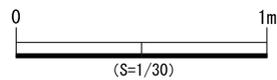


- ① 黒褐色粘質土(Ⅱ層相当)
- ② 黒茶褐色粘質土(パミス少量含)
- ③ 暗茶褐色粘質土(ブロック状パミス)

B 31

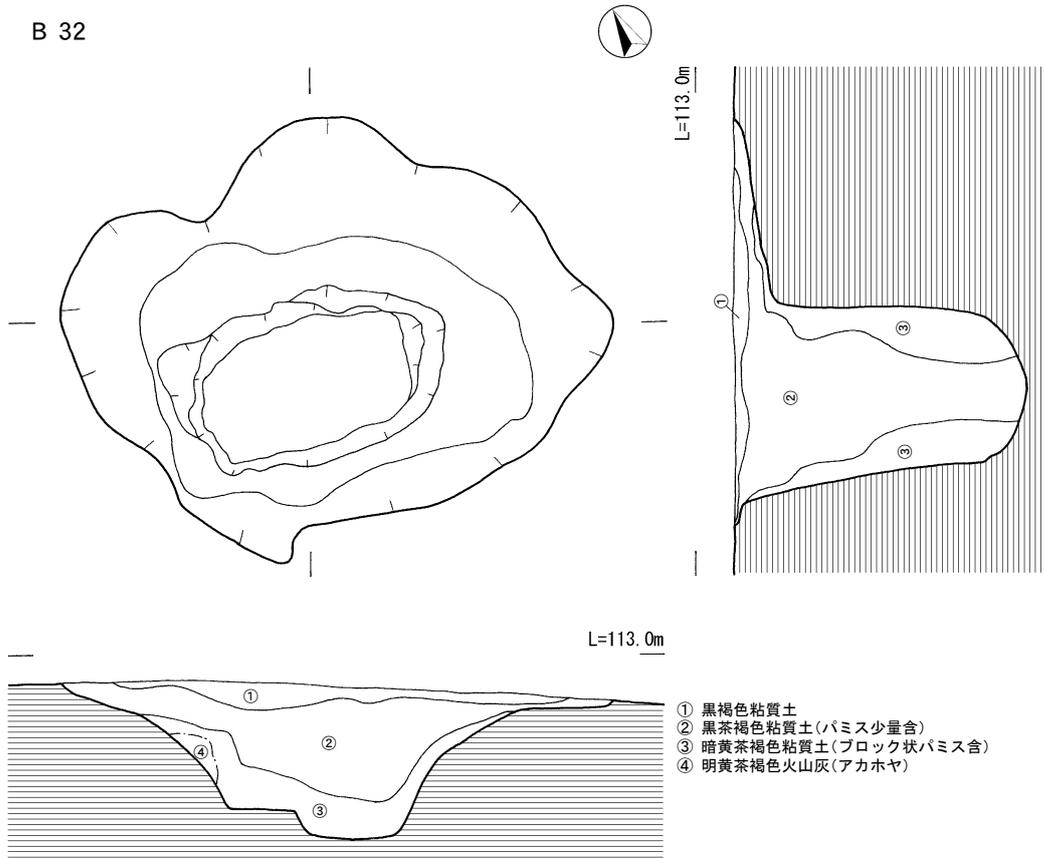


- ① 黒褐色粘質土(Ⅱ層相当)
- ② 黒茶褐色粘質土(パミス少量含)
- ③ 暗茶褐色粘質土(ブロック状パミス)

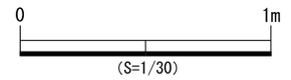
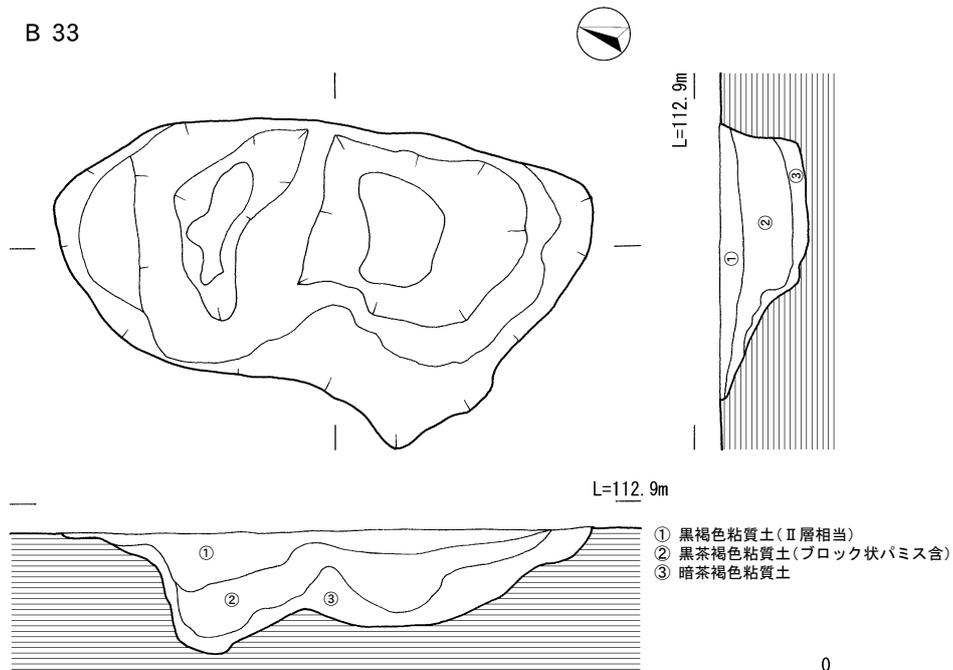


第56図 土坑B (7)

B 32

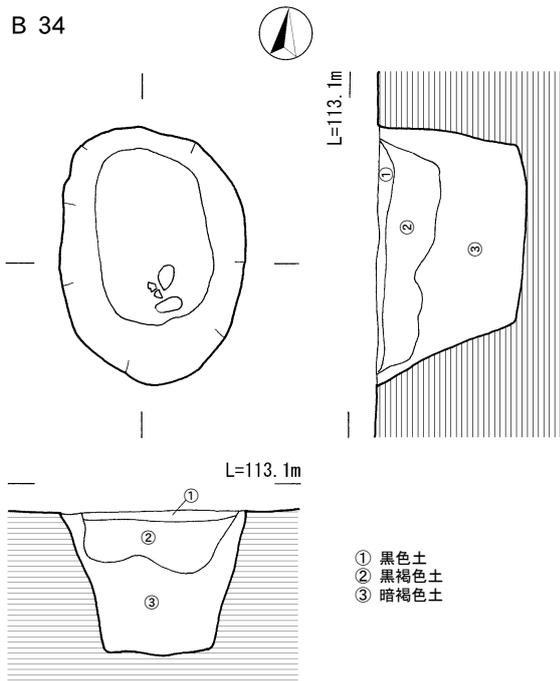


B 33



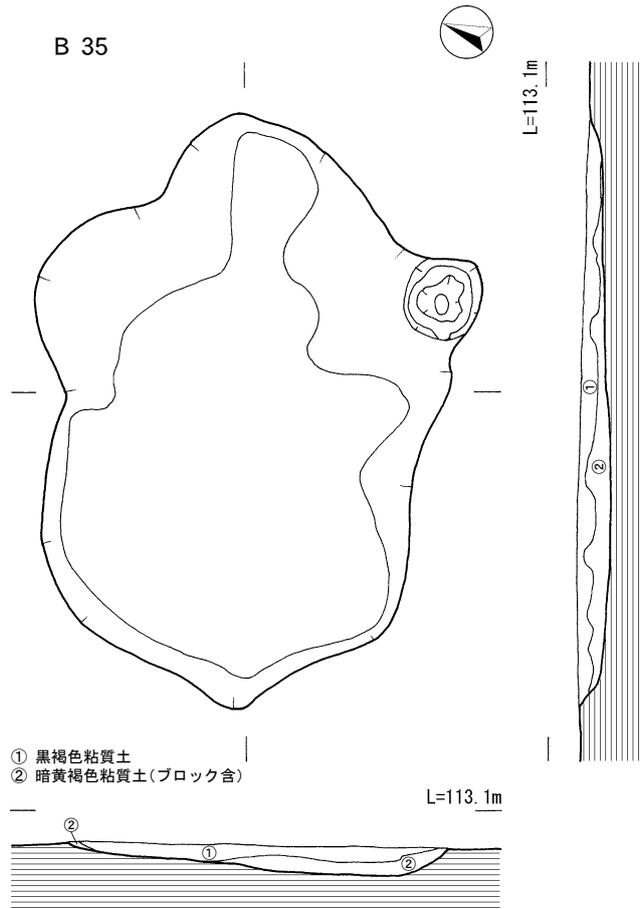
第57図 土坑B(8)

B 34



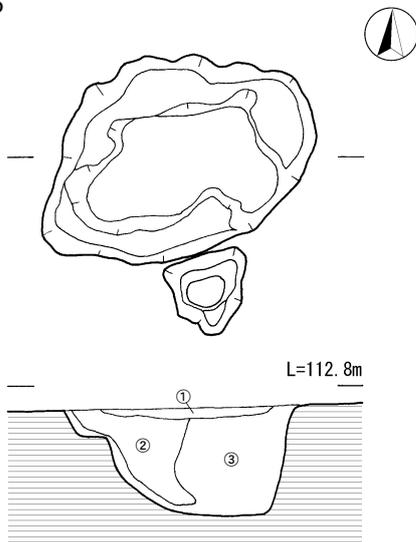
- ① 黒色土
- ② 黒褐色土
- ③ 暗褐色土

B 35



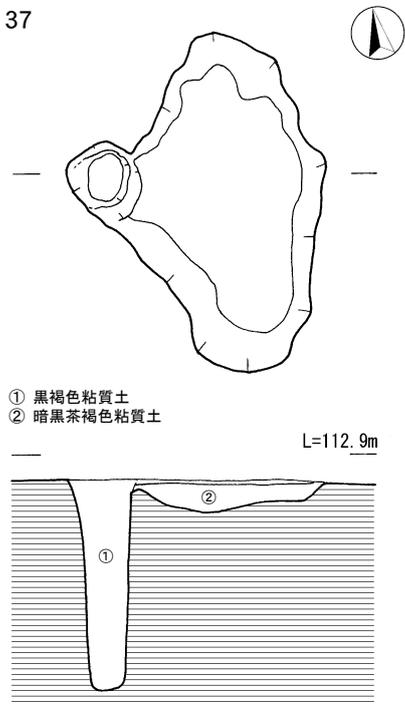
- ① 黒褐色粘質土
- ② 暗黄褐色粘質土(ブロック含)

B 36



- ① 黒褐色粘質土
- ② 暗茶褐色粘質土(パミス含)
- ③ 暗黄褐色粘質土(アカホヤブロック含)

B 37

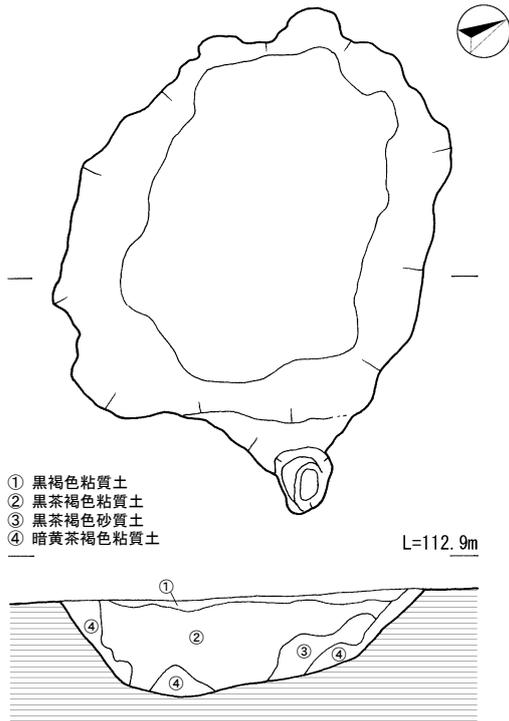


- ① 黒褐色粘質土
- ② 暗黒茶褐色粘質土

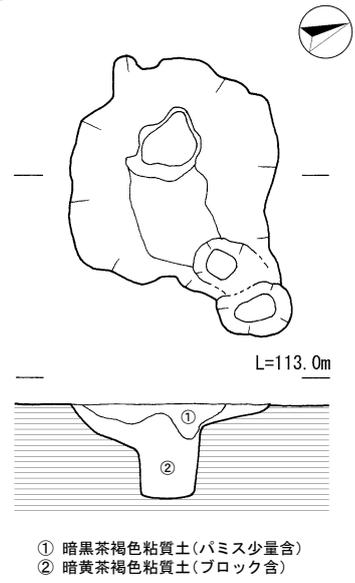


第58図 土坑B (9)

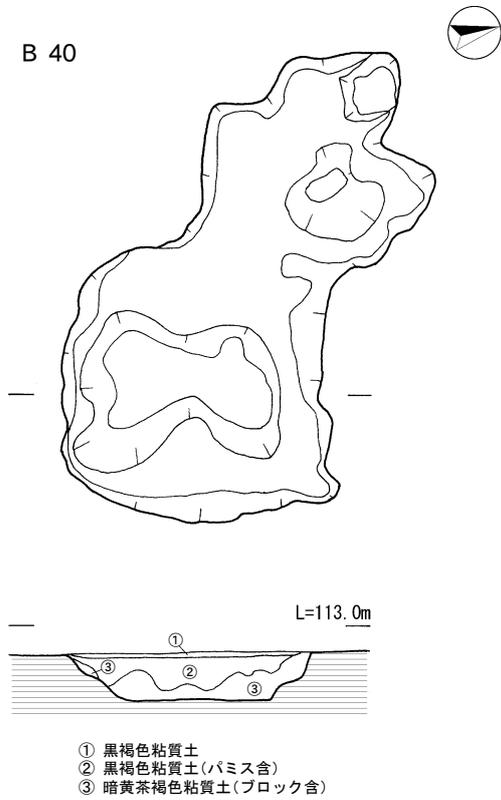
B 38



B 39



B 40

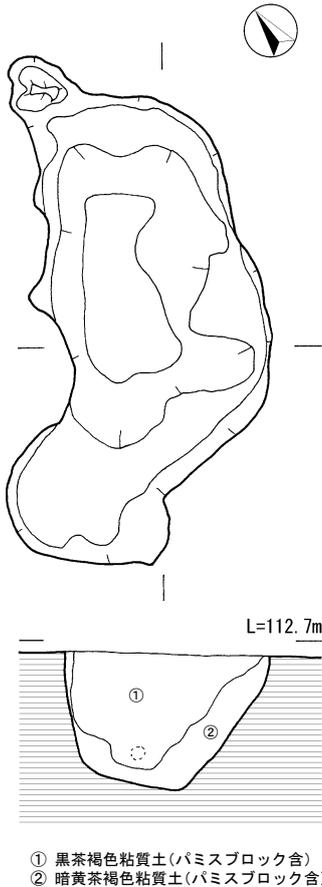


B 41

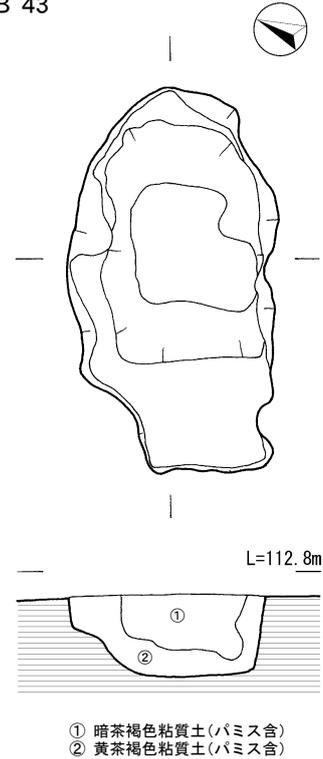


第59図 土坑B (10)

B 42



B 43



第60図 土坑B (11)

土坑B 3は、C-4区で発見された。ピット状の形態である。遺物は埋土①中で発見された他、埋土⑥・⑦堆積面上でも発見されている。また、埋土⑥は、土坑B 3の埋土では最も硬い層であった。これらのことから、土坑としての底面は、埋土⑥・⑦堆積面上である可能性も考えられる。

遺物は、224～227の4点が図化できた。224は、波頂部のみ器壁を肥厚させているが、その他の特徴は、劣化していて観察できない。227は、口縁部が小波状を呈している。また、口縁部内面が肥厚し、緩く稜も形成されている。226は、軽量の資料である。接地面には、白色土の付着を確認できるが、他は劣化しているため観察できない。

土坑B 4は、C-4区で発見された。埋土中から、228が発見された。短い脚がつく深鉢の底部と想定される。

土坑B 5も、C-4区で発見された。断面は、微妙ながら略ろうと状を呈する形状である。遺物は、229・230が発見された。229は、波頂部付近の資料である。やや胴張りする器形で、肥厚させるなどの造作はみられない。口縁部下に2条の平行沈線をひき、その下位に、器面を大きく使ってく字状のモチーフを連続して施文している。230は、底部資料であるが、劣化のため詳細は不明である。劣化は、埋土中に包含される過程で生じたような状態である。

土坑B7は、C-4区で発見された。ピットに段がついたような断面形状である。埋土中から、229が発見された。波頂部が3か所形成された資料で、推定口径約33.0cmである。波頂部のみやや肥厚させている他は、器壁に造作はなく、丁寧な器面調整がなされ、文様は、器面を大きく使って施文されている。

土坑B9は、B・C-5区で発見された。平面形状は不整形で、底面も平坦ではない。ごく浅い断面形状を呈する。発見された遺物のうち、礫器231を図化できた。

土坑B10は、C-7区で発見された。1枚の埋土中から、232が発見された。鉢形の無文土器で、復元口径は19.2cmである。口唇部は、断面略方形を意図して整形しているようだが、徹底されておらず、部分的に凹凸が残る。外面には煤、内面にはコゲが付着する。

土坑B11も、C-7区で発見された。規模に比して埋土中の遺物は多く発見され、233・234・235・237を図化できた。前2点は、同一個体の可能性がある。小片のため波頂部の有無はわからないが、口縁部内面は稜を形成して肥厚し、口縁部の外反はない。2条単位の沈線で幾何学文を施文する。237は、混和材の砂粒が目立つ胴部資料である。

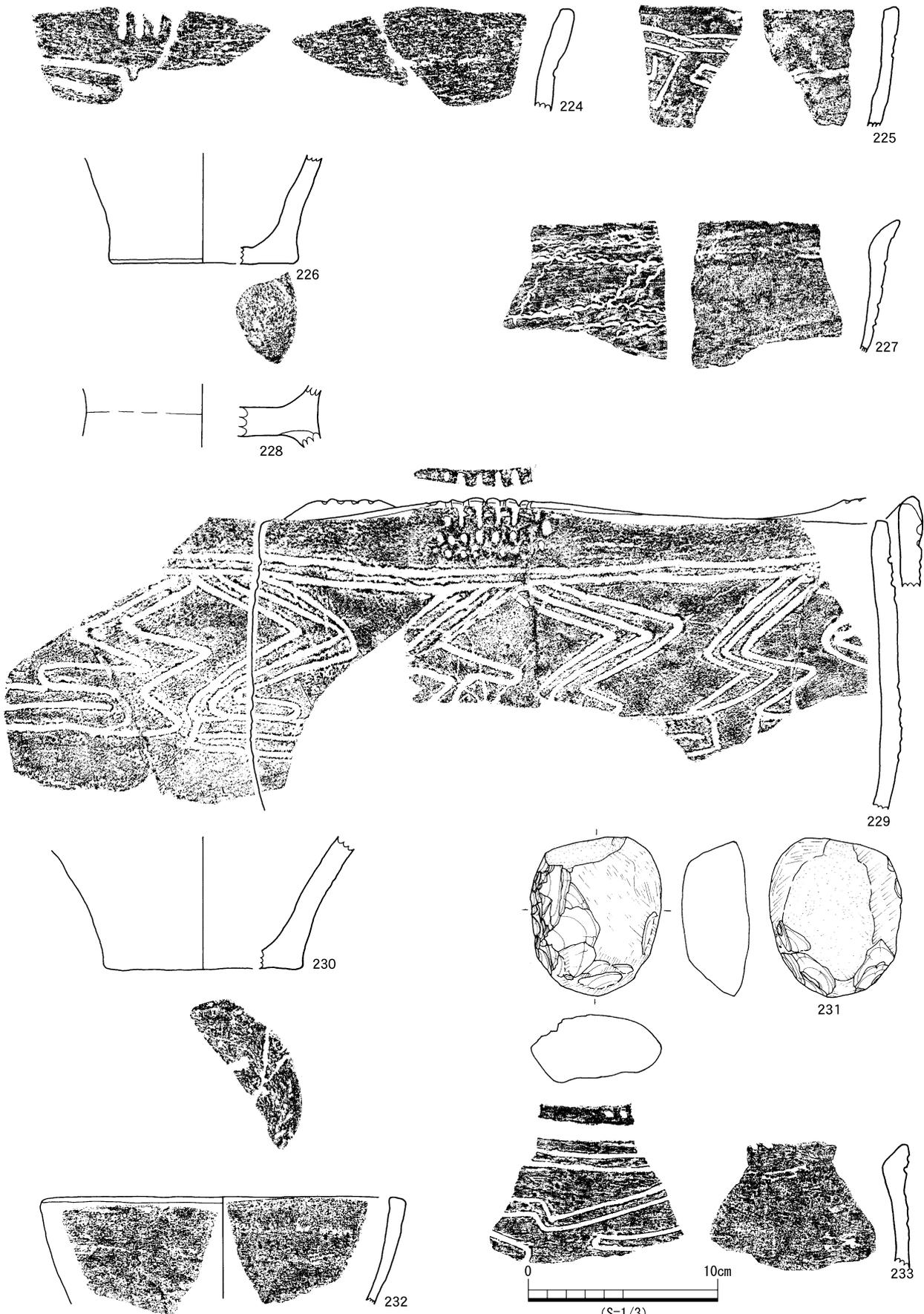
土坑B15は、C-9区で発見された。この土坑も比較的遺物が多く、239・241・242が発見された。239は、口縁部が若干屈曲して外傾する資料で、外傾した部分のみやや器壁が厚みを増す。口唇部に密に施された連続刻目が特徴的である。

土坑B19は、C-9・10区にまたがって発見された。この土坑からは、泥岩製の小珠1点(243)が発見された。全面が鈍い光沢を帯びるが、顕著な研磨痕は認められない。中央の孔は、ほとんど片面からの作業で開けられ、反対側からは作業のほぼ最終段階で開けられたと考えられる。一部欠損している。

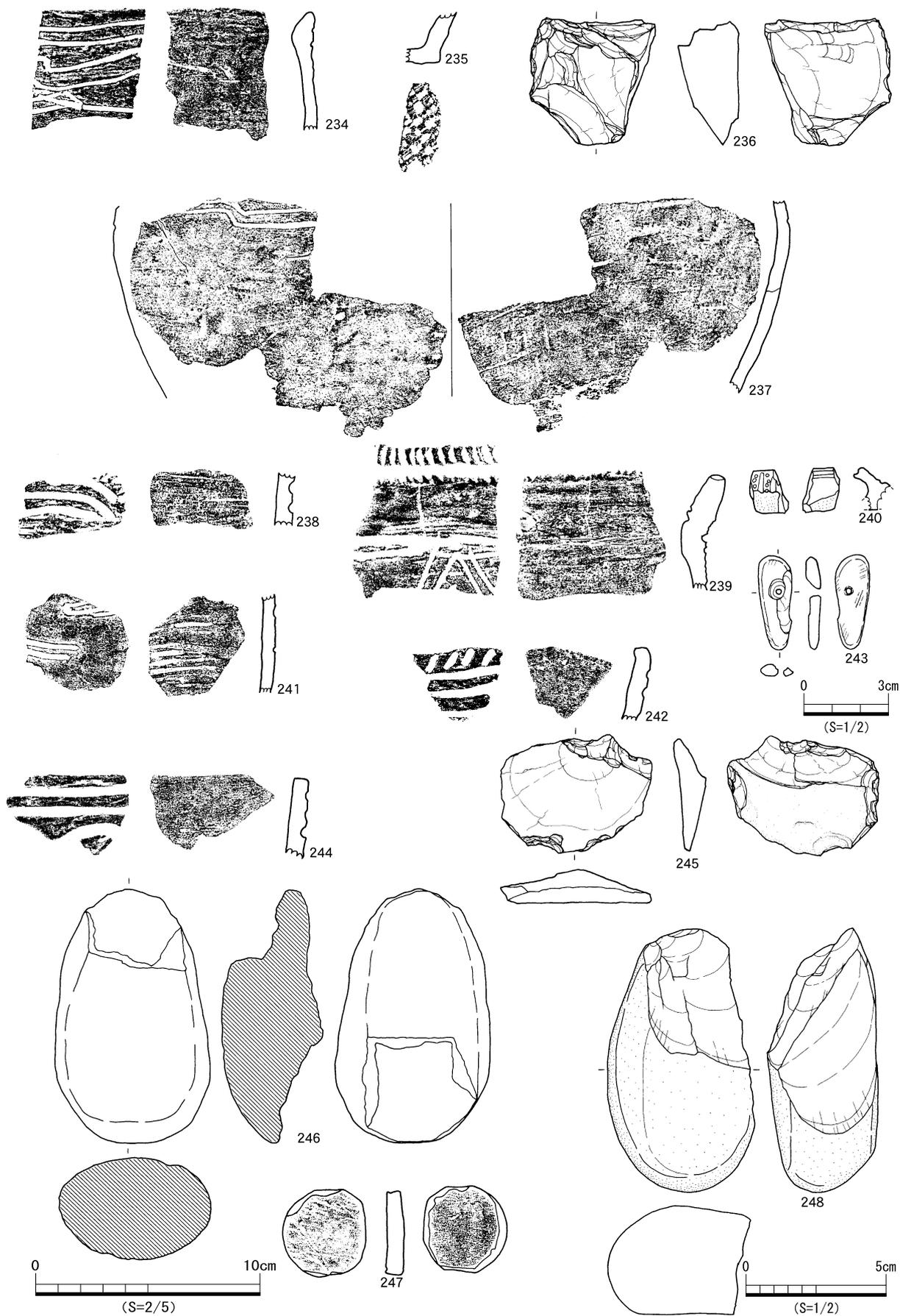
土坑B26は、C-10区Ⅲa層で発見された。埋土上位に炭化物の集中が認められた。

土坑B27は、B-10区Ⅲa層で発見された。土坑A1号に切られている。ピット状の掘り込みの底面は平坦で、硬くしまっている。

土坑B28は、C-11区で発見された。埋土中に被熱した礫を伴っているが、埋土、床面ともに被熱の痕跡は記録されていない。246は、出土した磨・敲石である。安山岩製で、表裏に磨面が認められるほか、上下端にはわずかに敲打痕も観察される。破碎しているが、使用によるものではなく被熱によるものと考えられる。



第61图 土坑B出土遗物(1)

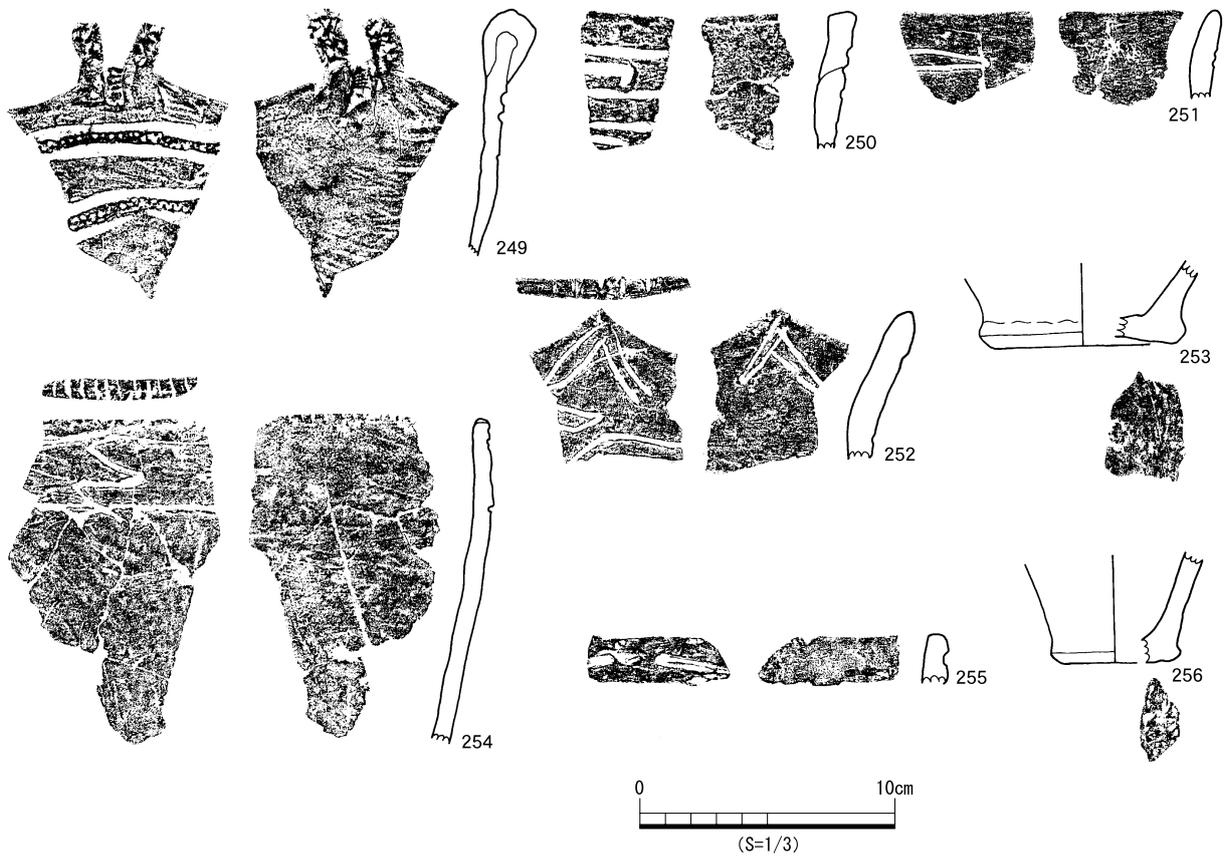


第62图 土坑B出土遺物(2)

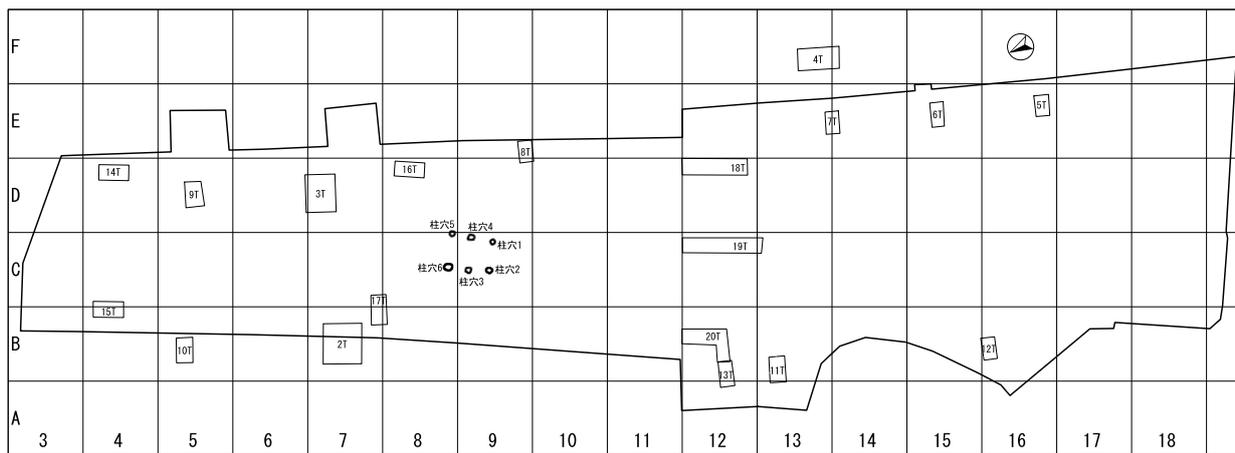
掘立柱建物跡が想定される柱穴群（第63～65図）

C-8・9区から、膨大な数に及ぶ他のピット群とは大きさと深さが全く異なる柱穴が、6基近接して発見された。各柱穴の断面形状は、柱穴2が略V字形であることを除けば、ほぼ類似した形状を呈している。しかし、残念ながら埋土の状況は、南西隅の1基を除いて不明であるし、位置的に切り合う竪穴住居跡5号との関係も不明である。

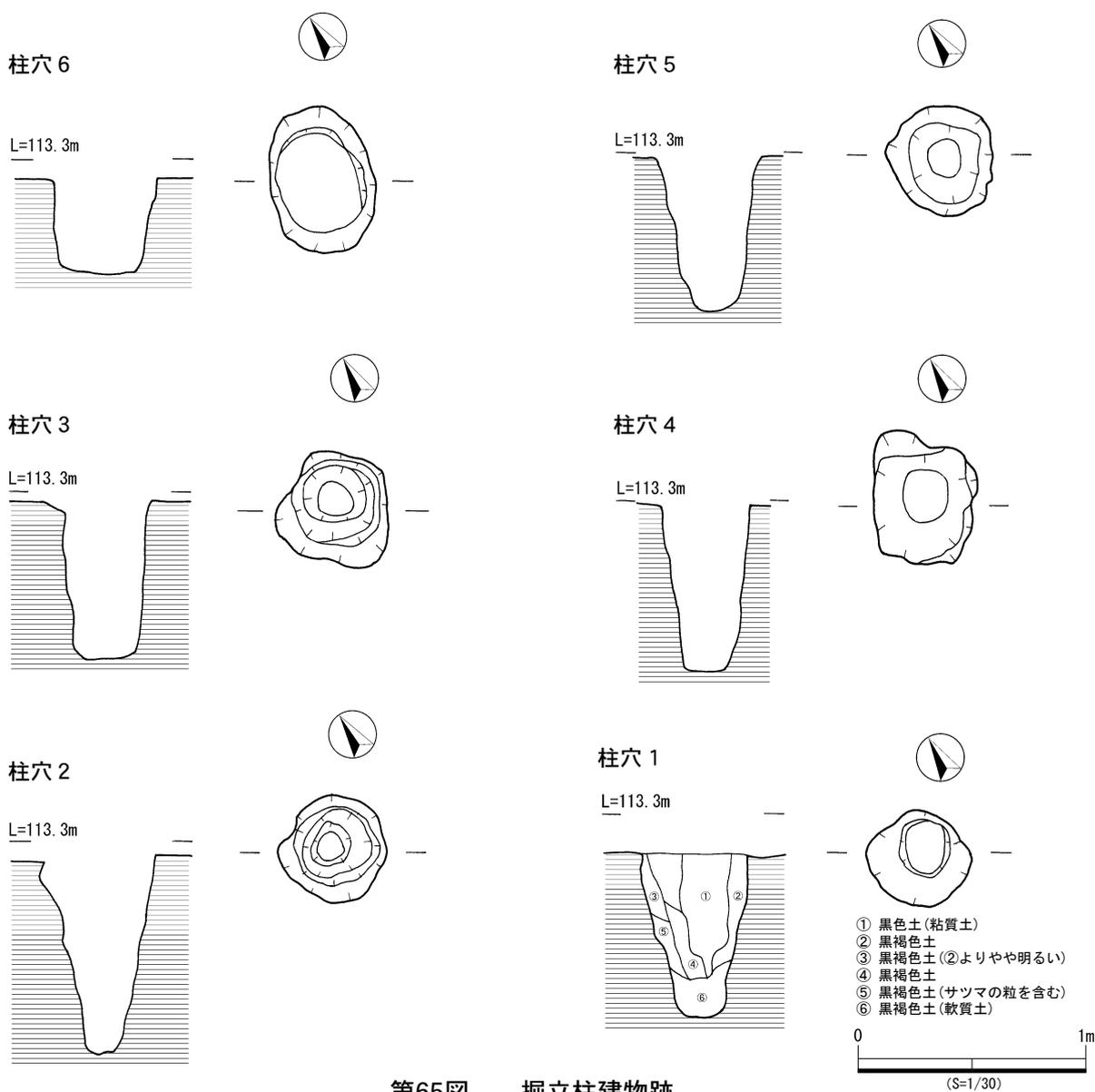
遺物は、柱穴2から249が、柱穴3から250が、そして柱穴6から、255と256が発見されている。249は、波頂部に2本の粘土紐を縦位に貼り付けた口縁部資料である。器壁は比較的薄く作られているが、やや雑な整形である。口唇部は、舌状に仕上げられている。文様は、2条の並行沈線文の隙間を貝殻刺突で充填させた文様を、2段、口縁部と並行に施文しているが、小片のため全体的なモチーフ等は不明である。貼り付けた粘土紐上には、貝殻刺突文が密に施文される。256は、小形土器の底部資料である。底部接地面には、組織痕らしき痕跡も観察できる。



第63図 掘立柱建物跡出土土器



第64図 掘立柱建物跡位置図

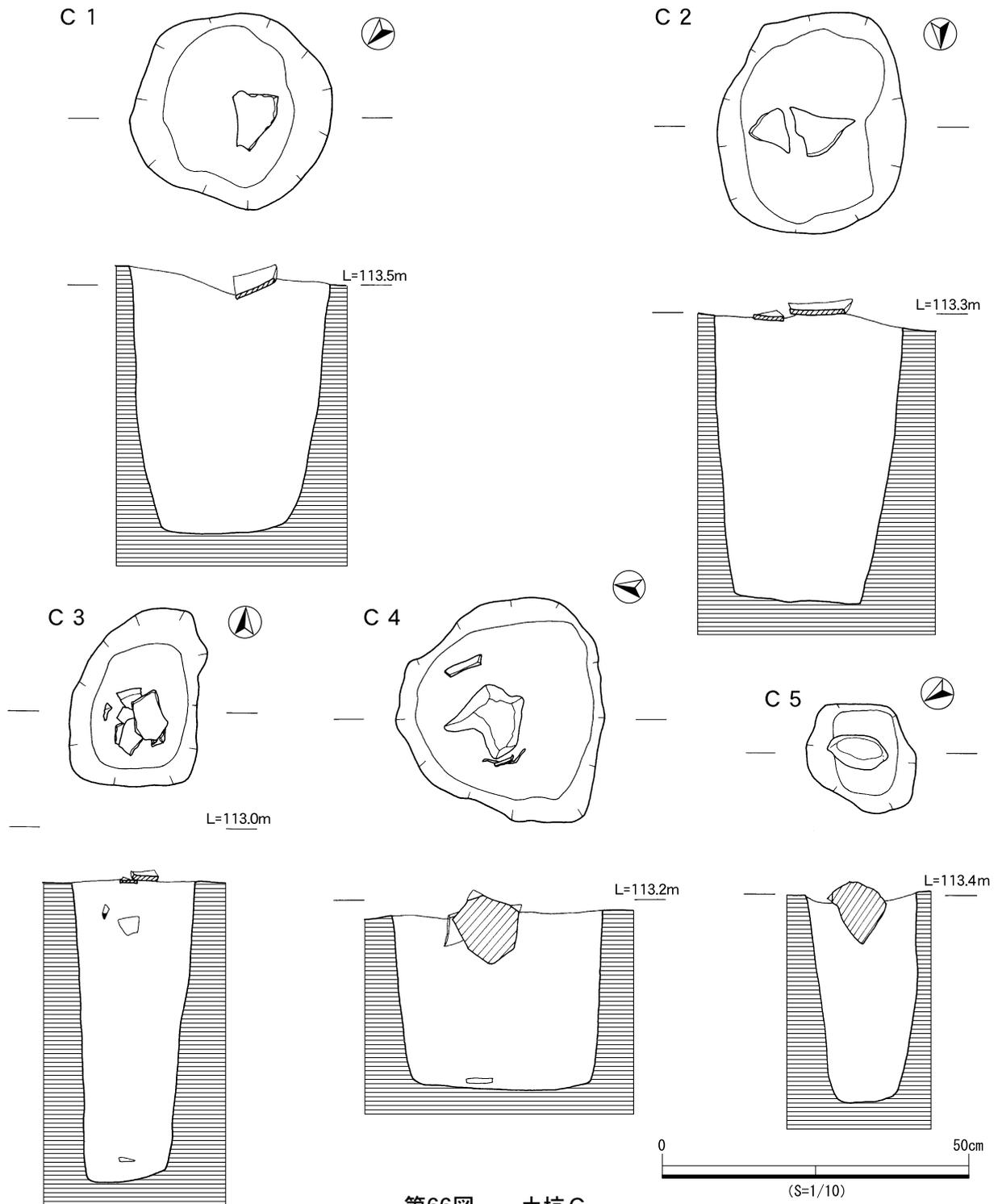


第65図 掘立柱建物跡

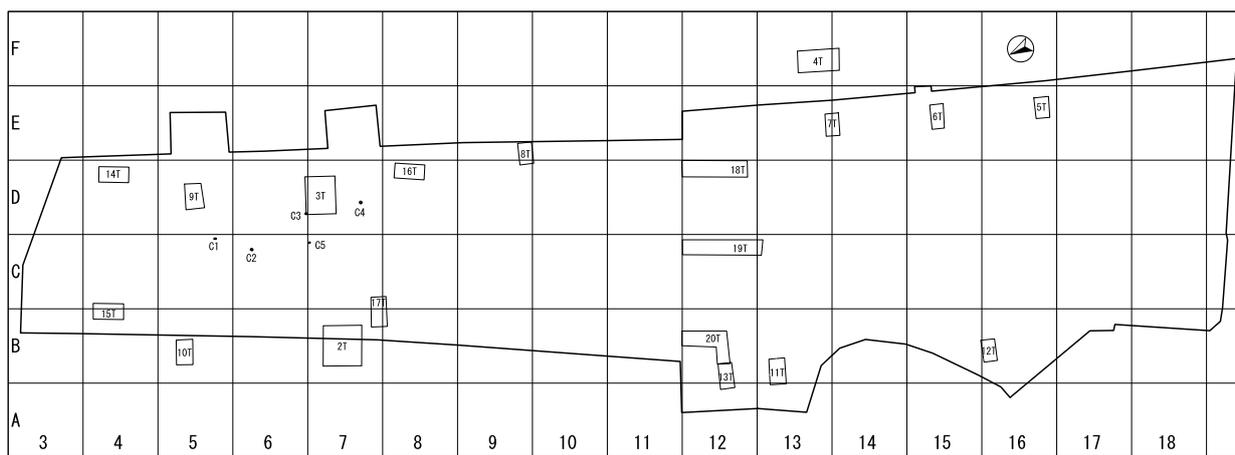
土坑C（第66図）

鳴野原遺跡A地点では、先述した、建物が想定される柱穴群の他に、平面形状は不整形ながら、断面形状がほぼ円筒形で、埋土は軟質の黒色シルト質土が堆積しているという特徴をもつ土坑が5か所で発見されている。検出面付近において土器等の遺物を伴うが、土坑との関連性は低いと判断する。

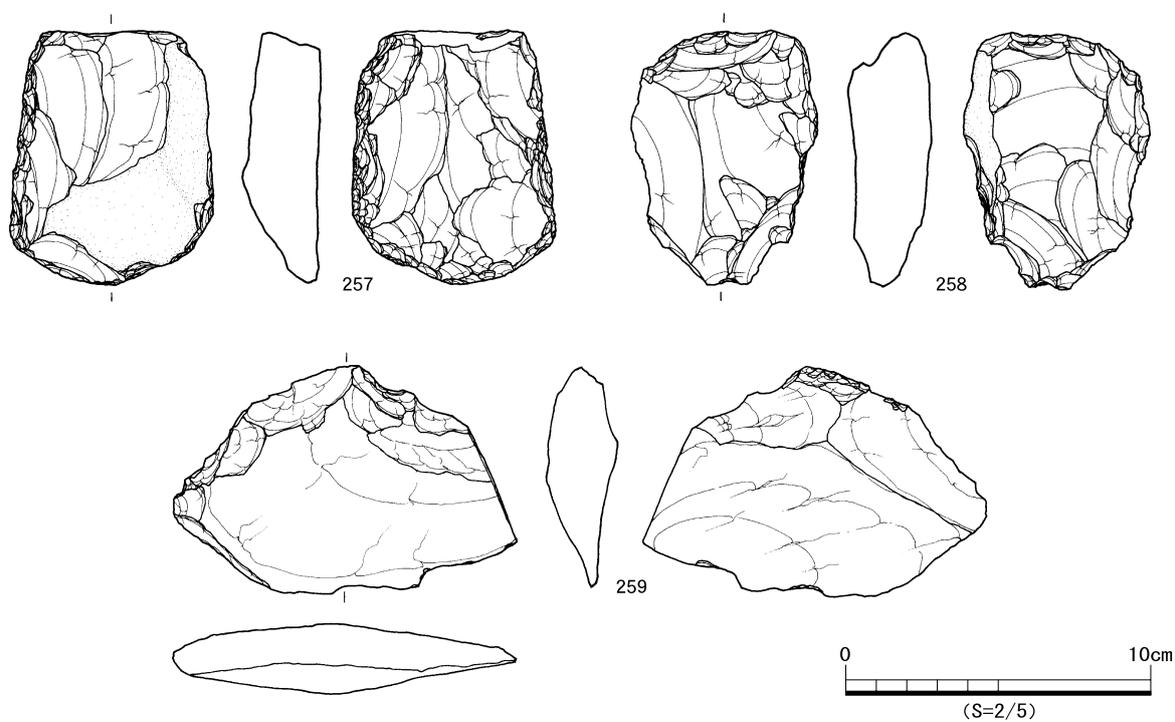
個々の遺物については、包含層出土遺物のなかで説明する。



第66図 土坑C



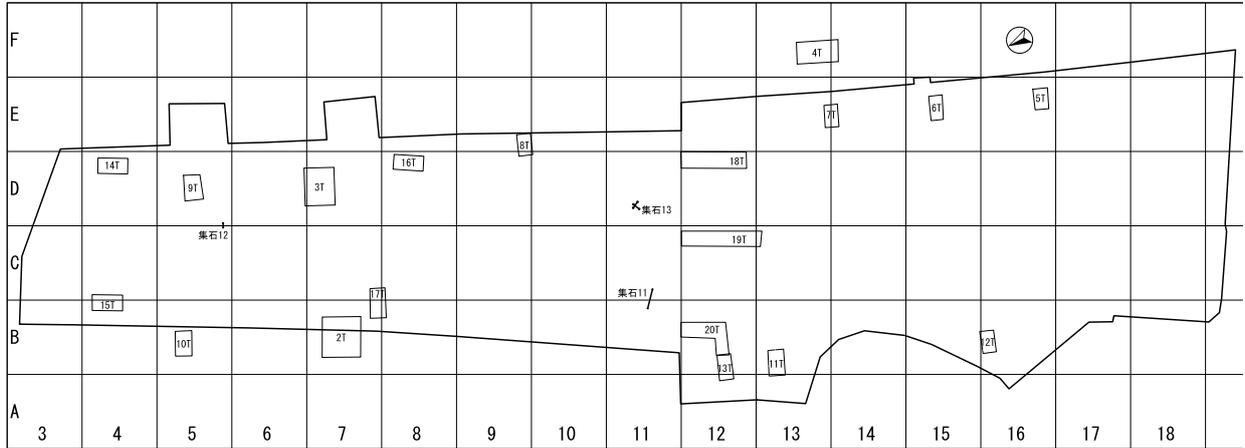
第67图 土坑C位置图



第68图 土坑C出土石器

集石（第69～72図）

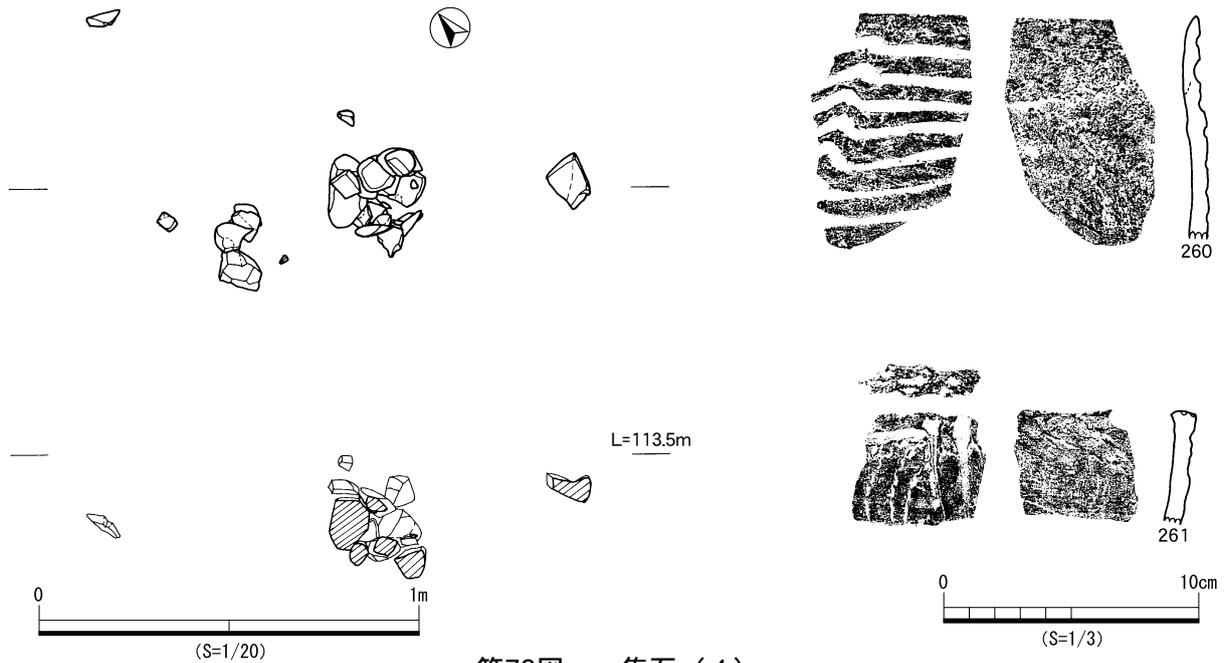
調査区の北半部分から、3基が散在して発見された。少数の礫がまとまるものが2基、掘り込みをもたず散在するものが1基であった。



第69図 縄文時代後期集石位置図

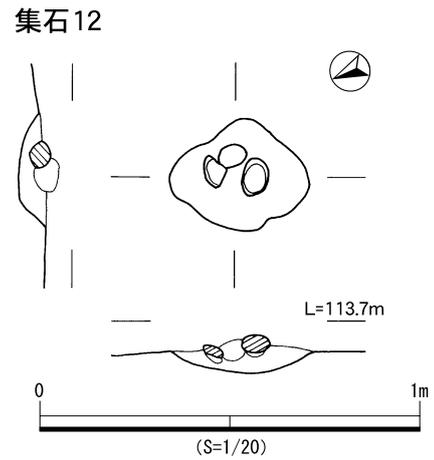
集石11は、B・C-11区で発見された。拳大よりやや大きめの礫で構成され、土器片を伴っていた。図化できた資料のうち、260は、やや薄手の器壁に、安定した動きで施された凹線文が施文されており、261は、やや雑な整形の器面に縦位の貝殻刺突文を連続させている。

集石11



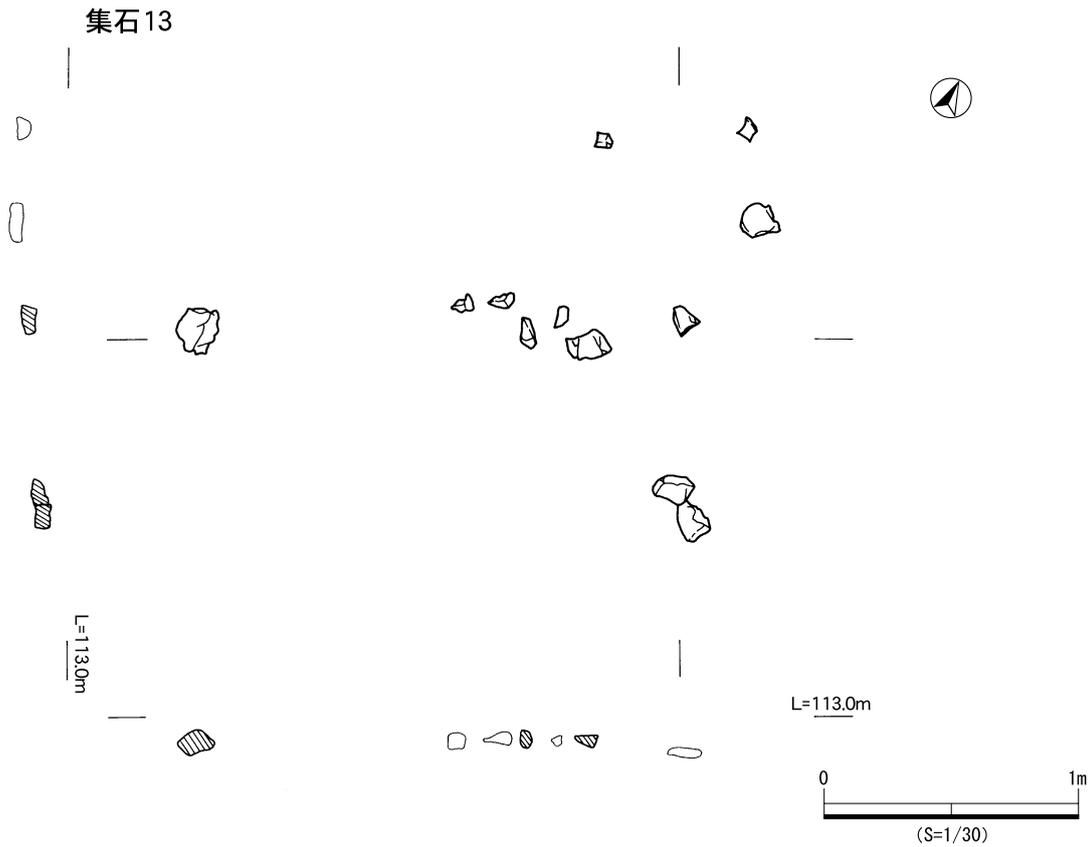
第70図 集石（4）

集石12は、C・D-5区で発見された。規模は極めて小さいが、3個の構成礫のすべてが被熱している。掘り込みと考えられる部分もあったが、肉眼等で観察する限りでは被熱による土質の変化等を確認できなかった。



第71図 集石 (5)

集石13は、D-11区で発見された。掌大の礫が散在しており、掘り込みはなく配置も不規則である。



第72図 集石 (6)

土器集中か所 (第73～75図)

調査区C-6・9区から、9か所で発見された。被熱の痕跡等は確認されていない。いずれも1ないし2個体が確認されたが、胴部よりも上の部分しか残存しておらず、周辺の資料

とも接合しなかったのが、共通する特徴である。856は、底部外端まで残っていたが、底部自体は発見できなかった。また、C-6区で発見された集中か所では、土器片と石皿が近接して発見されている。

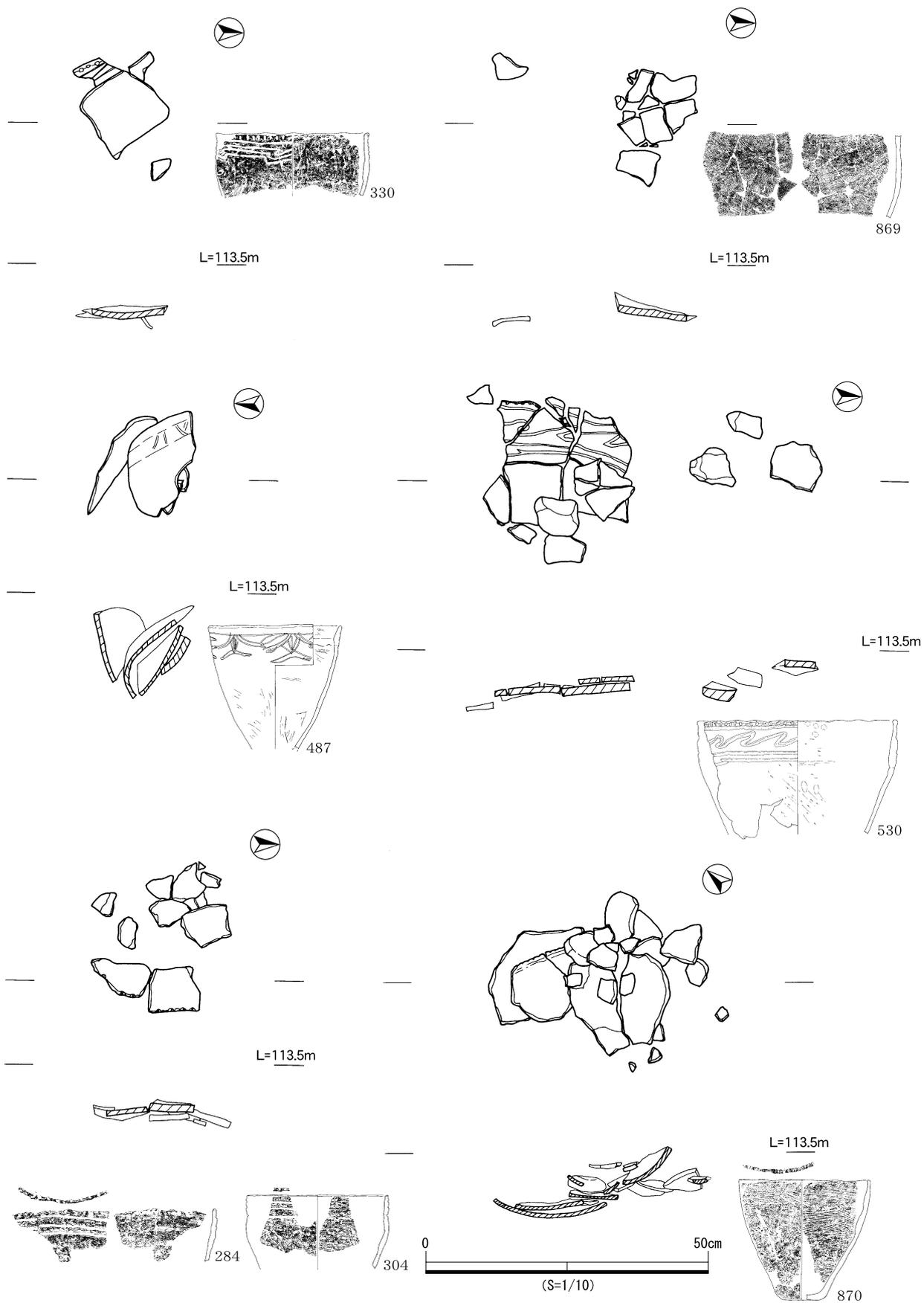
個々の遺物については、包含層出土遺物のなかで説明する。



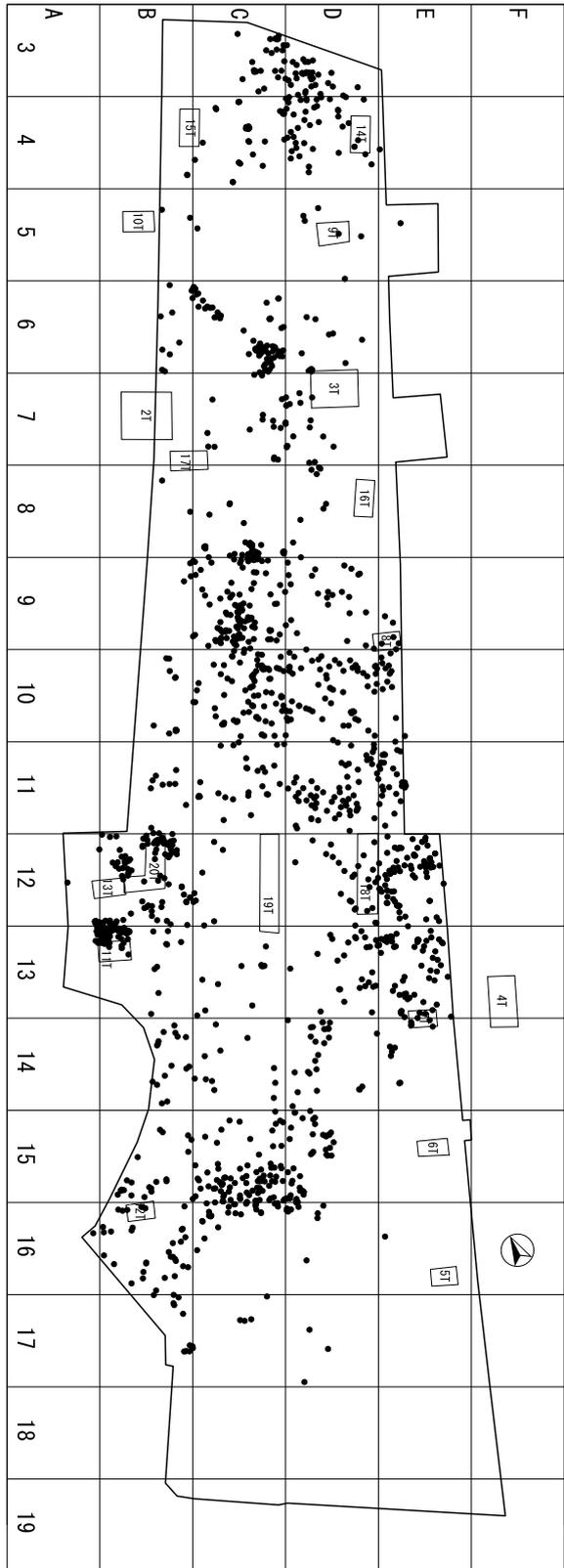
第73図 土器集中か所出土状況図（1）



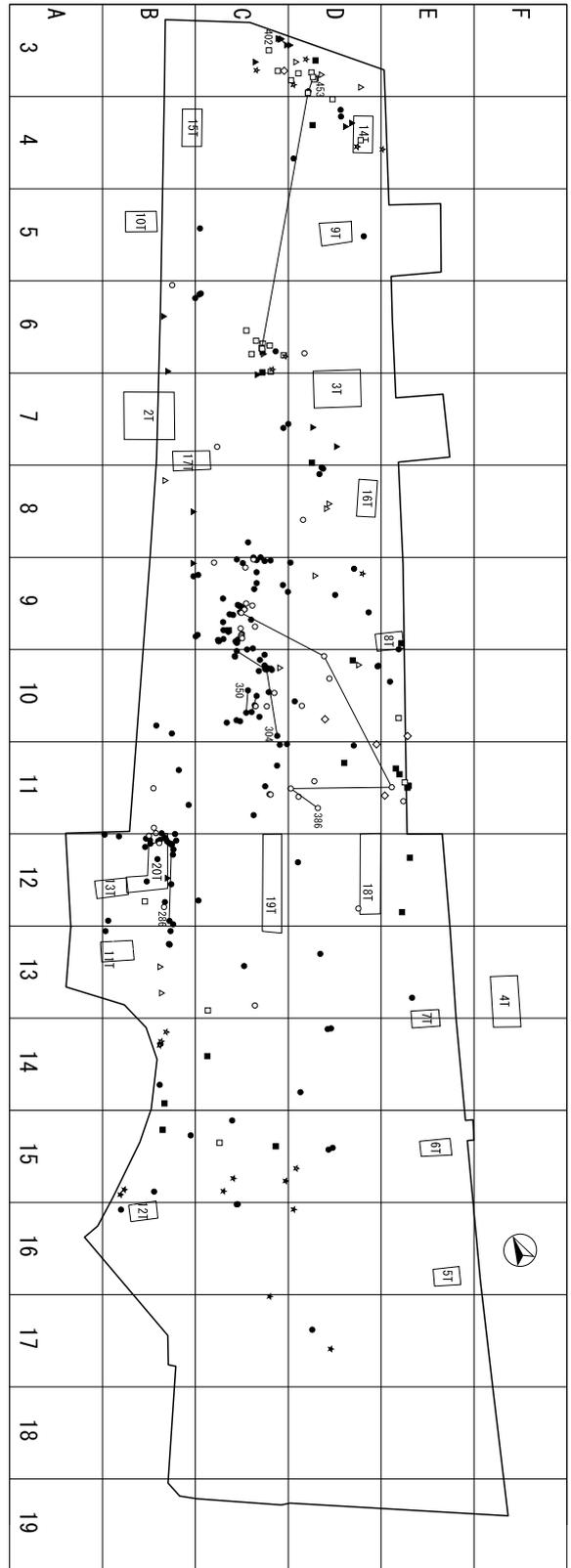
第74図 土器集中か所出土状況図（2）



第75図 土器集中か所出土状況図（3）



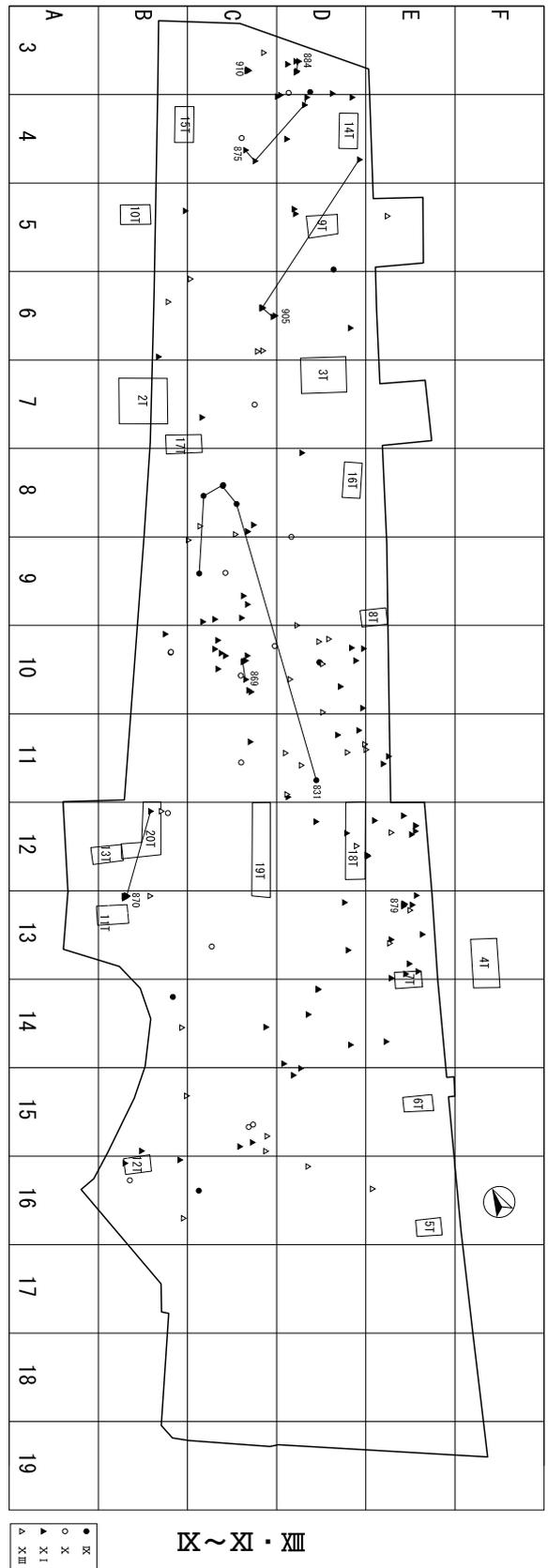
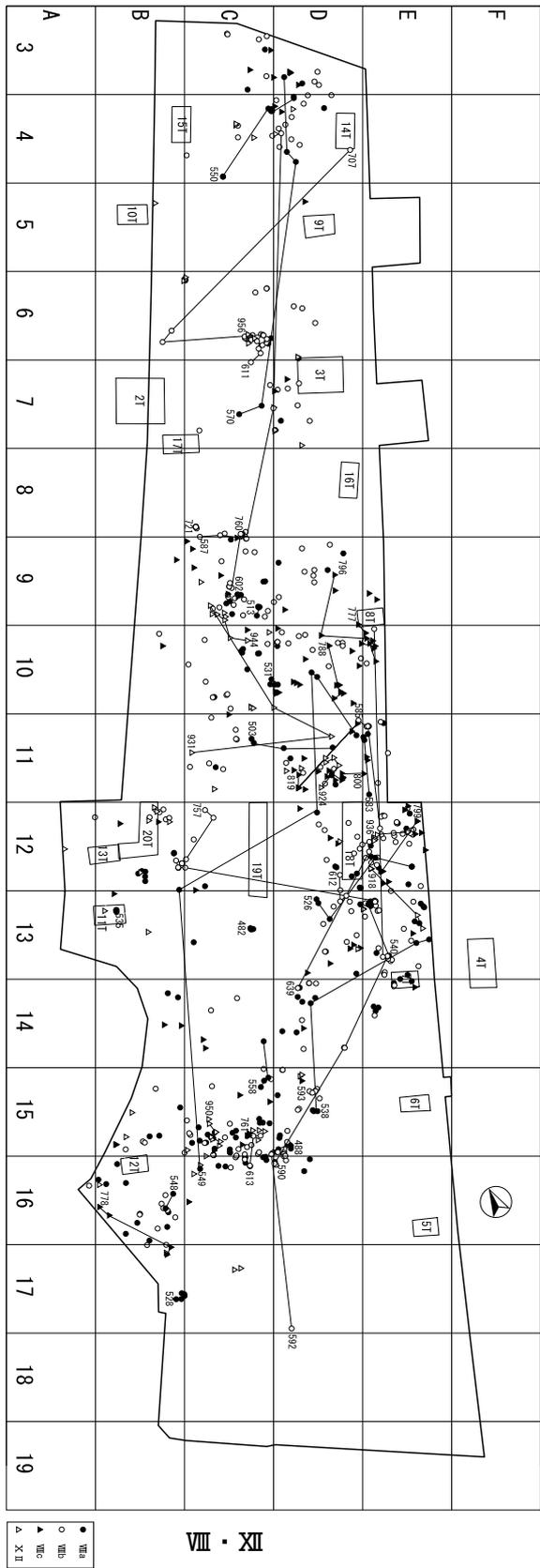
掲載土器総ドット



III~VII

- | | |
|---|-----|
| ● | III |
| ○ | IV |
| ▲ | Va |
| △ | Vb |
| ■ | Via |
| □ | Vib |
| ◇ | Vic |
| * | Vid |
| * | Vii |

第76図 縄文時代後期土器分布図(1)



第77図 縄文時代後期土器分布図(2)

イ 遺物（第78～156図）

調査区のほぼ全面にわたって、土器や石器などの遺物が発見された。特に、竪穴住居跡の分布状況と重なるように、調査区北半分から円を描くように、遺物が集中して発見されているのが、鳴野原遺跡A地点の特徴といえる。

発見されている主な土器型式としては、指宿式土器であるが、他に凹線文系土器や磨消縄文土器の範疇に含まれると考えられる資料、市来式土器と考えられる資料などもある。

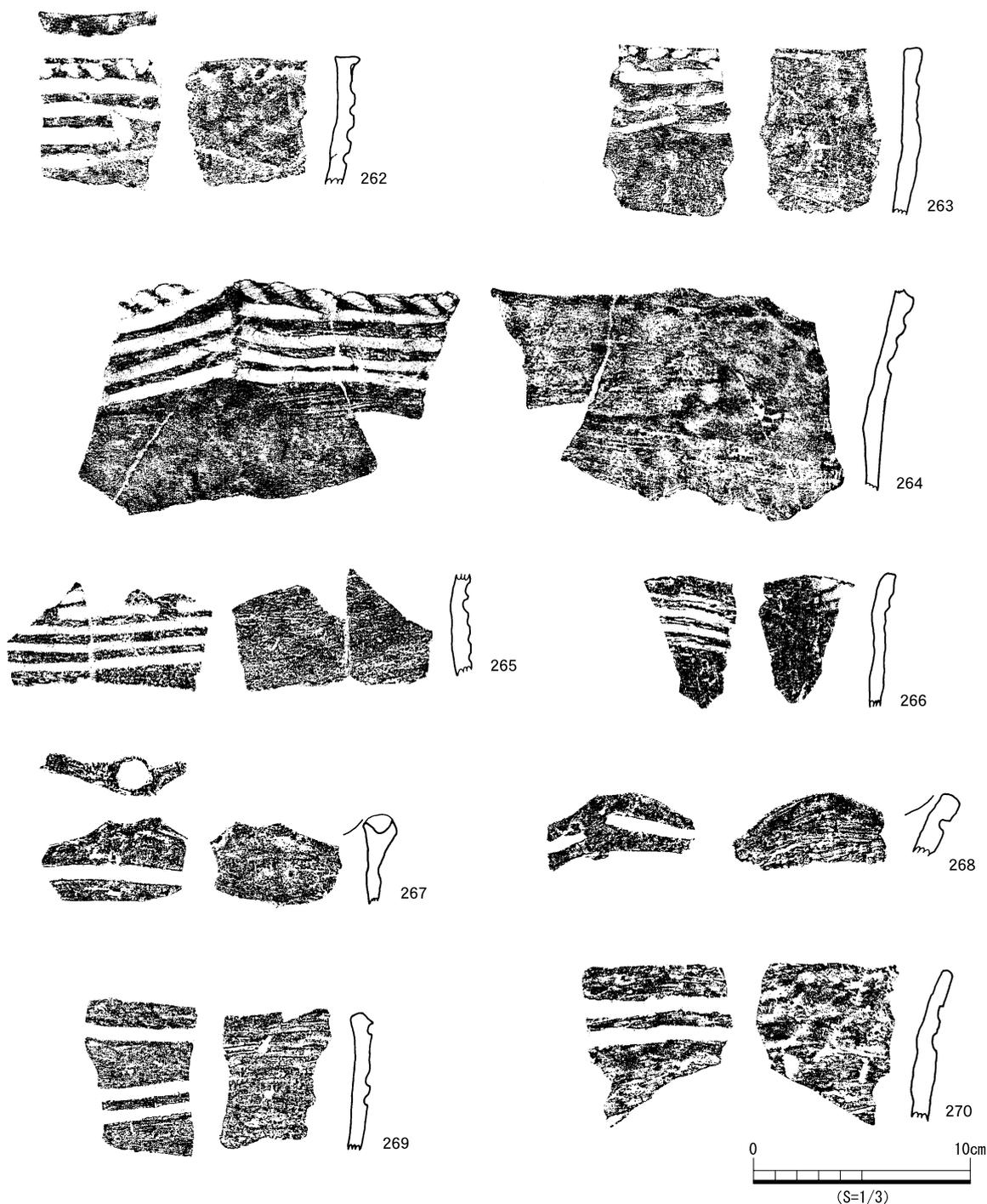
これらの資料は、Ⅲa～Ⅱ層中から混在して出土し、明確な出土レベルの差異や空間分布の粗密は認められなかった。そのため、本報告では、主に文様の違いに着目して、型式学的分類を行い、既存の型式と比較するという方法をとって、遺物の分類を試みた。そのため、既存の型式名を利用し説明している部分もあれば、ややあいまいにしている部分もある。以下、順に説明する。

Ⅲ類（第78～88図）

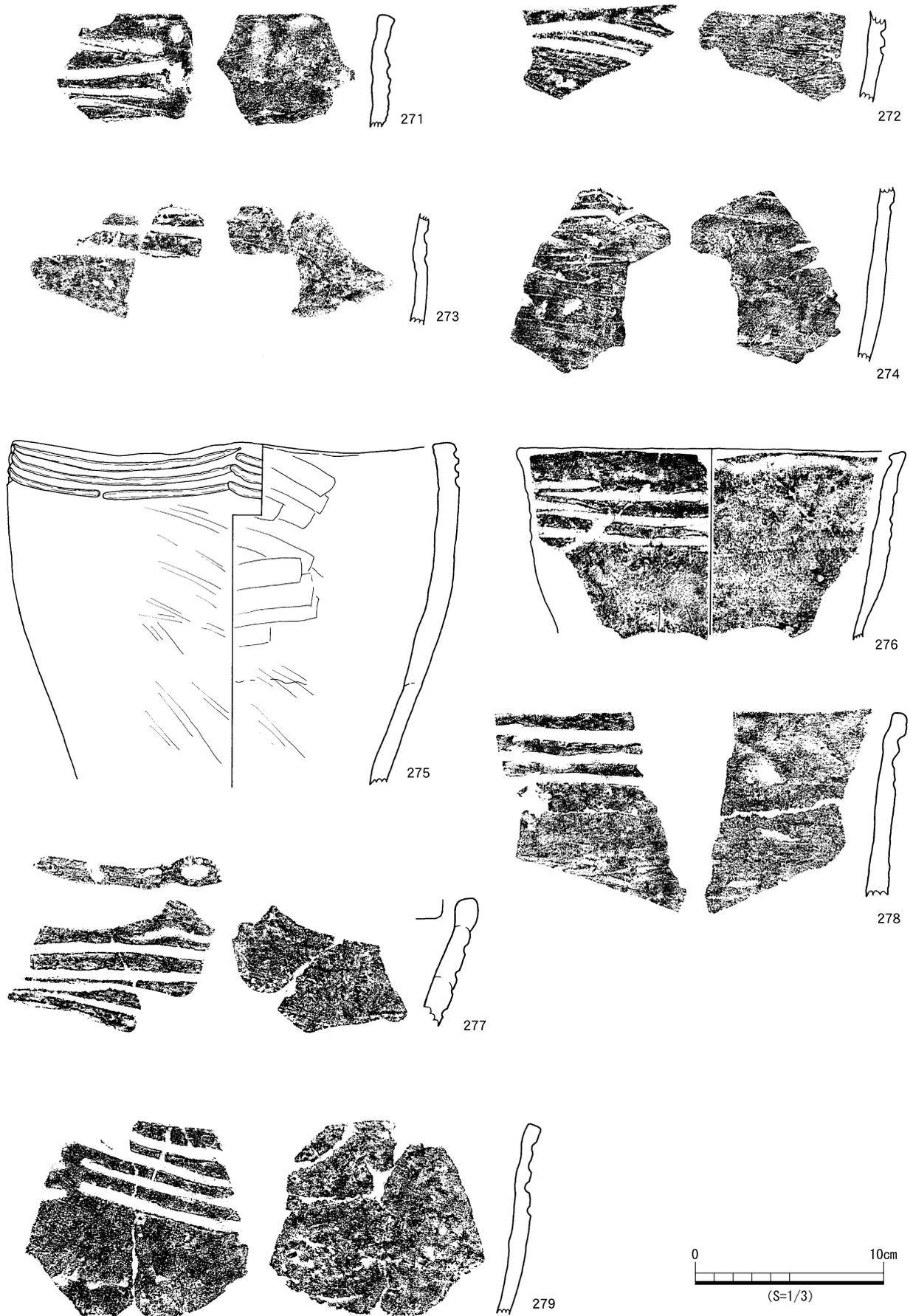
後期の項で説明するが、資料のなかには中期に比定すべき資料もある可能性がある。339は、口唇部に明瞭な平坦面を形成する。沈線を引いた後、隙間をなでて仕上げる工程をよく観察できる資料である。264は、想定される土器の大きさに比して器壁が薄い資料である。口縁部が外へわずかに開く程度で、波頂部の器壁の肥厚等の造作はみられない。丁寧な施文である。口縁部は、口唇部外端の連点文の効果により、小波状に整形されているように見える。265は、器壁の薄い資料であるが、全体的にやや劣化している。上位に施文されている断続沈線文は深く施され、下位の平行沈線文は浅く施されている。266の波頂部は、一旦作成した波頂部を指頭などで押圧して平坦面を作っている。文様は、平行沈線文と思われるが、浅く雑な施文であるため、むしろ微隆起突帯文のような仕上がりとなっている。また、波頂部と文様展開の関連も判然としない。269は、口縁端部のみ短く内湾する器形である。270は、器壁の薄い資料で、施文時の圧力により内面に生じた凹凸が観察できる。また、口縁部の2条の沈線と、資料下端に見える沈線では、施文具が異なっている可能性がある。273の胴部資料では、左下辺に補修孔を確認できる。275は、小さな波頂部を有する資料である。整形はやや雑で、沈線を引いた後の仕上げもなされていない。口唇部は平坦に整形され、連点等はほどこされない。復元口径は、約24cmである。276は、波頂部を形成しない資料と判断した。口縁部が短く外反するが、口唇部平坦面を成形した際の変形の可能性がある。断面に見える口縁内面の張り出しも、同じく口唇部平坦面を成形した際にはみ出した粘土を整形していないだけである。復元口径は約20.4cmである。277は、一旦成形した波頂部を指頭などで押圧して凹み部をつくり変化を持たせている資料である。施文の仕上げも丁寧である。278は、混和材に小礫の目立つ資料である。280は、波頂部に先端がささくれた棒状の施文具で凹点を施文している。281は、小片であり確証はないが、3条の平行沈線文を施文したあとに、別の工具で縦位に幾何学文様の痕跡を残している。偶然の結果の可能性もある。284は、全体的にやや雑な作りの資料である。口唇部の小波状の整形は、成形後の粘土の凹凸をそのまま生かした可能性がある。器壁は凹凸があるが、均等厚を基本としていると考えられ、肥厚等の造作はないと思われる。文様は、すべて同じ工具で施文されていると考えられる。口

唇部には、上からの刺突による連点が不等間隔で施文されるが、1か所だけ近接して施文されている。沈線は、ほぼ直線に引かれるが、強弱をつけているため、雑な仕上がりにみえる。285は、器壁が比較的薄く均等な整形の資料である。小波状を呈する口唇部を作り出している連点は、棒状工具の側辺端部の押圧により施されているため、点によっては、内面側が押圧されずに平坦なまま残っている場所もある。

286は、復元口径約34.0cm、口縁部に波頂部が作成されていないと考えられる資料である。

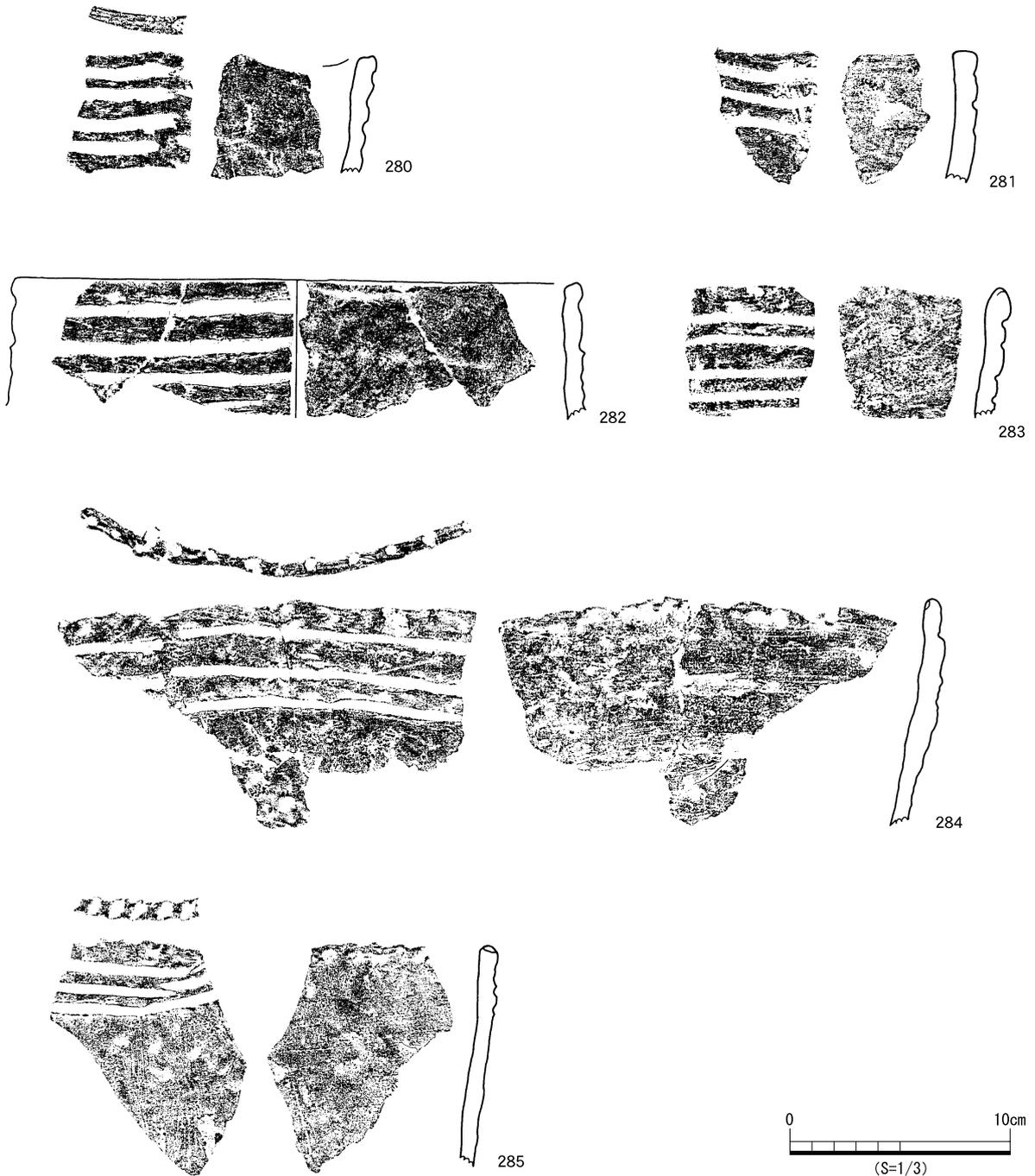


第78図 縄文時代後期土器（1）



第79図 縄文時代後期土器（2）

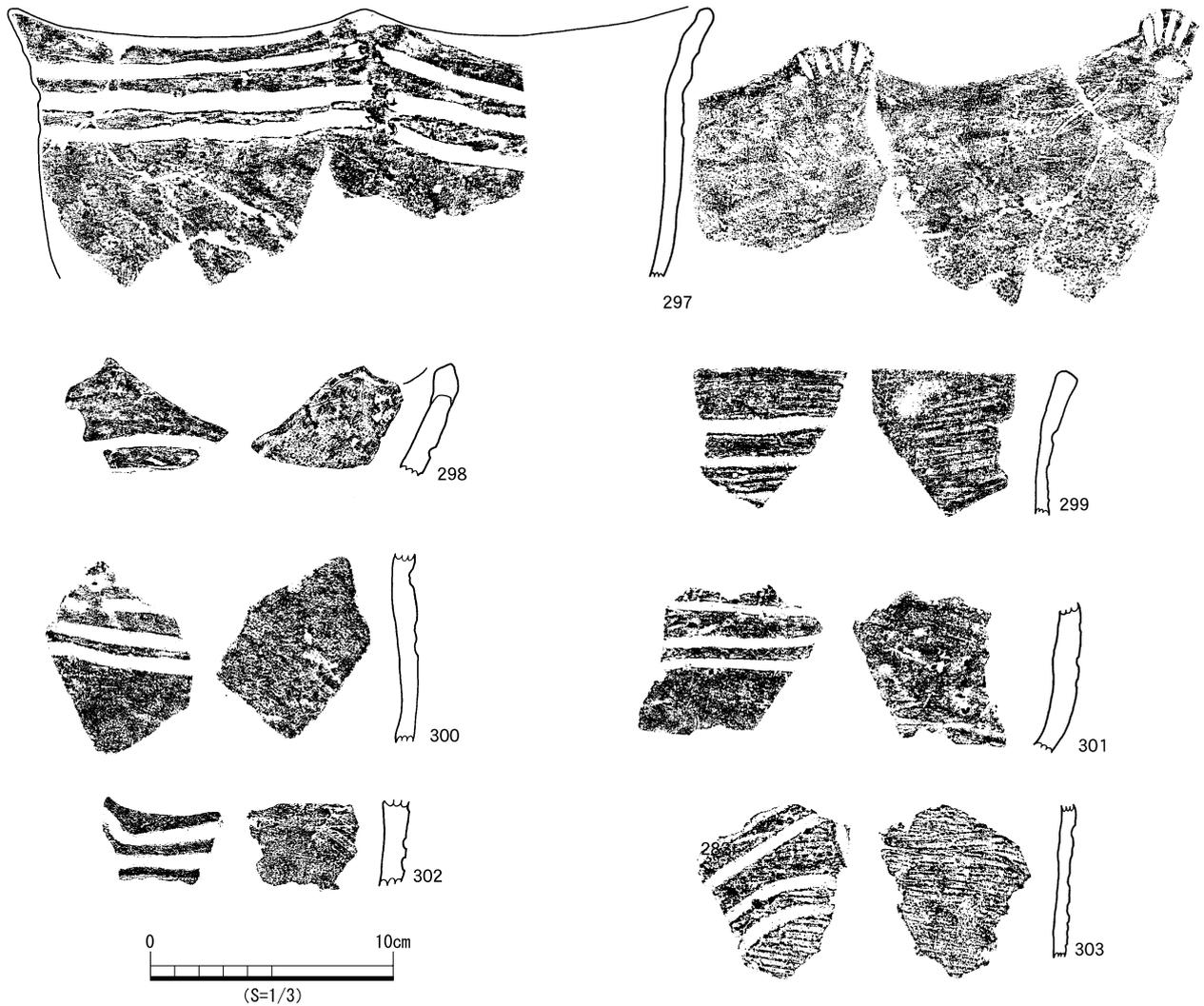
大ききの割に器壁が薄い資料で、調整は、内外面とも丁寧である。文様は、やや浅く短いものの明瞭な凹線で曲線的なモチーフの幾何学文を施文している。287は、大振りの波頂部付近の資料である。器壁は比較的薄い。内面は、粗いナデ調整で仕上げられているためにやや角張っている。波頂部は、肥厚させたり外反の角度を変えたりといった器形変化はなく、ただ山形に口縁が延びるような整形により形成されている。文様は、深く明瞭な凹線で曲線的な幾何学文を施文するが、小片のため文様展開等の詳細は不明である。295は、口縁部に1回捻った粘土紐を貼り付けている。貼り付けの様子は、内面側から観察すると判るが、外面



第80図 縄文時代後期土器（3）



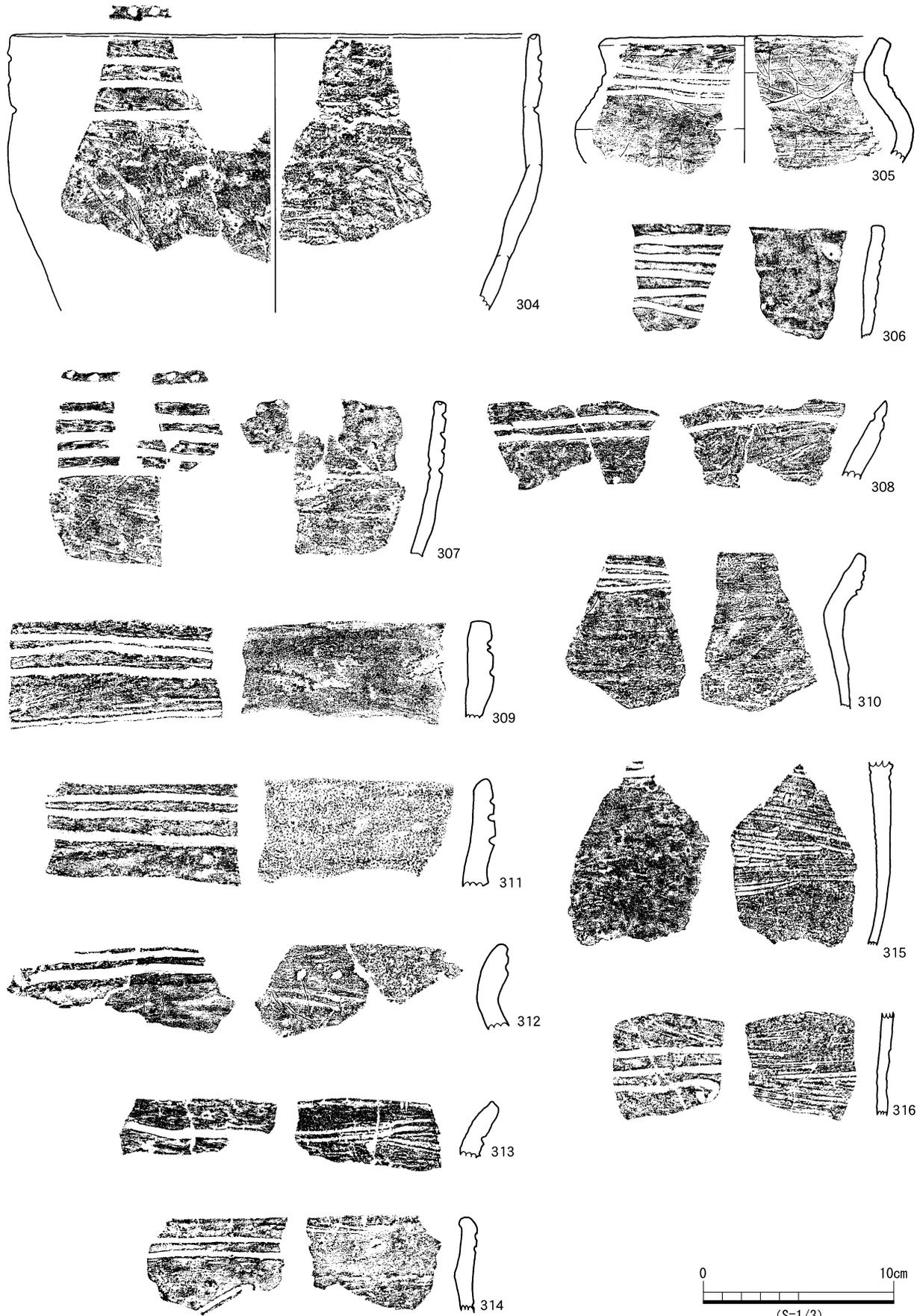
第81図 縄文時代後期土器（4）



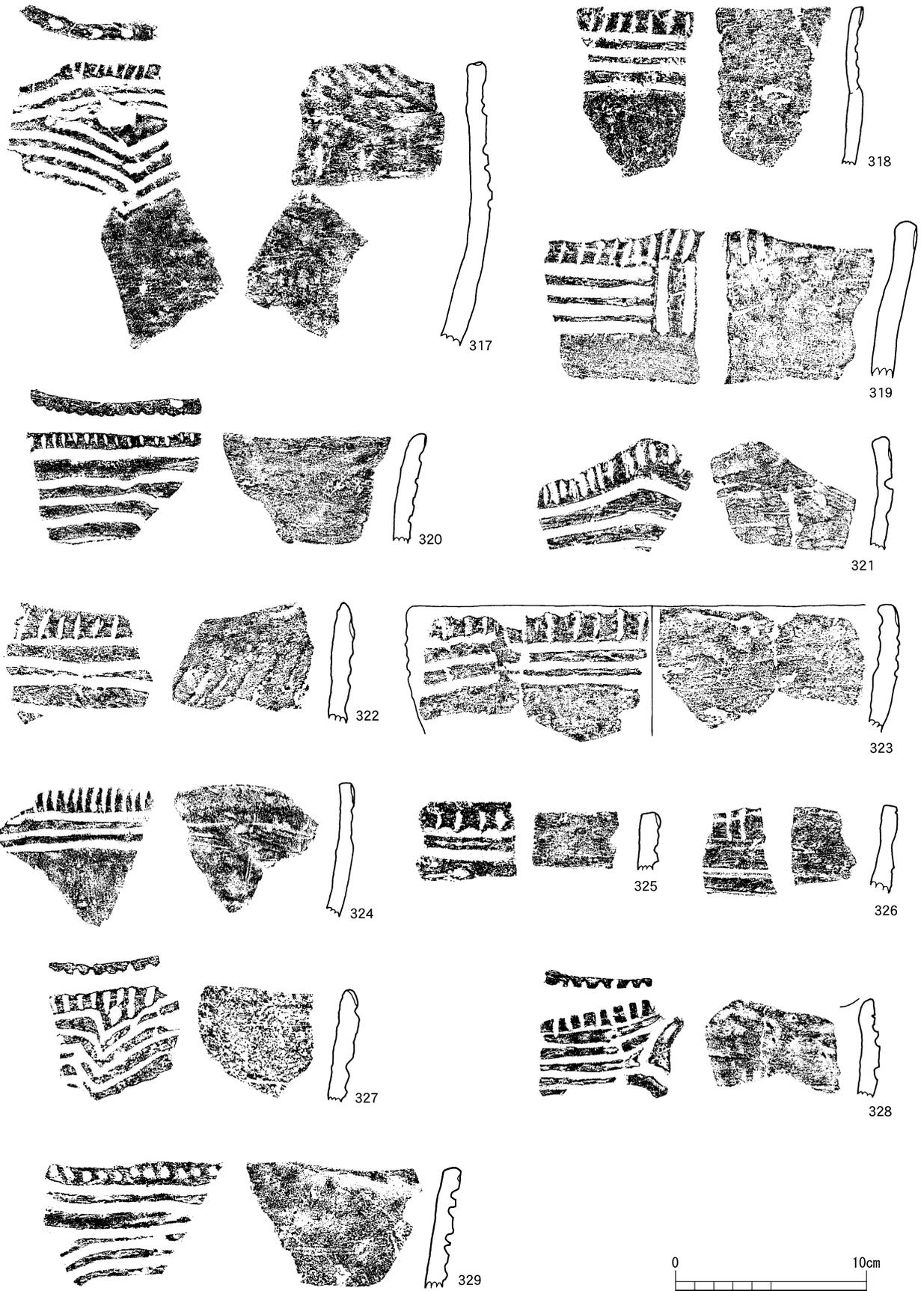
第82図 縄文時代後期土器（5）

側からはあまり目立たない。290も、波頂部の資料と考えられる。成形・整形とも丁寧な仕上げである。口縁部は、内面側を、ある程度広い幅でわずかに帯状に肥厚させているが、波頂部と考えられる部分のみ、内面側に押し出すような整形がなされているためか、やや薄くなっている。文様は、深く明瞭な凹線で曲線的な幾何学文を施文するが、波頂部下に渦文を施文するなど、器形変化に対応した文様展開となっていると思われる。292は、290と器形や文様展開が類似するが、施文の特徴にやや相違が認められたため、とりあえず別個体として掲載している。296は、胴部資料である。混和材の砂粒の多さが目立つが、整形や施文は丁寧に仕上げられている。渦文状のモチーフを施文して、文様に変化を持たせている。

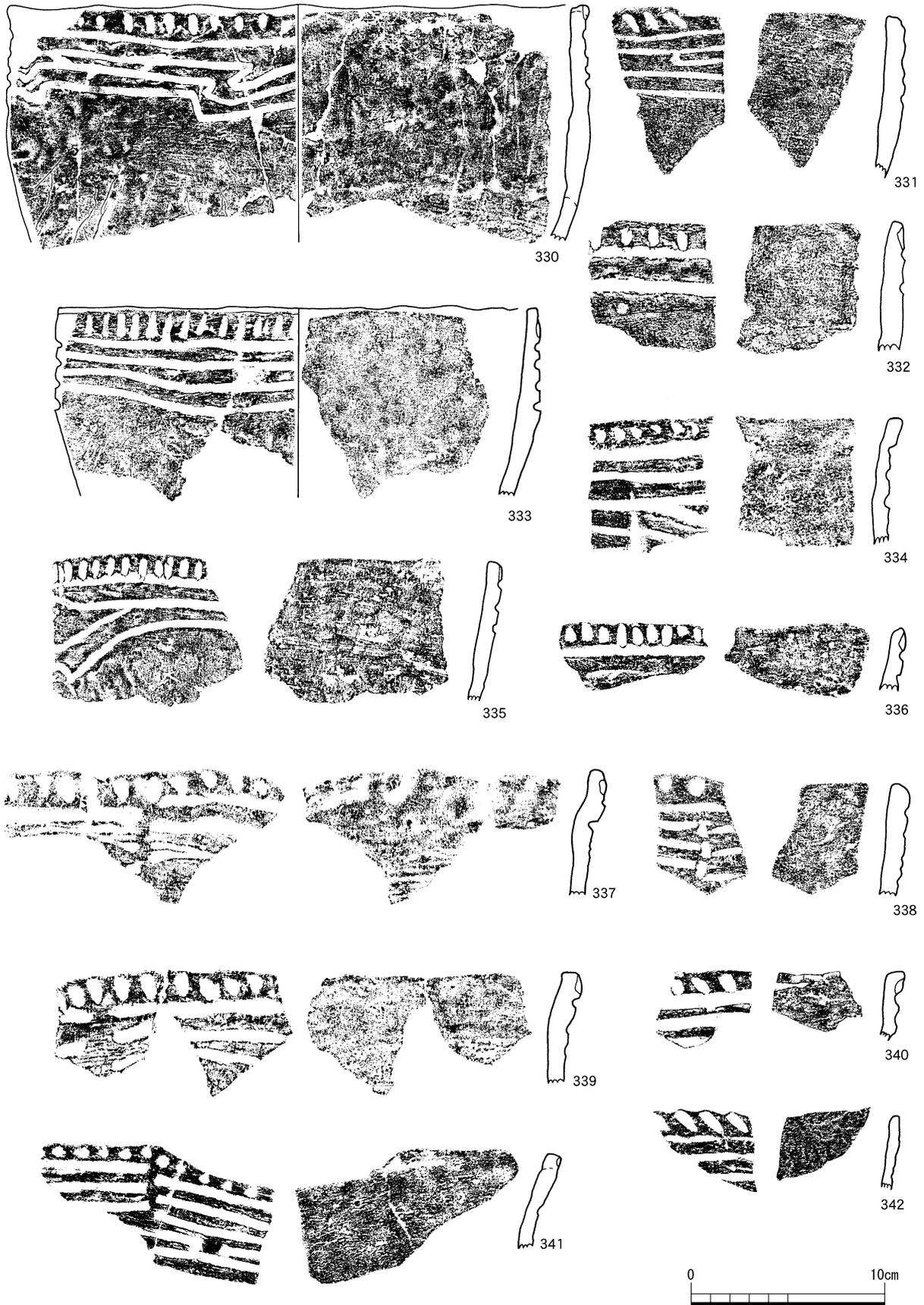
305は、小形鉢のような器形で、口縁部における波頂部の有無は不明である。器面調整は丁寧な仕上げであるが、凹線はやや不明瞭な引き方であることに主眼を置けば、指宿式系の範疇に含まれるべき資料とも思われる。308も、凹線の引き方がやや粗いが、口唇部形状を細めの舌状に整形しているのが特徴である。309・311は、器面が劣化しているため詳細は不明であるが、器形、胎土や施文の特徴などから、同一個体の可能性が考えられる資料である。



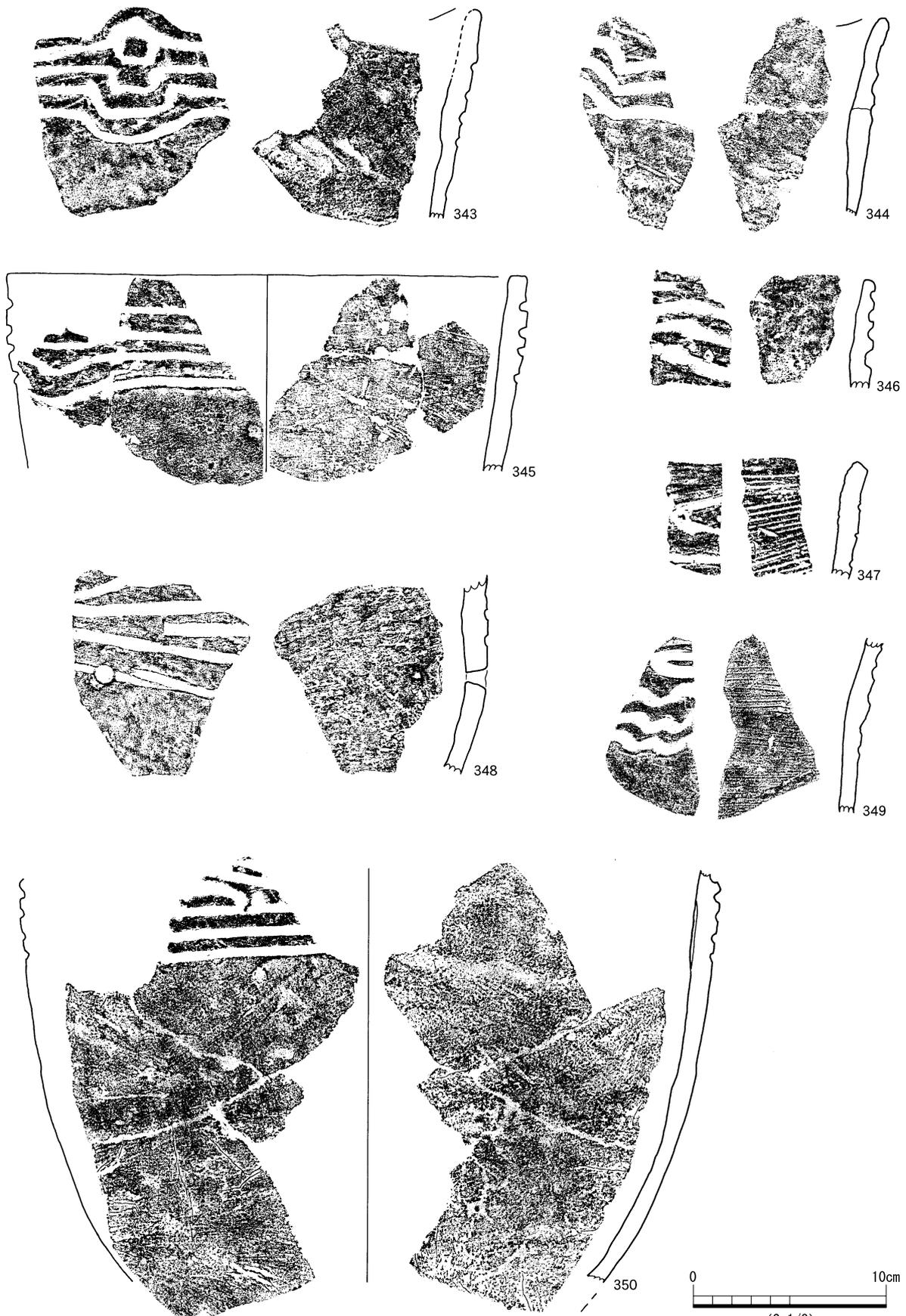
第83図 縄文時代後期土器（6）



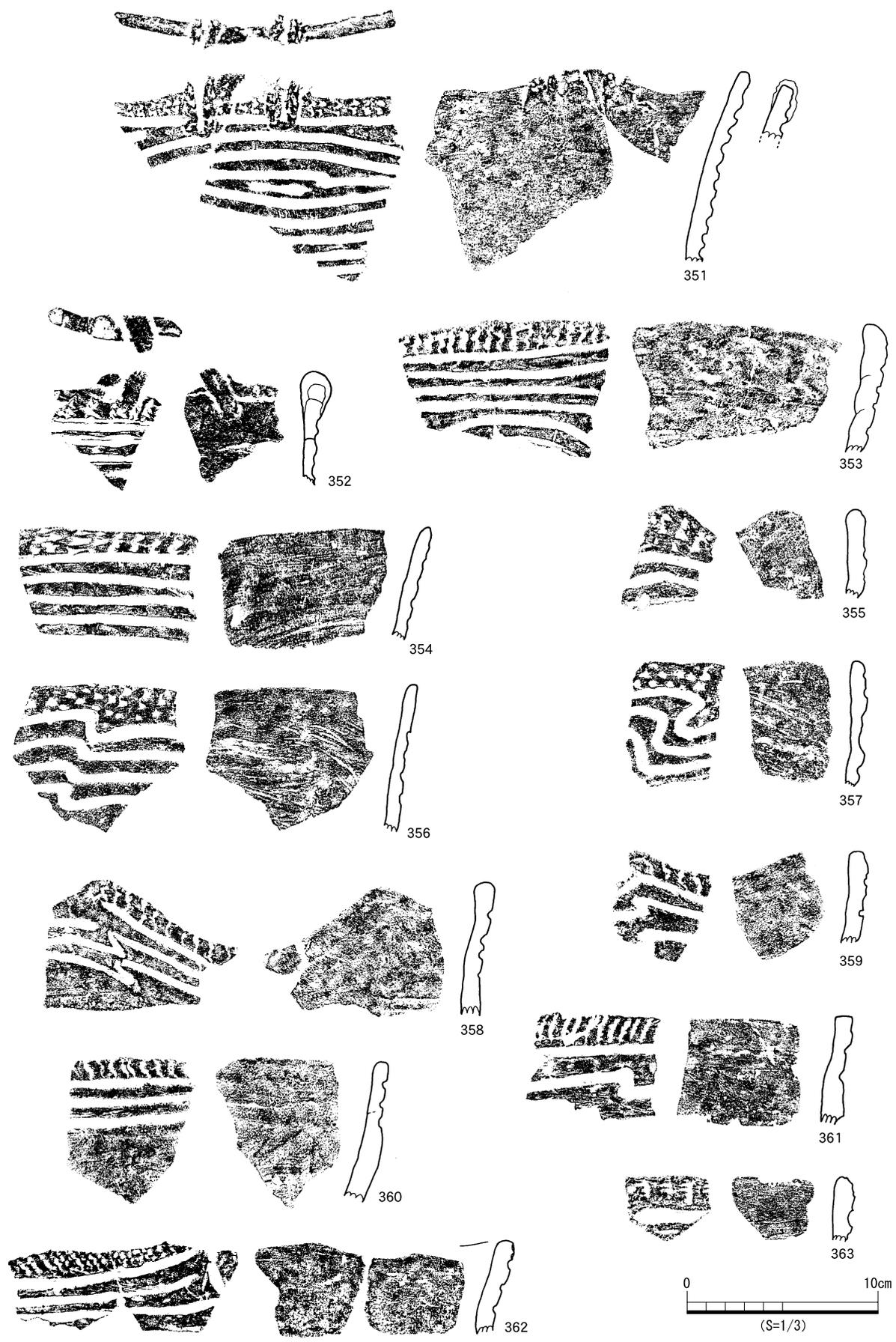
第84図 縄文時代後期土器 (7)



第85図 縄文時代後期土器 (8)



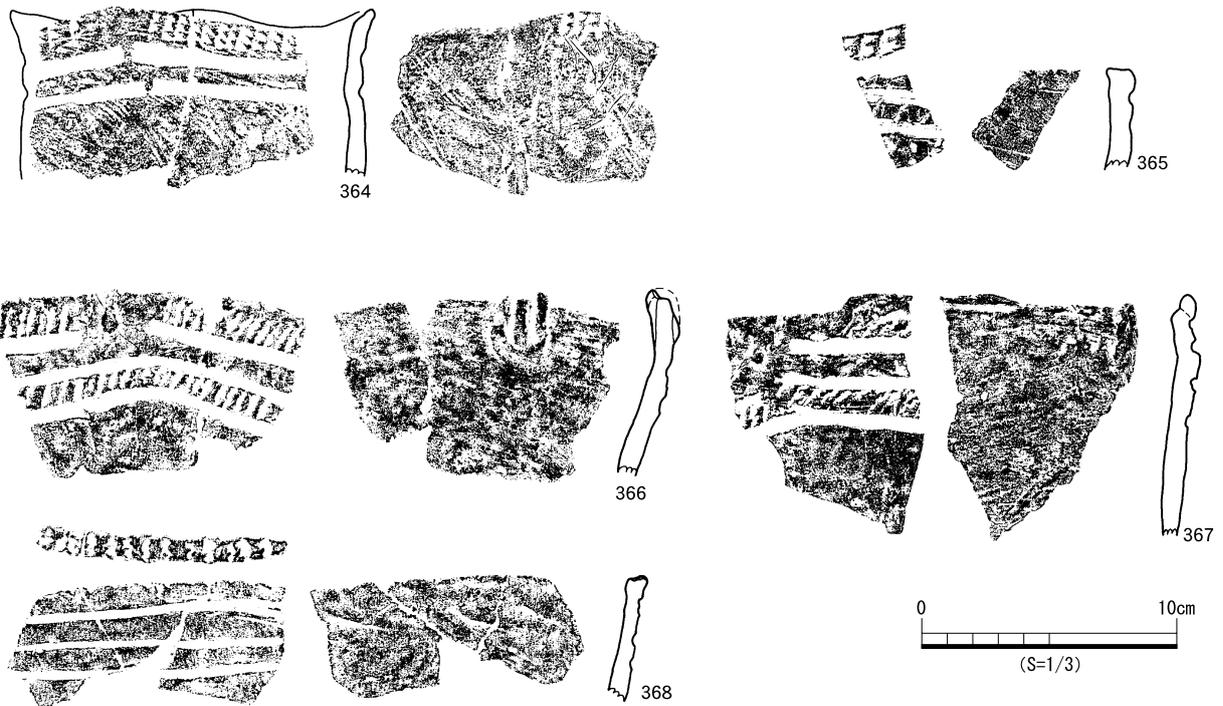
第86図 縄文時代後期土器 (9)



第87図 縄文時代後期土器 (10)

口縁部は、外側を、帯状にある程度の幅でわずかに肥厚させている。文様は、やや粗い引き方ながら3条の明瞭な凹線で平行凹線を施文するほか、資料下端の破断部にも凹線が1条確認できる。

第84図は、口縁端部が、縦に長い刻目で施文されている資料をまとめた。317は、台形状に口縁部が隆起する資料である。口縁端部の刻目はやや短い。文様は、口縁部形状に対応した展開であると考えられる。口唇上端にも、刺突が連続している。319も、口縁部に台形状の隆起が形成されると考えられる資料である。口唇部には施文等はないが、明瞭な平坦面を形成している。文様は、明瞭な凹線を縦横に組み合わせた文様を施文する。隆起部に対応した文様展開をしているようである。隆起部内面には、上端から刺突するように施した沈線を3条観察できる。320は、口縁端部の刻目が短いほか、凹線も、浅くやや乱れている。口唇部平坦面の形成もやや不完全である。327・328は、他の凹線文系の資料と施文のタイミングが異なるようで、文様周辺の胎土の乱れが顕著である。文様展開と器形変化との対応は小片のため不詳である。330は、口縁部に波頂部などは作られていないと考えられるが、口縁部に成形時の凹凸を残していることから、波状装飾的効果を意図しているとも想定される。復元口径は約30.0cm。器面は、ナデ調整が施されるが、指頭押圧の痕跡を観察できるほか、特に内面の調整は、口縁部内面のみ縦位の調整も施されている可能性がある。文様を描く沈線は、明瞭だがやや粗く引かれる。333は、口唇部上端を平坦に仕上げている意識している整形がなされているが、成形時の凹凸は残している。文様は、深く明瞭な沈線で単純な平行凹線文が施文されている。口唇外端の連続凹点は、平行凹線文の施文後に施されていると考えられる。復元口径は約24.6cmであるが、資料がやや小さいため若干の誤差を含む。



第88図 縄文時代後期土器 (11)

328・329・334は、平行凹線文の文様展開を想像させる資料である。334の沈線はやや浅いものの、いずれも明瞭に引かれる。平行凹線文は、資料中央付近から、レンズ状に施文方向が変化している。また、口唇外端の施文は、凹点ではなく連点で施されている。

335は、大きさに比して器壁の薄い資料である。これは、内面が粗いナデ調整で仕上げられていることと関連する可能性も想定される。文様を描く沈線は、深く明瞭に引かれている。また、沈線で口縁部文様を施文した後に、口唇外端の連続凹点を施文していることが判る。

337は、凹線文系に分類しているが、口唇外端がやや外へ張り出す器形や胎土、施文のタイミングなどが他の資料と異なる資料である。口唇外端の器形は、連点施文による可能性が想定される。文様を描く沈線は、粗くやや不明瞭であるし、連点は、下方から突き上げるように施されている。

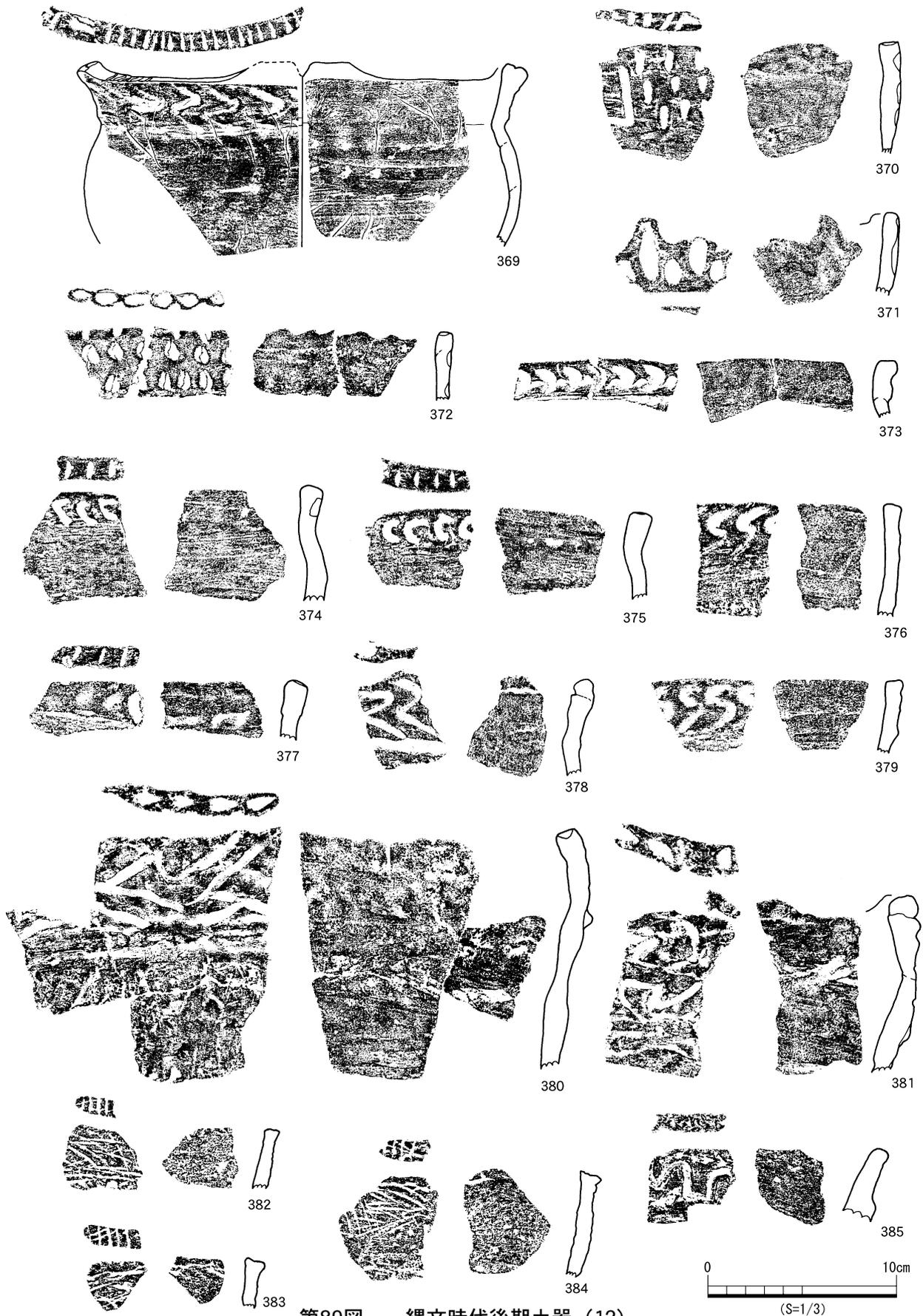
341は、台形又は小波状の口縁部装飾がある資料である。文様は、浅いが明瞭な凹線で平行凹線文が施文されていて、口縁部装飾と文様展開が対応している可能性がある。

ここからは、口縁部外端の連点が、貝殻刺突によって表現されている資料について説明する。356や357は、平行沈線文を変化させて流水文のように施文しているが、口縁部形状とは対応していない。一方、358・359や362は、波頂部資料であるが、口縁部形状と文様展開が対応している。364は、波頂部のみ小さく外反させている。口唇部は舌状に整形している。外面の調整に貝殻を使用しているのが特徴的である。復元口径は約14.2cm。366と367は、同一個体の可能性がある資料である。平口縁の可能性があり、口縁部には、縦位に3本単位で粘土紐が貼り付けられているほか、口縁部に平行に横位にも粘土紐が貼り付けられている。また、沈線間を貝殻刺突で充填させる文様は、磨消縄文を類推させる施文である。386は、貝殻刺突を施した後に多条の平行沈線文を施文している。平行沈線文で何らかのモチーフを描いていると思われるが、判別はできない。口縁部に小波頂部を作り、その両脇に沈線文を施文してから粘土紐を貼り付けている。粘土紐は、幅が広くかつ中央を凹ませているため、2本組のように見える。

IV類（第89・90図）

369から385までの17点を図化した。口唇部断面をほぼ方形に仕上げ、屈曲又はわずかに肥厚させた口縁部を作り、そこに、太めの沈線でS字状やC字状の沈線文を連続して施文したり、太く短い連点文を施文している等の資料をまとめた。従来の型式では、出水・南福寺式土器の範疇に含まれると考えられる。

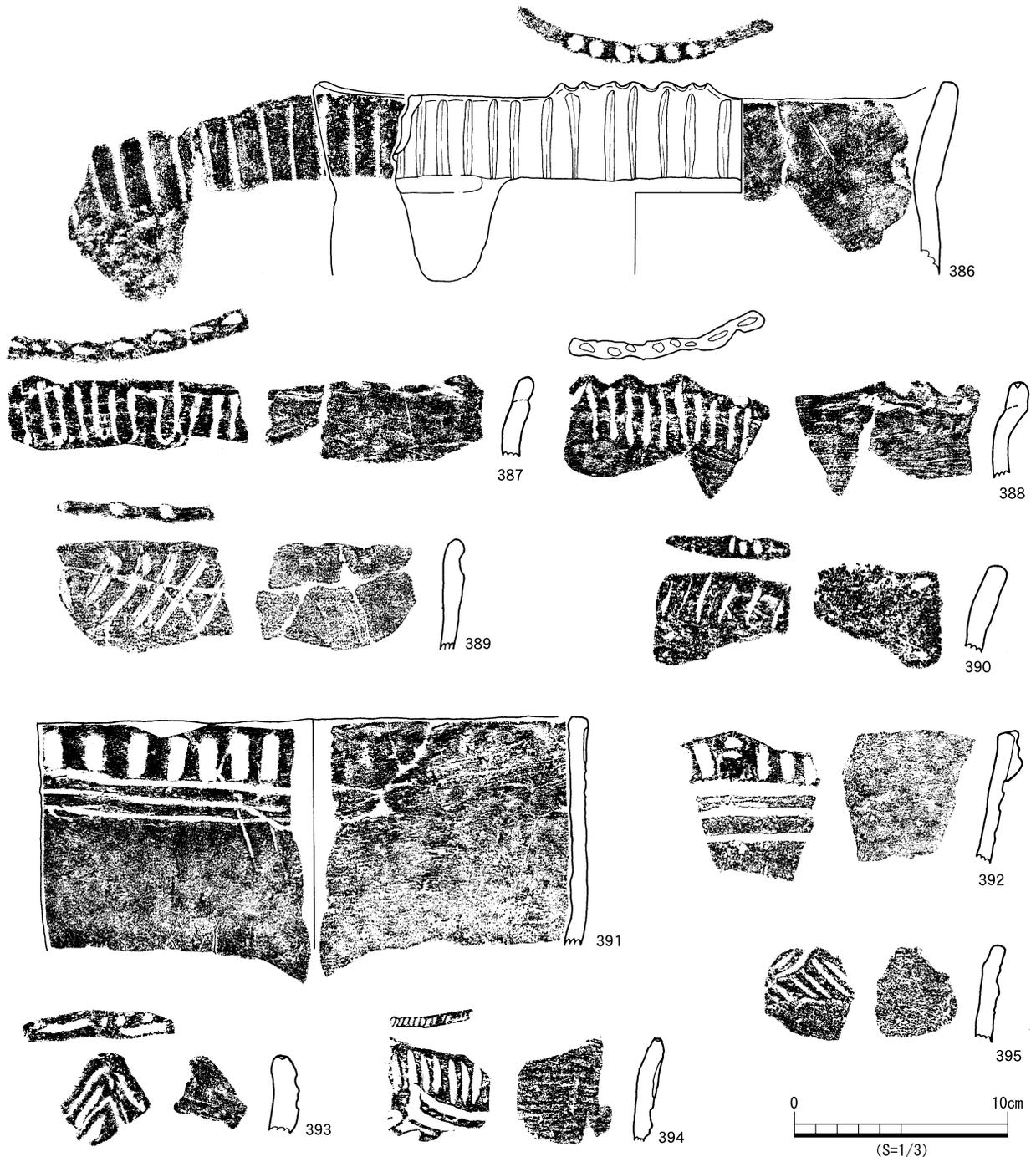
369は、復元口径約23.2cmで、やや球胴形の器形で、成形・整形とも丁寧である。口唇部は断面方形で、口縁部はやや肥厚させている。口縁部突起は、粘土紐を貼り付けて整形し作られている。4か所と想定したが、2ないし3か所の可能性もある。文様は、肥厚させた口縁部に、太いが浅い沈線で逆S字状の沈線文を口縁部に平行して整然と施文している。頸部には、口縁部の肥厚を強調し施文部を区画するように、凹線が1条巡る。370は、施文部とそれ以外では、器面調整の技法が異なっている。外面調整の変化によって、施文部を強調している可能性がある。373は、口縁部に、小振りだが明瞭に肥厚帯を形成している。また、口唇部外端の成形と逆C字の沈線文を組み合わせている点も特徴的である。374は、深く引



第89図 縄文時代後期土器 (12)

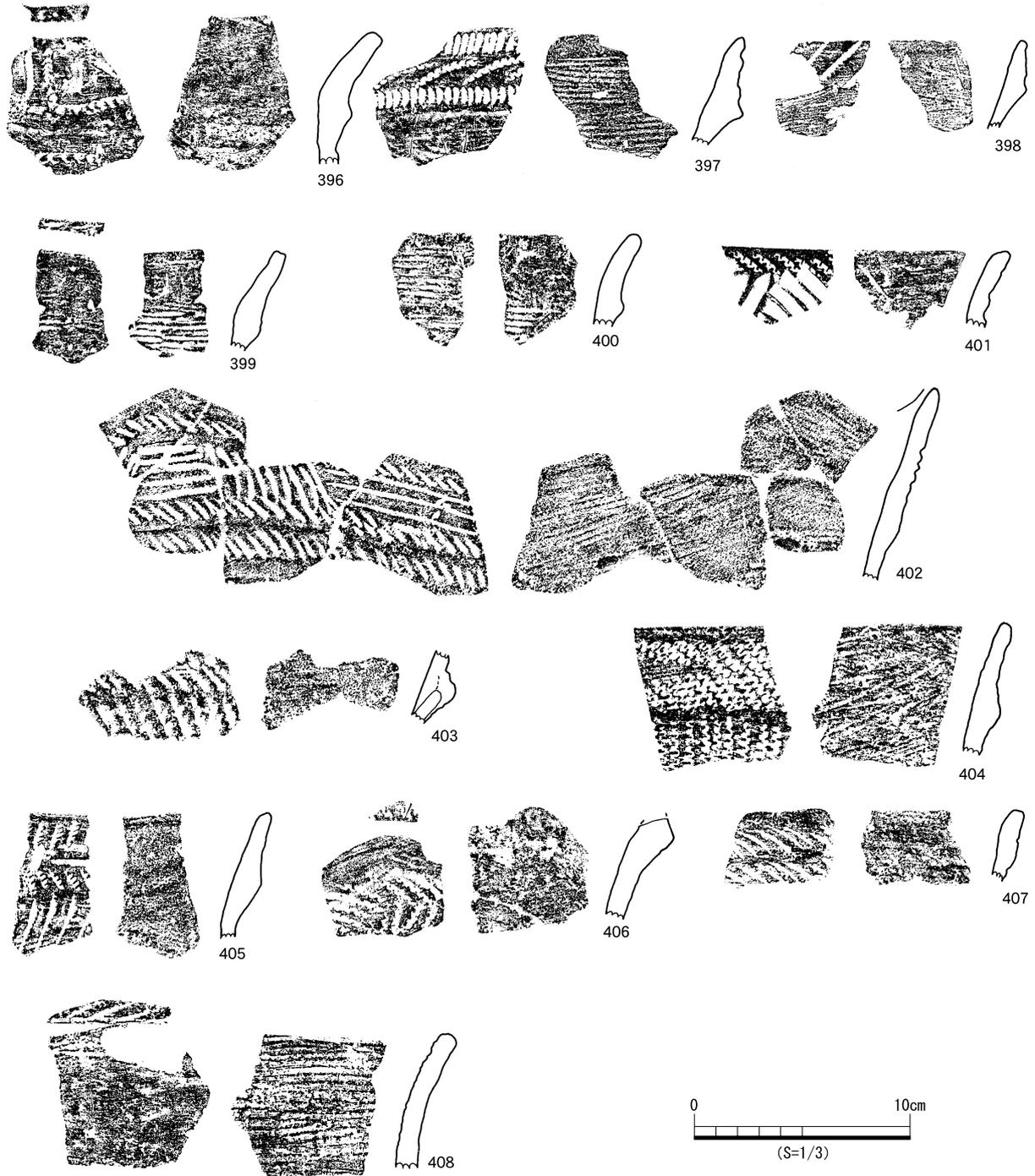
いた沈線でC字の沈線文を施文しているが、施文に際し内側から器壁を支えたかのように、文様に対応した箇所が軽く凹んでいる。376は、口縁部に肥厚帯は形成されないが、370と同様、外面調整が施文部とそれ以外で異なっている。378は、口唇部に粘土紐を貼り付けて突起部を作り出すが、施文に変化はみられない。

380・381・385の3点は、口縁部下位に突帯を1条巡らせて区画し、文様を施している点は上記の資料と類似するが、成形・整形ともにやや雑で胎土や焼成も異なっている。施文される文様も、軽く引いた不明瞭な沈線で鋸歯状文や曲線的な幾何学文を施文している。



第90図 縄文時代後期土器 (13)

386は、胎土に角閃石が目立つ資料である。口縁部は、わずかに肥厚させて文様帯を作り出している。整形、施文とも丁寧に施されている。復元口径は約30.2cm。387・388・389や390も386と類似する資料と考えられる。351は、口縁部の連続短沈線文の下端が、部分的に繋がってU字状になっているほか、389や390は、沈線文が簡略化されている。391は、便宜上、ここに分類した。器形や胎土の特徴は凹線文系に類似するといえるが、口縁部の連点は板状工具で施された文様であり、その下位に施文されている平行沈線文は、浅くやや不明瞭である。復元口径は約25.8cm。



第91図 縄文時代後期土器 (14)

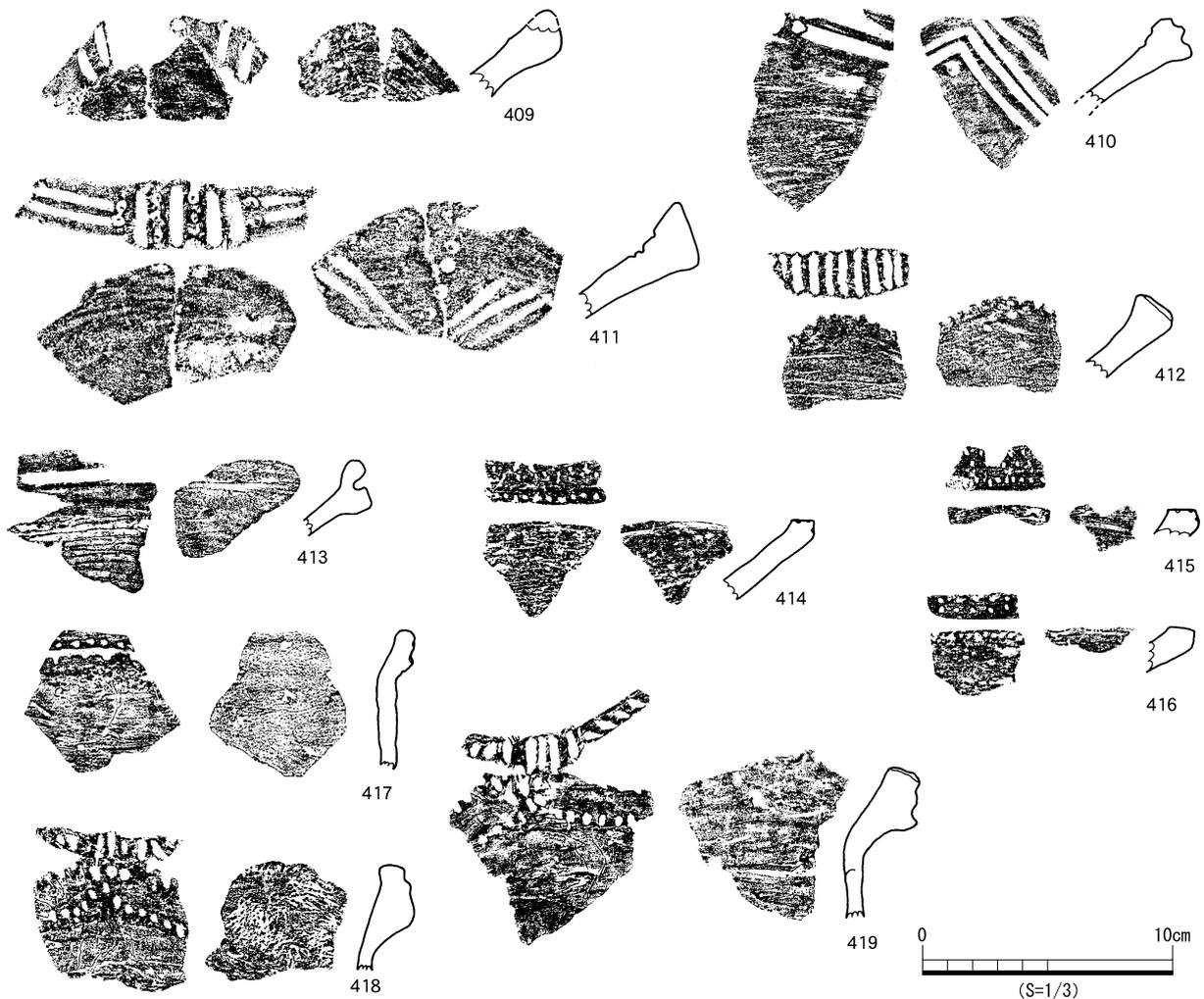
V類 (第91図)

396から408までの13点を図化した。くの字に肥厚した口縁部に、貝殻刺突や沈線を施文している資料をまとめた。胎土に雲母を含む資料が多い傾向にある。従来の型式では、市来式土器の範疇に含まれると考えられる。

396は、くの字に外反、肥厚した口縁部に、断面角形の工具の端部を押し当てて押引文状の文様にみえる連点文と、器面がほぼ乾いた段階で施文された曲線文を施す。連点文は、南西諸島の土器の文様を彷彿とさせる特徴である。398は、口縁部に斜位の貝殻刺突文を施文している。小片であることを差し引いても、軽い資料である。403から407の5点は、口縁部の肥厚はあまり形成されないものもあるが、斜位の貝殻刺突文で主な文様が構成されていて、胎土に雲母や石英粒が多く含まれる資料である。408は、胎土、焼成や器面調整等の特徴は403など5点の資料と類似するが、斜位の貝殻刺突文が口唇部上端に施文されるという異なる特徴がある。

V b類 (第92図)

409から419までの11点を図化した。口縁部は大きく直線的に開き、端部がくの字状にや



第92図 縄文時代後期土器 (15)

や肥厚する。文様は、肥厚した口縁端部や口縁部内面に施文される。市来式土器様式にある台付皿形土器の範疇に含まれるかと考えられる。この分類の典型的な資料は、410や411としたい。成形・整形・施文いずれも丁寧仕上げられている。文様は、竹管状の工具で明瞭な沈線を引き、内面には幾何学文、口縁部には沈線文を施す。沈線の端部には凹点を施し、文様を複雑にしている。414・415・416の3点は、器形や胎土等の特徴から、同一個体の可能性がある。器形や施文部位の点では410や411などと類似するが、口縁部の整形や施文具と文様については、異なった特徴を持っている。

418・419は、波頂部資料で、肥厚した口縁部の上下端に連点を巡らしている。417は、肥厚させた口縁部の中央に沈線を引き、その上下に連点文が施されている。

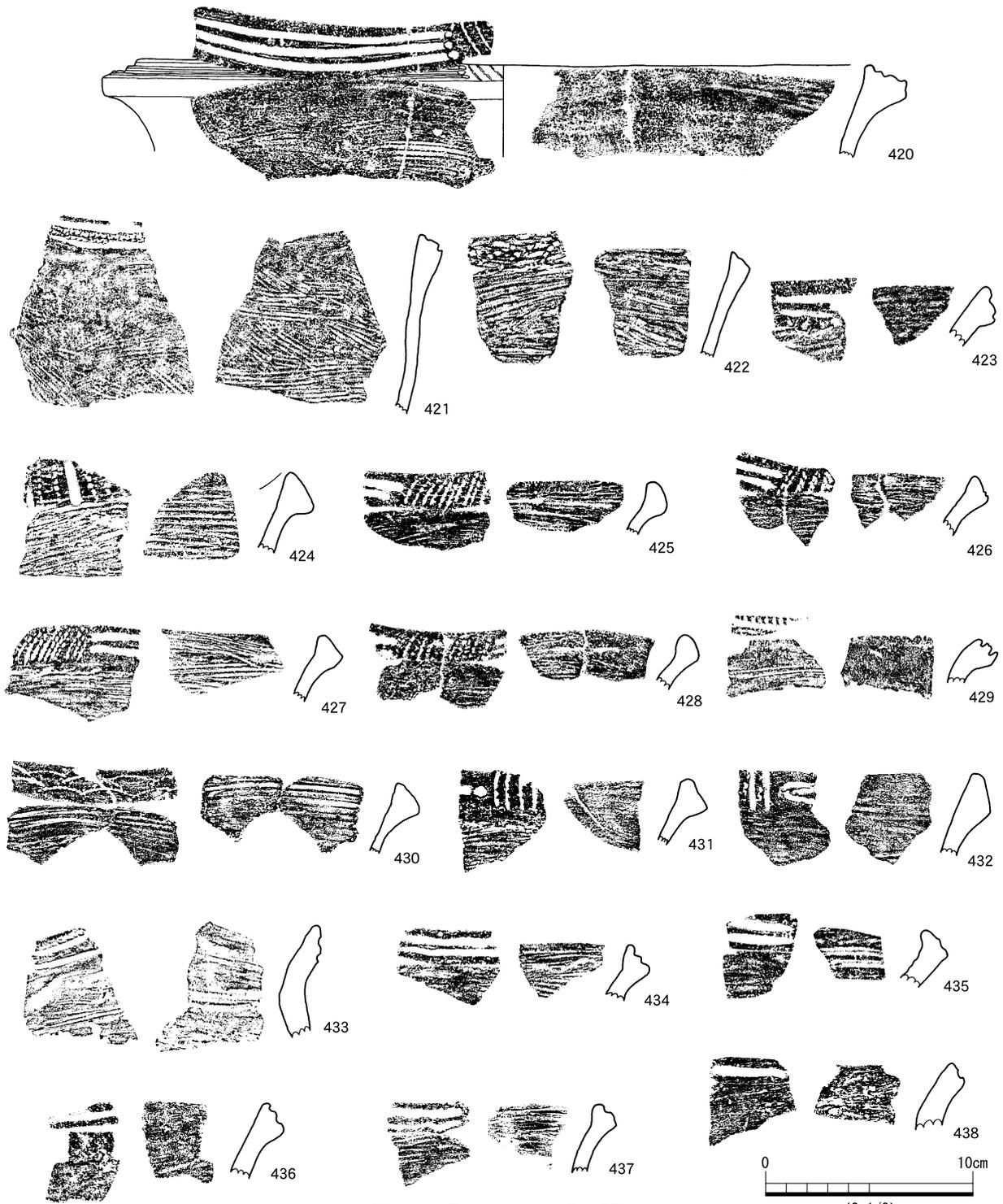
VI類 (第93～96図)

420から471までの52点を図化した。第94図439から444のように、口縁部が短く外反し、より大きく整形された肥厚部に沈線文や連点文が施文される資料、第94図445から453のように、口縁部形状は第93図の資料と類似するものの、文様が口縁部内面に施文される資料と、第94図のように、口縁部が、直線的またはわずかに湾曲しながら外に開き、端部がくの字状に肥厚して小さな平坦面を形成する器形に、丁寧に繊細な沈線文や貝殻刺突文を施文している資料、さらに第95図にまとめた特徴を有する資料などに細分される。なお、程度の差はあるが、器面調整は、基本的に貝殻条痕である。

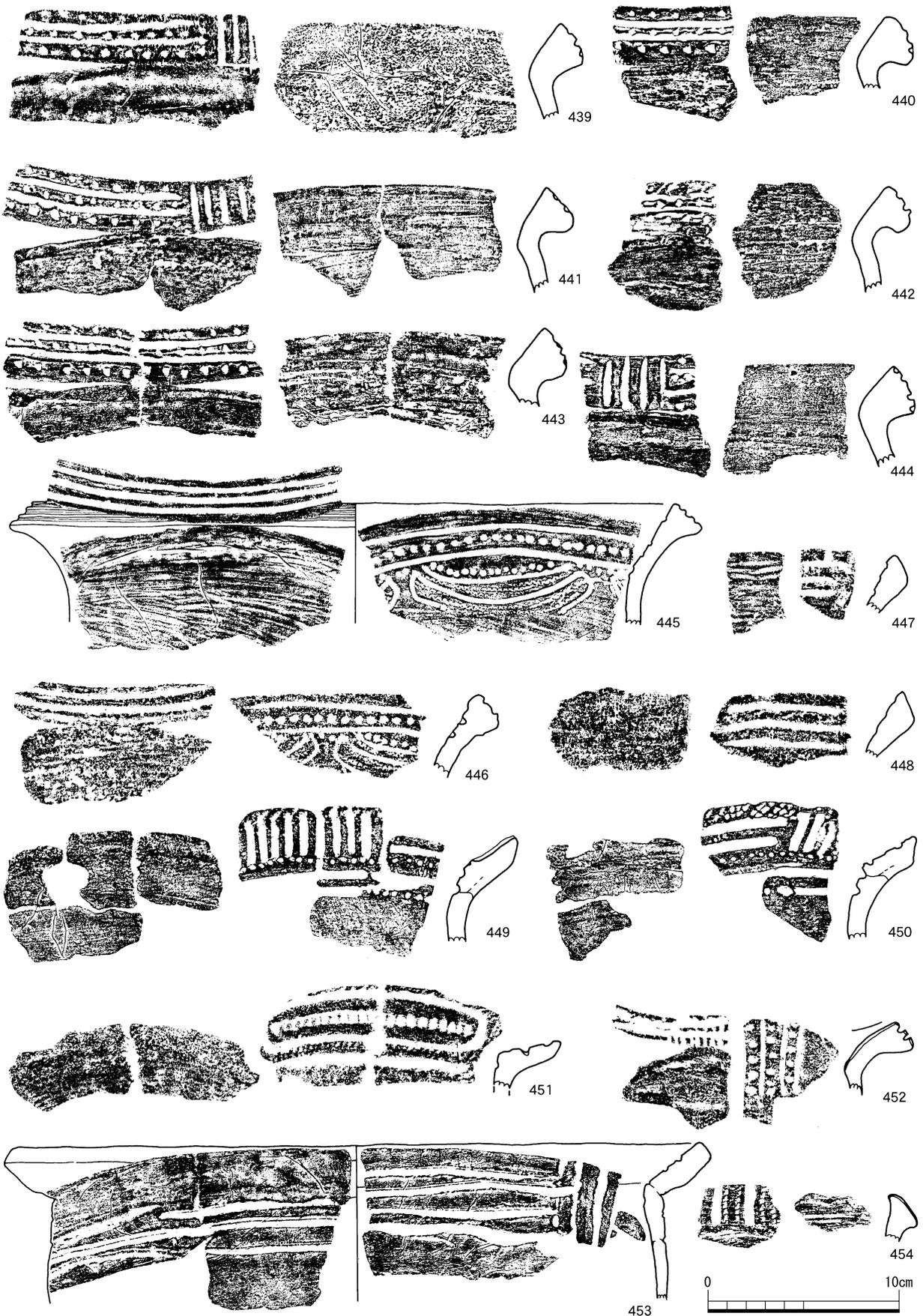
420は、復元口径約39.6cmと大形であるが、軽い資料である。混和材も粒子が細かい。器面調整には、貝殻が用いられているが丁寧に施されており、文様効果を意識したかのような仕上がりである。文様も丁寧に施文されている。貝殻刺突文の周辺のみ、口縁端部が潰されている可能性がある。421は、わずかに波頂部を形成する資料である。器壁は比較的薄く整形も丁寧だが、貝殻条痕は他の資料よりも不規則である。わずかに肥厚させた口縁部には、2条の沈線とその隙間を貝殻刺突で充填した文様を施すが、やや粗い仕上がりである。424や427・431などは、小片のため詳細は不明だが、第93図の資料の典型例としたい。426は、貝殻刺突文が二叉状の工具による連点文に代わっている。432は、沈線で区画された空間を貝殻刺突で充填した文様を施文しているのが特徴である。また、胎土にも混和材の砂粒が目立つ。434や437などは沈線文部分の資料と考えられる。439から444は、全体的に器壁に厚みがあり、持ち重りのする資料である。また、肥厚部については、口唇部は比較的鋭利に仕上げるのに対し下端部の仕上げはやや粗く、施文は、沈線が先に引かれ連点が後に施されるといった特徴を有する。441の連点は、器面に対し垂直方向からではなく、土器を置いた状態で水平方向から刺突されているのが特徴的である。445から453は、口縁部内面に文様が施文される。また、大きさに比して器壁は薄い、持ち重りする傾向がある。449・450などは、口縁部が肥厚せず外へ湾曲する器形で、文様は口縁内面のみ施されるのが特徴である。沈線と連点で構成される規則的な幾何学文にはバリエーションがあるが、共通するのは、口縁端部に貝殻刺突文を施文している点である。453は、復元口径約37cm、器形・色調などは他資料と異なっているが、丁寧な器面調整や、口縁に平行な沈線文とそれに直交する沈線文とで文様が構成される点には共通性がみてとれる。455は、復元口径約36.4cm、波頂部な

どを形成しないと考えられる。成形・整形・器面調整とも丁寧である。施文はやや粗いが、規則的な文様展開をしていると考えられる。

第95図は、口縁部をく字状に肥厚させ、そこに連点、凹線で文様を施すものなどをまとめた。455は、波頂部の資料である。胎土は比較的きめ細かく軽い資料である。器面は、内面・外面とも丁寧なナデ調整が施される。456は、455と同一個体の可能性がある。458は、大



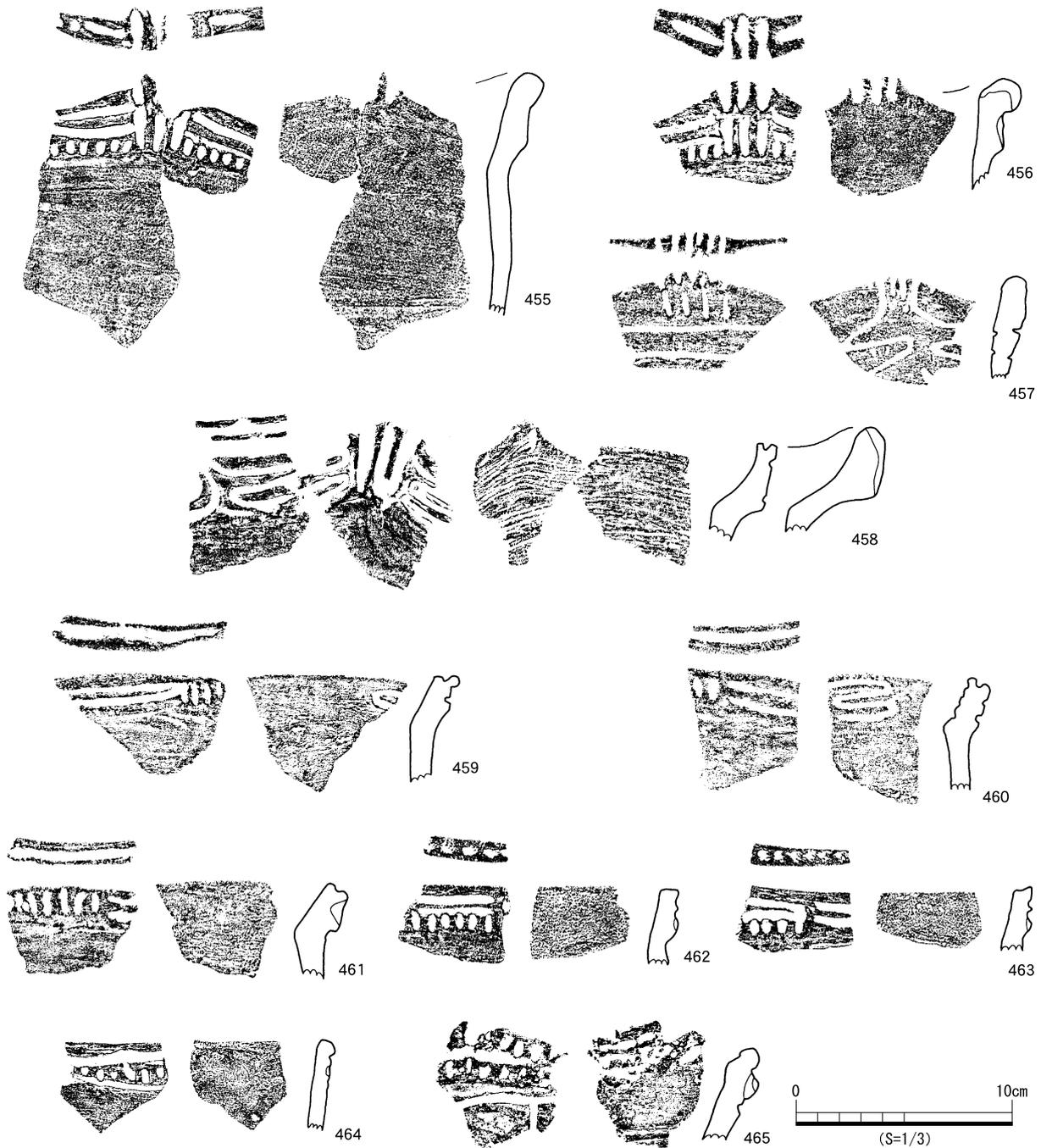
第93図 縄文時代後期土器 (16)



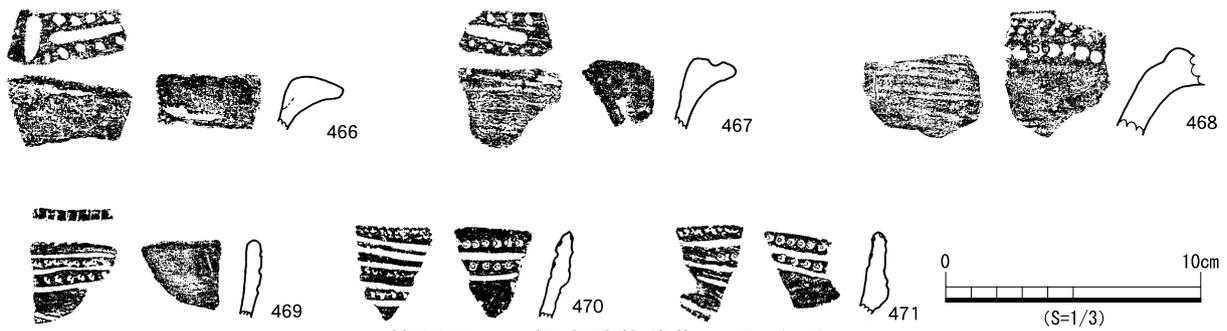
第94図 縄文時代後期土器 (17)

大きく張り出す口縁部の波頂部と大振りな幾何学文が特徴的な資料である。459・460・461は、平口縁の資料と考えられる。口縁部は、内面に稜を形成し、く字状に直線的に外反する。外面には文様帯的な部分を形成し、そこに長楕円文と連点を施文する。口縁部内面にも曲線文が観察できる。外面の文様変化と内面の曲線文の施文箇所が一致していないのが特徴的である。465は、器形や文様構成は455などと類似するが、胎土には混和材の小礫が目立ち、施文が乱れているなど、著しい相違も認められる。内面には、深い刺突を確認できる。

466から468は、小形の資料と考えられる。470などは、口縁形状が異なるが、施文部位や文様構成が類似するため、ここに含めた。



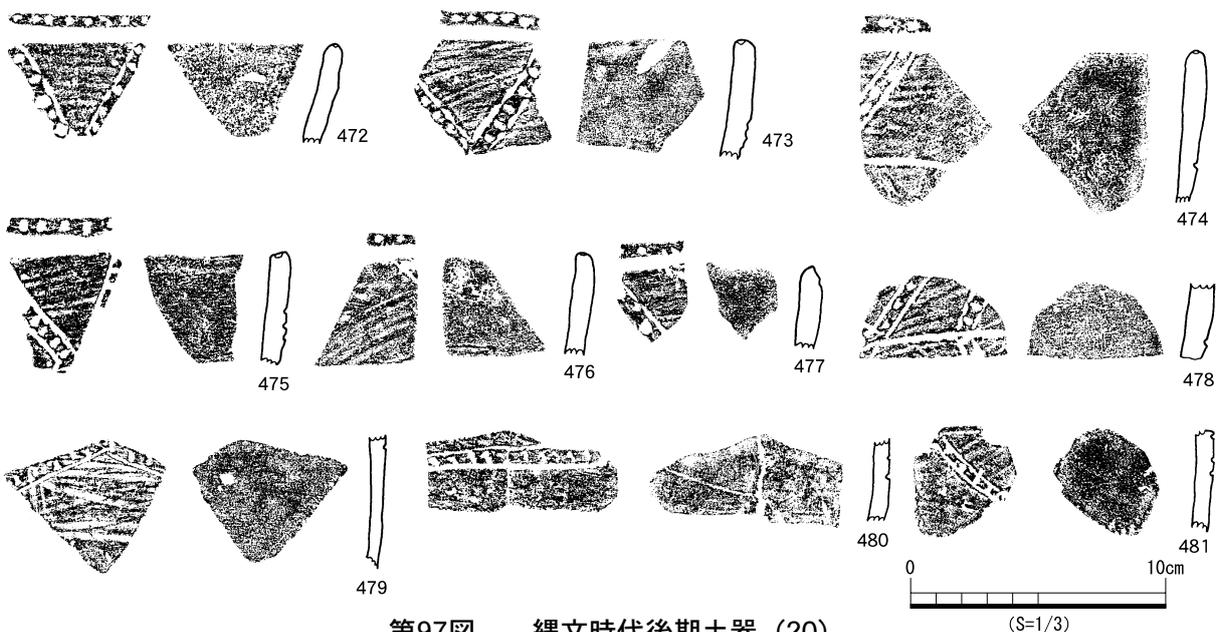
第95図 縄文時代後期土器 (18)



第96図 縄文時代後期土器 (19)

Ⅶ類 (第97図)

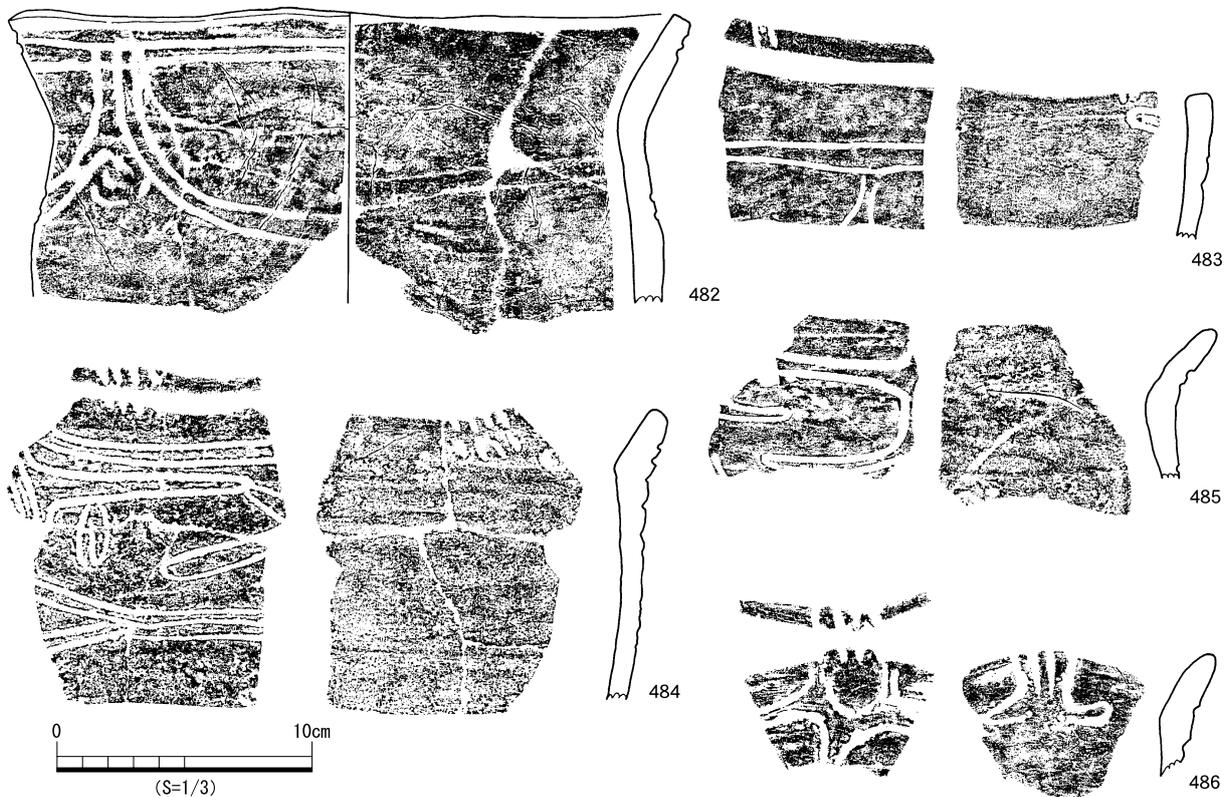
472から481までの10点を図化した。出土した範囲はB-15区からD-17区にかけて比較的まとまっている。資料のなかには、同一個体である可能性も考えられるものもある。全体的な特徴として、まず、観察される接合面が、いずれもほぼ平坦で、圧着させたような貼り合わせの痕跡や接着を補助するような刻目などの加工もみられない点で、外れやすい作りとなっている。さらに、角閃石を多く含む胎土を選択的に用いているようである。感覚的であるが、混和材の粒径は、鳴野原遺跡A地点出土の他の型式に比べ、より細かい傾向にあるようである。また、胎土に小礫をほとんど含まない。調整については、外面は貝殻条痕のあとに軽いナデ調整を施しており、内面は丁寧なナデ調整を施している。文様は、2条単位の平行沈線と、その隙間を連点で充填させた「線」で直線的な幾何学文を施文するのが基本形のように見える。連点は、沈線と同じ工具で施文されていると考えられるが、472や473のように、施文する列によって工具の使用部位を代えている資料もある。474は、Ⅶ類のなかでは大きく器壁も比較的厚い資料である。このことから、Ⅶ類の資料にも大小の器形があったことが想定される。477は、小片であるが、口縁部に突起などの造作をしていたことが伺える資料である。器形の変化点に刻目を入れるなど、文様にも変化を持たせている。



第97図 縄文時代後期土器 (20)

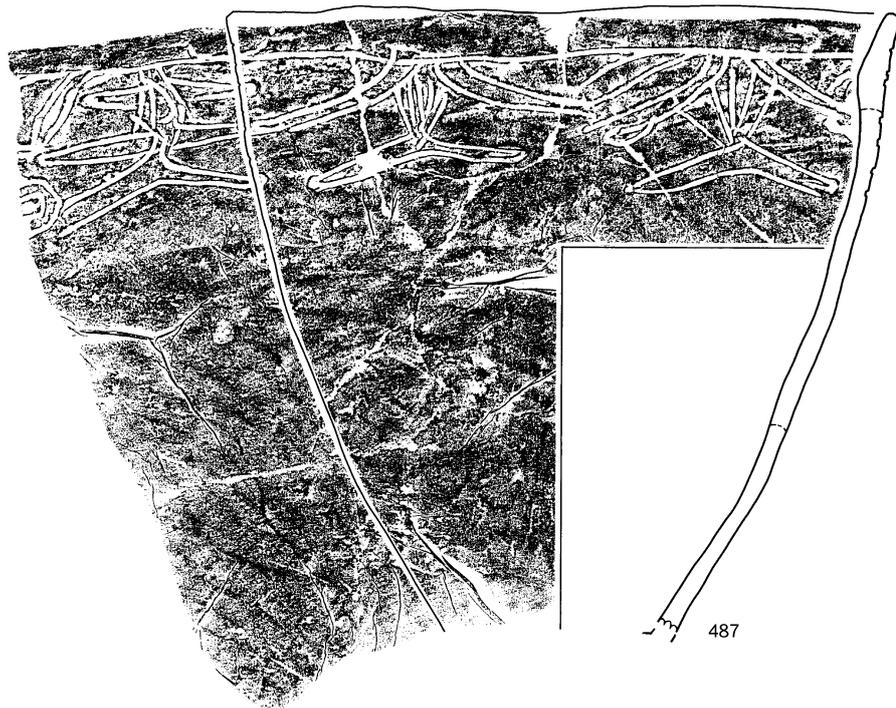
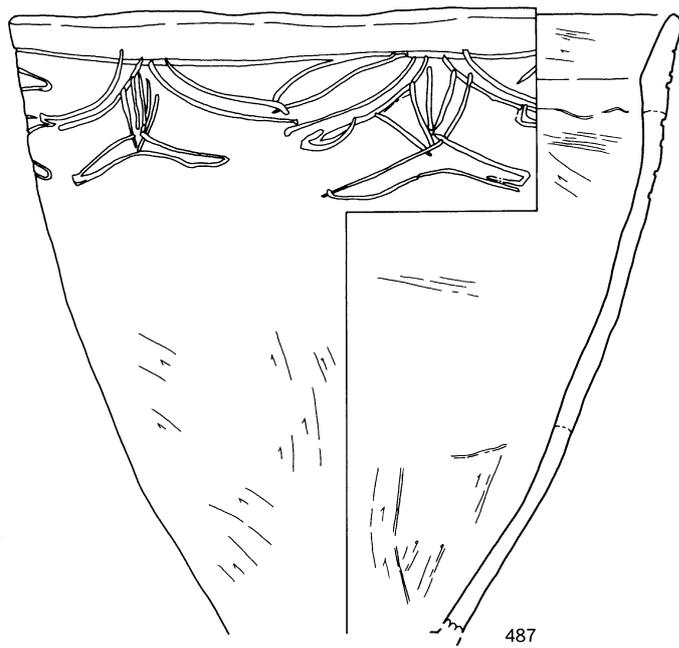
VIIIa類 (第98～112図)

482は、平口縁を想定しているが、2又は3か所の波頂部を持つ可能性もある資料である。比較的器壁の厚い資料だが、調整は丁寧である。文様は、明瞭な沈線で曲線的な幾何学文を器面を大きく使って施文している。幾何学文は、やや単純に見えるが、左右対称でなく、中央に見える渦文状の文様も、渦文をうまく簡略化している。484は、波頂部付近の資料である。口縁部は、内面がわずかに肥厚し稜を形成してかすかに外反する。器面調整が丁寧になされているほか、接合面を観察できる。文様は、やや浅いが明瞭な沈線で、外面上半部を大きく使って曲線的な幾何学文を施文している。さらに、波頂部を基点に対称的に展開していると考えられる。波頂部内面にも、曲線文とその外側に連点文が施文されている。487は、底部付近まで復元できた本遺跡では希少な資料である。口縁部は、平口縁と考えられ、内面が肥厚し稜を形成するが外反はしない。胴部は、膨らむなどの変化をせず、底部へほぼまっすぐに向かう。文様は、細いが明瞭な沈線で描かれる人形のようなモチーフの幾何学文が規則的に施文されるが、モチーフは単純な繰り返しになっていない。また、1か所にのみ渦文が観察される。復元口径は約25.8cmである。488は、やや内湾する器形である。487と同様の口縁部形状である。文様は、細く浅いが明瞭な沈線で、2条を1単位とする短沈線文と1条の沈線で曲線的な幾何学文を口縁部に平行に連続施文する。復元口径は、約35.6cmである。第99図は、488などと同様の文様モチーフと思われる幾何学文等を施文する資料をまとめた。489は、大形の深鉢と考えられる資料である。波頂部付近と考えられるが、肥厚などの器形変化は観察されない。細く深い沈線で曲線的な幾何学文を施文するが、先に引いた沈線を後



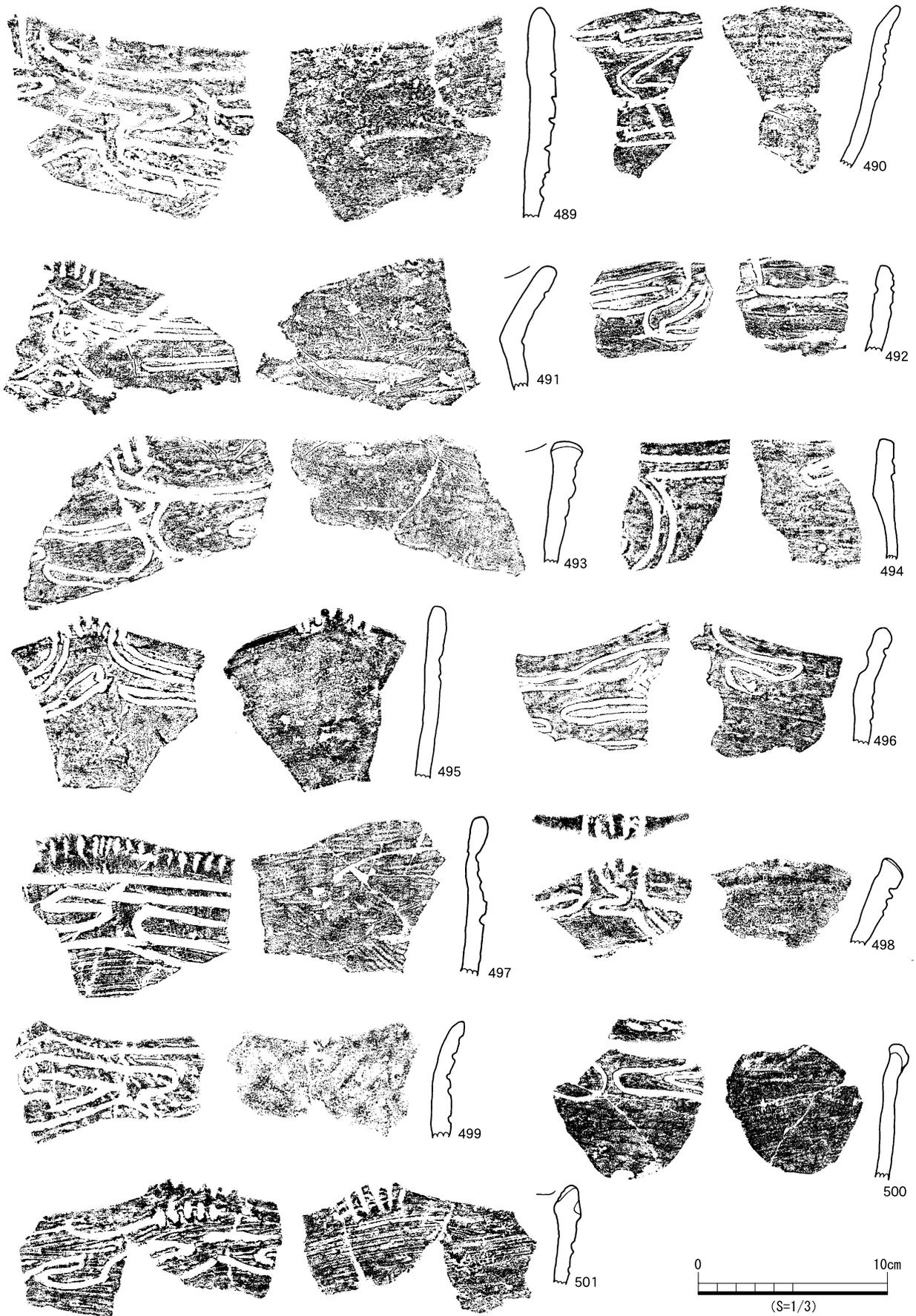
第98図 縄文時代後期土器 (21)

に引いた沈線が潰すなど、やや大雑把な施文である。491は、波頂部資料で、口縁部は、内面に明確な稜を形成して屈曲して外反するが、肥厚しない。文様は、波頂部を基点に展開するようであるが、詳細を観察できない。493は、台形の波頂部の資料である。口縁部自体は、わずかに外反するが、波頂部は、端部へ向かうほど肥厚しており、直口となる。器面調整は、内面外面とも丁寧なナデである。文様は、明瞭な沈線で曲線的な幾何学文を施文する。器形変化と文様展開が対応するか判断できない。494は、波頂部付近の資料である。小片であり詳細は不明であるが、整然とした円弧文が印象的な資料で、波頂部を基点に文様が展開している可能性がある。495は、波頂部資料である。文様は、2条1単位の幾何学文が、波頂部を基点として対称に展開するようである。499は、文様展開が凹線文を想起させる。502は、波頂部付近の資料である。口縁部は、内面がやや肥厚し稜を形成し、わずかに外反する。文様は、細く明瞭な2条1単位の沈線で、渦文を変化点に配置した弧文を施文する。器形変化と文様展開が対応している可能性がある。503は、内面に器面調整の貝殻条痕が強く残っているのが特徴である。507は、口唇部断面を方形に整形しているのが特徴的な資料である。口縁部は、内面がかすかに稜を形成し、短く反るが、肥厚はしない。文様は、2条1単位の平行沈線で区画された空間に逆S字状文を施文する。508は、口縁部形状を最大限評価すれば、波頂部が8か所ある器形も想定される資料である。口唇部内面のみ、器面調整工程と併せて外傾させ稜を形成する。文様は、浅く細いが明瞭な沈線でS字状文などを組み合わせた幾何学文を施文している。509は、大きさに比して器壁の薄い資料で、平口縁でわずかに胴張りする器形を想定している。文様は、太いが浅くやや不明瞭な沈線で、複雑な曲線文を施文する。モチーフが変化する部分があるが、器形変化との対応関係は、欠損しているため不明である。復元口径は、約32.4cmである。510は、平口縁を想定しているが、波頂部が2か所ある可能性もある資料である。全体的に丁寧な成形・整形であるが、口縁部外面のみ整形がやや粗い仕上がりである。頸部ですぼまるが胴部が大きく張る曲線的な器形である。文様は、細く明瞭な沈線で、曲線的だが規格性のある幾何学文をほぼ規則的に施文している。復元口径は、約21.2cmである。511は、口縁部が肥厚し内面に稜を形成するが、外反はしていない。外面が劣化しているため、詳細は不明であるが、波頂部を基点として整然とした幾何学文を施文するようである。復元口径は約24.6cm。512・513は、口縁部が内面に稜を形成して外反するが、肥厚していない。細いが明瞭で丁寧な沈線で曲線的な幾何学文を外表面・内面に施文するほか、連点文を幾何学文に重ねて施文しているのが特徴的である。特に、外面の連点文は、幾何学文や器形とどのように対応しているのか興味深いところである。なお、両者は、同一個体の可能性も考えられるが、接合しなかったため別個に掲載している。514・516・518・520などは、511と同様の文様を施文する。口縁部形状には若干違いも観察される。522は、山形の小波頂部が形成されている資料である。外面は劣化しており詳細な観察はできないが、第103図に掲載した資料と文様の特徴が類似する。沈線は、元来浅かったと思われる。復元口径は約23.8cmである。525・526は、平口縁を想定している資料である。胴部がわずかに張る器形で、内面は特に丁寧なナデ調整が施される。文様は、深いがやや不安定な沈線で、2条を1単位とする横位の沈線文と、連弧文を施文する。両者は同一個体の可能性もあるが、



第99図 縄文時代後期土器 (22)

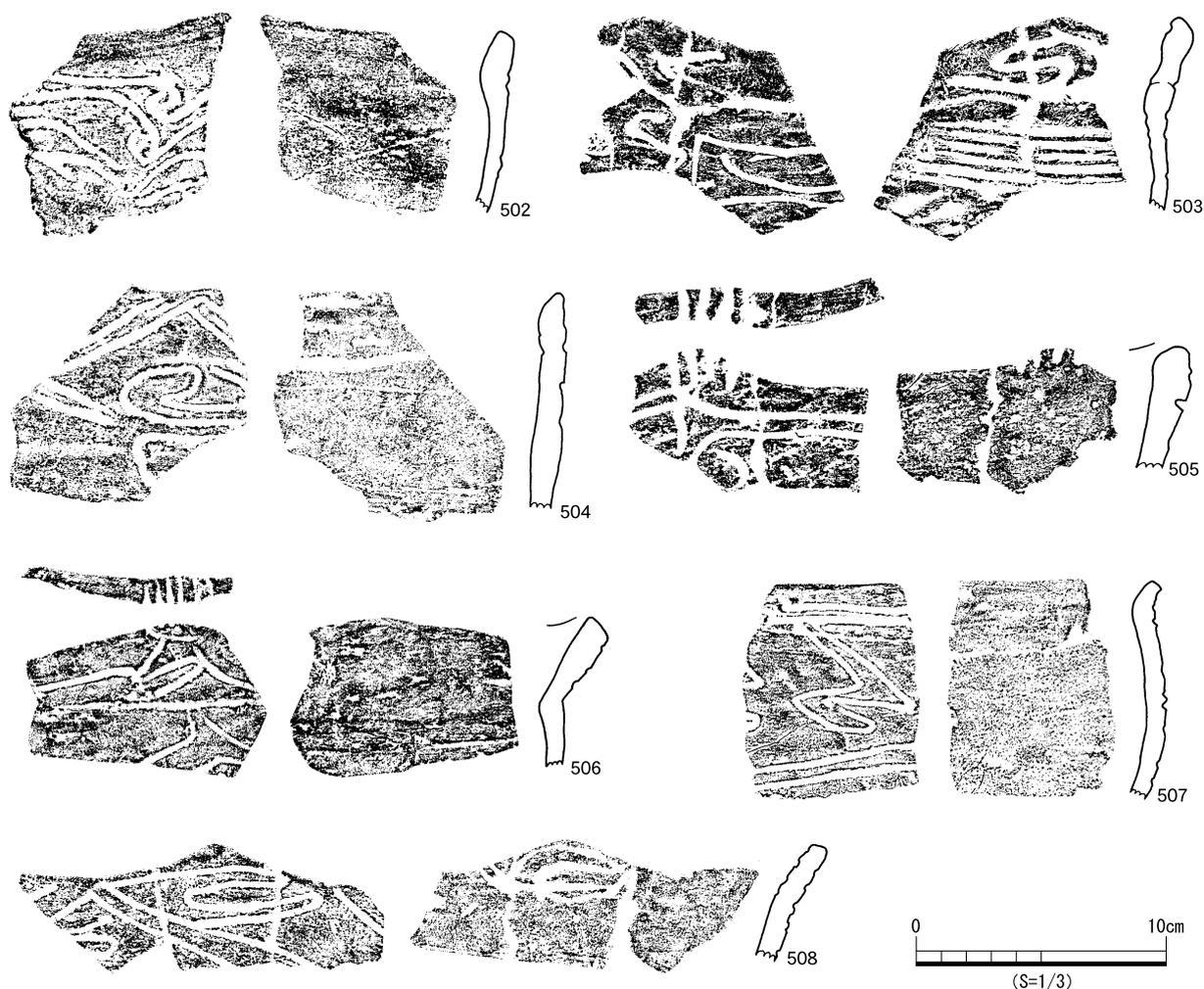
(S=1/3)



第100図 縄文時代後期土器 (23)

接合しなかったため別個に掲載した。525は、復元口径約29.5cmである。526は、復元口径約29.6cm、527は、波頂部付近の資料で、大きさに比して器壁の薄い資料である。口縁部は、内面、外面ともに肥厚しているのが特徴である。また、内面は、胴部分が粗いナデで調整されていて、口縁部の調整と変化をつけている。528は、深鉢と考えられるが胴張りの強い資料である。明瞭な沈線で、流水文と連弧文を施文する。復元胴径は、約20.6cmである。

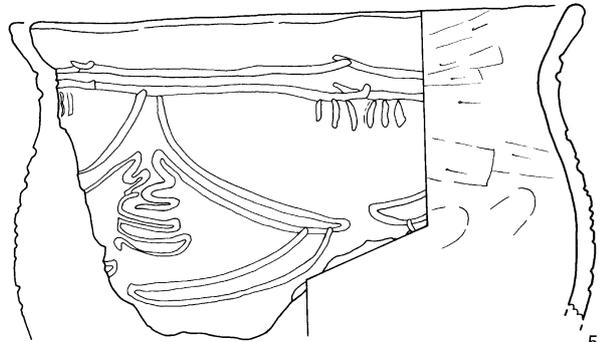
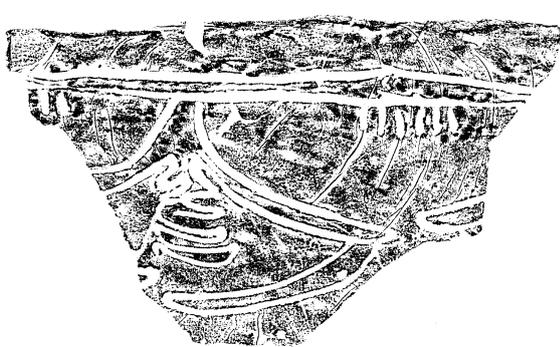
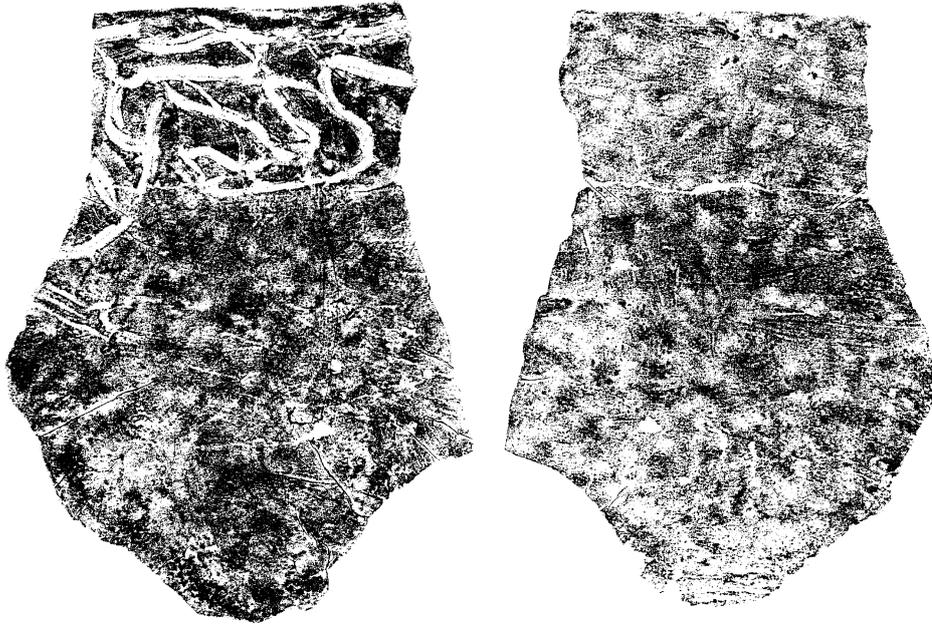
第105・106図は、流水文的文様を施文する資料をまとめた。530は、復元口径約42.0cmの深鉢である。口唇部の小波状は、この遺跡の他の資料でも散見されるが、成形後の未調整をそのまま残した可能性がある。基本的には平口縁の資料と考えられる。施文部は、ほぼ直立又はごくわずかに内傾し、胴部はさほど丸みを持たず直線的に底部へくだる器形である。調整は、内面外面ともに粗いナデ調整であるが、施文部と口唇部のみナデ調整である。胴部にも部分的にナデ調整が観察されるが、施文時の副次的なものの可能性もある。口縁部に施文されている波状文は、一気に施されたものではなく、「へ」字形を連結させるようにして施されたようである。沈線は、明瞭に引かれている。531は、口縁部にわずかな隆起部を作成する資料で、口縁部がわずかに外反する以外は、さほど器形変化してないように見える。施文は、浅いが明瞭な沈線で、口縁部に大振りな波状文を1段施文するほか、隆起部には、内



第101図 縄文時代後期土器 (24)



509

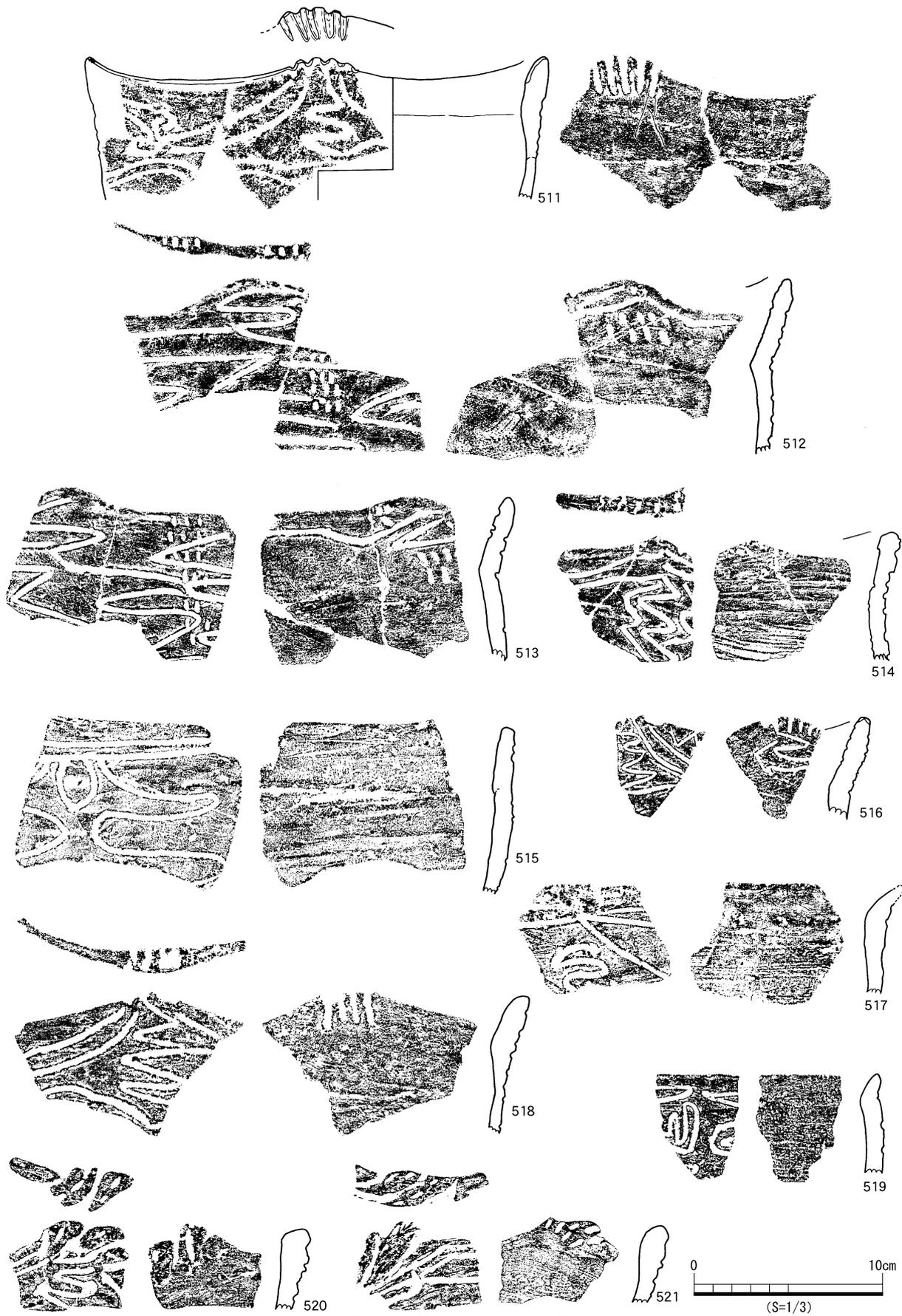


510

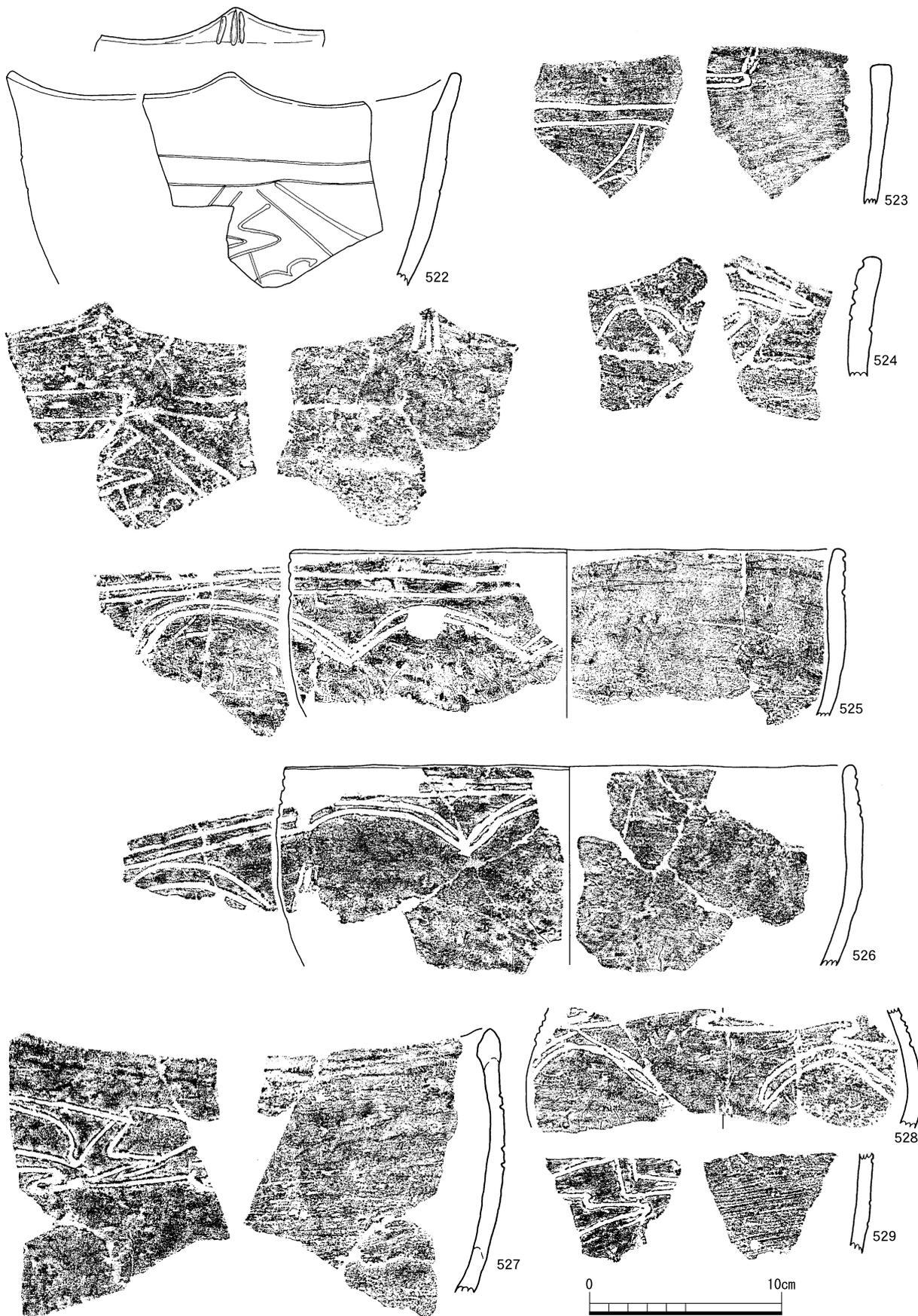


(S=1/3)

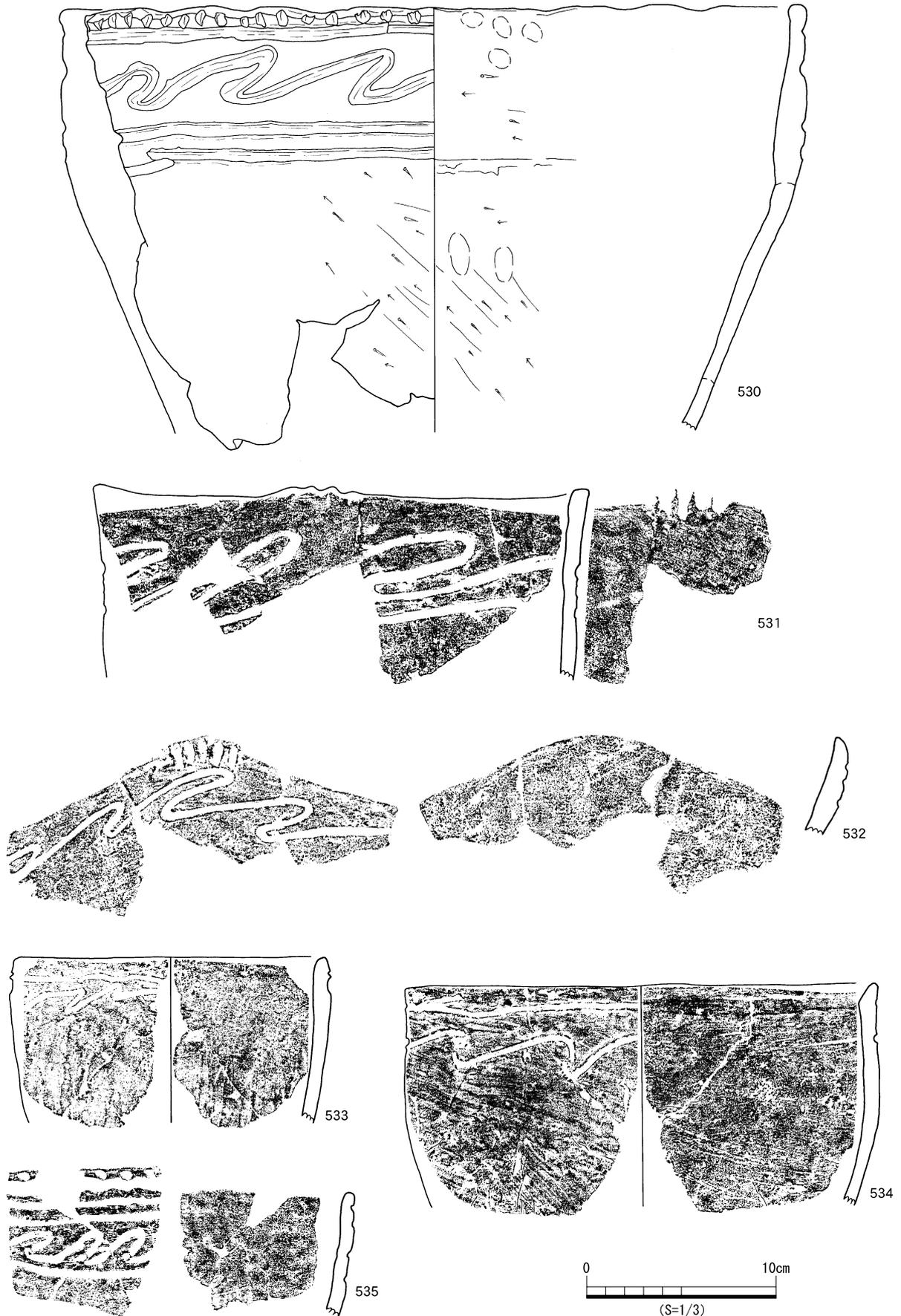
第102図 縄文時代後期土器 (25)



第103図 縄文時代後期土器 (26)



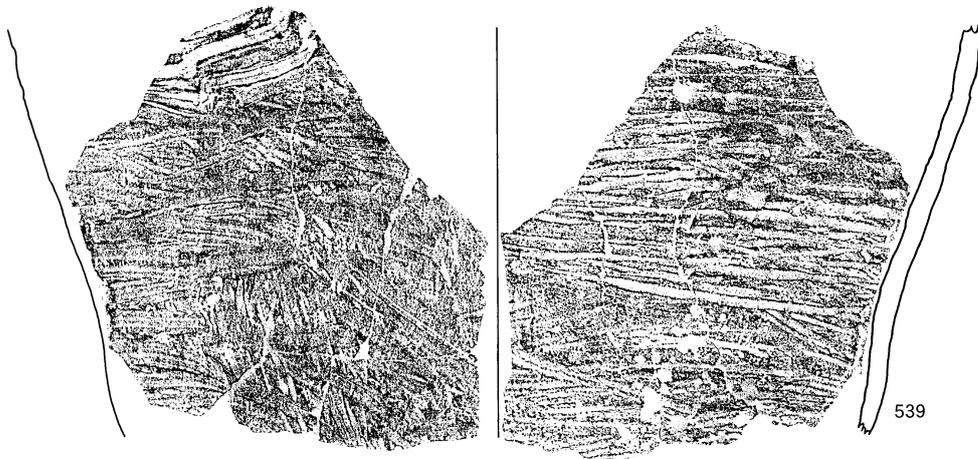
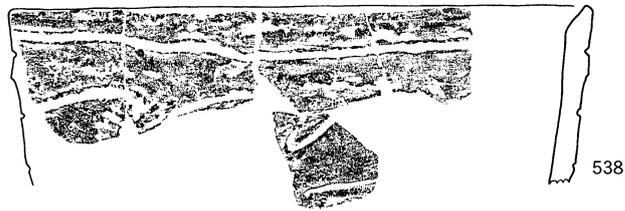
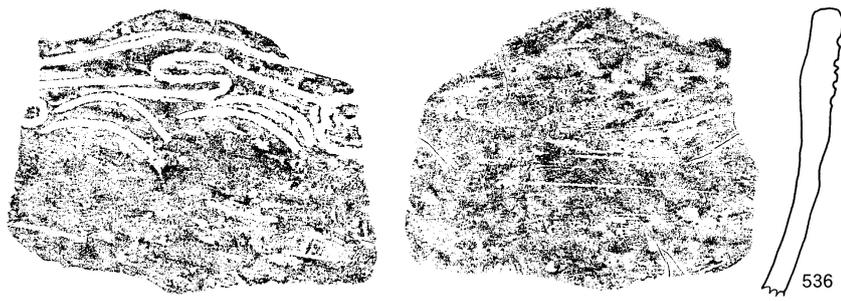
第104図 縄文時代後期土器 (27)



第105図 縄文時代後期土器 (28)

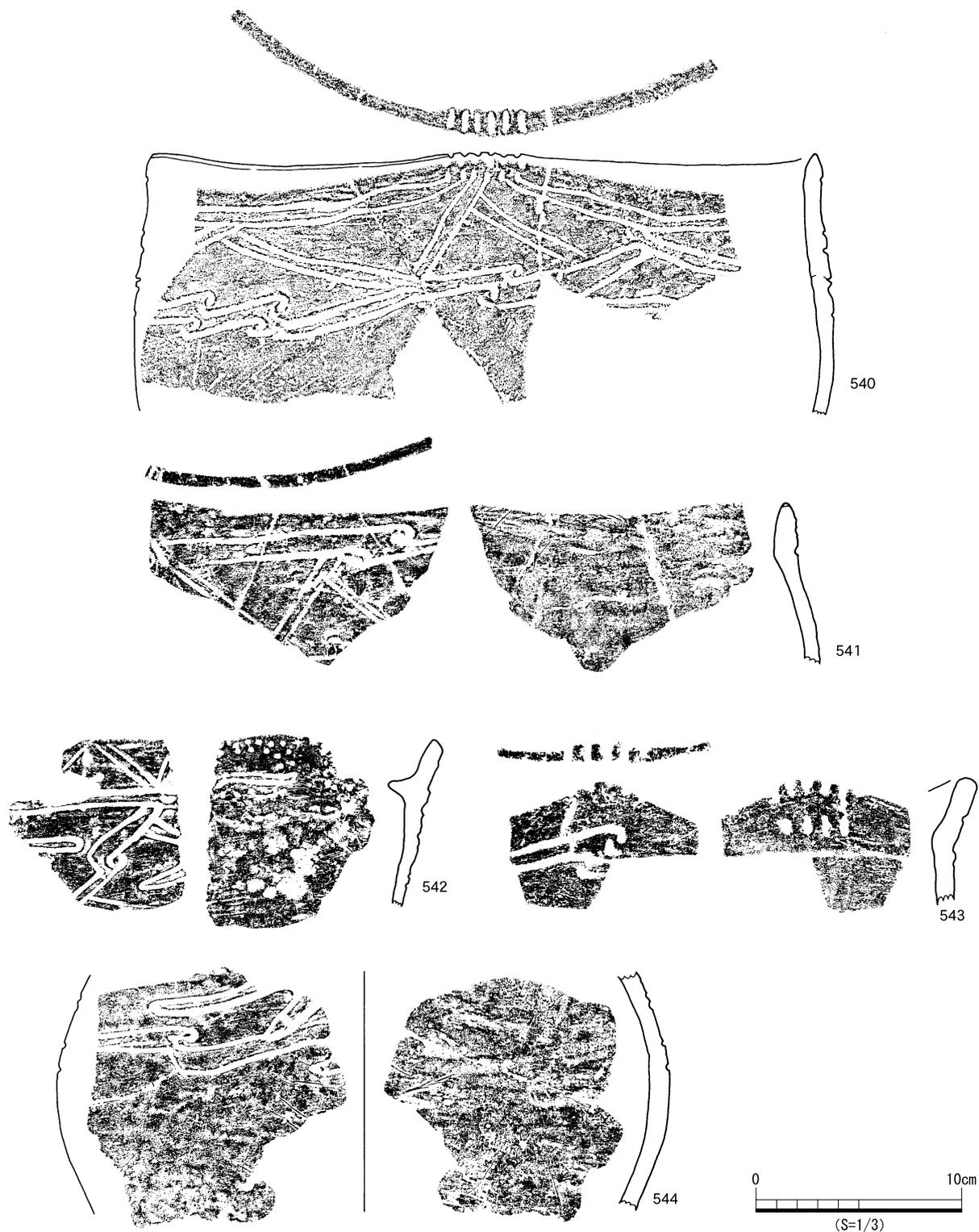
面に長めの刻目を施す。復元口径は約26.0cm。532も、文様展開は531とほぼ同じだが、波頂部を形成することと、長めの刻目を波頂部外面に施すこと、より丁寧な整形が施されていることが異なっている。533は、口縁部がごくわずかに内湾する器形である他は、文様展開が531や534と類似する資料である。ただ、器面調整は3点のなかでは丁寧な仕上げだが、施文は3点のなかでもっとも粗い。復元口径は約16.5cm。534は、平口縁と考えられる資料である。口唇部内面を外傾させ稜を形成するが、口縁部はほとんど外反せず、肥厚もしていない。文様は、口唇部下に1条の沈線を巡らせ、その下位に、1条の沈線で短い曲線を描き、それを連続させて波状文を施文している。短曲線の連続により、波状文に変化を持たせているといえる。復元口径は約24.8cm。537は、平行沈線で流水文的な文様を施文するが、凹線文の変化形とも考えられる資料である。538は、口縁部内面を調整により外傾させることで、稜が形成されている資料である。平口縁を想定したが、波頂部を形成する可能性もある。外面は、復元口径は、約22.5cm。539は、胴部資料である。資料上端に、浅い沈線で流水文のような文様が施文されている。本資料は、特に外面の調整が特徴的である。また、大きさに比して器壁が薄い。540は、わずかに内湾する口縁部に小波頂部が形成される資料で、小波頂部は4か所以上形成されている可能性がある。口唇部とそれ以外の部位では、調整が異なっていて、口唇部のみ丁寧な仕上げである。文様は、深い不安定な沈線で、2条を1単位として小波頂部を基点とする幾何学文を施文する。復元口径は約32.2cmである。541は、波頂部資料である。内湾する器形で、口縁部が肥厚して内面に稜を形成し、ほぼ真上に立ち上がる。文様は、浅くやや粗い沈線で、渦文を配した2条1単位の平行沈線文と、同じく2条1単位の沈線で幾何学文を施文する。542は、器形に特徴がある資料である。器壁は薄く厚み等の変化はないが、口縁部内面に、鏢状の突帯が巡っている。突帯より上位には、連続刺突と沈線により幾何学文が施文される。544は、深鉢と考えられるが胴張りの強い器形の資料である。2条単位の平行沈線で流水文的な文様を施文するほか、より上位に曲線的な幾何学文を施文する。復元口径は、約29.8cmである。

第108・109図は、文様に同心円状のモチーフなどが施される資料をまとめた。545は、内傾する口縁部資料である。口縁部は、内面が肥厚し、緩い稜を形成する。施文される幾何学文のモチーフ等は不詳である。復元口径は約27.6cmである。546は、5か所の小波頂部を想定できる資料である。混和材の砂粒の多さと、外面の明瞭な貝殻条痕が目立つ。口縁部は、内面が肥厚し稜を形成するが、内湾する。文様は、深く明瞭な沈線で、小波頂部を基点として扁平ながら放射状に展開する幾何学文を施文する。文様の基点には、二重の同心円文が配置される。復元口径は約33.6cmである。547は、平口縁を想定したが、文様展開等からは、波頂部の存在が想定できるようでもある。内傾する胴部から屈曲してほぼ垂直に立ち上がる口縁部にいたる器形で、特に屈曲部付近の器壁を厚く作っており、持ち重りのする資料である。文様は、明瞭な沈線で、2条1単位の扁平な流水文的な文様を軸に、大振りの様々な幾何学文を施文する。復元口径は約37.0cmである。548は、平口縁と考えられる資料である。口縁部は、内面に稜を形成し短く外反するが、肥厚しない。また、内面調整は、稜の部分で作業を分けることなく、無関係に施されている。幾何学文は、浅いが明瞭な沈線で比較的丁寧に施され



第106図 縄文時代後期土器 (29)

ている。復元口径は、約32.8cmである。545・548ともに、貝殻条痕を顕著に残す。550は、波頂部資料である。文様展開の状況から、波頂部は4か所と想定している。胎土の混和材に赤色粒が多く含まれている。文様は、細いが明瞭な沈線で、波頂部を基点とした放射状の幾何学文を施文する。胴部への文様の広がり方が一定でないことから、文様展開の自由度は大



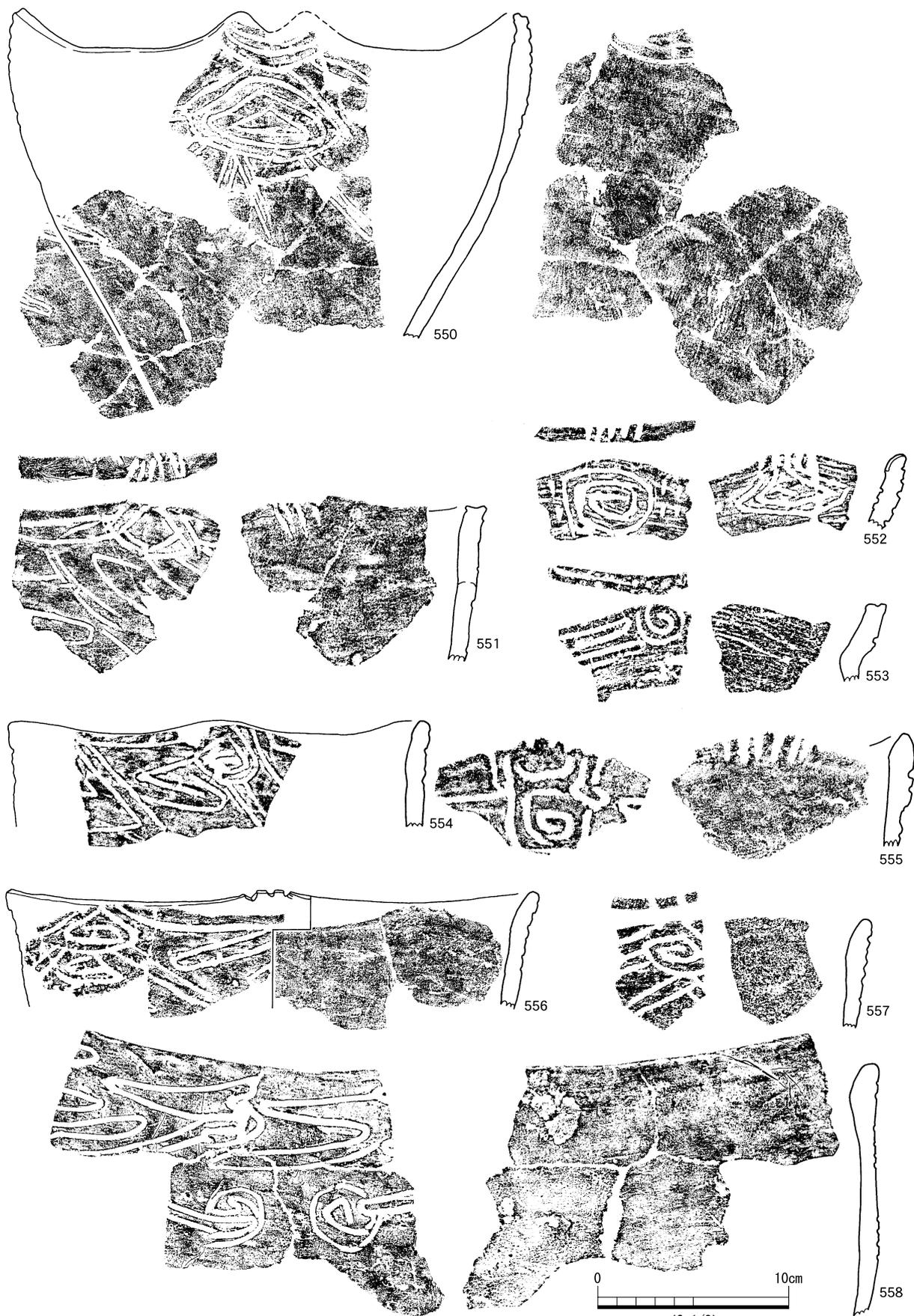
第107図 縄文時代後期土器 (30)



第108図 縄文時代後期土器 (31)

きいようである。復元口径は約27.4cm。551は、低い波頂部がある資料である。口縁部内面が若干肥厚するが、外反等の変化はない。波頂部の頂点を上から潰して平坦面を形成しているのが特徴的である。文様は、断面方形の明瞭な沈線で、直線的なモチーフの幾何学文を施文する。波頂部を文様展開の基点としているようだが、それに囚われていないようである。器面も大きく使っている。555は、口縁部外側をわずかに肥厚させた資料である。波頂部下に渦文等を組み合わせた幾何学文を、明瞭な沈線で施文している。文様は、波頂部を基点としつつも左右非対称に展開している可能性がある。器形に違いはあるものの、552・553も同様の文様の特徴が観察される。556は、波頂部資料である。口縁部は、内面が丸みを帯びて外傾する。文様は、やや粗いが明瞭な沈線で、波頂部を基点として展開する幾何学文を施文する。沈線は、文様によって工具の使用部位を換えているように見える。558は、波頂部付近の資料である。口唇部は、調整により若干光沢を帯びるが、他の部分は、特段丁寧な調整があるという状況は観察されない。口唇部内面は、器面調整と併せて外傾する整形がなされ、稜も形成するが、肥厚はしていない。文様は、浅い沈線で、S字状文や渦文を組み合わせたような文様を施文するが、やや大味な施文である。復元口径は、約28.6cmである。

第110図は、様々な口縁部資料をまとめた。559・560は、同一個体の可能性が高い資料である。波頂部の存在も想定される。口縁部は、屈曲して短く外反するが、肥厚は外側に観察される。整形が丁寧で、調整も内面・外面ともに丁寧である。文様は、細いが明瞭な沈線で、2条を1単位とする平行沈線による幾何学文を施文する。563は、平口縁部分の資料である。波頂部の有無を想定できない。成形・整形ともに丁寧である。口縁部は、短くわずかに外反し、内面に稜を形成する。文様は、劣化していて詳細は不明だが、浅く不安定な沈線で、曲線的な幾何学文を器面を大きく使って施文している。561・562は、口縁部形状に類似点が認められる資料である。文様も、残存部のモチーフは異なるが、類似する文様であると想定される。564は、厚みのある断面舌状の口縁部が緩く外反する器形を有する資料である。この資料は、文様に特徴がある。外面の文様は、ごく浅い不安定な沈線で、2条1単位の平行短沈線により曲線的な幾何学文を施文する。文様モチーフ自体は、他資料にもみられないことはないが、このような工具での表現は、本遺跡では類例がない。波頂部内面の文様が一般的にみられるものであるため、外面文様の特異性がより際だっている。復元口径は、約24.8cmである。565は、外反する口縁部と丸く張る胴部が特徴的な資料である。胎土は、比較的精製されている。成形・整形とも丁寧になされている。文様は、細く明瞭な沈線で直線的なモチーフの幾何学文を施文するが、沈線の重なりを整えていないため、やや粗い印象を受ける。波頂部を基点に展開する文様モチーフである可能性がある。566は、大きさに比してやや器壁の厚い資料である。波頂部以外の口縁部は、やや内傾し、断面は舌状に仕上げられている。文様は、細く不安定な沈線で、波頂部を基点とする鋸歯状文を施文する。復元口径は、約16.1cmである。567は、小形の深鉢と考えられる資料である。二叉状の波頂部があり、器面調整も丁寧である。文様は、明瞭だが短い沈線で幾何学文を施文する。短沈線による施文のため雑に見えるが、展開は特段省略されていない。復元口径は約12.0cm。570は、胴部資料である。整形は比較的丁寧である。文様は、浅くやや不明瞭な沈線で、3条を1単位として直線的なモチーフの幾何学文

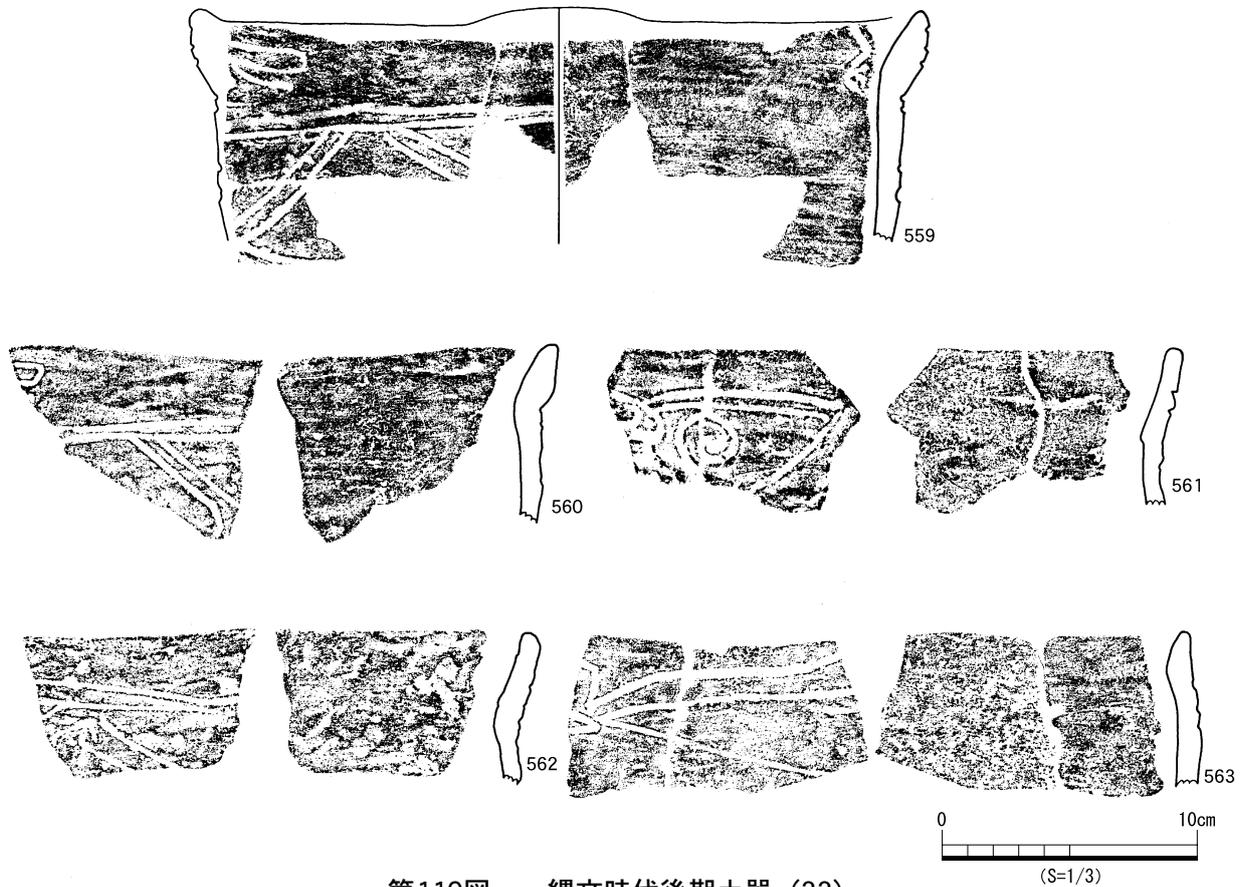


第109図 縄文時代後期土器 (32)

を施文する。571は、口縁部が直線的に開く器形を有する資料である。波頂部では、口縁部外面がわずかに肥厚する。文様は、細くやや不安定な沈線で幾何学文を施文するが、不規則で文様モチーフ等はよく観察できない。復元口径は、約19.0cmである。574・575は、特徴が類似する資料であるが、接合しなかったため別個に掲載している。574は、口縁部が明瞭な稜を持って外反する器形である。内面に幾何学文が施文されるが、明確な器形変化は見受けられない。外面の文様は、深いがやや不安定な沈線で曲線的な幾何学文を施文するが、極端に上下を圧縮した様態であるため、モチーフ等は不明である。579は、口縁部内面に施文されている疑似磨消縄文のような文様が特徴的である。外面の文様は、粗く詳細は不明である。器面は、比較的丁寧に調整されている。583は、口縁部が肥厚、外反等の変化がないものの、緩い稜が形成されている。文様は、浅いが明瞭な沈線で、3条単位の平行沈線による直線的な幾何学文を施文する。

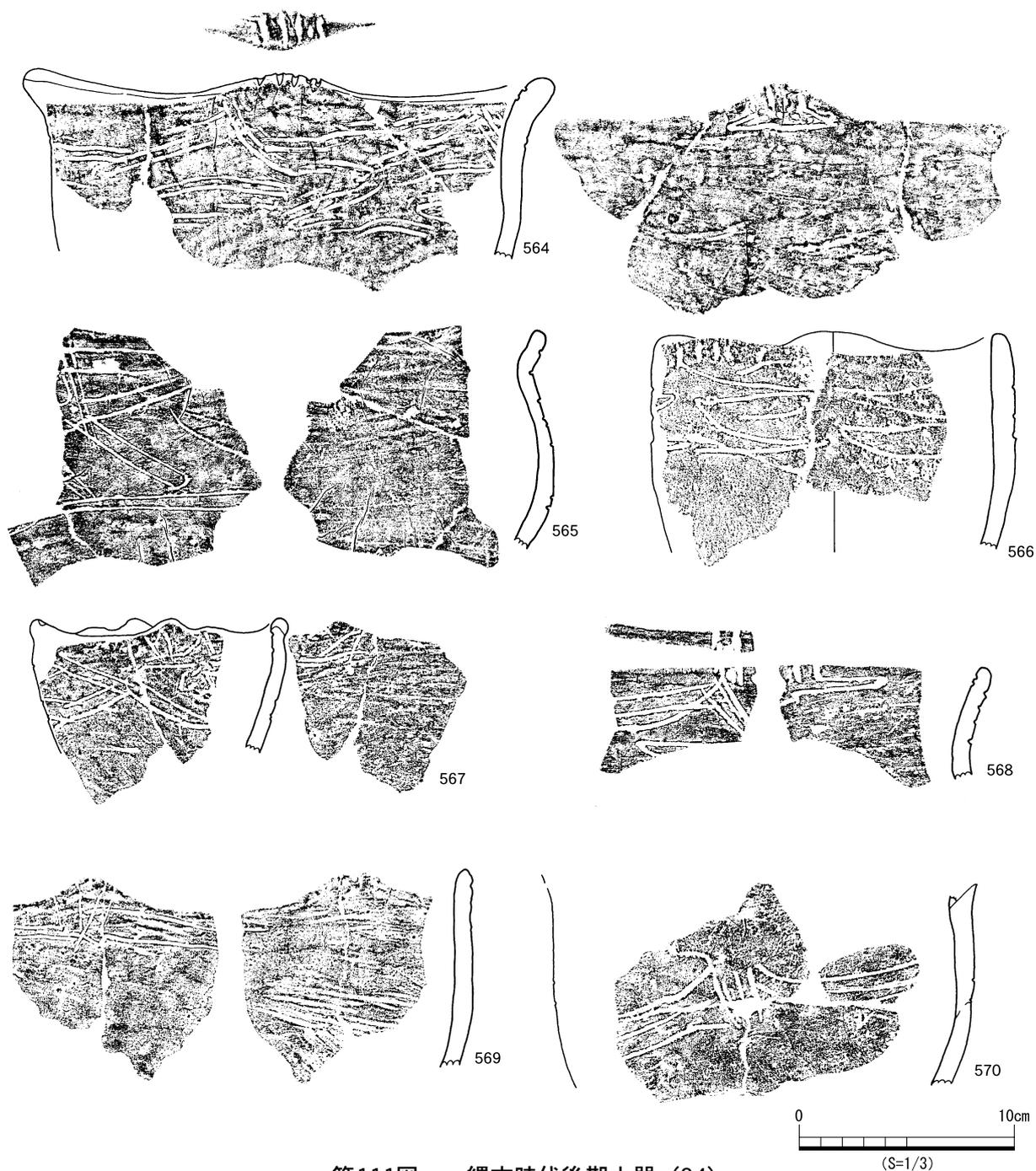
VIII b 類 (第113 ~ 131図)

584は、二又状に造形した波頂部を持つ資料である。口縁部は、内面に稜を形成して外反するが、肥厚はしない。二又状に飛び出した部分のみ肥厚する。器面調整は、外面が比較的粗いものの、基本的にナデ調整が施される。色調も部分的に暗赤褐色を呈する。文様は、口縁部近辺に集中するが、全体的には粗い。口唇部の連続刻目や内面の連点は規則的であるが、

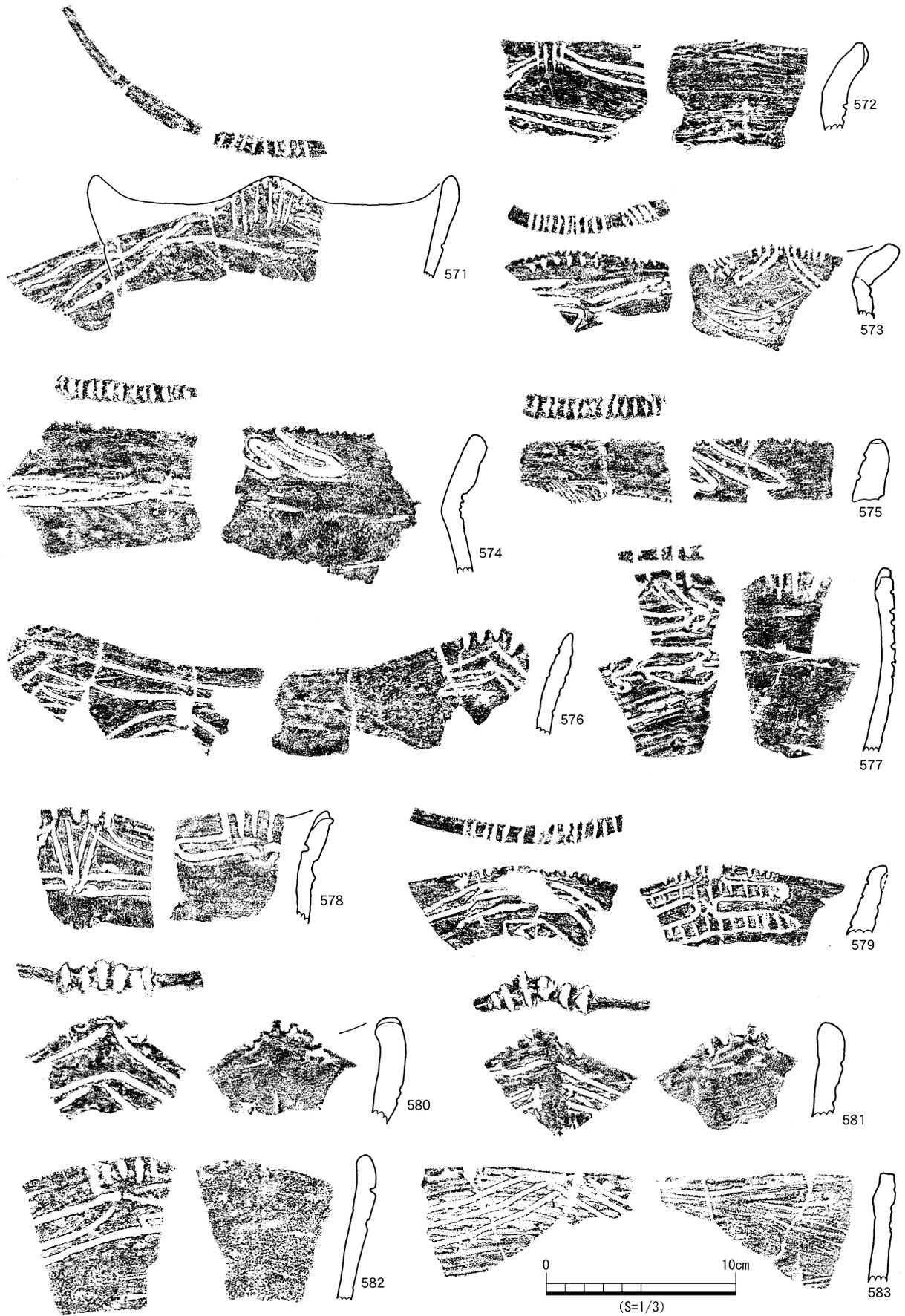


第110図 縄文時代後期土器 (33)

扁平な長楕円文を描く沈線の引き方は粗い。また、口縁部内面には、2条単位の貝殻刺突で鋸歯状文を施文し、幾何学文等を施文しているようだが、鋸歯状文はごく浅く判別しにくい。復元口径は、波頂部計測で約35.6cmである。585は、平口縁と考えられる資料である。口唇部から2cm程度の幅で形成された肥厚部は、貼り付けではなく厚みのある粘土紐の積み上げによる。施文は、この肥厚部分の下位と口唇部上端4か所に施され、肥厚部分には施文されていない。また、口唇部の施文は、口縁部文様の展開に対応している可能性がある。復元口径は約27.0cmである。586も、平口縁を想定している資料である。口唇部上端の刻目が特徴

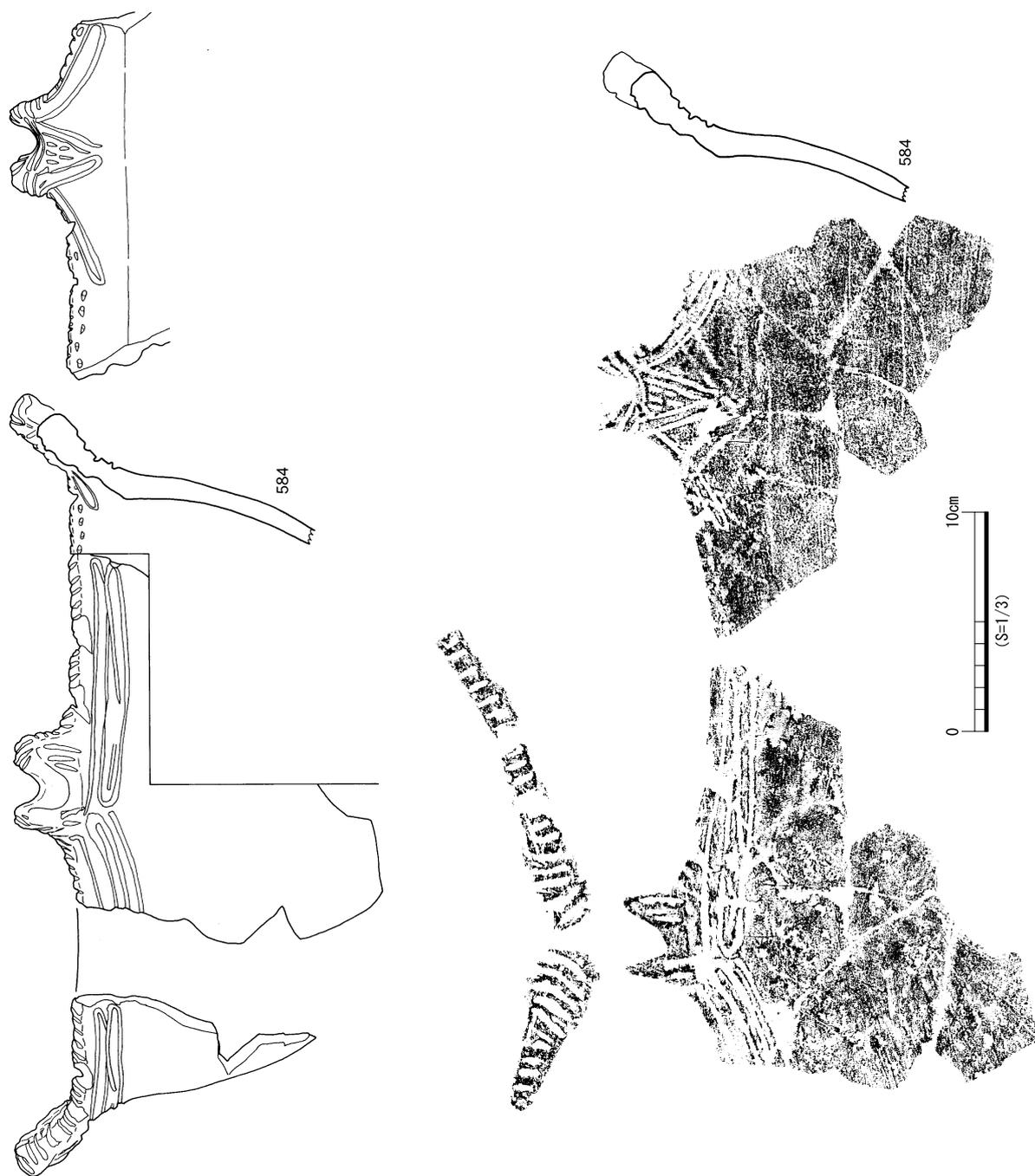


第111図 縄文時代後期土器 (34)



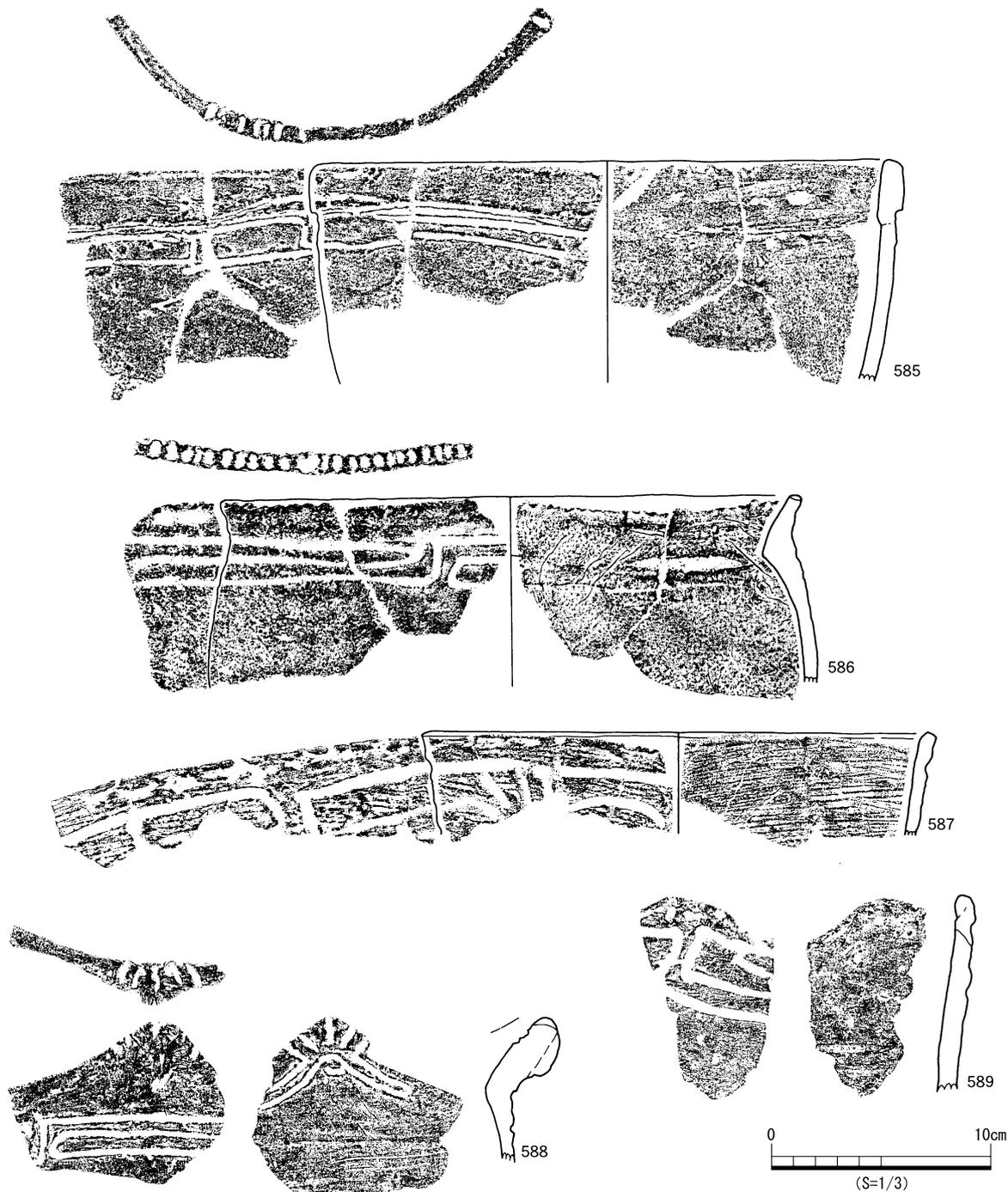
第112図 縄文時代後期土器 (35)

的である。口縁部は、く字状に短く屈曲し内面が肥厚して稜を形成する。やや胴張りする可能性がある。外面が劣化しているため、調整等について詳細を観察できないが、文様については、残存部で観察する限り、指宿式系に特有のモチーフを扁平に描いている。復元口径は約26.5cmである。587は、比較的薄く作られた資料である。施文後に口唇部平坦面の整形を行い、さらにそれにより生じた胎土の張り出しを調整していないため、口縁端部を乱したままとなっている。外面は、調整の貝殻条痕を残し、その上に幾何学文を施文している。貝殻条痕を文様に生かしているようにも見える。588・589は波頂部資料である。588では、波頂



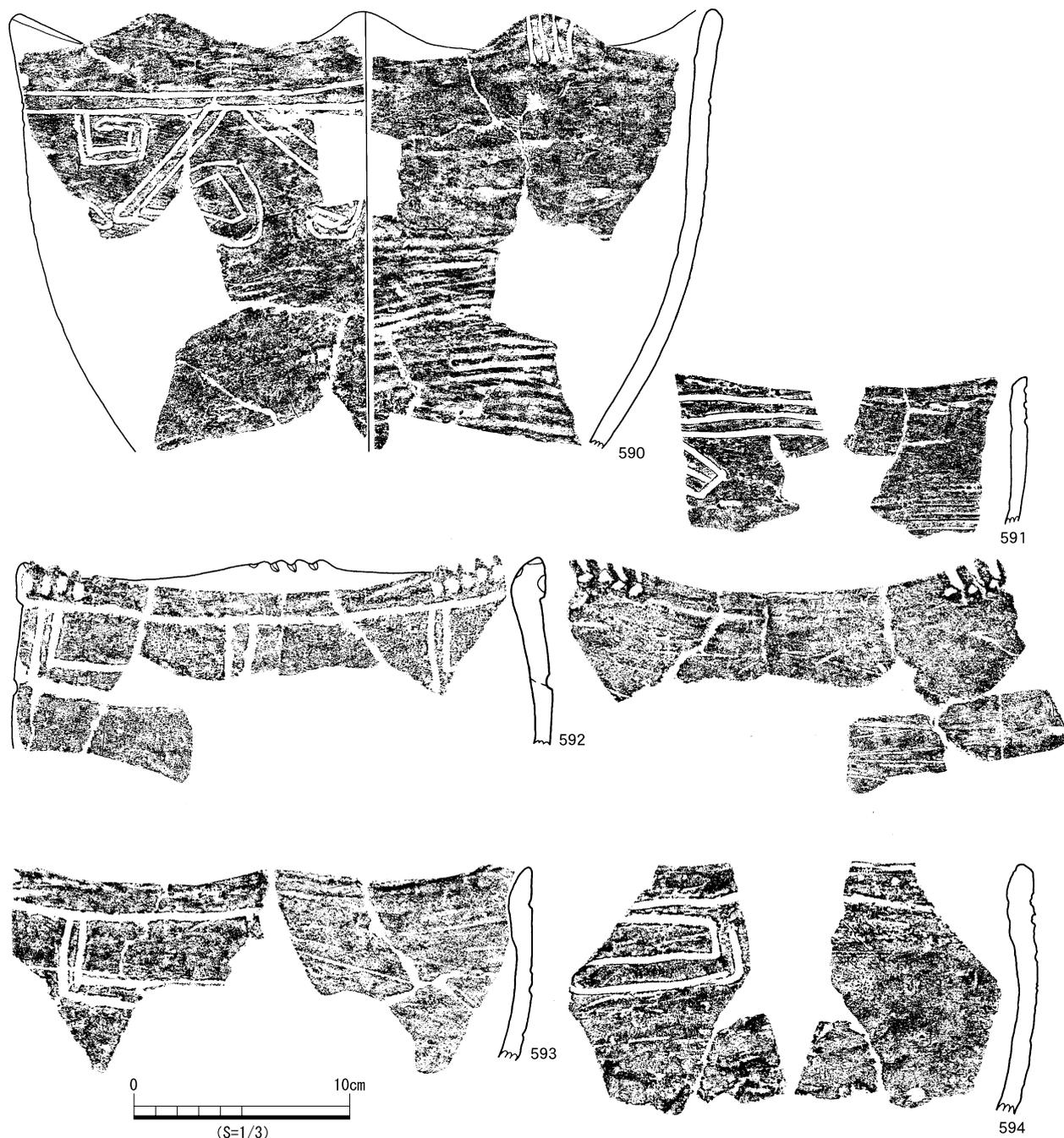
第113図 縄文時代後期土器 (36)

部内面にも施文していることがわかる。また、瘤状隆起は、向かって左のみ貼り付けた後の調整を行っていて、正面観が異なる。復元口径は約23.4cm。590は、4か所の波頂部を想定した資料である。波頂部の数は増減する可能性がある。口縁部内面の肥厚等、器形変化はない。指宿式系に特有の文様モチーフを、直線的に描いている。成形は丁寧だが、整形がやや粗い。591は、比較的薄く作られた資料で、3本単位の平行沈線による幾何学文が描かれているのが特徴的である。592・593は、胎土や器形の微妙な違いと接合しなかったことから別個に掲載したが、同一個体の可能性も考えられる資料である。やや内湾する口縁部と胴張りする

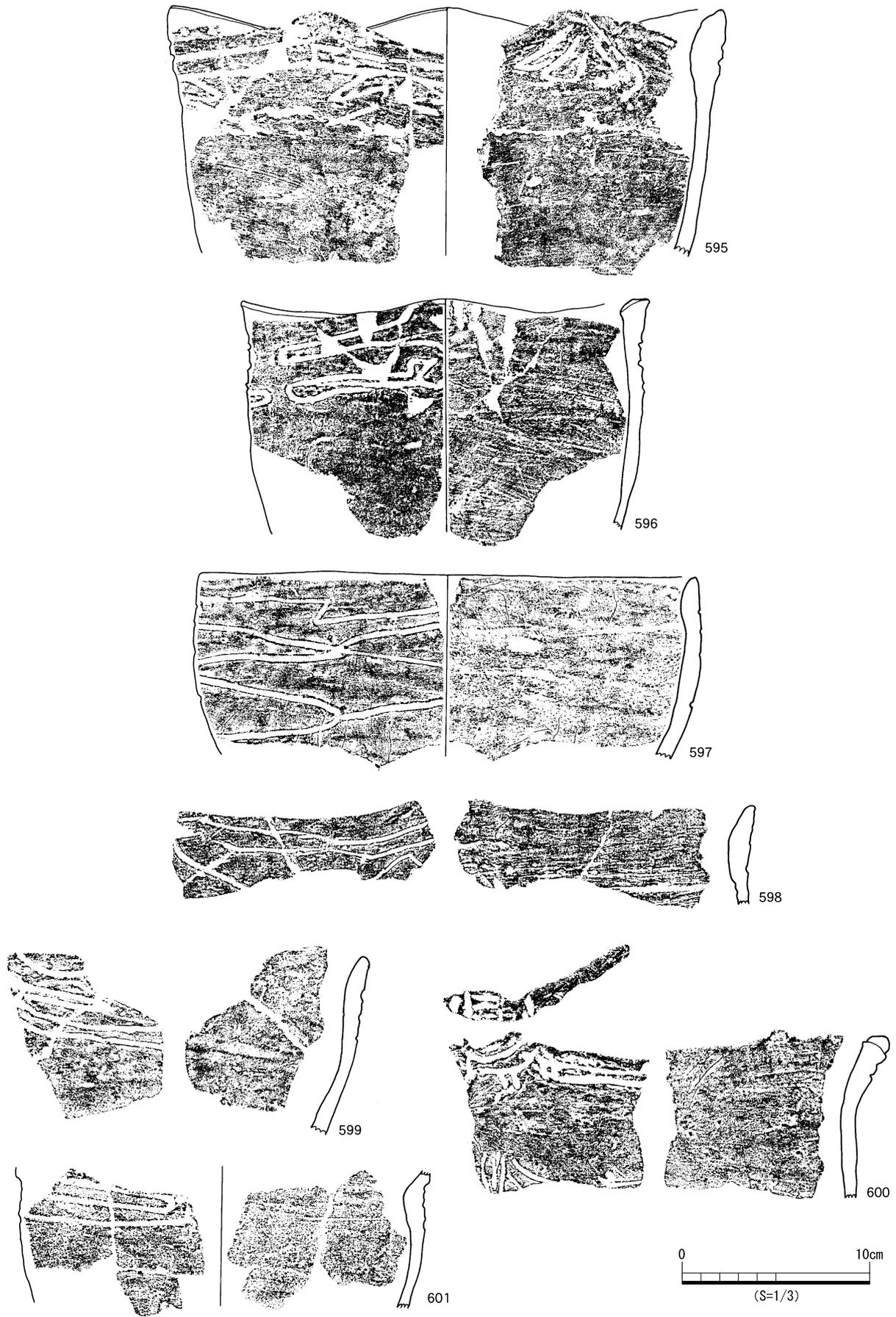


第114図 縄文時代後期土器 (37)

器形で、口縁部内面はわずかに肥厚し緩い稜を形成する。波頂部は特に肥厚する。復元口径は、どちらも約24.0cm。595は、波頂部の資料で、波頂部の数は想定である。波頂部のみ内面を肥厚させている。器面は、ケズリに近い調整が施されるほか、胎土に混和剤の多さが目立つ。文様は、口縁部下に2条単位の平行沈線で沈線文が施文され、その下位には、S字状文を組み合わせたような単位文様が、規則的に施文される。復元口径は約29.4cm。596は、波頂部資料で、口縁部内面は、肥厚して稜を持つが、稜と口唇部の距離が短い。器面調整は、内面と外面で工具を換えている可能性がある。文様は、断面の粗い棒状の施文具で引いた明瞭だがやや雑な沈線で、幾何学文を施文する。復元口径は約22.0cm。601は、胴部資料であ



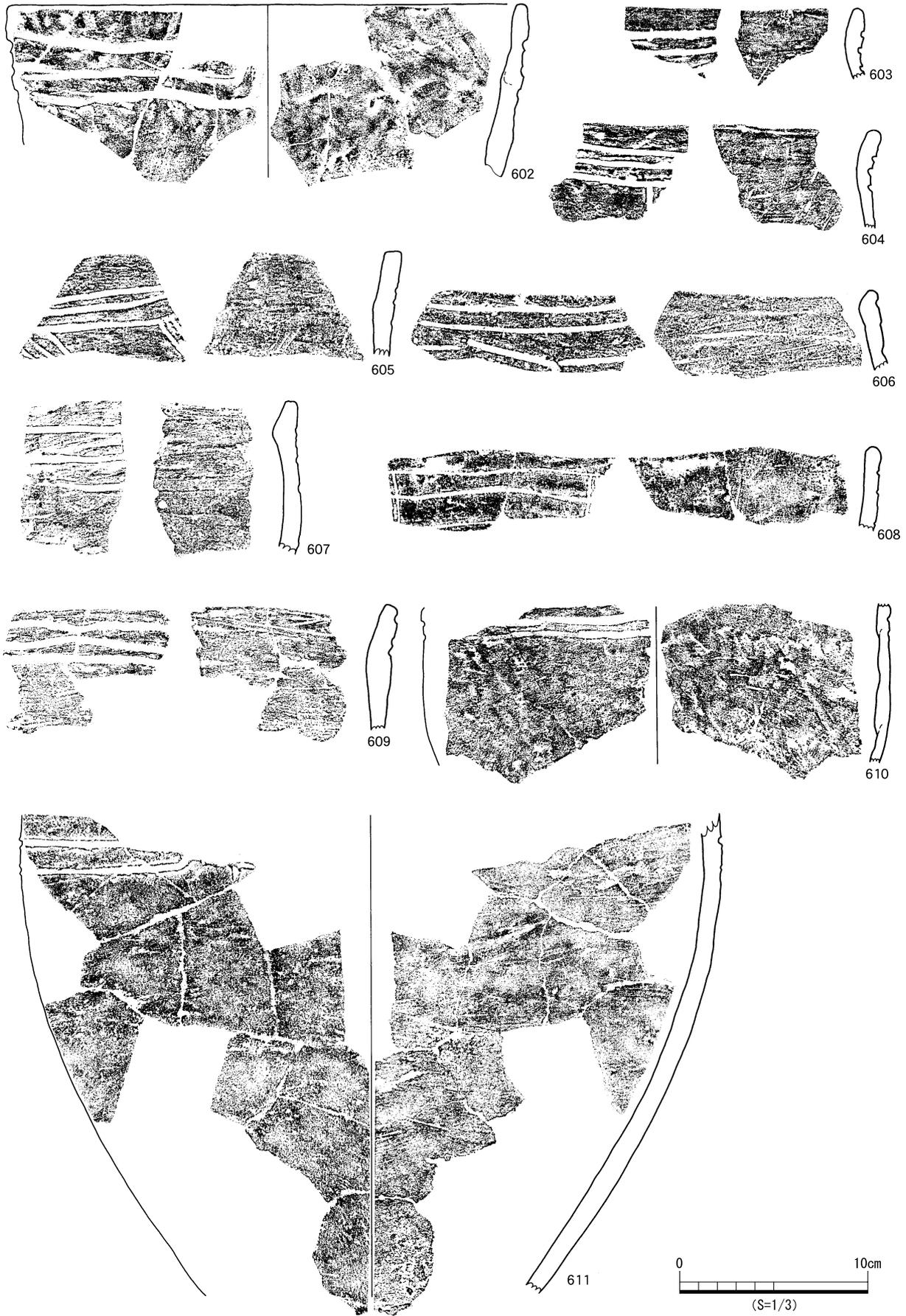
第115図 縄文時代後期土器 (38)



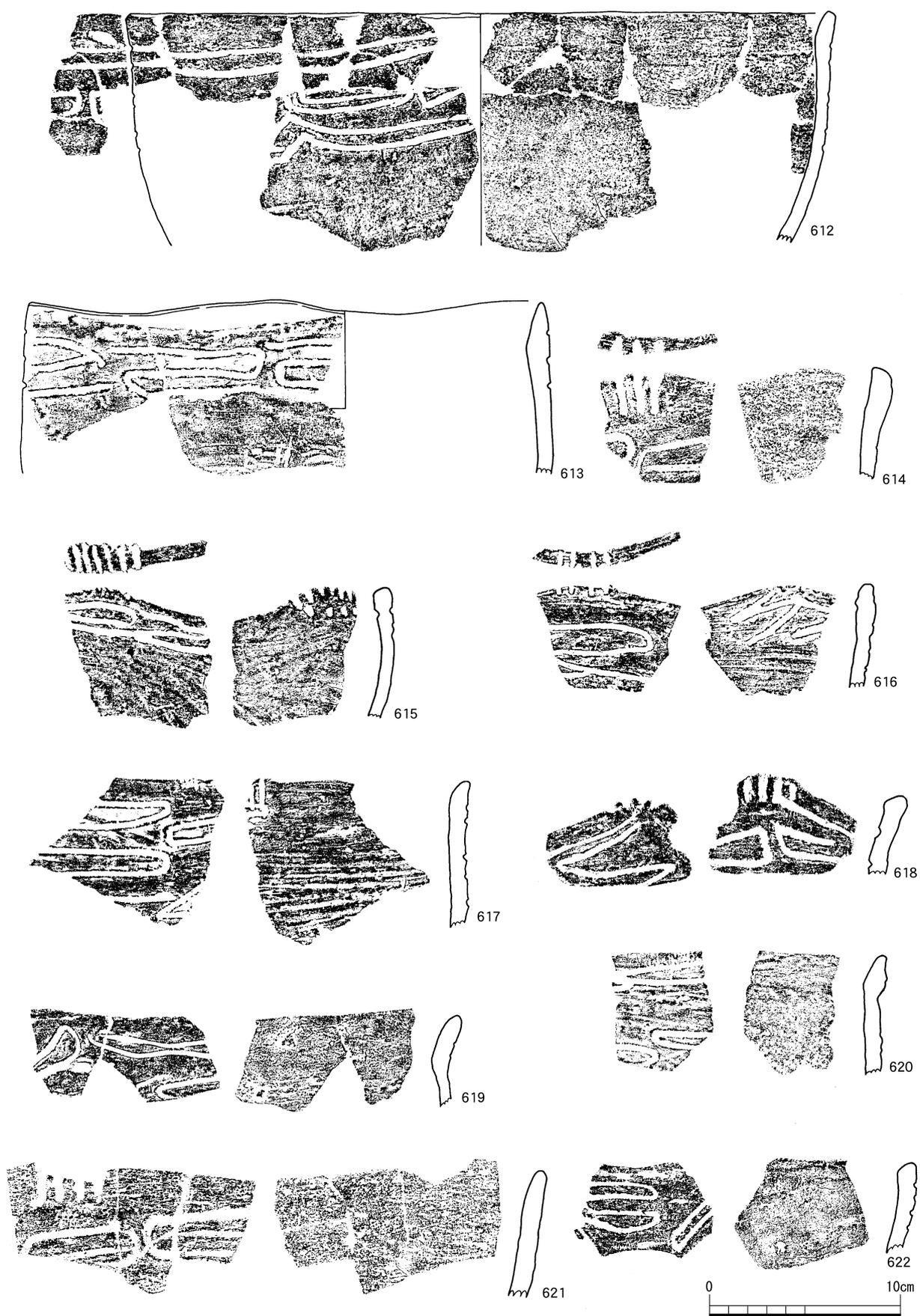
第116図 縄文時代後期土器 (39)

る。頸部で屈曲し胴部がやや張る器形となるようである。文様は、浅いが明瞭な沈線で扁平な幾何学文を施文する。復元胴径は約21.6cm。597は、平口縁と考えられる資料である。口縁内面は、肥厚し緩い稜を形成する。文様は、やや浅いが明瞭な沈線で、器面を大きく使って逆E字状のモチーフを施文している。復元口径は約26.4cm。598・599は、597と同じような幾何学文を施文していると思われる。第117図の各遺物も、沈線で直線的な幾何学文を施文しているが、モチーフ等は不詳である。602は、復元口径約27.8cmで、変化なく立ち上がる口縁部の整形は明瞭だがやや粗い沈線による施文など、全体的に雑な印象を受ける資料である。605は、口唇部を断面方形に仕上げているのが特徴的な資料である。610・611は、口縁部はないものの、胴部下位まで復元できた。鳴野原遺跡A地点では数少ない資料である。610は、復元径に比して薄い資料であるが、内面の整形が粗い。611は、器面調整は、内面・外面とも二工程を確認できるほか、工具も換えているのが観察できる。復元胴径は、最大部分で約37.2cmである。612は、平口縁を想定している資料であるが、波頂部があったことも考えられる。復元口径は、約27.4cmで、口縁部は、わずかに肥厚し緩やかな稜を形成するが、ほとんど外反はしない。色調は、暗赤褐色の特徴的な発色で、胎土は、混和材の砂粒の多さが目立つ。文様は、やや浅い沈線で細かい変化をつけた直線的な幾何学文を施文するようだが、変化をつけている部分の破損等のため、詳細は不明である。613は、波頂部が4か所あると考えられる資料である。復元口径は、約27.2cmで、口縁部は、外反せず内面も稜を形成するが肥厚しない。口唇部を断面舌状に整形した結果、内面に稜が形成されたようである。文様は、明瞭に引かれた沈線で、大振りながら扁平な逆S字状文を口縁部に平行して連続施文する。615は、口唇部を断面略方形に整形するが、内湾する形状は613と類似する。また、文様は、大きく扁平な逆S字状文は同じであるが、波頂部には、口唇上端に連続刻目と口縁内面に連点文が観察されるのが相違点である。616から622は、文様モチーフが613や615と類似するが、口縁部形状には若干違いが見られる。621は、台形状の波頂部が作成された資料である。混和材の砂粒の多さが目立つ。口縁部がわずかに外反するが、器面が劣化しており詳細は不明である。文様は、浅い沈線で楕円形のモチーフを連続施文すると思われる。623は、4か所以上の小波頂部がある可能性が考えられる資料である。口縁部が内湾する器形で、器壁は、口唇部に向かうにつれて肥厚する。肥厚は波頂部付近ほど顕著である。口唇部は、調整により若干の平坦面を形成する。器面は、外面が施文部分、内面が口縁部付近のみ他部位より丁寧な調整が施されている。文様は、細いが明瞭な沈線で、大振りなS字状文を連続施文する。復元径は、胴部最大径で約27.2cm、口径で約24.6cmである。626は、台形状の波頂部が形成された資料である。波頂部に向けて器壁が肥厚する他は、器形の変化はない。施文は、口縁部には、細く明瞭だがやや不安定な沈線で非対称な幾何学文を施文する。波頂部には、波頂部の形状に沿って短沈線文を施文する。624・625・632なども、文様モチーフが623と類似するが、632のみ口縁部形状が異なる。634は、復元口径約19.8cmである。渦文を含む文様が、磨消縄文土器を想起させる。634は、く字に大きく屈曲する口縁部が特徴的な資料である。文様は、この屈曲部から下位に施文されるようである。

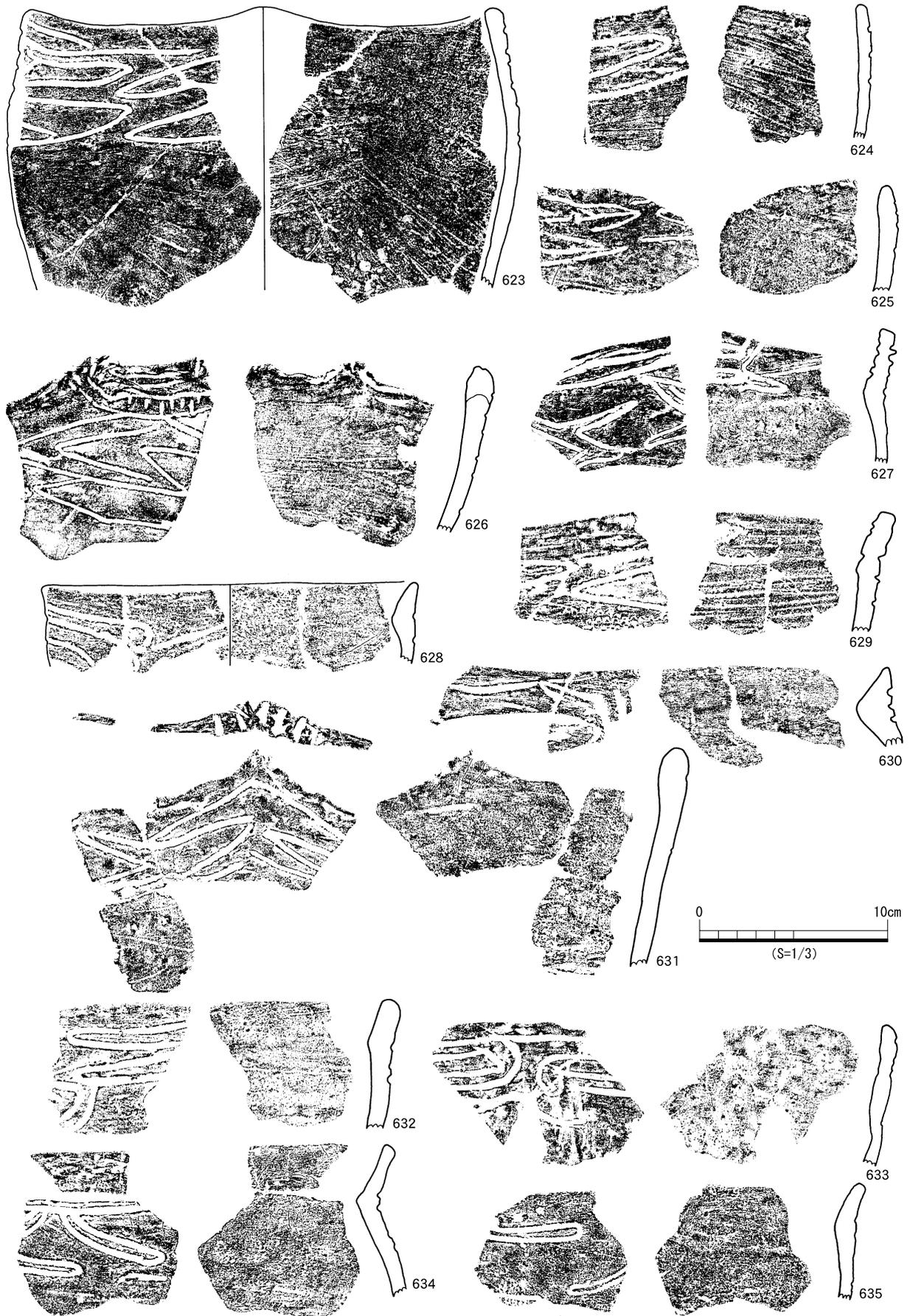
第120図の資料は、矩形の文様モチーフ、渦文を方形にアレンジしたようなモチーフが描



第117図 縄文時代後期土器 (40)



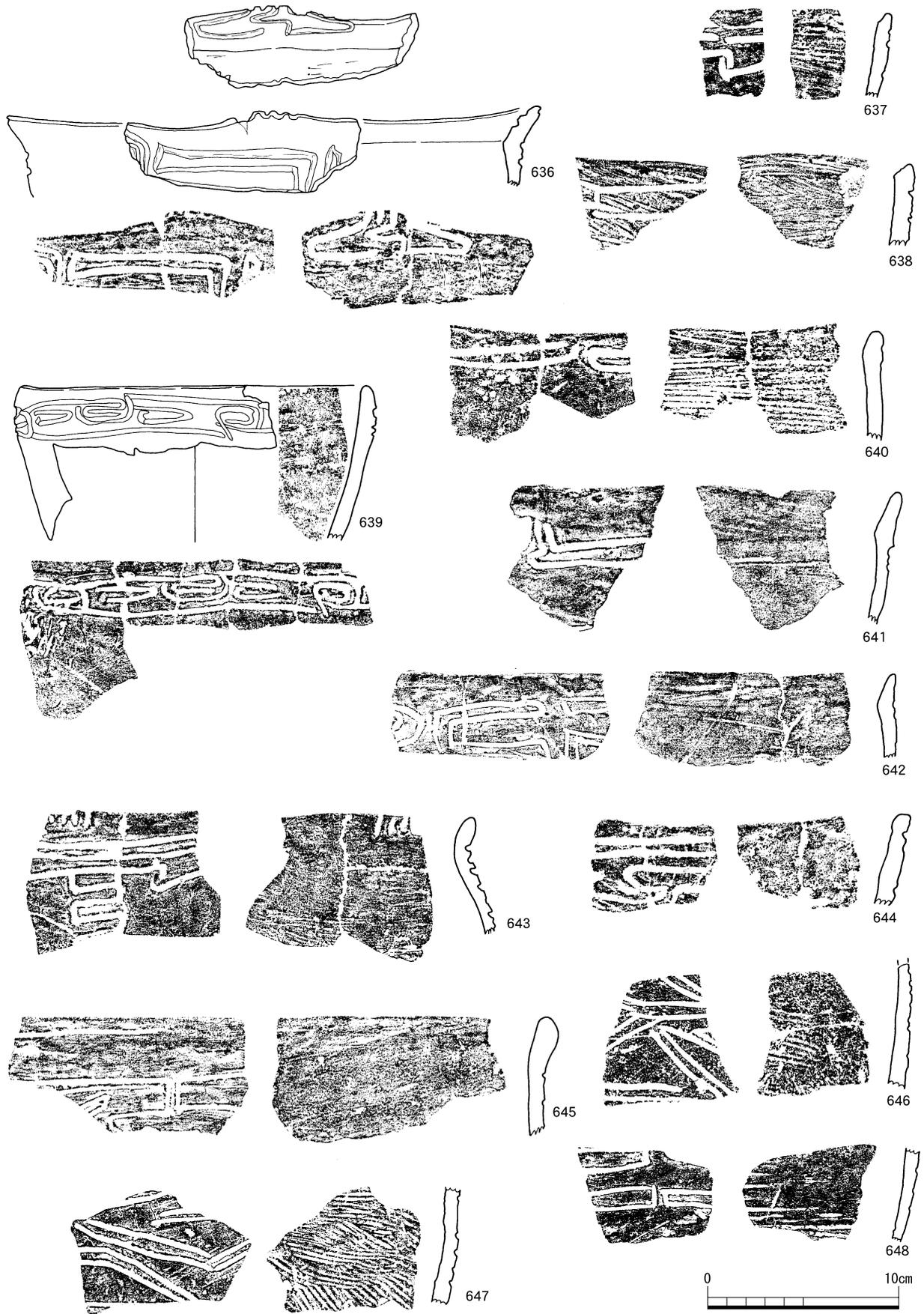
第118図 縄文時代後期土器 (41)



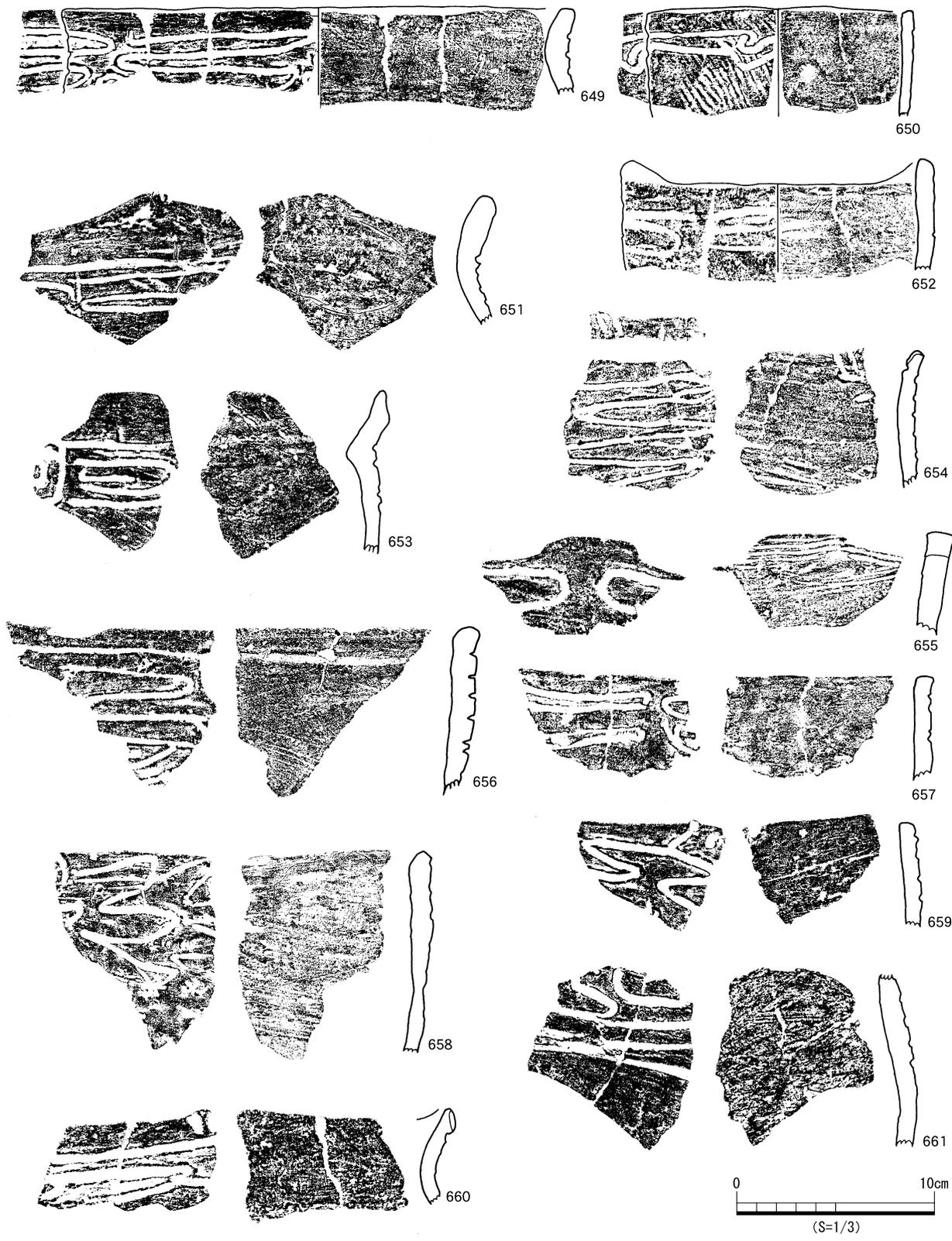
第119図 縄文時代後期土器 (42)

かれたものなどをまとめている。調整は、貝殻条痕が残る資料、ナデにより仕上げる資料など様々である。636は、波頂部の資料である。口縁部は、屈曲部から短いが強くと外反するが、波頂部分を含めて肥厚はしない。文様は、明瞭な沈線で指宿系に特有のモチーフを上下逆にして施文する。639は、平口縁と考えられる資料である。口縁端部がわずかに内湾し、口唇部は略方形に仕上げる。文様は、細いが明瞭な沈線で、渦文を方形にアレンジしたような文様を口縁部下に連続施文する。また、この文様の下部に、下方からの刺突と細沈線による文様の細工が施された部分がある。さらに、この細工の上部の口唇部にのみ、呼応するかのよう細工と異なる工具による刺突がある。復元口径は約18.4cm。641は、口縁部内面に稜を形成するが、さほど肥厚はしない。破片下端部にも沈線を観察できることから、本来は器面を大きく使って施文していると考えられる。643は、胴張りする器形と縦方向に展開する文様が特徴的な資料である。

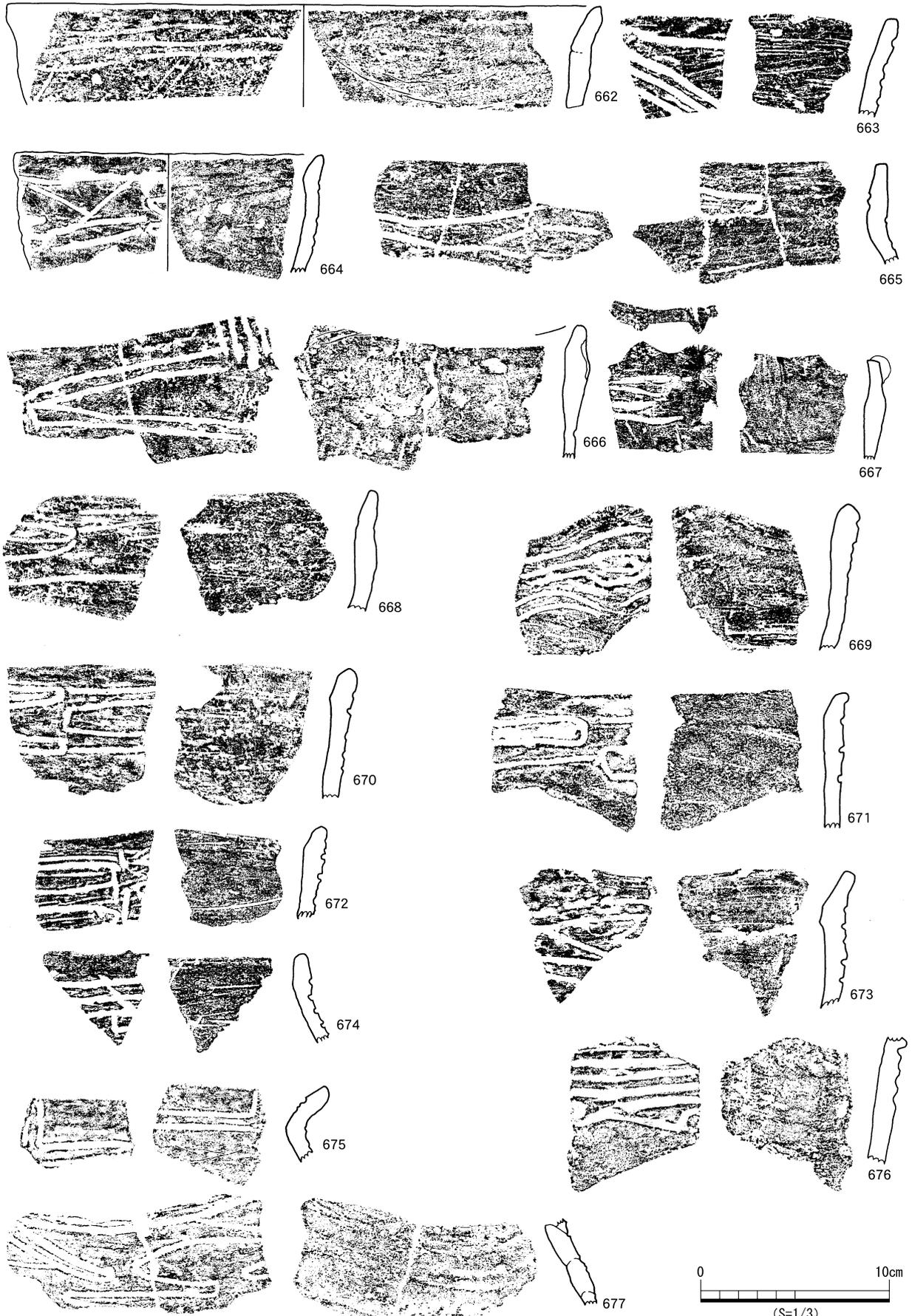
第121・122図の資料は、逆E字状の文様やそれに類似する文様などを施文する資料をまとめた。651・653・660のように、口縁部が波頂部を伴って外反するものとそうでないものに分かれる。また、652・654のように小形の資料もある。どちらも波頂部が形成され、前者は復元口径約16.0cm、後者は約13.8cmである。後者は、外面に煤が多量に付着している。664は、平口縁の資料である。口縁部内面に稜を形成するが、肥厚はしない。文様は、明瞭な沈線でやや大雑把に施文される。666は、口縁部がやや肥厚するものの稜は形成されず、外反などの器形変化のない資料である。文様は、明瞭だがやや不安定な沈線で、2条を1単位として菱形文を施文する。677は、胴部資料である。浅いが安定した沈線で丁寧に幾何学文を施文している。675は、短いが強くと外反する口縁部の両面に、同じようなモチーフの文様を描くのが特徴的である。678は、器壁がやや厚みのある資料である。口縁部に平行する沈線文が巡るほか、資料右下端にも沈線が1条観察できる。双方の工具は異なっている。682は、波頂部付近の資料であるが、残存部を観察する限りでは、文様に、器形に対応した変化等は見受けられない。686は、復元胴径27.4cmで、径に比較して器壁の薄い資料である。表面が劣化していて、詳細を観察できない。687は、台形の波頂部が形成された資料である。小片のため詳細は不明であるが、器面調整や幾何学文を描く沈線の運びなどは、丁寧な作業で行われている。688は、胴部まで文様が施文される場合があることが判る資料である。鳴野原遺跡A地点で散見される、口縁部に連続施文されるE字状の文様の下端の状況を類推させる。689・690・692などは、2条単位の平行沈線で流水文的な文様を施文するのが特徴的である。器形も、程度の差はあるが口縁端部をわずかに外反させる点が共通する。691・694も、間隔を空けた平行沈線の隙間に幾何学文を施文する点が共通する。691の口縁端部内面は、調整によりわずかに外傾する。697は、平口縁と考えられる資料であるが、波頂部が2又は3か所あった可能性はある。大きさに比して器壁の薄い資料であるが、器面調整は丁寧である。口縁内面の肥厚や稜の形成等は見られない。文様は、細いが深く明瞭な沈線で、3条を1単位として器面を大きく使って格子目状の幾何学文を施文する。復元口径は約36.0cmである。698は、波頂部が4か所以上ある資料である。口縁部は、内面で肥厚し稜を形成してわずかに外反する。文様は、明瞭な沈線で2条1単位の平行沈線を引き、菱形



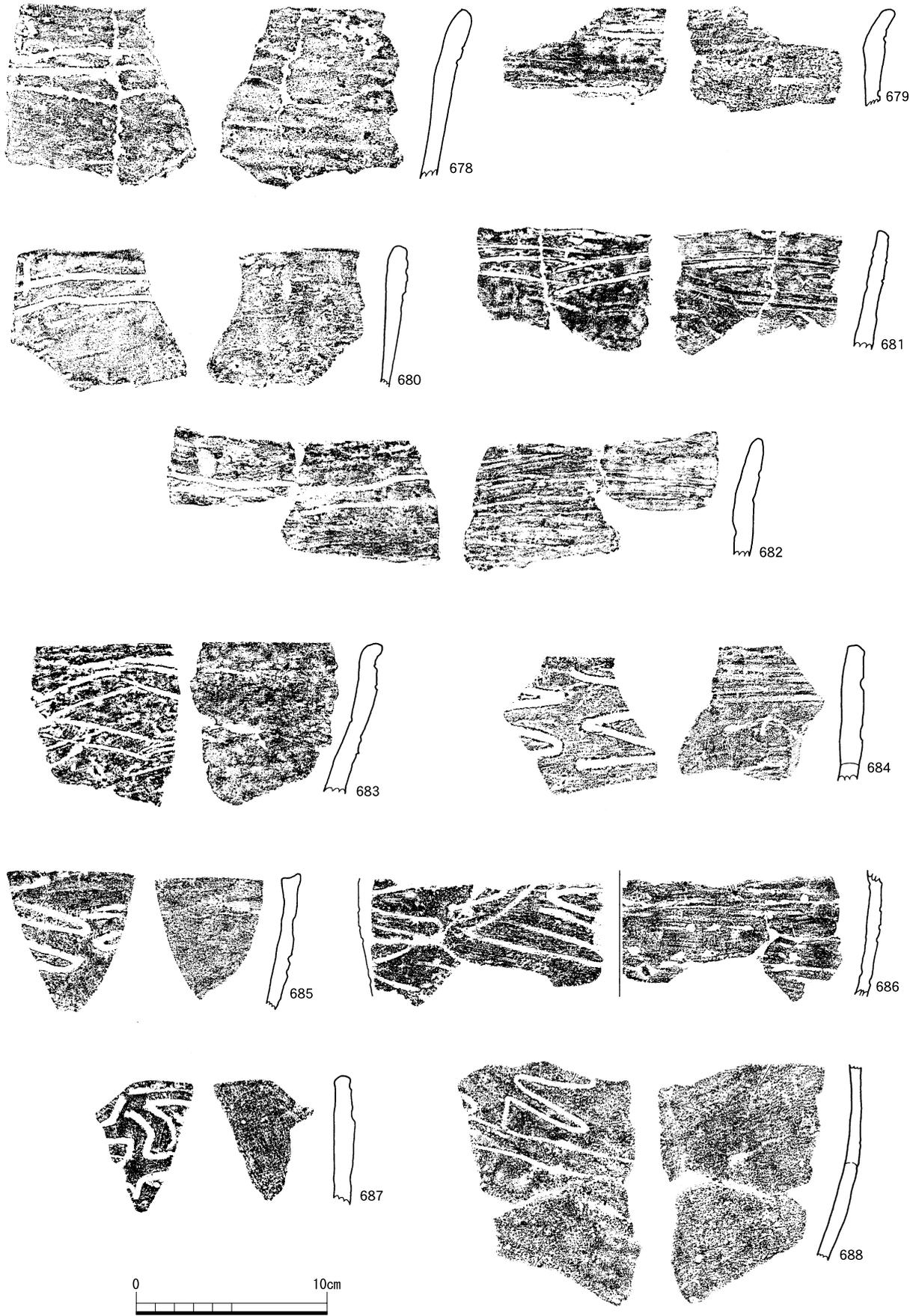
第120図 縄文時代後期土器 (43)



第121図 縄文時代後期土器 (44)

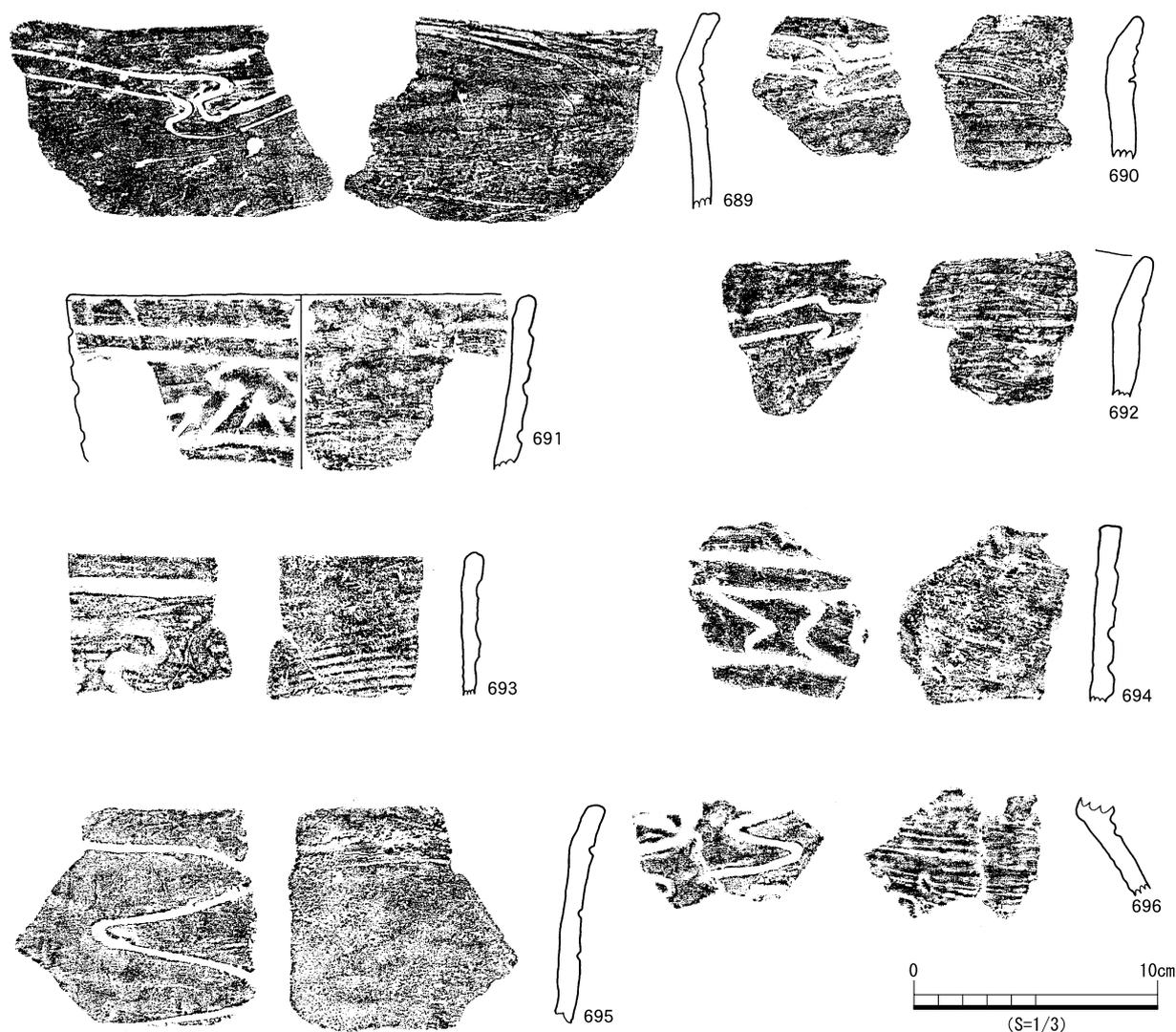


第122図 縄文時代後期土器 (45)



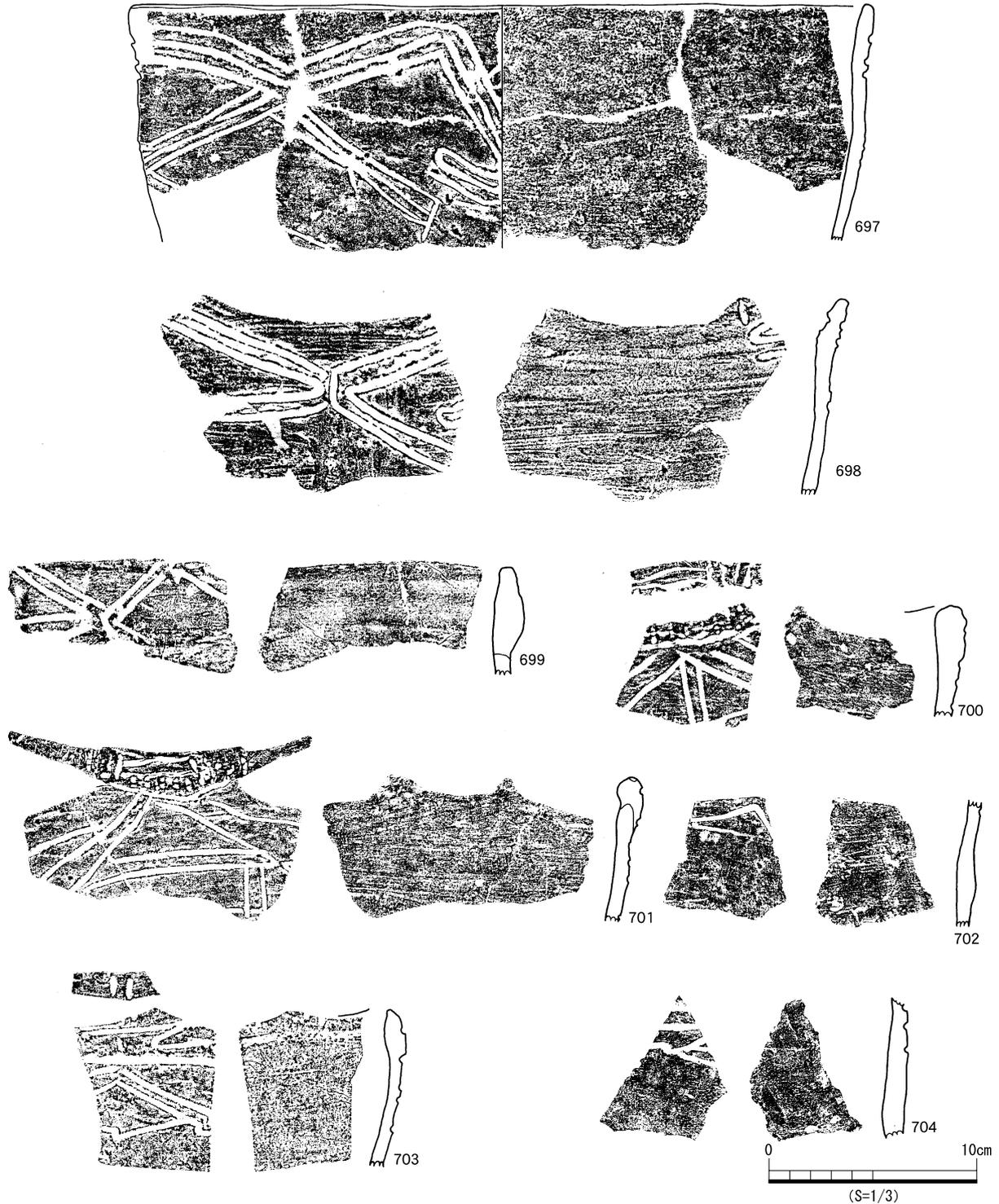
第123図 縄文時代後期土器 (46)

にみえるモチーフを左右対称を基本に施文している。701は、平口縁に2つで1単位の隆起部が形成された資料である。全体的に口縁部が胴部よりも厚く成形される。文様を描く沈線は、明瞭だが大雑把な施文である。隆起部分には、三叉状の工具（貝肋？）で刺突文が施される。703は、波頂部付近の資料である。残存部の形状から、環状の隆起部が貼り付けられていた可能性がある。口縁部はわずかに肥厚し、それを1条のやや太めの沈線が強調している。しかし、この口縁部形状を文様帯とはせず、比較的丁寧に引かれた沈線による幾何学文は、胴部まで及んでいる。第126図は、縦位の沈線と横基調の沈線を組み合わせた文様とそれに類する文様を施文している資料をまとめた。705は、波頂部の内面に隆起部を加える資料である。文様は、断面V字の沈線で明瞭に施されている。文様モチーフは、渦文である可能性もある。707・708は、器形や文様が類似する資料である。いずれも平口縁を想定している。器面は、ケズリに近いナデで調整されておりやや粗い仕上げである。文様は、櫛状の工具を用いていることが特徴的である。707・708の復元口径はどちらも約26.8cmである。709は、資料下端が沈線に沿って割れている。第127図は、格子目状の文様を施文する資料をまとめ

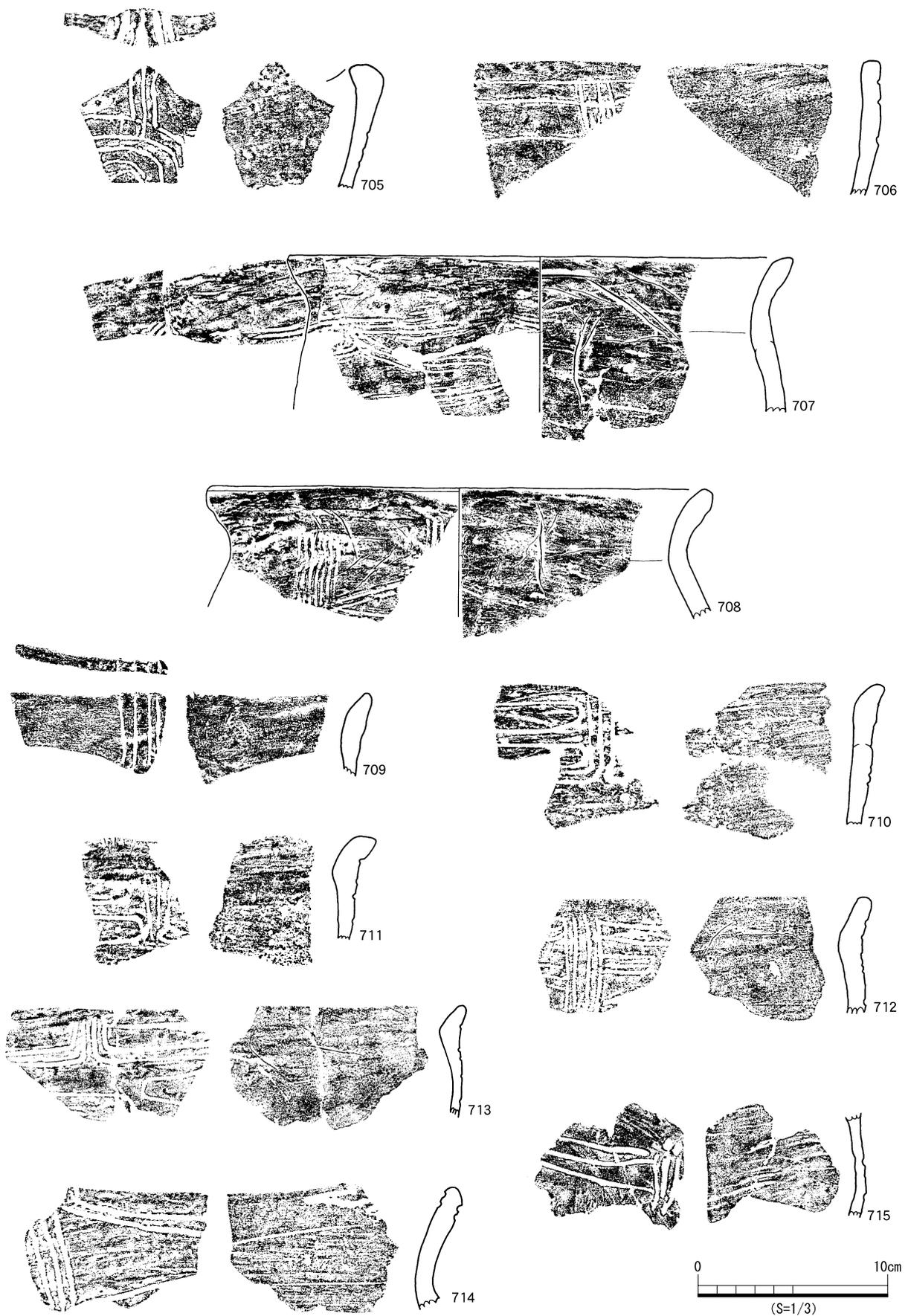


第124図 縄文時代後期土器 (47)

た。716は、波頂部付近の資料で、器面が劣化しているため詳細は不明である。口縁部は、内面に稜が形成され、わずかに肥厚、外傾する。文様は、口縁部に3条1単位の沈線で格子目様の文様を施文しているようである。復元胴径は約21.2cmである。717は、口唇部上端に凹点を連続させ小波状の口縁部形状とする。外面の施文部分は、他の部位が粗いナデで調整されているのとは異なりナデで調整されており、施文部分が強調されている。

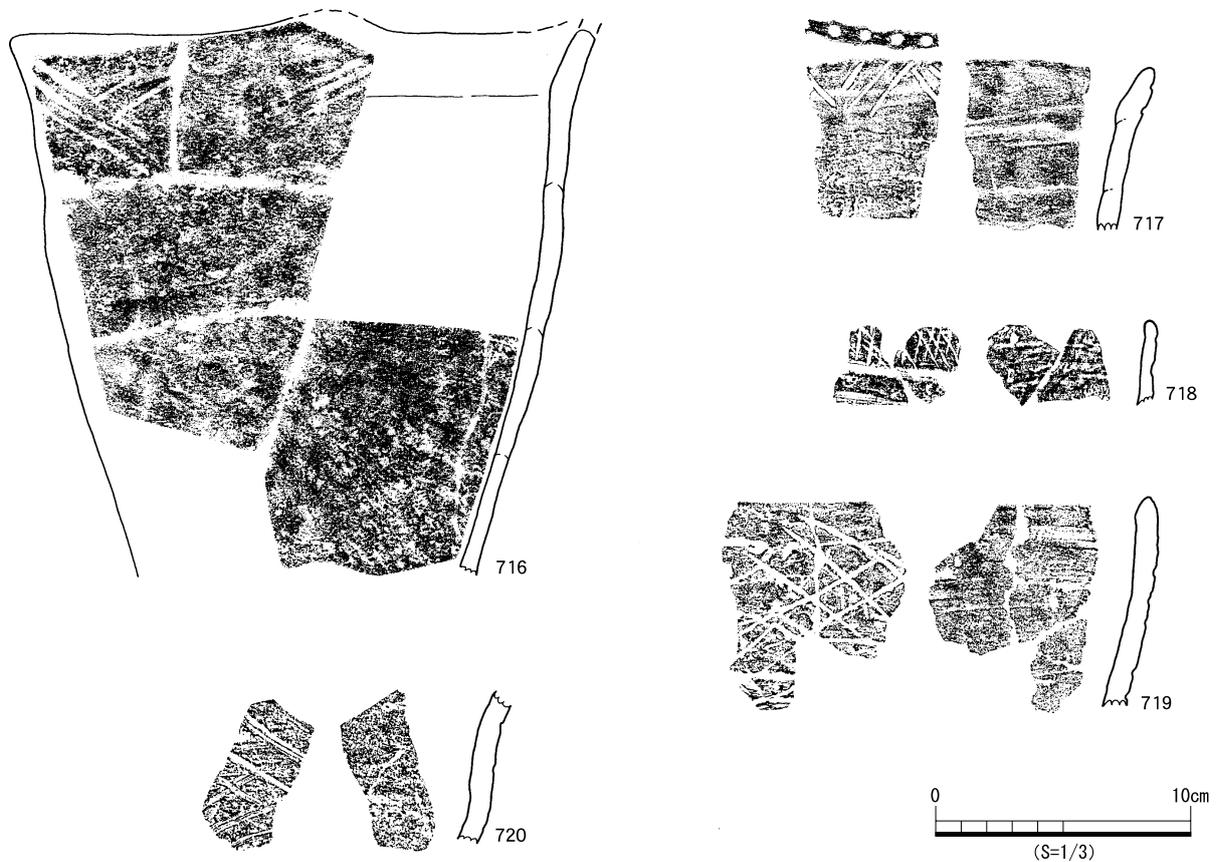


第125図 縄文時代後期土器 (48)

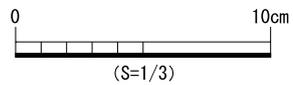
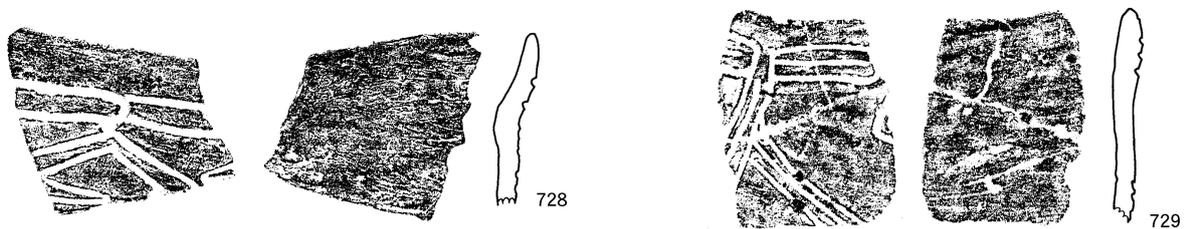
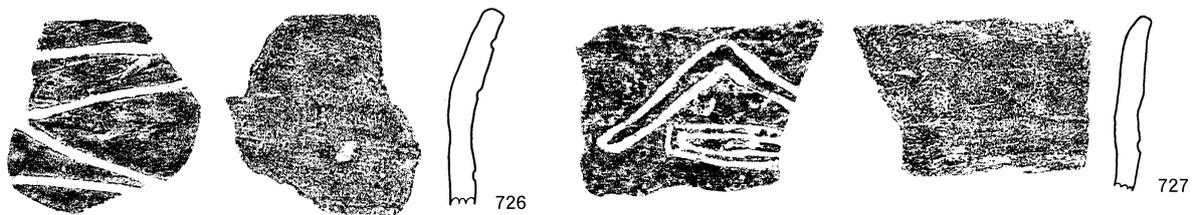
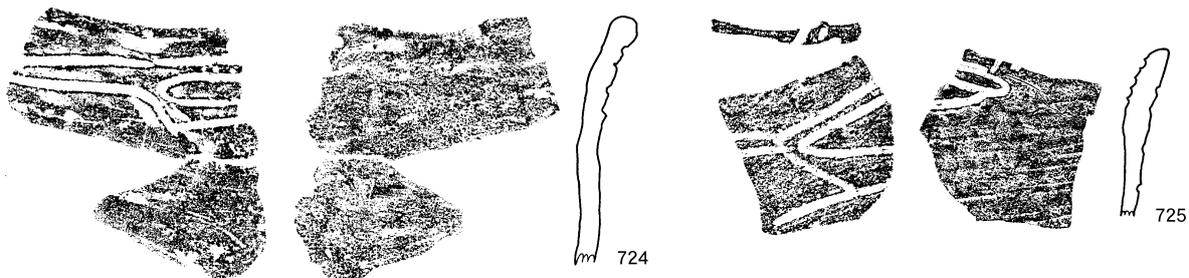
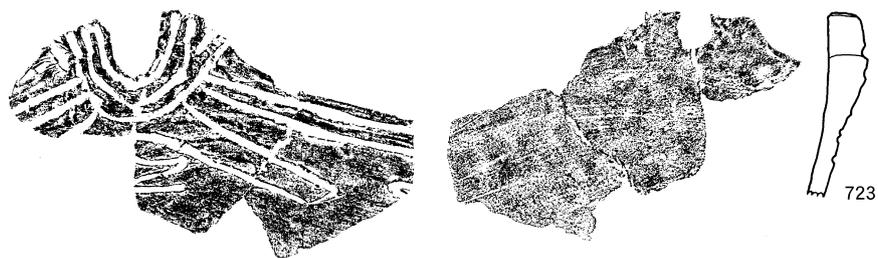
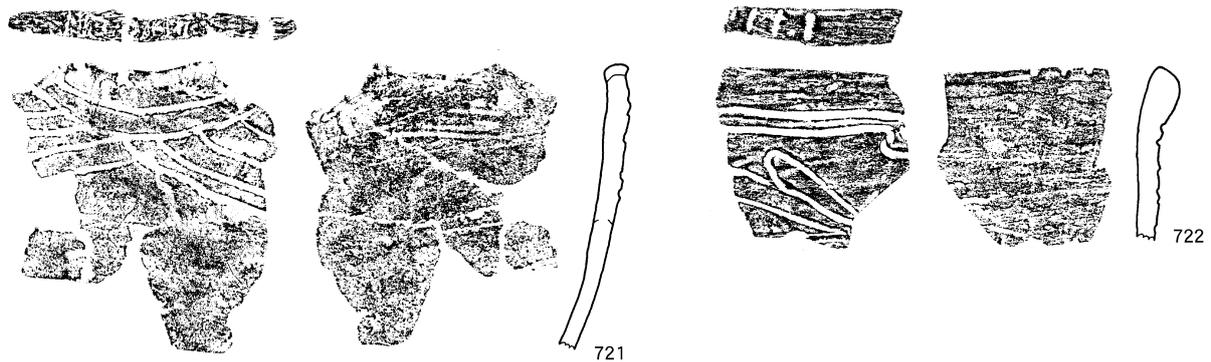


第126図 縄文時代後期土器 (49)

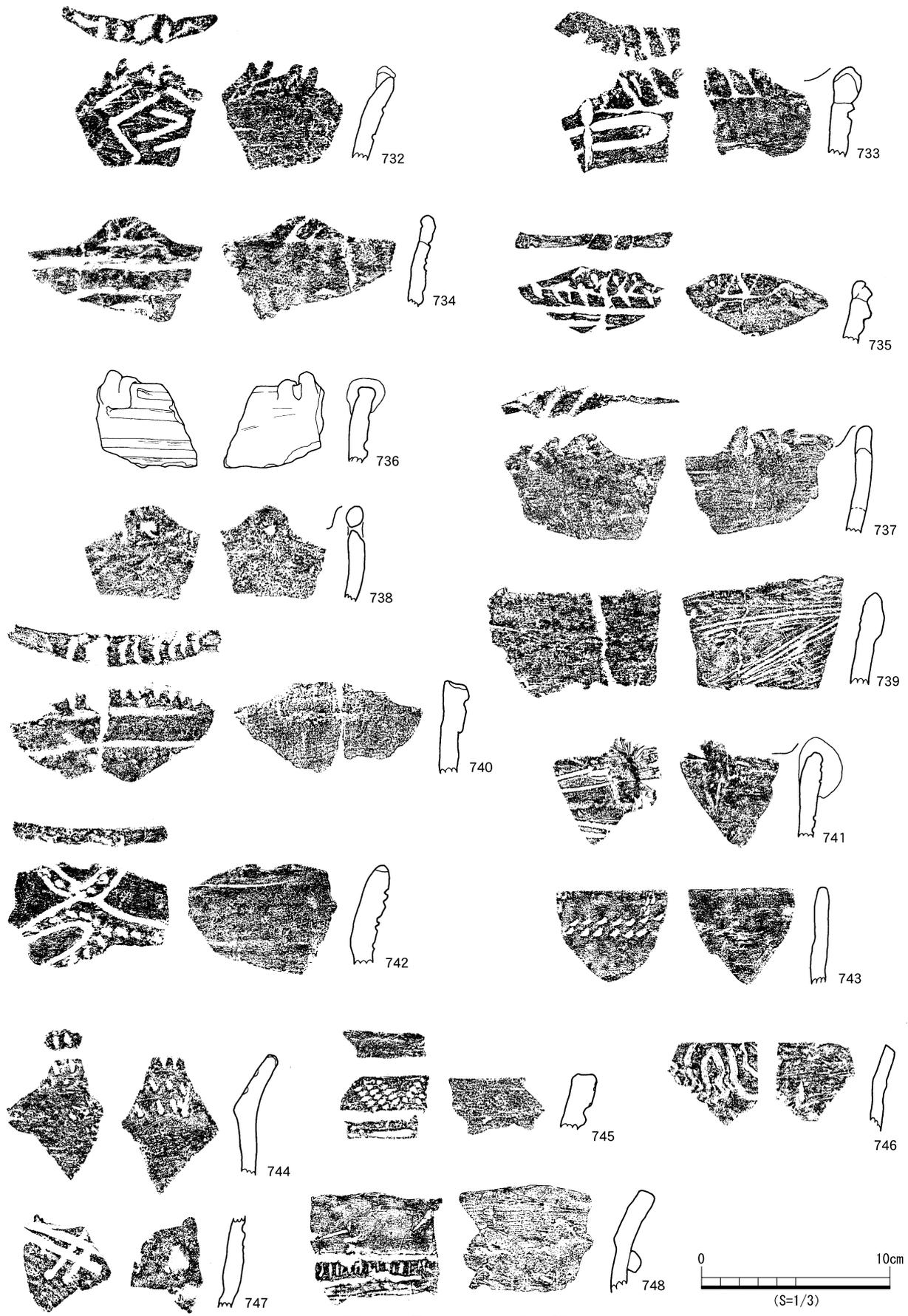
第128から131図は、口縁部等をまとめた。723は、波頂部の形状が特徴的な資料である。波頂部のみ肥厚させて外へ張り出すが、その他には器形の変化はない。文様は、器形に対応して左右対称に展開するが、沈線の引き方は粗い。729は、細いが明瞭な沈線で、楕円文と3条1単位で施される幾何学文を組み合わせている点が特徴的な資料である。732から735・737などは、口縁部に捻った粘土紐を貼り付けている。736は、細い粘土紐を2本、縦位に貼り付けている。748は、細かい連続刻目をつけた突帯を1条巡らせる。749は、口縁部形状に特徴がある資料である。口唇部外端を庇状に作り、胴部変換点近くにも突帯様の肥厚部を作る。また、この突帯様の肥厚部の間に、環状の浮文を貼り付ける。文様は、これら器形への造作を取り込んだ幾何学文を施文する。750は、残存部形状から小形の鉢と考えられる資料である。成形・整形ともに丁寧で、文様も、胴部最大径まで器面を大きく使って丁寧に施されている。751は、波頂部内面に大きく施された文様が特徴的である。波頂部のみ口唇部内面が外傾するだけで、全体的には口縁部内面の稜等は形成されていない。756は、波頂部を4か所と想定した資料である。口縁部がわずかに肥厚し内面に稜を形成する。器面は、外面の貝殻条痕が明瞭に残っている。条痕の方向が揃っていることから、地文として応用された可能性もある。757は胴部資料である。器面は、貝殻条痕が明瞭に残っているのが特徴的である。口縁部がないが、底部付近まで残る資料であり、本遺跡では希少な資料である。



第127図 縄文時代後期土器 (50)



第128図 縄文時代後期土器 (51)

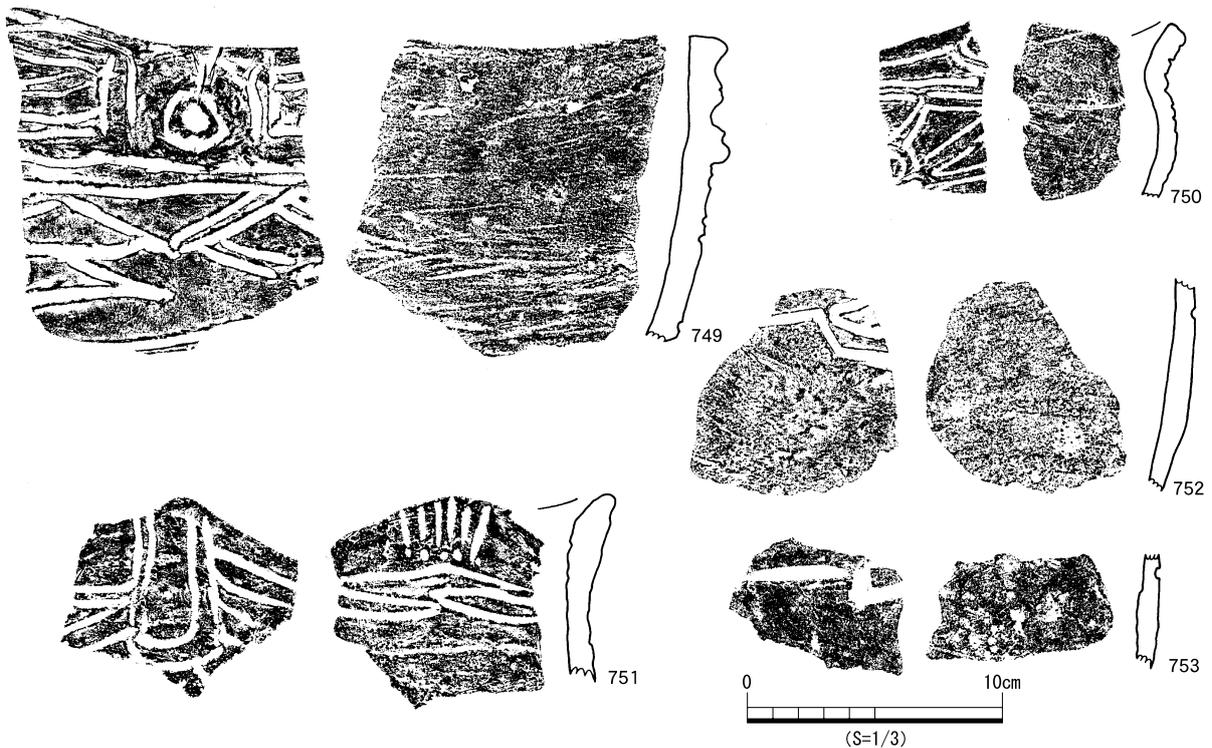


第129図 縄文時代後期土器 (52)

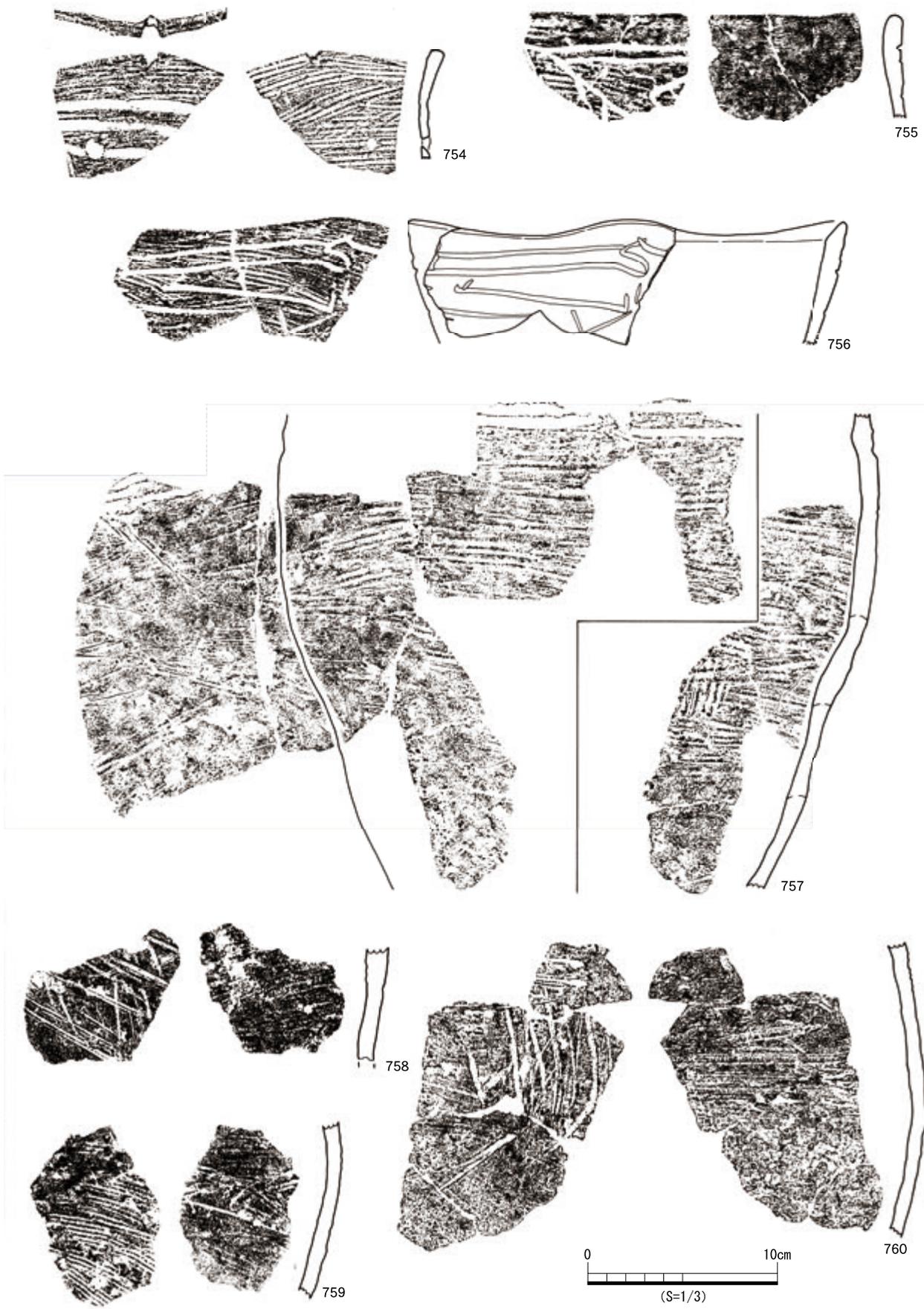
VIII c ・ 区類 (第132 ~ 137図)

761は、口縁部に作られた波頂部が3か所あることが判る資料である。波頂部における、肥厚や外反などの器形変化はみられない。口唇部内端にわずかに稜が形成される。文様は、貝殻刺突を沈線のように用いて、2条を1単位とする刺突線で格子目文のような文様を施文している。資料が口縁部付近までしかないため、文様が、胴部付近でどのような展開をするのかは不明である。復元口径は、約20.2cmである。762から764などは類似資料と考えられ、764などを見る限りは、胴部までは施文していないようである。763の復元口径は約15.0cm。765は、直線的に立ち上がる器形を有しており、平面的な器面に工具の特性を利用して弧文を施文する。復元口径約28.4cm。769は、口縁部が丸みを帯びて肥厚するが、場所によって厚みに差があり、厳密性は低い。胎土は、混和材はあるものの比較的きめが細かい印象である。文様は、口縁部に横位の貝殻刺突文を複数条施文している。何らかのモチーフを描いているように見えなくもないが、不明である。772は、小片のため詳細は不明だが、口縁部が外反する器形であるのが特徴的である。また、工具も他資料に比して大形の貝を用いている。777は、波頂部が台形状に強調されている資料である。口縁部は、内面が肥厚し稜を形成する。文様モチーフは2条単位の平行沈線文であろうか。復元口径はおよそ16cmである。778は、鉢形の器形が想定される資料である。器面には、2条単位の弧文が横位に施文される。復元口径約16.1cm。779・780は、類似する資料である。外面に、菱形状の文様を施文する。784は、口縁部外面を肥厚させて文様帯とし、貝殻刺突文を施文するほか、沈線で胴部、口唇部にも文様を施している。内面が特に丁寧な調整を施された資料である。

第134図には、788のような、沈線文と貝殻刺突文を組み合わせた文様を有する資料をま



第130図 縄文時代後期土器 (53)



第131図 縄文時代後期土器 (54)

とめた。788は、平口縁と考えられる資料である。成形・整形ともに丁寧で、器壁も大きさに比して薄い。指宿式・曲線文系に散見される幾何学文に貝殻刺突文を加えている。復元口径は、約32.6cmである。791・792・794は、文様に類似点が認められる資料である。胎土や焼成に相違点が観察されたため、別個に掲載している。793の口唇部には、草の穂のような工具で刻目様の施文が施されている。796は、波頂部が剥落した資料で、胴張りの強い器形である。文様は、Ⅷaの類に散見される幾何学文に貝殻刺突文を加えたような文様である。復元口径は約22.4cm、胴径は約26.6cmである。

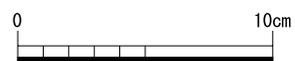
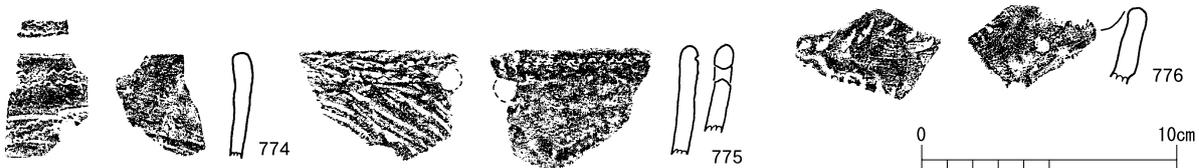
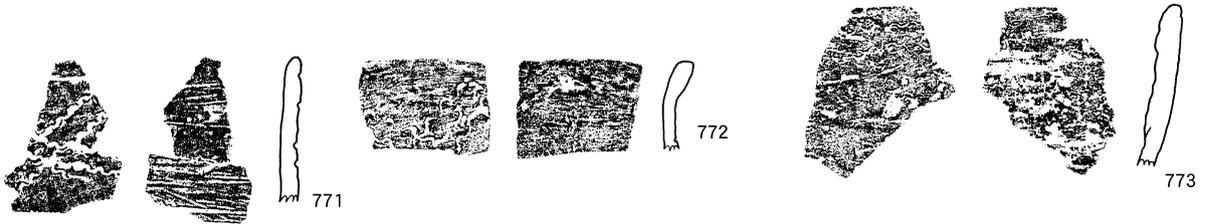
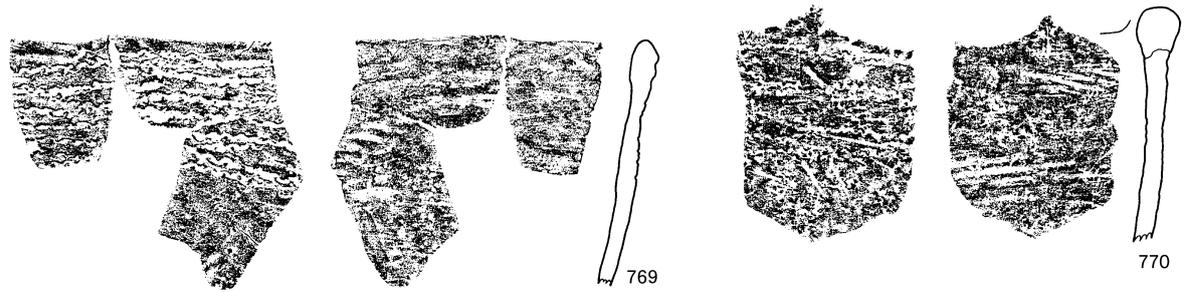
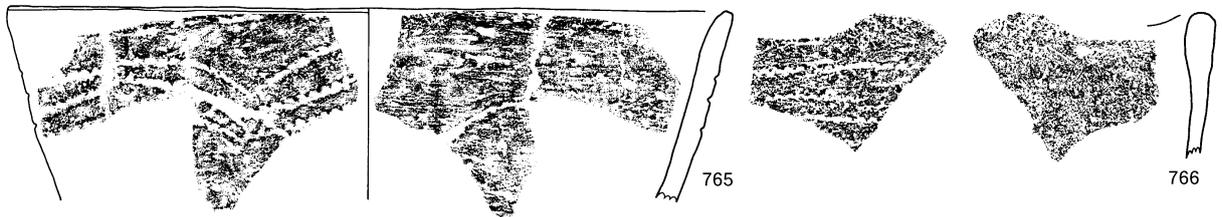
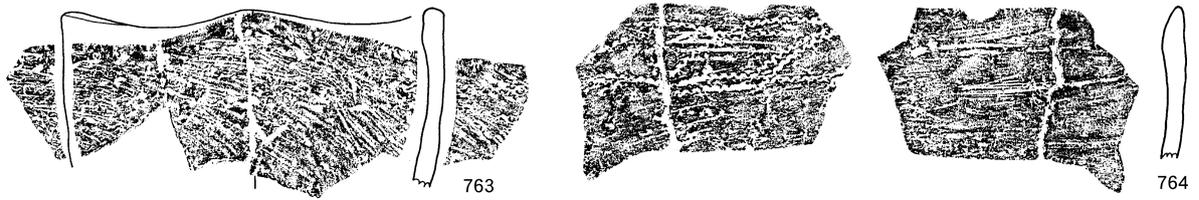
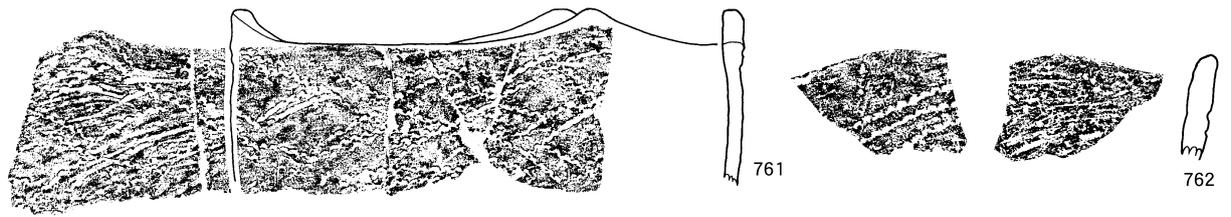
第135図には、貝殻刺突が施された橋状把手等の資料をまとめた。804は、波頂部資料と思われる。多孔の装飾を有する点が特徴的である。口唇部は、波頂部とそれ以外で工具の向きを変えて施文しているのが観察できる。805は、施文はやや粗いが、器形の整形はとても丁寧で、器壁も薄い資料である。810は、縄文が施文された資料である。類例の少ない形状をしている。

第136図には、貝殻でなく連点などで、沈線の隙間を埋めた文様が施文された資料と、それに類する資料をまとめた。812は、平口縁と考えられる資料である。大きさに比して軽い。調整は、特に口唇部内側が、光沢を帯びるほど丁寧な調整が施される。復元口径は約29.8cmである。815から817などは、825の類似資料と考えられる。818は、貝殻刺突の代わりに連点を用いられている資料である。

第137図には、磨消縄文土器も掲載した。824は、松山式系の特徴を有しているが、沈線間に貝殻を刺突していることから、便宜上、ここに掲載した。復元口径は約26.0cmである。826は、平口縁と考えられる資料である。口縁部は、端部が肥厚せず短く外反する。文様は、明瞭だが粗い2条の短沈線で弧文を連続施文し、短沈線の隙間に貝殻を刺突している。復元口径は約27.6cmである。いずれも単節の縄文を施文したあとに沈線で区画し、部分的に縄文を磨り消して文様を完成させている。832・834は口縁端部がキャリパー状にわずかに内湾する。835・836は算盤玉状の形状を有する磨消縄文土器の胴部資料である。

X類（第138図）

第138図には、波頂部の形状が独特な資料や、橋状把手など装飾性のある資料をまとめた。837は、浅鉢形の完形復元品である。装飾部分は2か所と想定しているが、それ以上である可能性はある。波頂部を方形に作成し、粘土紐をリボン様にまとめて橋状把手として貼り付けている。器面は、内面、外面ともに粗いナデで調整されているが、胴部屈曲部より上位はより丁寧なナデ調整が施されており、全体的に丁寧な成形・整形である。また、部分的に赤色顔料が残存しており、特に規則性が認められないことから、元来は全体的に塗布されていた可能性が考えられる。復元口径は約22.7cmである。838は、837と同じく浅鉢形の器形と考えられるが、内湾する口縁部形状で、平口縁となる可能性もある。全体的に丁寧な整形で、口唇部は、断面方形を基本としている。把手部分には、撚糸文を横位に施文している。破片であり詳細は不明だが、把手部分以外に文様が観察されないのが特徴的な資料である。840は、台形の隆起部を作成し、隆起部の外側に、さらに巴状の浮文を貼り付けている資料である。浮文の頂部には、貝殻を不規則に刺突している。台形隆起部には、上位に大きめの凹点

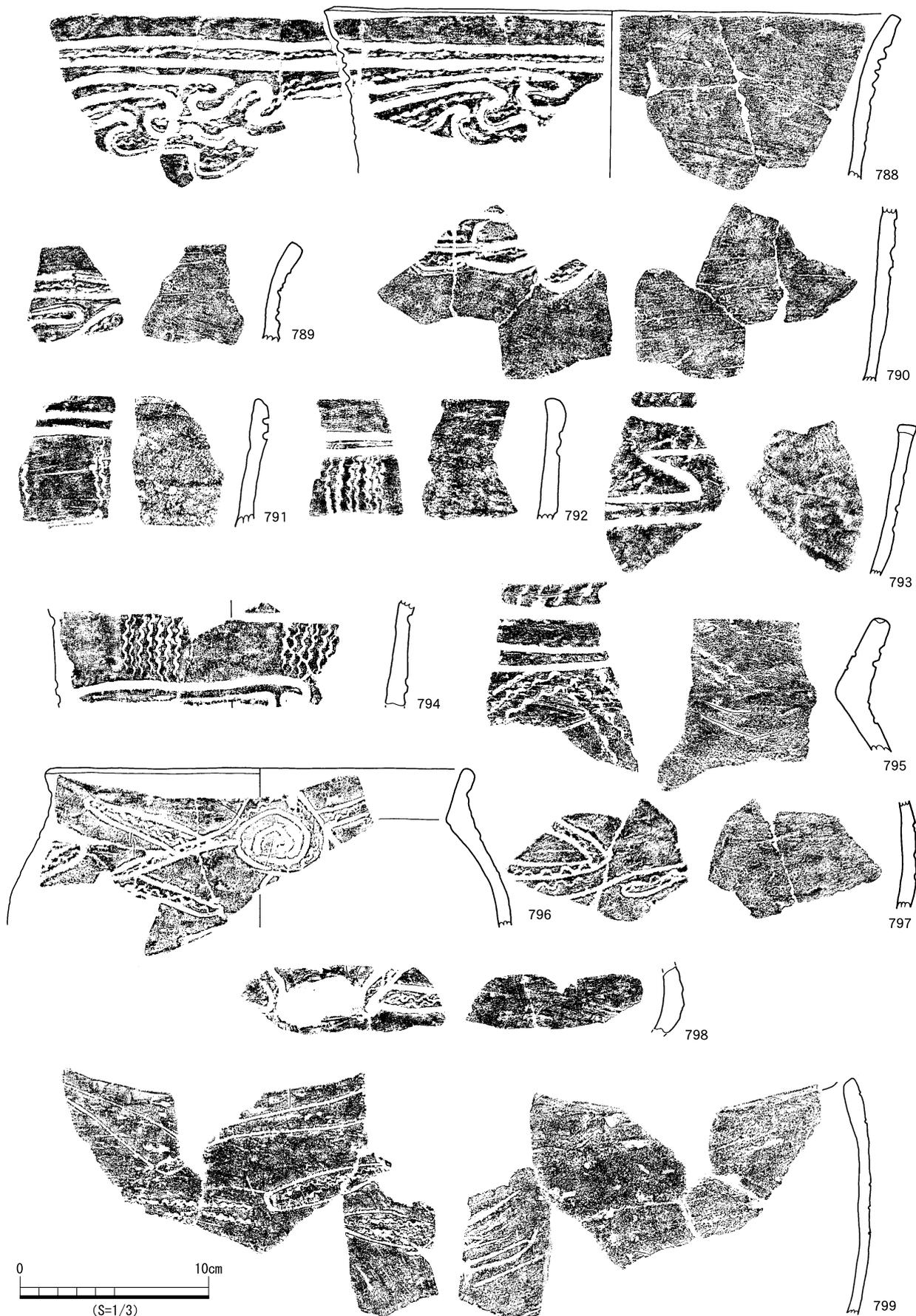


第132図 縄文時代後期土器 (55)

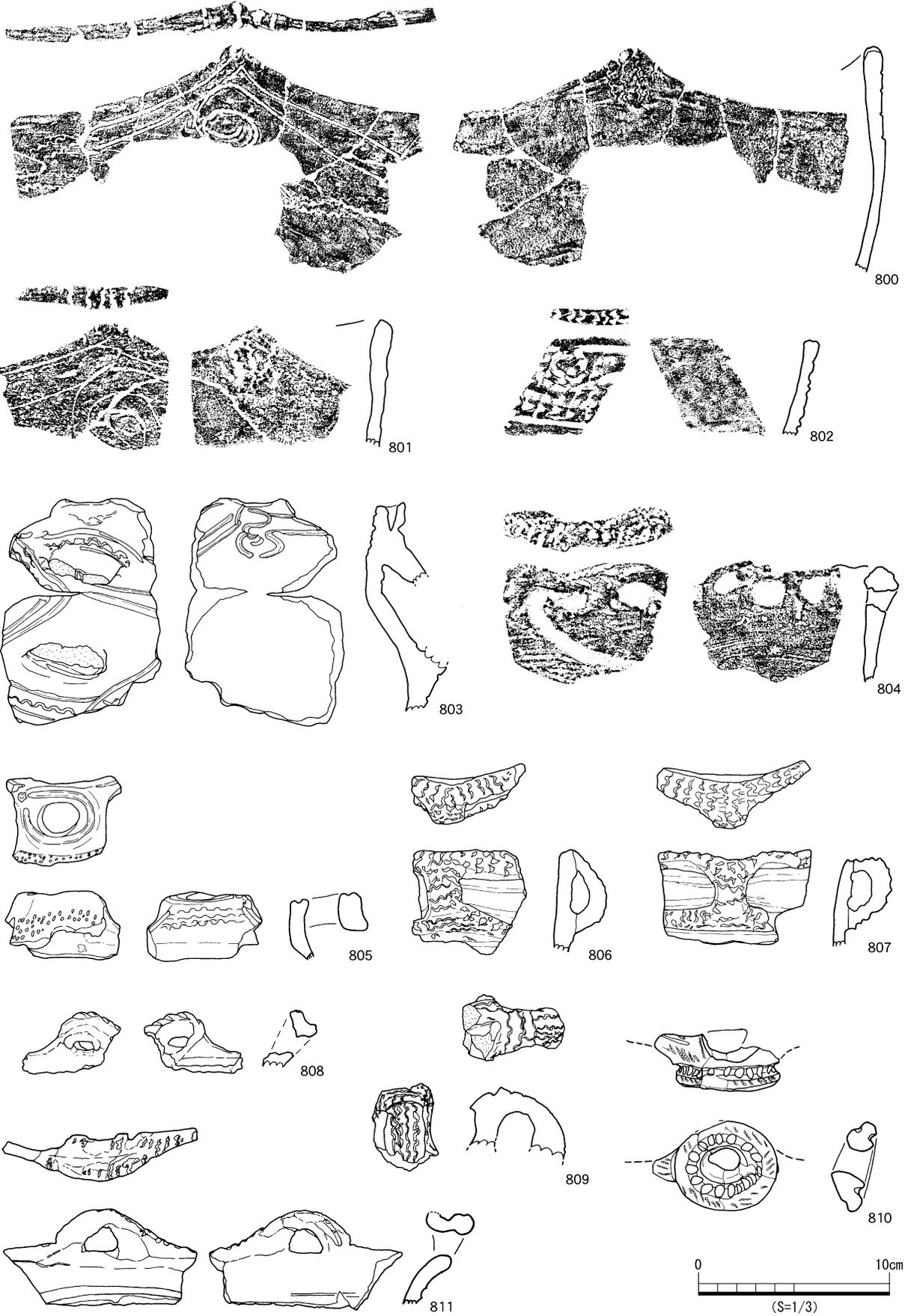
(S=1/3)



第133図 縄文時代後期土器 (56)

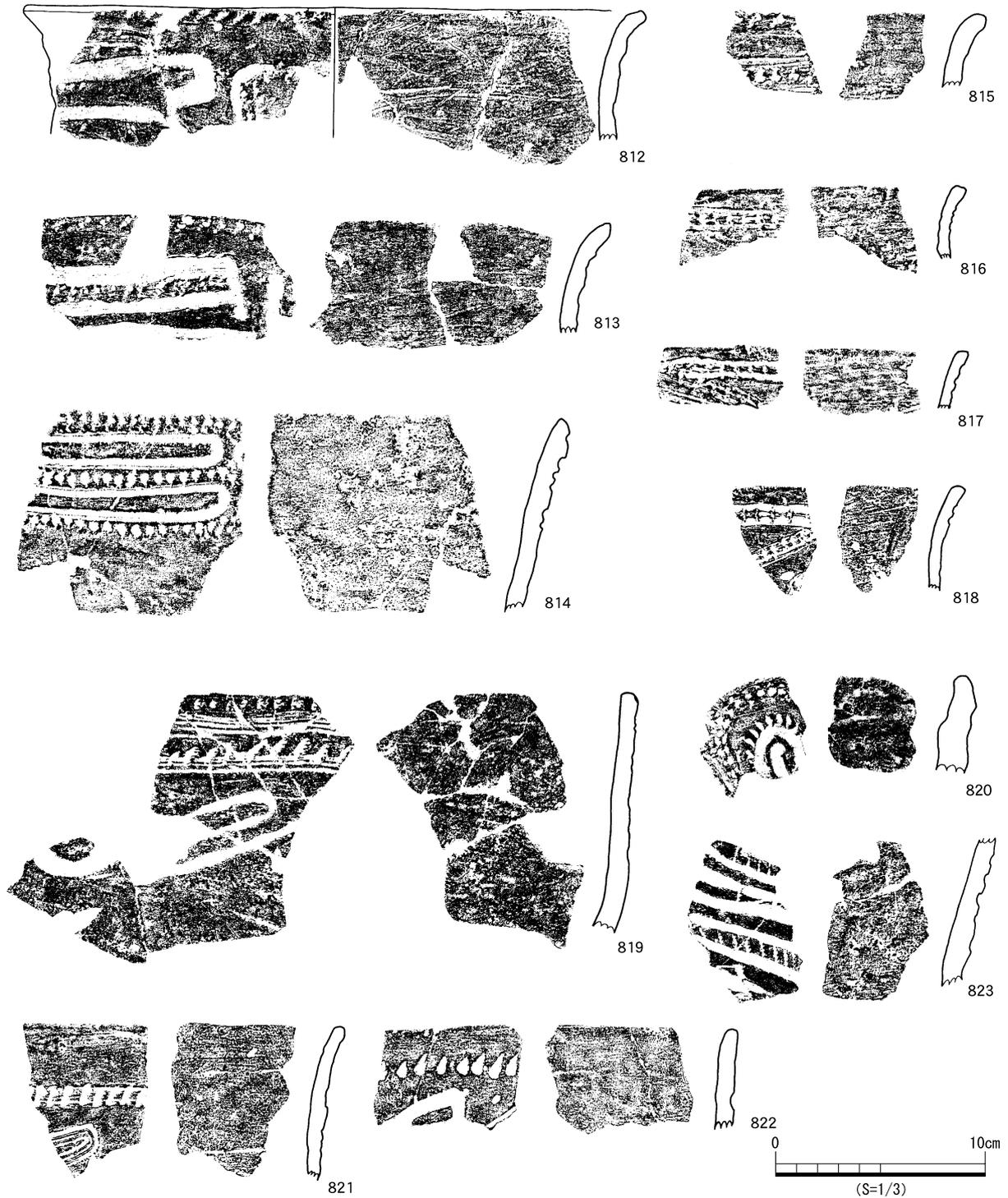


第134図 縄文時代後期土器 (57)

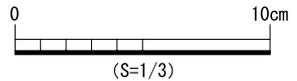
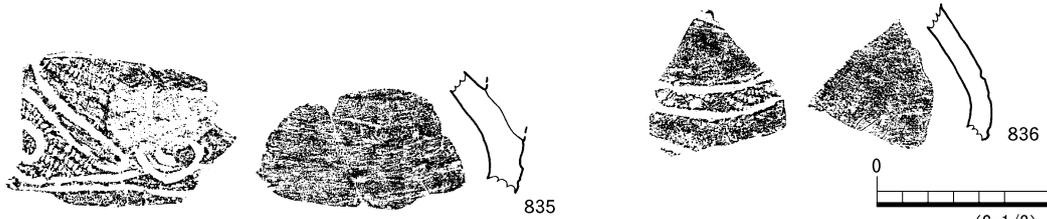
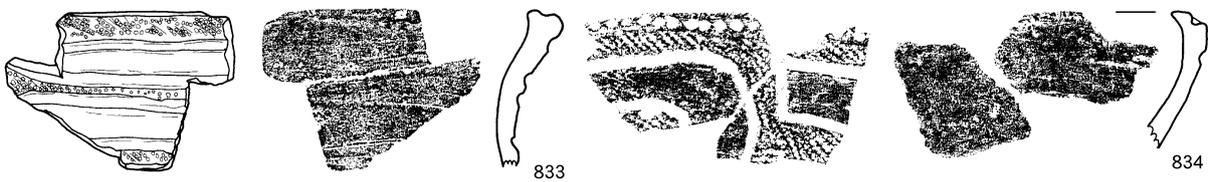
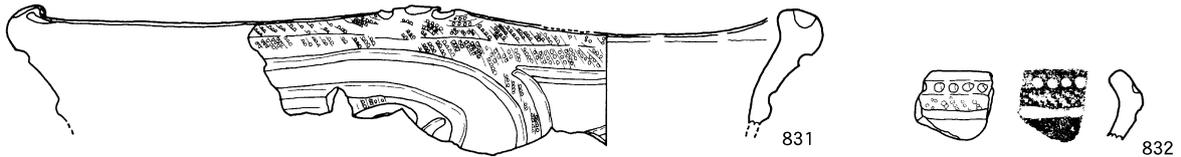
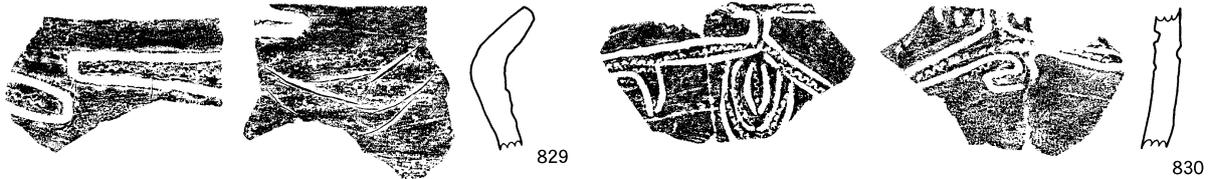
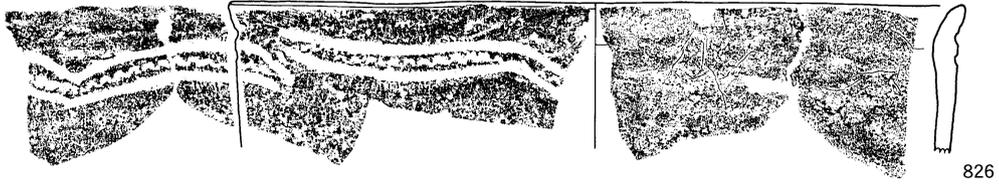
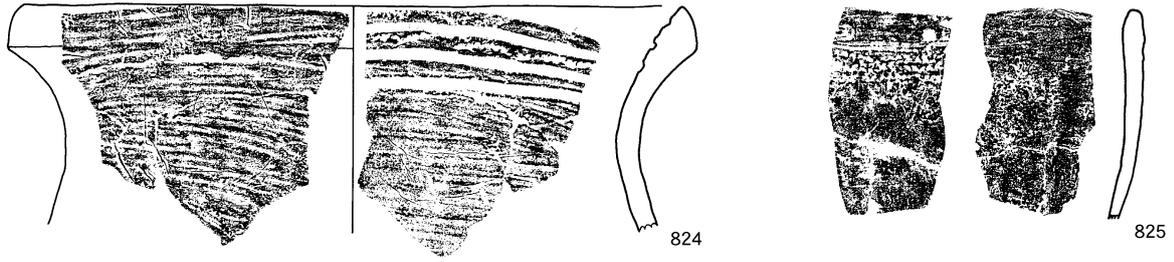


第135図 縄文時代後期土器 (58)

も施されている。想定される口径に比して器壁が薄い資料であるが、大きな浮文部分があるためか、持ち重りのする資料である。849は、橋状把手部分の資料と思われるが、全形を想定できなかつたため、図は暫定的な想定である。資料上端の平面部は、接合面である。



第136図 縄文時代後期土器 (59)



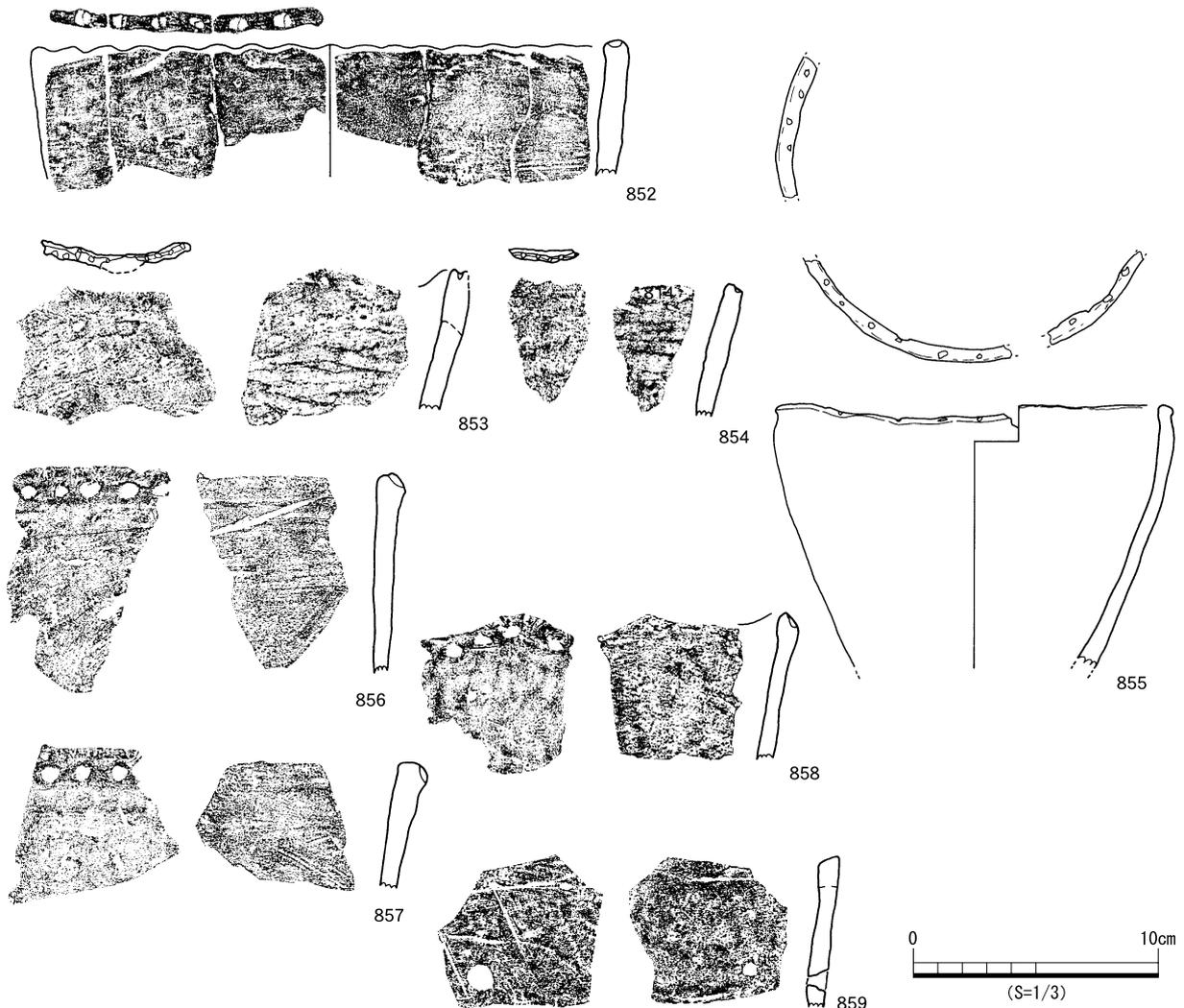
第137図 縄文時代後期土器 (60)



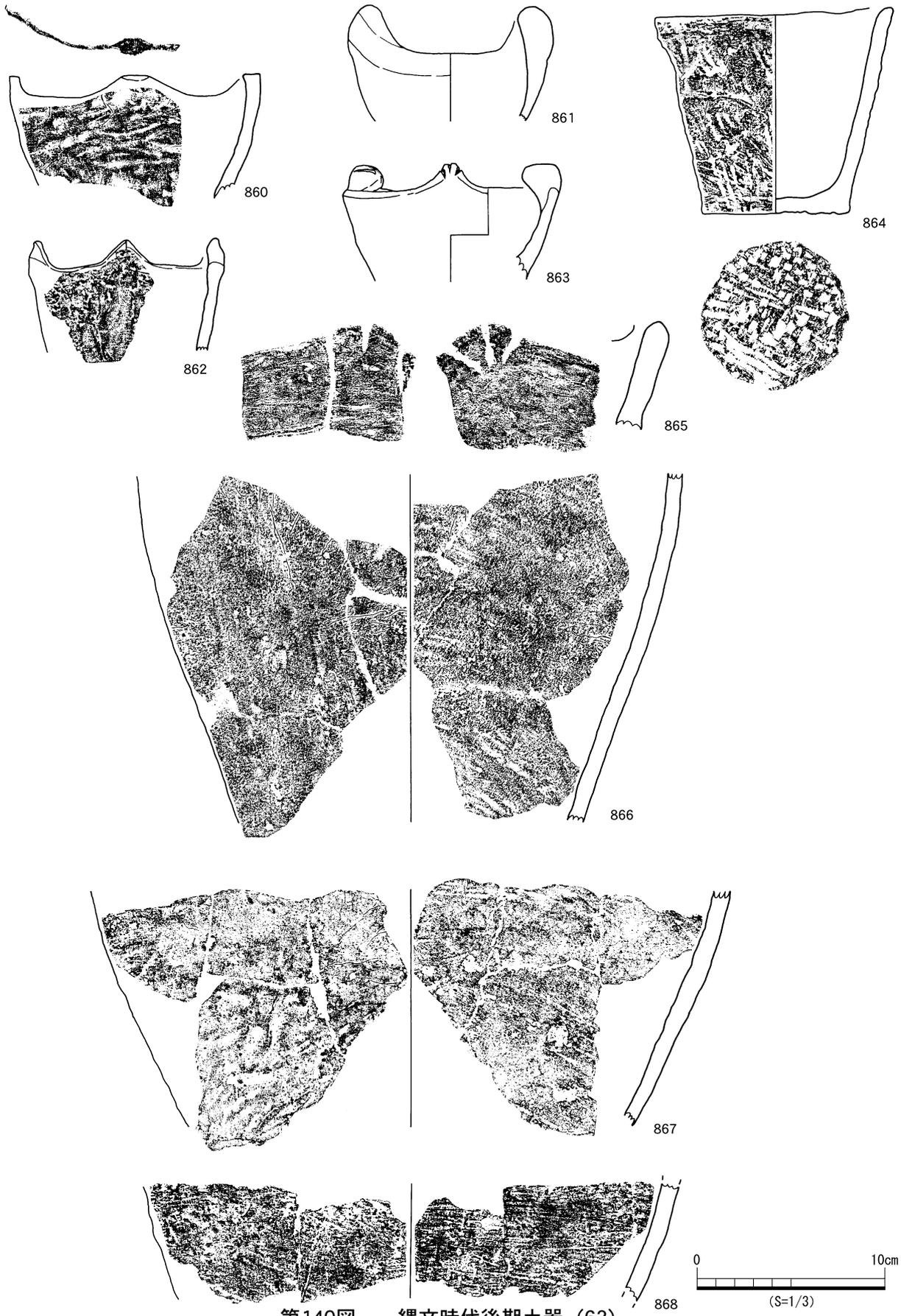
第138図 縄文時代後期土器 (61)

XI類 (第139～144図)

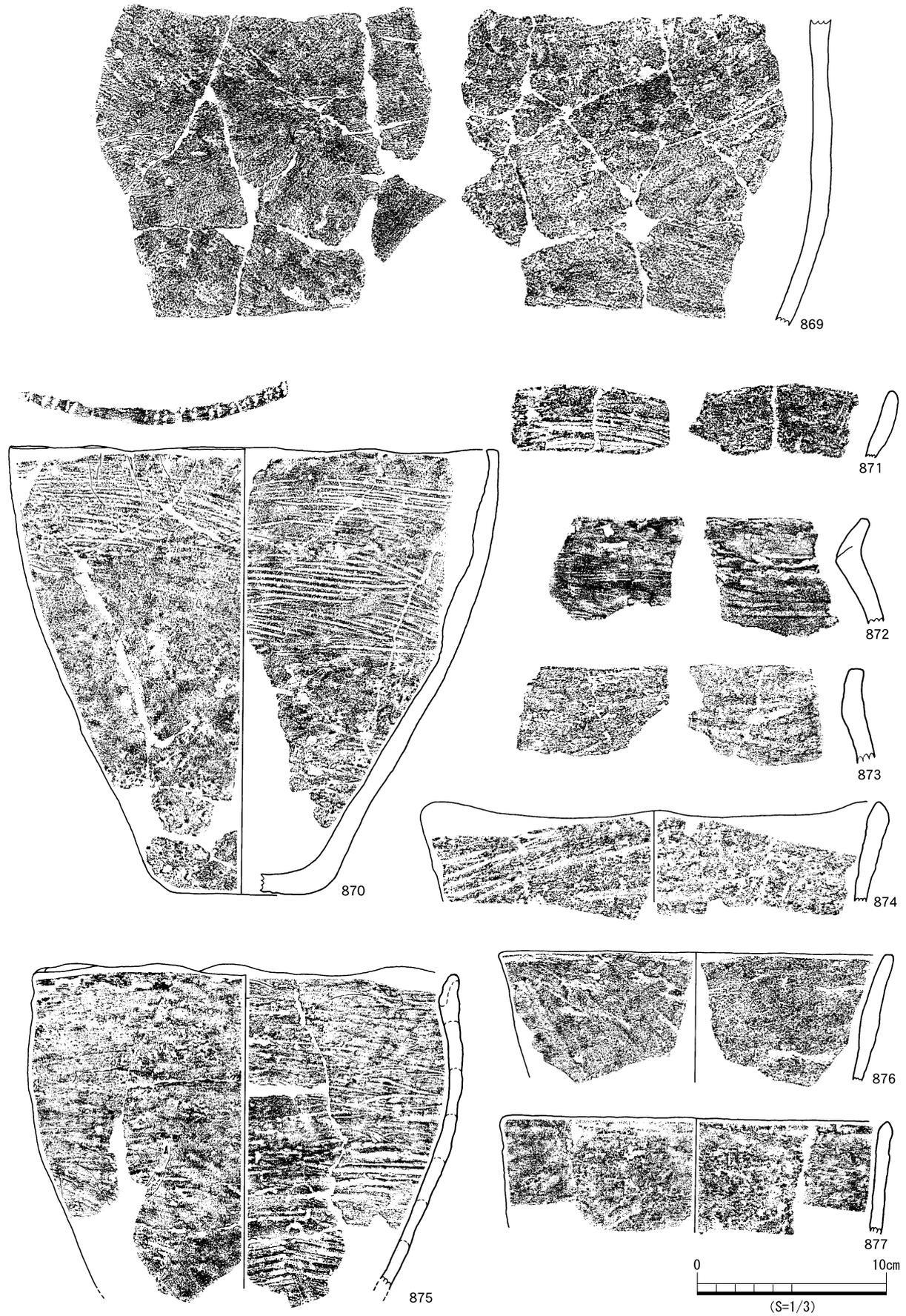
861は、復元口径が約11.0cmで、肥厚した波頂部及び口縁部を除き、器壁の薄い資料である。口縁部は、内側にくの字に屈曲する。波頂部は2か所あると推定したが、口唇部の断面形状が波頂部の左右で若干異なるため、さらに複雑な波頂部が作られていた可能性もある。外面は、粗いナデで整形されているが、屈曲部の成形も併せて行われており特徴的な調整である。外面には、煤も付着している。862は、平口縁に山形の小波頂部がつく資料である。内面が平滑で外面に指頭押圧が観察されることから、確証はないが、型押しなどで成形された可能性がある。復元口径は約10.4cm。863は、やや劣化しているが、成形・整形ともに丁寧な資料である。口唇部は、断面形状を舌状に整形し、刻目を施している。復元口径約12.1cm。882は、口縁部外端を凹ませるという成形が特徴的な資料である。口唇部は断面略方形に仕上げるが、器壁は薄くなっている。884は、胴部からまっすぐ立ち上がる変化のない器形と考えられる。口唇外端を丸くナデで仕上げているため、押し出された胎土で口唇内端に稜が形成されているように見える。復元口径約24.0cm。890は、口縁部内面に緩い稜を形成し、外反する器形で、内面は丁寧なナデ調整が施される。



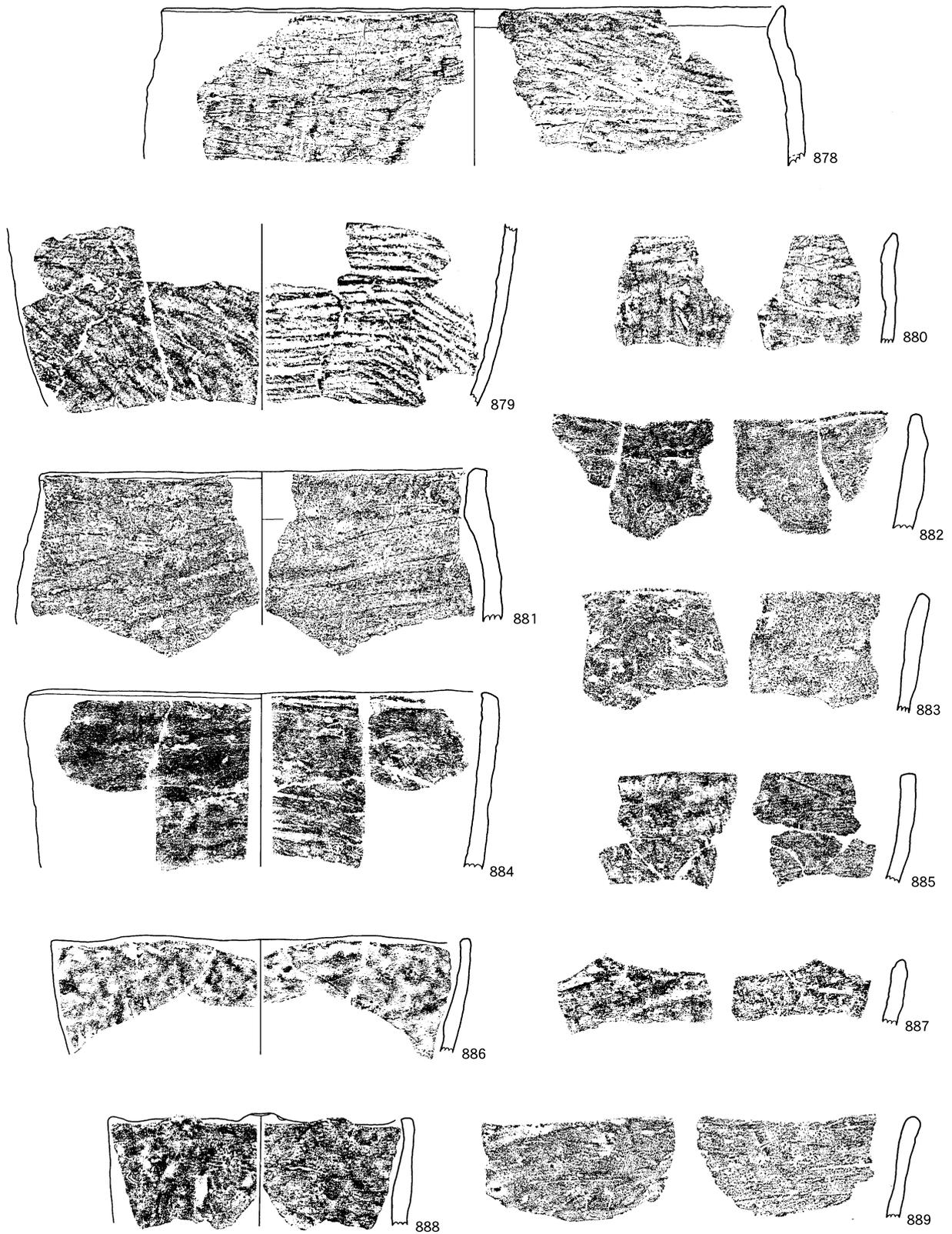
第139図 縄文時代後期土器 (62)



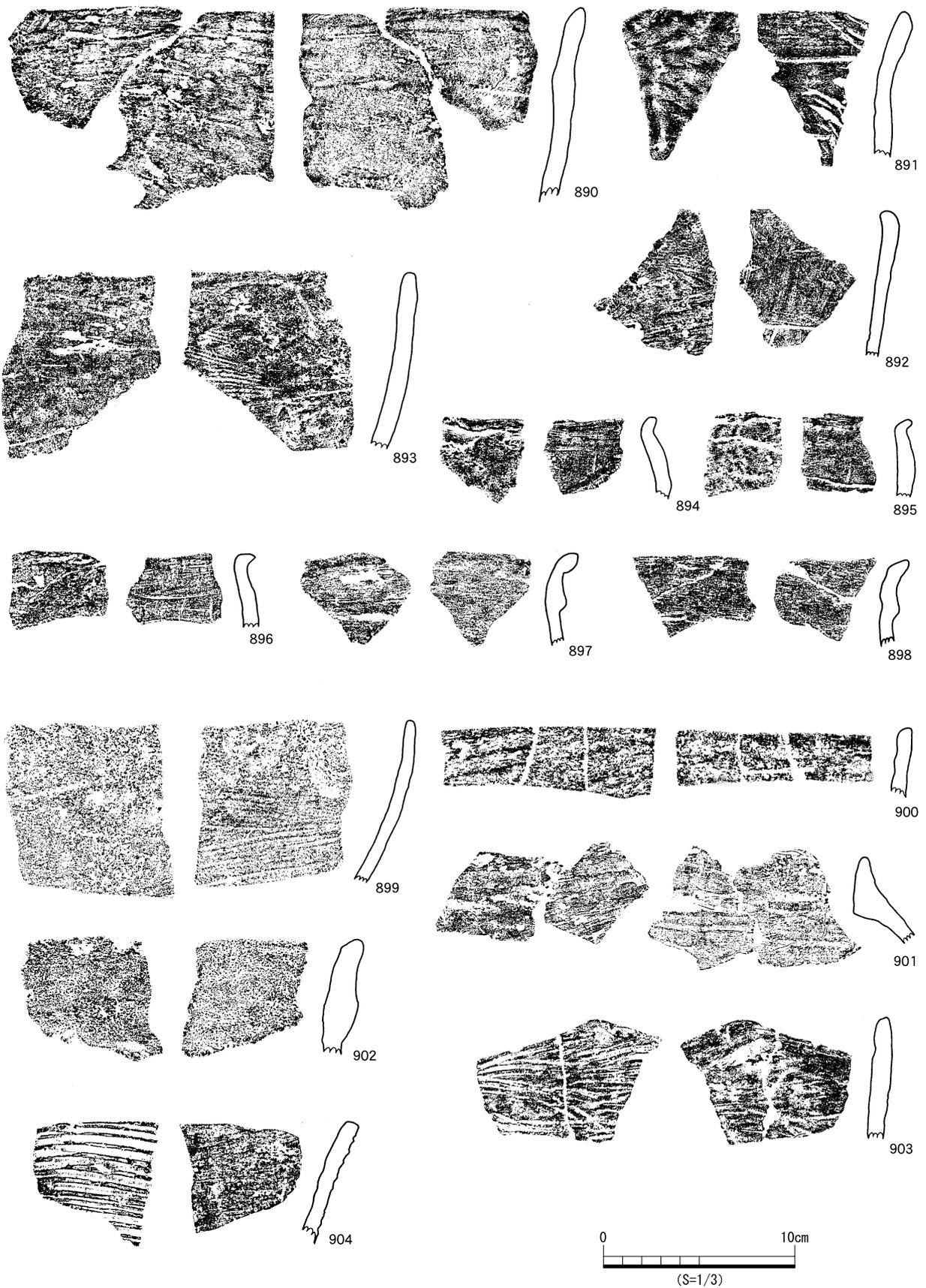
第140図 縄文時代後期土器 (63)



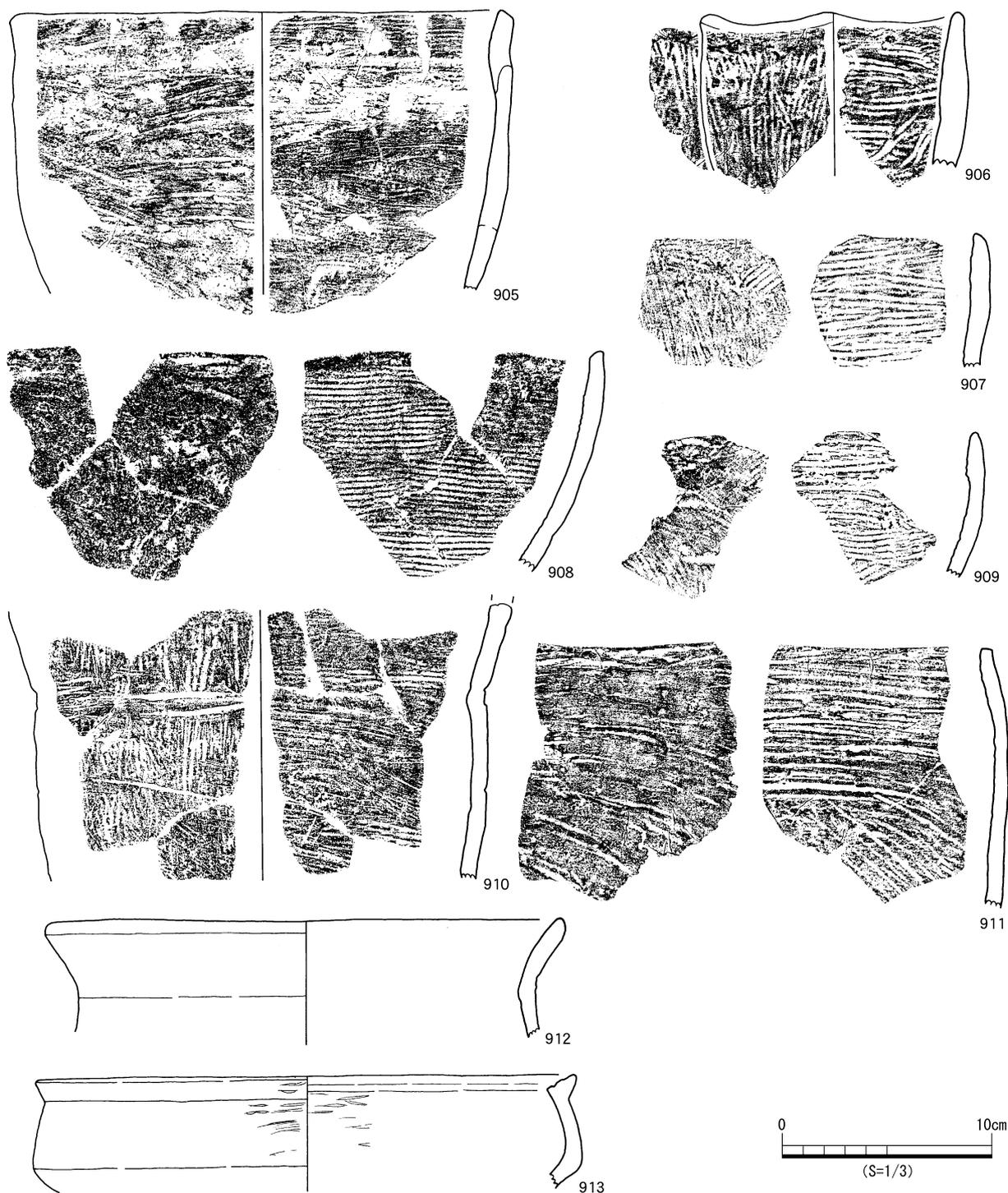
第141図 縄文時代後期土器 (64)



第142図 縄文時代後期土器 (65)



第143図 縄文時代後期土器 (66)



第144図 縄文時代後期土器 (67)

X II 類 (第145 ~ 149図)

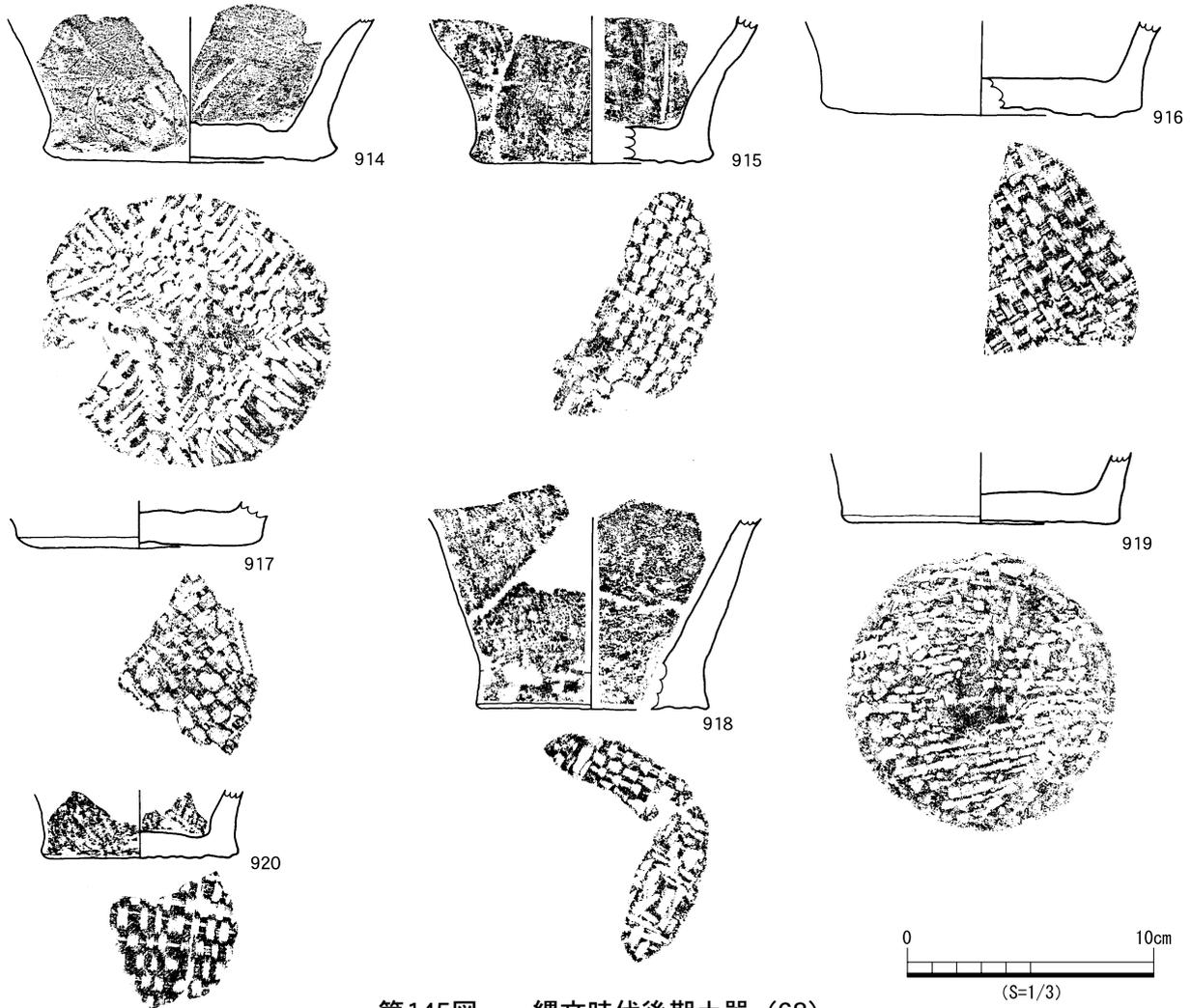
縄文時代後期に属するものと判断して、914から965まで52点を図化した。底部接地面に残された組織痕の有無や形状によって、第145図から第149図まで細分している。

第145図は、網代状の圧痕が残っている底部資料をまとめた。底部外端が張り出しているものと張り出していないものがあるが、胴部形状の違いに起因する可能性もあるが、整形時

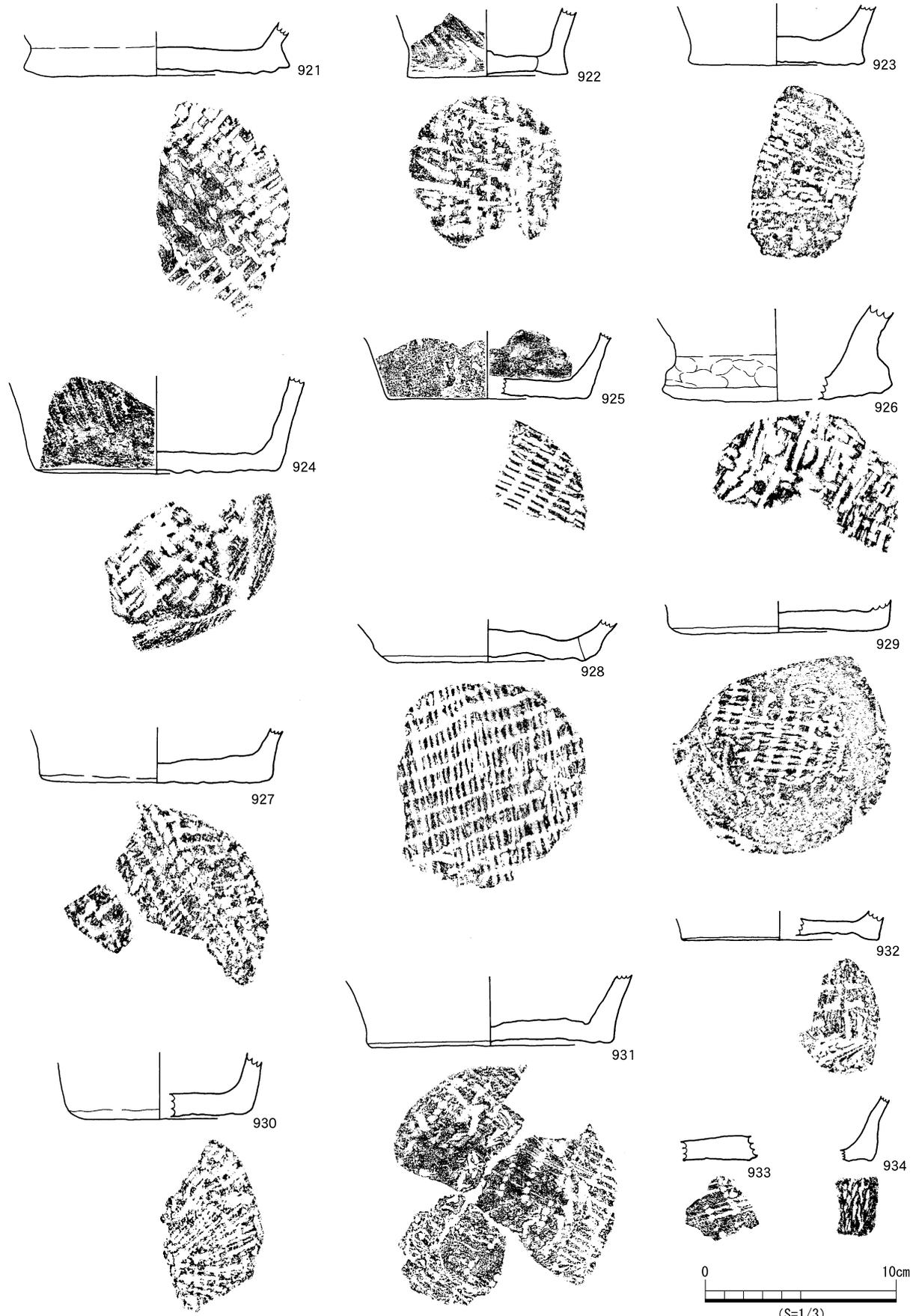
の工程の違いである可能性もある。

第146図は、すだれ状の圧痕などが残っている資料をまとめた。929は、接地部分の摩耗が顕著である。

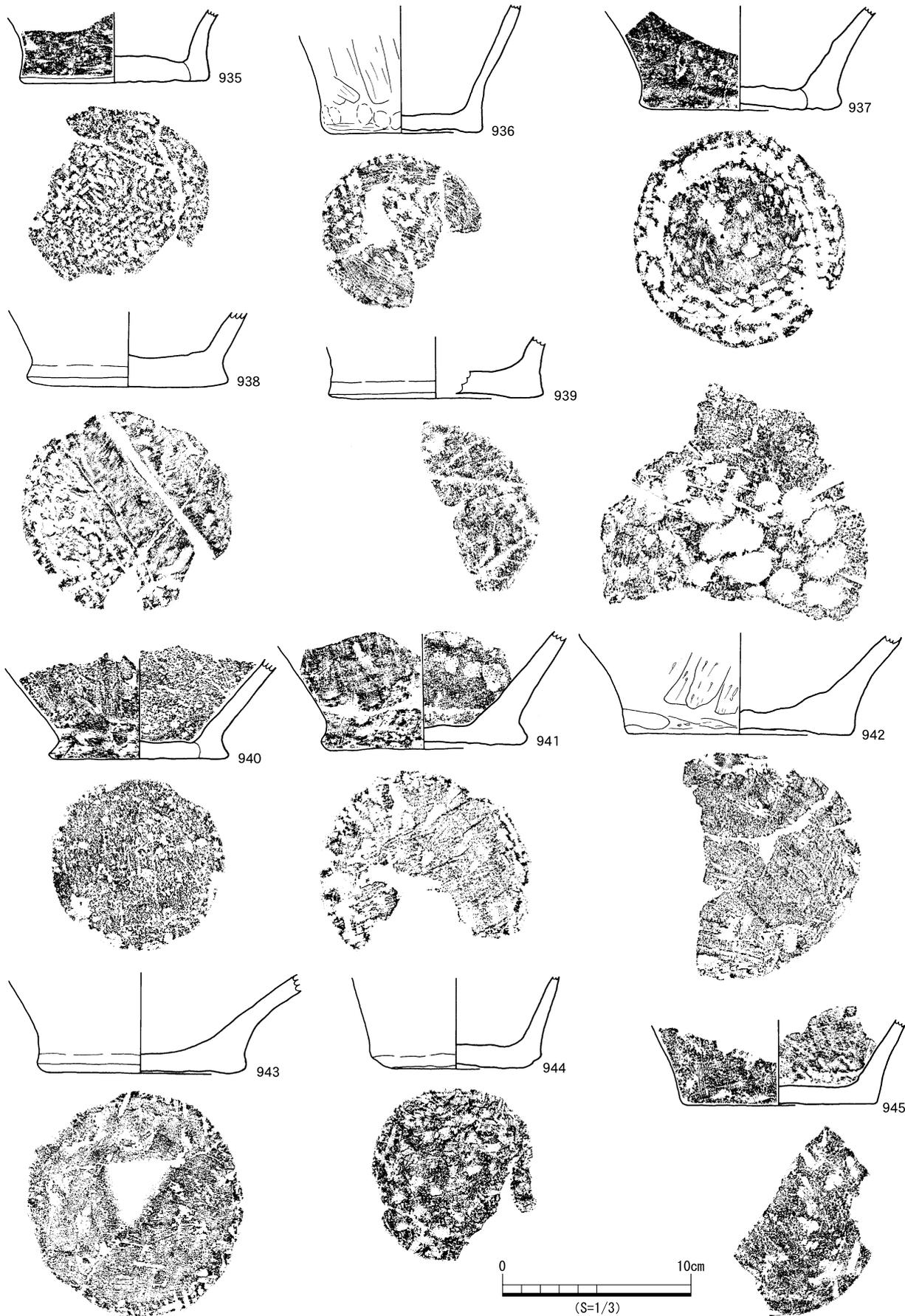
第147・148図は、木葉痕のある資料と現状で組織痕が観察できない資料などをまとめた。936は、焼成前に底部にケズリ調整を施しているため、圧痕が観察できない部分がある。937は、上げ底状に整形し、接地部分に工具で組織痕のような凹凸をつけている。938は、シダ系植物と落葉広葉樹系植物の葉の圧痕が観察できる。939は、落葉広葉樹系植物の葉の圧痕が観察できる。942は、底部内面の指頭押圧が観察できる。組織痕が観察できない資料は、944のように圧着が弱く観察できないものを除き、ケズリ調整がなされていて観察できないものである。956は、形状が弥生～古墳の壺に似るが、胎土や焼成が明らかに異なり、縄文後期の土器に類似するため、ここに掲載している。958の脚には、接地面外端に粗い連点文が施文されている。963からは、脚を有する資料をまとめた。接地面に対する整形を行っていないのが基本的な特徴だが、962や963は、整形が行われている。965は、4脚となるのか、透しの入った高台となるのか、詳細の不明な資料である。脚接合部分より内面はナデ、外面は粗いナデで調整されていて、残存部には文様は観察されない。



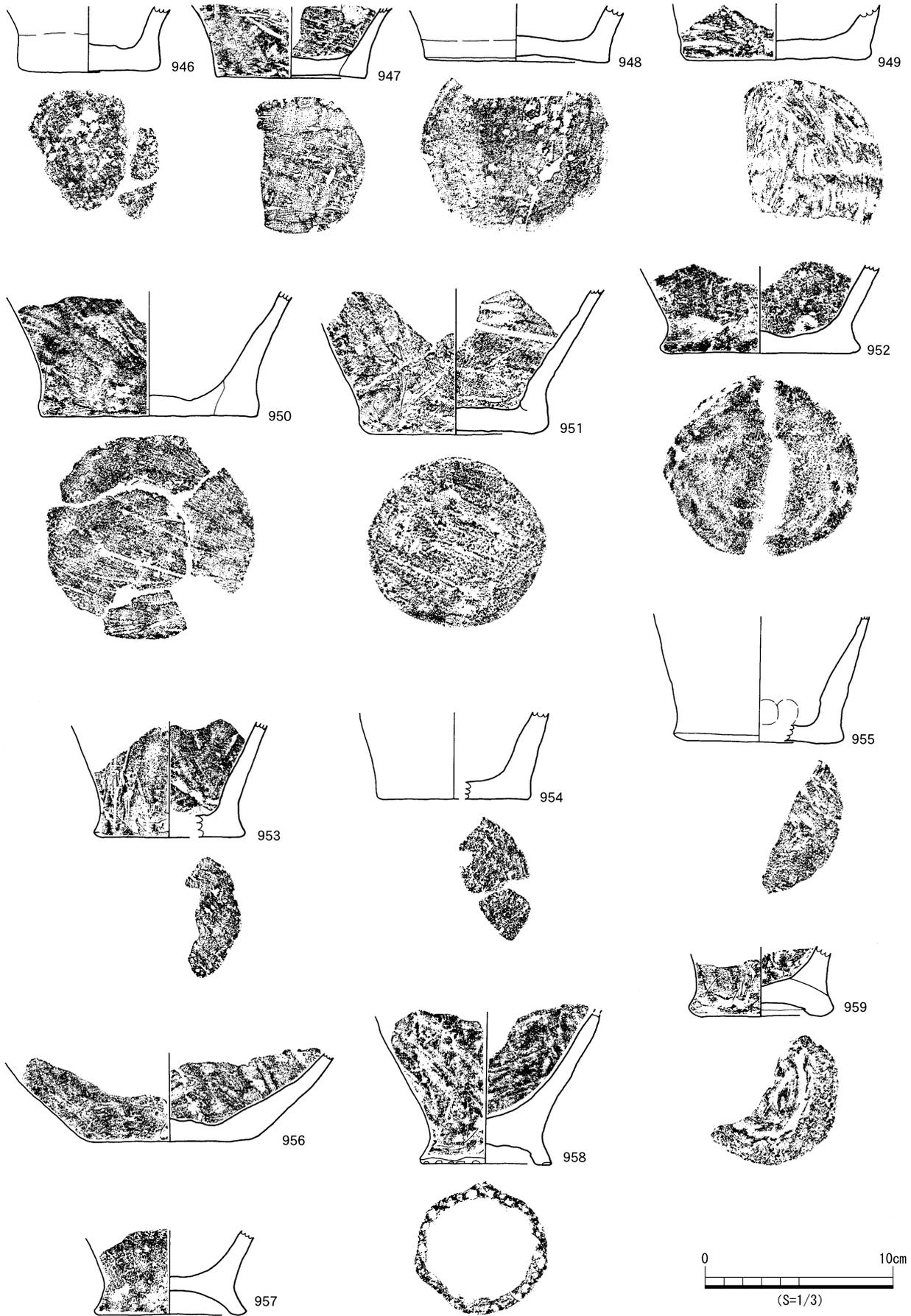
第145図 縄文時代後期土器 (68)



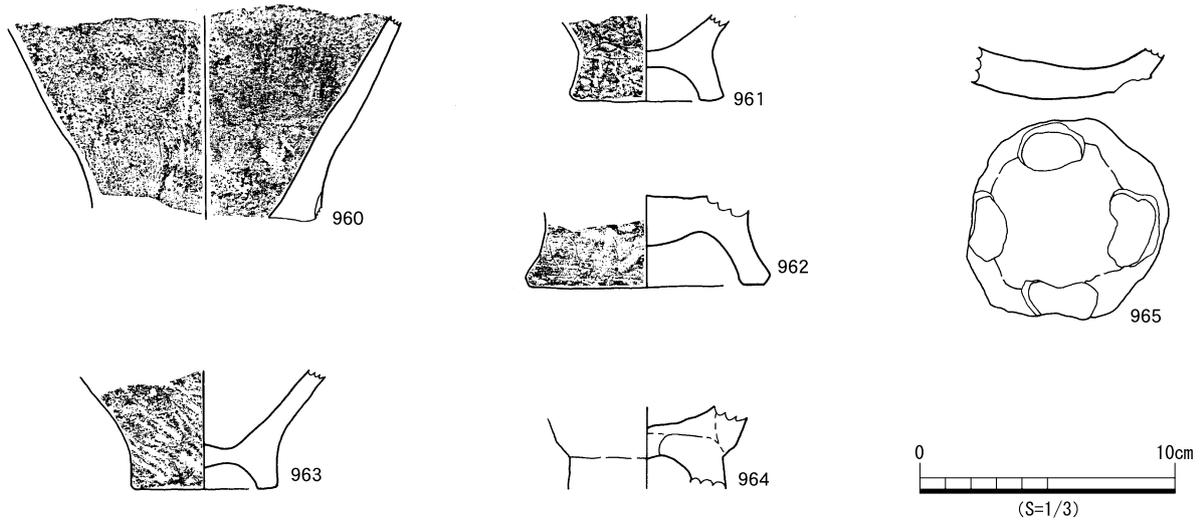
第146図 縄文時代後期土器 (69)



第147図 縄文時代後期土器 (70)



第148図 縄文時代後期土器 (71)

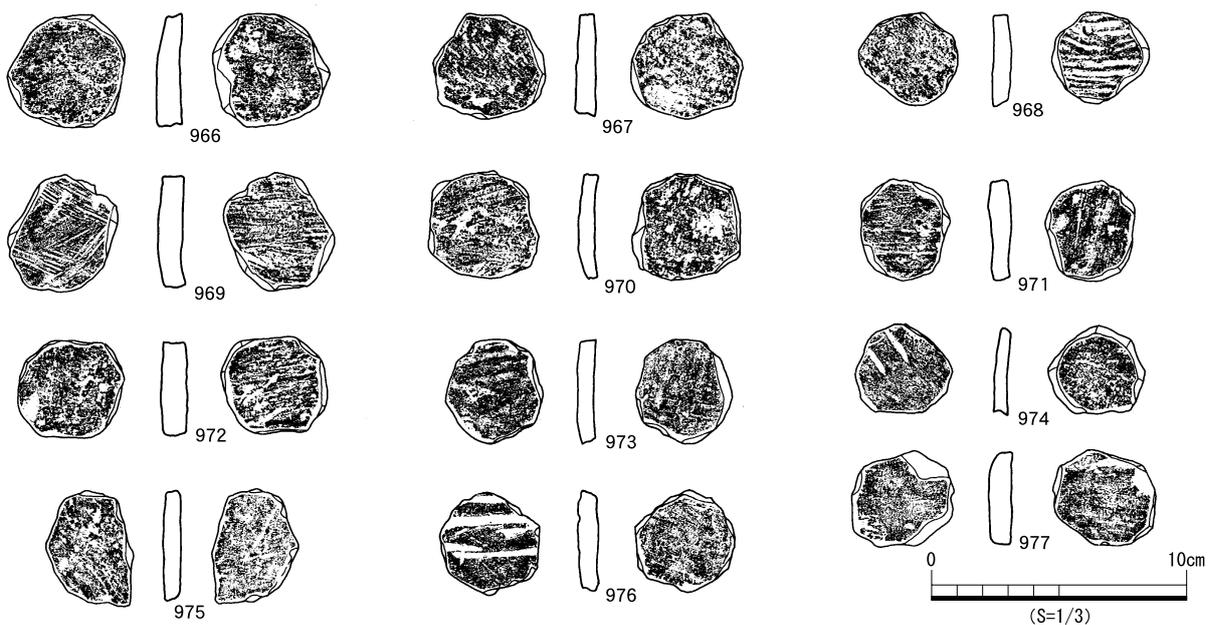


第149図 縄文時代後期土器 (72)

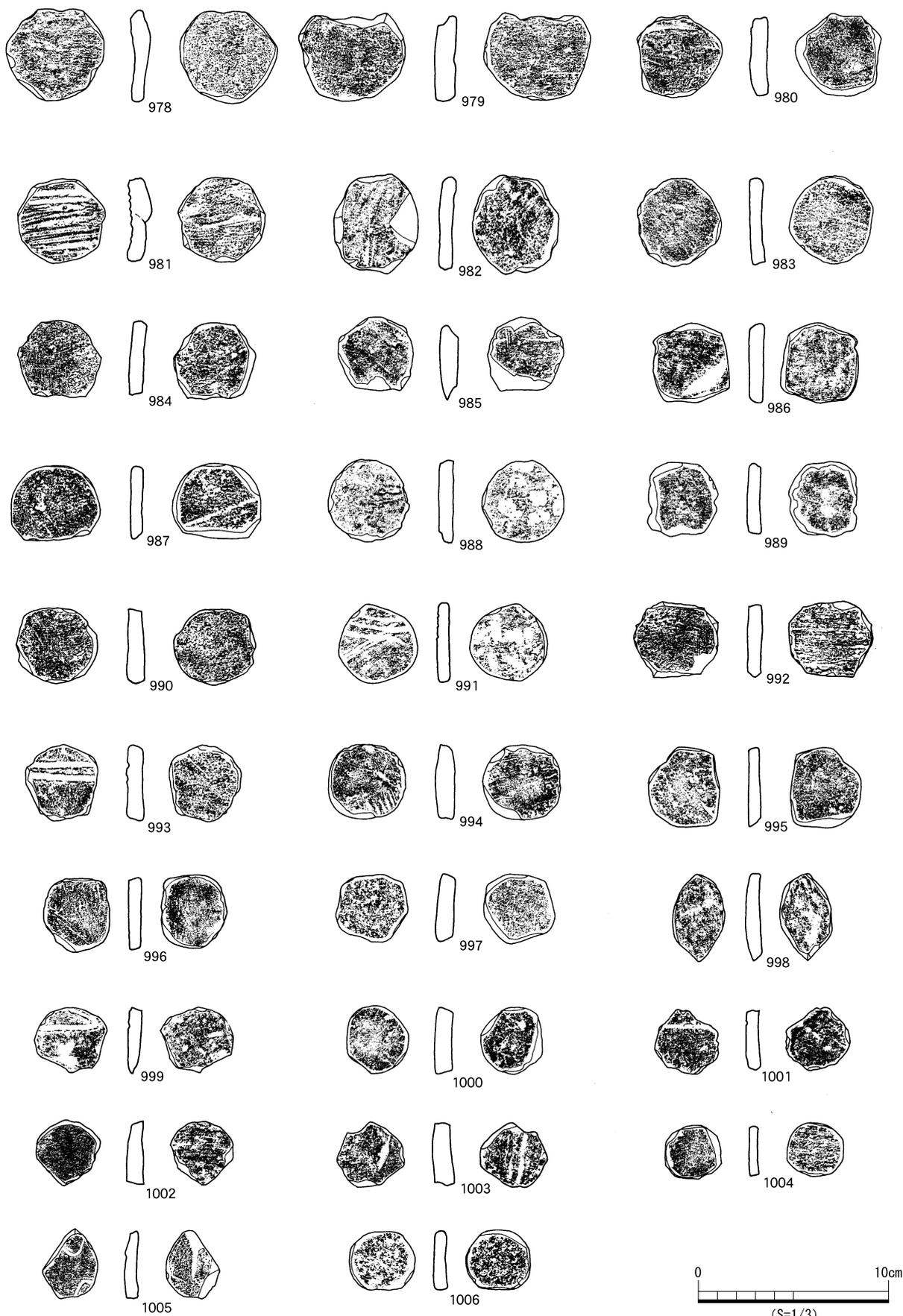
XⅢ類 (第150～156図)

966から1164まで199点を図化した。肉眼観察のみではあるが、978のような周縁に施される磨り加工の範囲が広範なものから、1155のような未製品もしくは磨り加工を行わなかったと想像される資料まで、図版をわけて掲載している。そのため、平面形状では、必ずしも円形のもの図版の先頭に掲載されていない。特徴的なものでは、998や1005がある。また、第155図に多く掲載している、半円形の加工品も特徴である。これらは、素材が半円形状の破片であったと思われ、素材の形状を生かした磨り加工がなされたと思われる。

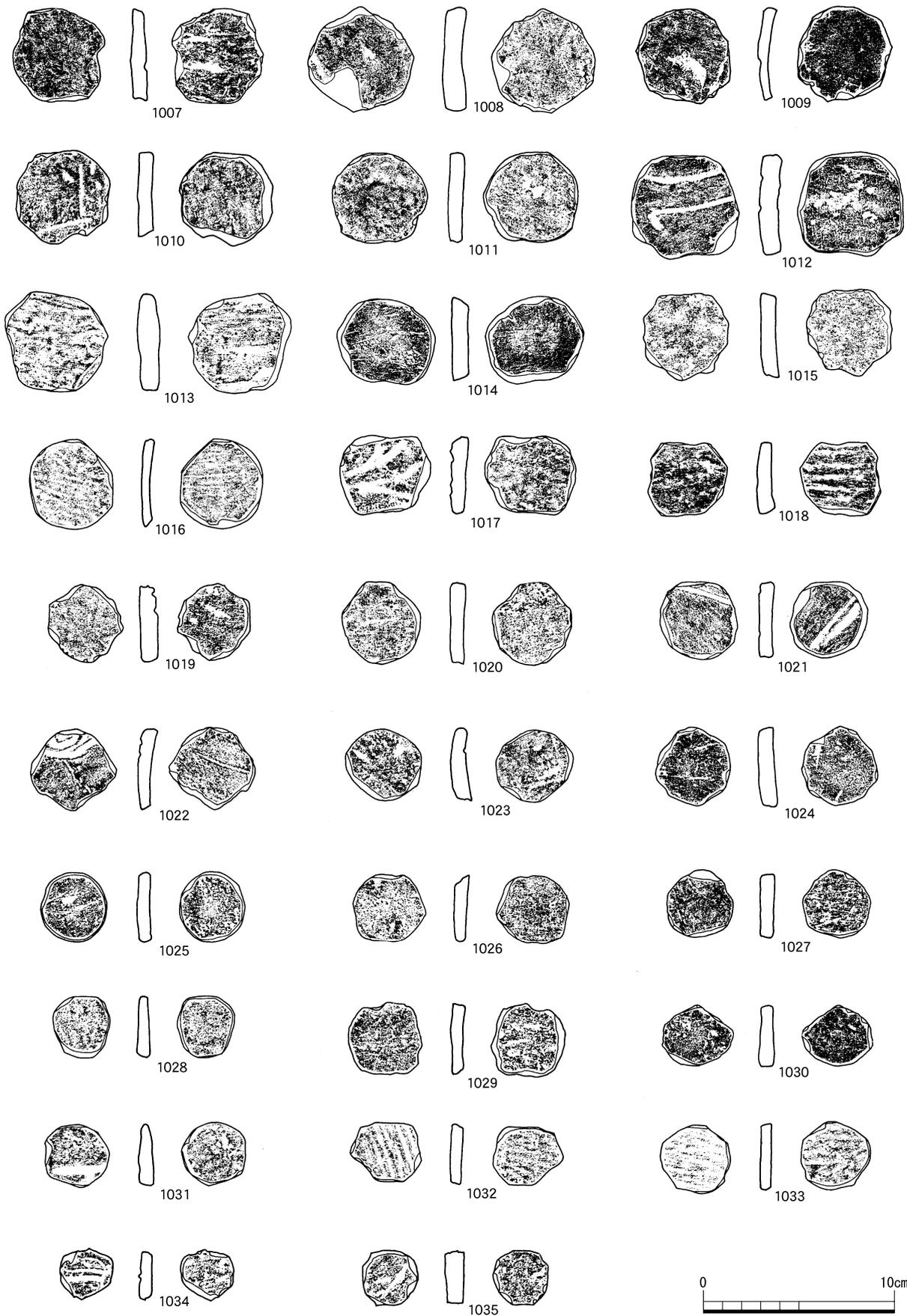
用いられている土器片は、文様が観察できる資料で見ると、指宿式土器や凹線文土器の可能性はあるものがあったが、明確な傾向は見いだせない。胴部片が多いが、底部片も認められる。



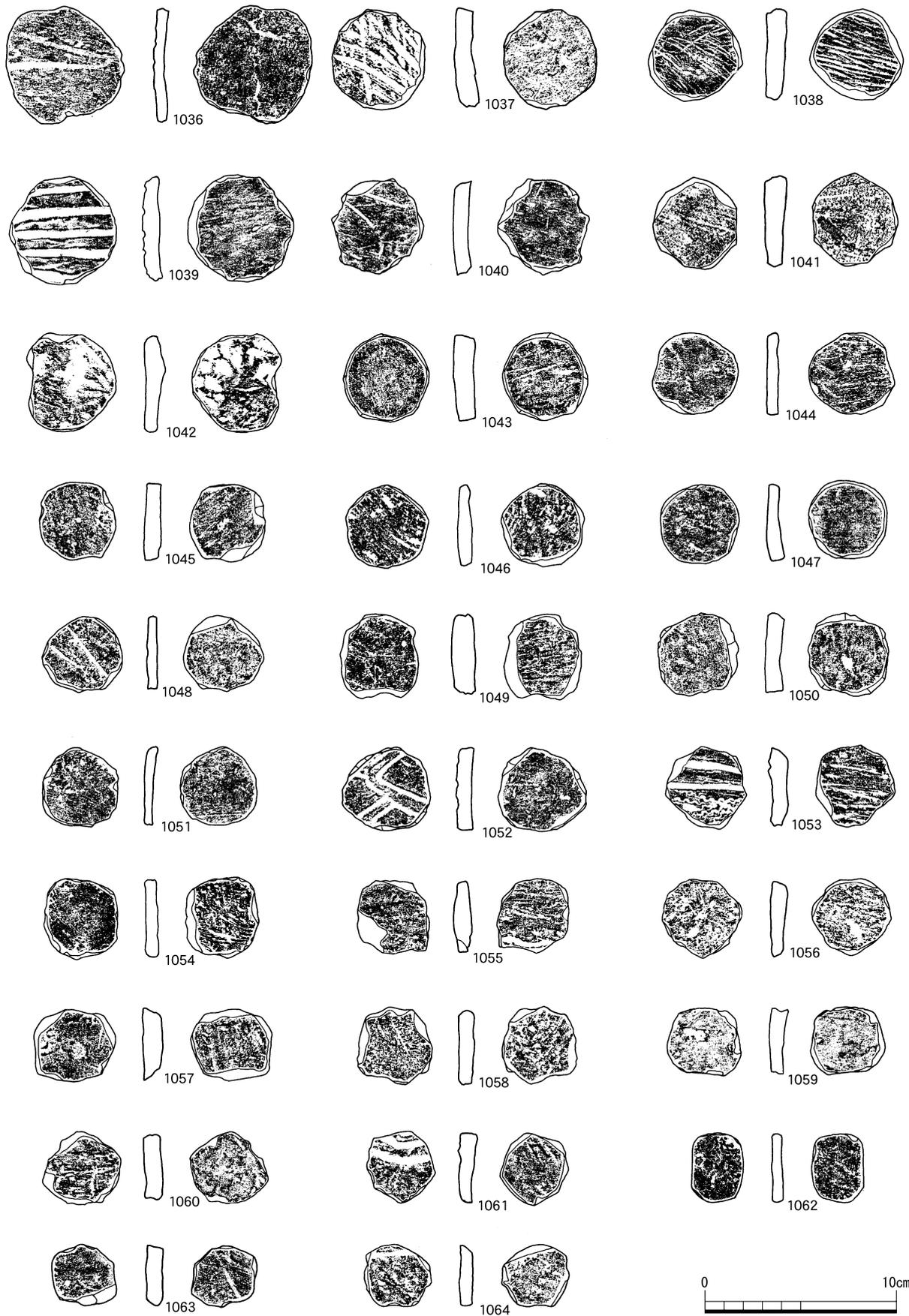
第150図 縄文時代後期土器 (73)



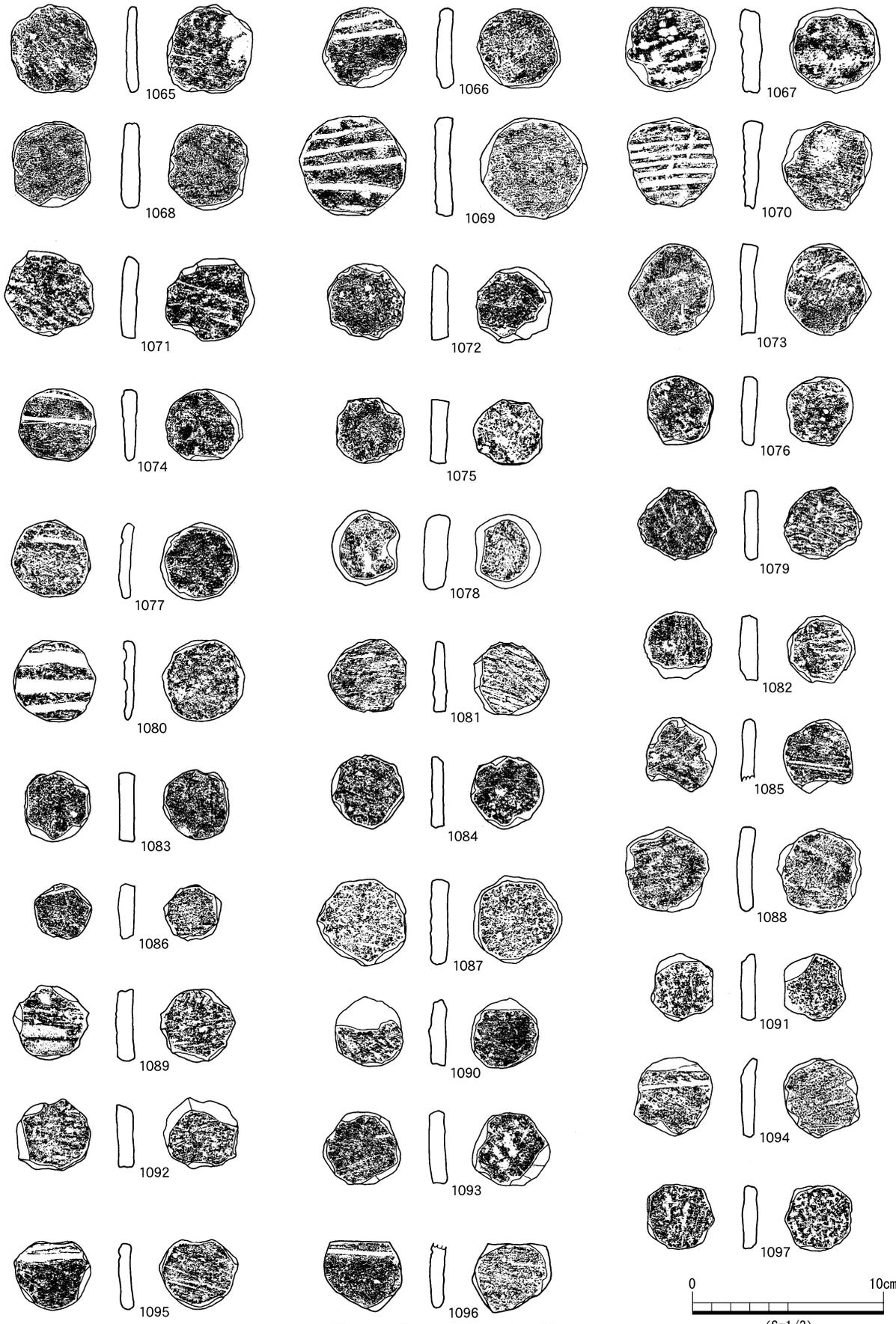
第151図 縄文時代後期土器 (74)



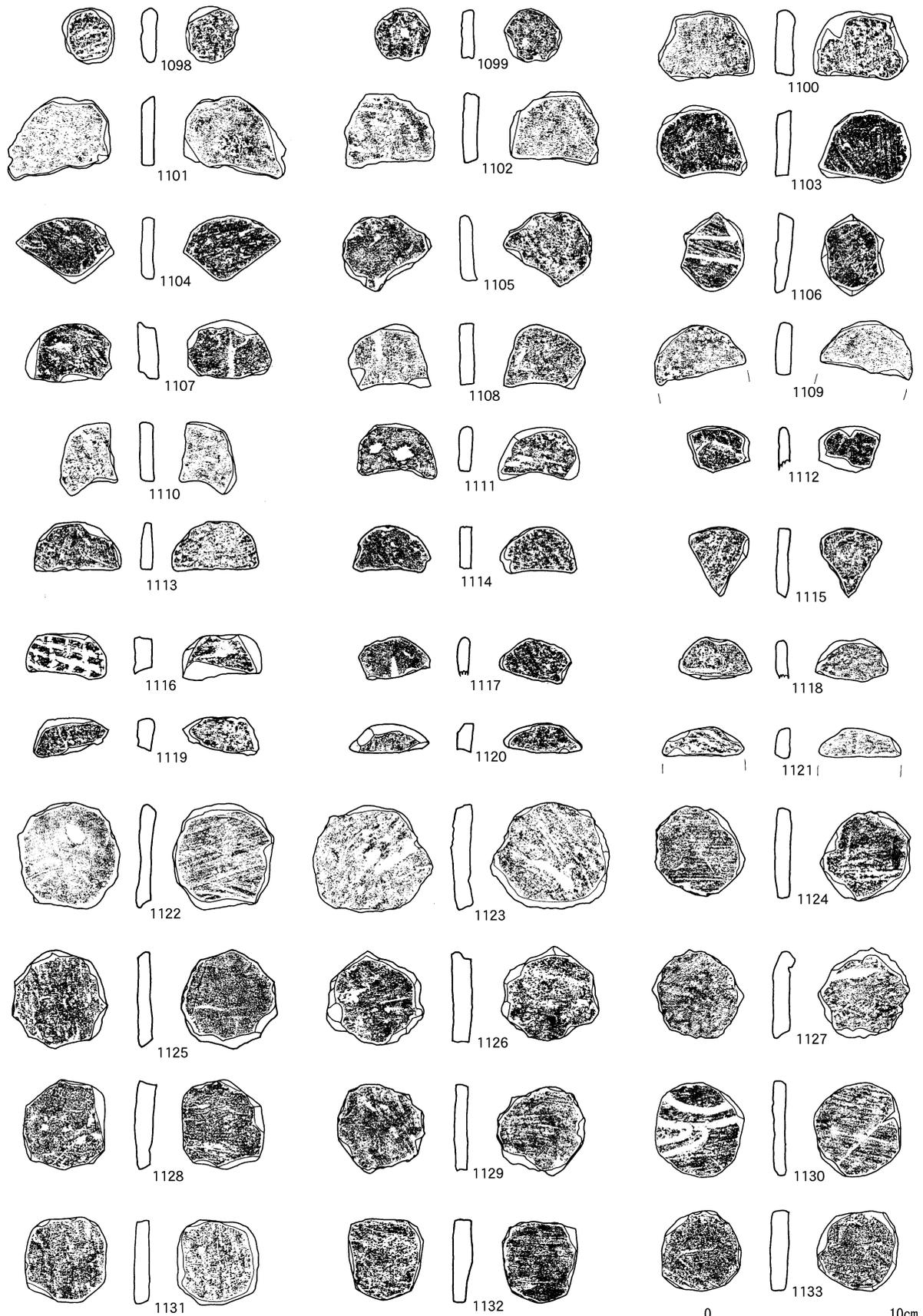
第152図 縄文時代後期土器 (75)



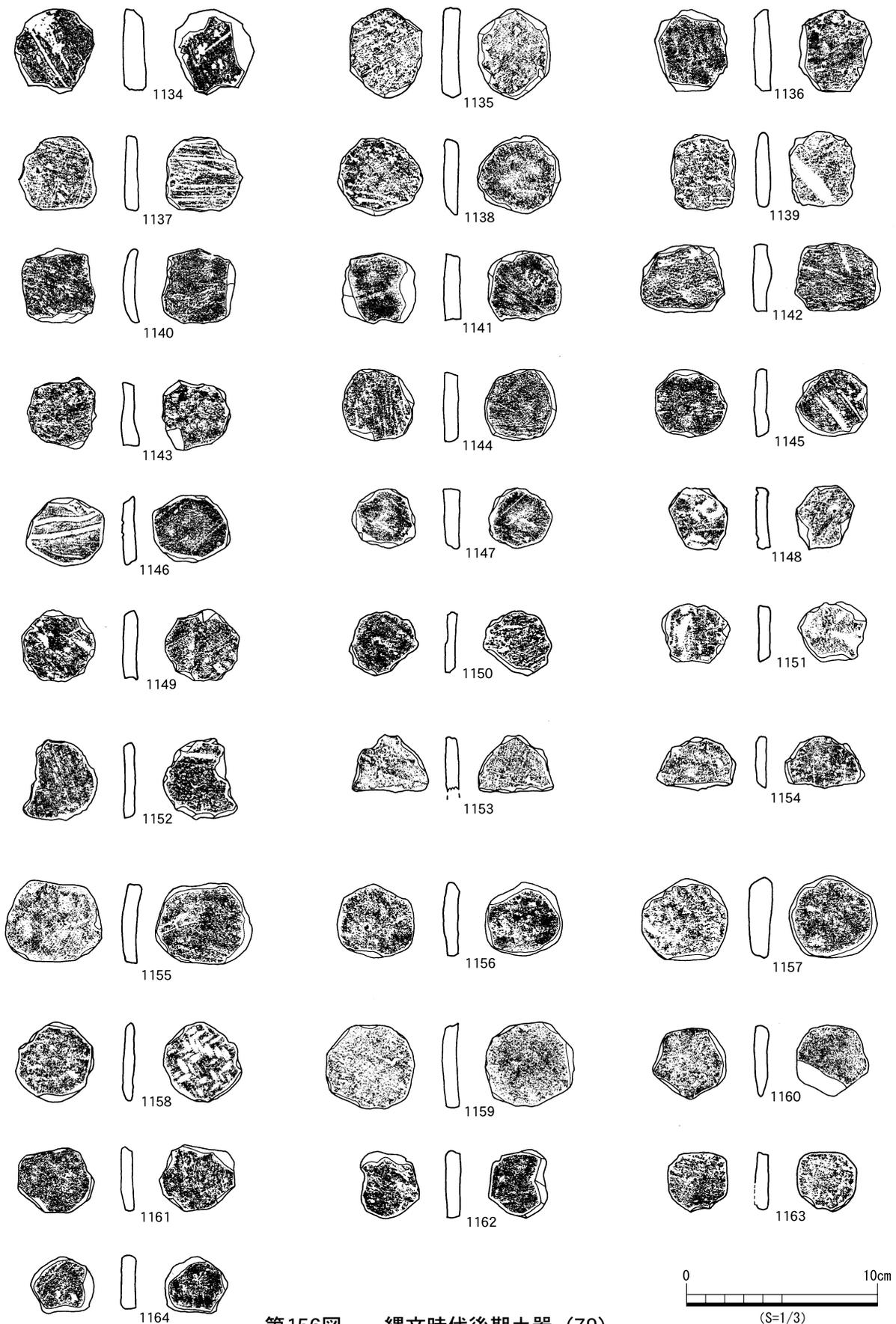
第153図 縄文時代後期土器 (76)



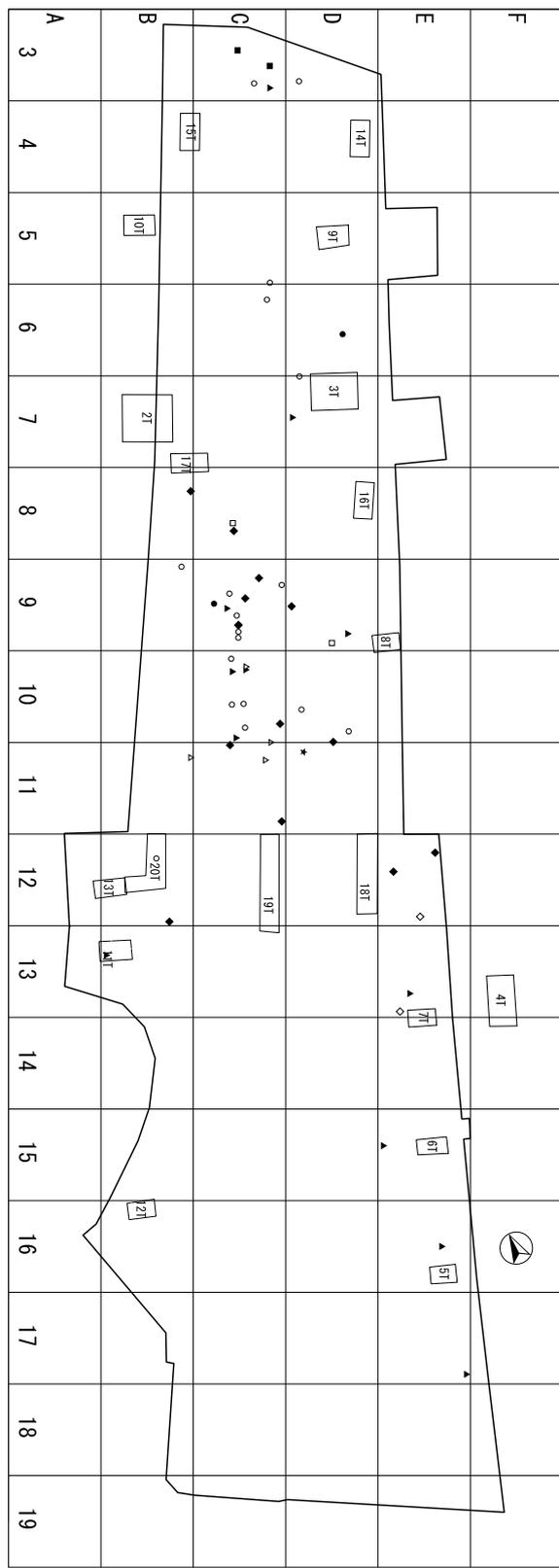
第154図 縄文時代後期土器 (77)



第155図 縄文時代後期土器 (78)

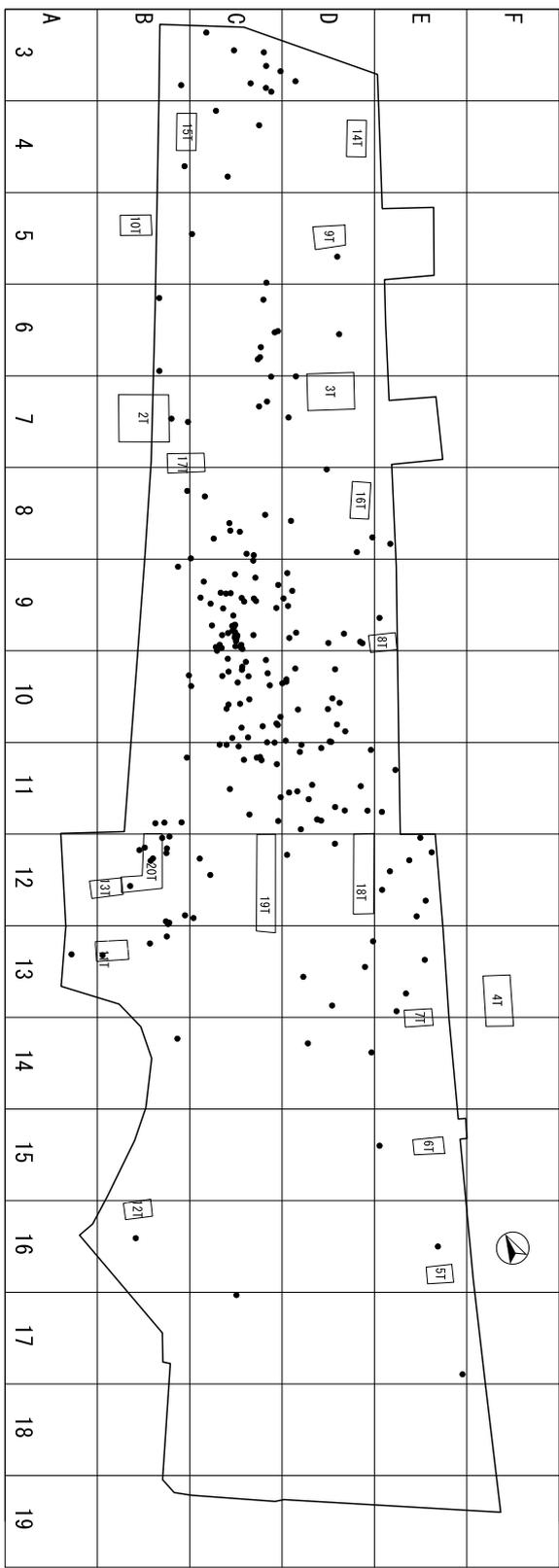


第156図 縄文時代後期土器 (79)

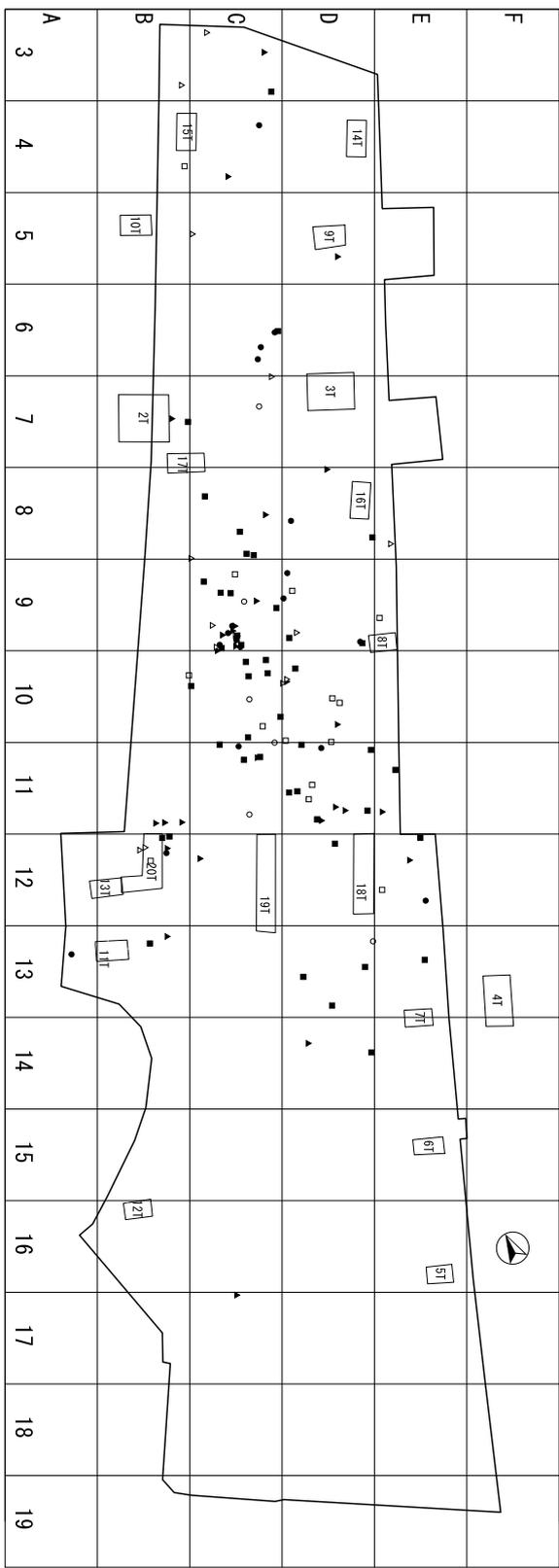
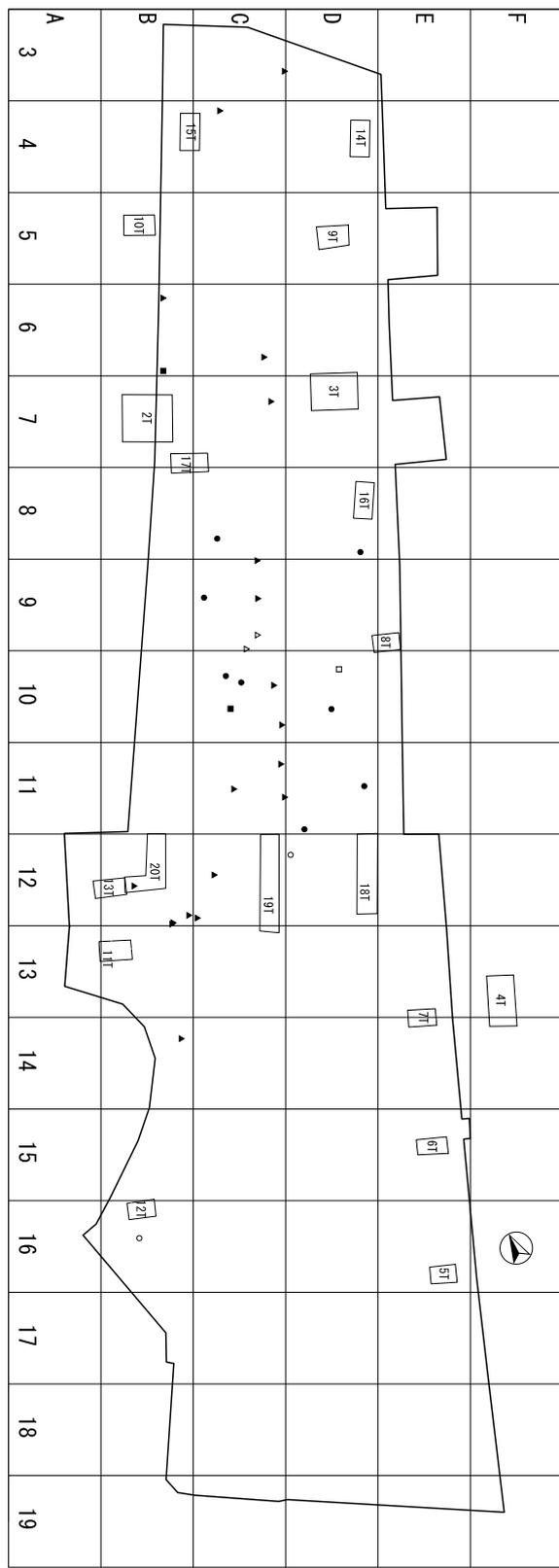


- 石槌
- ▲ 石斧
- * 磨製石槌
- ◆ 磨製石斧
- のみ製石斧
- ◇ 打製石斧
- 石匙
- △ 石匙
- 刺器

第157図 縄文時代後期の石器分布図（1）



掲載石器総ドット



第158図 縄文時代後期の石器分布図（2）

イ 石器

石槍（第159図 1165・1166）

1165は頁岩の縦長剥片素材で、先端部のみを残し、下半分を欠失している。周縁をラフな剥離で調整し先端を作り出し、器面調整は全面に及んでいない。1166は黒曜石の横長剥片を素材とするもので1165と同様先端部のみを残し、下半分を欠失している。2点ともに、縄文時代早期に類例が多くあり、この時期の類例はほとんどないが、Ⅱ層中からの出土であり、この項に掲載した。後期の遺構構築の際に早期の包含層からⅡ層中に紛れ込んだ蓋然性が高い。

石鏃（第159図 1167～1180）

浅い凹基から深い凹基、剥片鏃、長身鏃、鋸歯縁鏃まで形態的にも多様で、石材も黒曜石、タンパク石、頁岩、チャート等、多様性が高く、この時期の石鏃の有り様を端的に示す資料である。ただ、市来式系統の土器が少数ながら検出されているにもかかわらず、この時期を特徴づける石鏃として指摘されることの多い大形粗製のいわゆる石鋸が1点も見あたらないのが特徴である。

石斧（第160・161図 1181～1198）

1181～1183は完形を保って出土しており、1184～1193は刃部、頭部を欠損していたり、刃部の破片である。1196は後述するが、磨製石斧の未製品である。

1181・1182は撥型の小形石斧であり、剥離による器面調整の後丁寧な叩打を施し、ほぼ全面を研磨して仕上げている。そのため、素材形状は分からない。1181は刃部に叩打が残り、頭部には研磨、叩打痕を切る剥離が残り、叩打のためのパンチとして転用されたものであろう。1182の裏面は浅くくぼんでおり、刃部が作る面に対して器体全体としては湾曲するような形態であり、片刃石斧と同様の着柄が施されたものではないか。

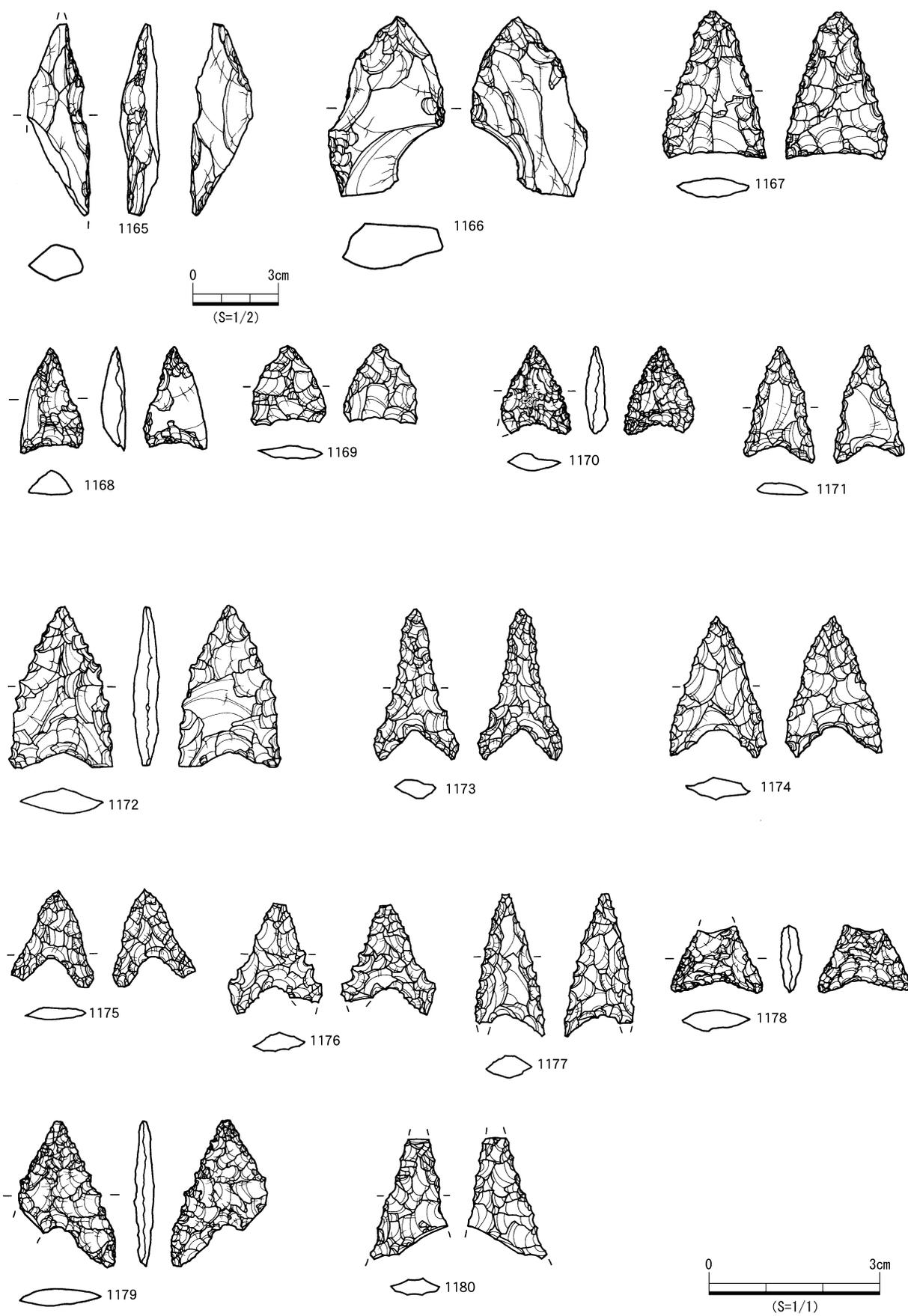
1183は頁岩の横長剥片を素材とするもので、直接加撃による器面整形と周縁調整が施された後、刃部のみを研磨して仕上げている。この特徴は早期の石斧の特徴であり、石槍と同様、早期の包含層から後期の遺構構築の際紛れ込んだ蓋然性が高い。

1184～1188は、分厚い器体の撥型を呈する大型石斧の頭部破片である。これに対して同じような石斧であろう刃部の破片は1189の1点のみである。頭部破片と刃部破片の数量比は5対1であり、頭部破片が多いということは、遺跡外での伐採作業で損傷した石斧を柄とともに遺跡内に持ち帰ったことを意味するのではないか。1189は柄の中でヒビが入っただけだったのか、再生する意図で持ち帰ったものであろう。

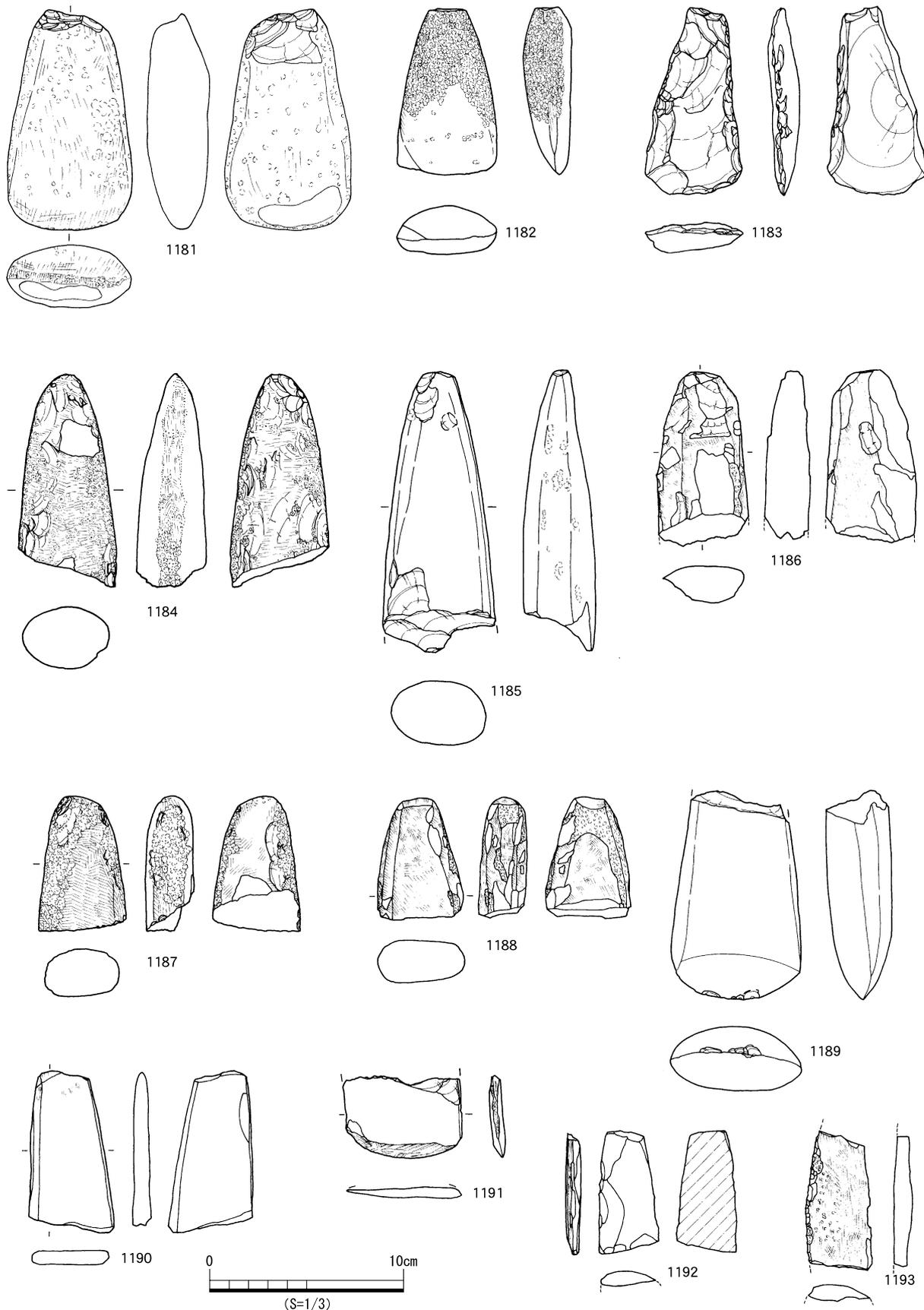
1190～1193は薄い器体の撥型もしくは短冊型の片刃石斧の破片であり、いずれも器体が縦にさけるように折損している。また石材も共通性があり、粘板岩・千枚岩である。

1194・1195はいわゆる鑿型石斧である。1194は側面が直線になり長方形を呈するものであり、1195はふくらんだ体部を持ち、刃部を細く仕上げるタイプである。1194は、表面がかまぼこ型にふくらみ、裏面は平坦であるため、刃部の平面形状は丸鑿型になる。一方、1195は表裏ともほぼ平坦であり、刃部の平面形状は平鑿型になっており、2種類の鑿が使われていたことが分かる。

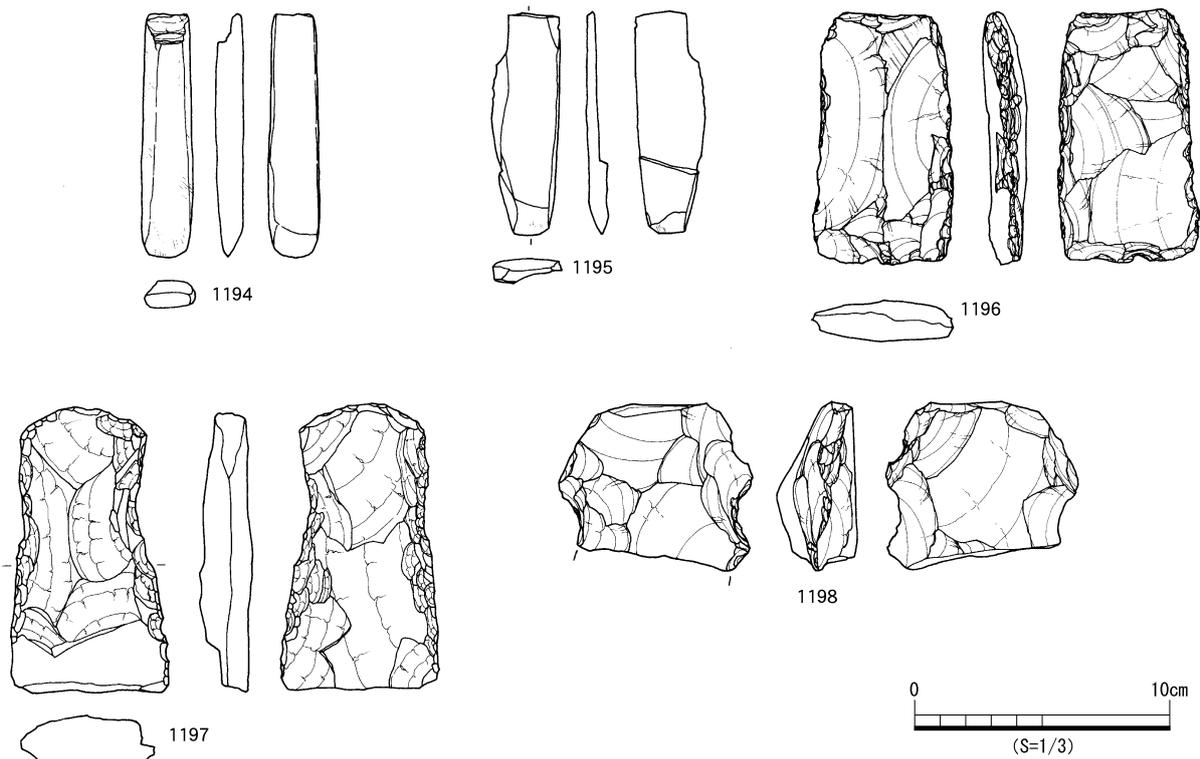
1196は、平坦剥離によって器面調整をした後、側縁を細かく調整し、刃部に細かな調整剥離を施して片刃に作ってある。このような器体の仕上げ方は1190～1193のような片刃石斧と同様であり、研磨をする前に放棄されたものと思われる。剥離の斬り合いを観察すると、表面左の大きな



第159図 縄文時代後期の石器（1）石槍・石鏃



第160図 縄文時代後期の石器（2）磨製石斧 1



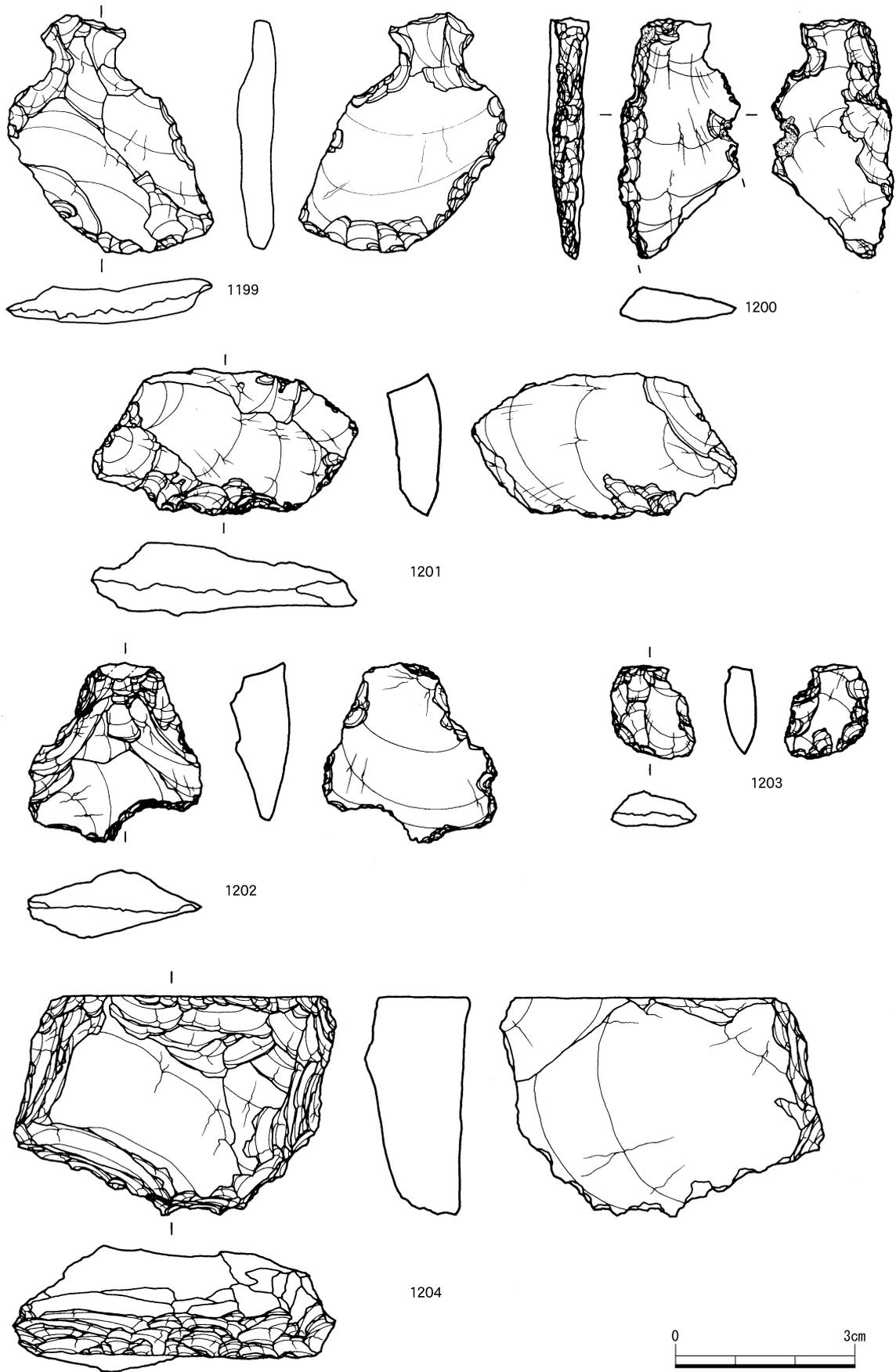
第161図 縄文時代後期の石器（3）磨製石斧2・打製石斧

剥離が最後であり、このため器体全体が湾曲し、刃部近くにはふくらみが残ったままとなっている。このため、研磨して表裏両面とも平坦になる片刃石斧に仕上げるためには、研磨の労力が多大になることと、求める大きさよりもかなり小さくなるから、このまま放棄されたものと思われる。

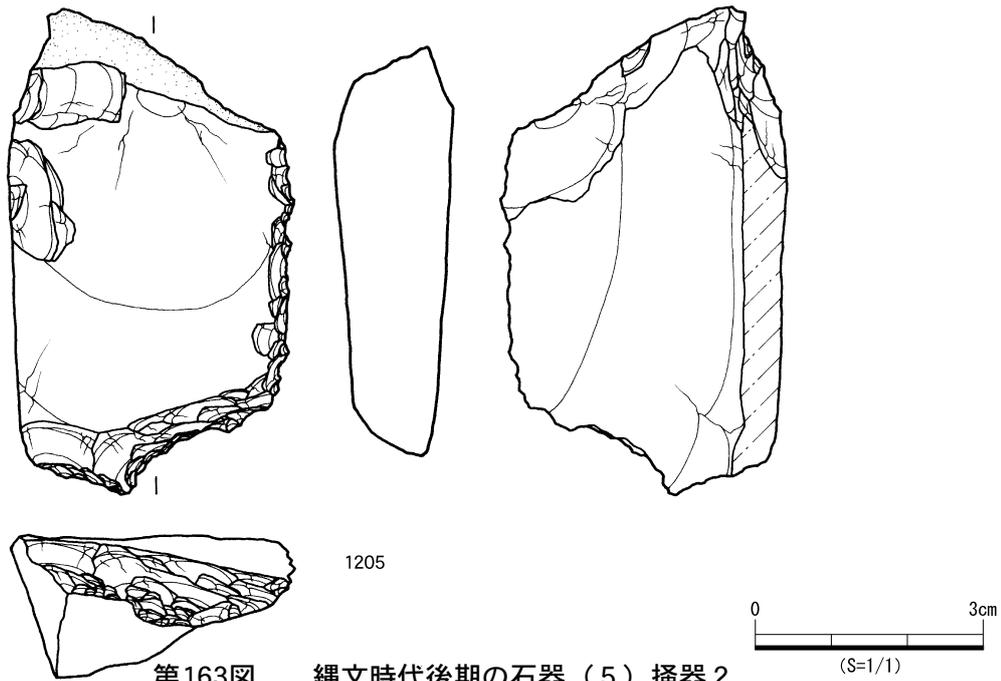
1197・1198は頭部にくびれを持つ打製石斧である。1197の側縁は激しく摩耗しており、着柄によるものであろう。表面はふくらみ、裏面が平坦になる器体であることから、刃部は、おそらく丸くなる形状を示すものと思われる。1198の側縁も摩耗しており、1197と同じような理由であろう。

石匙（第162図 1199・1200）

1199はつまみを作り出す抉入と刃部のみを調整した簡易な作りの斜刃型の石匙である。また、刃部調整もやや粗雑であり、表面刃部はほとんど調整されていない。1200も同様な作りのもので、縦型の石匙であり、右側縁は球顆のためエッジが切れ、刃部を作っていない。



第162図 縄文時代後期の石器（4）石匙・搔器 1



第163図 縄文時代後期の石器（5）搔器 2

搔器（第162・163図 1201～1205）

1201は黒曜石の縦長剥片の側縁に刃部をつけた搔器である。刃部中央が搔器特有の潰れをしていること、裏面に刃部調整が施されず片刃になっていることから搔器に分類した。

1202は黒曜石の不定形剥片を用いた抉入搔器である。抉入部の刃部調整は細かく丁寧な印象を受ける。表面左上の剥離は主剥離面を切っており、明らかに側縁調整のためのものである。基部形状をこのように仕上げる意図があったものと思われる。抉入部以外のエッジに加工が施されていないのと対照的であり、基部形状にこだわるなんらかの理由があったのではなかろうか。

1203は拇指状搔器である。表面の刃部加工と裏面の使用による刃こぼれが顕著である。南九州の縄文時代では早期に類例があるが、この時期の類例は見あたらない。この遺跡での石槍等の出土例を考えると、この時期まで拇指状搔器が残ると断言することは躊躇せざるを得ない。

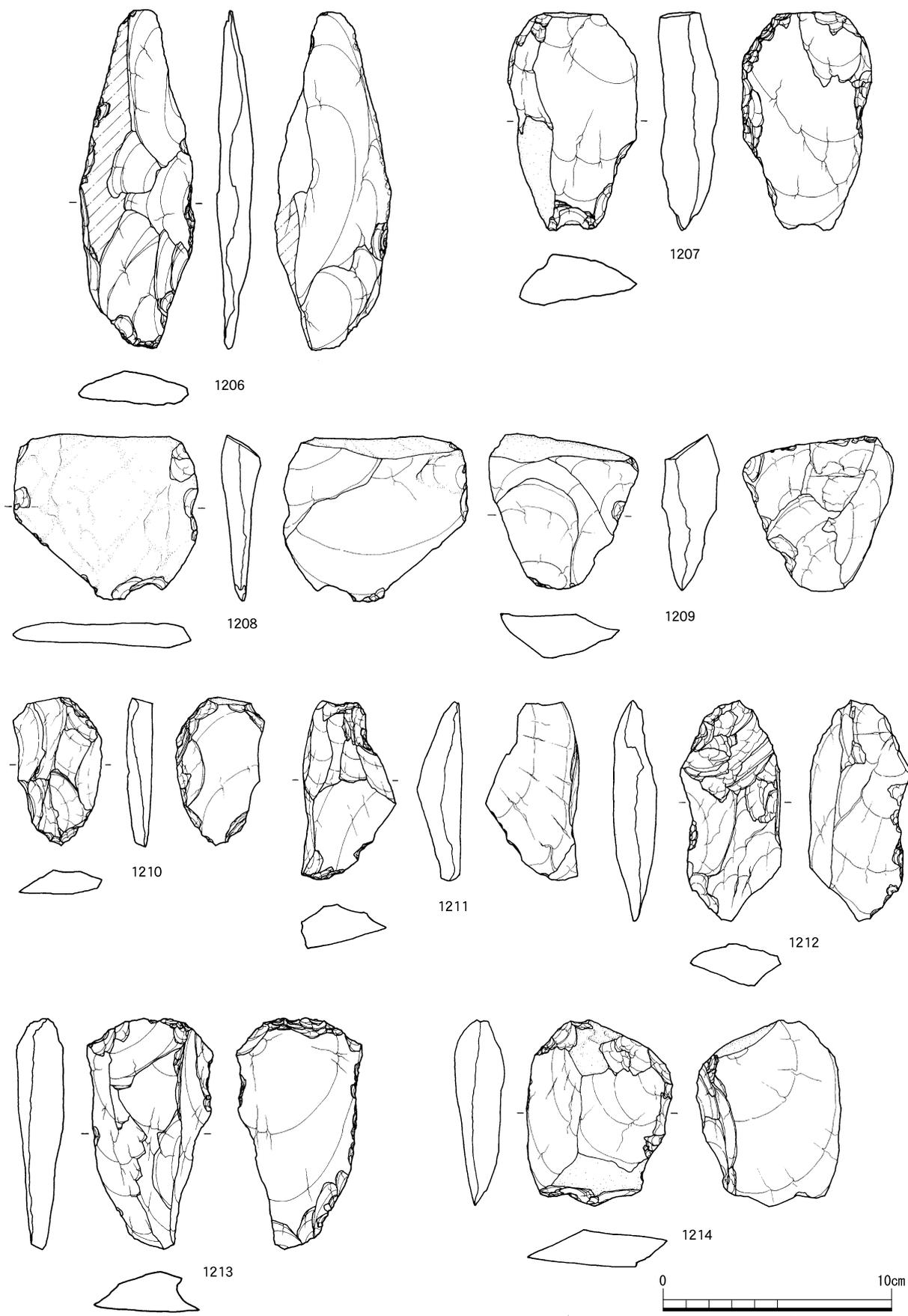
1204・1205は分厚い剥片を用いた頑丈な刃部を持つ搔器であり、1204はややラウンドする刃部を持ち、1205は浅く内湾する刃部と直線的な刃部を併せ持つ。いずれも刃部の潰れが激しい。

削器（第164・165図 1206～1223）

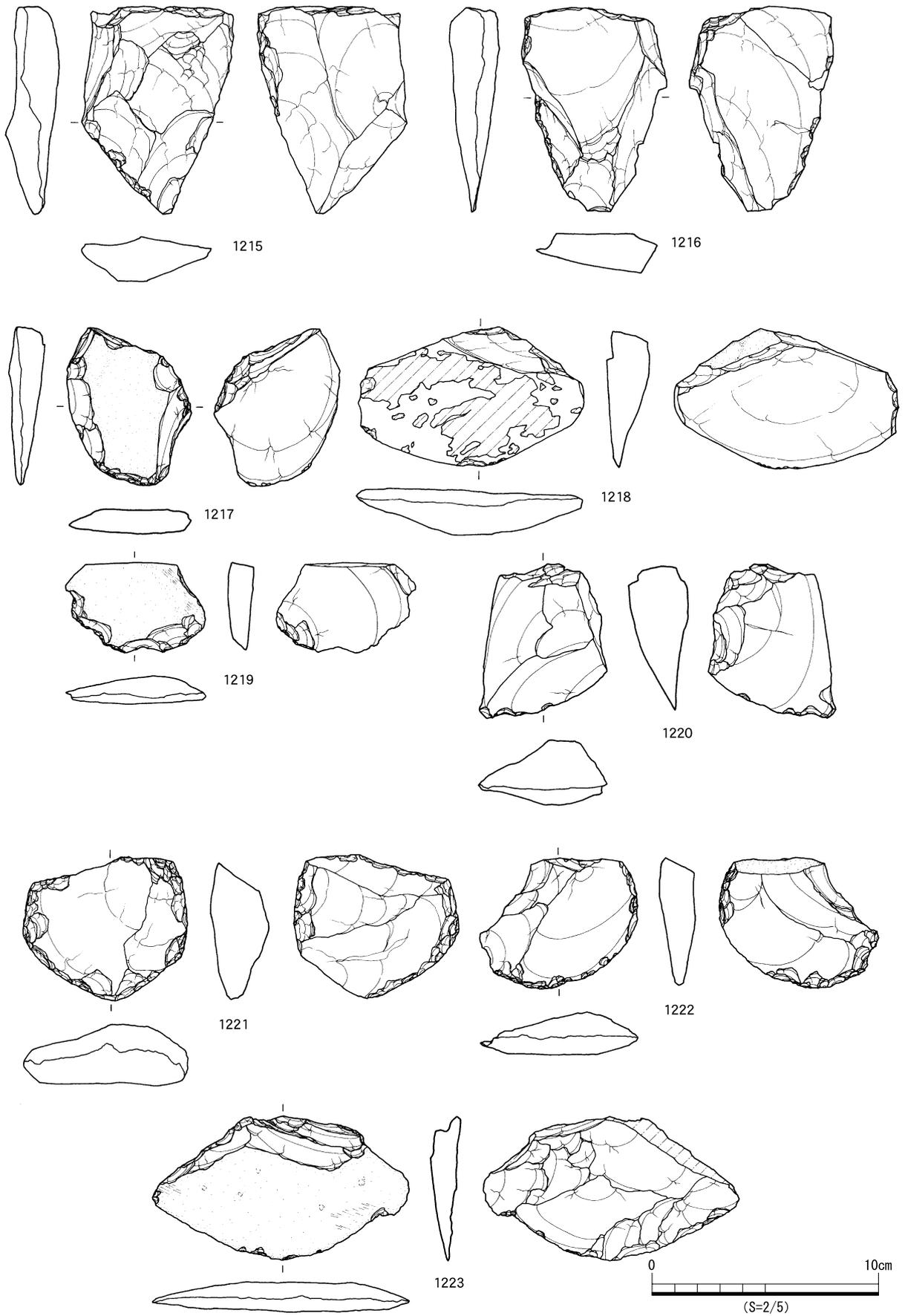
1206～1223は大型剥片を用いた削器である。1223の1点のみが粘板岩であり、ほかは全て頁岩の剥片である。素材となった剥片は、1207が縦長剥片を用いているだけで、ほかは1206や1219・1223のような横長剥片もしくは1214・1222のような不定形剥片を用いている。

横長剥片を用いる場合、1206・1219・1223のように剥片の下縁全体に刃部を作るものがある一方、1212・1213のように主剥離面右側を取り去り、縦長剥片である1208と同様に刃部をつけるものがある。また、1208・1217・1221・1222は寸詰まりの横長剥片であり、1221をのぞけばいずれも礫表皮を残す剥片であり、弧状になったエッジを利用して刃部を形成している。ほかはいずれも不定形剥片を用いて、部分的な器面調整を施した上で直線的な刃部を作り出している。

これら18点の削器は、縄文時代早期に見られるような黒曜石や黒色安山岩を使う小型の削器と異なり、頁岩もしくは粘板岩の大型剥片を用いるところに一つの特徴がある。



第164図 縄文時代後期の石器（6）削器 1



第165図 縄文時代後期の石器（7）削器2

大型楔形石器（第166～169図 1224～1270）

ここに抽出した47点の石器は、共通して次のような特徴を持つ。

- ① 5 cm以上手の平大までの大きさである。
- ② 周縁からの複数の剥離で器形が形作られる。
- ③ 対向する縁辺に階段状剥離がある。
- ④ 断面形が楔形を呈する。
- ⑤ 剥離が進行したものは不整円形に近づく。

①を除いたこれらの特徴は楔形石器と同じであり、通常見られる楔形石器が、黒曜石や黒色安山岩のようなガラス質の岩石を素材とし、1～3 cmほどの大きさであるのに対し、頁岩や硬質砂岩、粘板岩等の石材を用いていることと①のような大きさであることが相違点である。

また、石核として分類しなかった理由は以下のとおりである。

a：これらから剥離されたであろう剥片を利用した定形、定量の小型石器が見あたらない。

b：素材となったのは、先に述べたような岩石の大型剥片であり、そのような剥片を得たような岩塊、もしくは分割礫が出土していない。石核として利用するのであれば、そのような分割礫等が、先に石核として利用されたであろうが、そのような痕跡が見あたらない。

c：bで述べたような分割礫があれば、それからの剥片剥離が進行した結果としての残核の器種転換が考えられるが、それを思わせるような大量の剥片が見あたらない。

以上のことから、石核として剥片生産が行われた結果としてこのような形になったのではないと判断した。ただし、aに関しては、1207・1210・1212のような削器がこの器種を製作する過程で得られた剥片を利用したものである可能性が高いと判断できる。しかし、それは結果としての利用であり、削器を作るための剥片を得ることが目的ではなかったであろうと考える。なお、bcに付け加えれば、このことは、遺跡内に持ち込まれた大型の剥片から作られていることを示しており、頁岩等の露頭で剥片製作が行われた後、器種製作のみがこの遺跡で行われたことが了解される。

以上のような理由で大型楔形石器という器種名で分類項を立てた。

なお、断面形について付言すれば、上下両端が尖る個体と上端が平坦である個体、上下両端もしくは片方が潰れて丸くなった個体の三者があり、使用の進行過程を反映するものと理解している。

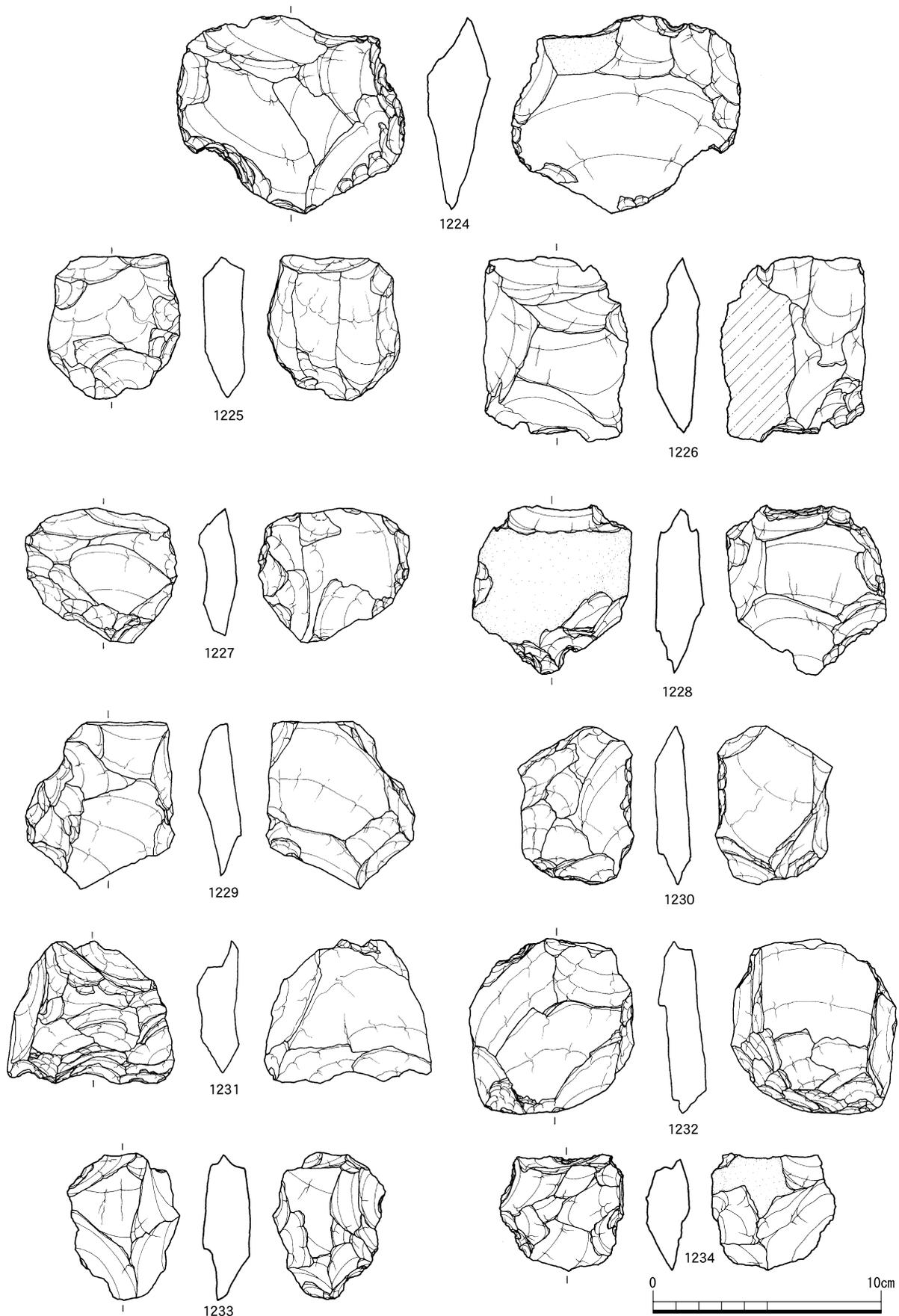
楔形石器（第170図 1271・1272）

1271・1272は楔形石器であり、黒曜石の小型剥片を素材とするものである。1271は表面に上下両端からの対向する剥離が観察でき、その両端の潰れも顕著である。1272は特に小型であるが、上下両端の潰れや断面形が紡錘形を示しており、楔形石器の特徴をよく備えている。

使用痕剥片・加工痕剥片（第170図 1273～1281）

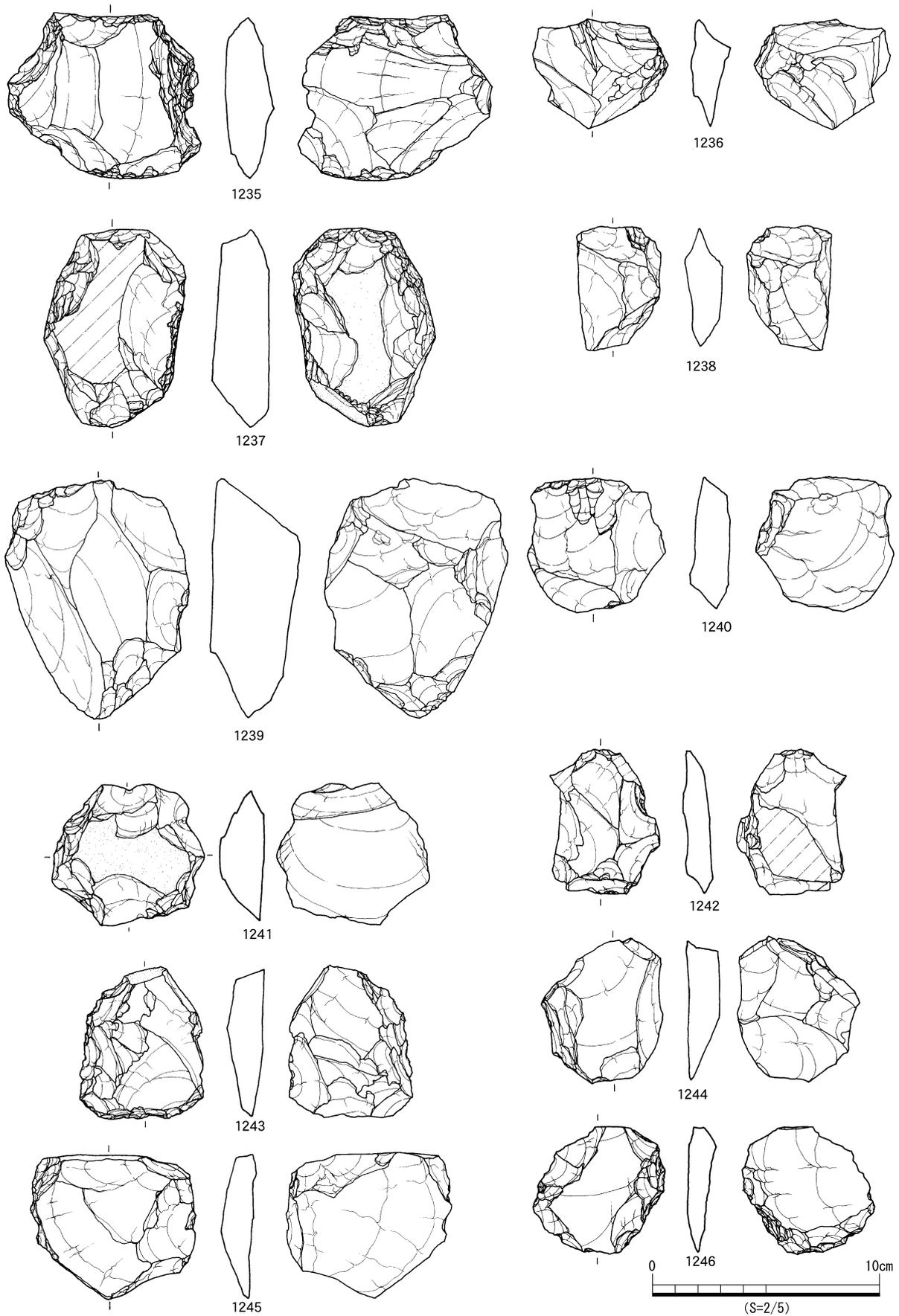
1273～1281は黒曜石や形質頁岩、チャート等の使用痕と思われる微細剥離を持つ剥片である。1273は黒曜石の縦長剥片であり、刃器状のエッジに微細剥離が連続する。1274～1279はフェザーエンドのエッジに微細な剥離が連続しているのが観察できる。

1280・1281は加工痕剥片である。縁辺の一部に石鏃のような連続する剥離が施されているが、折損のため本来の器形が復元できない。断面形や、加工のある縁辺の形状から大型石鏃ではないかとも思われるが、確証がない。

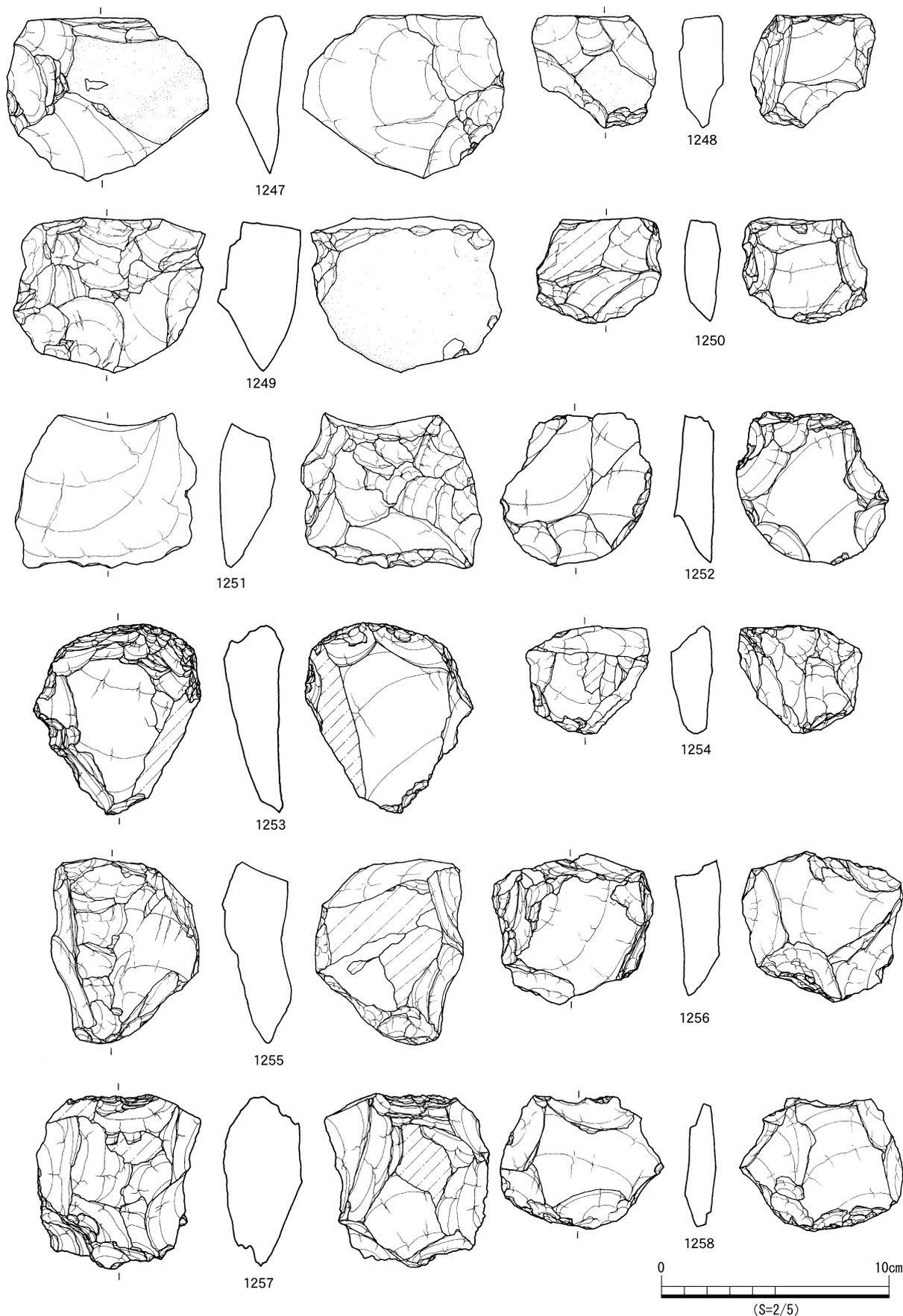


第166図 縄文時代後期の石器 (8) 大型楔形石器 1

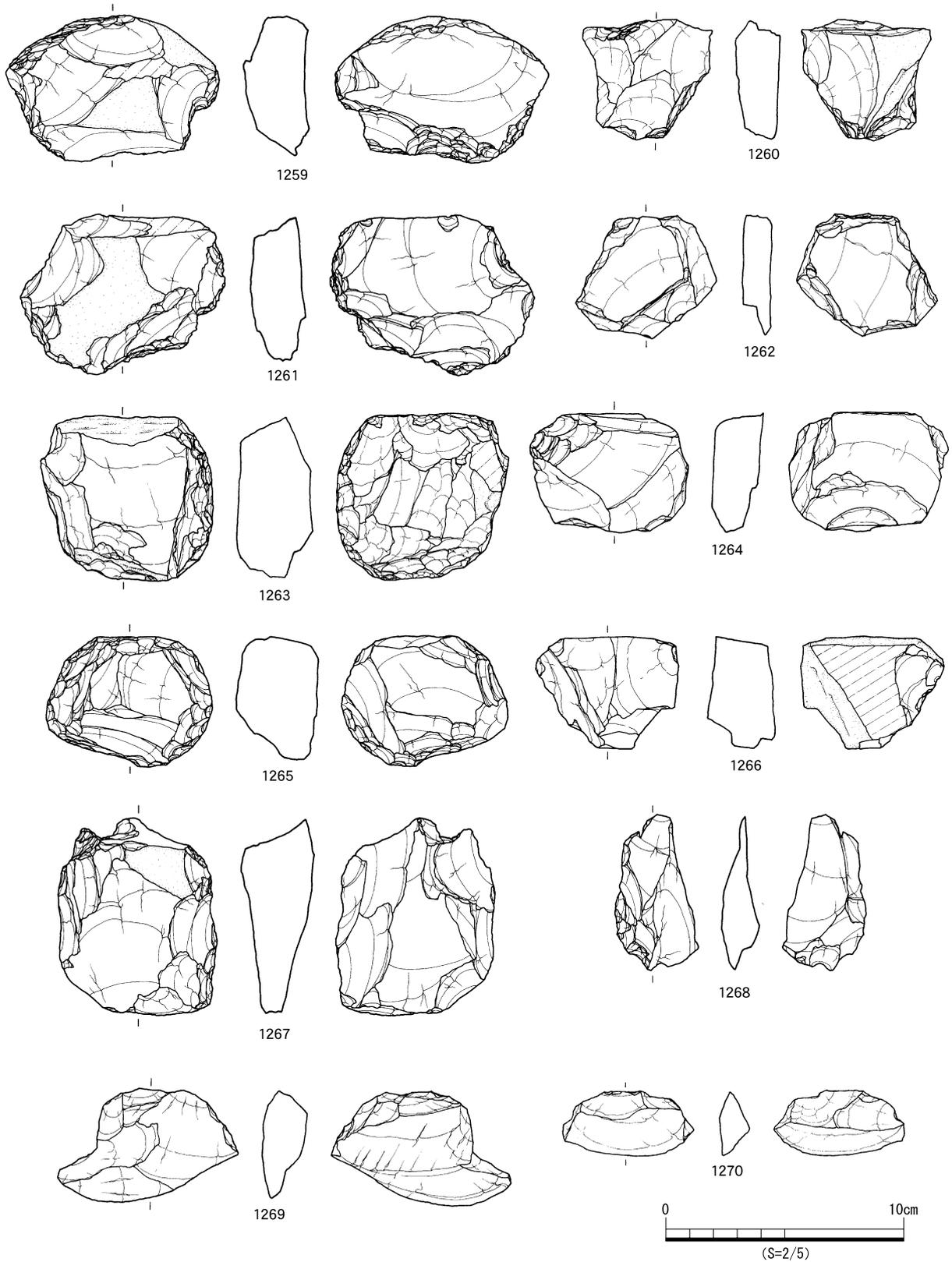
(S=2/5)



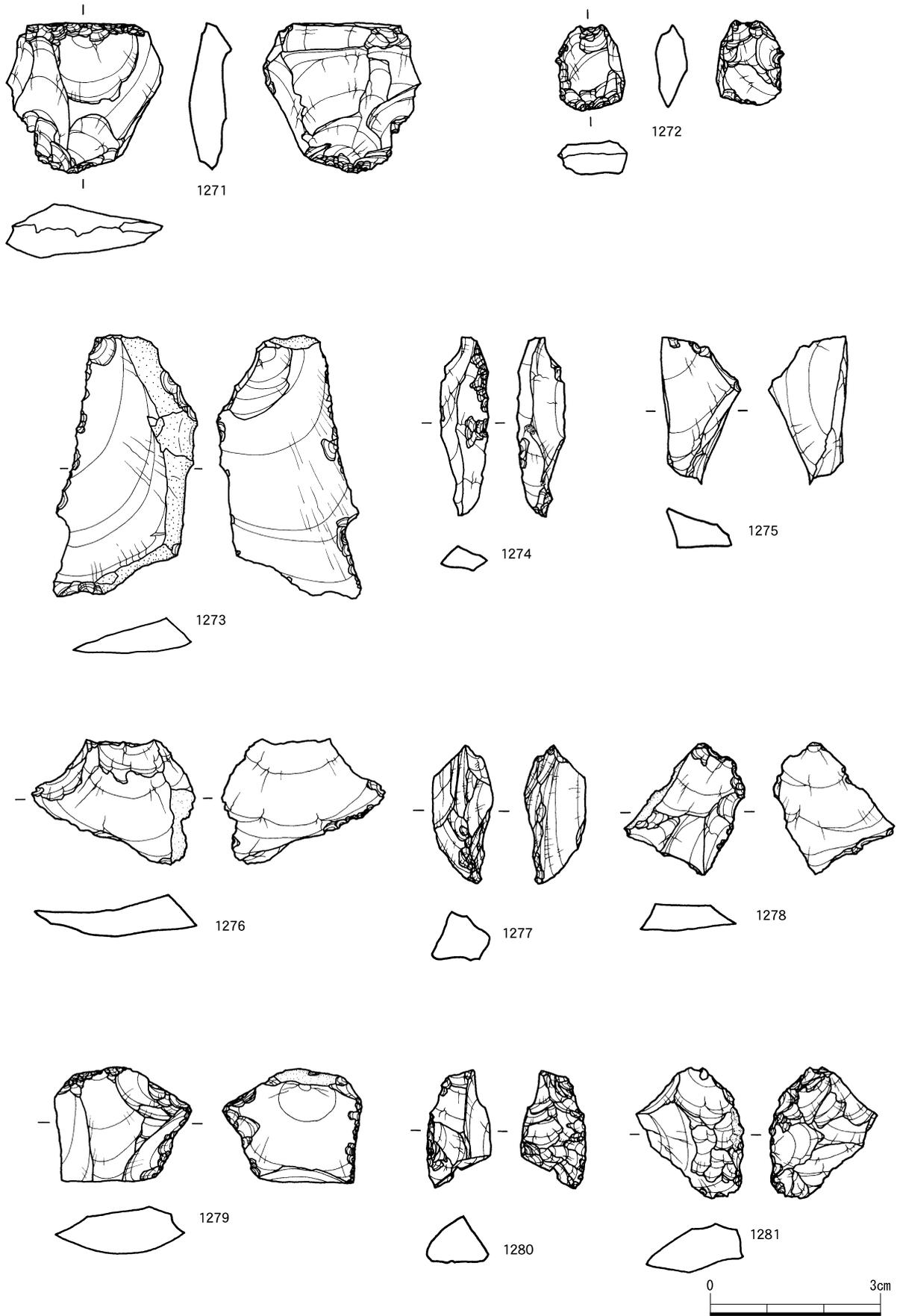
第167図 縄文時代後期の石器（9）大型楔形石器2



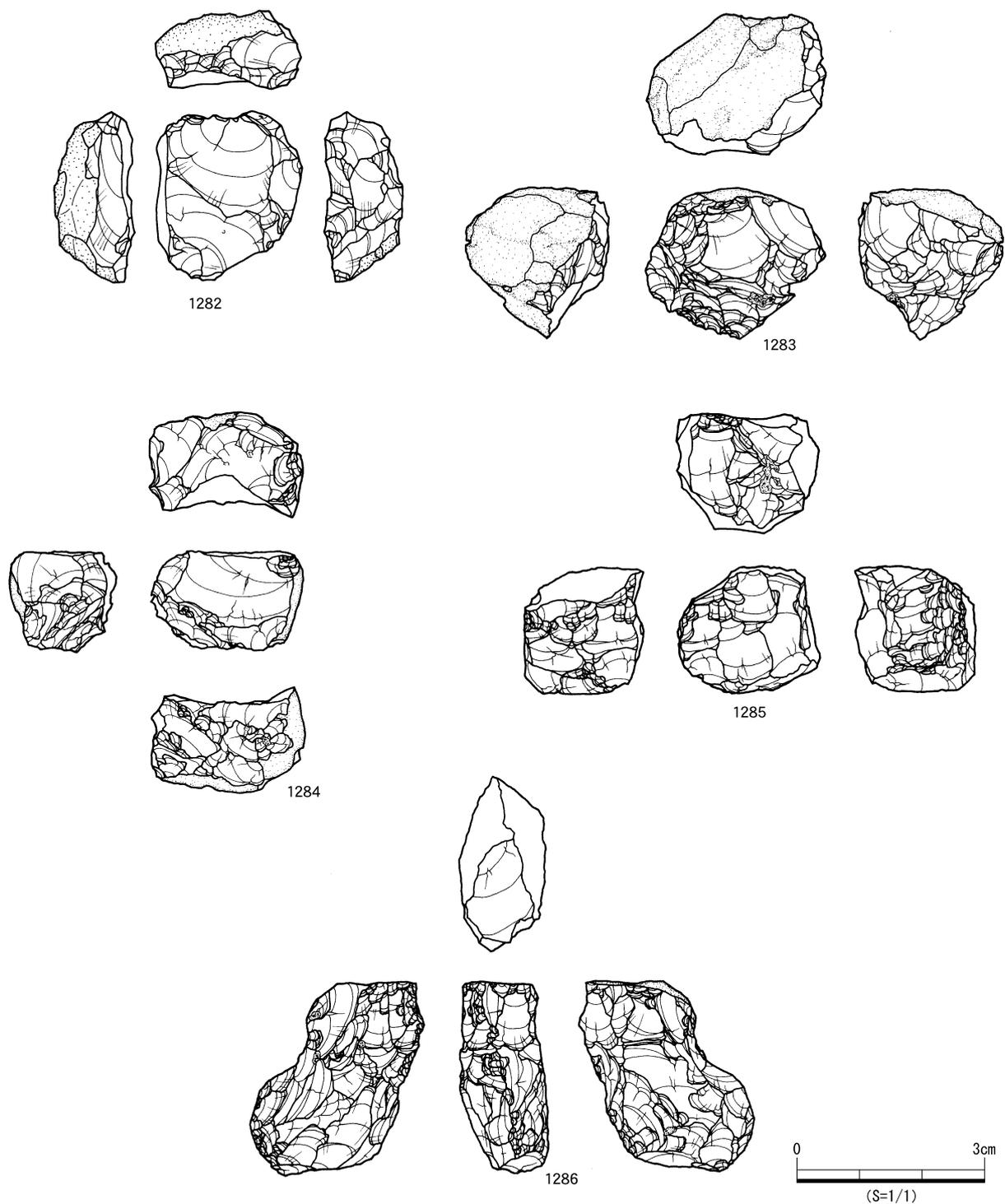
第168図 縄文時代後期の石器 (10) 大型楔形石器 3



第169図 縄文時代後期の石器 (11) 大型楔形石器 4



第170図 縄文時代後期の石器 (12) 楔形石器・使用痕剥片 (S=1/1)

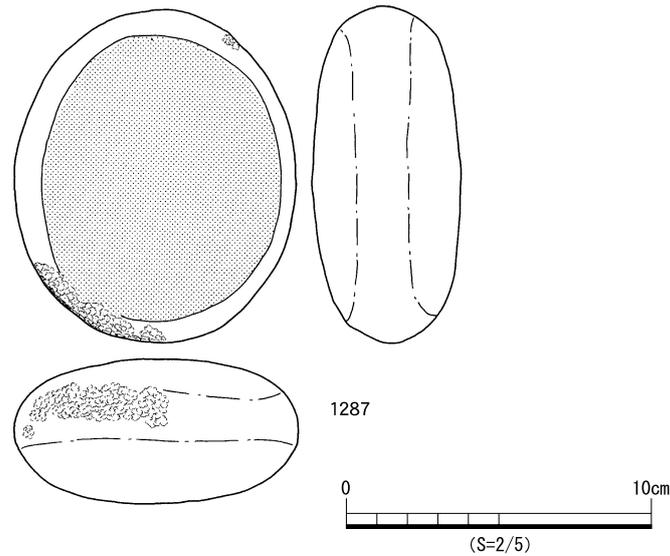


第171図 縄文時代後期の石器 (13) 石核

石核 (第171図 1282 ~ 1286)

いずれも黒曜石の小型礫を素材とする石核である。目的剥片は鱗状剥片や横長剥片であるが、石鏃等の小型石器の素材としての剥片であろう。

1282は鱗状剥片を得るためのもので、同一作業面で打面を上下に転移して剥片剥離を進めた結果、盤状石核に近い形態になっている。1284は作業面と打面とを頻りに転移しながら剥片剥離を



第172図 縄文時代後期の石器 (14) 磨石 1

進めた結果,このような形態になったものであろう。最後は整った横長剥片を剥離している。また,1283・1285・1286も作業面,打面ともに頻繁に転移しながら剥片剥離を進め,このような形態になっているが,作業面再生や打面再生を行うことなく放棄されたものであろうか。

磨石 (第172～175図 1287～1300)

1287～1300は砂岩や安山岩の円礫を利用した磨石である。近くの神殿川で採集した円礫であろうと思われる。いずれもよく使い込まれており,表裏両面とも見事な平滑面である。側面にはいくつかの個体に敲打痕が残り,敲石をかねていたことが分かる。

1295～1299は熱破碎によって砕けた磨石であり,赤変も著しい。

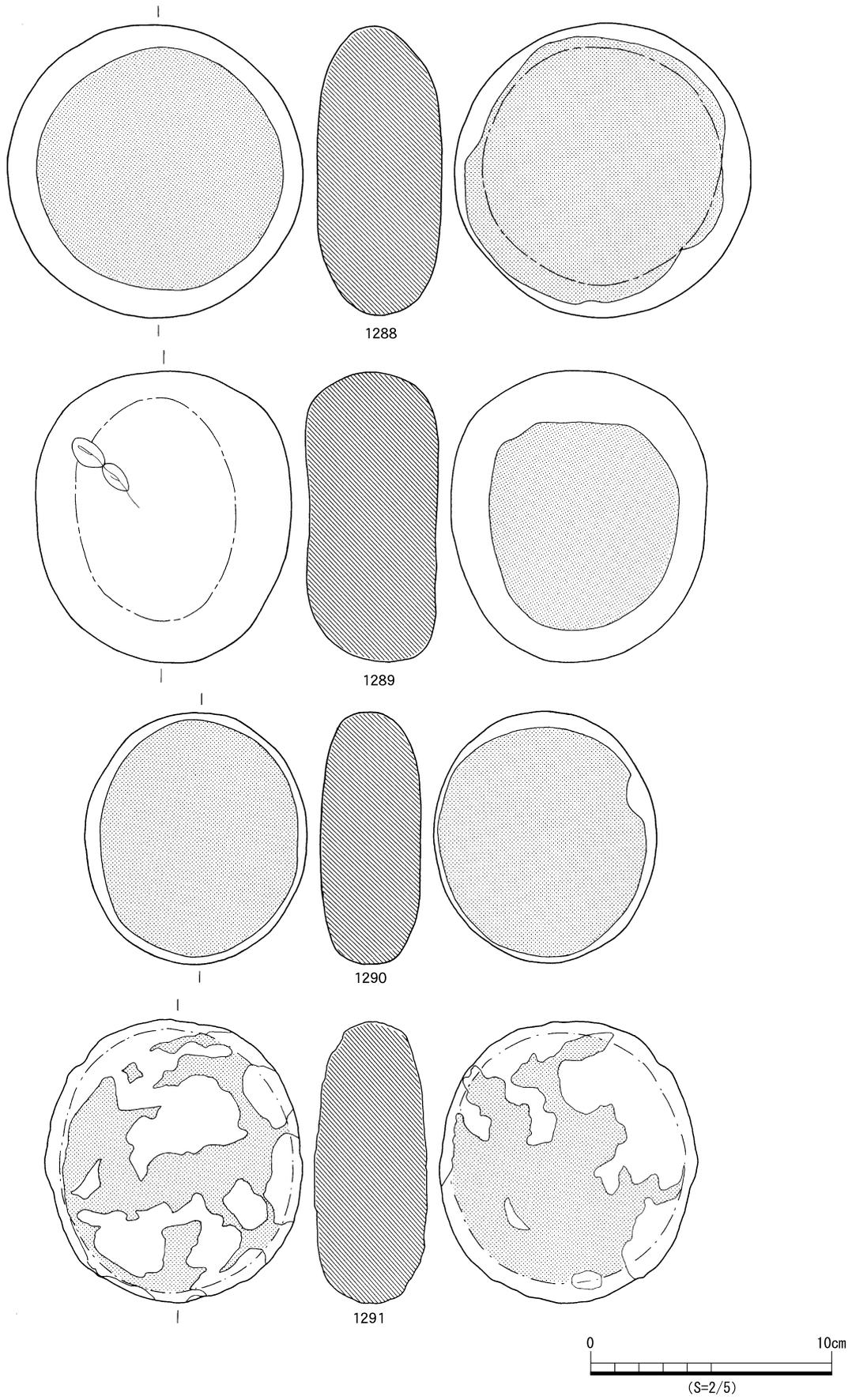
砥石 (第176～179図 1301～1331)

1301～1331は砂岩やシルト岩の礫を利用した砥石である。

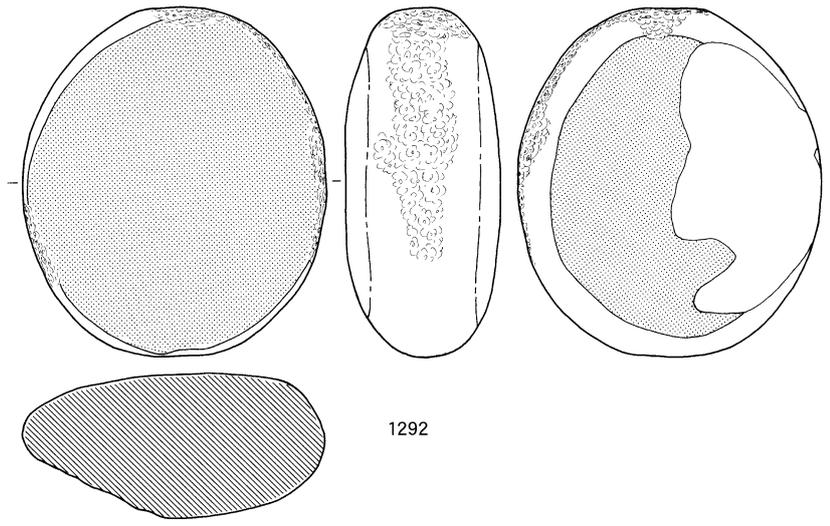
1301・1302は板状の礫を用いたもので表裏とも使い込まれて平滑面ができている。1303～1305は大きな円礫を用いたものでやや粗な平滑面を持つ。この五つは,その大きさから据え置いて使うタイプの砥石であろう。

1306～1326は棒状の円礫もしくは球状の円礫を用いたもので,明確な平滑面を持つものを砥石として分類した。着柄した石斧を研ぎ直すような,手に持って使うタイプの砥石であろうと考えている。今でいえば,仕上砥に使うようなシルト岩を用いたものもある。

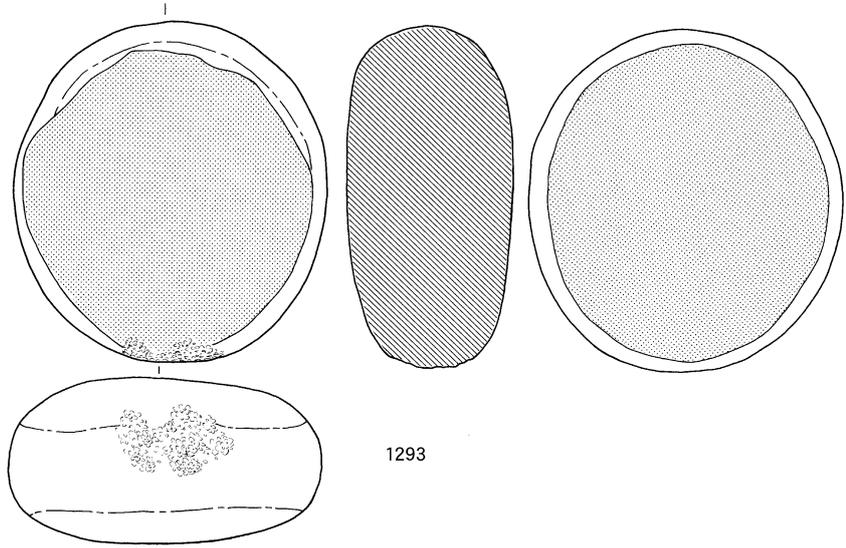
1327～1331も砥石として分類したが,1301～1326とは大きさにおいて明らかに一線を引くべきと考えている。1301～1305は手に持って使うには大きすぎる個体であり,1306～1326は手の中に握り込める大きさであるのに対し,1327～1331は指でつまむような大きさでしかない。そのような持ち方では研磨,例えば石斧のような大きさの石器を研ぐのには大変不向きであろう。また,岩石の種類も異なる。1301～1326は砂岩や安山岩など粗粒鉱物からなる岩石であり,この一群はシルト岩や泥岩のような粒のない岩石である。さらに,この一群にはほかの砥石にはない特徴がある。それは,明瞭な線條痕を持つ個体が多いことである。1327は表面にも線條痕があり,右側面は直線的になり平坦面を見せるが,そこにも明瞭な線條痕が残る。



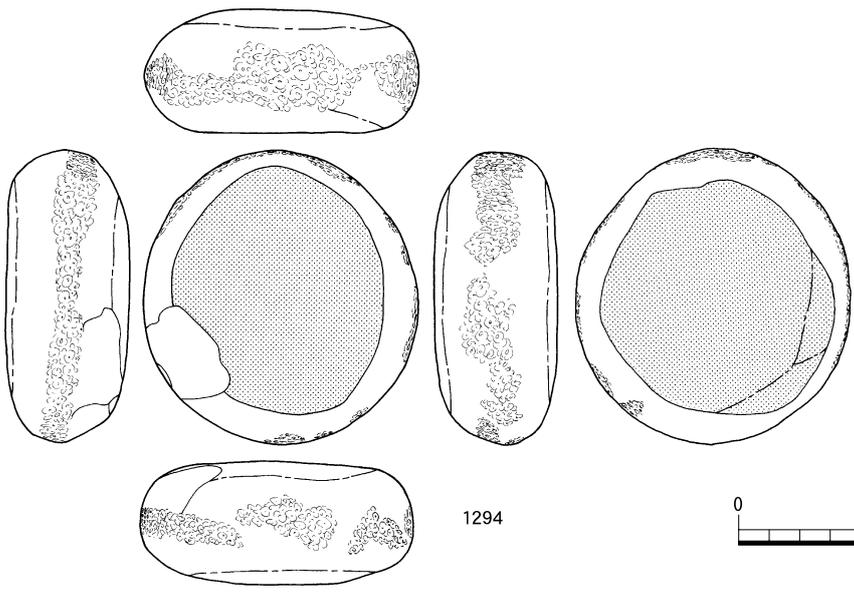
第173図 縄文時代後期の石器 (15) 磨石 2



1292



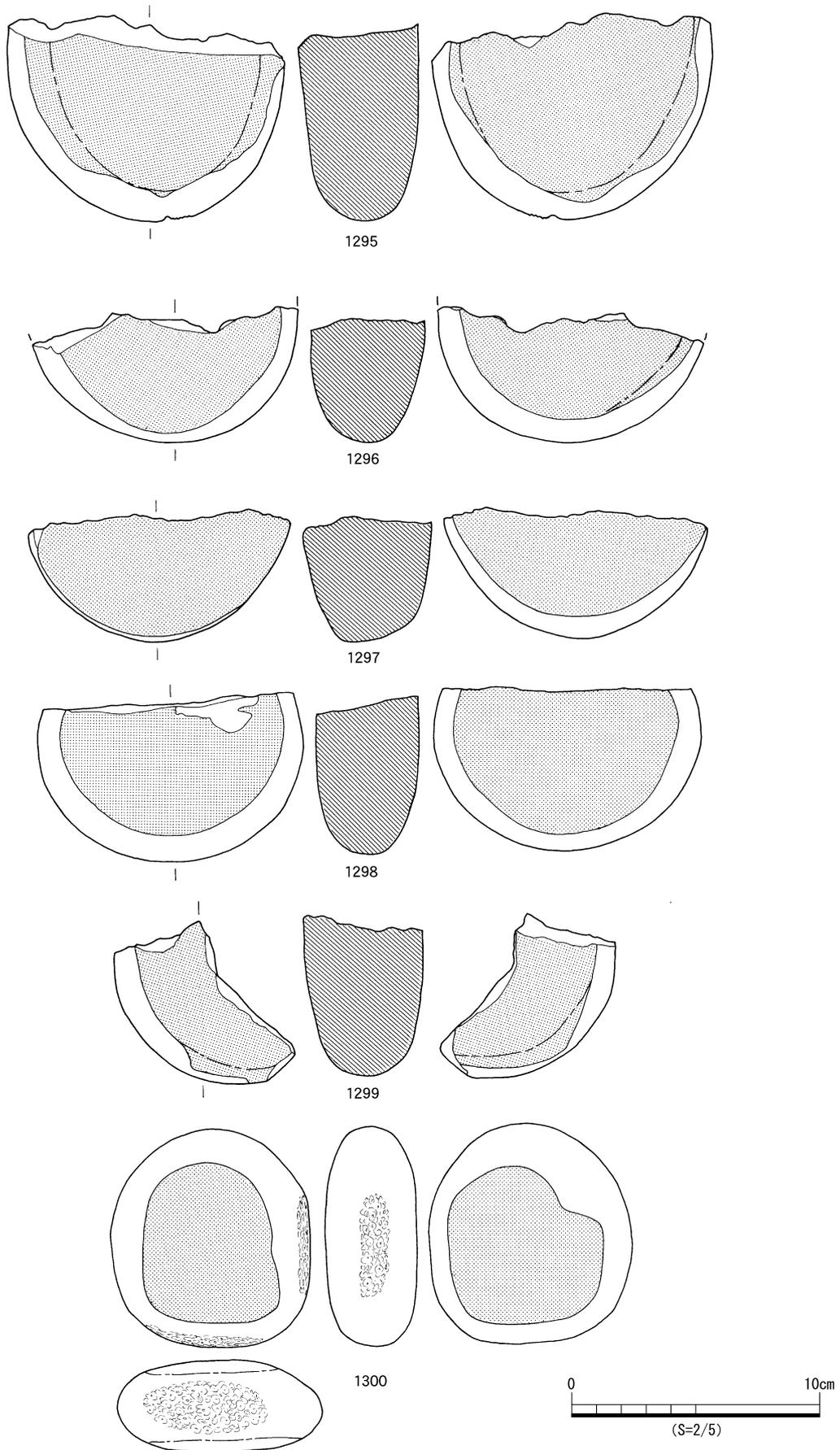
1293



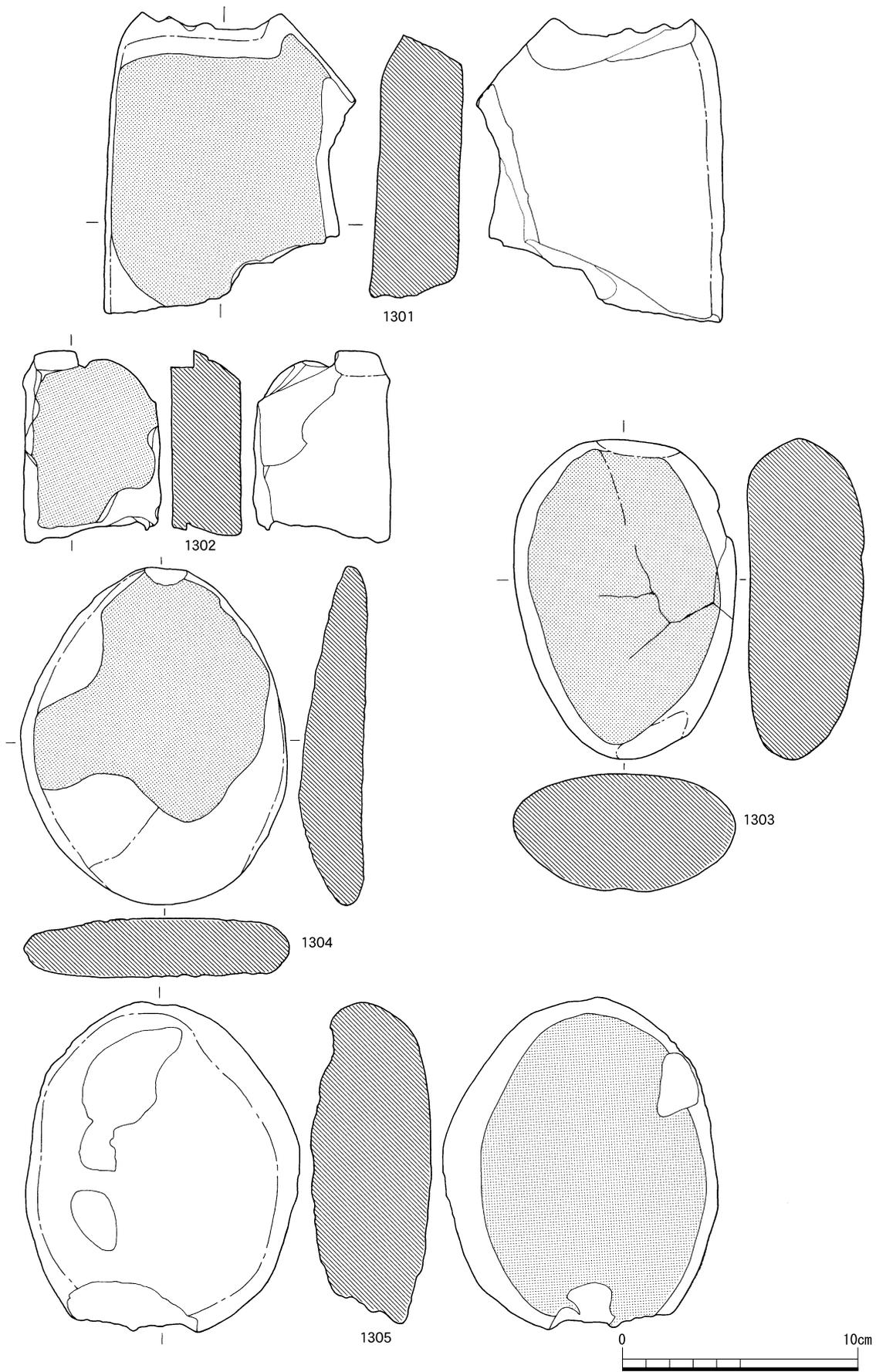
1294



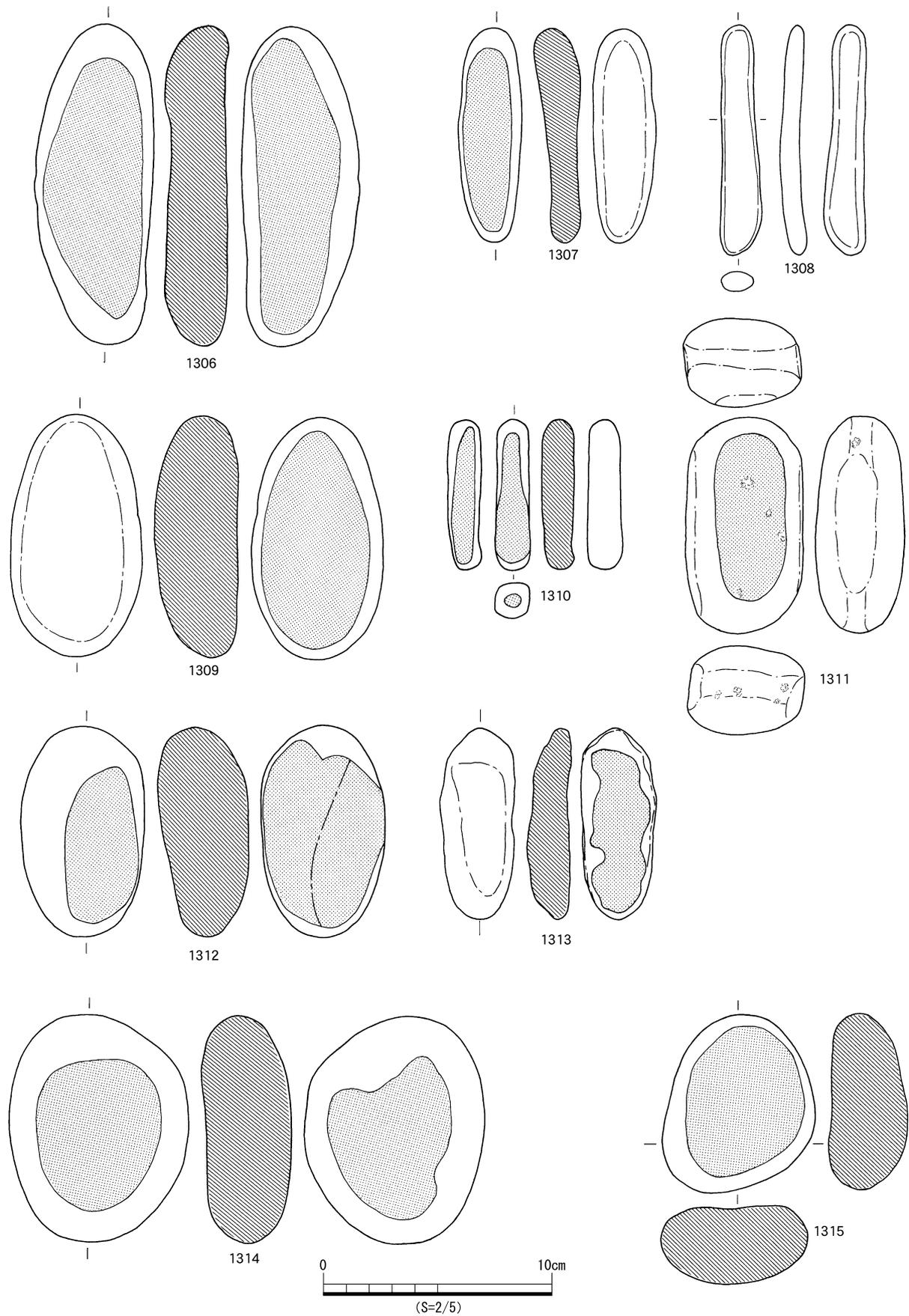
第174図 縄文時代後期の石器 (16) 磨石 3



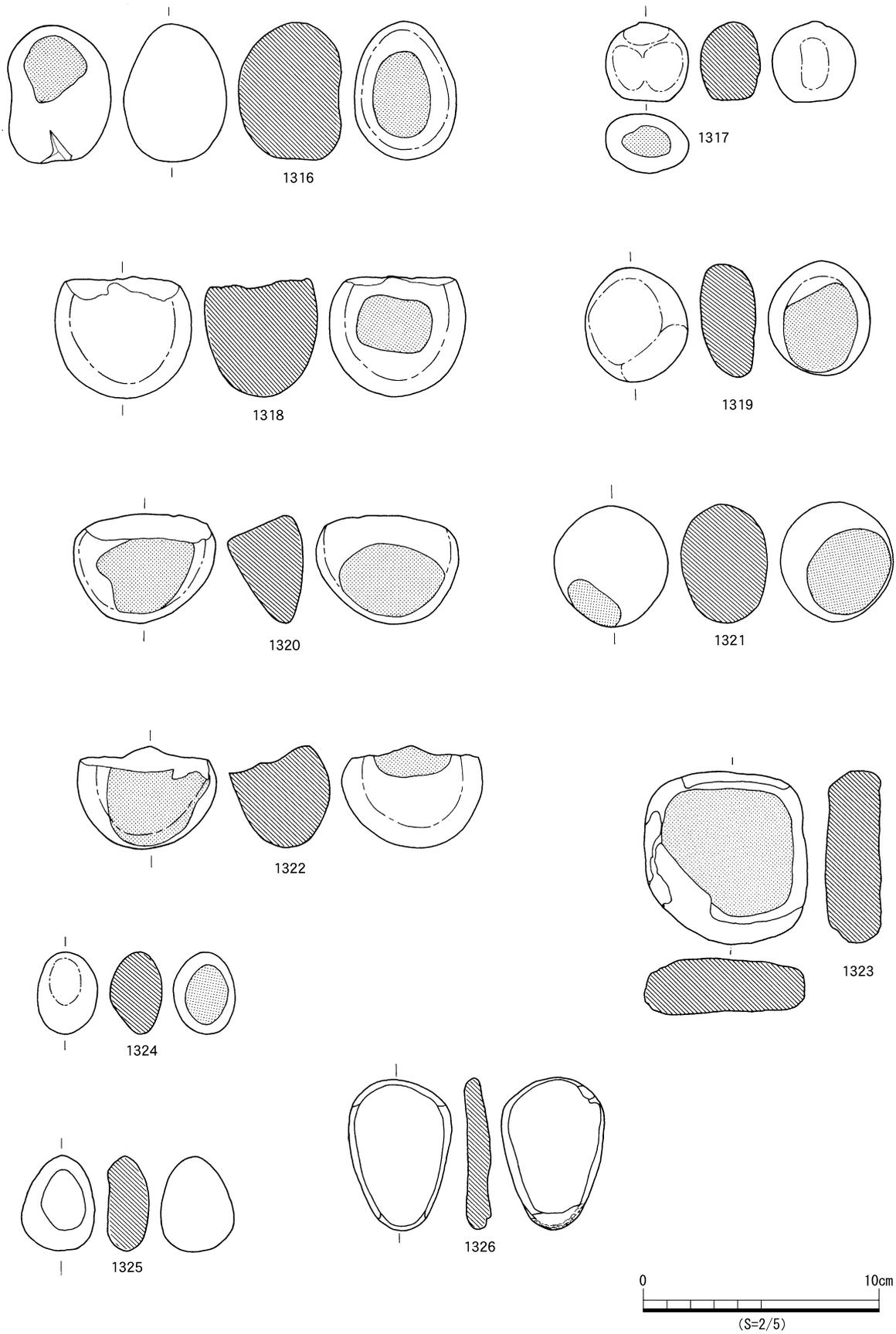
第175図 縄文時代後期の石器 (17) 磨石 4



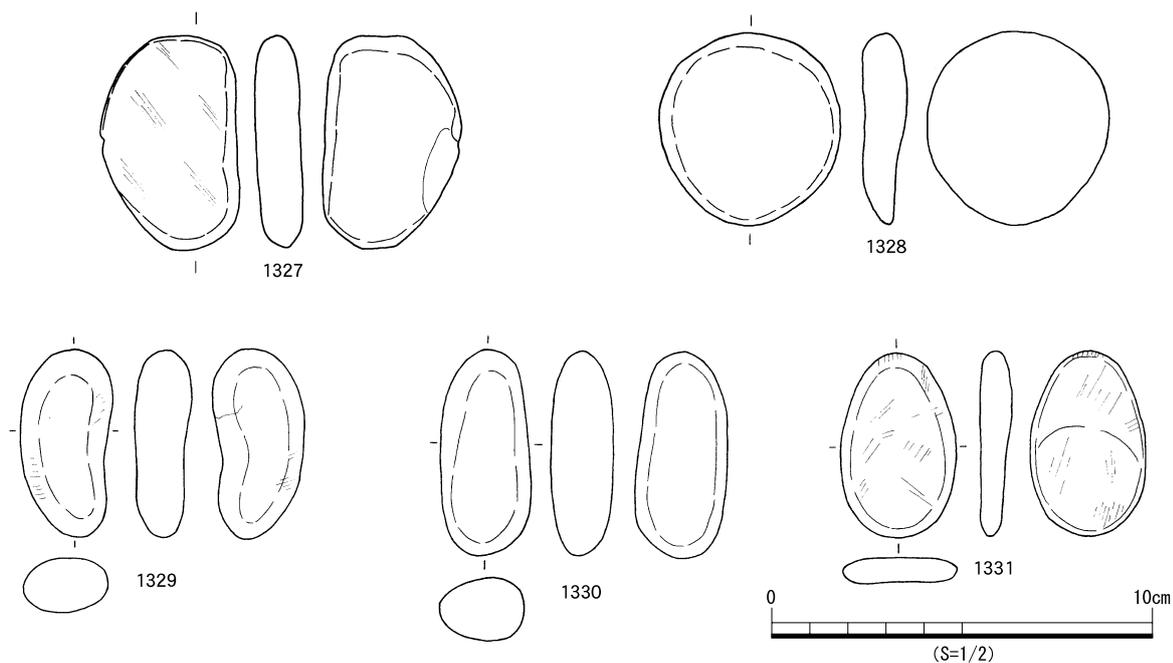
第176図 縄文時代後期の石器 (18) 砥石 1



第177図 縄文時代後期の石器 (19) 砥石 2



第178図 縄文時代後期の石器 (20) 砥石 3



第179図 縄文時代後期の石器 (21) 砥石 4

敲石 (第180・181図 1332～1350)

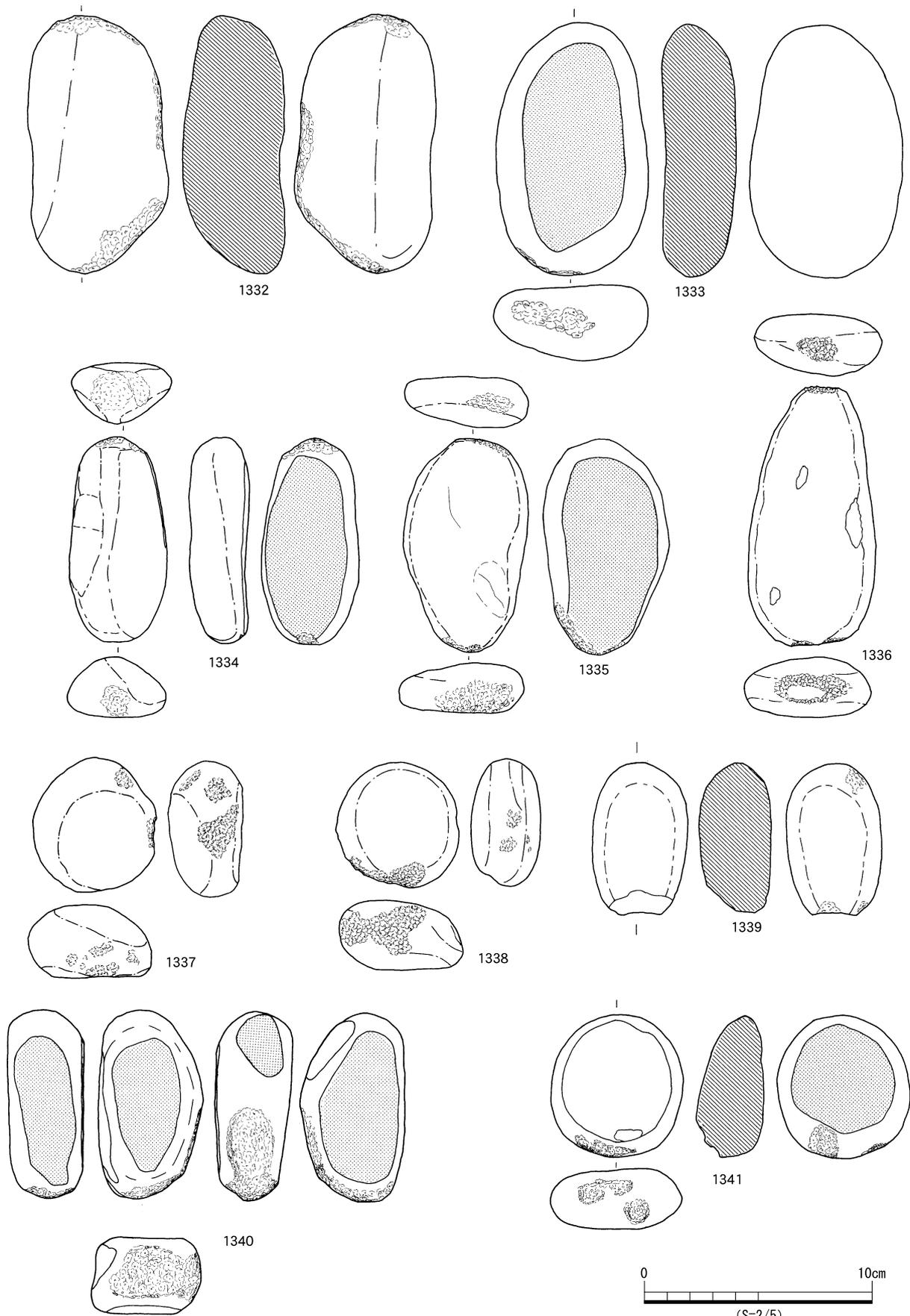
ここにあげた19点は、石器製作に用いるハンマーストーンとしての敲石である。石材は砂岩、硬砂岩、安山岩や班斫岩などであるがいずれも円礫を用いている。また、大別して敲打痕のみを持つものと、砥石の平滑面を併せ持つものとに分けられる。また、球形に近いものと棒状の形態のものに分けられる。砥石の平滑面を持つものは磨製石器の製作のさいに敲打整形と研磨とを行う石器であろう。

敲打痕のみを持つもののうち、1332は特徴的で、円礫の両端に敲打痕を持つが、一端は斜めになった箇所を意識的に使ったようである。また、1342も特徴的で、安山岩の小円礫の両端が平坦になるまで敲打をしており、よほど使いよかったものであろうか。1343は棒状礫の両端に敲打痕が残るが、間接打撃のパンチストーンとしての結果であろう。1350も間接打撃のパンチストーンとして使われたものであろうが、下端は碎けており、上端にのみ敲打痕が残る。この石器はほぼ全面が研磨されており、磨製石斧が転用されたものである可能性がある。1346も同様の石器であるが、上半が折損しており、そこに敲打痕が残っている。

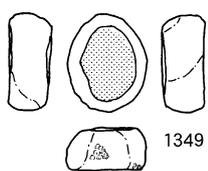
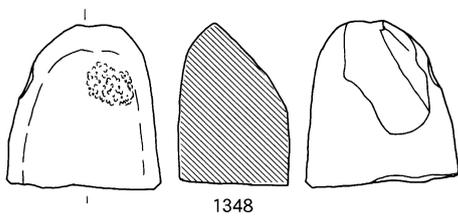
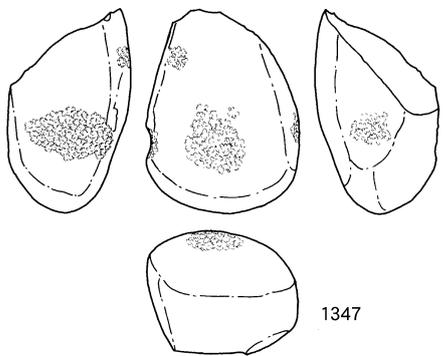
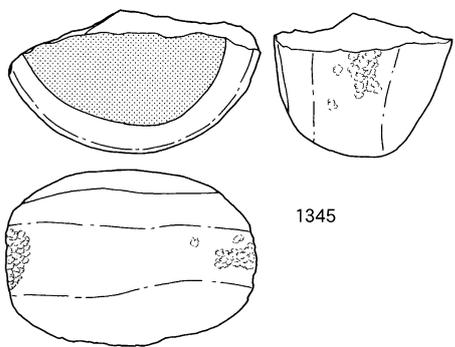
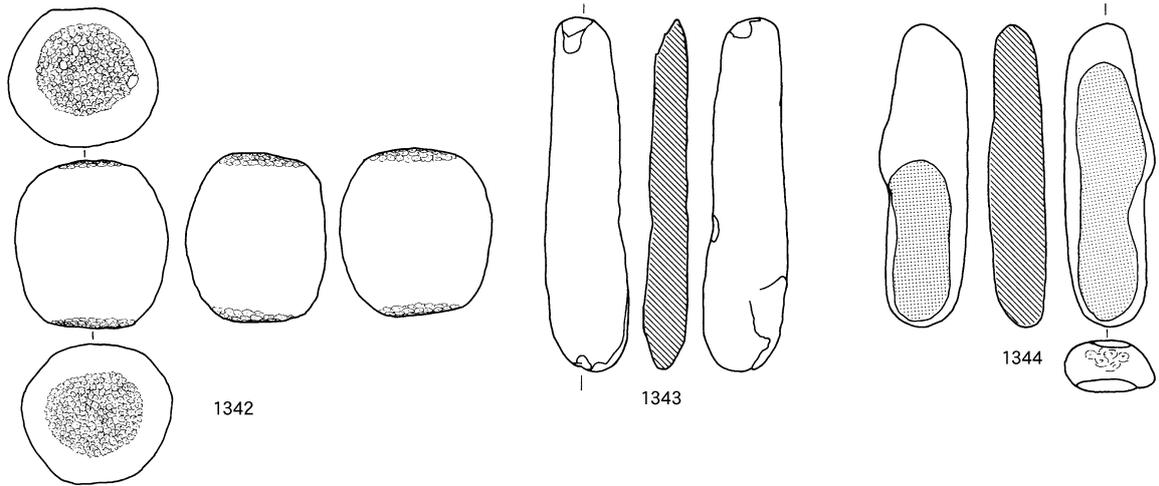
敲打痕と砥石面を併せ持つもののうち、片面だけに砥石面を持つものが多い。敲打と研磨とで使い分けで持ち方を変える際の癖がこのような結果として残ったものか。

石皿 (第182・183図 1351～1361)

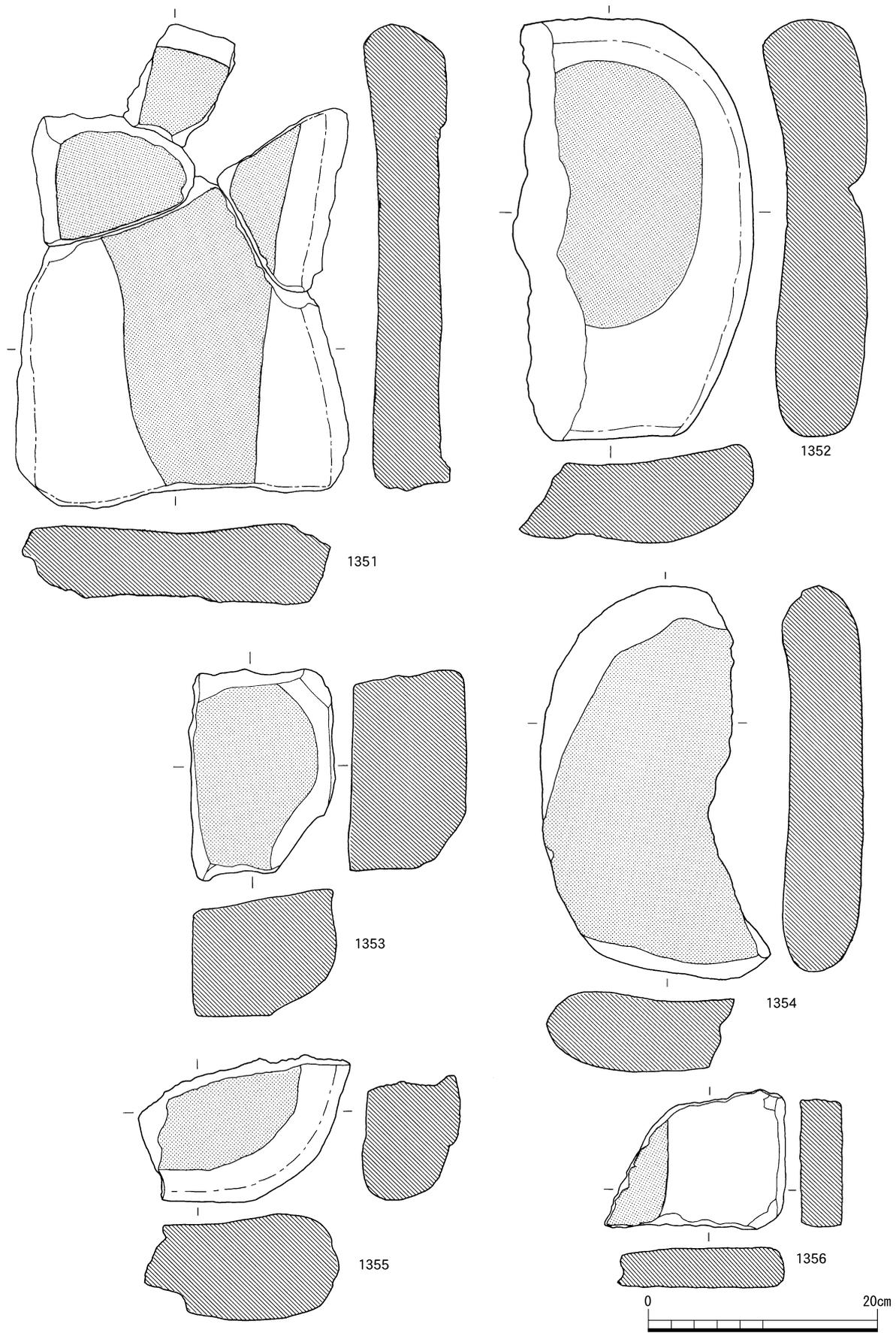
11点を図示したが、いずれも破片ばかりで完形の石皿の出土が見られない。これも、この遺跡の特徴である。破片を接合できたものが3点あり、図示した以外にも小さな破片は数多くあった。1351・1357・1359が破片を接合できたものであるが、使用面の窪みはさほど深くなっているのには割れているのは、意図的な破損の可能性を考えたいような資料である。この3点以外も同様に使用面の窪みは深くない。また、全ての石皿に共通する特徴として、側面の敲打整形がなされていることがあげられる。特に1352・1354の側面整形は顕著であり、平面形へのこだわりが見て取れる。1357もラフではあるが、長楕円形へのこだわりを見て取れる資料である。



第180図 縄文時代後期の石器 (22) 敲石 1

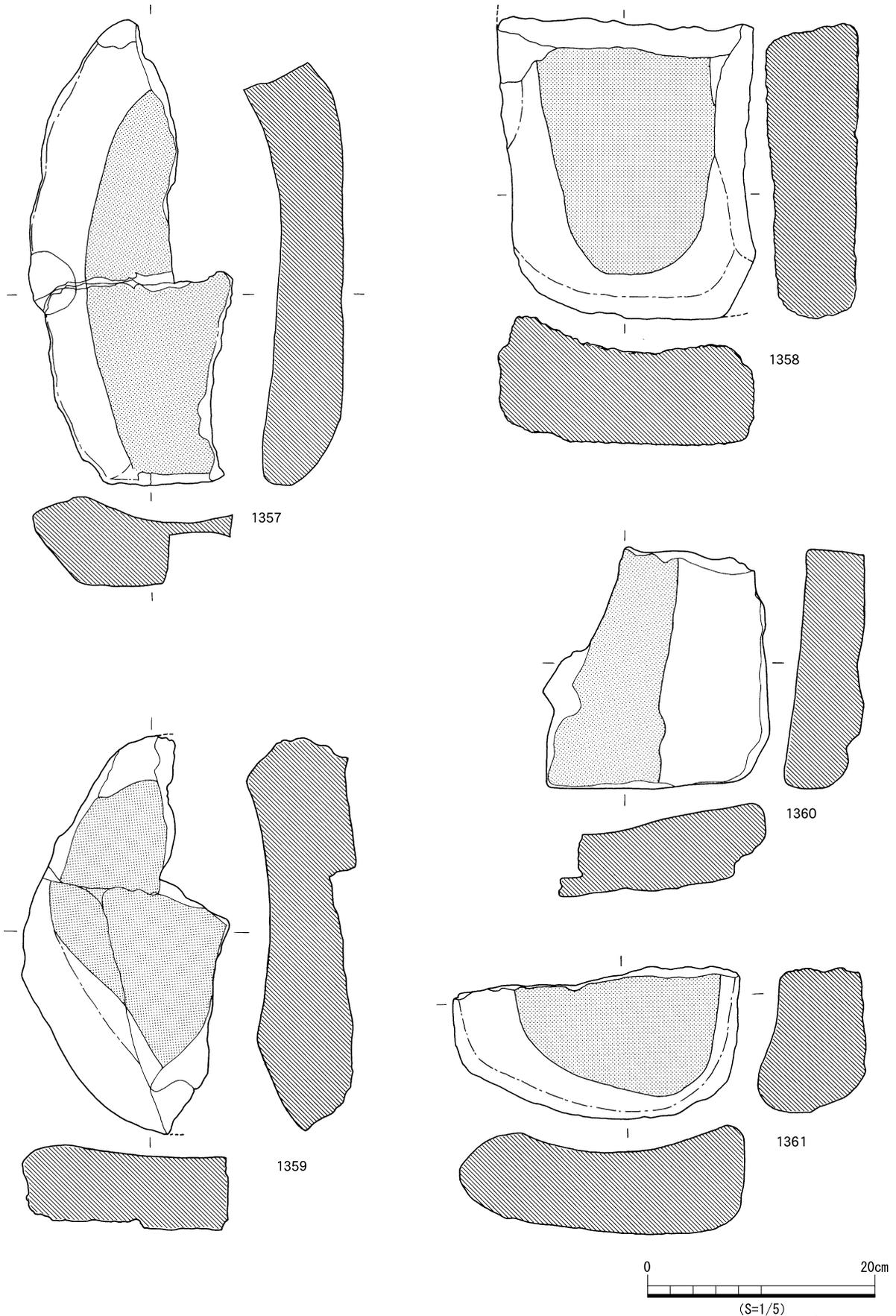


第181図 縄文時代後期の石器 (23) 敲石 2



第182図 縄文時代後期の石器 (24) 石皿 1

(S=1/5)



第183図 縄文時代後期の石器 (25) 石皿 2

石製垂飾（第184図 1362～1375）

ここに石製垂飾として図示した14点は、きわめて特徴的な一群である。それは、石製垂飾でありながら、石材は何の変哲もないシルト岩や砂岩、粘板岩等であり、蛇紋岩や碧玉を用いていないからである。砥石の項であげた第179図1327～1331と同様の石材が用いられている。

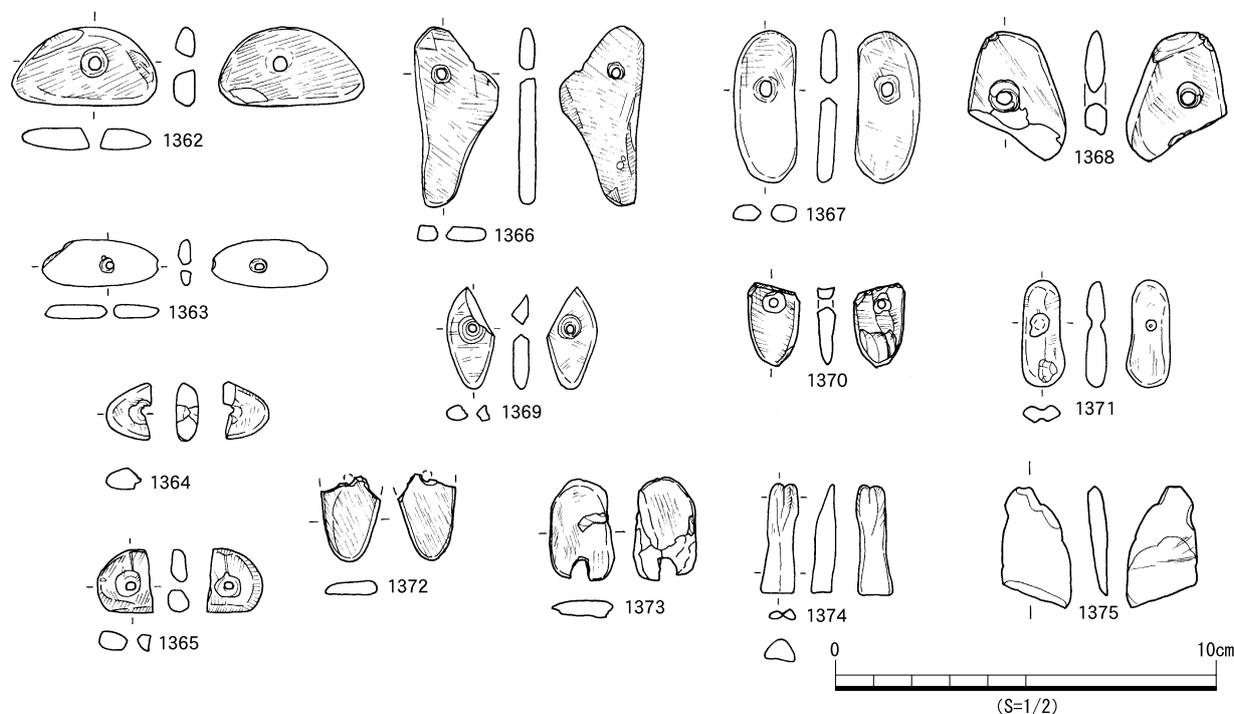
その特徴をあげてみる。

- ①扁平な小円礫を用いる。
- ②表裏両面を研磨している。また、側面を研磨整形したものもある。
- ③回転穿孔しているものと溝もしくは抉りを施しているものがある。
- ④折損品が多い。

①～③の特徴は、石製垂飾として分類した理由にもなっているのであるが、この特徴は何らかの道具として分類するには障碍となるものである。④は穿孔箇所に近い箇所での折損が多いことから穿孔する際の折損であろうと考えられる。

1362～1365は穿孔がほぼ中央にあることから横向きにした。それら以外は穿孔位置が偏っているため縦向きにした。これは、穿孔が紐通しのためのものであろうと考えたからである。

穿孔のあるものは1366を除いて、半円形か長楕円形をしているが、1366だけが不整形である。ただし、側面を研磨によってこのような形状に仕上げているのであり、素材になった礫の形状を生かした結果ではない。このことも垂飾として分類した理由の一つである。1374・1375は穿孔がないものの側面を研磨によってこのような形状に仕上げていることと、紐かけと思われる溝や抉りが施されていることから石製垂飾として分類した。



第184図 縄文時代後期の石器 (26) 石製垂飾

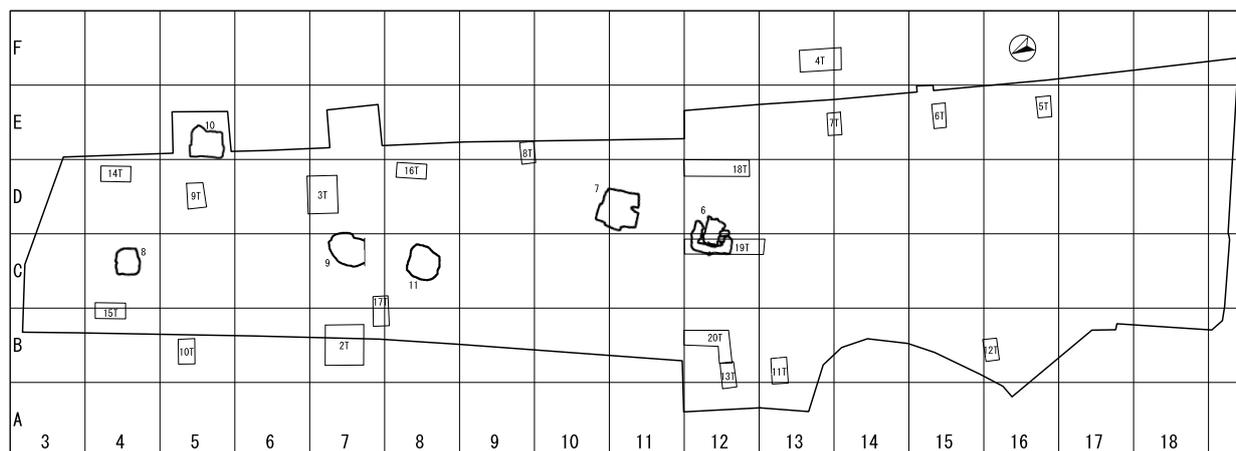
2 弥生時代～古墳時代の調査（第185～203図）

弥生時代末～古墳時代にかけての遺構・遺物が発見されている。特に、5軒発見された竪穴住居跡は、既に報告された堂園遺跡A地点の遺構群との関係など、今後の研究の深化が待たれるところである。発見された遺構と遺物について略述する。

（1）遺構（第185～200図）

竪穴住居跡が、II層から5軒発見された。縄文時代後期の遺構群と同様、耕作等の影響により残存度合いが悪く、床面付近のみを検出できた例がほとんどで、検出レベル自体は、縄文時代後期の遺構群とあまり変わらない。ただ、わずかに残った埋土中の出土遺物の違いと、平面プランや床面の造作の違いなどの情報がかろうじて残っていたため、これらをもとに縄文時代の遺構と区別した。

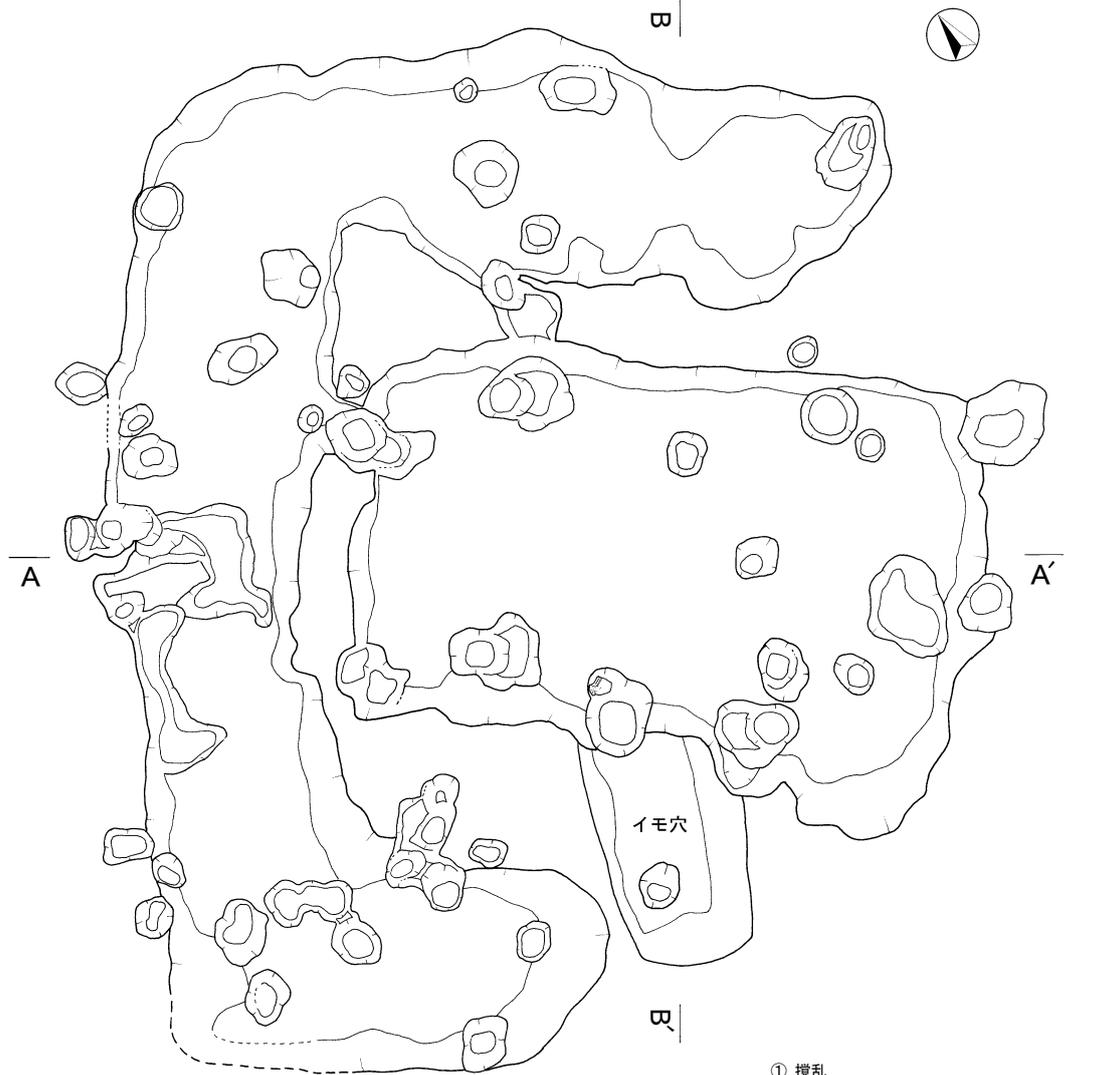
遺物については、竪穴住居跡7からガラス製の小玉が出土していることが注目される。また、縄文時代後期の遺物も混在していたため、住居跡に伴うと判断した弥生～古墳時代相当の遺物の後に紹介している。



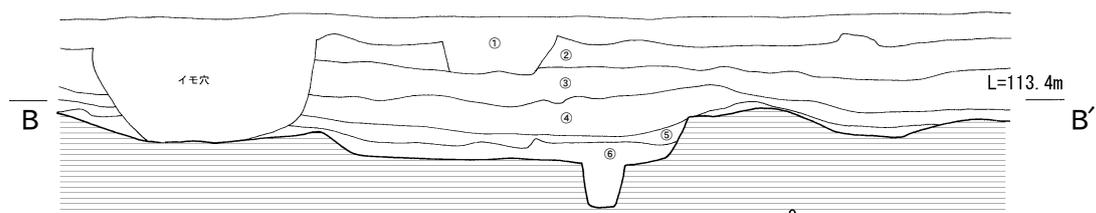
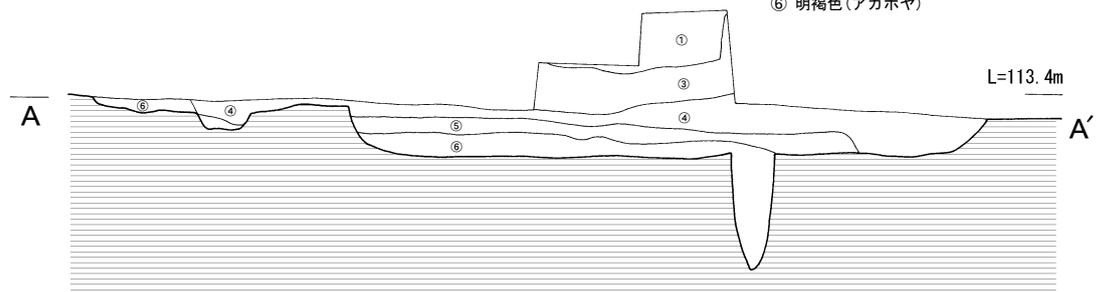
第185図 弥生～古墳時代竪穴住居跡位置図

竪穴住居跡6は、C・D-12区のII層で発見された。遺存状態が悪く、平面プランは、略方形と想定されるものの本来の状態は不明である。発見されたのは、床面と判断している。中央にある略長方形の浅い土坑と、その周囲を「コ」字状に囲むさらに浅い遺構は、住居の構築面と考えられる。床面には、様々な小ピットが発見されており、住居の支柱穴を特定することはできなかった。なお、断面図では表土からの堆積状況（表土：①、IIa・IIb層：③）を記しているが、住居と判断してから後に設定したセクションベルトによるものである。本来の掘り込み面の探索を目的としたものだったが、残念ながら発見できなかった。

埋土は、上面のほとんどが削平されているため詳細は不明だが、床面直上には、それぞれ明褐色、茶褐色、暗茶褐色のブロックがマーブル状に堆積している。その上には、黒褐色シルト質粘質土と灰茶褐色シルト質粘質土を主体とし、黄色パミスのブロックと灰ゴラ様砂質土ブロックを含む層が堆積している。さらにその上には、暗茶褐色シルト質粘質土と黒褐色シルト質粘質土を主体とし、黄色パミスを若干含む層が堆積している。この層から遺物が発



- ① 攪乱
- ② 黒暗茶褐色弱粘質土
- ③ 黒褐色シルト質弱粘質土
- ④ 暗茶褐色～黒褐色シルト質粘質土
- ⑤ 黒褐色～灰茶褐色混在シルト質粘質土
- ⑥ 明褐色(アカホヤ)

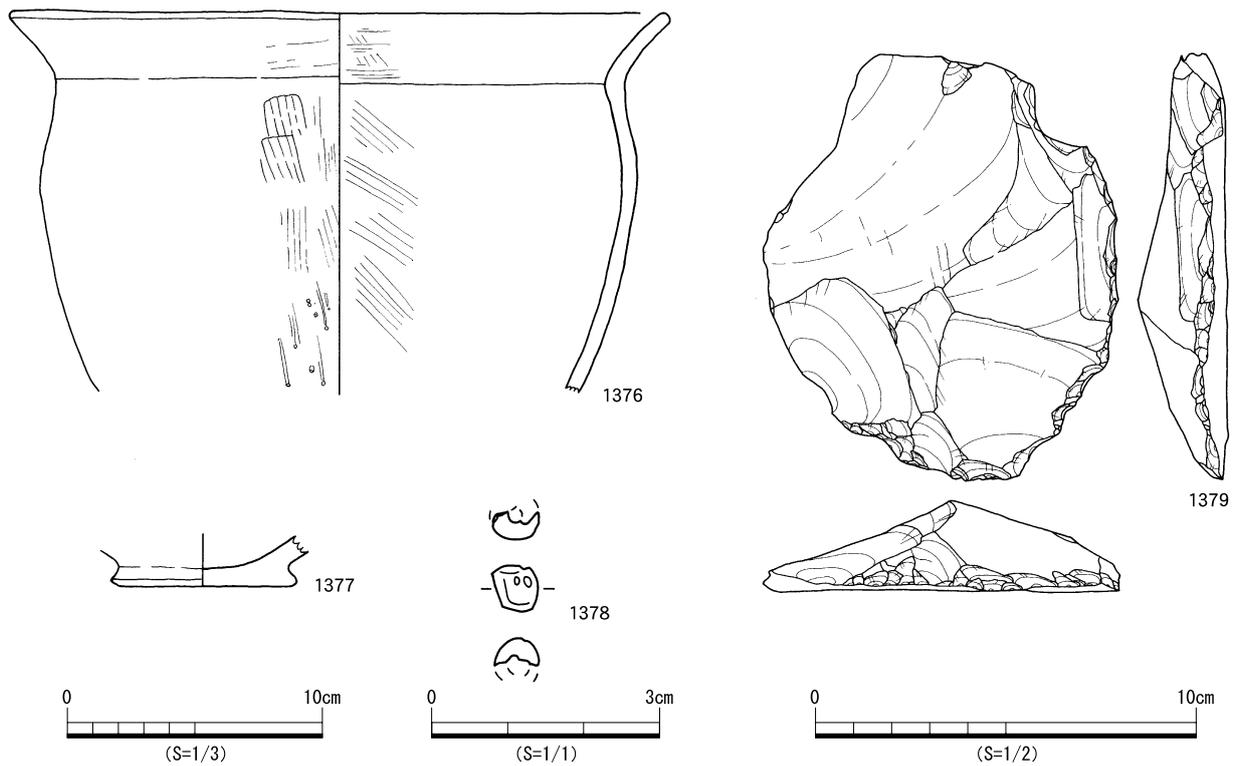


第186図 竪穴住居跡6号

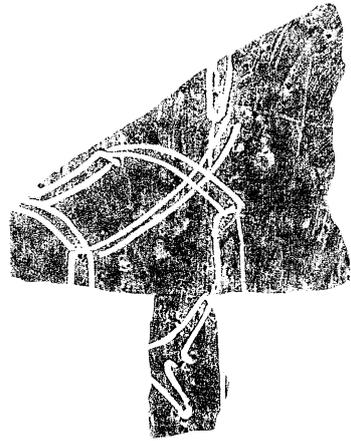
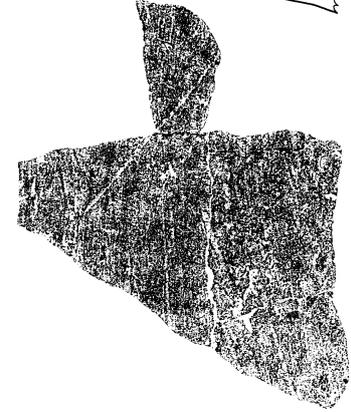
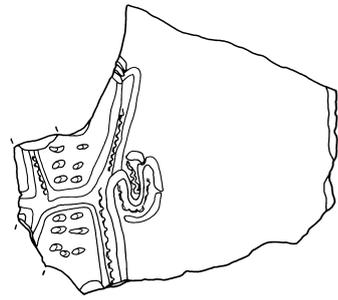
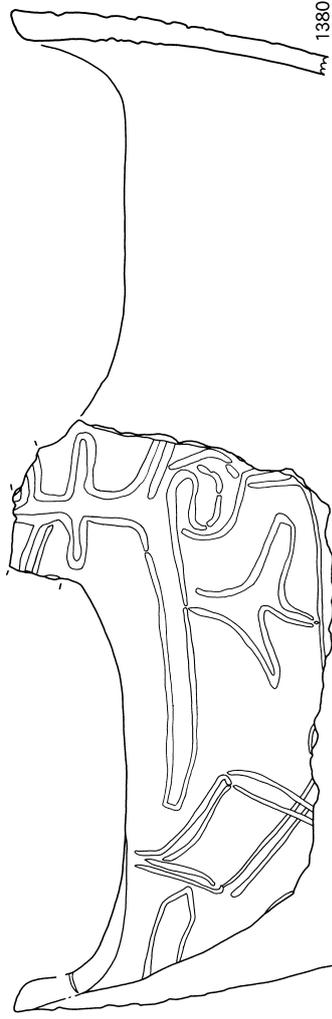
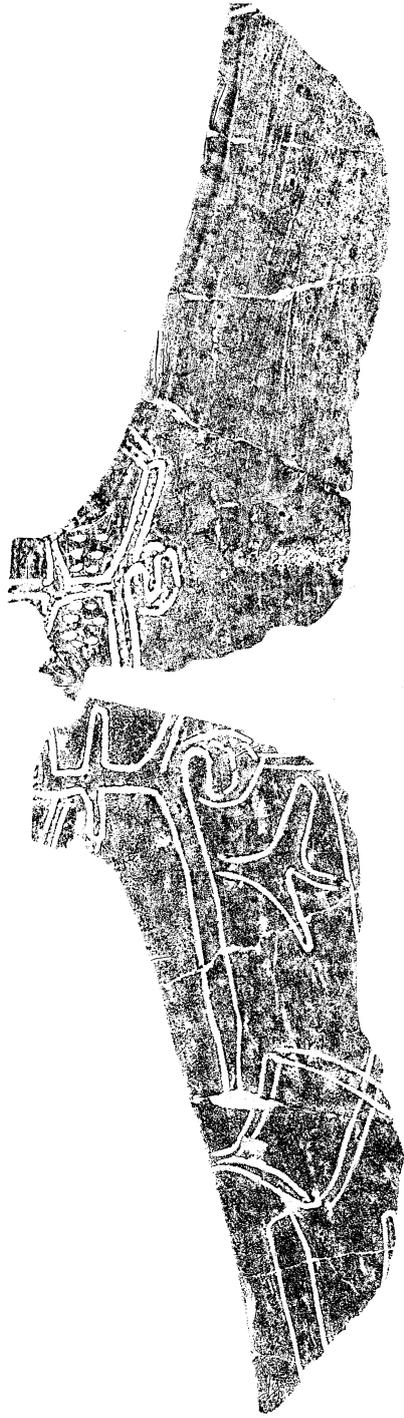
(S=1/40)

見されている。ほぼ床面上の埋土しか確認できなかったため、本住居の埋没状況の想定等はできなかった。

出土遺物は、土器と石器がわずかに出土した。1376は、器形の特徴から、東原式土器前後の甕と考えられる。比較的薄い器壁で、胴部下半の外面は、ケズりに近いナデにより調整されている。1377は、底部資料のため顕著に観察できないものの内外面ともミガキにより調整されていることから、晩期精製浅鉢の底部と考えられる。1380以降は、縄文時代後期の遺物であり、埋土中の混在と判断した。1380と1381は、指宿式土器系統の資料と考えられ、接合しなかったものの、胎土や色調、文様などの特徴から本来は同一個体であった可能性がある。土器の成形、形は丁寧になされている。施文されている幾何学文は、形状がやや粗雑であるけれども、丁寧に仕上げられている。波頂部内面の施文は、外面の文様と類似するが、沈線の隙間を貝殻刺突で充填させており、変化をつけている。1379は、二次加工のある剥片である。石材はホルンフェルスで、転礫から剥離された剥片を利用して、縁辺部に刃部を作出して石器として用いている。

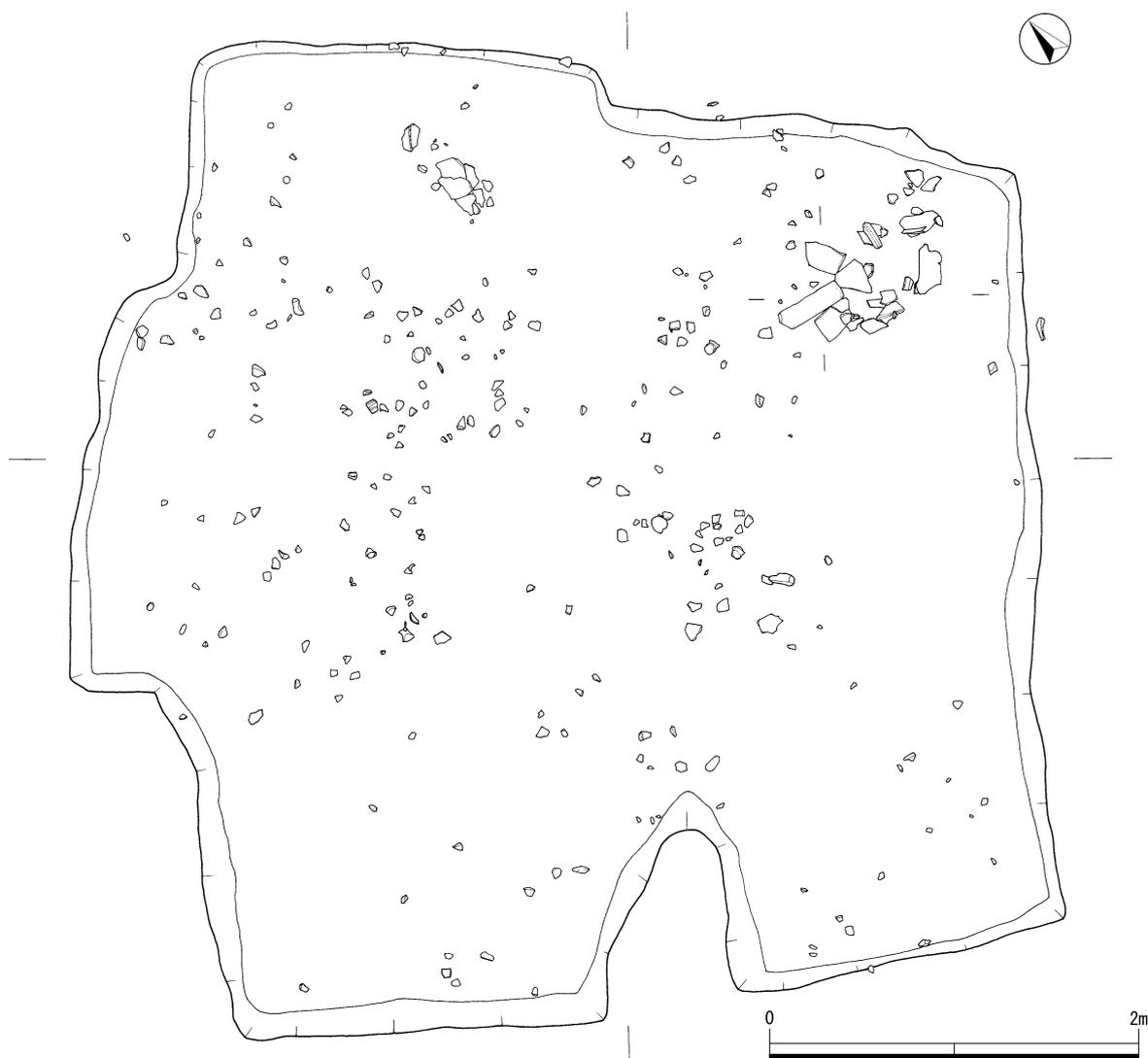


第187図 竪穴住居跡6号出土遺物



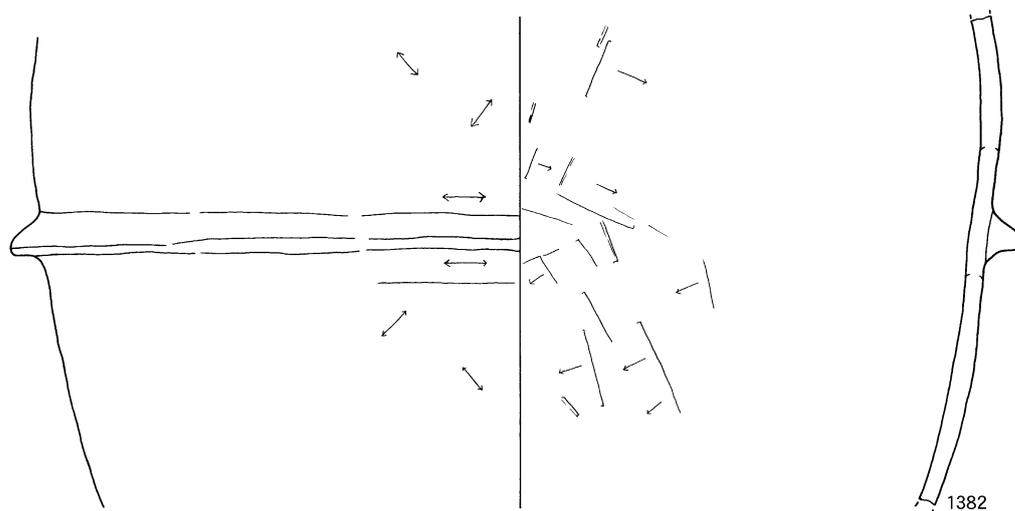
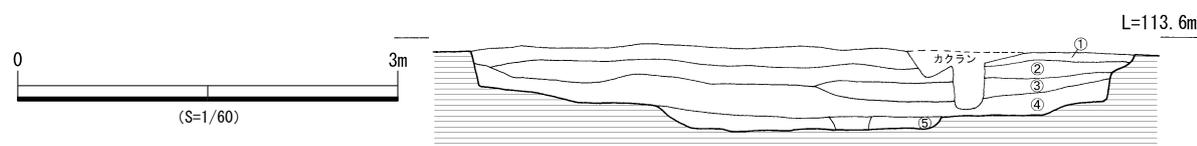
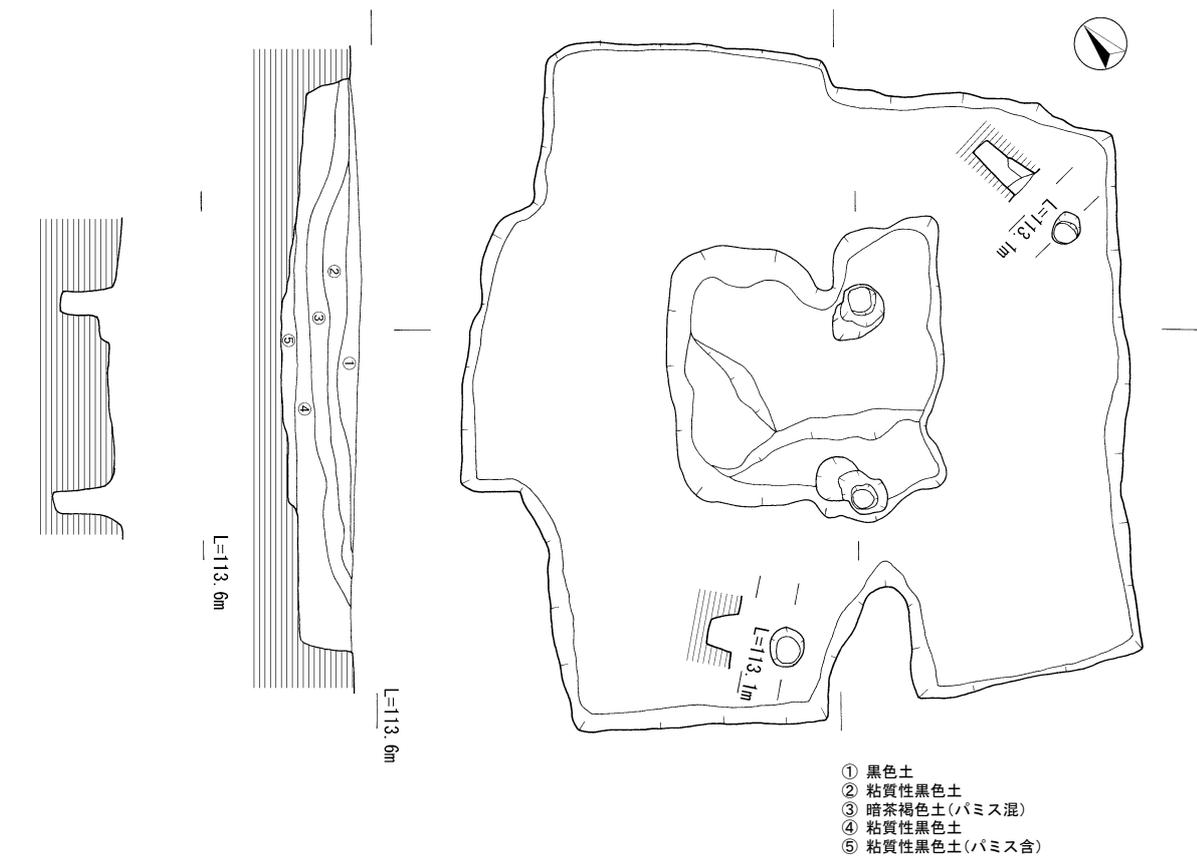
第188图 竖穴住居跡6号出土土器

竪穴住居跡7は、D-10・11区のⅡb層で発見された。検出面からの深さは約70cmあるが、古墳時代の住居であると考えられることから、床面近くだけが残存していると判断し、本来の平面プランの想定は避けた。現状は、中央に平面形状略方形の小土坑があり、床面と想定される平面形状略方形のほぼ平坦な面が構築され、壁面がほぼ垂直に立ち上がっている状態である。ただし壁面は、北東面を除いて出入のある立体的な構造となっている。ピットは、中央の小土坑内にほぼ同じ深さのものが2基発見されているほか、床面と想定している平坦面の北端と南東隅からそれぞれ1基ずつ発見されている。前者の2基については、発見された位置や形状から本住居の柱穴と考えることができるが、後2基のピットについては、住居との関連性を想起しにくい。埋土は、あわせて5つの層に分層されており、北東-南西方向にはほぼ水平に、北西-南東方向にはレンズ状に堆積している傾向がみられる。小土坑内にはⅡ層に類似する黒色土にオレンジ色のパミスが混在する層(⑤)が堆積し、同じ土質ながらパミスを含まない層(④)が、平坦面全面にわたって堆積している。その上層にはⅠb層に類似する層(③)が堆積するが、住居南西部分には堆積が及んでいないようである。その上には粘性が若干異なる黒色土(①, ②)が堆積する。



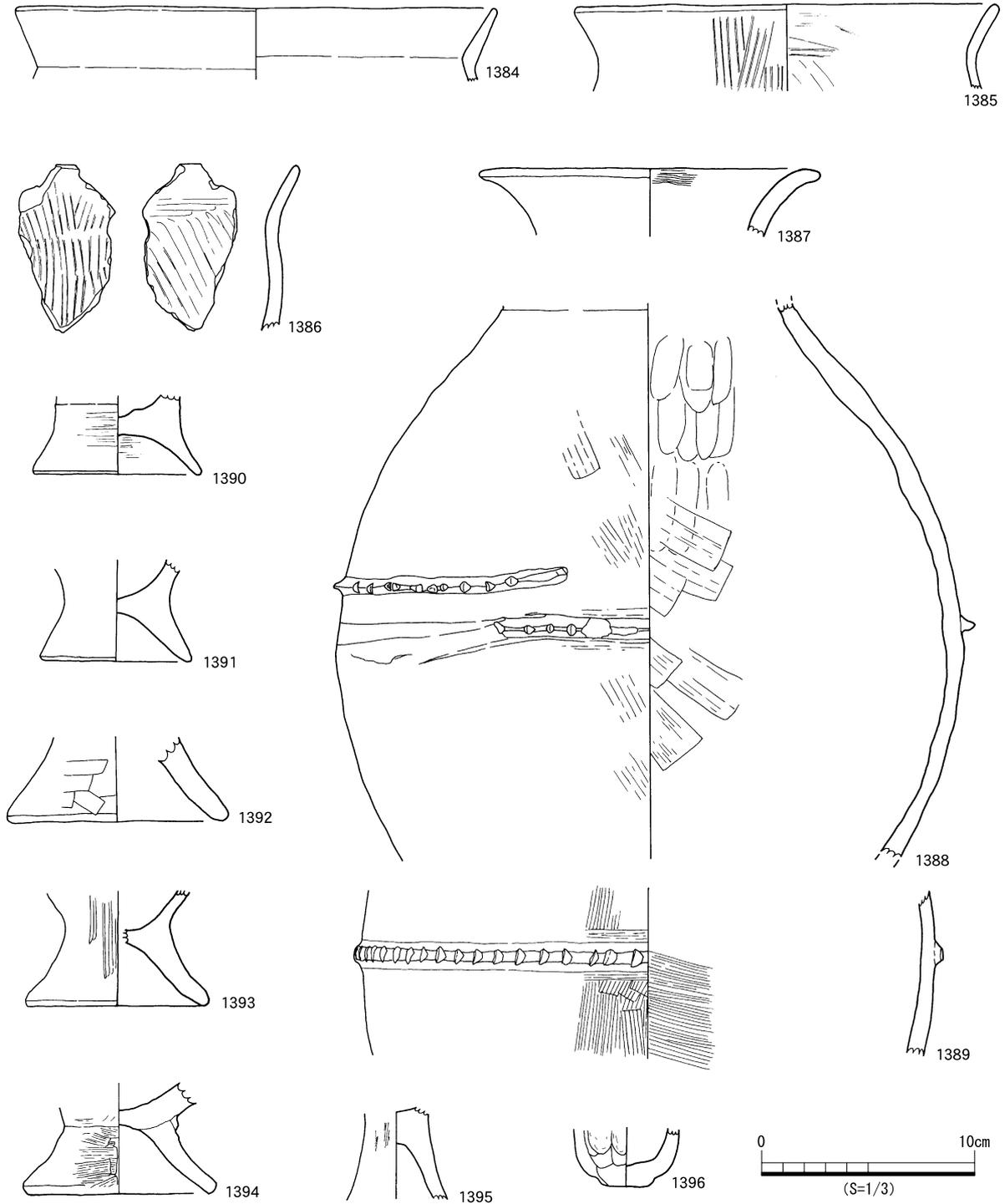
第189図 竪穴住居跡7号出土状況図

(S=1/40)



第190図 竪穴住居跡7号完掘後及び出土土器(1)

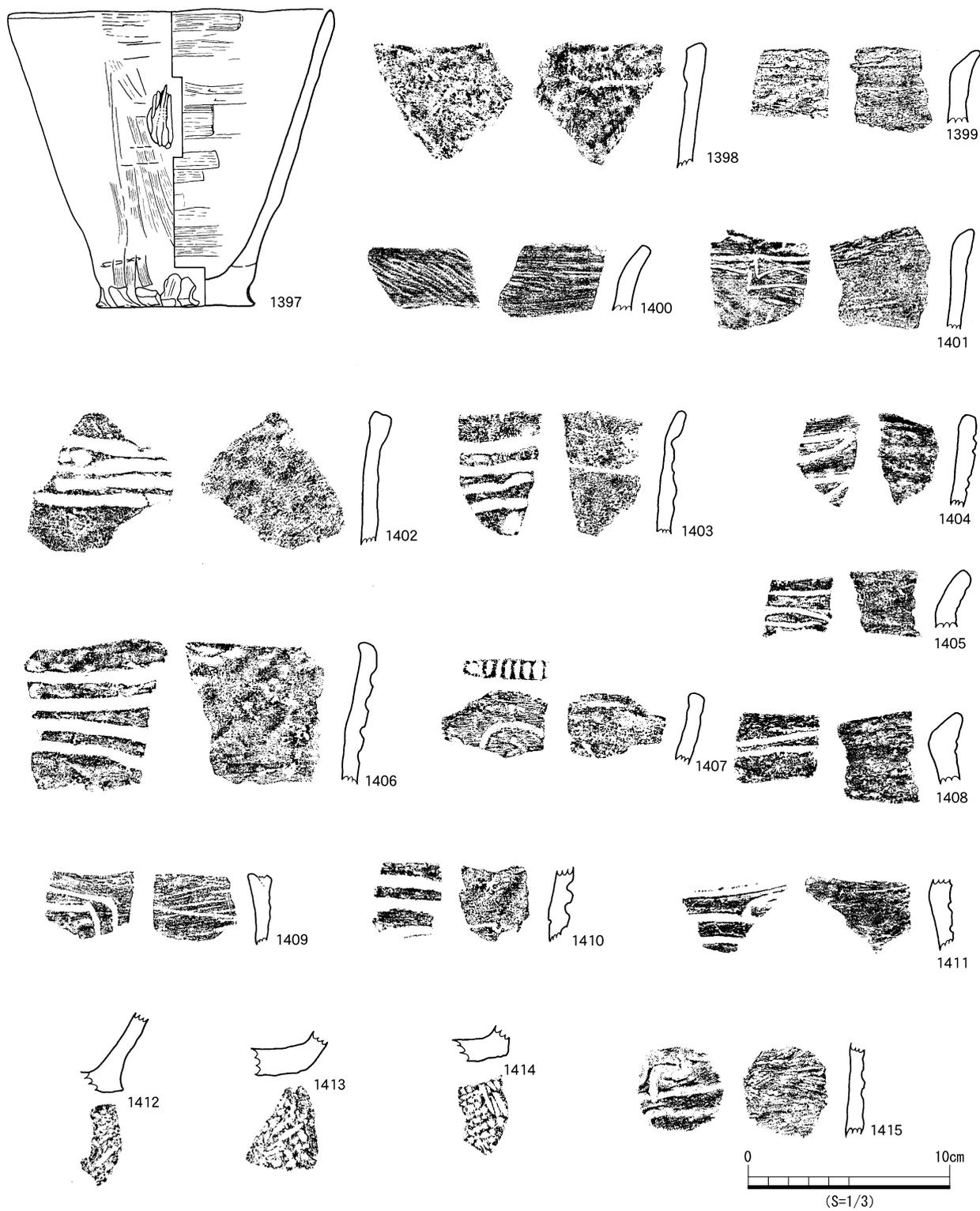
遺物は、成川式土器とそれらに伴うと考えられる磨製石鎌、ガラス製の小玉、砥石、及び縄文後期の土器とそれらに伴うと考えられる磨製石斧が出土した。1382は、鋤状突帯付大甕と思われる大形の甕の胴部で、遺構内北端の埋土中から出土した。典型的な資料と比較した場合、突帯はやや小振りであることと胴部についているということが若干違和感を覚える部分ではある。1387は、壺の口縁部と考えられる。特徴的なのは口縁部形状で、口唇部内面に明確な稜を形成させ、端部に向けてやや下降する平坦面を作り出している。丁寧な器面調整がなされて



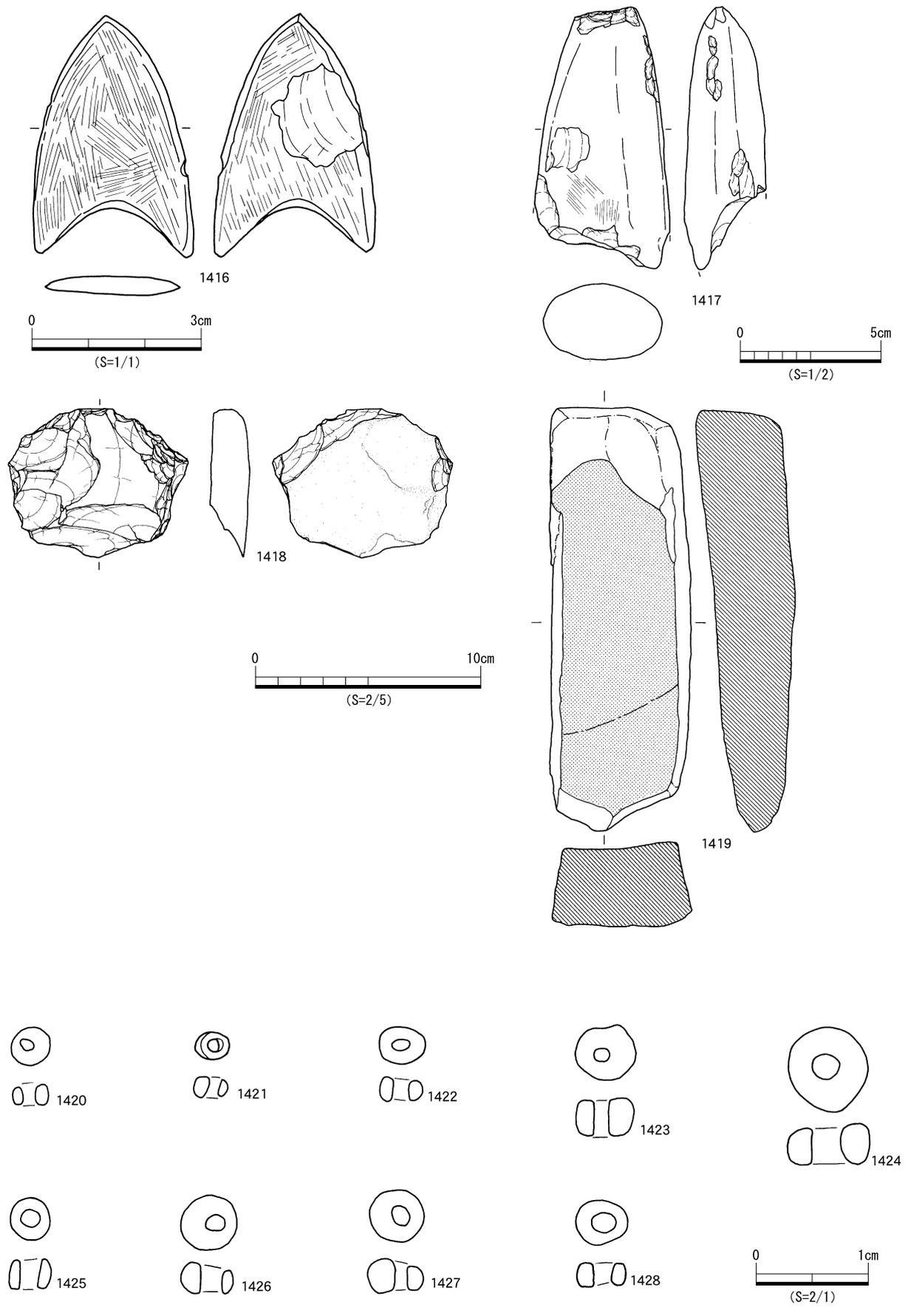
第191図 竪穴住居跡7号出土土器(2)

いる。

1388は壺で、口縁部と底部を除く部分の縦半分の部位が残存していた。器面調整は丁寧で、外面に規則的なハケメの痕跡は観察されない。刻目突帯は、胴部最大径よりやや上部に施され、端部を意図的に上下にずらして完結させている。刻目は、薄い板状の工具を用いて、突帯の頂部を右方向に削り取るようにして施文しているように見える。1396は、手づくね土器である。小形の碗状の器形となるか、ひしゃく状土製品の一部となるか、判断しがたい。底部分の内面には平坦面を作り出しているが、外面はそれに対応した形状となっていない。1395は、高坏の脚部と思われる資料であるが、割れ面がやや擦れていることが観察できることから、何らかの器具（の一部）として再利用された可能性がある。1390～1394は、甕の脚部と考えられる資料である。いずれも、脚の高さの割に比較的大きく開く形状をしている。1391と1393は、脚部資料のなかでは丁寧な成形・整形である。1416は、磨製石鏃である。石材は頁岩で、完成品である。裏面の側辺にみられる剥離の原因は不明であるが、製作時のものではない。1419は、砥石である。埋土中から、鏢状突帯付大甕と近接して発見された。本来はまだ大きな板状の砥石であった可能性もあるが、現状の方柱の状態で使用されている。主な使用面は、実測図で網掛けした部分で、全体がレンズ状にごく浅く凹むほか、中央部が長軸方向にさらに細長くわずかに凹む。使用面は、部分的に光沢を帯びる。1420から1428は、ガラス製の小玉である。埋土中に散在して発見されていることから、住居との関連性について慎重に検討する必要がある。1397からは、埋土中に混在する縄文土器等について説明する。1397は、無文の小形深鉢である。平底の底部から、口縁部まで直線的に広がる単純な器形であるが、底部外端には張り出し部をひねりだしている。このほか、胴部中位に1か所、棒状工具によるミガキ状の細工がなされている部分がある。完全品でないため確認ができず、偶然の所産である可能性も十分考えられるが、器面調整具とは痕跡が異なるため、紹介した。なお、底部の張り出しもこの部分に対応した部分のみ、ひねり方が異なっている。1398は、無文部の資料である。1400は、胎土の混和材が目立たない資料である。口縁部には、板状の工具で相交弧文様の文様を施文している。1402・1404・1407・1410の4点は、凹線文系土器の範疇に含まれると考えられる資料である。1402は口縁部資料で、端部には粘土紐貼付文などの装飾が付けられていた可能性がある。1401・1404・1405・1407・1408・1411・1415（7点）は、指宿式土器の範疇に含まれると考えられる資料である。1408は、これら7点の中では厚手の口縁部資料で、波頂部付近である。口唇部を肥厚させ、内面に稜を形成させている。1412～1414は、底部資料で、設置面には組織痕が観察できる。1413は、底部外端が丸く成形されているのが特徴である。1415は、土器片加工品である。割れ面は、全体的に磨られている。1417は、磨製石斧の破損品である。素材は頁岩で、全面が研磨されている。再利用の痕跡はないようである。



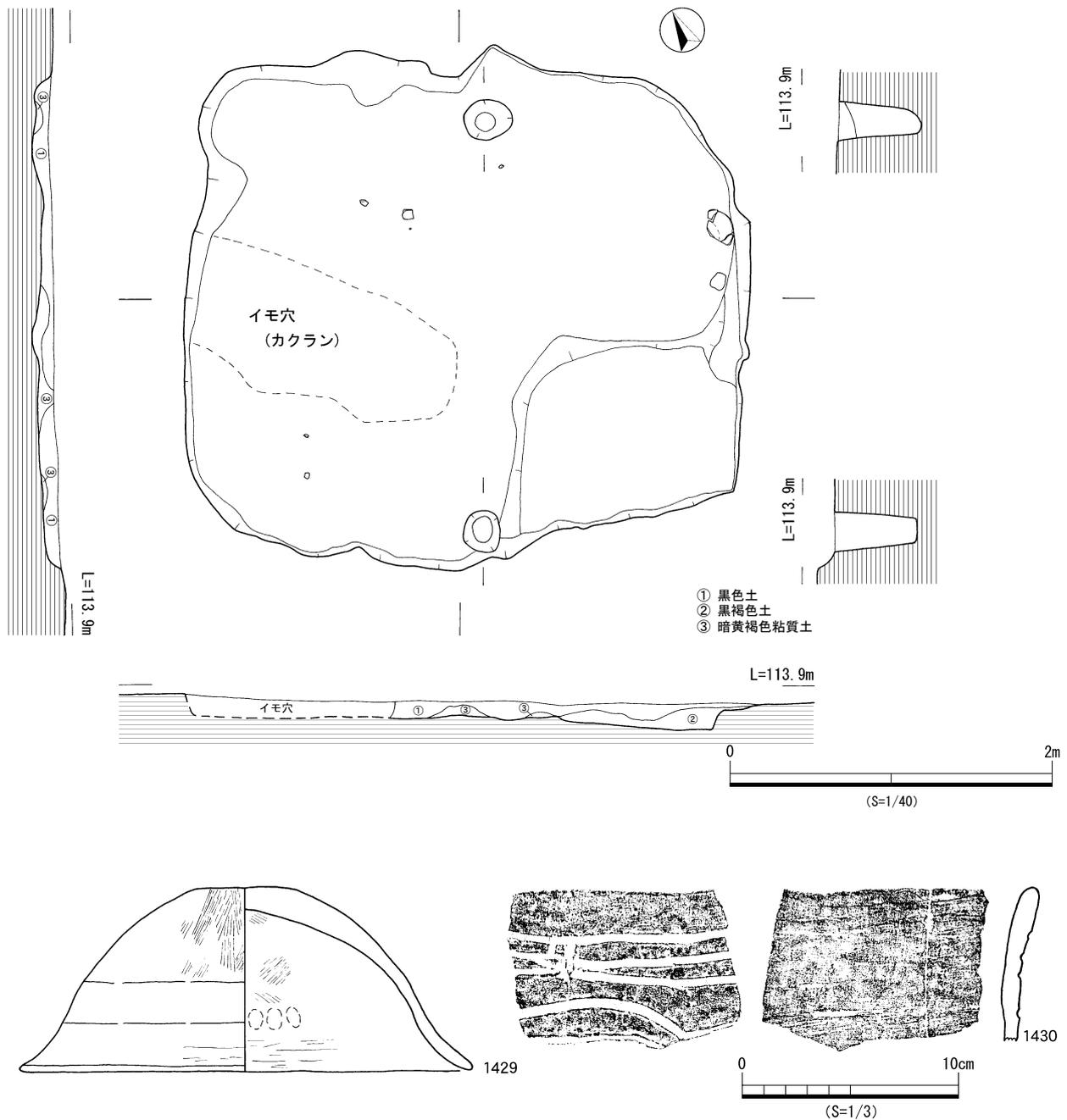
第192图 竖穴住居跡7号出土土器(3)



第193图 竖穴住居跡7号出土遺物

竪穴住居跡8は、C-4区で発見された。床面造作部の最深部のみ残っている可能性が高い。南東隅に、ごくわずかながら一段高い部分が設けられている。壁面にはわずかな出入が観察されるが、住居の構造と関連するものかは不明である。また、南北の壁面近くに、1基ずつ柱穴と思われるピットが確認されている。残っている埋土は、黒褐色土層と暗黄褐色粘質土層が床面直上に不整合に堆積し、その上に黒色土が堆積している状況である。埋没状況の想定は困難である。

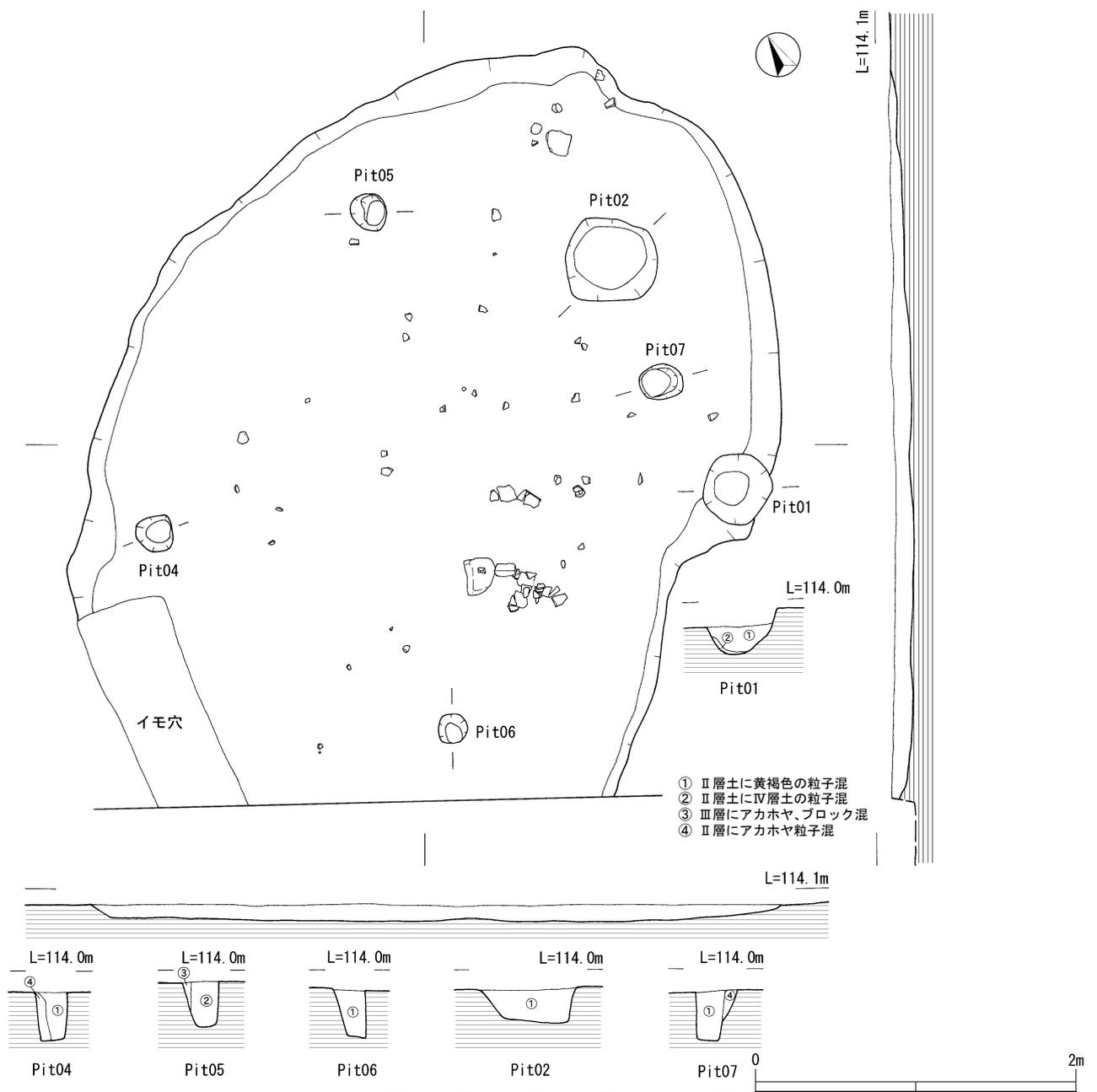
遺物は、凶化した2点が発見された。1429は、成川式土器の蓋である。東壁付近の床面から出土した。胴部はやや張り、頂部には小さな平坦面が形成され、つまみ等は作られない。1430は、縄文後期の指宿式土器の範疇に含まれると考えられる資料である。



第194図 竪穴住居跡8号出土状況及び出土土器

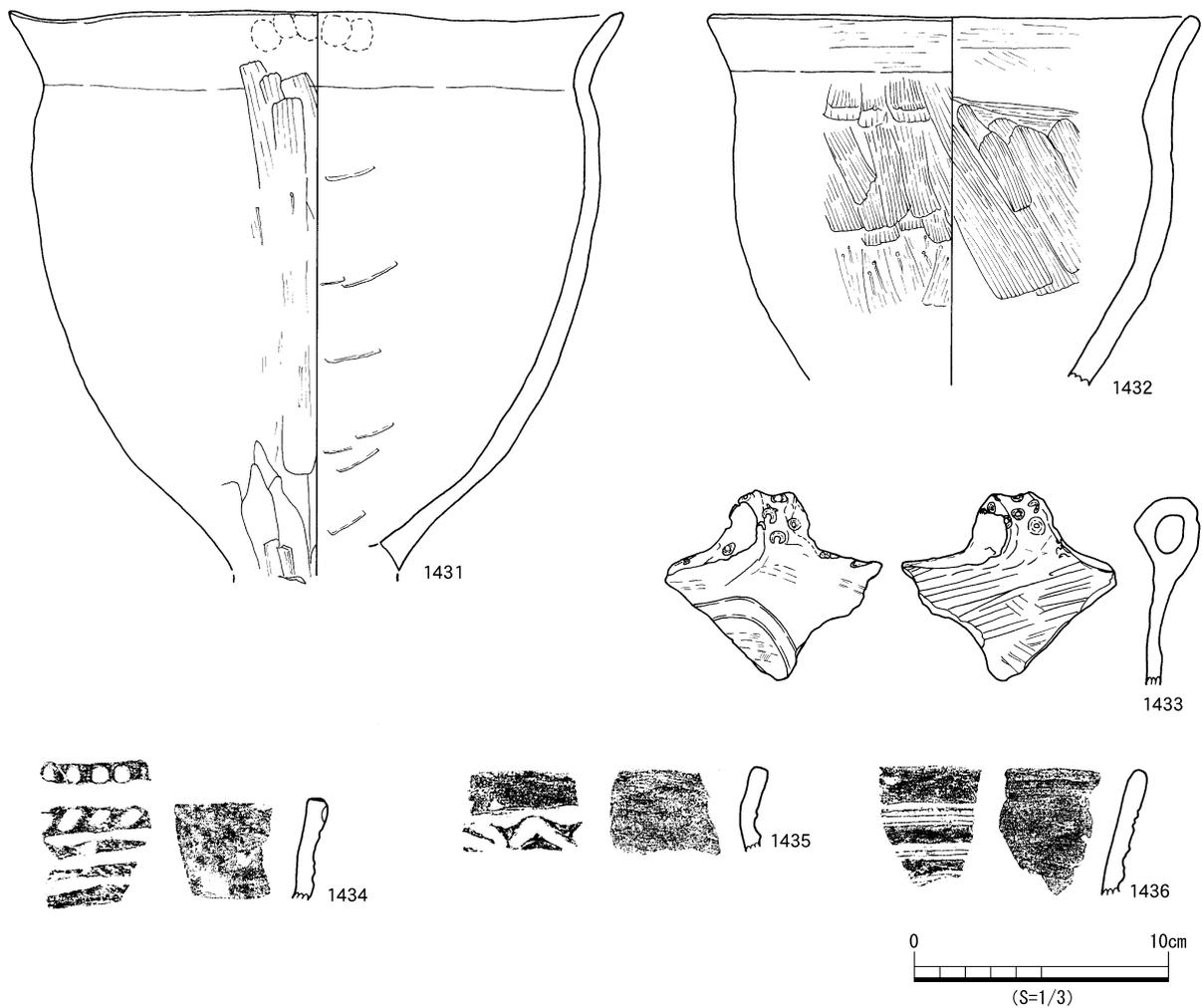
竪穴住居跡9は、C-7区から発見された。この住居跡も、床面最深部のみ残っている可能性が高いが、平面形状が楕円形を呈しており、特異である。ピットは、平面形状と整合するかのように、略円形に5基発見されているが、形状や深さは揃っていない。

遺物は、成川式土器の甕と縄文後期の凹線文系土器や指宿式土器の範疇に含まれると考えられる資料が出土している。1431は、略アーモンド形の器形で、どちらかといえば長胴型といえる器形である。調整の効果にもよるかも知れないが、底部から脚部にかけての部分は、器形全体の割合からみてやや細く作られている。器面調整は、底部近くではケズリであるが顕著ではなく、底部付近以外は、軽いハケメによる調整が胴部から頸部まで一動作でなされている。内面調整は、外面よりも丁寧に仕上げられているが、頸部内面の屈曲は、調整の結果をそのまま残しており、整形していない。1432にも、胴部外面下半にケズリ調整を

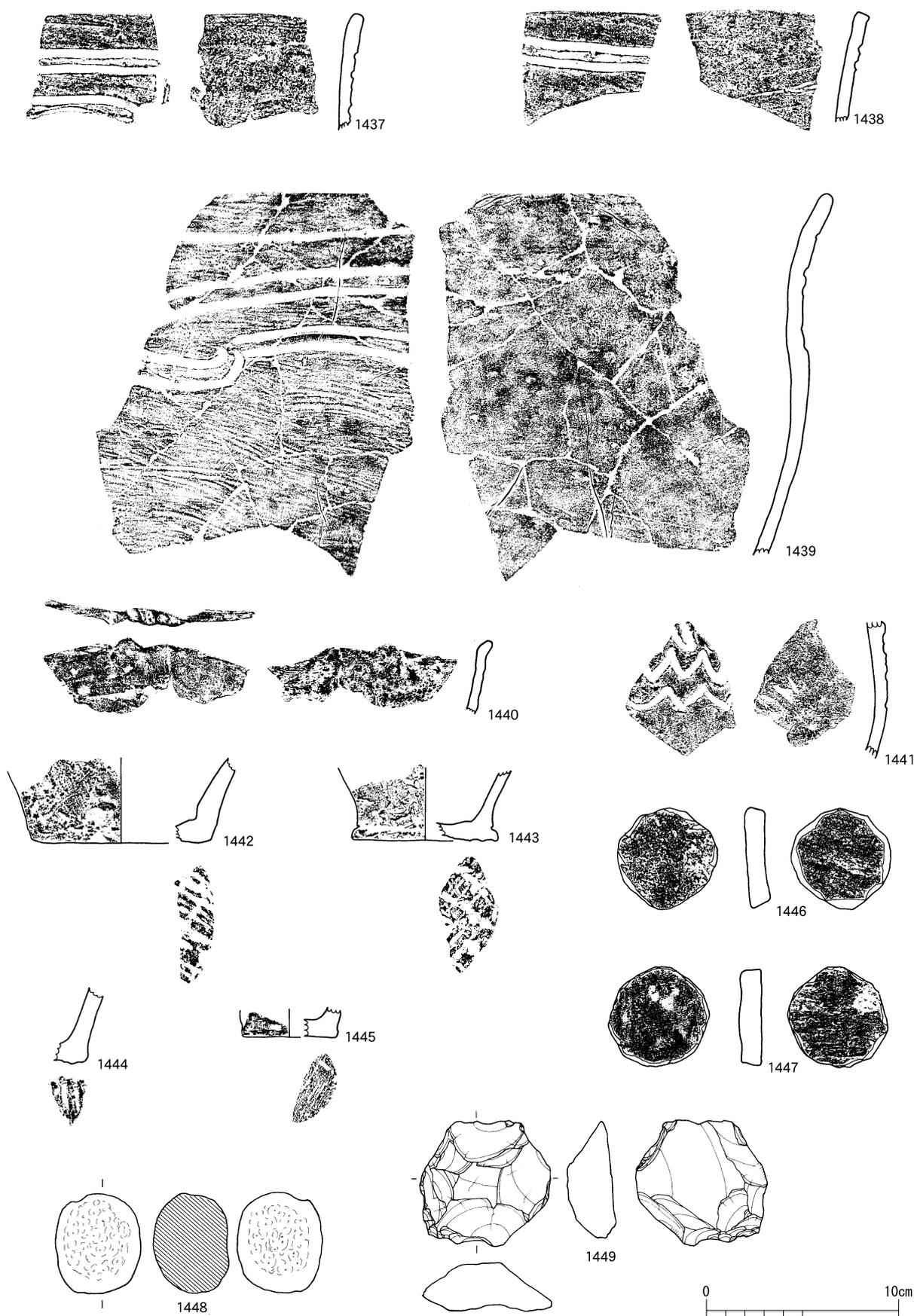


第195図 竪穴住居跡9号出土状況図

観察できる。頸部の屈曲は、稜を形成せず緩やかに仕上げられている。やや厚手の資料である。1433以降は、縄文後期の資料である。1433は、口縁部に環状装飾が施された資料である。環状装飾には、竹管文状の文様が施されていて、口縁端部にも拡張しているようである。1434～1438は、凹線文土器の範疇に含まれると考えられる資料である。1439・1441は、指宿式土器の範疇に含まれると考えられる資料である。1439は、かなり口径の大きい資料である。口径の割には薄手の資料で、口縁部周辺での器壁の厚さに変化はもたせず、口縁部を外反させている。文様は比較的単純だが、口縁部直下の沈線のみ、他の沈線の工具と異なる工具で施文している可能性がある。1440は、口縁部に「M」字状に粘土紐を貼り付けた資料と考えられるが、成形がやや雑なうえ小片のため確証がない。1442～1445の4点は、底部資料である。1446・1447は、土器片加工品で、前者は、割れ面全周に磨り整形が観察される。一方、後者には磨り整形を観察できない。ただし、摩耗によると思われる破片端部の鈍化は観察される。1448は、砂岩製の小形の敲石で、表裏二面に敲打痕が観察される。1449は、石核もしくは楔形石器と考えられる。頁岩製である。



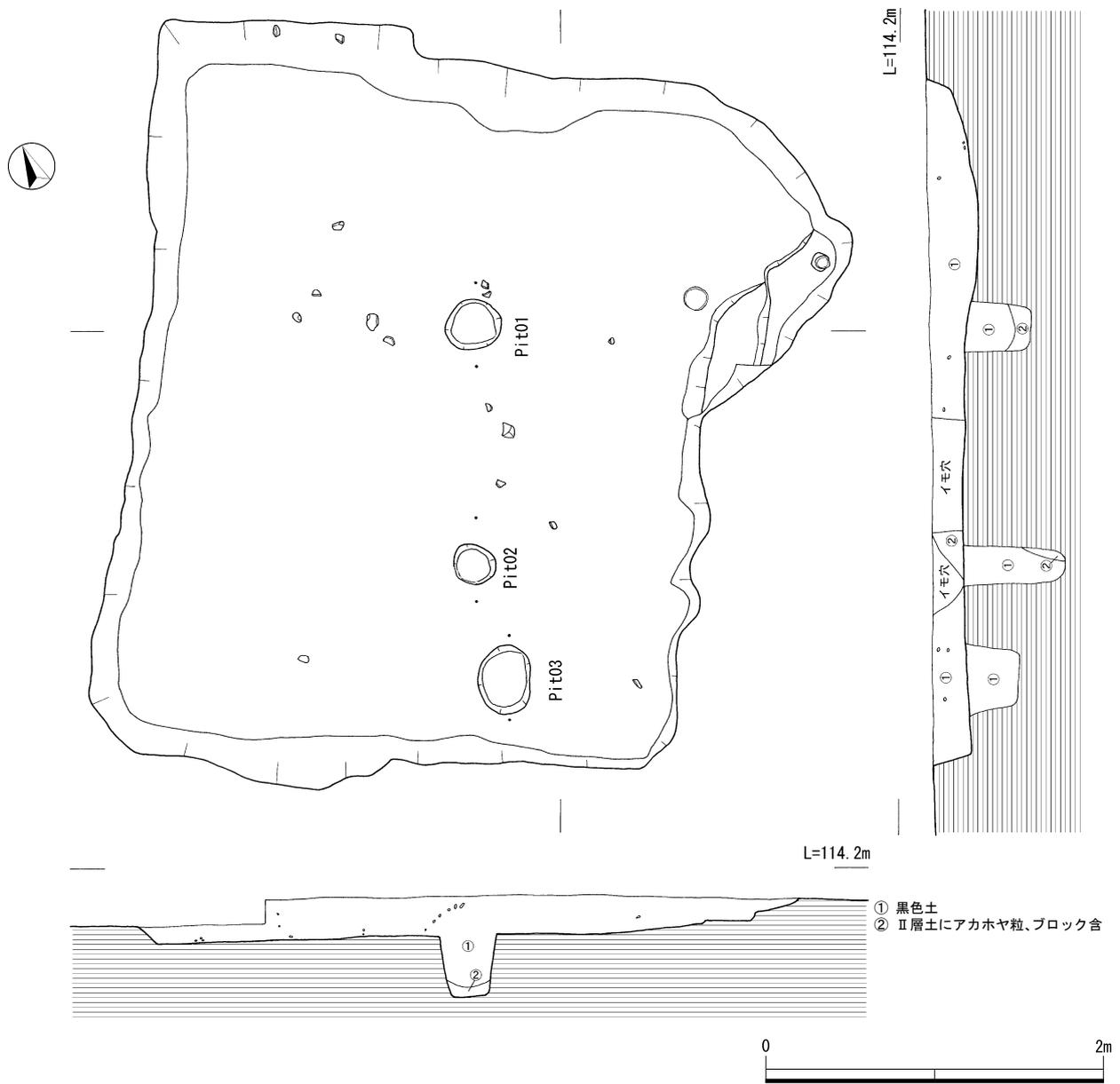
第196図 竪穴住居跡9号出土土器



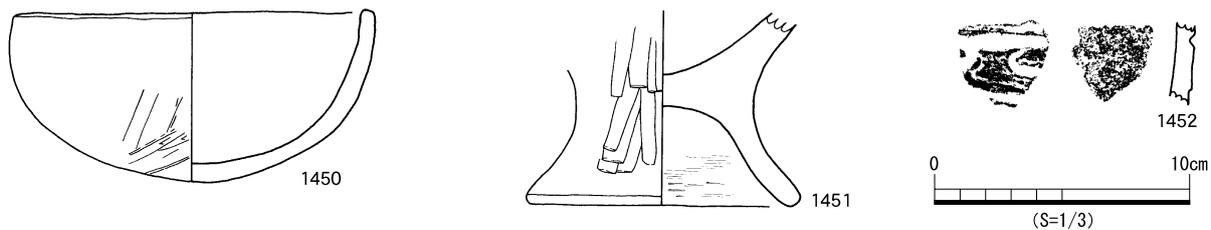
第197图 竖穴住居跡9号出土遺物

竪穴住居跡10は、E-5区から発見された。残存状況は比較的よいが、やはり床面最深部のみ残っていると考えられる。東壁には階段状の造作が確認される。他の壁面は、出入がなくほぼ垂直に立ち上がっている。ピットは、3基が南北方向に並ぶが、床面中央付近に位置する2基が、柱穴としては想定しやすい。埋土は黒色土I層である。

遺物は、成川式土器の甕の脚部と碗、縄文後期の土器片が出土した。1450の碗は、上面観が不正円形を呈し、口唇を断面略方形に仕上げているのが特徴である。内面調整は丁寧に施されているが、外面はナデの痕跡が散見される程度である。口縁部から2/3ほど底部に下ったあたりの外面に煤が付着しているほか、被熱の痕跡も観察される。1451は、甕の脚部である。高さに比して径が大きく、安定感のある造形である。南さつま市金峰町の農業開発総合センター遺跡群で出土した笹貫式段階の甕の脚部を想起させる資料である。

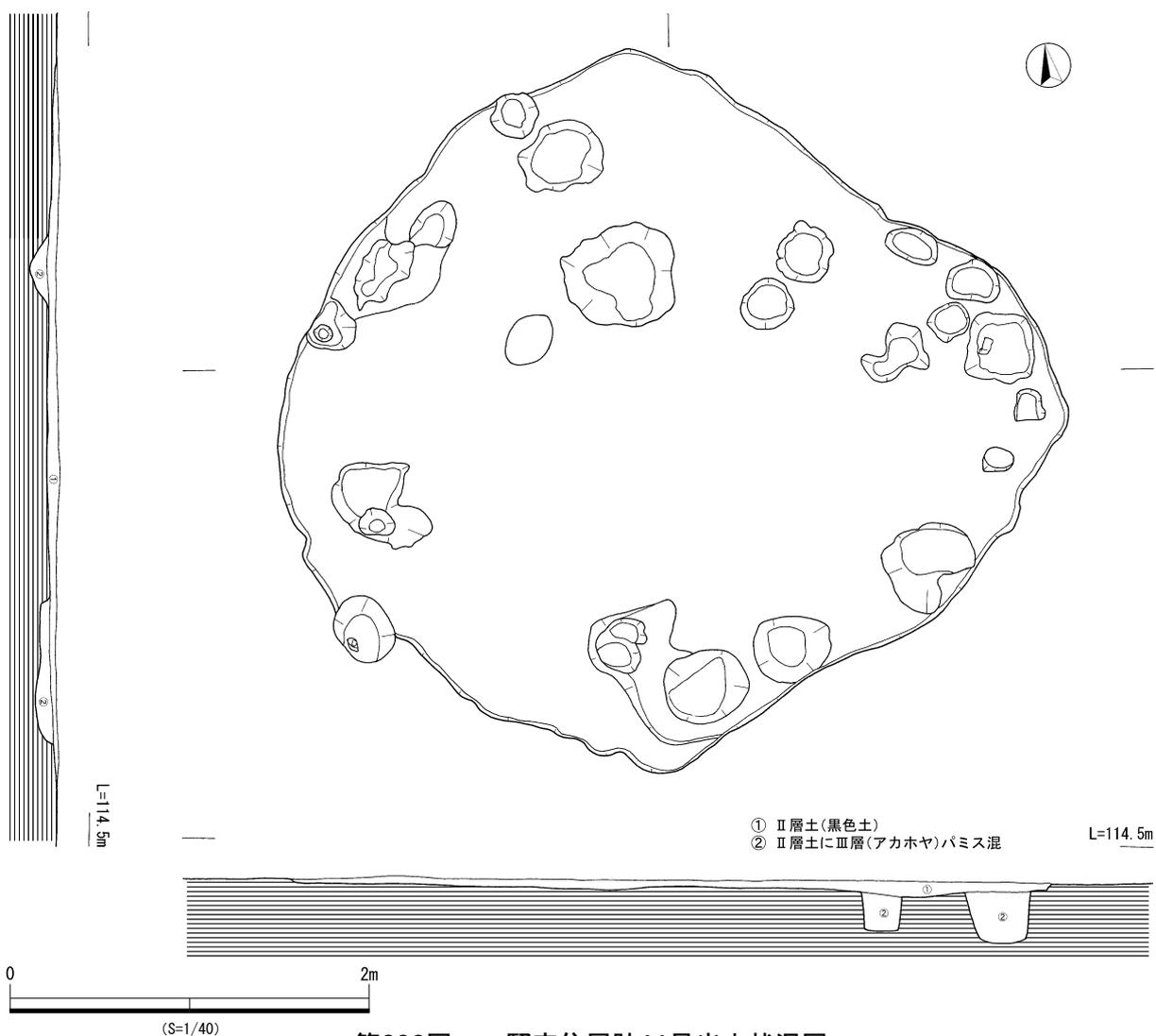


第198図 竪穴住居跡10号出土状況図

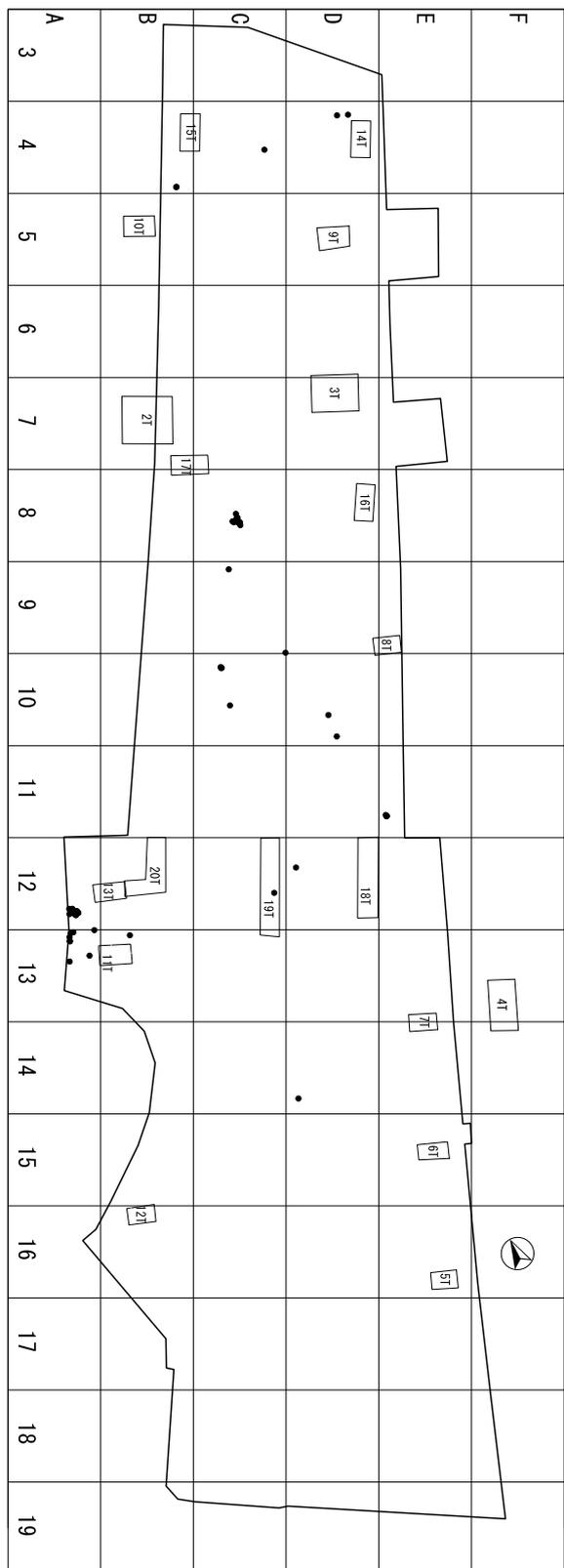


第199図 竪穴住居跡10号出土土器

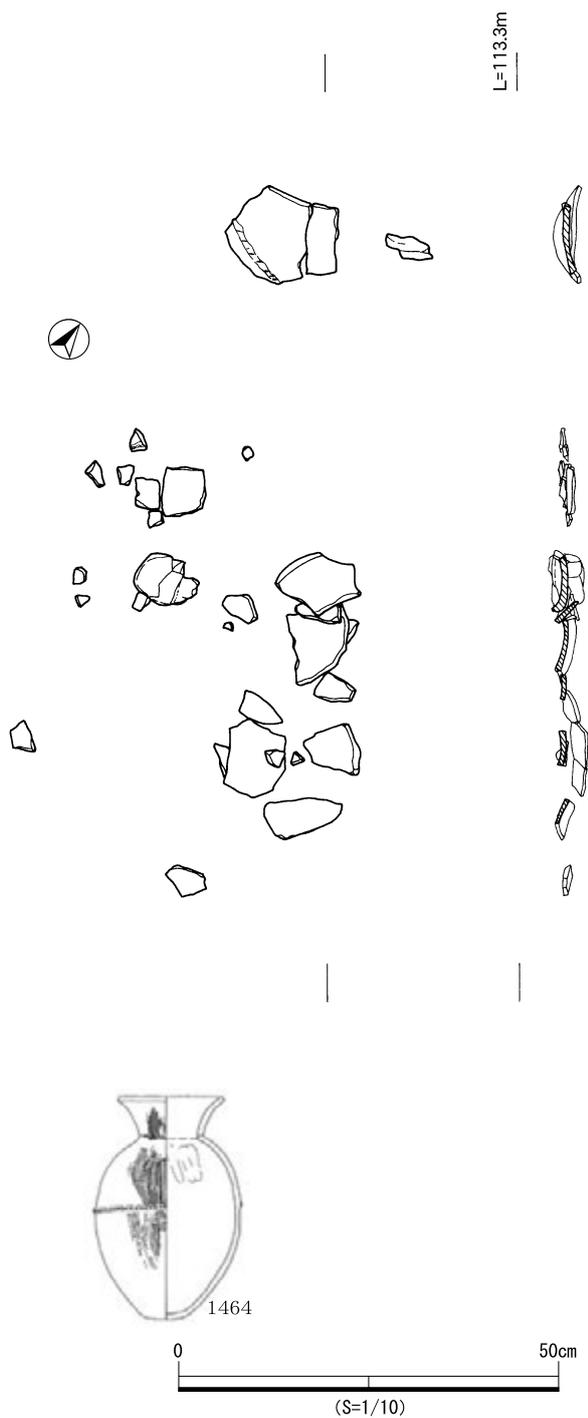
竪穴住居跡11は、C-8区で発見された。残存状況はよくない。ピットが、床面立ち上がり付近に認められるが、住居跡に伴う柱穴と特定できそうなものは解明できなかった。埋土は、黒色土がかろうじて確認された。遺物は、成川式土器の胴部小片などがごくわずかに発見されたのみである。



第200図 竪穴住居跡11号出土状況図



この他、A-12区から、Ⅲ層上面で中津野式土器期の壺が、径50cm程度の範囲にまとまって出土した。掘り込み等は特に発見されていない。



第201図 弥生～古代出土遺物分布図及び土器集中か所出土状況図

(2) 遺物 (第202・203図)

弥生～古墳時代の包含層からは、甕、壺などが発見されたが、住居跡等が発見された割には数は少なく、また胴部資料がほとんどで、図化できた資料は多くなかった。包含層の削平による影響が想定される。

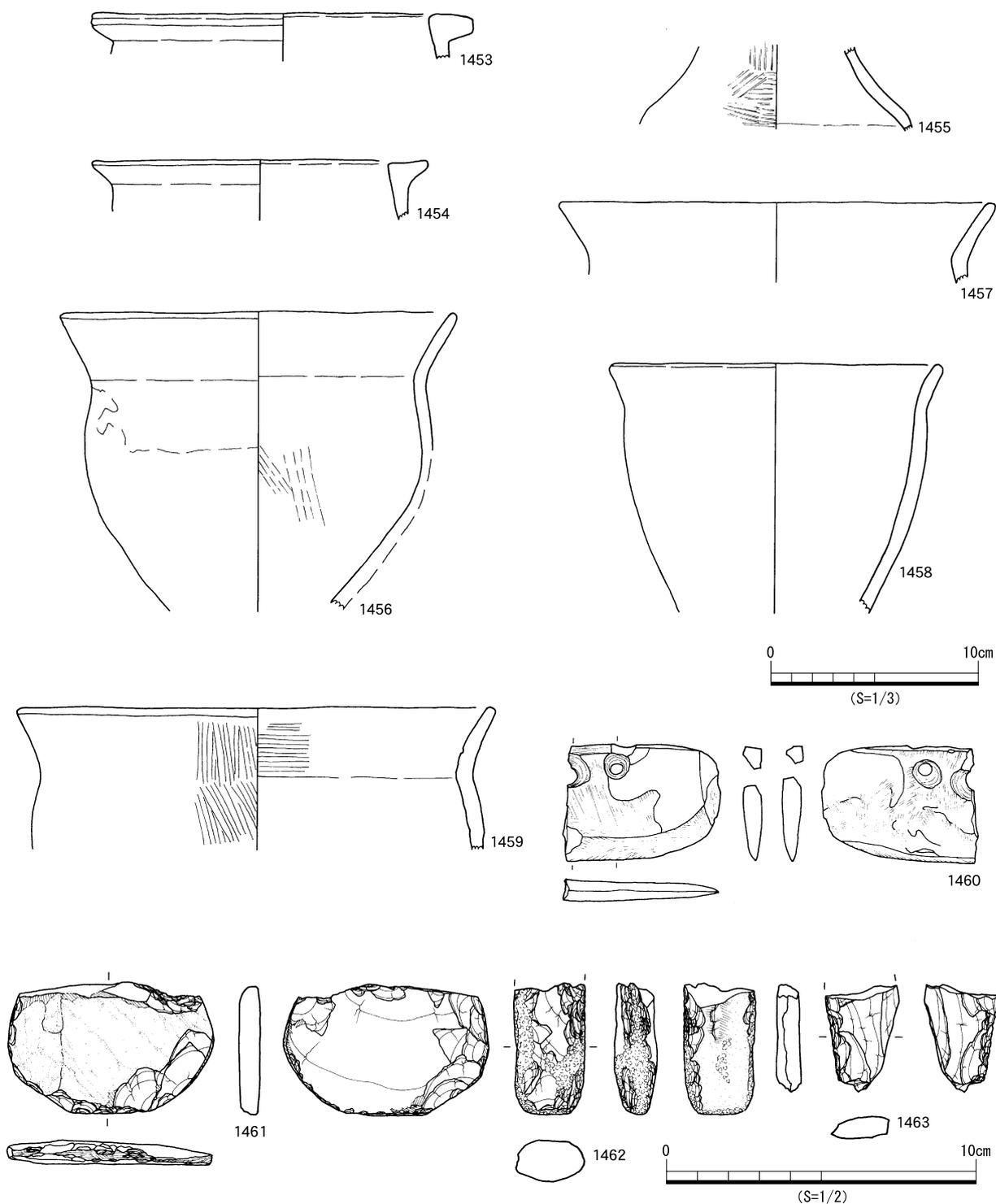
1453は、弥生中期前半頃に比定される入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。口縁部は、やや下がる端部に沈線状のごく浅い凹線が1条巡る。復元口径は約18.4cmである。1454は、弥生中期前半に比定される黒髪式土器の甕と考えられる。口縁部は、わずかにしゃくれる平坦面を形成するが長さは短く、内面の屈曲部は、鋭角であるが特に張り出してはいない。焼成・胎土・色調等が、鳴野原遺跡A地点で発見された同時期の他資料と明確に異なっている。復元口径約15.4cmである。1455は、弥生中期に比定される須久式土器系統の壺と考えられる。この資料も、胎土や色調等の特徴が鳴野原遺跡A地点で発見された同時期の他資料と明確に異なっている。

1456以降は、弥生終末～古墳時代にかけての時期に帰属すると判断した資料である。1456は、中津野式～東原式土器期の甕と考えられる。復元口径は約19.0cmである。特に外面の剥落が著しいため、詳細な観察が不可能である。1457は、頸部内面の稜線がやや明瞭であるが、1456とほぼ同時期の甕の口縁部である。復元口径約21.0cm。1459は、内外面ともに丁寧にハケメの痕跡を残す資料である。頸部内面には、明確な稜は形成されていない。復元口径は約21.4cmである。1458は、小形の甕であるが、外面には煤が付着している。適切な図化ができなかったが、胴部上半から頸部にかけて、棒状工具により施されている器面調整が特徴的な資料である。復元口径は、約16.0cmである。

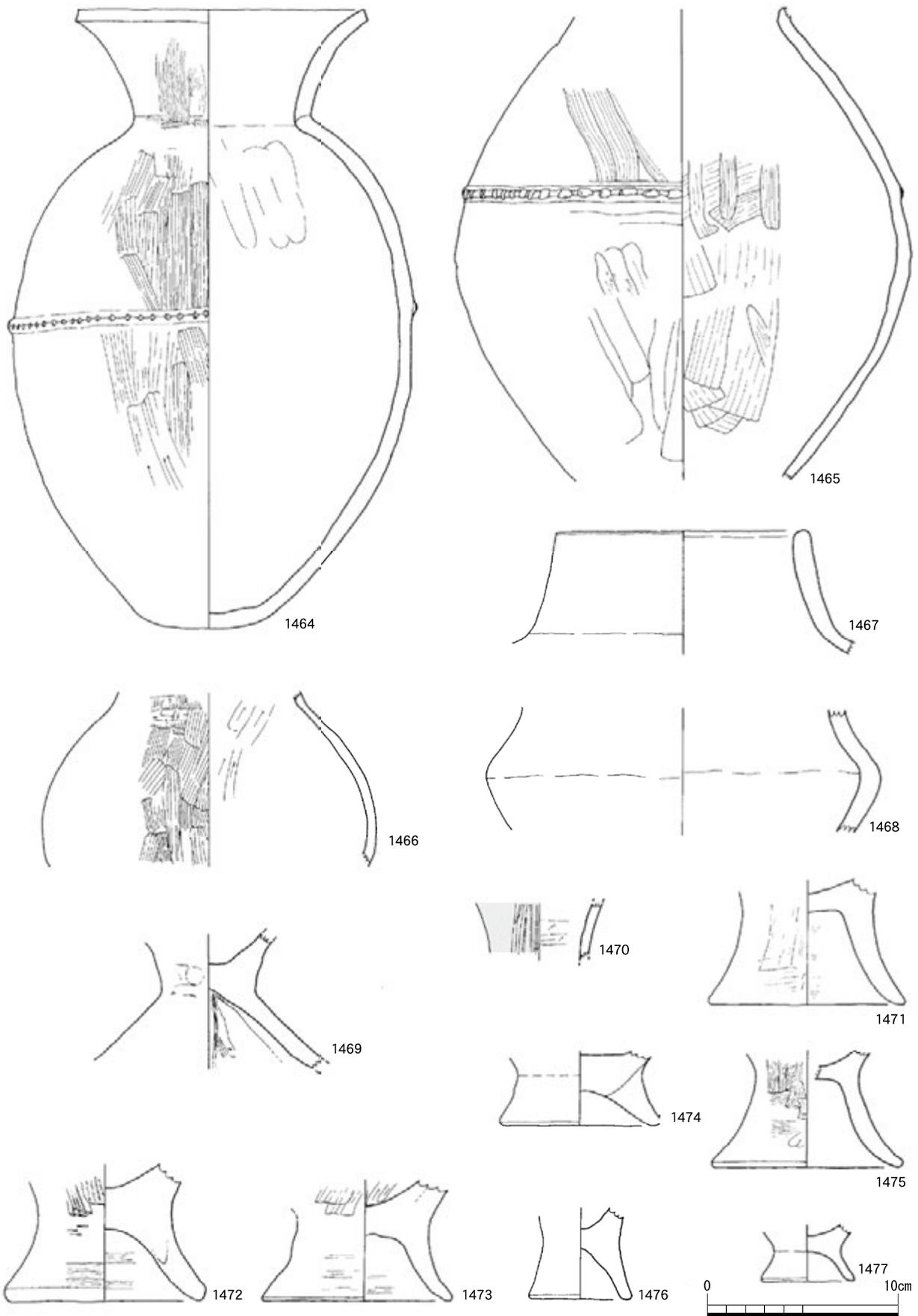
1464から1467までは、壺と思われる資料をまとめた。1464は、やや張りはあるもののなで肩の器形で、胴部最大径部分よりやや上位に刻目突帯が1条巡る。外面には、上半部に縦位基調のハケメ調整が丁寧に施されているほか、下半部にはケズリに近い調整も施されている。胴部の刻目突帯は、断面略三角形で整形、刻みともに丁寧な仕上げとなっている。復元胴部径は、約20.8cmである。1465は、直線的な肩部でやや胴張りする器高の低い器形である。この資料も、外面上半部の丁寧な器面調整と、下半部のケズリに近い調整が観察される資料である。復元口径は、約24.0cmである。1466は、小形の壺と考えられる。比較的薄い器壁で、短胴でやや下ぶくれした器形と想定される。胴部復元径は、約15.4cmである。1467は、やや大形の短頸壺と想定した資料であるが、検討の余地が残る。1468は、算盤玉状に張る胴部を有する壺又は罎と想定しているが、検討の余地が残る。着色等は見られず、屈曲部より上位には煤が多く付着している。胴部復元径約20.6cm。1469は、蓋を想定している。外面は、ナデ調整により仕上げられている。内面には、ハケメ調整のあとに、2条の沈線が中央から放射状に施されている部分がある。沈線で囲まれた部分がほとんど剥落しているため、何らかの機能をもたされていたのか文様であったのか判然としない。1470は、罎の頸部と考えられる。

1471から1477までは、甕の脚部と思われる資料をまとめた。全体的な特徴として、高さにして幅が広く脚長の短い、安定した作りとなっている資料が多い。器面調整については様々で、1473のようにやや粗い仕上げの資料もあれば、1475のように、工具を換えて丁寧な調整を施している資料もある。1472は、脚部内面の摩耗が著しいのが特徴である。復元

脚径約10.5cm。1474には、底部接地面が形成されている。復元脚径約8.4cm。1476・1477は、大きさから小形甕の脚部の可能性のある資料である。1476は、工具ではなく指頭による整形で仕上げられているようである。復元脚径約5.4cm。1477は、内面、外面ともに丁寧な調整が施されているようだが、摩耗が著しく、詳細な観察は不可能であった。復元脚径約4.8cm。



第202図 弥生・古墳時代出土遺物



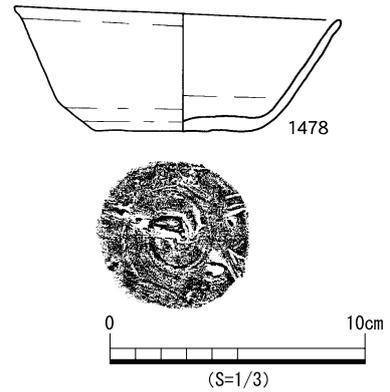
第203図 弥生・古墳時代出土土器

3 古代～中世以降の調査（第204～208図）

遺構は発見されなかったが、土師器の皿が1点出土した。

1478は、C-9区のII層から発見された。ヘラ切底で、やや焼きひずみのある皿である。基本的には、やや丸みを帯びる体部から口唇がわずかに外反する器形を有するものと想定される。

なお、便宜上、本節で、帰属時期を特定しえなかった遺構について紹介しておく。

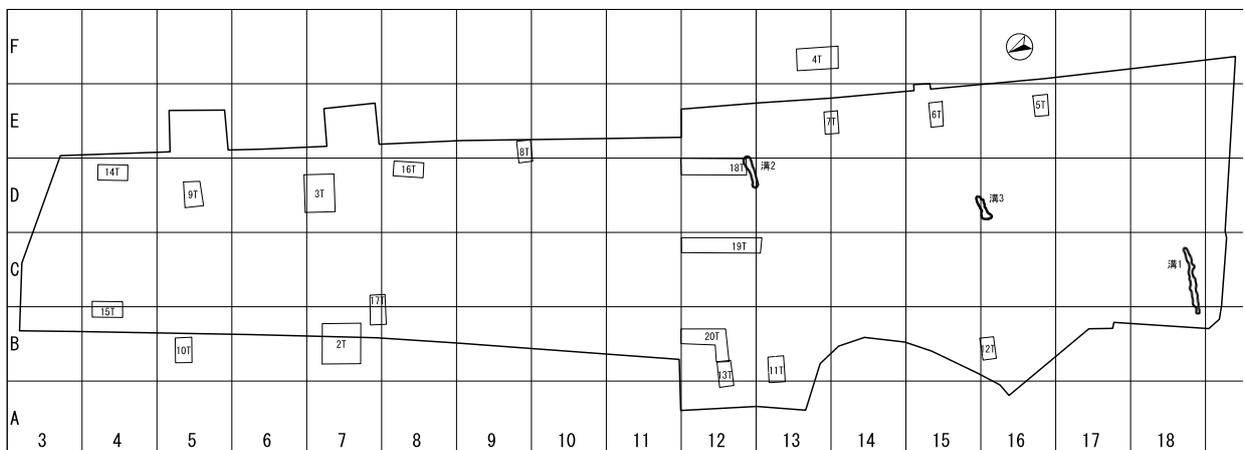


第204図 土師器

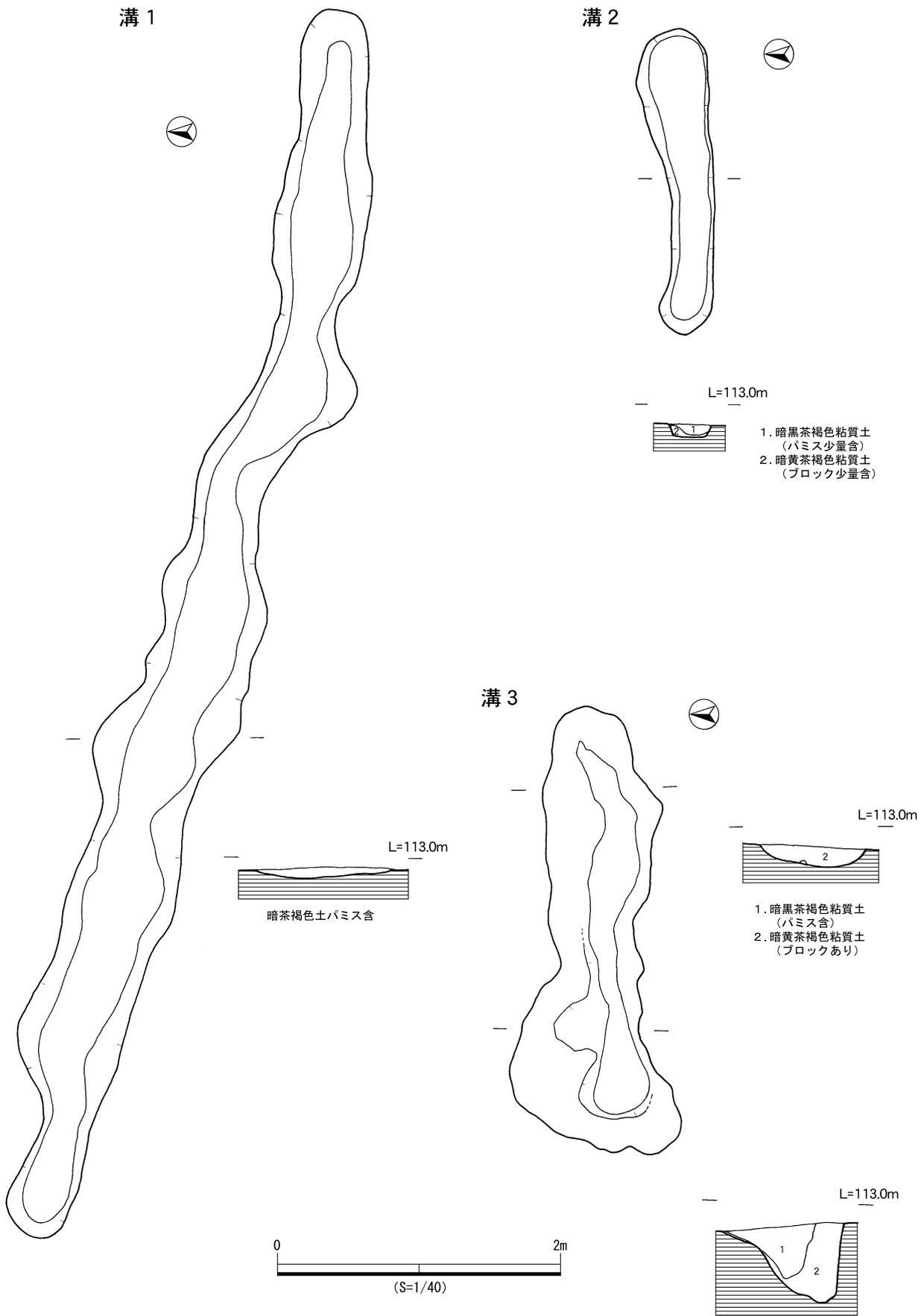
溝状遺構（第205・206図）

3条の溝状遺構が、調査区の南半部分から発見された。確認できた面は、縄文時代後期の遺構や遺物が発見された標高とおおむね同じであるが、遺構に伴う遺物が発見されなかったこと、時期が判明している遺構との埋土等の比較を十分できなかったことから、時期不明と判断した。おおむね東西方向に掘られ、ほぼ等間隔に位置する。

もっとも長いものは、C-18区から発見された約9mのものである。平面形状は、途中でわずかに曲がるもののほとんど直線で、検出面からの深さはごく浅く断面形状はレンズ状を呈する。埋土は、パミスを含む暗黒茶褐色土である。次に長いものは、D-12区から発見された3.1mのものである。平面形状は、直線で検出面からの深さはごく浅く断面形状は逆台形を呈する。埋土は、暗黄褐色粘質土の上にパミスを含む暗黒茶褐色粘質土が堆積している。もっとも短いものは、D-15・16区から発見された2.2mのもので、先に説明した2条とは若干特徴が異なる。平面形状は直線的であるが不整形で、検出面からの深さは10cmの断面略V字形を呈する。埋土は、暗黄褐色粘質土の上にパミスを含む暗黒茶褐色粘質土が堆積している。



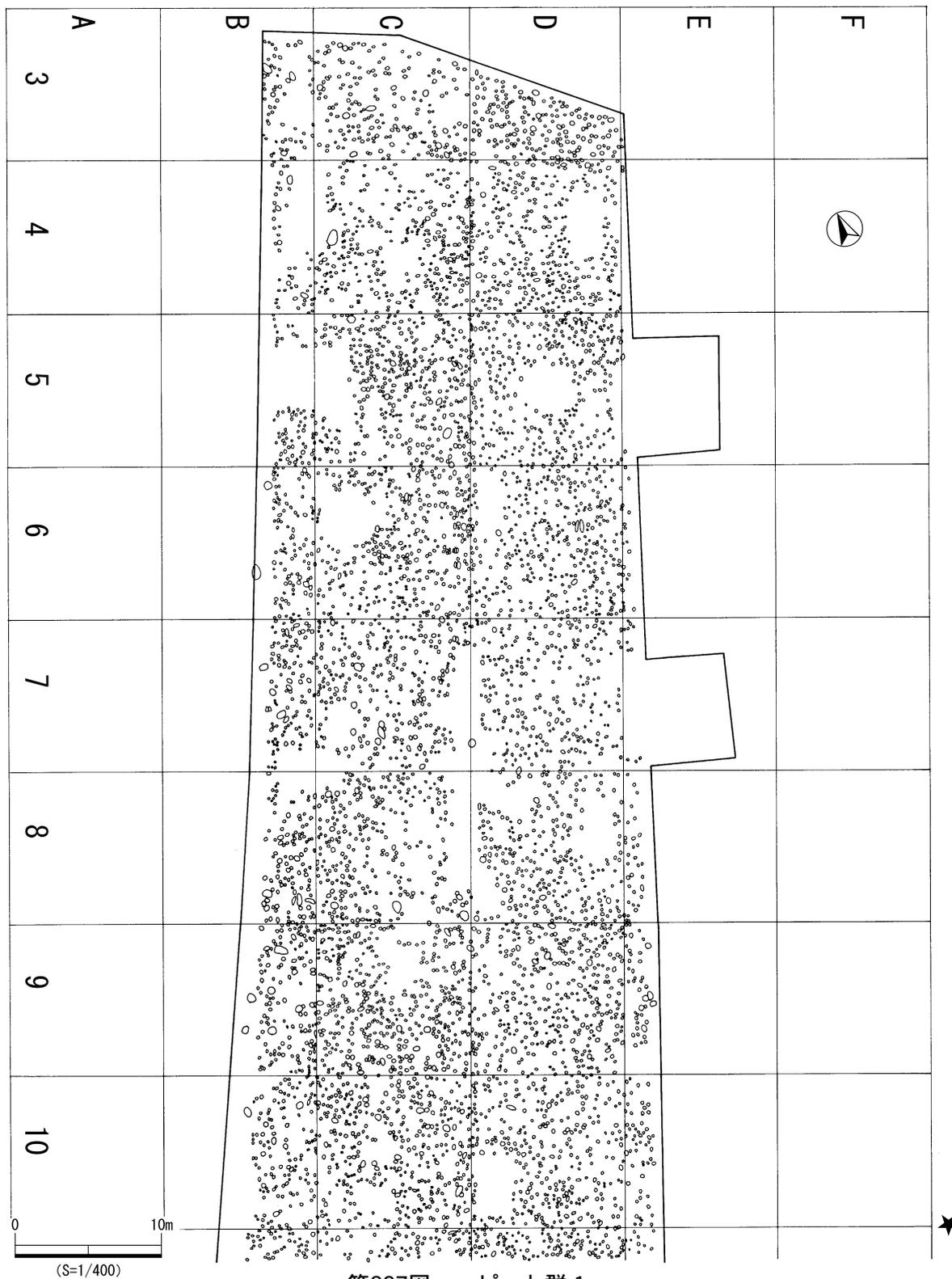
第205図 溝状遺構位置図



第206図 溝状遺構実測図

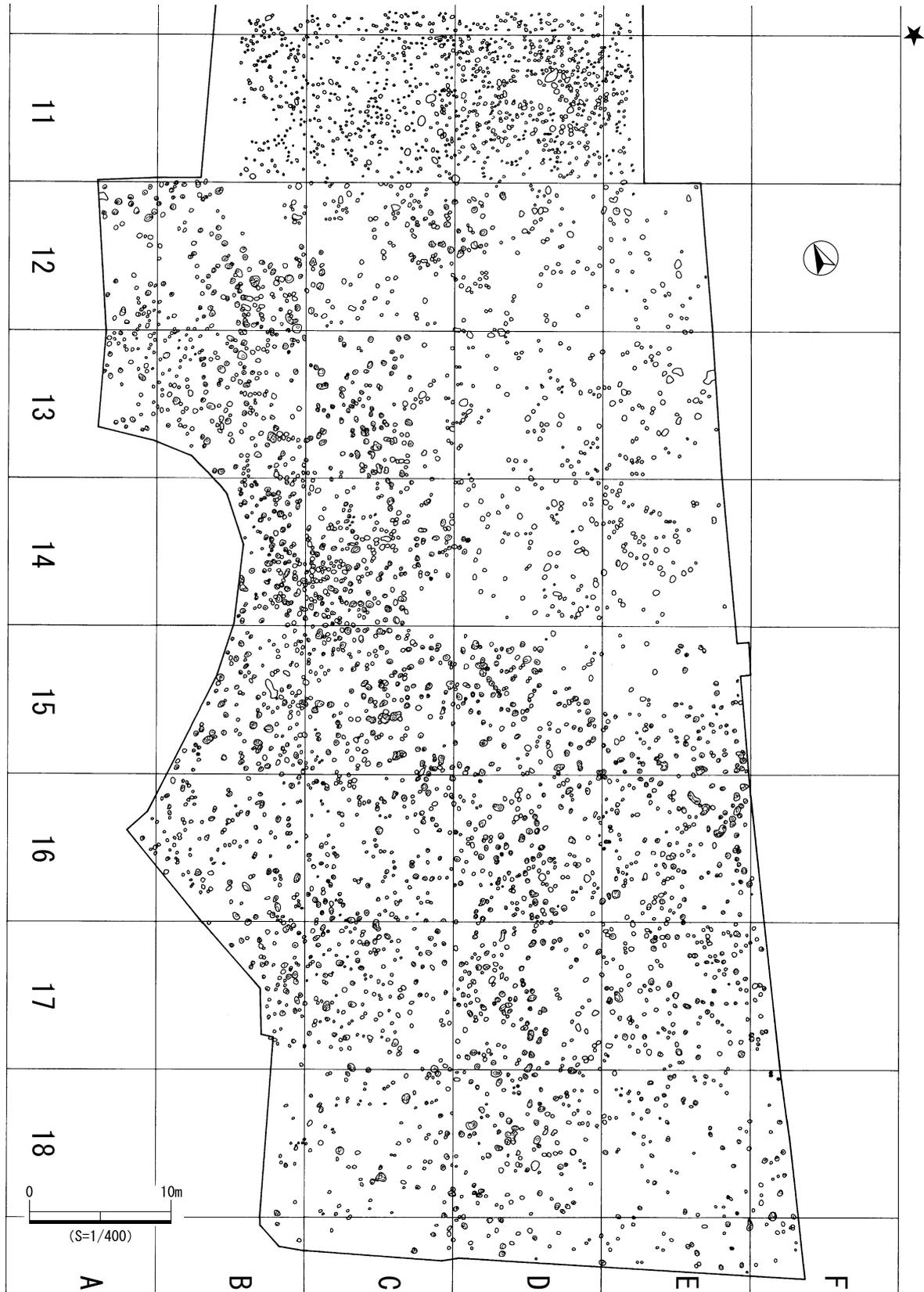
ピット群 (第207・208図)

膨大な数に及ぶピット群が、調査区全域から発見された。直径は、おおよそ20～30cmの間で、断面形状、検出面からの深さについては、様々である。また、埋土の状況も、土坑や住居跡の埋土と類似して見えるものやそうでないものなど様々で、平面形状、埋土、方位、間隔など考え得



第207図 ピット群 1

る指標を用いて判別を試みたものの、確証を得るに至らなかった。遺物も小片がほとんどで、群の解明には寄与しなかった。



第208図 ピット群2

挿入番号	掲載番号	器種	層位	石材	出土区	取上番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X座標	Y座標	Z座標(標高)	備考
15	54	細石刃	Ⅶ	黒曜石	B-12	461	1.4	0.5	0.2	0.1	11.486	115.205	112.246	13T
	55	石鏃	Ⅳ	頁岩	D-8	33758	4.2	2	0.5	3.3	32.523	73.105	113.102	-
	56	石鏃	Ⅳ	チャート	C-18	11037	1.8	1.6	0.4	0.9	23.456	170.702	112.769	-
	57	石鏃	Ⅳ	タンパク石	B-13	11376	2.2	1.2	0.2	0.51	17.430	126.158	112.841	-
	58	石鏃	Ⅳ	黒曜石	C-7	33881	1.1	0.7	0.3	0.3	27.466	61.395	113.381	-
	59	石鏃	Ⅳ	黒曜石	C-9	37177	1.6	0.9	0.3	0.2	27.257	88.365	112.892	-
	60	石匙	Ⅳ	黒色安山岩	C-13	11060	1.2	1.5	0.6	0.9	21.313	129.563	112.924	-
	61	磨製石鏃	Ⅴ	粘板岩	D-8	31869	3.2	2.1	0.2	1.9	39.388	72.677	112.997	-
	62	磨製石鏃	Ⅳ	粘板岩	C-11	33780	2.8	1.7	0.2	1	24.108	103.057	113.123	-
	63	使用痕剥片	Ⅴ	黒曜石	C-13	11377	1.2	2.5	0.6	1.3	20.833	120.693	112.717	-
16	64	敲石	Ⅴ	砂岩	D-5	33942	5.9	4.7	3.2	115	32.596	49.444	112.920	-
	65	敲石	Ⅳ	頁岩	B-13	11370	8.9	2	1.2	28.6	16.905	128.712	112.912	-
	66	砥石	Ⅳ	頁岩	D-12	33245	4.1	7.3	5.1	150.2	39.772	113.274	112.521	18T
16	67	削器	Ⅳ	頁岩	C-5	34015	19.4	13	2.3	592	24.605	40.031	113.529	-
	68	大型楔形石器	Ⅳ	頁岩	C-7	35398	10.6	8.4	4.2	367	21.708	69.566	113.063	-
26	69	大型楔形石器	Ⅳ	頁岩	C-7	35399	9.6	7.3	3.7	157	21.748	69.462	113.082	-
	140	石鏃	埋土 1	硫紋岩	A-13	10032	2.9	1.7	0.4	1.1	9.519	121.732	113.105	-
	141	削器	-	頁岩	A-13	10440	4.8	5.1	0.8	27	9.943	120.008	113.013	住 1
	142	砥石	-	砂岩	B-12_13	一括	2.7	1.7	0.4	2.5	0.000	0.000	0.000	住 1
	143	砥石	-	頁岩	B-12	9366	3.8	2	0.7	7	11.067	119.894	113.097	住 1
	144	大型楔形石器	-	頁岩	A-13	10636	5.4	5.8	1.6	43	9.930	120.490	113.060	住 1
	145	大型楔形石器	-	頁岩	B-13	9150	4.8	3.2	1.3	16	12.876	121.094	113.112	住 1
	146	大型楔形石器	-	頁岩	B-13	10728	4.5	3.6	1.6	27	10.742	121.844	112.996	住 1
	147	大型楔形石器	-	頁岩	B-14	10992	5.5	8	2.3	85	17.072	135.422	112.649	住 1
	148	大型楔形石器	-	頁岩	B-13	9957	5.2	5.1	3	95	11.422	120.187	113.150	住 1
	149	大型楔形石器	-	頁岩	B-12	8702	7	8.8	2	114	11.733	112.766	113.242	住 2
	150	大型楔形石器	-	頁岩	B-12	10740	6.7	5	1.8	59	10.857	119.898	113.064	住 1
	151	敲石	埋土 2	安山岩	B-12	10281	9.3	4.8	4.2	25.8	11.316	119.602	112.974	住 1
	152	敲石	埋土 1	砂岩	B-12	9628	5.8	1.5	1	10.3	11.274	119.549	113.141	住 1
153	敲石	埋土 1	砂岩	A-12	9397	6.7	2.3	1.4	27.9	9.881	119.271	113.178	住 1	
154	砥石	埋土 1	砂岩	B-12	9309	8.5	7.5	5.5	403	12.999	119.983	113.216	住 1	
29	170	大型楔形石器	-	頁岩	B-12	8700	4.5	6.2	1.6	63	12.500	112.752	113.141	住 2
32	182	礫器	Ⅱ	頁岩	C-6	31482	14.4	7.9	2.5	244	22.097	54.236	113.416	-
35	188	磨製石斧	-	頁岩	B-11	31853	8.8	7.2	3.5	231	17.790	104.878	113.202	住 4
39	208	大型楔形石器	-	頁岩	C-9	32396	8.4	6.4	3.6	260	27.634	80.081	113.258	住 5
	209	石皿	Ⅱ	安山岩	C-9	19373	28.8	27.3	9.8	9500	25.696	80.626	113.521	-
43	216	磨製石斧	-	ホルンフェルス	D-6	33561	10.6	8.4	2.1	221	32.798	59.697	113.413	-
46	219	大型楔形石器	埋土	頁岩	B-10	34011	8.2	8.5	2.4	137	19.965	98.733	113.231	A-2
48	222	石皿	-	安山岩	D-9	一括	32.5	23.9	9	9800	0.000	0.000	0.000	-
	223	石皿	Ⅱ	安山岩	D-9	33327	41.8	29.9	9.5	18400	30.377	80.883	113.363	-
61	231	礫器	Ⅱ	頁岩	C-5	27062	8.5	6.9	3.7	302	20.808	44.186	113.792	-
62	236	大型楔形石器	埋土	頁岩	C-7	38298	5.6	5.1	2.8	100	28.780	69.153	113.176	-
	243	垂飾	埋土	シルト岩	C-10	34016	3.3	1.1	0.4	2.3	22.554	90.225	113.246	-
	245	削器	埋土	頁岩	C-11	30964	5	6.8	1.3	42	24.653	105.535	113.436	-
	246	敲石	埋土 1	花崗岩	C-11	29942	11.5	7	4.7	350	24.531	105.783	113.437	-
	248	磨石	Ⅴ	砂岩	C-14	11080	9.5	5.2	4.4	254	29.093	138.376	112.386	B-34
68	257	敲石	埋土	頁岩	C-7	38305	8.5	6.6	2.6	177	27.103	68.413	113.056	-
	258	大型楔形石器	埋土	頁岩	C-10	37843	6.1	8.5	2.8	178	24.110	92.534	113.134	-
	259	削器	埋土	頁岩	D-7	33981	7.4	11.2	2.3	147	34.163	66.943	112.983	-
159	1165	石槍	Ⅱ	頁岩	C-3	35019	6.4	1.9	1.3	12.1	28.276	26.185	113.866	-
	1166	石槍	Ⅱ	黒曜石	C-3	35079	3.3	2.1	0.9	5	24.794	24.486	113.807	-
	1167	石鏃	表土	黒色安山岩	D-18	一括	2.6	1.8	0.4	1.5	0.000	0.000	0.000	-
	1168	石鏃	Ⅱ	黒曜石	C-3	35613	1.8	1.1	0.4	0.6	28.256	28.590	113.702	-
	1169	石鏃	埋土	チャート	E-17	10711	1.4	1.3	0.2	0.4	49.536	168.947	112.564	-
	1170	石鏃	Ⅱ	黒曜石	C-10	31066	1.6	1.2	0.3	0.5	25.650	92.072	113.361	-
	1171	石鏃	Ⅱ	黒色安山岩	E-13	4642	2.1	1.2	0.2	0.6	43.411	127.396	113.164	-
	1172	石鏃	Ⅱ	黒色安山岩	D-7	24914	2.8	1.7	0.5	1.9	30.698	64.545	113.594	-
	1173	石鏃	Ⅱ	黒色安山岩	B-13	260	2.7	1.4	0.3	0.8	10.565	123.211	113.212	11T
	1174	石鏃	表土	オパール	C-16	一括	2.5	1.7	0.4	0.9	0.000	0.000	0.000	-
	1175	石鏃	Ⅱ	タンパク石	E-16	4643	1.7	1.4	0.2	0.4	46.873	155.000	113.038	-
	1176	石鏃	Ⅱ	黒曜石	C-9	24252	2	1.6	0.3	0.7	23.615	85.379	113.489	-
	1177	石鏃	Ⅲ	黒色安山岩	C-10	31797	2.5	1.2	0.4	0.9	24.206	92.278	113.319	-
	1178	石鏃	Ⅱ	黒曜石	D-9	27420	1.2	1.6	0.3	0.5	36.699	88.138	113.319	-
	1179	石鏃	Ⅱ下	黒曜石	C-10	16652	2.6	1.4	0.3	0.9	24.605	99.512	113.516	-
	1180	石鏃	Ⅱ	黒曜石	E-15	8623	2.1	1.3	0.3	0.7	40.547	144.010	112.862	-
160	1181	磨製石斧	Ⅱ下	砂岩	C-11	16777	11.4	6.4	3.1	345	23.986	100.256	113.513	-
	1182	磨製石斧	Ⅱ	頁岩	C-9	27821	8.6	5.2	2.5	157	24.890	87.161	113.391	-
	1183	磨製石斧	Ⅱ	頁岩	E-12	5962	9.7	5	1.5	78.1	46.196	111.988	113.393	-
	1184	磨製石斧	Ⅱ	頁岩	C-9	27821	11	5	3.6	240	24.890	87.161	113.391	-

挿図番号	掲載番号	器種	層位	石材	出土区	取上番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X座標	Y座標	Z座標(標高)	備考
160	1185	磨製石斧	II	頁岩	B-2	1394	14.5	5.9	3.3	394.5	17.417	119.521	113.383	-
	1186	磨製石斧	II	粘板岩	B-8	36578	9	4.8	1.9	124.2	19.728	72.555	113.028	-
	1187	磨製石斧	II	頁岩	C-11	32578	7	4.5	2.4	115.1	29.583	108.577	113.565	-
	1188	磨製石斧	II	頁岩	D-9	32188	6.3	4.5	2.2	101	30.641	85.107	113.498	-
	1189	磨製石斧	II	頁岩	C-9	33010	10.8	6.7	3.3	362.7	25.628	84.238	113.288	-
	1190	磨製石斧	II	粘板岩	C-10	37398	8.4	4.4	0.9	50.5	29.398	97.931	113.326	-
	1191	磨製石斧	II	粘板岩	E-12	1868	4.3	6.1	0.6	23	41.675	114.065	113.322	-
	1192	磨製石斧	II	粘板岩	C-8	29874	6.3	3	0.7	19.6	24.389	76.888	113.431	-
1193	磨製石斧	II	粘板岩	C-9	22587	7.2	3.5	1	30.6	27.109	82.020	113.500	-	
161	1194	のみ型石斧	II	粘板岩	D-6	22046	9.6	2	1.1	36.2	36.177	55.460	113.512	-
	1195	のみ型石斧	II	粘板岩	C-9	16097	8.7	2.6	0.9	20.4	22.254	84.862	113.562	-
	1196	打製石斧	II	頁岩	E-13	4417	9.9	5.4	1.6	104.6	42.388	129.326	113.140	-
	1197	打製石斧	I	頁岩	-	一括	11.1	6.1	2	192.2	0.000	0.000	0.000	-
1198	打製石斧	II	頁岩	E-12	8575	6.6	7.6	3.2	167	44.566	118.972	112.989	-	
162	1199	石匙	II	黒色安山岩	D-9	26871	4	3.4	0.6	7	35.009	89.146	113.391	-
	1200	石匙	II	黒曜石	C-8	31359	4	2	0.8	4.9	24.291	76.073	113.300	-
	1201	搔器	II	黒曜石	B-11	20798	2.5	4.4	1.2	10.2	19.692	101.657	113.466	-
	1202	搔器	イモ穴	頁岩	B-14	一括	3	2.9	1.1	6.7	0.000	0.000	0.000	-
	1203	搔器	II	黒曜石	C-10	29208	1.6	0.9	0.6	1.3	28.376	99.995	113.331	-
	1204	搔器	II	硫紋岩	C-11	23234	4	5.5	2.1	49.1	27.775	101.937	113.452	-
163	1205	搔器	II	硫紋岩	C-10	16167	5.7	3.3	1.6	32.8	25.689	91.746	113.542	-
164	1206	削器	II	頁岩	B-9	23502	14.9	5.1	1.6	106	18.732	80.827	113.494	-
	1207	削器	II	頁岩	D-7	15961	9.5	5.7	2.5	149	31.496	60.058	113.918	-
	1208	削器	II	頁岩	C-9	33382	7.3	8.1	1.7	96	24.895	87.926	113.220	-
	1209	削器	II	硬砂岩	C-10	29185	7.1	6.4	2.7	89	25.612	98.392	113.297	-
	1210	削器	II	頁岩	C-10	20009	6.5	3.9	1.1	29	24.119	90.873	113.487	-
	1211	削器	II	頁岩	C-6	18747	7.8	4.1	1.8	49	27.978	51.686	113.765	-
	1212	削器	II下	頁岩	C-10	16521	9.7	4.3	1.8	71	25.453	95.785	113.544	-
	1213	削器	-	頁岩	C-9	16113	10.1	5.8	2	104	24.717	86.152	113.555	-
1214	削器	II	頁岩	D-10	36065	8.2	6.8	2	98	31.724	96.414	113.325	-	
165	1215	削器	II	頁岩	C-9	32727	9.2	6.5	2	116	24.881	88.570	113.233	-
	1216	削器	II	頁岩	D-3	34033	9	6.3	2.3	110	31.449	27.858	113.982	-
	1217	削器	-	頁岩	D-10	36629	6.5	5.6	1.4	55	36.838	98.788	113.227	-
	1218	削器	II	頁岩	C-5	18819	6.1	9.9	1.9	100	28.303	49.835	113.820	-
	1219	削器	II下	硫紋岩	C-10	16574	4	6.2	1.2	34	24.196	95.869	113.485	-
	1220	削器	-	頁岩	C-9	26155	6.3	5.5	2.9	94	23.924	83.757	113.443	-
	1221	削器	-	頁岩	B-12	10966	7.2	6.4	2.6	121	16.010	112.659	113.151	-
	1222	削器	-	頁岩	C-9	32015	5.9	7	1.9	65	29.585	82.813	113.605	-
1223	削器	II	粘板岩	C-3	34318	6.4	11.3	1.3	84	26.591	28.088	113.991	-	
166	1224	大型楔形石器	II	頁岩	C-10	16196	6.4	10.4	2.7	210	20.149	93.854	113.607	-
	1225	大型楔形石器	II	頁岩	D-11	36431	6.3	5.9	1.9	94	33.831	108.420	113.279	-
	1226	大型楔形石器	II	粘板岩	C-3	34917	7.9	6.6	2.1	102	28.827	29.000	113.928	-
	1227	大型楔形石器	II	頁岩	B-7	18305	5.9	6.8	1.8	70	19.807	65.024	113.492	-
	1228	大型楔形石器	II	硬質頁岩	C-10	28624	7.5	6.7	2.1	127	28.253	91.010	113.382	-
	1229	大型楔形石器	II下	頁岩	C-11	16790	7.4	6.6	2.7	123	23.238	100.244	113.558	-
	1230	大型楔形石器	II	頁岩	C-9	25063	6.5	6.4	2.3	75	23.349	83.669	113.485	-
	1231	大型楔形石器	II	頁岩	C-11	20592	6.3	7.3	1.9	91	25.864	101.901	113.502	-
	1232	大型楔形石器	II	頁岩	D-11	36538	7.8	7.4	1.7	125	39.611	100.818	113.076	-
	1233	大型楔形石器	II	頁岩	E-13	4221	6.4	5	2.1	65.9	45.448	123.719	113.160	-
	1234	大型楔形石器	II	頁岩	B-13	10254	5.1	5.5	2	50.4	15.685	121.936	113.149	-
	1235	大型楔形石器	II	頁岩	E-12	8009	7.3	8.4	2.4	142.2	44.968	110.401	113.312	-
	1236	大型楔形石器	II	頁岩	D-11	37541	4.8	5.9	2.2	50	30.755	105.465	113.114	-
	1237	大型楔形石器	II	頁岩	C-10	25493	8.8	5.9	2.7	193	26.314	99.455	113.430	-
	1238	大型楔形石器	II	頁岩	D-11	36660	5.5	3.7	2.1	41	39.246	107.443	113.061	-
167	1239	大型楔形石器	II	硬砂岩	C-9	23959	10.4	8	4.2	341	24.430	83.715	113.484	-
	1240	大型楔形石器	II	頁岩	C-11	20615	6	6.1	2	69	27.618	101.595	113.474	-
	1241	大型楔形石器	II	頁岩	C-8	29400	6.3	6.8	1.9	94	21.636	73.157	113.443	-
	1242	大型楔形石器	II	粘板岩	D-13	2494	6.4	4.9	1.5	42.5	32.295	125.579	113.292	-
	1243	大型楔形石器	II	頁岩	C-9	34882	6.7	5.6	1.7	76	25.584	89.352	113.211	-
	1244	大型楔形石器	II	頁岩	C-9	19465	5.8	5.9	1.5	59	21.518	82.450	113.521	-
	1245	大型楔形石器	II	頁岩	D-8	28924	6.3	7.4	1.7	88	39.775	77.624	113.500	-
	1246	大型楔形石器	II	頁岩	C-9	23998	5.6	5.8	1.5	45	27.317	84.617	113.465	-
	1247	大型楔形石器	II	頁岩	C-8	29847	7.2	8.9	2.5	141	26.929	79.567	113.463	-
	1248	大型楔形石器	II	頁岩	E-11	27534	5	5.7	2	60	42.264	102.996	112.571	-
168	1249	大型楔形石器	II	頁岩	C-8	30646	6.9	8.5	3.6	222	26.153	79.412	113.319	-
	1250	大型楔形石器	II	頁岩	D-13	1563	4.6	5.6	1.6	49.8	35.414	128.705	113.238	-
	1251	大型楔形石器	II	砂岩	C-10	36085	6.7	8.1	2.7	168	29.829	97.202	113.317	-
	1252	大型楔形石器	II	頁岩	D-11	37427	6.7	6.5	1.8	85	33.789	108.403	113.159	-
	1253	大型楔形石器	II	頁岩	D-12	7962	8.3	7.4	3.1	179.4	35.716	111.053	113.214	-

採回番号	掲載番号	器種	層位	石材	出土区	取上番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標 (標高)	備考
168	1254	大型楔形石器	II	頁岩	D-11	36389	4.7	5.4	2.1	51	31.652	105.336	113.335	-
	1255	大型楔形石器	II	頁岩	C-10	31794	8.2	6.5	3.3	158	26.368	92.787	113.425	-
	1256	大型楔形石器	II	泥岩	C-9	32717	6.8	7	2.2	108	25.153	88.329	113.351	-
	1257	大型楔形石器	II	頁岩	C-9	32119	7.6	7.3	3.7	214	29.380	85.324	113.539	-
	1258	大型楔形石器	II	頁岩	D-9	25842	5.9	7.2	1.2	62	30.784	88.596	113.418	-
169	1259	大型楔形石器	II	頁岩	D-14	3250	6.5	9	3.1	182.1	39.678	133.829	113.109	-
	1260	大型楔形石器	II	頁岩	C-10	27686	5.1	5.4	2.2	57	28.441	92.452	113.435	-
	1261	大型楔形石器	II	頁岩	C-10	22857	6.8	8.6	2.5	162	26.077	91.217	113.504	-
	1262	大型楔形石器	II	頁岩	C-8	29880	5.2	5.8	1.3	45	25.426	77.012	113.460	-
	1263	大型楔形石器	II	頁岩	D-13	4576	7	7.3	3.1	208	38.972	124.494	113.216	-
	1264	大型楔形石器	III上	頁岩	C-9	31330	4.9	6.7	1.9	84	23.453	89.695	113.333	-
	1265	大型楔形石器	II	頁岩	D-9	23621	5.6	7	3.6	173	38.693	89.173	113.467	-
	1266	大型楔形石器	II	頁岩	C-9	27875	5	6	2.9	91	25.078	88.648	113.367	-
	1267	大型楔形石器	II	頁岩	D-10	23651	8.5	6.8	3.3	189	31.430	91.941	113.432	-
	1268	大型楔形石器	II	頁岩	B-12	10372	6.5	3.4	1.6	23.7	17.015	110.418	113.159	-
	1269	大型楔形石器	II	頁岩	C-11	一括	4.8	7.4	1.8	63	0.000	0.000	0.000	-
1270	大型楔形石器	II	頁岩	B-12	11409	2.7	5.4	1.3	16.8	17.800	110.269	113.253	-	
170	1271	楔形石器	II	硫紋岩	C-9	30353	2.6	2.8	1	5.6	26.897	88.283	113.387	-
	1272	楔形石器	II	黒曜石	C-9	30931	1.5	1.2	0.6	1	25.707	89.805	113.358	-
	1273	加工痕剥片	II	黒曜石	B-16	3449	4.5	2.5	0.6	6.5	14.154	154.094	113.282	-
	1274	使用痕剥片	II	黒曜石	C-9	24356	3.1	0.8	0.5	1	21.166	84.200	113.451	-
	1275	使用痕剥片	II	硫紋岩	D-11	24867	2.6	0.9	0.9	2	38.515	104.774	113.239	-
	1276	使用痕剥片	II	黒曜石	D-11	32590	2.2	2.8	0.7	3.1	32.033	109.481	113.406	-
	1277	使用痕剥片	III	水晶	C-10	31796	2.5	1.1	1	1.9	25.194	93.458	113.226	-
	1278	使用痕剥片	II	黒曜石	C-10	16179	2.3	2.1	0.5	1.7	23.527	92.749	113.528	-
	1279	使用痕剥片	II	黒曜石	C-8	30032	2	2.4	0.8	3.7	22.595	77.762	113.364	-
	1280	使用痕剥片	III	黒曜石	D-8	31570	2.1	1.2	0.8	1.4	38.097	79.233	113.197	-
	1281	使用痕剥片	II	黒曜石	D-10	21644	2.3	1.9	0.8	2.4	34.954	96.363	113.405	-
171	1282	石核	II	黒曜石	D-13	8239	2.6	2.3	1.2	8.5	39.846	121.699	113.178	-
	1283	石核	II	黒曜石	C-10	29144	2.3	2.8	2.3	13.9	26.457	95.296	113.396	-
	1284	石核	II	黒曜石	C-9	24018	1.6	2.4	1.6	7.2	25.891	84.628	113.502	-
	1285	石核	II下	黒曜石	C-11	17183	2	2.3	1.9	10.4	26.463	107.867	113.513	-
	1286	石核	II	黒曜石	C-11	28697	3	1.4	2.8	10.5	29.190	100.018	113.358	-
172	1287	磨石	II	花崗岩	C-9	31950	10.9	9.2	4.7	711.3	22.405	87.232	113.311	-
173	1288	磨石	II	安山岩	B-12	10402	12.3	12.3	5.3	1200	15.129	111.475	113.220	-
	1289	磨石	II	砂岩	C-9	33427	12.3	10.6	5.5	1200	24.911	88.332	113.245	-
	1290	磨石	II	安山岩	C-9	26370	10.5	9.2	4.2	660	22.827	89.592	113.354	-
	1291	磨石	II	花崗岩	D-10	32513	11.9	10.7	4.7	910	30.031	93.545	113.394	-
174	1292	磨石	埋土	安山岩	C-7	34549	11.5	10	5.1	849	28.812	60.094	113.404	-
	1293	磨石	II	安山岩	D-9	27408	11.2	10.3	5.4	1010	31.525	88.023	113.347	-
	1294	磨石	II	安山岩	C-8	29350	9.7	9.1	4.1	555	20.118	79.915	113.472	-
175	1295	磨石	II	安山岩	B-3	34389	8.5	11.2	4.9	646	19.068	28.286	114.092	-
	1296	磨石	II	安山岩	D-10	32543	5.5	10.8	4.6	348	30.466	93.123	113.418	-
	1297	磨石	II	花崗岩	C-5	22134	10.5	5	5.2	380	20.242	44.526	113.905	-
	1298	磨石	I	砂岩	E-8	28214	6.8	10.8	4.2	475	41.713	78.331	113.567	-
	1299	磨石	II	安山岩	B-12	10765	6.7	7.2	4.8	246	14.548	111.750	113.190	-
	1300	磨石	II	砂岩	C-3	37451	8.9	8.3	3.7	405	21.796	22.544	113.617	-
176	1301	砥石	II	砂岩	C-3	35597	12.8	10.5	3.7	830	28.027	24.701	113.657	-
	1302	砥石	II	砂岩	E-12	8030	8.3	5.9	3.3	243	43.769	112.854	113.240	-
	1303	砥石	III	砂岩	C-9	30747	13.7	9.5	5	890	22.951	89.989	113.335	-
	1304	砥石	II	凝灰岩	B-11	23407	14.5	11.5	2.8	400	17.257	108.754	113.420	-
	1305	砥石	II	安山岩	C-4	15145	13.9	11.6	5	975	24.109	38.256	114.059	-
177	1306	砥石	II	砂岩	D-8	29633	14.3	5.4	2.6	330	34.829	70.209	113.609	-
	1307	砥石	I下	砂岩	C-11	16743	9.5	2.8	2.1	71	27.266	101.665	113.544	-
	1308	砥石	II	泥岩	B-7	21838	8.1	1.4	0.7	12.1	18.017	64.678	113.424	-
	1309	砥石	II	砂岩	C-8	29547	10.6	5.8	3.8	335.4	27.555	75.788	113.477	-
	1310	砥石	II	砂岩	C-9	34865	6.8	1.6	1.5	26.3	24.858	87.300	113.229	-
	1311	砥石	II	砂岩	D-14	2545	9.5	5.2	3.9	303.7	32.796	132.835	113.184	-
	1312	砥石	II	砂岩	C-9	26365	9.4	5.5	4	287	23.507	88.284	113.376	-
	1313	砥石	II	安山岩	C-9	26354	8.4	3.3	1.9	67.1	24.633	87.826	113.416	-
	1314	砥石	II	砂岩	B-12	10339	10.1	8	4	479	17.524	111.564	113.190	-
	1315	砥石	II	砂岩	B-11	26982	8	6.7	3.4	258	16.279	108.821	113.234	-
	1316	砥石	II	砂岩	C-17	2956	5.9	4.4	4.3	157.8	25.059	160.299	113.049	-
178	1317	砥石	II	砂岩	D-11	36471	3.4	3.6	2.5	38.9	36.784	107.430	113.158	-
	1318	砥石	III a	安山岩	C-9	31189	5.2	5.8	4.8	210	24.947	89.509	113.310	-
	1319	砥石	III a	砂岩	B-9	12768	5	4.3	2.3	69.4	0.000	0.000	0.000	-
	1320	砥石	III a	砂岩	C-12	9889	4.7	6.1	3.2	101	21.078	112.678	113.243	-
	1321	砥石	-	砂岩	C-9	30910	5.1	4.9	3.6	124	25.012	88.969	113.322	-
	1322	砥石	III a	硬砂岩	B-13	10979	4.9	5.9	4.7	134	17.512	121.173	112.997	-

挿入番号	掲載番号	器種	層位	石材	出土区	取上番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X 座標	Y 座標	Z 座標 (標高)	備考
178	1323	砥石	II	砂岩	C-9	33428	7.4	6.9	3.4	203.8	25.098	88.376	113.297	-
	1324	砥石	II	砂岩	D-11	33827	3.5	2.7	2.2	27.9	34.223	108.534	113.317	-
	1325	砥石	II	シルト岩	D-5	19266	4.1	3.1	1.8	27.4	35.974	46.997	113.780	-
	1326	砥石	II	砂岩	C-9	22612	6.5	4.4	1.1	46.8	27.180	84.567	113.526	-
179	1327	砥石	II	砂岩	E-11	28263	5.6	3.7	1.3	35.4	40.805	107.582	113.131	-
	1328	砥石	II	砂岩	B-11	23396	5.1	4.8	1.4	41	19.111	108.722	113.373	-
	1329	砥石	II	砂岩	D-11	37262	4.9	2.3	1.4	23.2	35.743	107.053	113.102	-
	1330	砥石	II	泥岩	D-10	32853	5.4	2.3	1.6	30.5	30.466	93.373	113.236	-
180	1331	砥石	II	砂岩	D-10	37359	4.9	3	0.8	14.3	35.943	98.042	113.268	-
	1332	敲石	II	砂岩	B-6	21781	11.4	6.3	4.4	428	16.688	51.511	113.578	-
	1333	敲石	III b	砂岩	C-4	22219	11.2	6.7	3.3	370	22.841	31.082	113.902	-
	1334	敲石	II	砂岩	C-6	22084	9.1	4.3	2.2	145	27.616	57.965	113.655	-
	1335	敲石	II	砂岩	C-10	27705	9.6	5.5	2.3	162.6	28.674	93.771	113.418	-
	1336	敲石	III a	安山岩	B-14	8638	11.4	5.5	2.6	175.9	18.656	132.324	113.086	-
	1337	敲石	II	砂岩	B-12	3138	6	5.4	3.4	139.1	19.487	118.866	113.359	-
	1338	敲石	II	砂岩	B-12	1349	5.6	5.4	3.1	131.1	13.552	115.669	113.410	-
	1339	敲石	II	砂岩	C-11	37868	6.7	4.3	3.2	127.9	29.436	102.371	113.288	-
	1340	敲石	II	砂岩	C-10	37463	8.9	4.7	3.5	206.1	29.542	98.099	113.235	-
181	1341	敲石	II	安山岩	C-11	35870	6.3	5.8	3	155	29.846	105.978	113.409	-
	1342	敲石	II	安山岩	C-3	34934	5.6	5	4.7	173.1	29.833	26.768	113.882	-
	1343	敲石	II	頁岩	B-12	3139	11.7	2.8	1.5	61.3	17.656	119.818	113.328	-
	1344	敲石	II	砂岩	C-9	25039	10	3	1.8	77.9	26.946	84.298	113.458	-
	1345	敲石	II	安山岩	C-12	1668	4.8	8.2	5.8	280.6	22.223	114.465	113.423	-
	1346	敲石	II	頁岩	C-9	30819	13.1	3.9	2.1	174.8	26.879	80.161	113.331	-
	1347	敲石	III a	砂岩	B-12	8655	6.7	5	4	158.2	17.778	119.674	113.226	-
	1348	敲石	II 下	砂岩	C-11	16957	5.5	5.2	3.7	137.7	24.351	105.092	113.558	-
	1349	敲石	II	砂岩	C-15	一括	3.2	2.6	1.9	19	0.000	0.000	0.000	-
	1350	敲石	II	班斲岩	C-12	5732	20.6	4.9	2.4	263.2	20.404	119.161	113.272	-
182	1351	石皿	II	安山岩	A-13	6573	42.5	28.9	7.8	11970	7.202	123.119	113.230	-
	1351	石皿	II	安山岩	C-9	32739	(-)	(-)	(-)	(-)	25.478	89.586	113.231	-
	1351	石皿	II	安山岩	C-9	33376	(-)	(-)	(-)	(-)	24.597	87.294	113.224	-
	1351	石皿	III a	安山岩	C-9	31333	(-)	(-)	(-)	(-)	23.240	89.342	113.307	-
	1352	石皿	II	安山岩	C-6	26731	37	21.2	8.6	10200	27.374	58.194	113.586	-
	1353	石皿	II	砂岩	C-13	5927	18.7	12.8	11	4210	22.870	120.598	113.288	-
	1354	石皿	-	安山岩	D-9	33324	35.6	21	7.2	6120	30.562	81.518	113.397	-
	1355	石皿	II	安山岩	C-6	26732	19.1	11.9	8.9	2440	27.700	56.870	113.579	-
	1356	石皿	II	安山岩	C-9	34868	12.2	15.8	3.6	1100	24.152	88.065	113.227	-
	1357	石皿	II 下	安山岩	C-11	16764	41.2	18.1	7.5	6990	25.295	100.431	113.500	-
183	1358	石皿	II	花崗岩	C-4	15005	26.8	22.9	11.3	10400	27.518	32.660	113.949	-
	1359	石皿	II	安山岩	D-8	29623	34.7	18.3	9.6	6050	30.962	75.824	113.458	-
	1359	石皿	II	安山岩	D-9	32200	(-)	(-)	(-)	(-)	30.156	84.286	113.550	-
	1359	石皿	II	安山岩	D-9	17382	(-)	(-)	(-)	(-)	38.452	89.012	113.552	-
	1360	石皿	II	安山岩	B-12	10909	21.4	20.1	8.2	4310	17.473	112.073	113.085	-
	1361	石皿	II	凝灰岩	C-6	21942	13.4	25.4	9.6	3850	29.207	55.257	113.616	-
	184	1362	石製垂飾	II	砂岩	C-10	28680	2	3.8	0.5	6.3	27.899	98.231	113.340
1363		石製垂飾	II	シルト岩	D-11	37326	1.2	3	0.3	1.9	32.887	106.197	113.200	-
1364		石製垂飾	II	シルト岩	B-10	31555	1.5	1	0.6	0.9	19.908	92.684	113.493	-
1365		石製垂飾	II	シルト岩	D-10	37609	1.6	1.4	0.5	1.6	35.323	99.942	113.195	-
1366		石製垂飾	II	砂岩	D-10	27459	4.7	2.1	0.4	5.5	36.224	95.679	113.304	-
1367		石製垂飾	-	シルト岩	C-9	35170	4	1.6	0.4	2.2	24.899	81.653	112.470	-
1368		石製垂飾	II	シルト岩	D-10	24986	3.4	2.6	5.5	5.7	35.443	95.189	113.347	-
1369		石製垂飾	II	粘板岩	D-10	37902	2.6	1.2	0.4	1.5	30.387	99.808	113.274	-
1370		石製垂飾	II	粘板岩	D-9	28442	2.2	1.3	0.4	1.8	31.102	83.460	113.481	-
1371		石製垂飾	II	粘板岩	D-11	38159	2.8	1.1	0.5	4.3	33.252	104.635	113.154	-
1372		石製垂飾	II	砂岩	B-12	10965	2.3	1.5	0.4	1.6	15.764	112.921	113.150	-
1373		石製垂飾	II	粘板岩	E-12	7182	2.7	1.7	0.5	2.3	40.832	116.088	113.191	-
1374		石製垂飾	II	泥岩	E-9	24582	2.8	0.9	0.6	1.7	40.547	86.408	113.433	-
1375	石製垂飾	II	粘板岩	B-4	33310	3.3	1.8	0.4	2.6	19.434	37.126	113.742	-	
187	1379	加工痕剥片	埋土 1	ホルンフェルス	D-12	8454	7.5	6.2	1.6	65.7	30.537	112.269	113.395	住 6
193	1416	磨製石鎌	I	粘板岩	D-11	31743	4.3	2.8	0.3	4.5	31.928	101.040	113.268	-
	1417	磨製石斧	-	ホルンフェルス	D-10	32352	9.4	4.8	2.7	158.2	35.156	99.904	113.230	住 7
	1418	大型楔形石器	-	頁岩	D-11	31738	6.5	7.8	2.1	129	32.094	100.263	113.413	住 7
	1419	石皿	-	砂岩	D-11	26662	37.7	12.7	7.6	6700	34.237	100.615	113.359	-
197	1448	敲石	II	安山岩	C-7	27017	5.4	4.5	4.4	108.3	28.367	62.806	113.514	-
	1449	石核	II	頁岩	C-7	20663	6.5	6.8	2.5	118	27.514	63.338	113.674	-
202	1460	石包丁	II	粘板岩	B-6	15724	3.8	5	0.6	18.4	16.710	59.472	113.678	-
	1461	石包丁	II	千枚岩	C-10	20239	5.3	8.2	1	60.1	23.989	96.322	113.449	-
	1462	石剣	表土	黒色安山岩	B-13	一括	5.2	2.9	1.7	41.4	0.000	0.000	0.000	-
	1463	石剣	II	頁岩	D-10	24958	4.2	2.9	0.9	15.4	35.736	92.015	113.407	-

第4章 まとめ

鳴野原遺跡では、1点のみではあるものの、細石刃の出土を端緒に、縄文時代早期、前期、後期、晩期の遺構や遺物、また、少量ながら、弥生時代中期、後期の遺物、古墳時代前半期の遺構と遺物、古代から中世に属すると思われる土師器まで出土した。このことから、鳴野原遺跡A地点がある一帯は、出土した遺構や遺物の密度の違い（≒土地利用の違い）や、時代ごとの生業形態や社会構造の変化にもかかわらず、人間活動に適した土地であった可能性があることをうかがわせるものといえる。

そのうち、本章では、遺構や遺物が最も多く出土した縄文時代後期について抽出することで、まとめに代えたい。

第1節 縄文時代後期の遺構について

1 竪穴住居跡について

鳴野原遺跡A地点では、前章でも述べたように5軒の竪穴住居跡が発見された。床面付近での平面形状としては、竪穴住居跡1号が略方形、他の2～5号が略円形である。規模は、1～3号が約4m、4・5号が約3m強である。住居内の施設については、柱穴と想定されるピットはすべての住居跡から発見されているが、大小のピットが不規則に発見されている1号と、中央付近に3基のピットが並ぶ2号、同じく中央付近に2基のピットを配する3～5号にわけられる。さらに、3～5号には、ピットの間、言い換えれば床面の中央付近に小土坑を設けている。4・5号の例では、小土坑中に小ピットも構築されている。これら5軒の住居跡について、形態から分別するならば、1号・2号及び3～5号という分別ができよう。ただし、2号については、床面積に比してピットの深さが極めて深いことなどから、住居とは別の機能を有する遺構を検討すべき余地がある。さらに、先に述べた小土坑については、これまでの事例等から屋内炉であると考えられるものの、埋土に関する情報が限られており特定には至らなかった。

本県でこれまでに発見されている後期の住居跡の平面形状は、略円形が多く、その点では1号を例外としてほぼ本県の従前の例を補強する結果といえる。また、中央に小土坑を配することは、鹿児島市山の中遺跡、日置市上ノ平遺跡や南さつま市芝原遺跡などで少ないながらも類例がある。本遺跡例は、上部を削平等で失っているものの、ピットとの位置関係や小土坑内の小ピットの存在などが判明した点で、より特徴を掴める例といえるだろう。今後は、小土坑中の埋土の特徴や小ピットと小土坑の関係など、住居内の施設の用途等をより正確に把握するための調査の工夫等を考えていく必要がある。

また、出土遺物の状況からは、1・5号と2～4号に型式や出土量などの点で相違を認めることができるが、おおよその時期的変遷を示すといえるであろうか。ただ、こうした状況は、本県の後期遺跡における従前の例と矛盾するものではない。

2 土坑について

遺物の出土状況、形状などをもとに便宜上A、B、Cに分類しているが、機能の違い等まで想

定することは困難であった。それでも、Aのように復元可能な遺物が埋土中に入り込んでいる土坑や、Cのように断面が長方形を呈する土坑などについては、将来的には何らかの意図を見出すことができるかも知れない。

なお、本県では、田中堀遺跡や芝原遺跡、南さつま市上水流遺跡などでは土坑が発見されているが、上ノ平遺跡などではあまり発見されていない。乱暴な比較であるが、今後、当該期の土坑についての検討視点とできるであろうか。

3 分布状況について

縄文時代後期の遺構は、竪穴住居跡についてはA・B－12・13区にかけて、土坑については、AがB～D－4～10区、Bが調査区のほぼ全域、CがC・D－5～7区にかけて分布している。竪穴住居跡と土坑Aが比較的類似した状況を呈しているのに対し、土坑Cは、これらの遺構の近くではあるがまとまっていて面的な広がりはない。

また、遺構群の分布状況と遺物の分布状況は一致しない。1・5号竪穴住居跡と土坑A1号など一部の遺構が、出土遺物から、他の住居跡や遺構とやや時期差があると考えられる他は、遺構群と包含層から出土している土器型式は同じであることから、この不一致の要因が、同一型式内における時間差に求められるのか、例えば土器廃棄など、空間利用の違いに求められるのか、検討を要する課題である。

なお、土坑Bについては、調査区北側と南側で土坑の規模に違いが認められるが、これには慎重な検討が必要と思われる。

第2節 縄文時代後期の土器について

本報告では、包含層から出土した土器についてI類からXⅢ類まで分類した。これらのうち、縄文時代後期に属するのは、Ⅲ類からXⅢ類までである。ただし、Ⅲ類については、一部後期末に属する可能性があるものを含み、XI類については、同じく一部後期末に属する可能性がある資料と晩期に属する可能性がある資料を含めた。

ここでは、各分類の概要を述べたうえで分布状況について紹介したい。

なお、本報告での資料の掲載順は、従来の編年観と若干異なっている部分があるが、編集上の問題であり、編年観に異論を唱えているのではない。

1 各分類について

Ⅲ類は、凹線文を施文する一群をまとめている。既存の土器型式で言うならば、岩崎式土器が該当すると考えられる。丁寧な器面調整とやや薄手の器壁に、太めの凹線文を施す。曲線的なモチーフを施文する資料のほうが、やや厚めの器壁の傾向があるが、顕著な差異ではない。分布状況は、調査区のほぼ全域から出土しており、特にC－9・10区に比較的集中する傾向である。

IV類は、口縁部に短沈線やS字状文を巡らせる一群をまとめている。既存の土器型式で言うならば、一部大平式土器と考えられる資料もあるが、おおむね南福寺式土器に該当すると考えられる。頸部が形成される資料があるなど、成形にやや変異の多い資料がある群である。分布状況は、Ⅲ類とほぼ同様な傾向を示しているが、Ⅲ類のような集中範囲は認められない。

V類は、くの字に肥厚した口縁部と貝殻刺突文や沈線文が特徴的な一群をまとめている。器形

から a・b に細分し、既存の土器型式では V a 類が市来式土器、V b 類が市来式土器の 1 器種である台付皿形土器が該当すると考えられるが、一部検討の必要がある資料を含む。分布状況は、調査区の北側に分布する傾向があり、特に北端部分に集中範囲が認められる。

VI 類は、口縁部を肥厚もしくは屈曲させて施文部を作り、そこに沈線等で幾何学文を施文する一群をまとめた。既存の土器型式で言うならば、VI a 類・VI b 類の一群は、おおむね松山式土器、VI c・VI d 類の一群は、松山式土器に後続すると考えられている土器群に該当すると考えられる。分布状況は、VI a・VI b 類は、C・D-3 区周辺と C-6 区の 2 か所に集中して分布している。V 類と部分的に分布域が重複している。VI c・VI d 類は、V 類、VI a・VI b 類と分布域がおおむね重複するが、VI c 類は B-14 区、VI d 類は D・E-10・11 区にも分布域が確認される。

VII 類は、小形で薄い器形と規格的な文様が特徴的な一群をまとめた。既存の型式名は不明である。分布状況は、調査区南側である B・D-15～17 区にまとまっている傾向がある。

VIII 類は、多彩な幾何学文を施文する一群をまとめた。本遺跡で最も多く出土した一群であり、既存の土器型式で言うならば、指宿式土器が該当すると考えられる。およそ、VIII a 類は、曲線的な幾何学文を施文する一群、VIII b 類は、直線的な幾何学文を施文する一群、VIII c 類は、貝殻刺突で文様を施す一群に細分した。分布状況は、VIII 類全体として C-9 区から B-16 区にかけておおむね半円状に分布する。しかし、VIII b 類については、B・C-10・11 区にも分布する状況が認められるなど、細分資料群ごとに微妙な範囲の違いや粗密の違いがみられる。さらに、C・D-3・4 区と C・D-6・7 区にも集中する範囲が認められる。

IX 類は、磨消縄文土器を一括した。分布状況は、C・D-8～11 区にまとまる。

XI 類は、無文土器を一括した。分布状況は、おおむね VIII 類と同様の傾向を示す。

XIII 類は、底部を一括している。胎土や器面調整等の特徴から、おおむね指宿式土器の底部が主体と考えられる。分布状況も、VIII 類と同様の傾向を示している。

2 分布状況について

鳴野原遺跡 A 地点の調査の結果からは、岩崎式土器や南福寺式土器などの凹線文土器系、市来式土器、松山式土器などと、指宿式土器とは、調査区内における分布の範囲や状況が異なっていることが明らかになった。つまり、環状分布を示す土器型式は、指宿式土器のみである。こうした状況は、例えば上水流遺跡などでも確認されたことであるが、本遺跡では、このことをより大きな規模で追認したといえる。指宿式土器については、編年上、前後の土器型式との関係が整理しきれていないのが課題であるが、本遺跡などで明らかになった分布状況の特徴は、この課題解明の困難さを暗示しているようでもある。

さらに、第 1 節でも述べたが、竪穴住居跡など、遺構の分布状況と指宿式土器の分布状況が必ずしも一致しないことも本遺跡の調査結果といえる。

以上、鳴野原遺跡 A 地点の遺構と土器についてまとめたが、ここであげた課題については、本県の同時期の遺跡についての検証と、少なくとも九州島内での当該期の状況を踏まえた検討が必要である。

第3節 縄文時代後の石器について

本遺跡において縄文時代後期の石器として扱ってきたのは、Ⅱ層中の石器である。しかしながら、Ⅱ層中から石槍が2点出土しており、この出土は「第3章第3節1(3) 縄文時代後期の調査」の項で述べたように、縄文時代早期の石器が後期の遺構構築の際に紛れ込んだ可能性が高い。そこでこれを除外して器種構成を確認したい。列記すると次のようになる。

石鏃・石斧(磨製石斧・ノミ形石斧・打製石斧)・石匙・搔器・削器・大型楔形石器・楔形石器・使用痕剥片・加工痕剥片・石核・磨石・砥石・敲石・石皿、以上の16器種である。このほかに石製品として垂飾がある。

この器種構成は従来知られていた縄文後期の器種構成と大きな違いはないようである。また、個々の器種内における細分を見ても同様である。たとえば、石鏃では浅い凹基・深い凹基・長身鏃・鋸歯縁鏃等があり、この時期の特徴を端的に示している。そんな中で従来知られていた器種構成と若干の違いを見せるのが、大型楔形石器と扁平小円礫を用いた砥石の存在である。

この2機種についてここで総括しておきたい。

1 大型楔形石器について

この石器の特徴は次のようであり、①を除いて楔形石器の特徴と同じで、これを大型楔形石器として分類した根拠は第3章で述べたとおりである。

- ① 5cm以上手の平大までの大きさである。
- ② 周縁からの複数の剥離で器形が作られる。
- ③ 対向する縁辺に階段状剥離がある。
- ④ 断面形が楔形を呈する。
 - a 上端が平坦，下端が尖る。
 - b 上下両端が尖る。
 - c 上下両端，もしくは上端がつぶれて丸くなる。
- ⑤ 剥離が進行したものは不整円形に近づく。

この石器をどのように位置づけたらよいのか。結論から述べると、木製品を製作する際の、丸太材を板目や柾目に荒割りをするためのクサビではないかと推測する。

その理由は、石材と④ a・b・cに上げた特徴にある。通常の楔形石器はガラス質の石材を用いており、その鋭利さによる切断力が求められるのであろう。この大型楔形石器は頁岩や硬質砂岩、粘板岩等であり、鋭利さとともにエッジや器体の粘りが求められたからではなかろうか。④ cの特徴は、使用過程における最終形態であろうし、器体の粘りを示すものであると考えられる。

言うまでもなく、クサビには一定の断面角が必要であり④の特徴はよくそれに合致する。また、④ cや⑤の特徴はクサビとして上端を叩かれ続けた結果であることは明白である。

では、その荒割り材から木製品への仕上げは何が使われたのか。ノミ形石斧であろうと思われる。この遺跡でのノミ形石斧は数が少ないものの確実に共判しており、これ以外に、細かな加工ができるであろう刃物の道具はないからである。

なお、縄文時代早期後葉の上野原遺跡第10地点で出土している礫器の一部も、木材を対象とするクサビとしての用途が推測されており、木材加工のためにこのような石器があったことは縄文時

代を通して存在していた可能性を示唆するものであろう。

2 扁平小礫の砥石について

ここで取り上げるのは、第 179 図 1327～1331 の石器である。第 3 章で述べたように、砥石としては大変不向きな大きさである。整理作業の当初は砥石として分類しておらず、石製垂飾の、穿孔を施す前段階の未製品として分類していたほどである。従来、このような砥石の存在は指摘されたことがないように思われるが、その特異さ故にここで取り上げるものである。

さて、砥石には作業台もしくは地面に置いて使うものと手に持って使うものがあり、本遺跡でも、それに相当する様な砥石も多量に出土している。

1327～1331 の砥石はそれらとは明白な一線が引けるほどの大きさの違いと石材の違いがある。石材は、通常の砥石が砂岩や安山岩などの粗粒鉱物からなる石であるのに対し、この五つの砥石はそれらより柔らかいシルト岩や泥岩などの粒のない岩石である。共通するのは、人為的な平滑面となる使用痕であり、その使用痕は砥石としての機能・用途を示すものであろう。それ故に、砥石として分類したのである。

しかし、砥石であるならば、刃物を研ぐのに使われるはずなのに、石斧などの刃物を研ぐのには不向きな大きさである。一方、使用痕は研磨に使われたと同様の痕跡である。ただ、この五つの砥石の使用痕には、通常の砥石にはあまり見られない明瞭な線状痕が残っており、しかも、幅 2 ミリメートルの側面にも強い線状痕を持つ個体が存在する。

この特徴を要約すると、①比較的柔らかい岩石である・②使用面の状況は砥石と同じである・③使用面に強い線状痕を持つ、ということであり、機能としては研磨であるが、用途としては刃物対象の砥石ではないと思われる。もちろん、仕上砥として柔らかい岩石の砥石も存在するのであるが、「柔らかいから」だけで刃物対象の砥石として否定するものではない。

この特徴、すなわち、大きさと使用痕から、対象物に指先で押し当てて滑らせることで、対象物を研磨していると思われる。

では、この五つの砥石の対象物は何か。あえて大胆な推測をすれば、土器の器面調整・器面研磨の道具ではないか。骨角器・貝製品等の研磨の可能性も否定できないが、幅 2 ミリメートルの側面にも強い線状痕を持つ個体があることを考えれば、骨角器・貝製品等を対象物と考えるよりは、土器が対象であると考えの方が妥当性が高いように思われる。

今後、遺跡内での出土位置の詳細な検討や類例の集積を行い、この問題を検証したい。

以上、鳴野原遺跡 A 地点出土の縄文時代後期の石器の特徴を抽出できたのではないかと思う。特に、大型楔形石器の存在は、手近にある石材を用いて木製品を作る鳴野原遺跡の人々があったことを示すものであり、この地域の縄文時代における生業の一端を明らかにできたのではなかろうか。

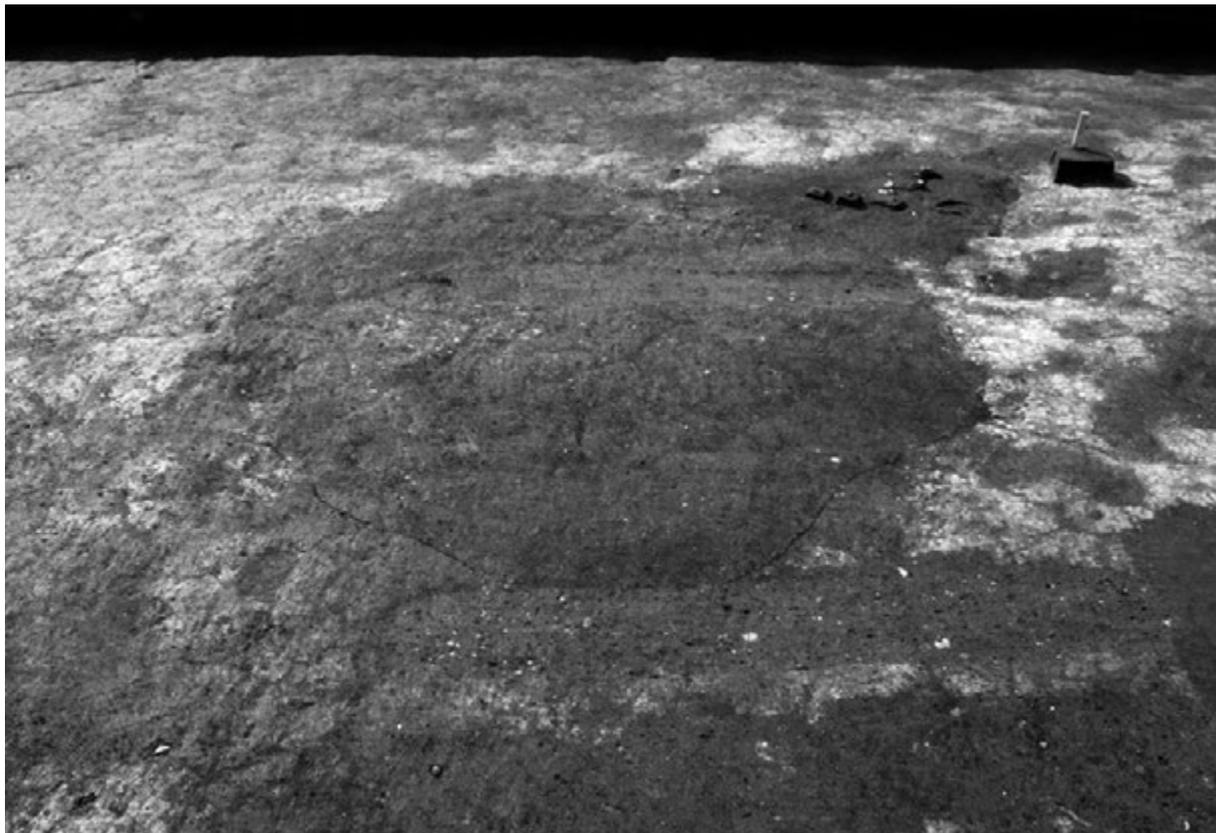
写 真 图 版



竖穴住居跡 1号完掘



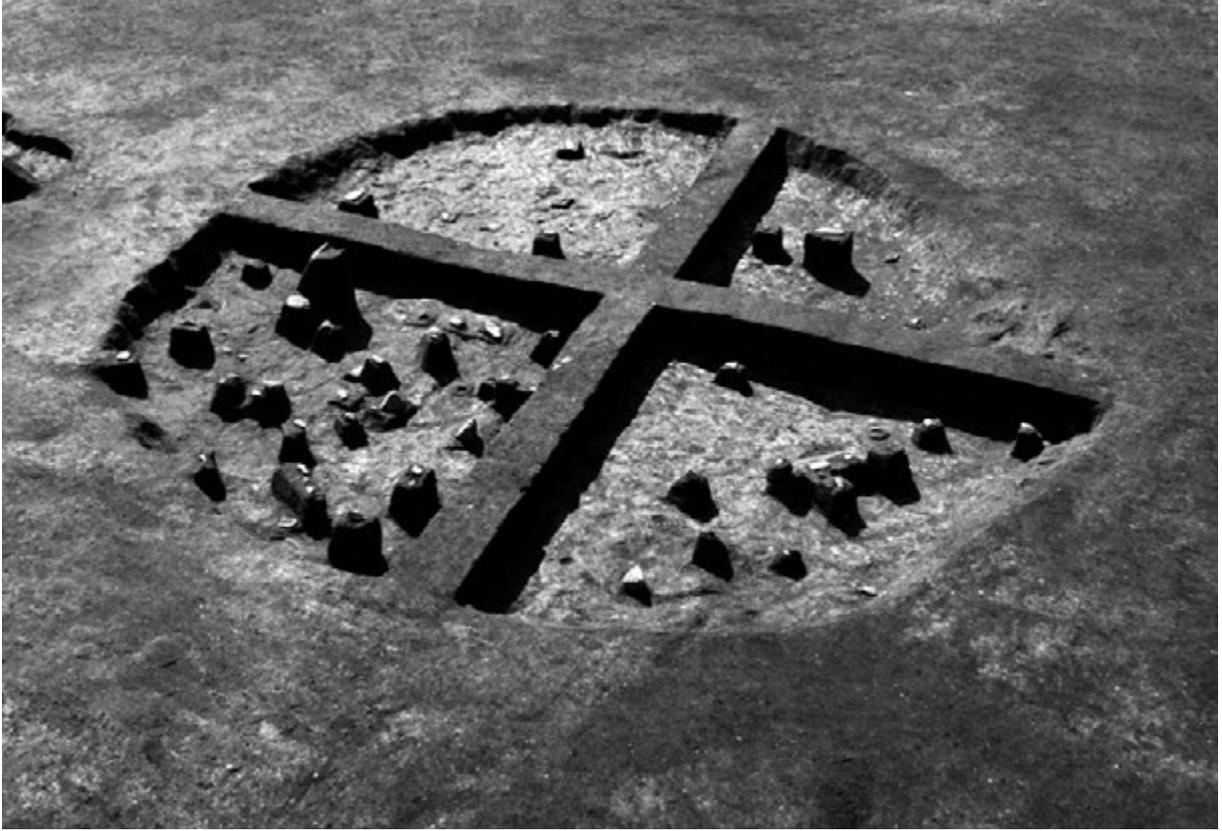
竖穴住居跡 2号完掘



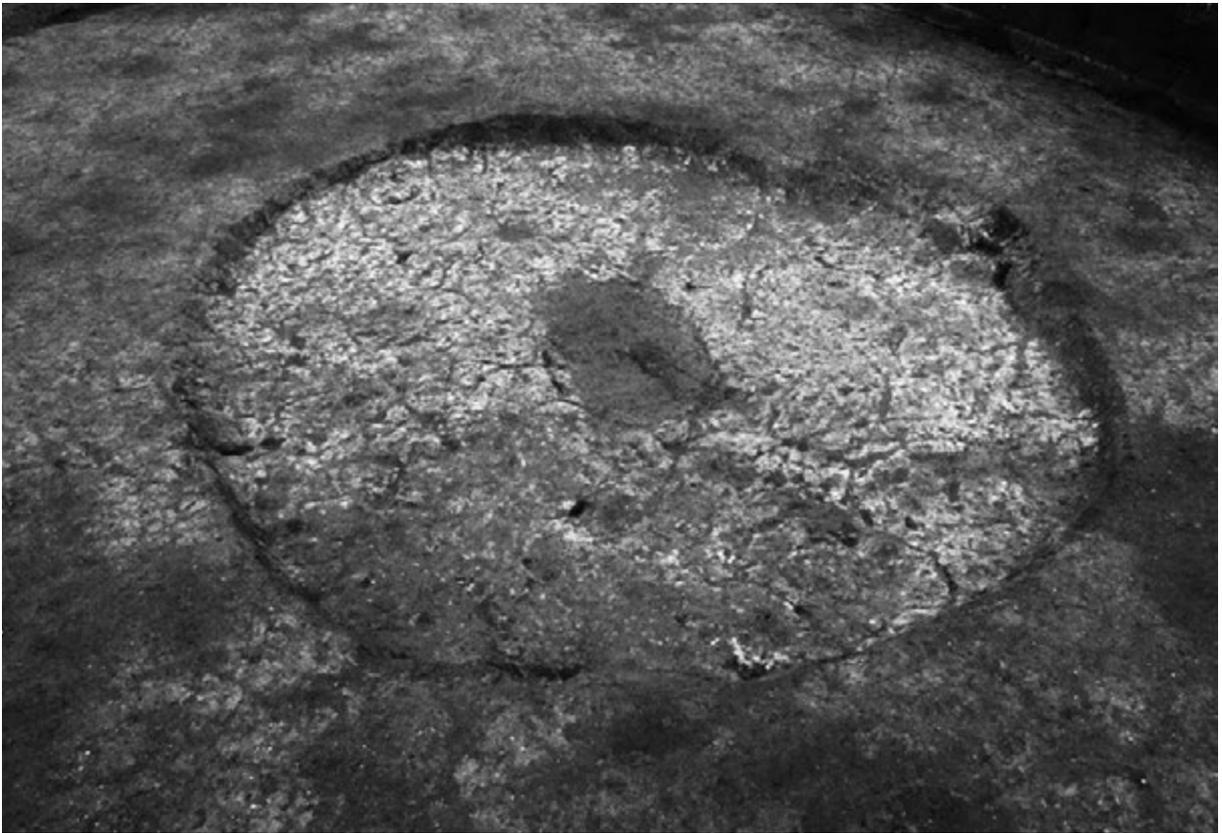
竖穴住居跡 3号検出面



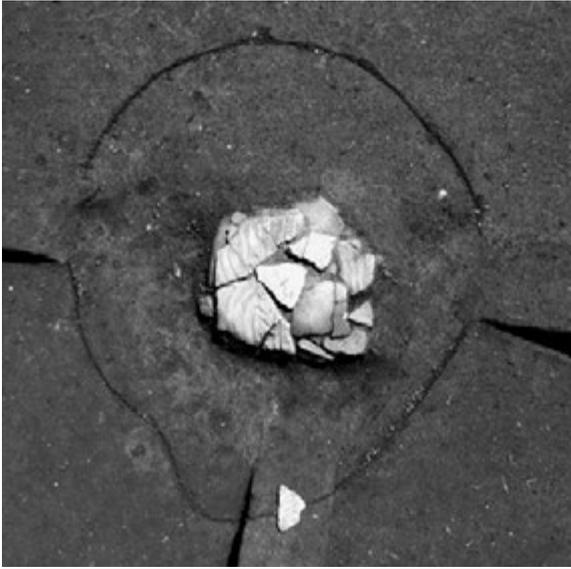
竖穴住居跡 3号完掘



竖穴住居跡 4号遺物出土状况



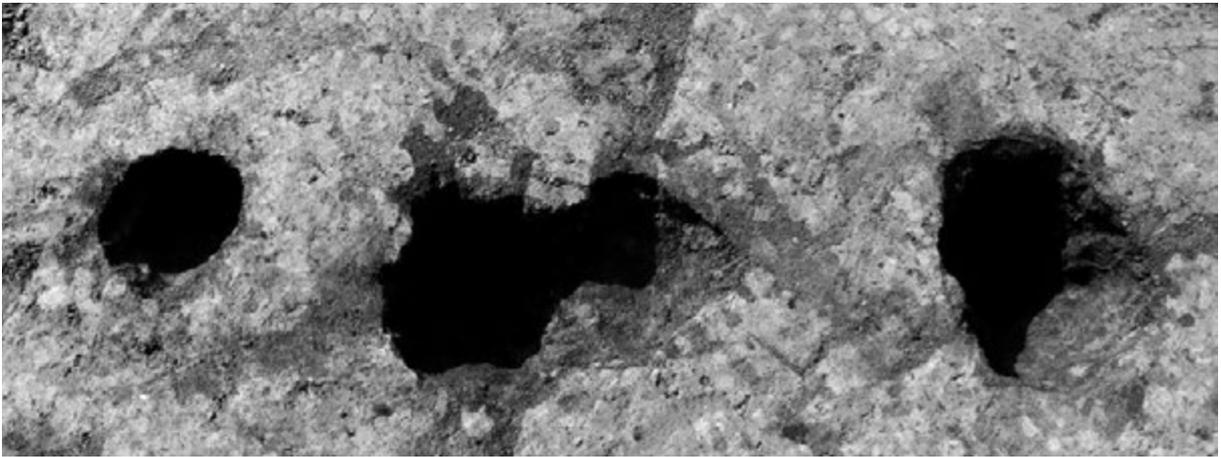
竖穴住居跡 4号床面



土坑A 1号



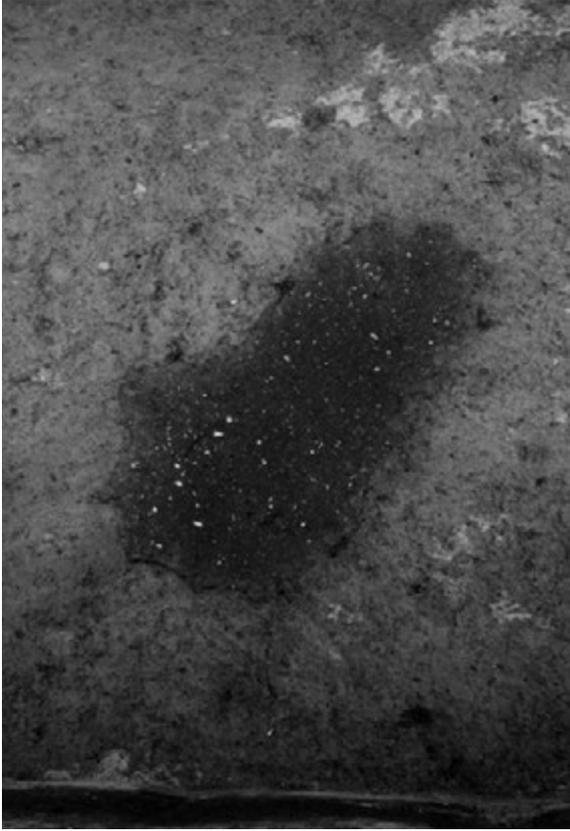
土坑A 7号



土坑A 7号完掘



土坑A 8号



土坑 B 1 検出面



土坑 B 1 完掘



土坑 B 11 完掘



土坑 B 19 完掘



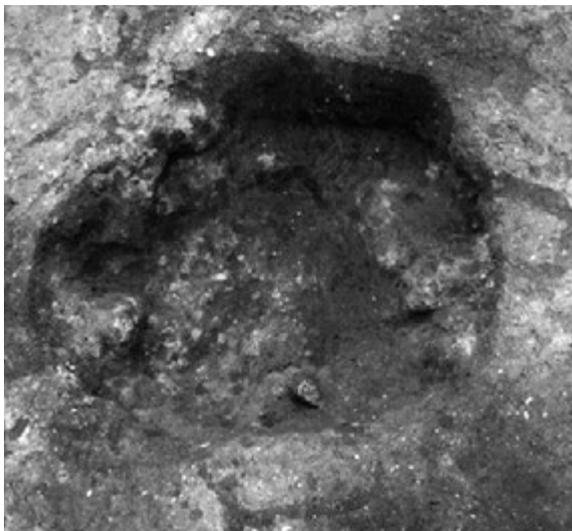
土坑 B 9 遺物出土狀況



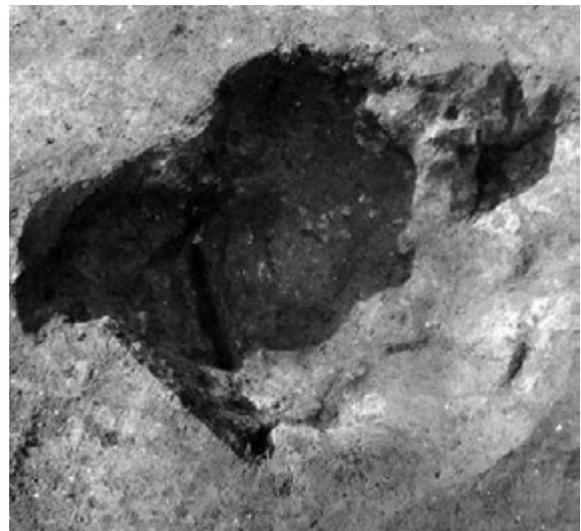
土坑 B 2 完掘



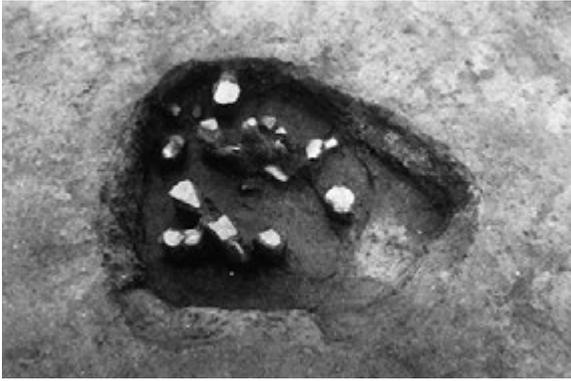
土坑 B 9 完掘



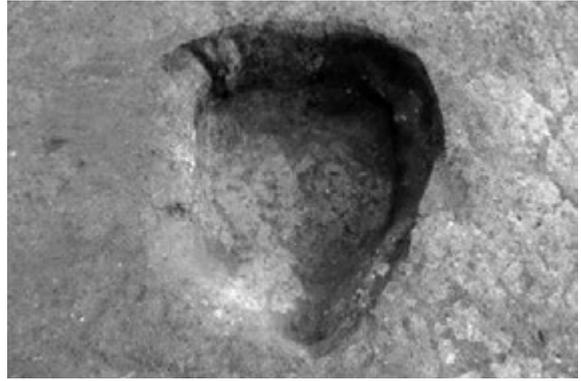
土坑 B 15 完掘



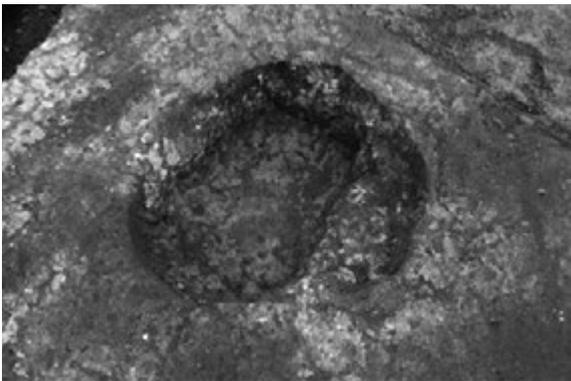
土坑 B 19 完掘



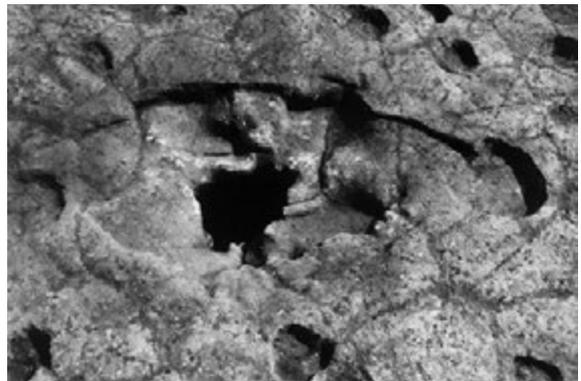
土坑 B 20 遺物出土狀況



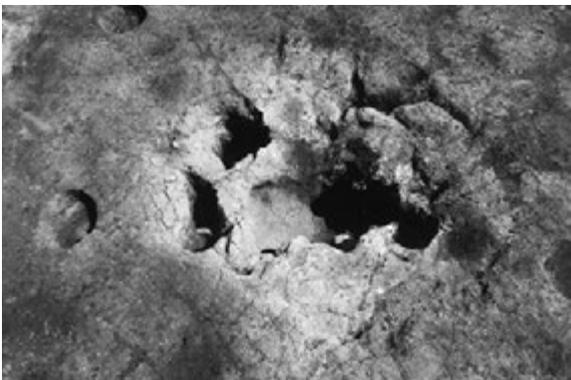
土坑 B 20 完掘



土坑 B 25 完掘



土坑 B 29 完掘



土坑 B 31 完掘



土坑 B 32 完掘



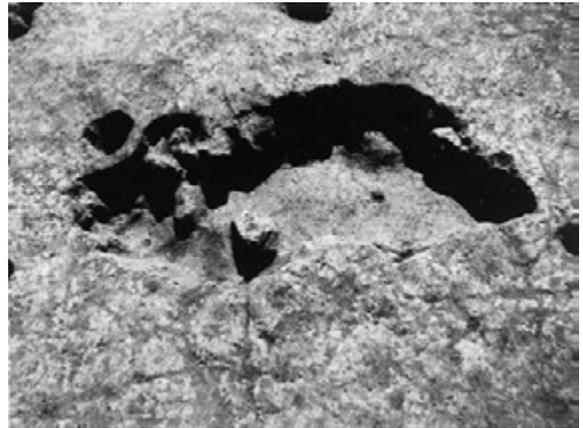
土坑 B 33 完掘



土坑 B 37 完掘



土坑 B 38 完掘



土坑 B 41 完掘



集石 1



集石 7



C-6 区 遺物集中カ所



石包丁出土状況



土坑C群



土坑C 1 完掘



土坑C 2 完掘



土坑C 3 半截



土坑C 3 完掘



土坑C 4 完掘



土坑C 6 完掘



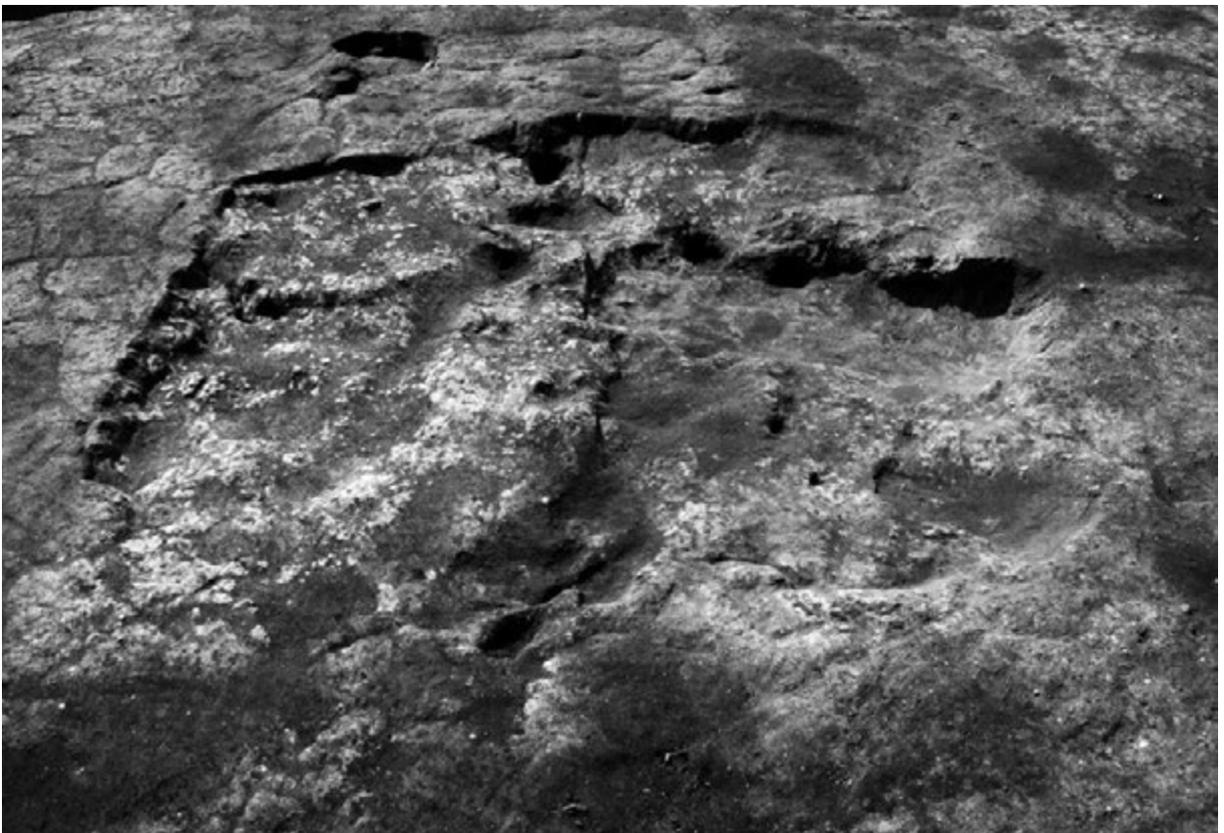
竖穴住居跡 7号遺物出土状況



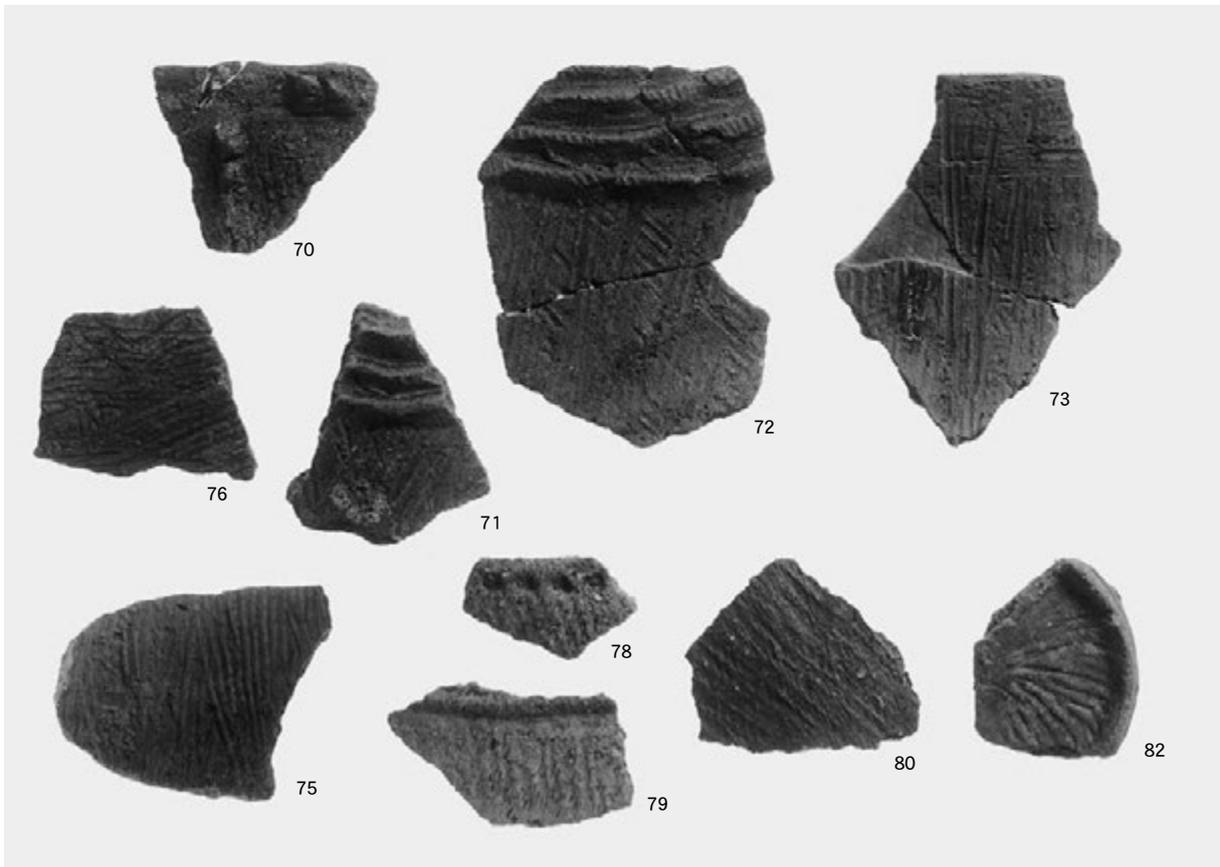
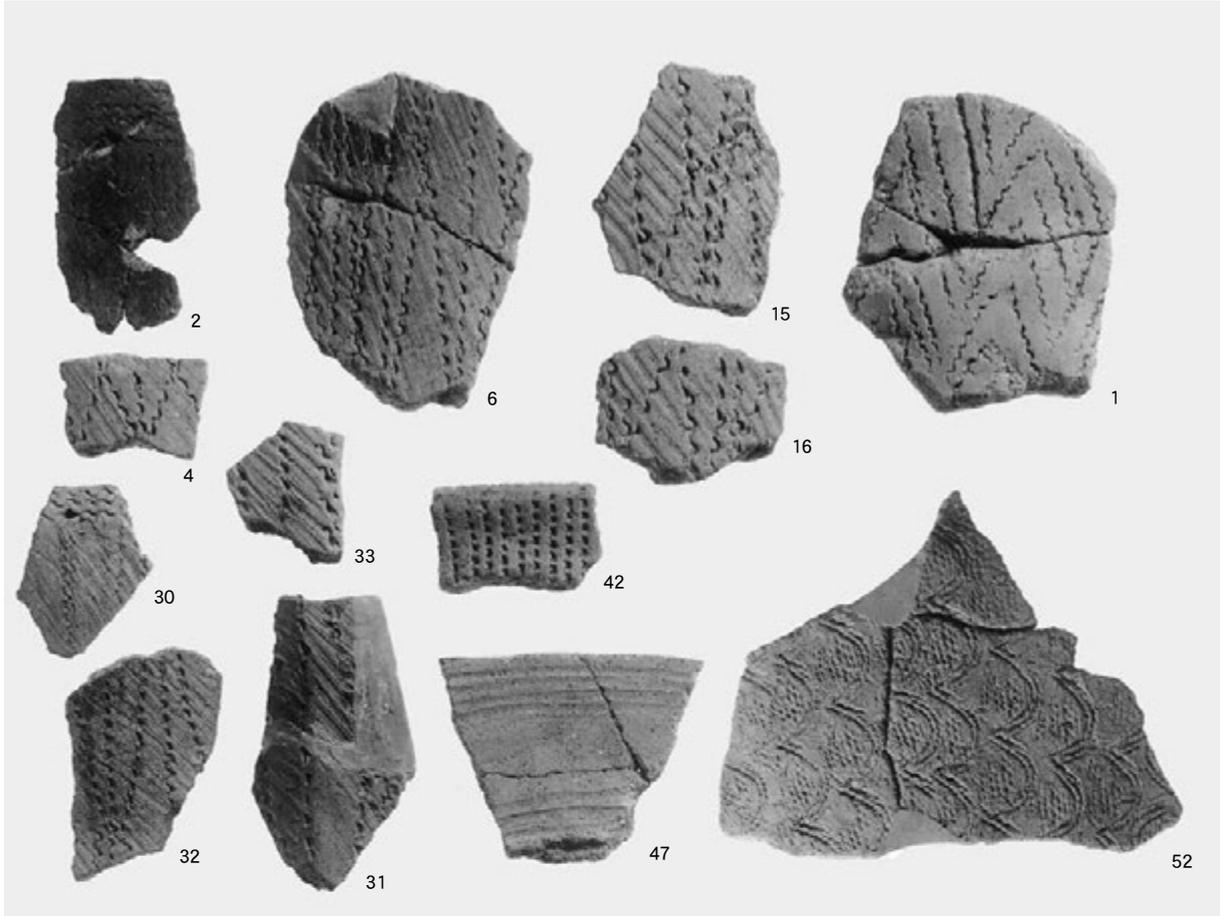
竖穴住居跡 7号完掘



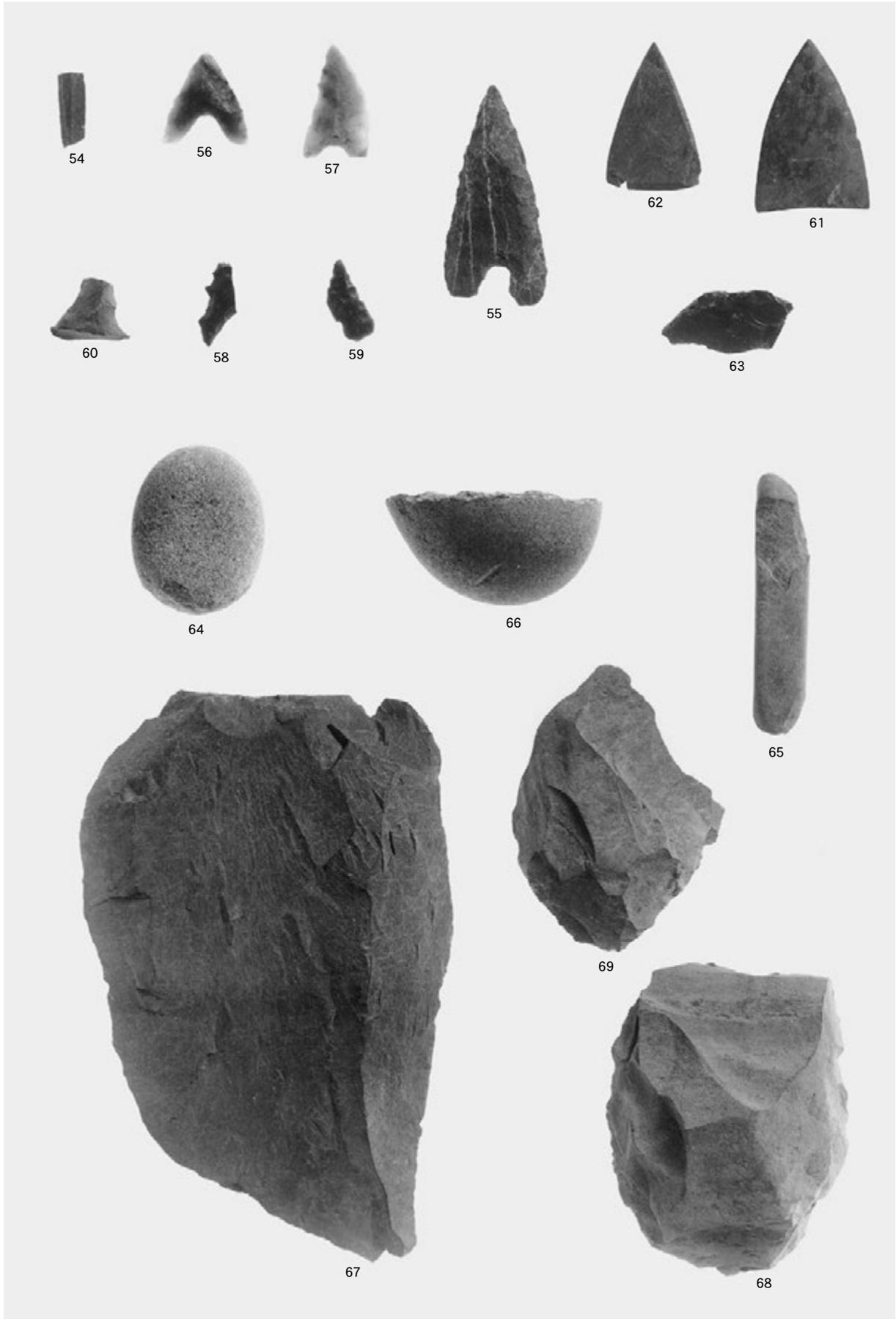
竖穴住居跡 8号検出面



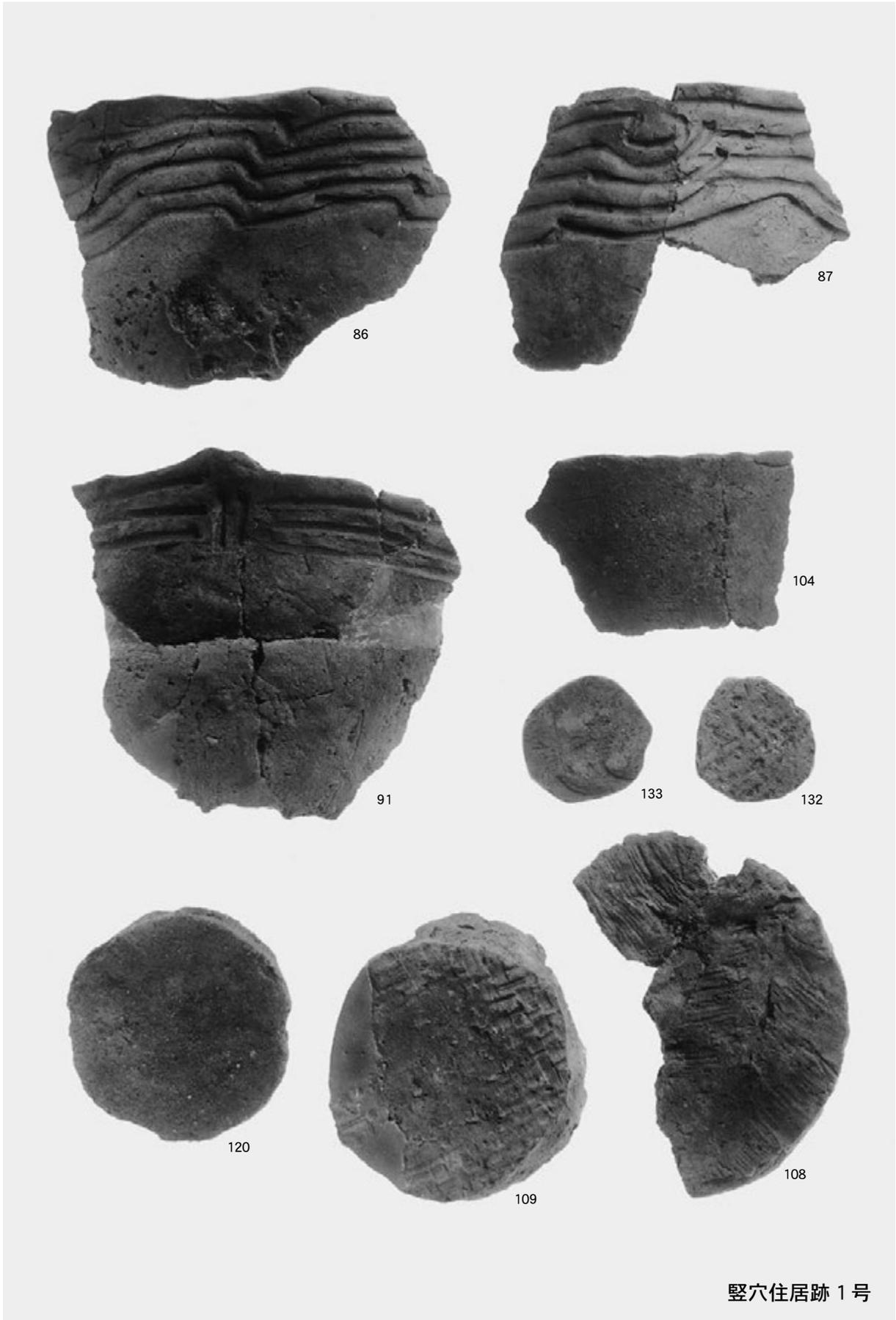
竖穴住居跡 8号完掘



縄文時代早期(上段)・前期(下段) 土器

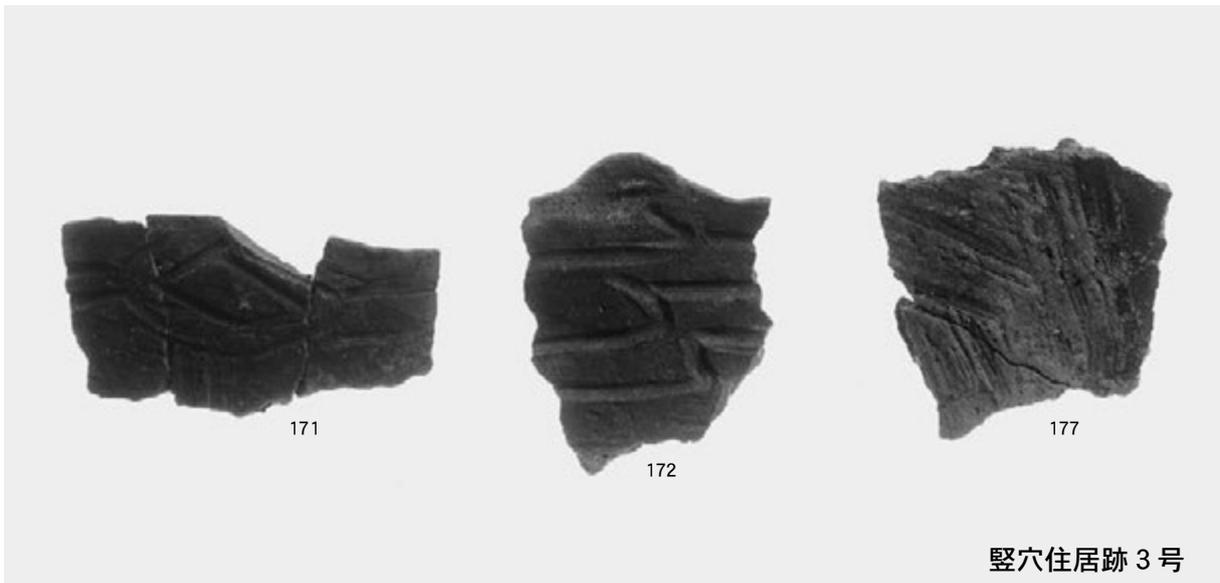
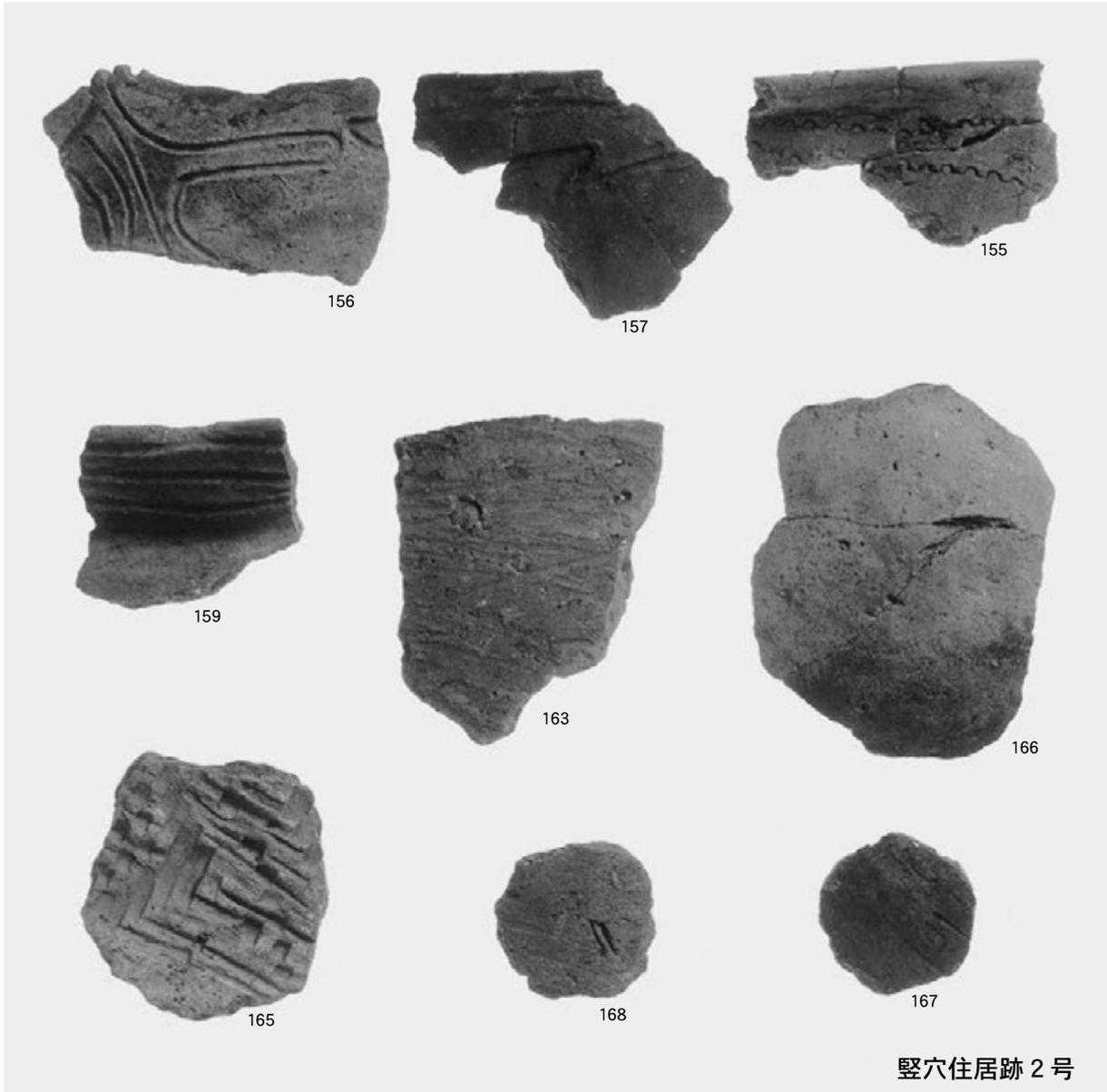


縄文時代早期 石器

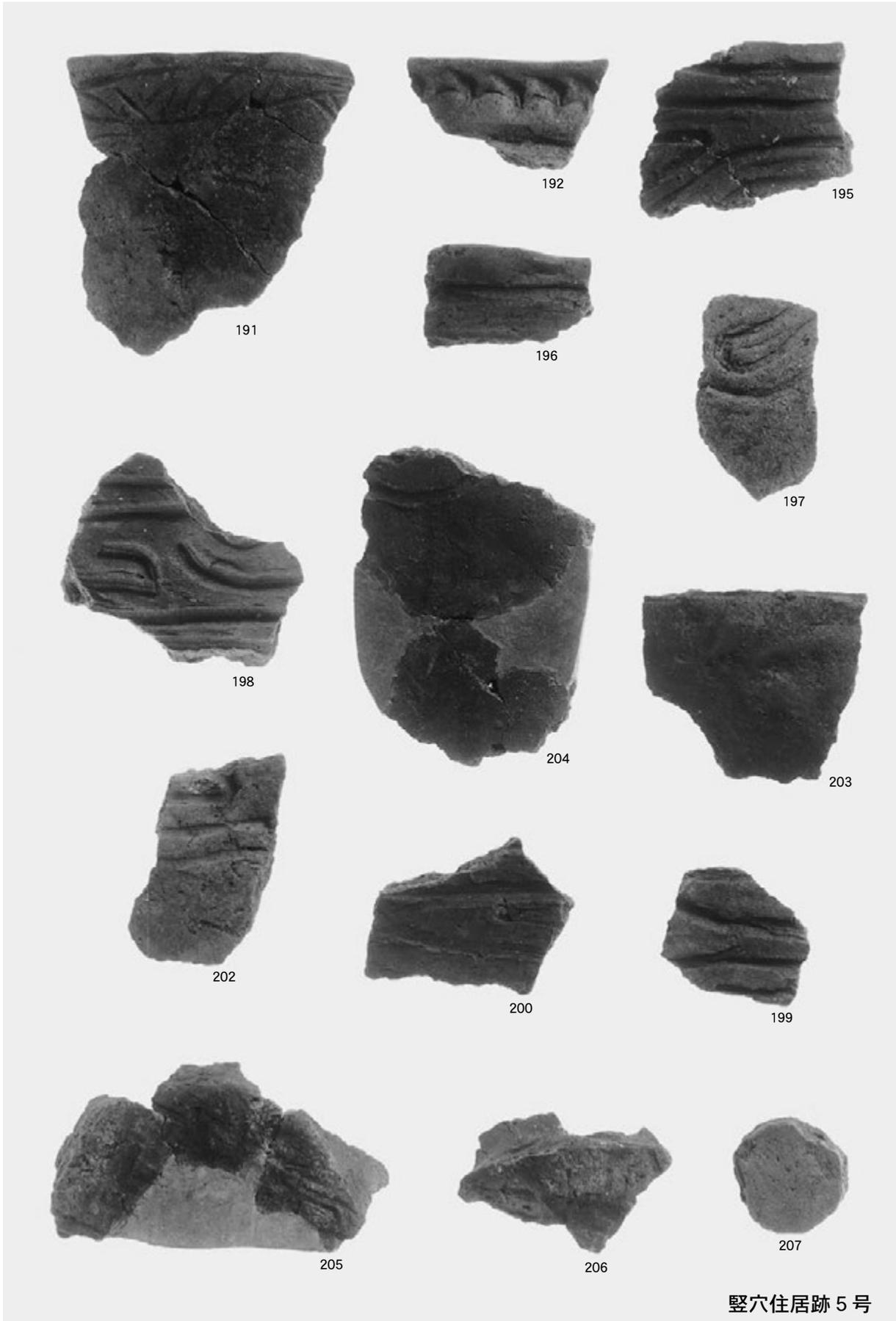


竖穴住居跡 1号

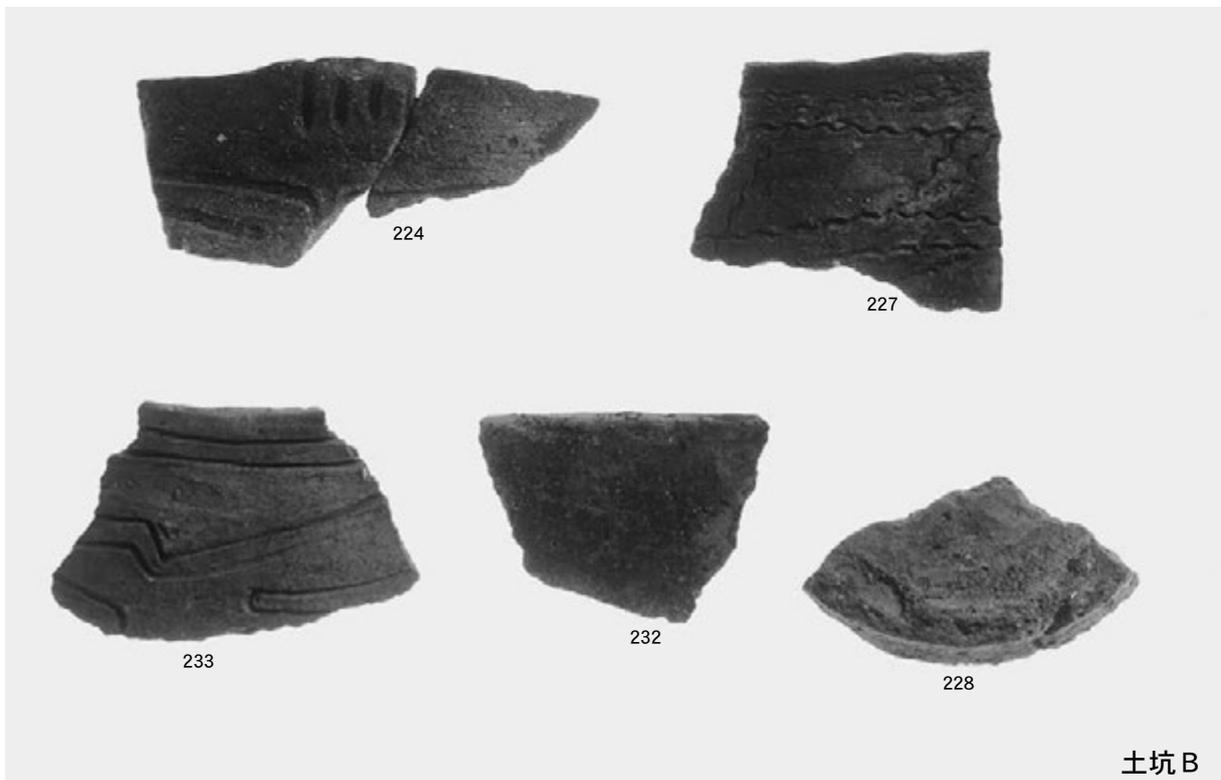
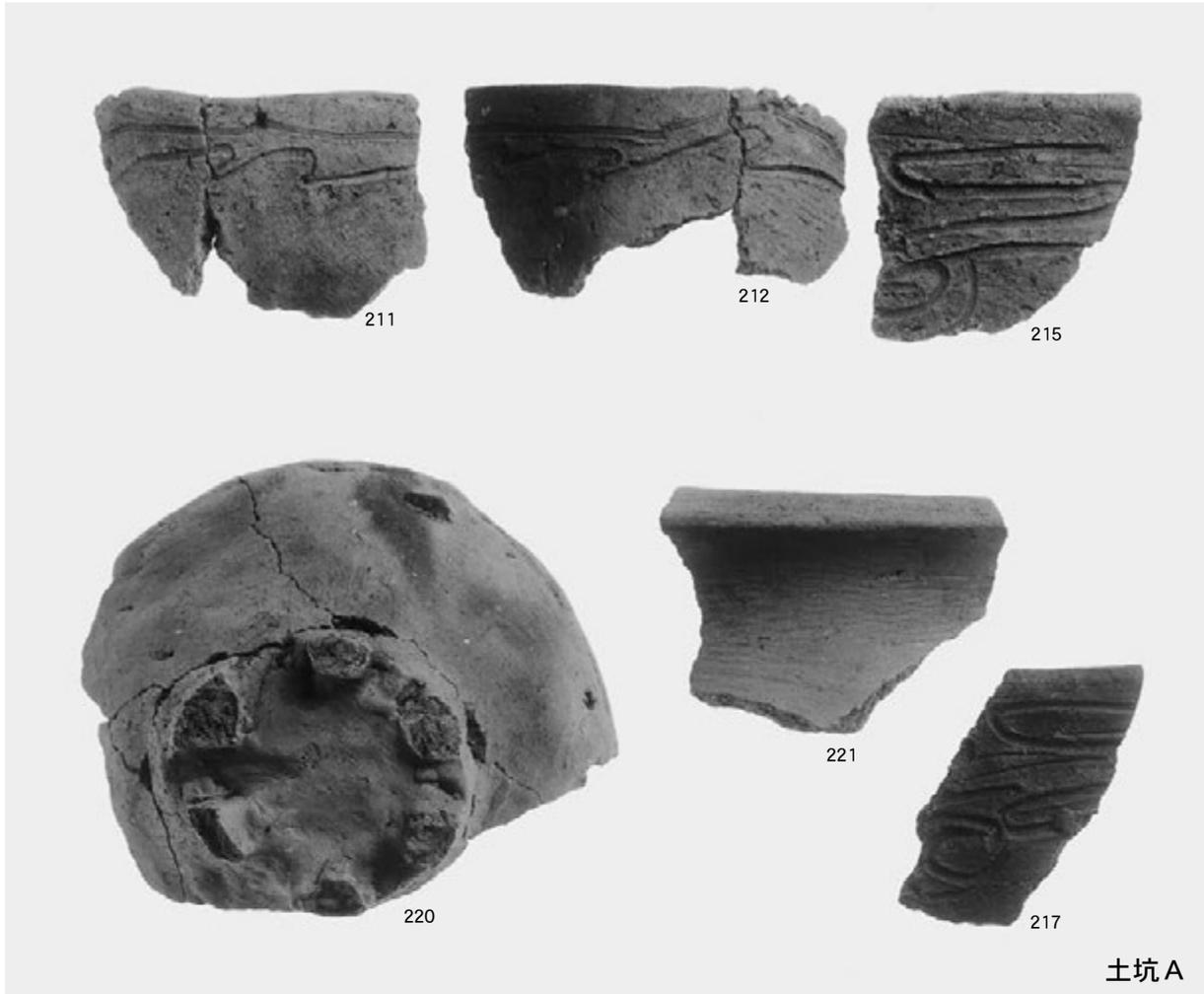
縄文時代後期遺構出土 土器



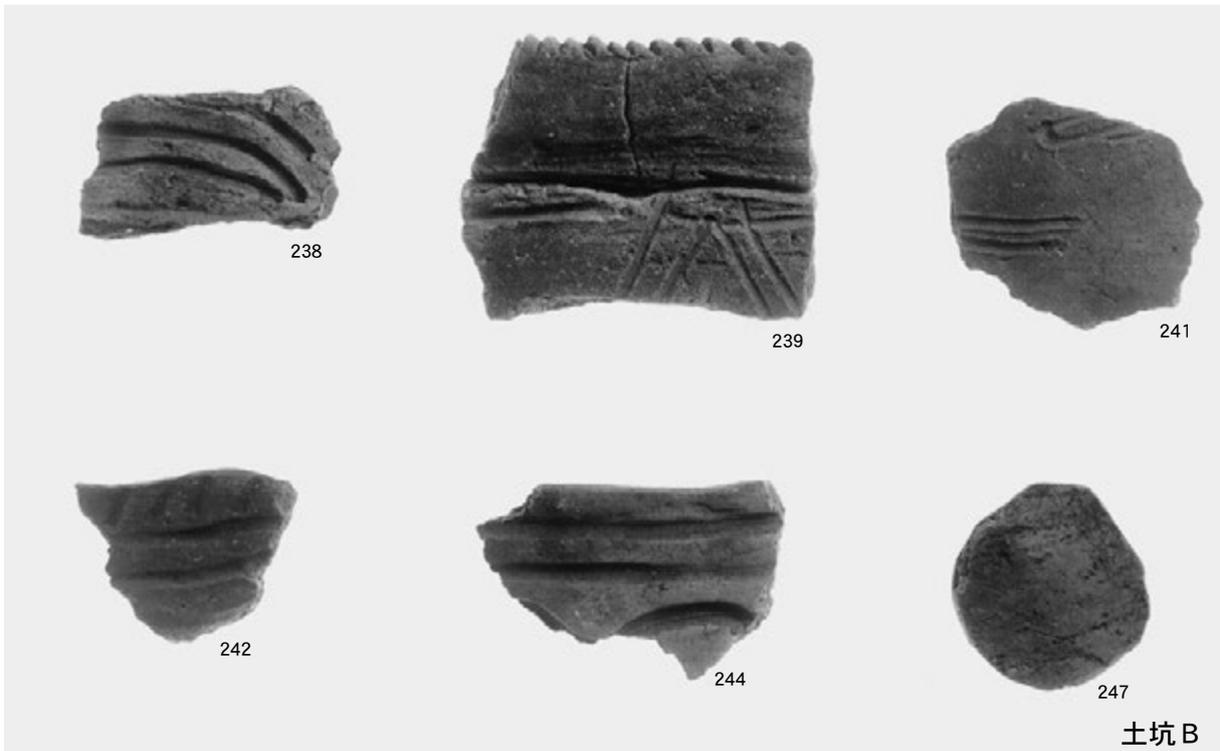
縄文時代後期遺構出土 土器



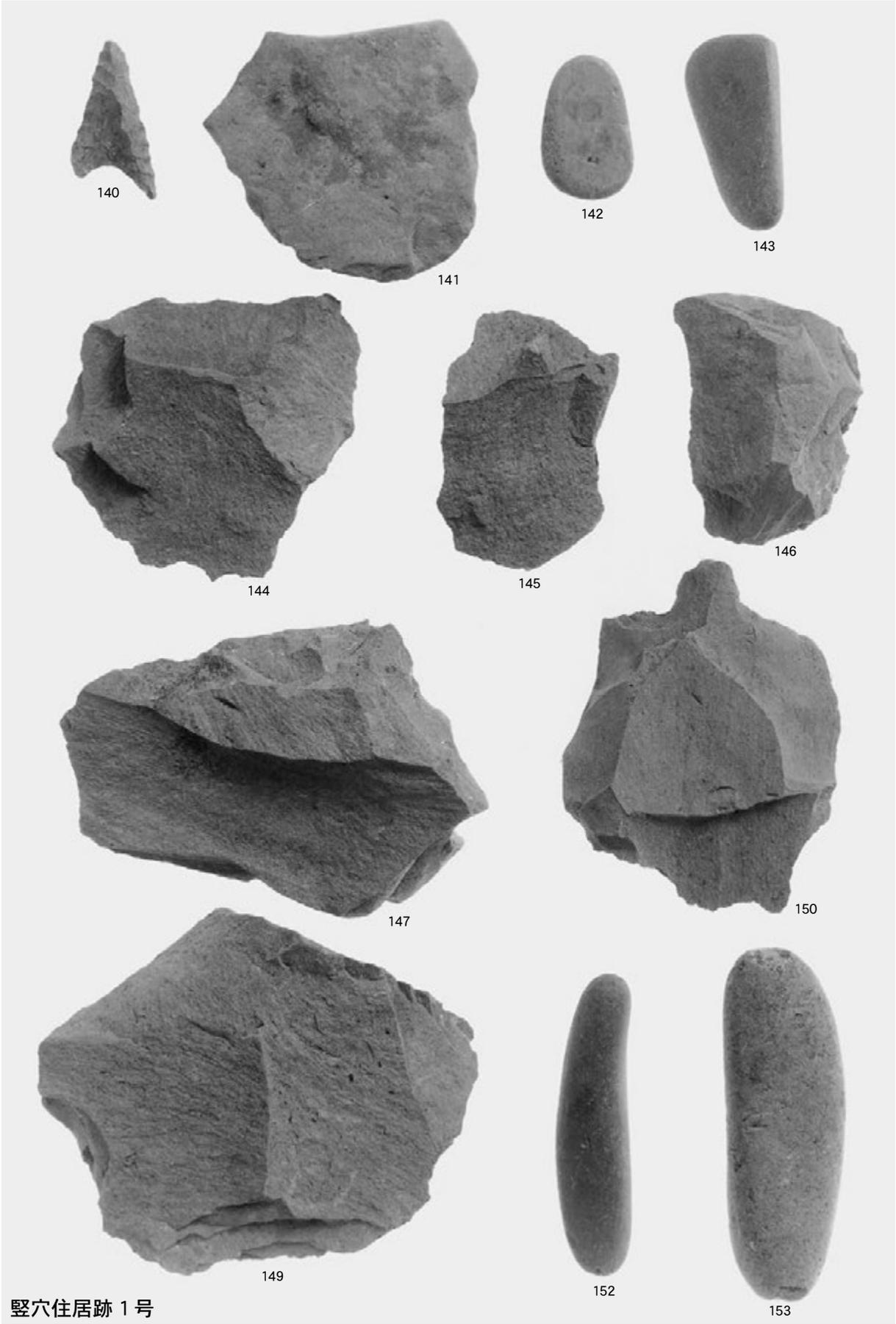
縄文時代後期遺構出土 土器



縄文時代後期遺構出土 土器



縄文時代後期遺構出土 遺物



竖穴住居跡 1号

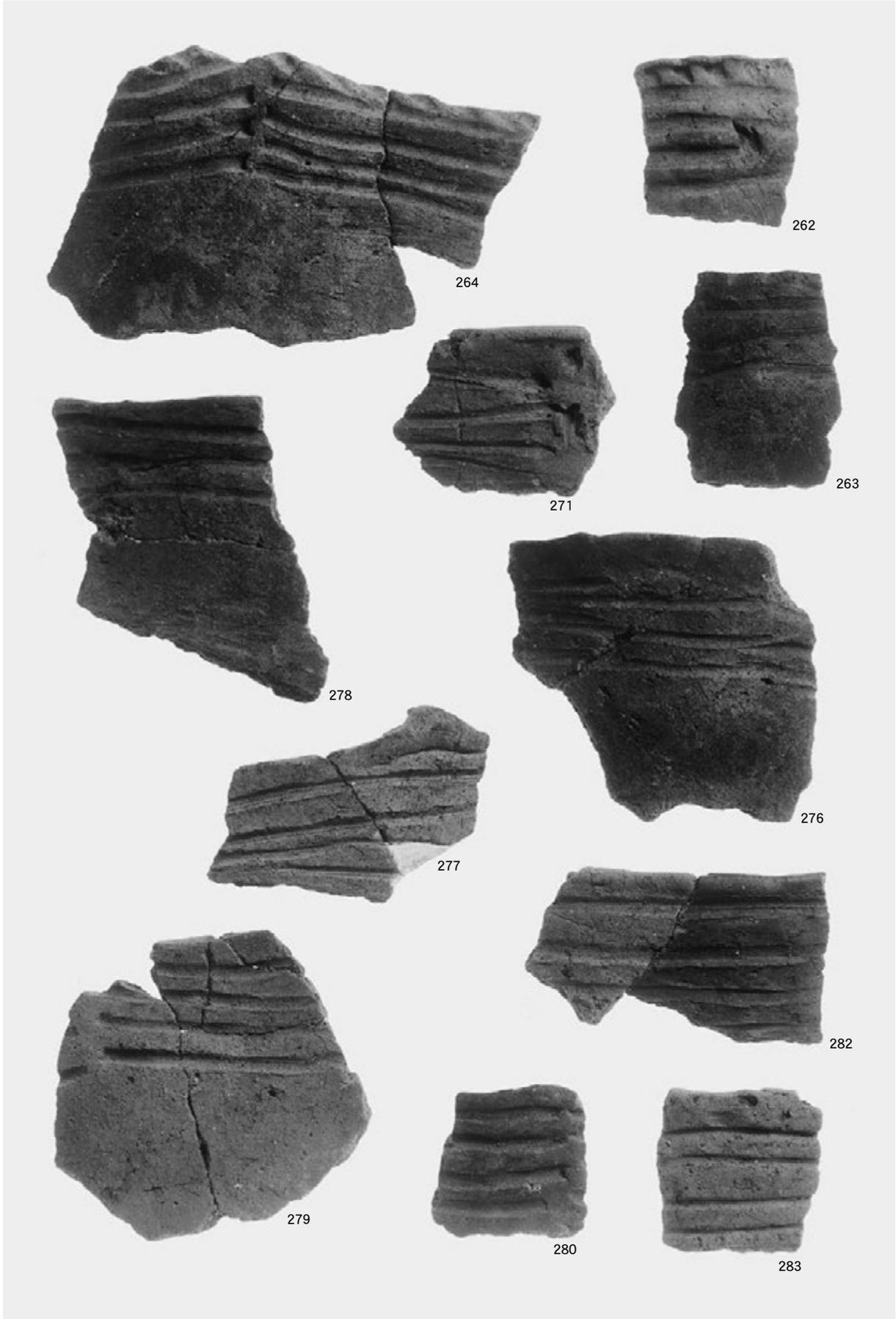
縄文時代後期遺構出土 石器



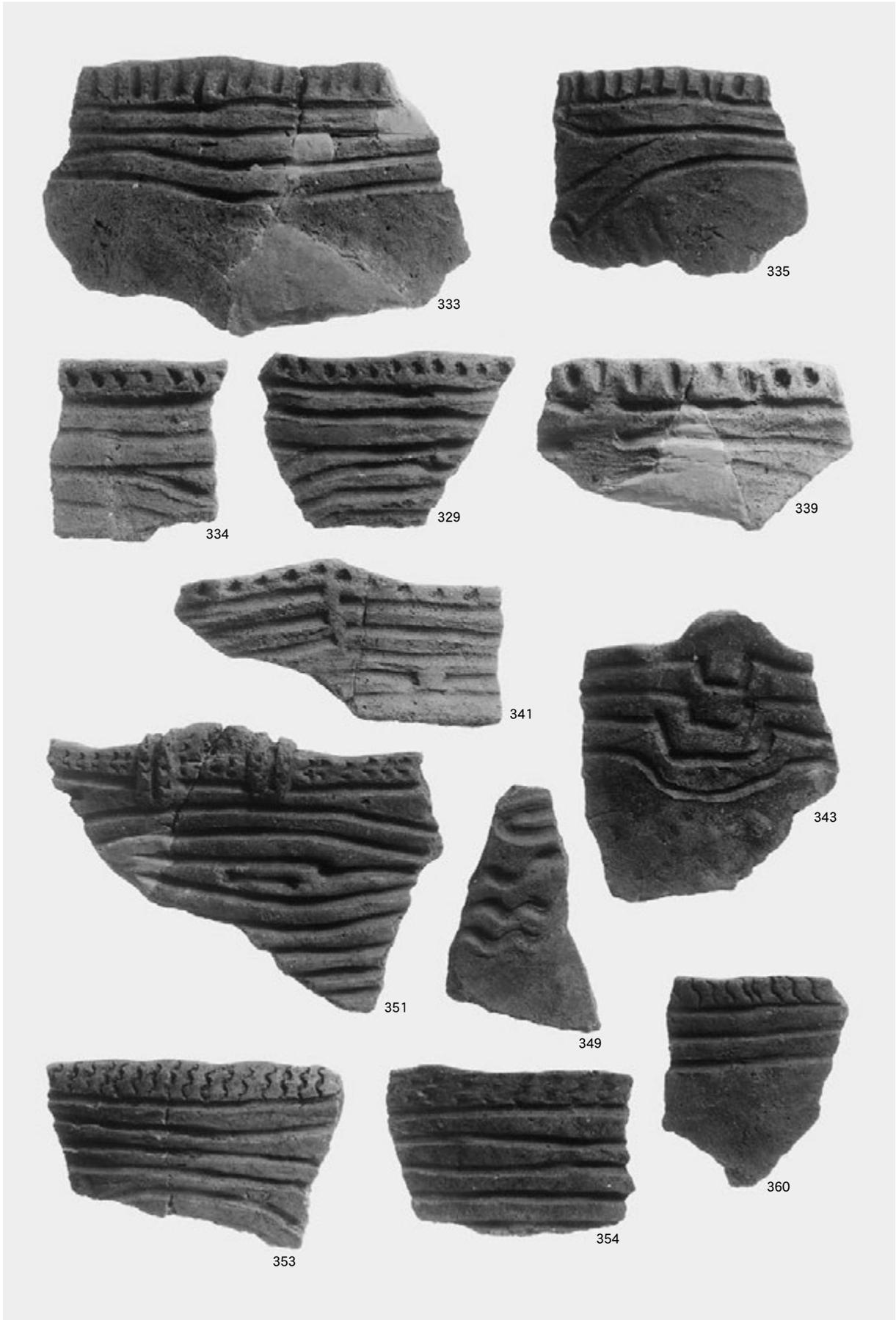
縄文時代後期 土器



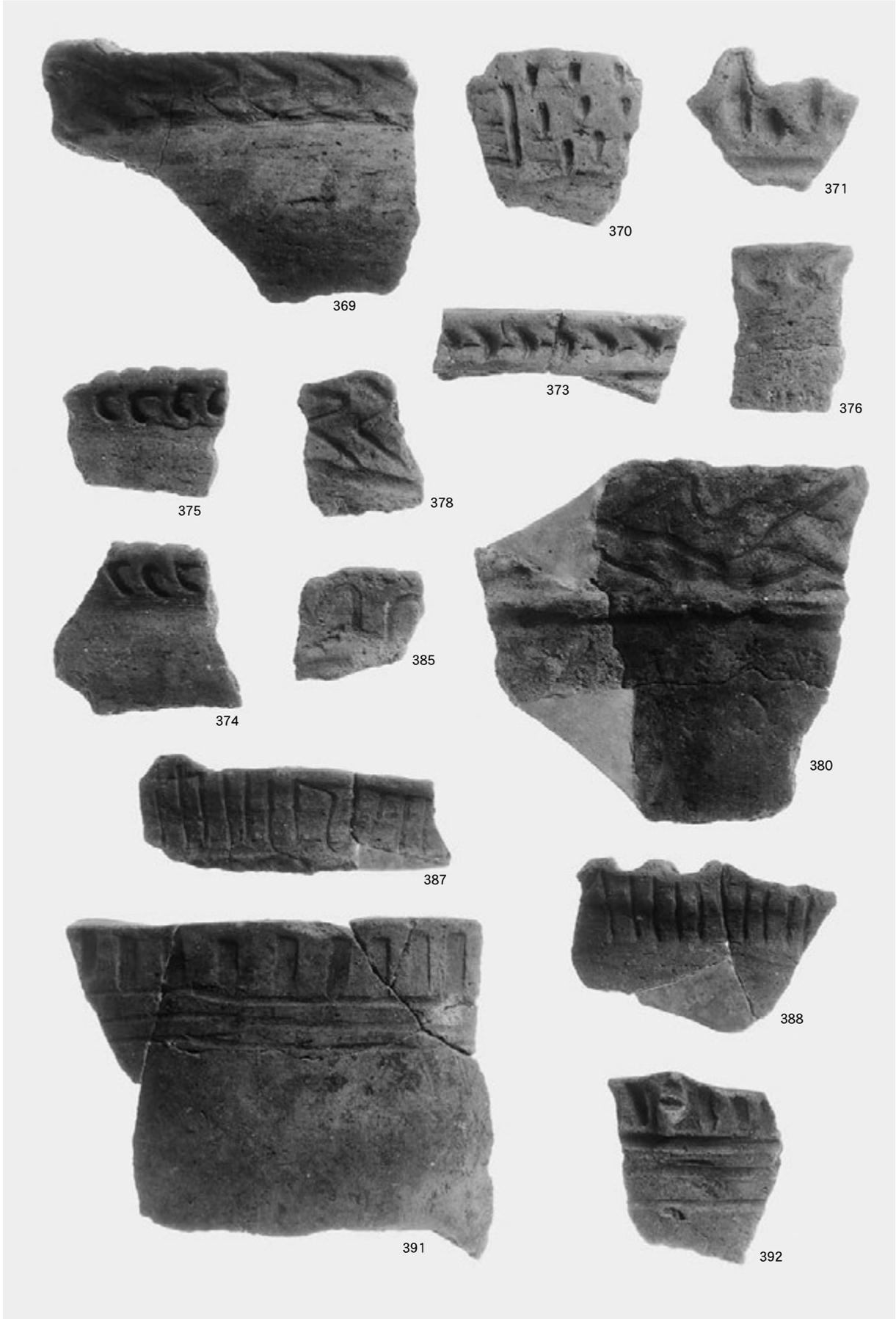
縄文時代後期 土器



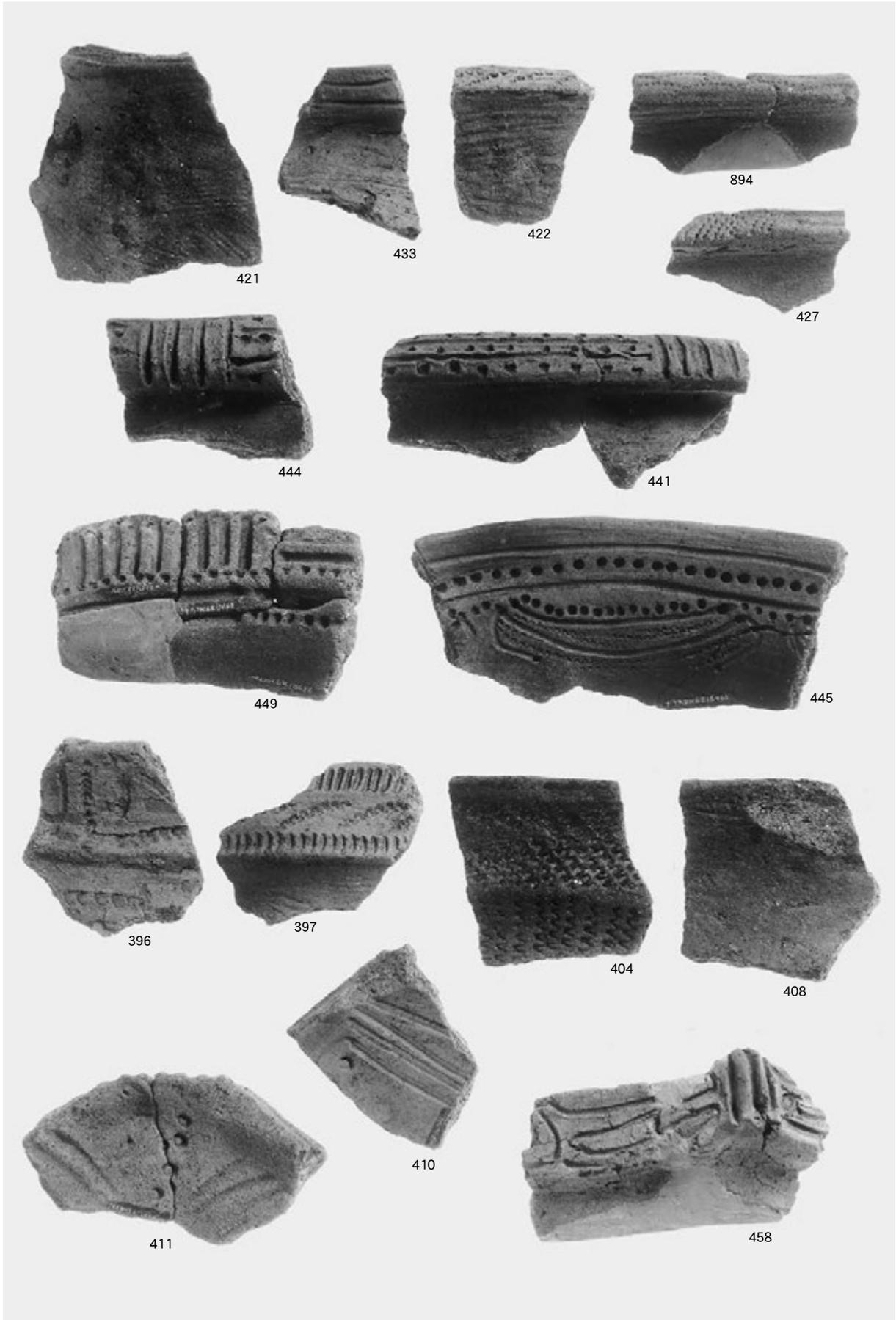
縄文時代後期 土器



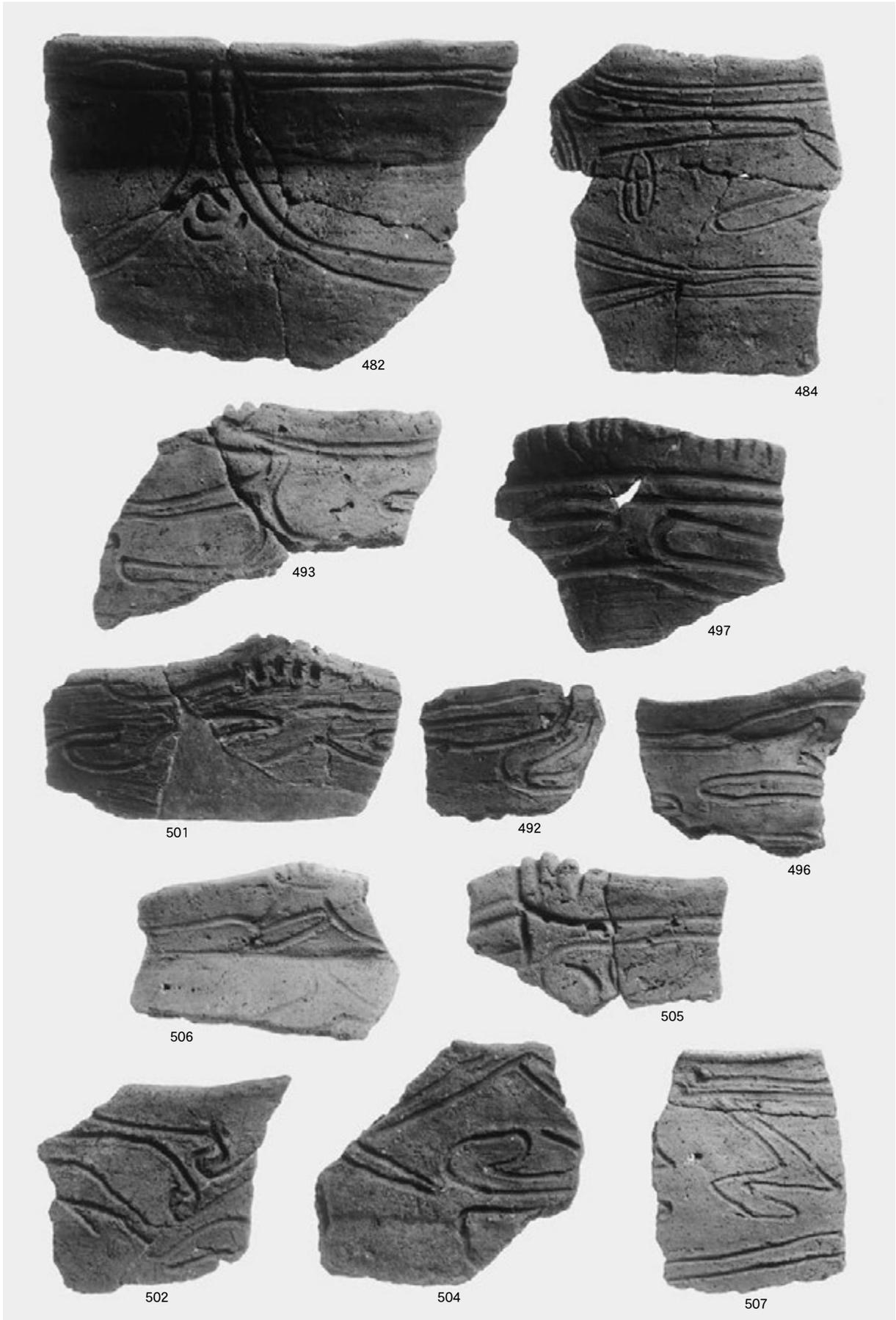
縄文時代後期 土器



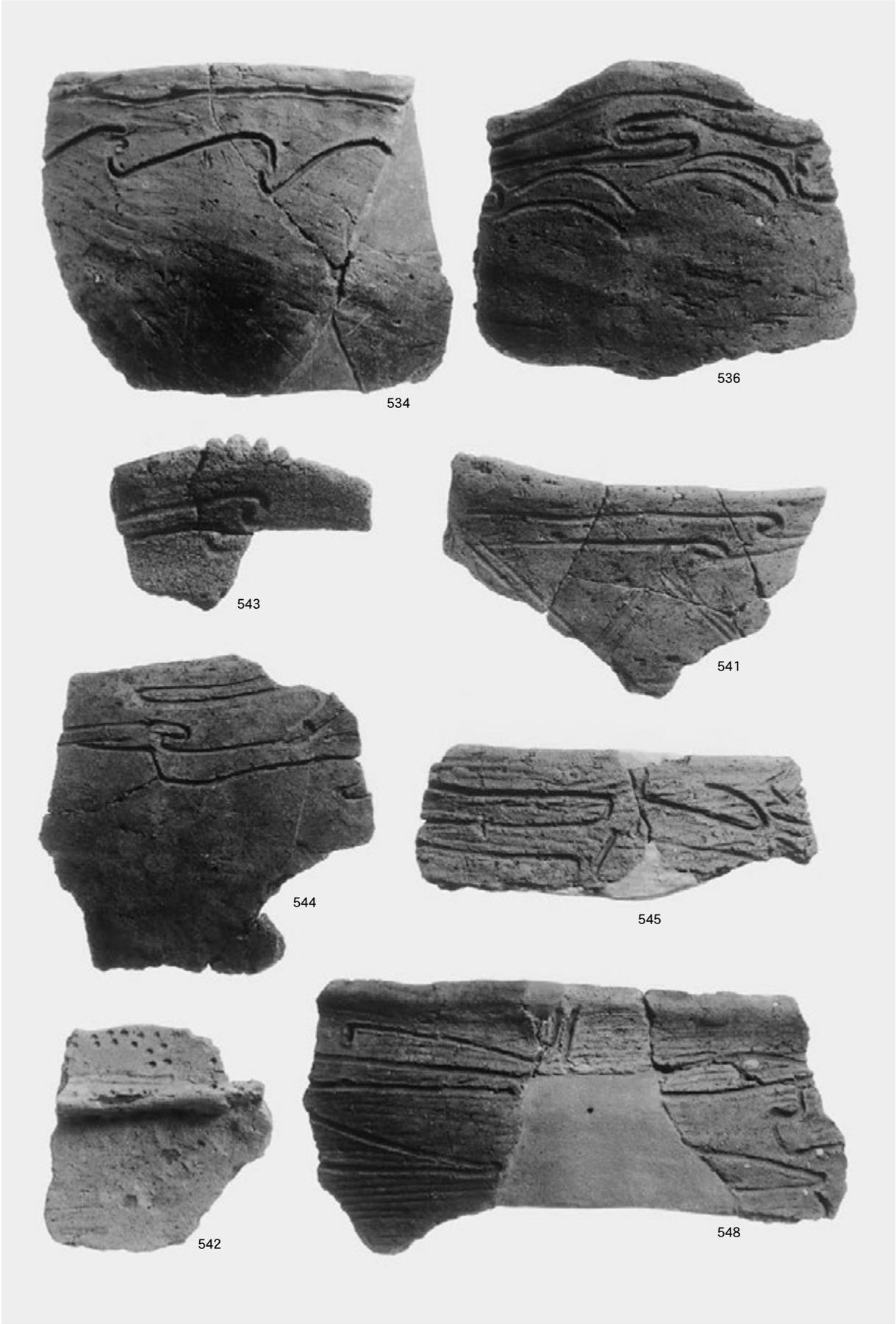
縄文時代後期 土器



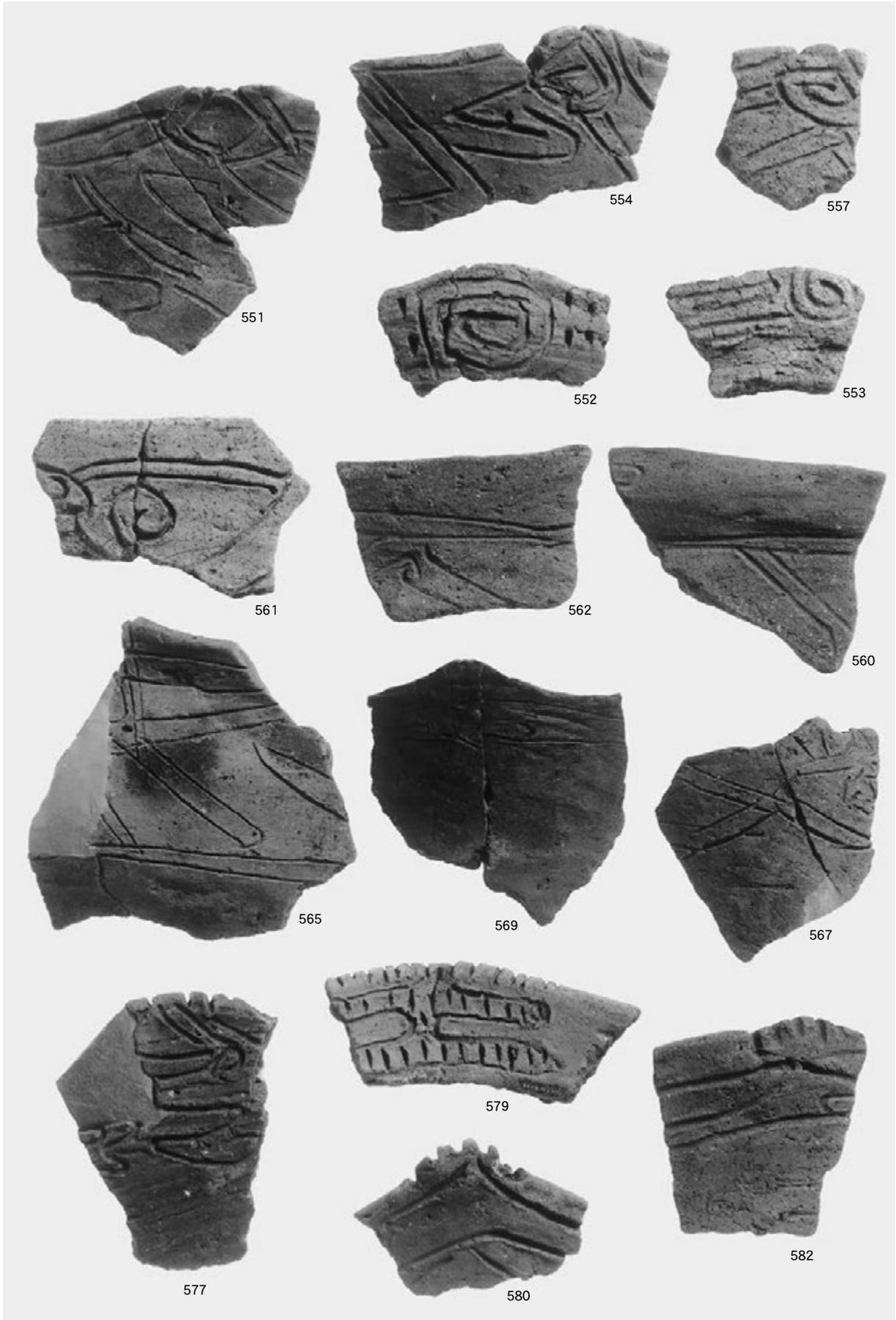
縄文時代後期 土器



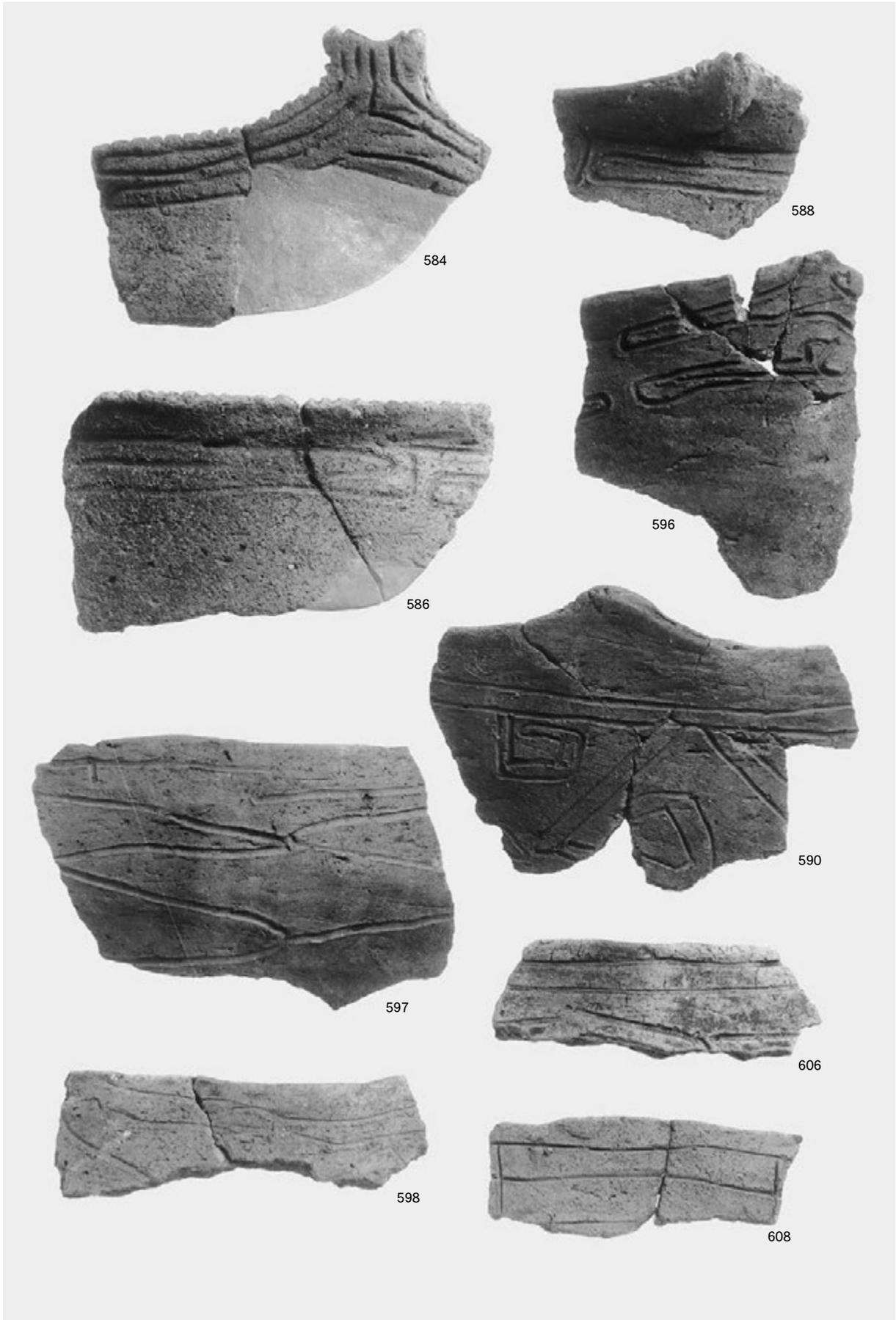
繩文時代後期 土器



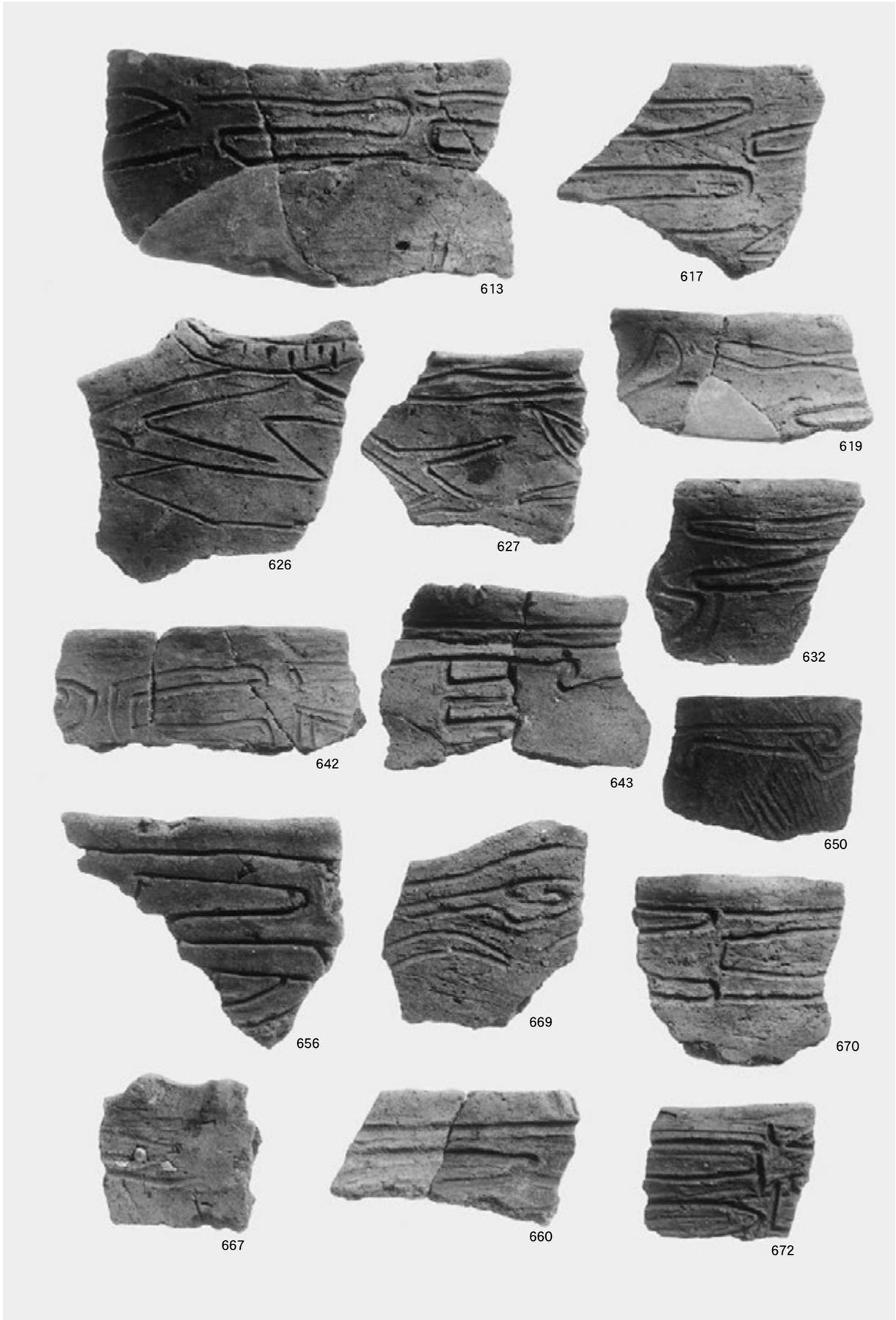
縄文時代後期 土器



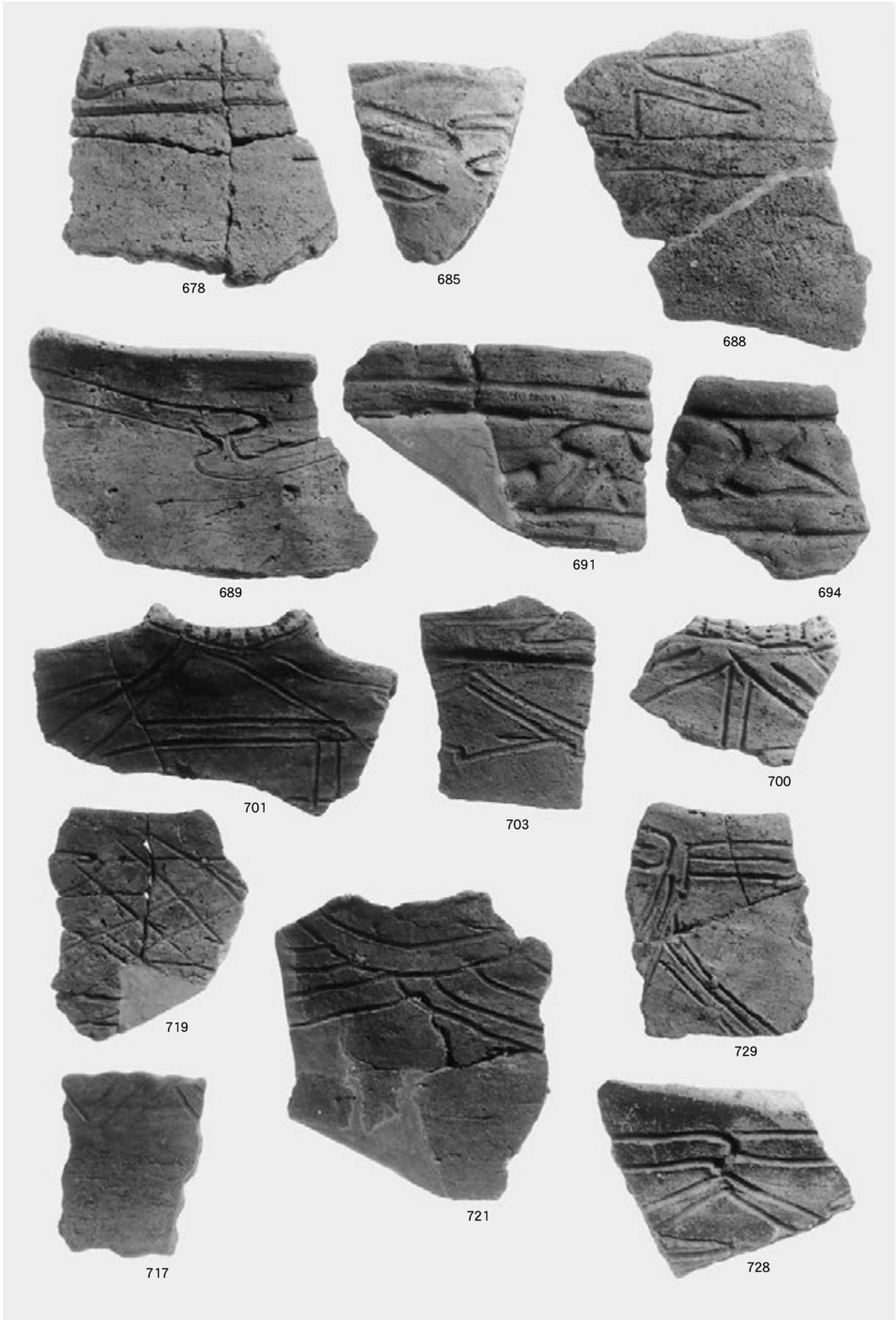
繩文時代後期 土器



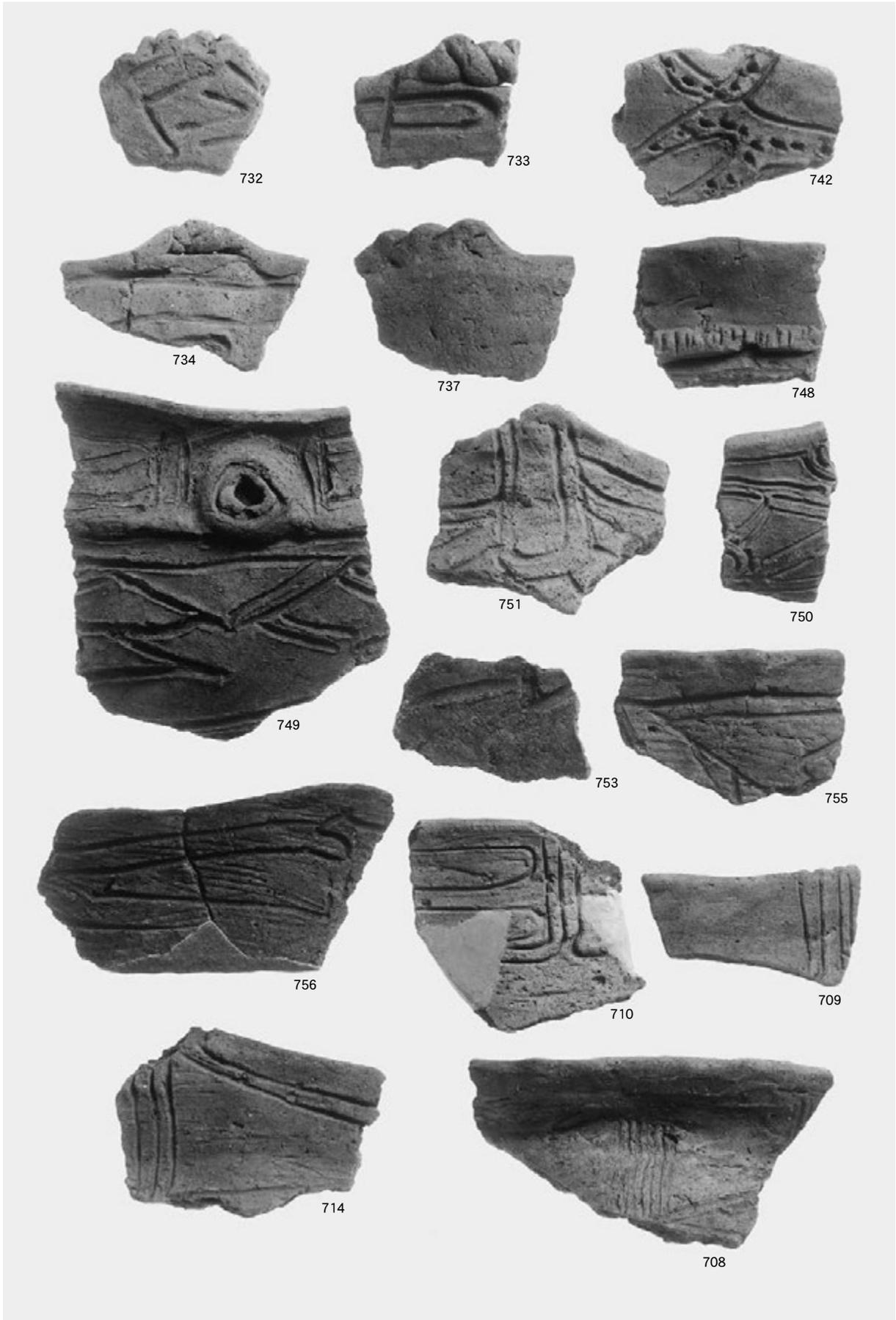
縄文時代後期 土器



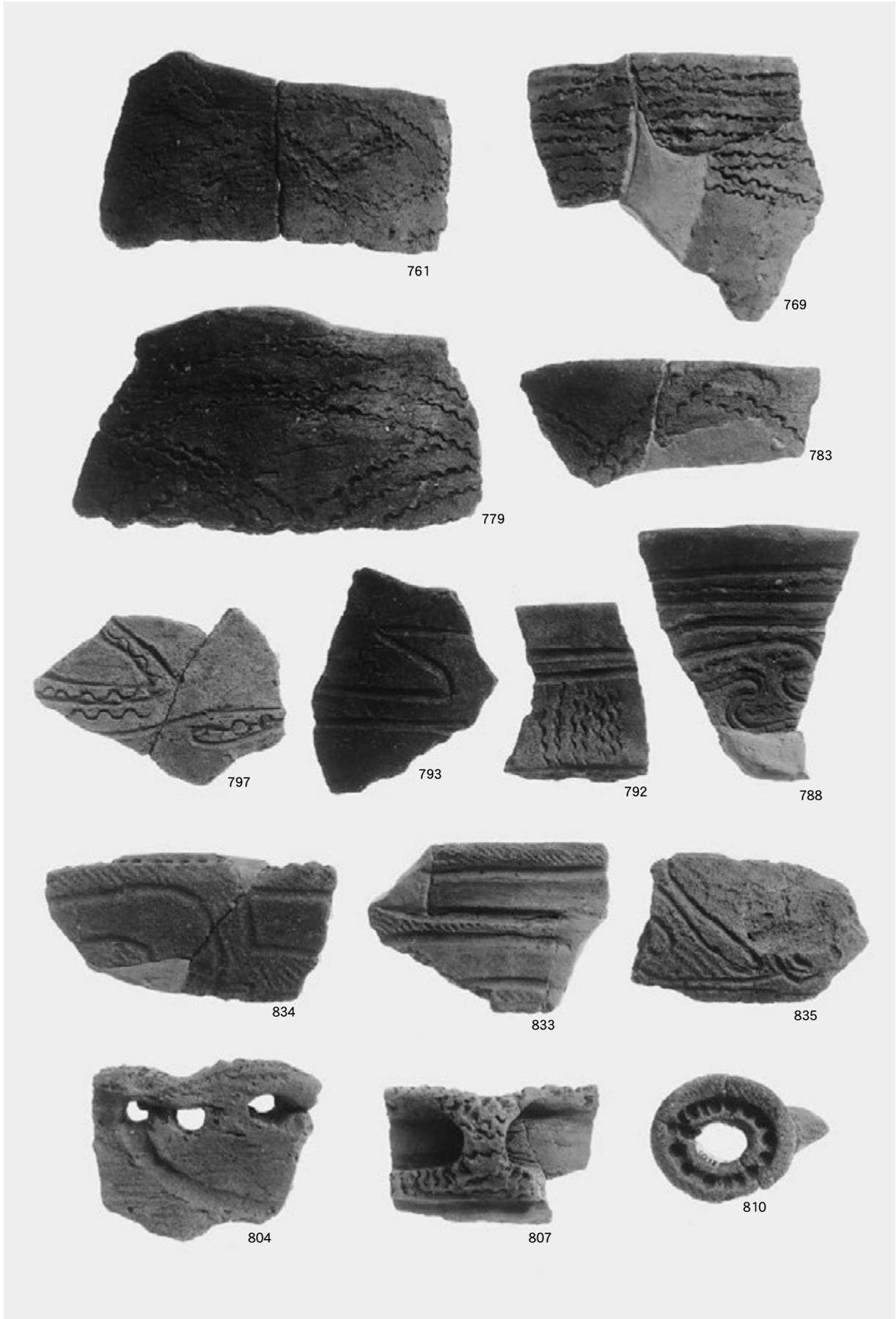
縄文時代後期 土器



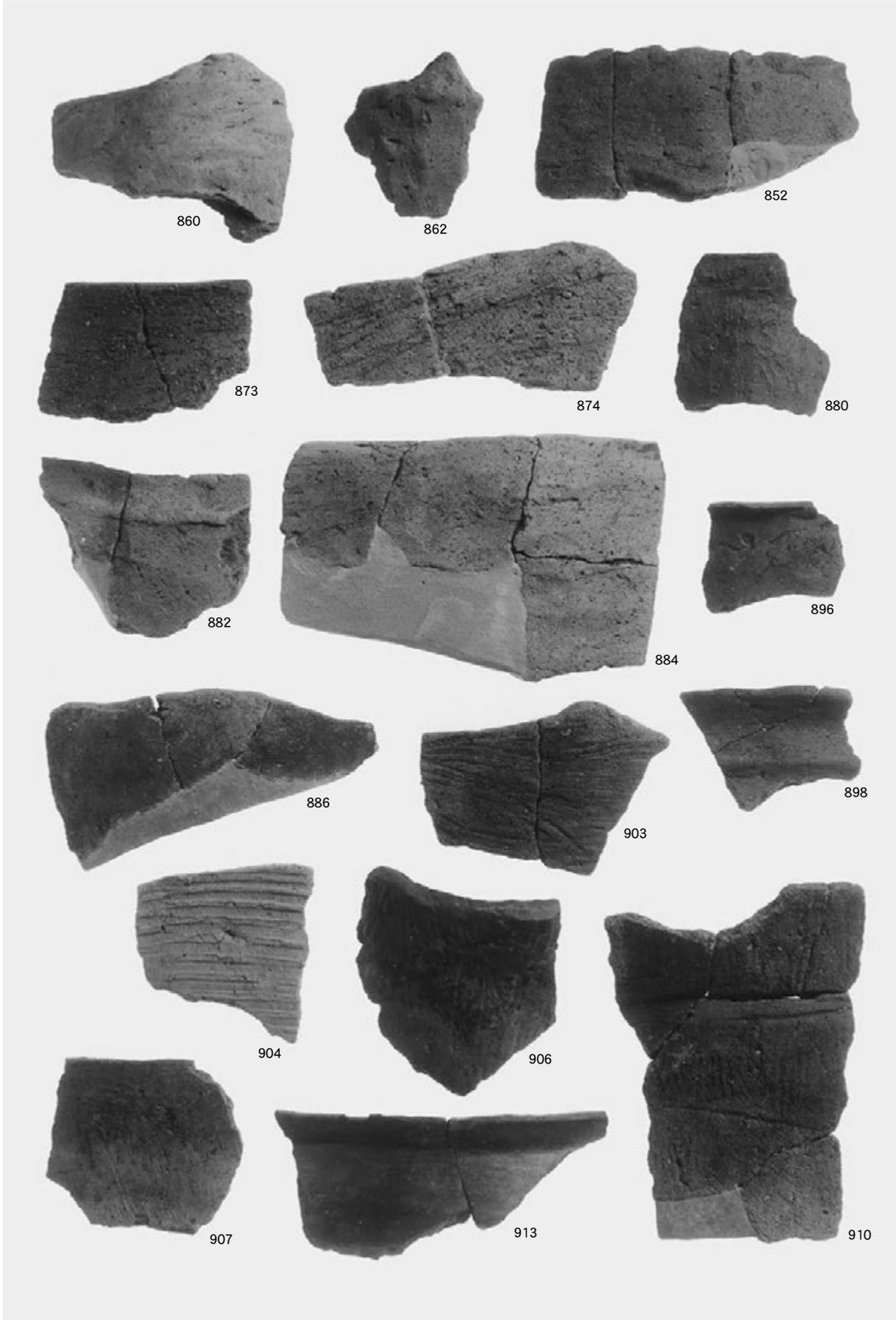
縄文時代後期 土器



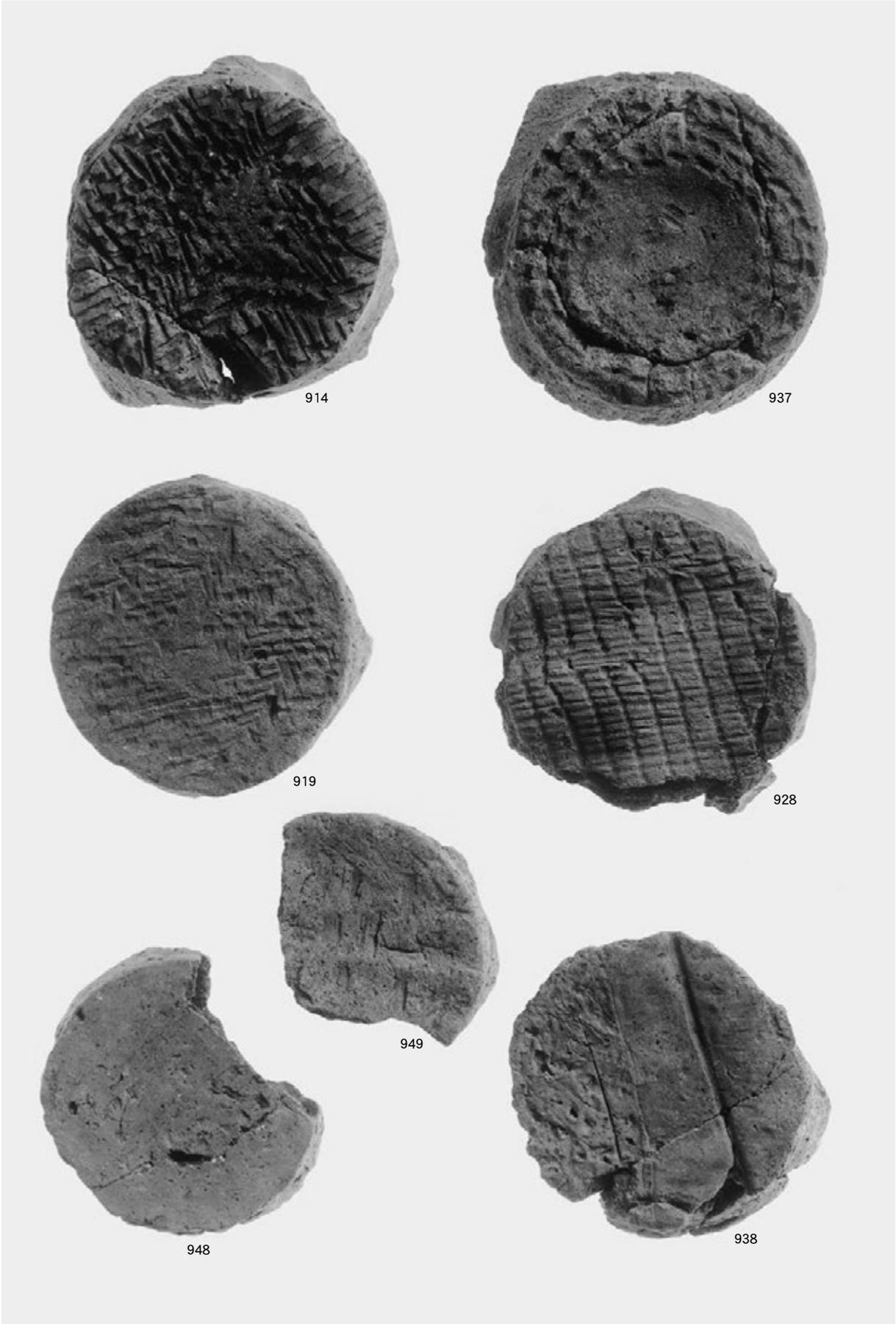
縄文時代後期 土器



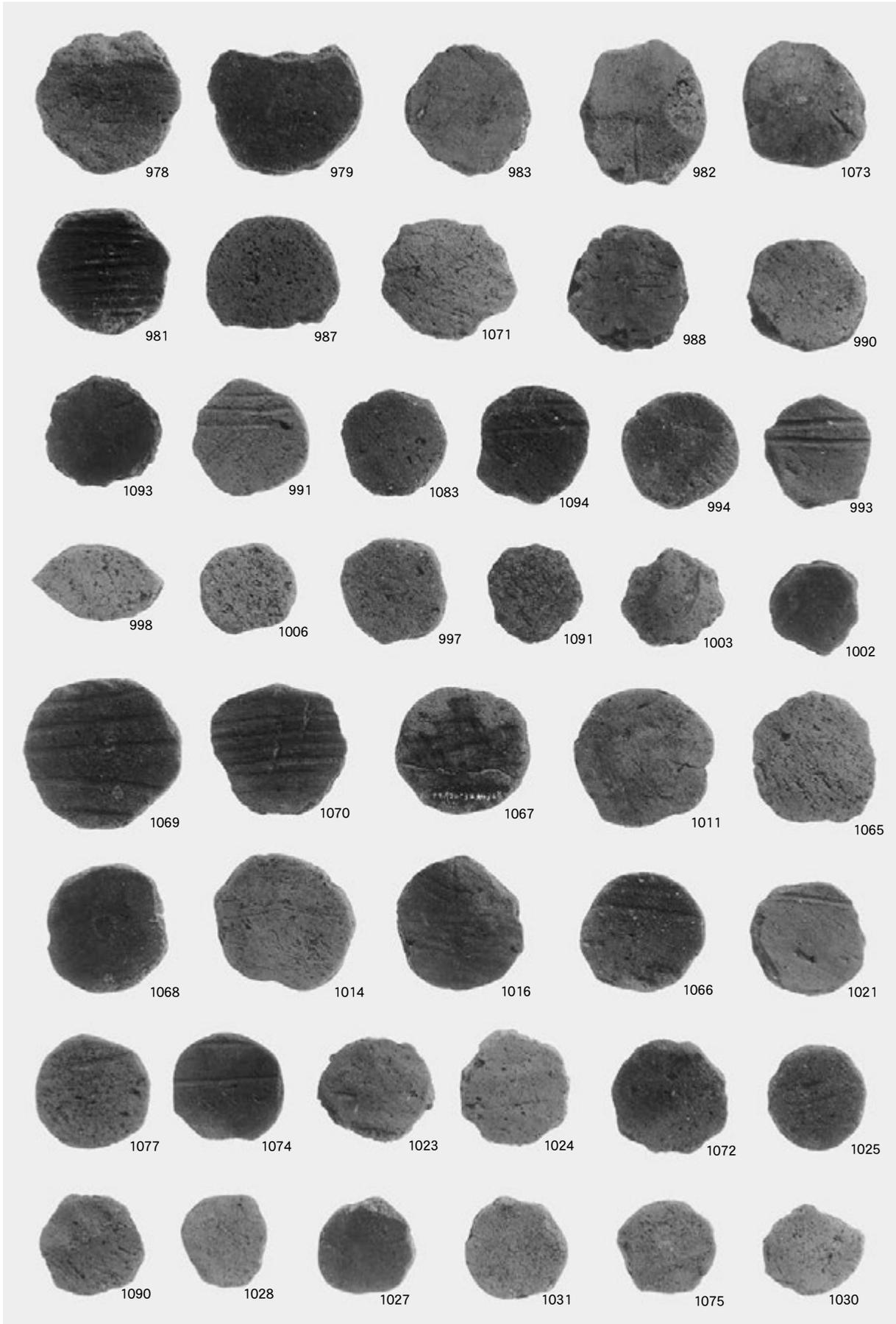
縄文時代後期 土器



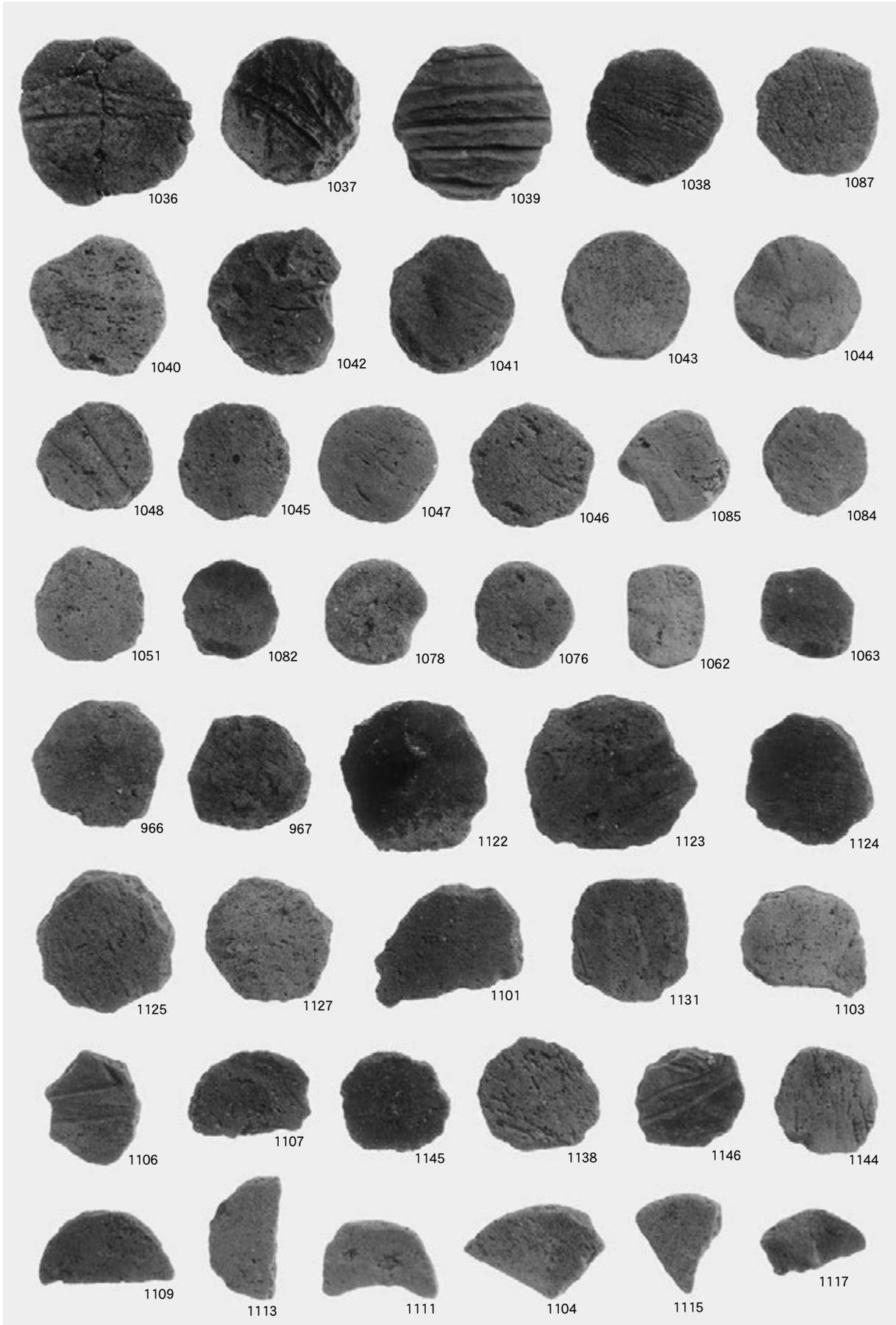
縄文時代後期 土器



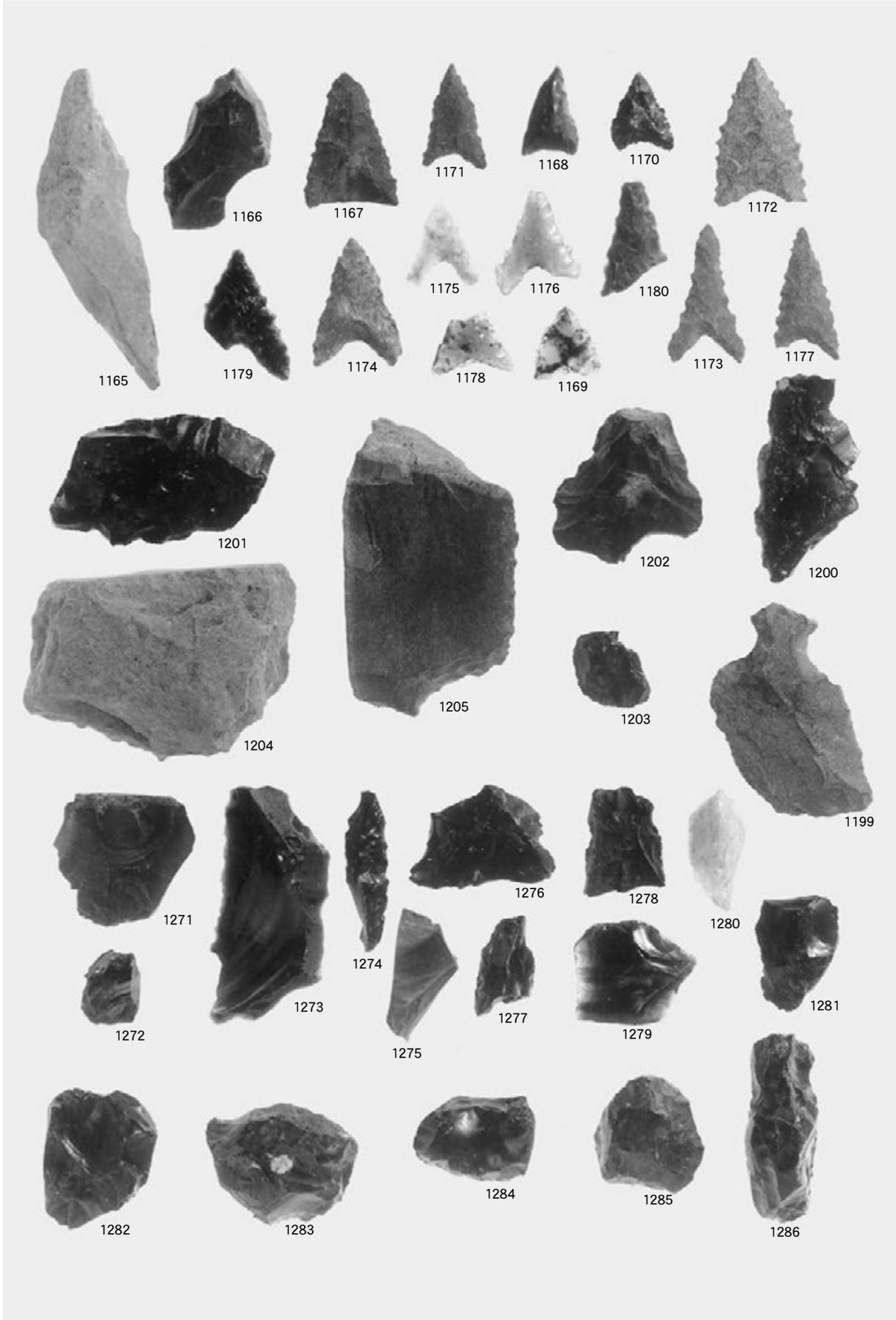
縄文時代後期 土器



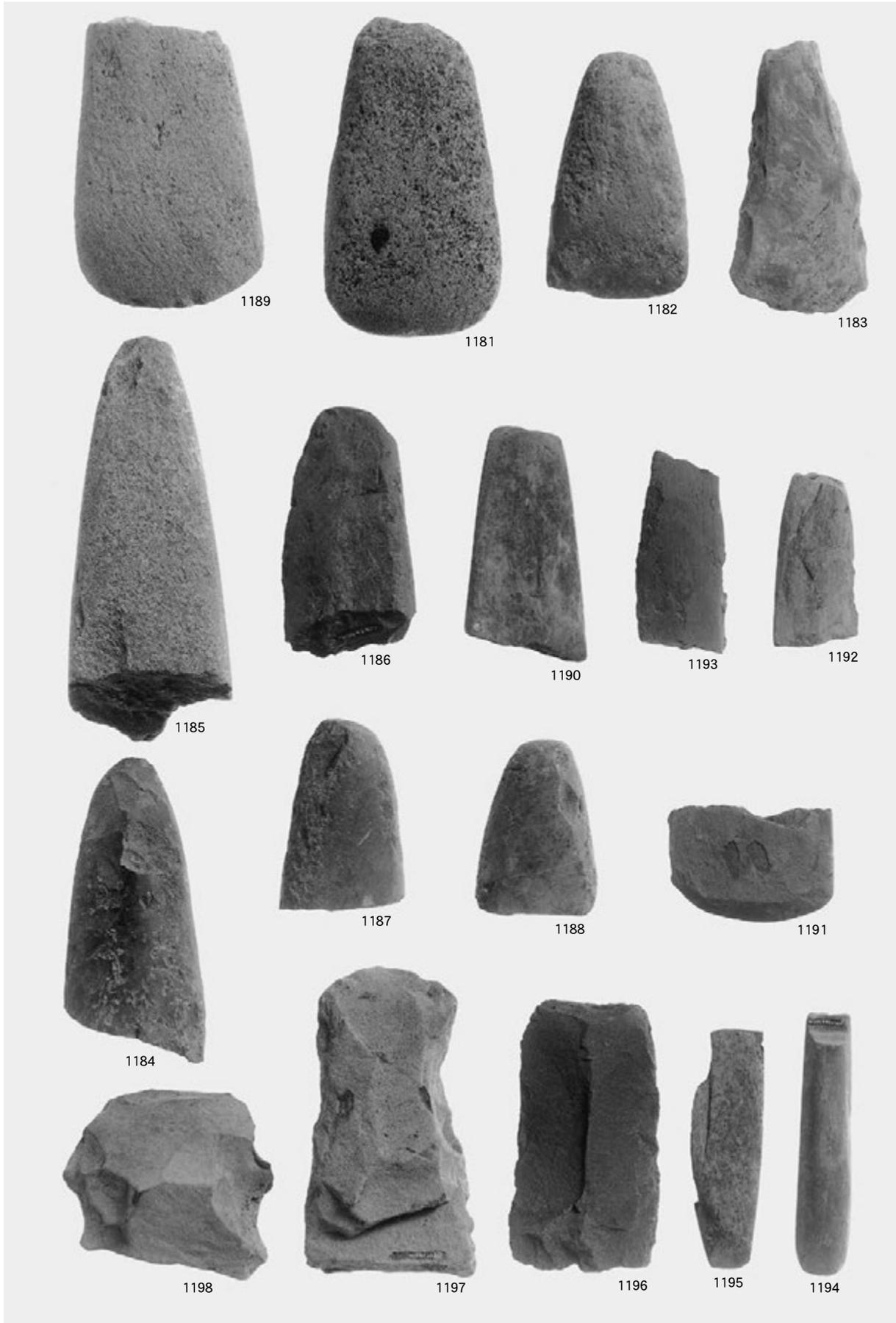
縄文時代後期 土器



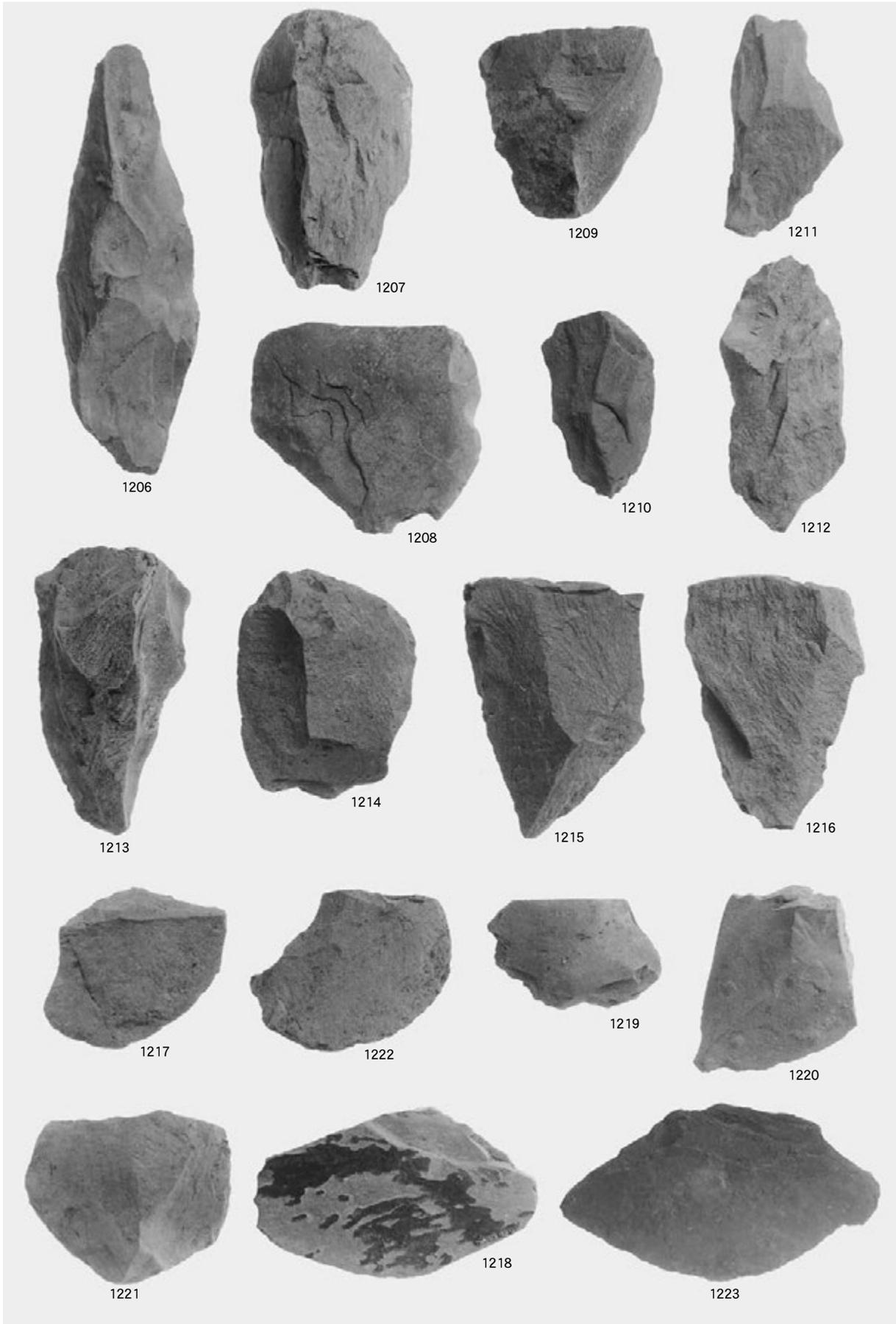
縄文時代後期 土器



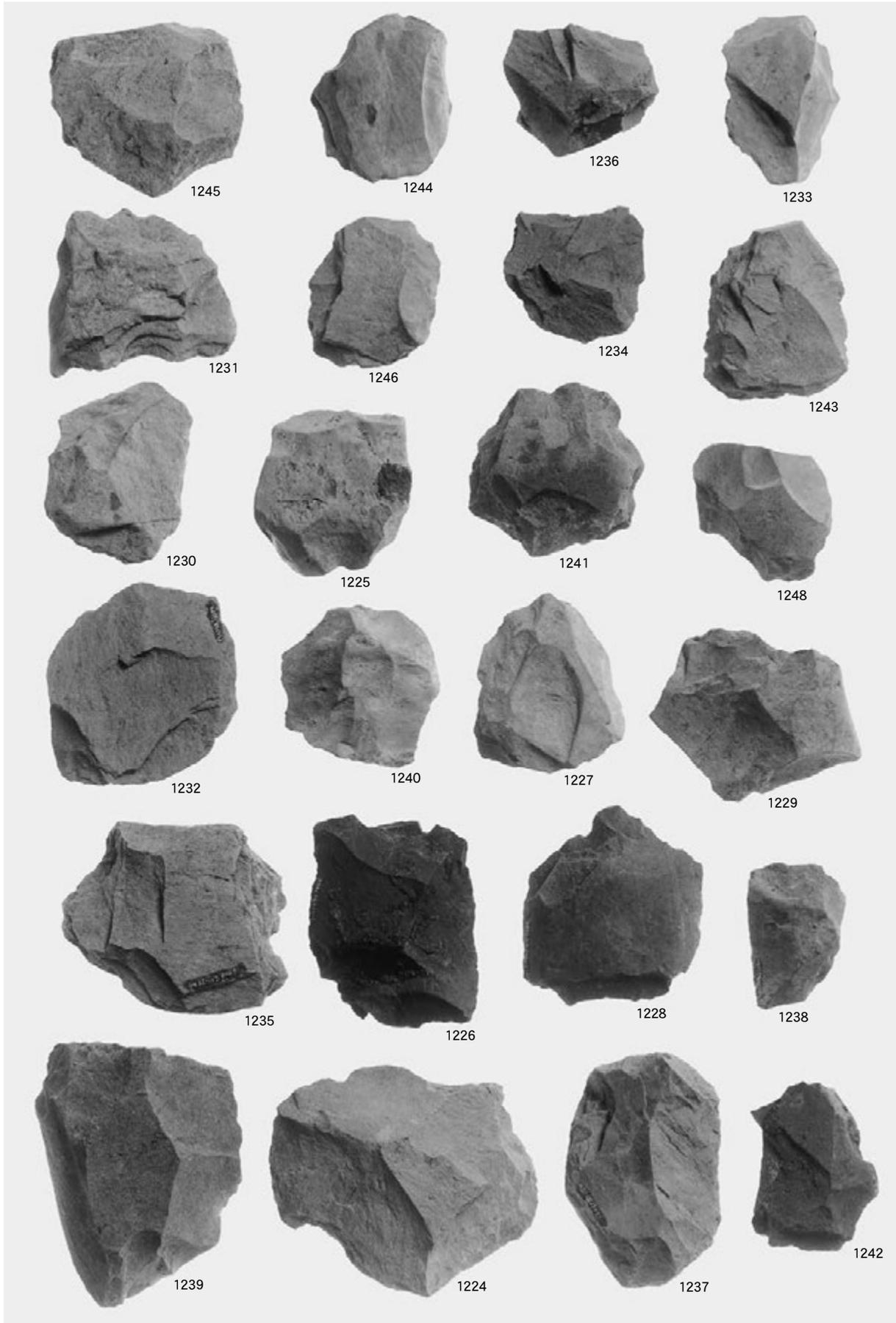
縄文時代後期の石器 石鏃・石核・石匙・搔器



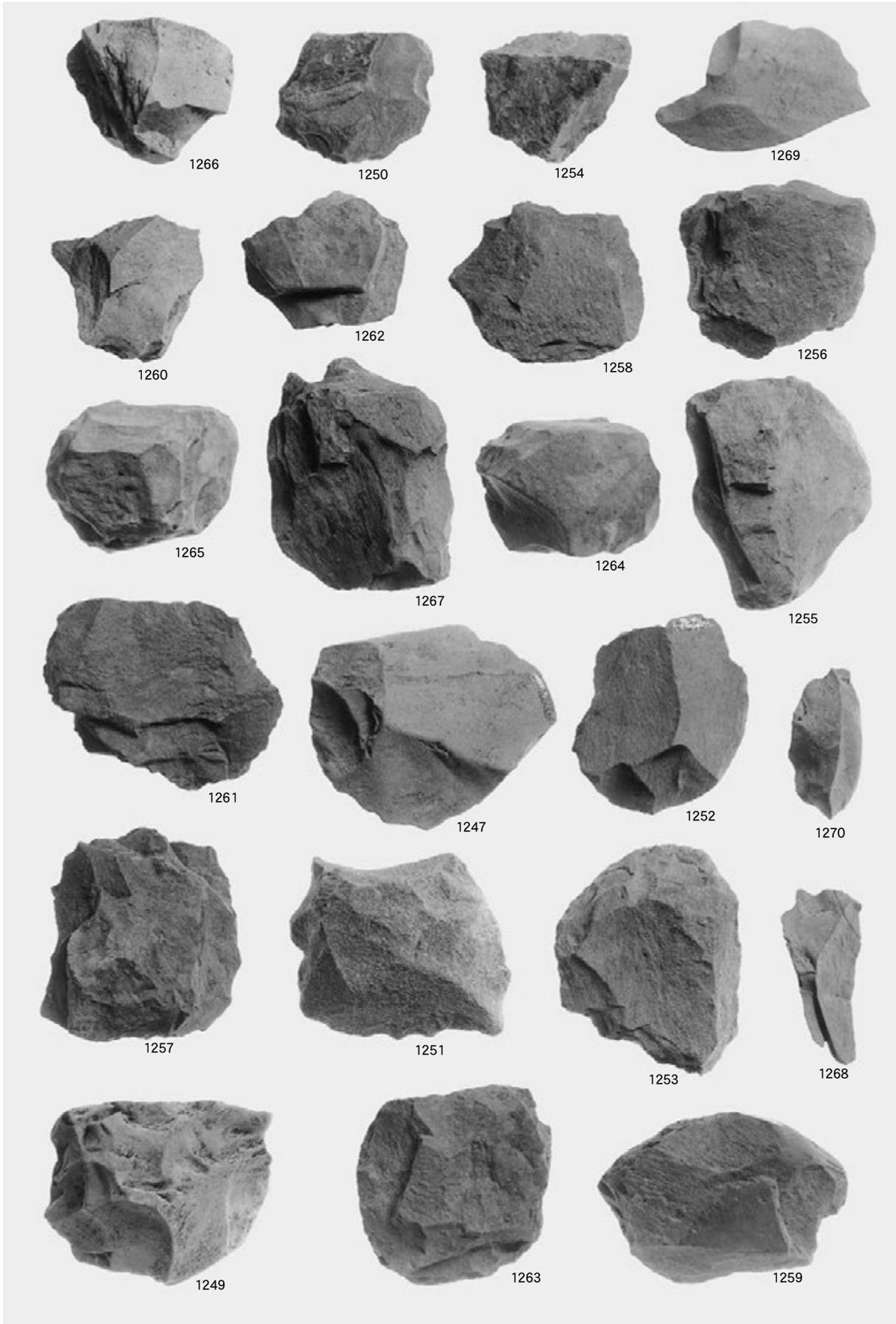
縄文時代後期の石器 石斧



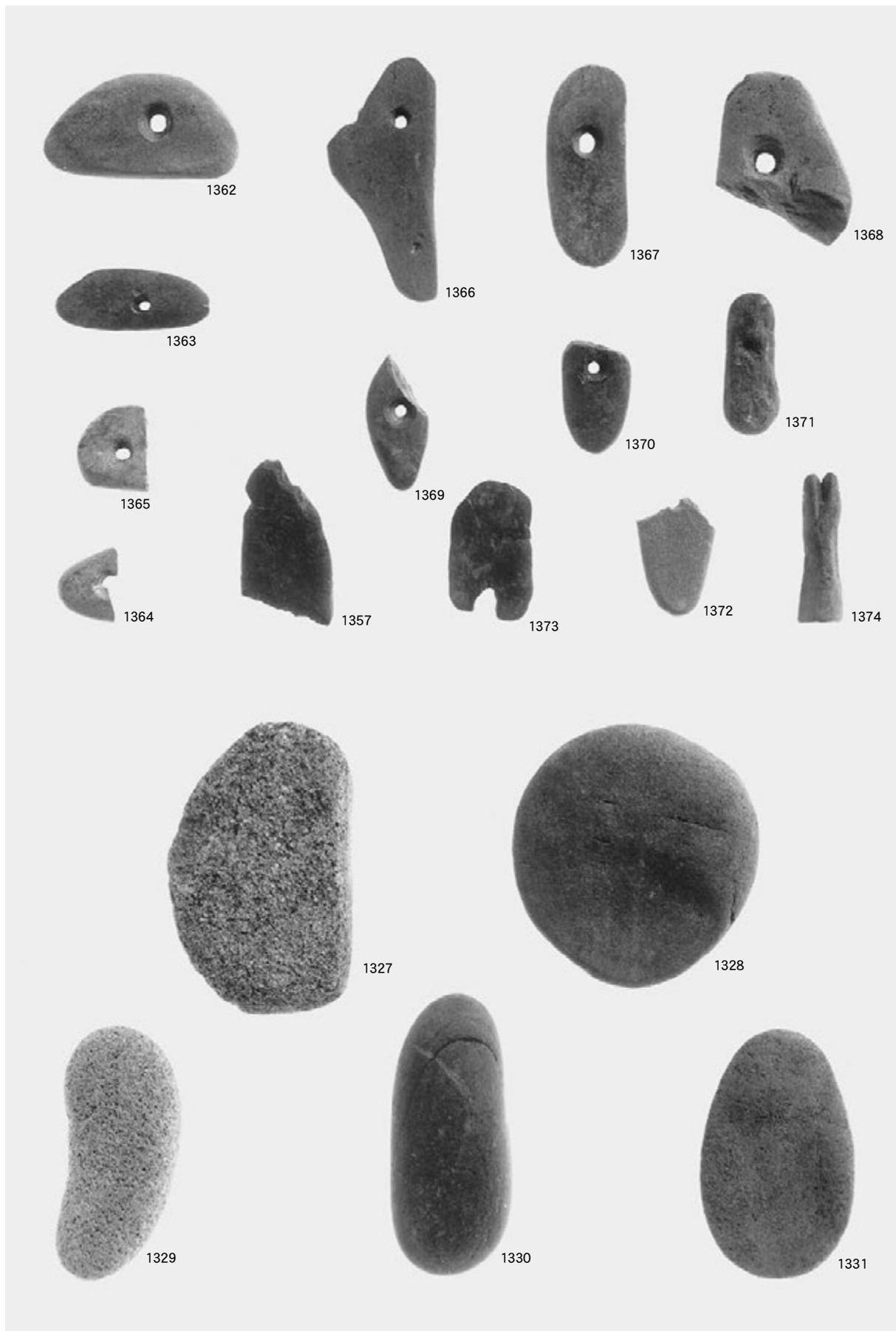
縄文時代後期の石器 大型削器 1・2



縄文時代後期の石器 大型楔形石器 1・2



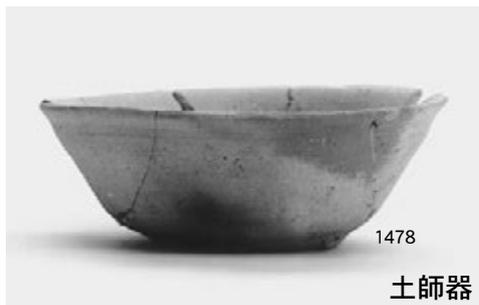
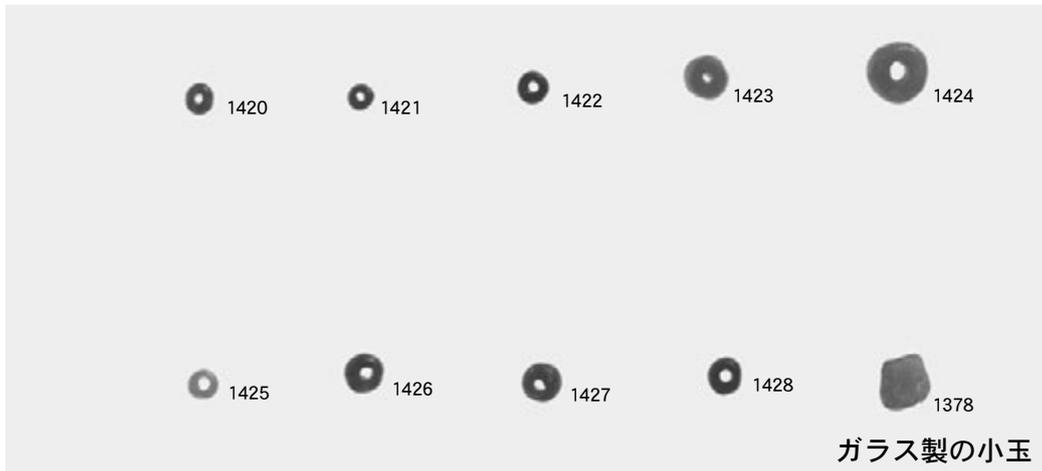
縄文時代後期の石器 大型楔形石器 3・4

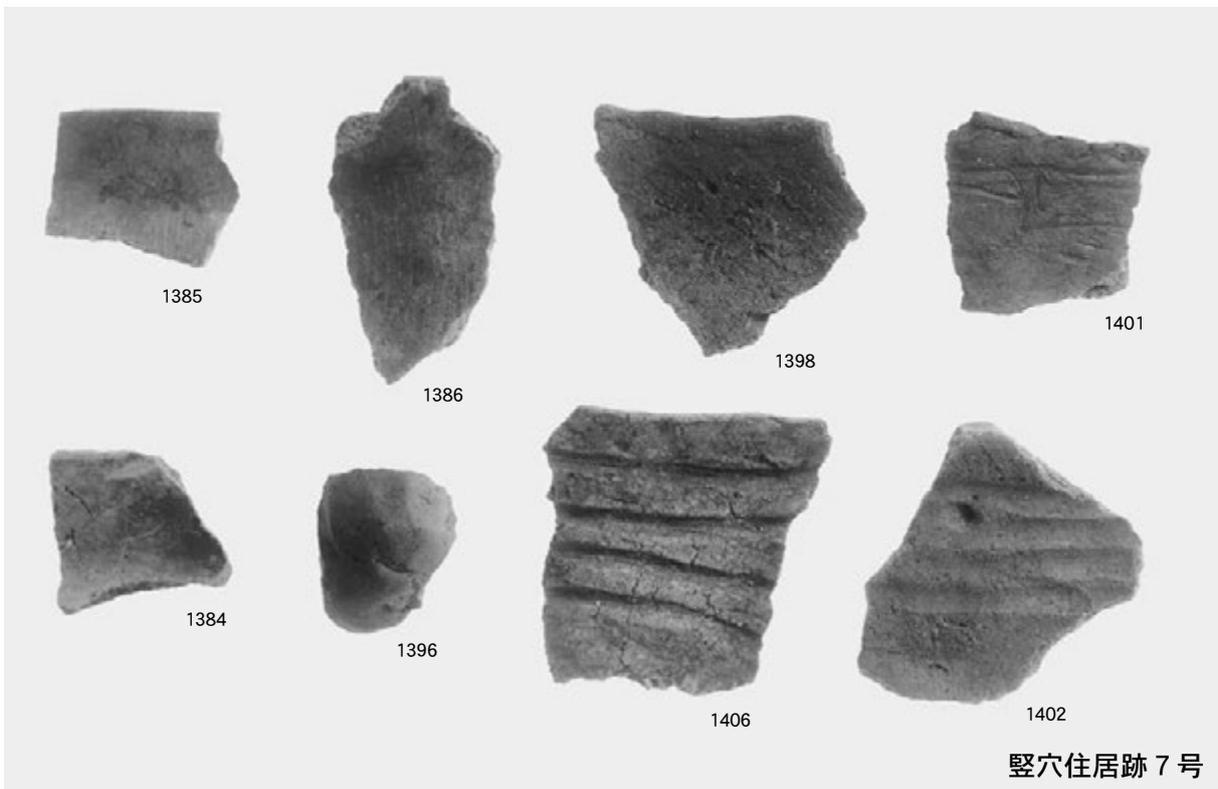


縄文時代後期の石器 石製垂飾・砥石

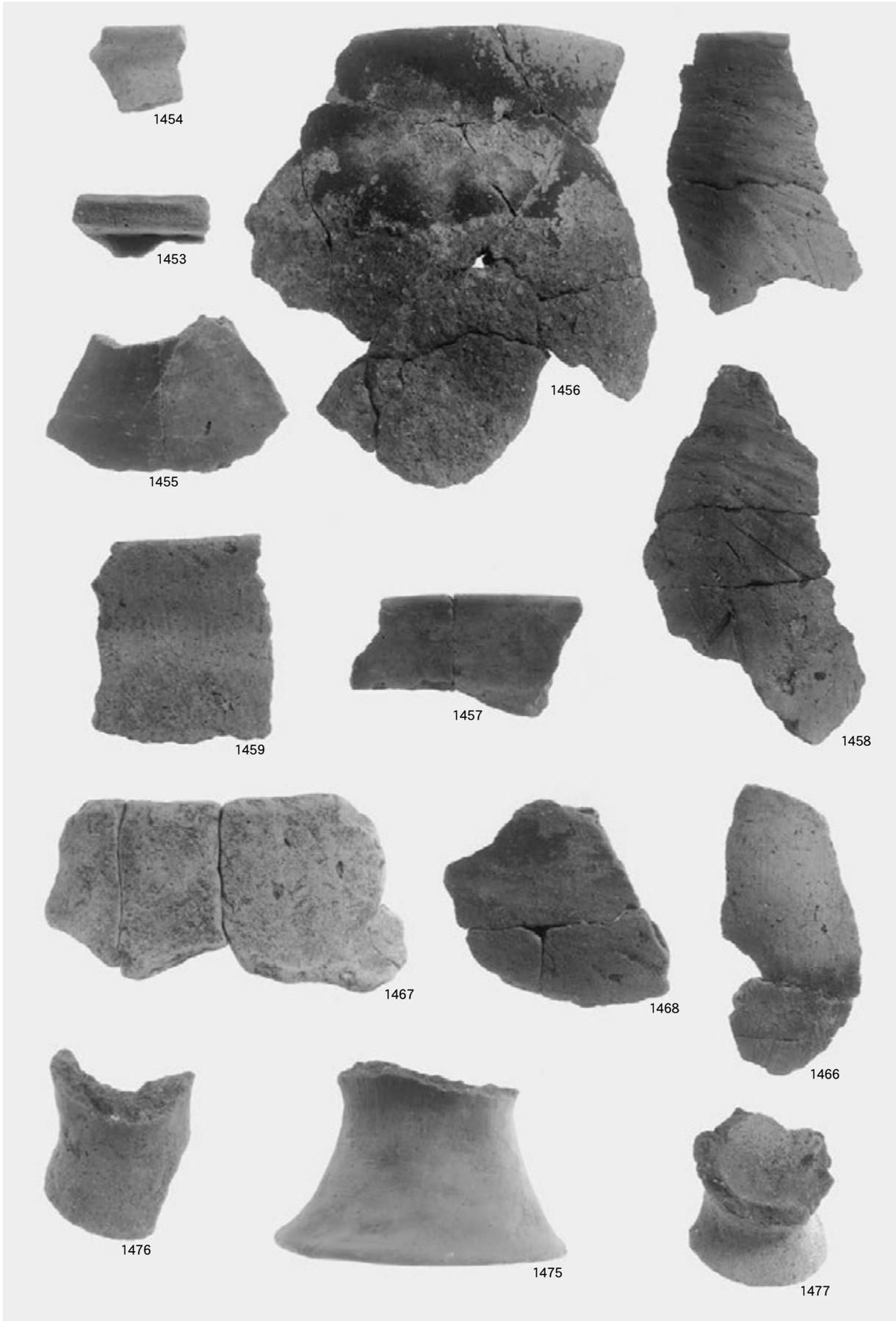


縄文時代後期の石器 石皿





弥生・古墳時代遺構出土 土器



弥生・古墳時代 土器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（156）
南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（IV）

なき の はら
鳴 野 原 遺 跡 A 地 点

発行日 平成 23 年 3 月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号

TEL (0995) 48-5811

印刷所 濱島印刷株式会社

〒 890-0052 鹿児島県鹿児島市上之園町 17 番 2 号

TEL (099) 255-6121



鹿児島県